

# 愛知淑徳大学の現状と課題

—専任教員の教育・研究業績—

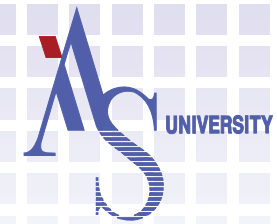
2009

2009  
愛知淑徳大学の現状と課題

—専任教員の教育・研究業績—



愛知淑徳大学



愛知淑徳大学

2009（平成21）年度「大学評価」申請用大学基礎データ

## 専任教員の教育・研究業績

愛知淑徳大学



## 凡 例

1. この専任教員の教育・研究業績は、財団法人大学基準協会の2009（平成21）年度「大学評価」申請用大学基礎データの作成基準日となる2008年5月1日現在に在職している専任教員について記載し
2. 記載の様式については、同協会の2009（平成21）年度「大学評価」申請用大学基礎データの表24および表25の様式を参考に作表している。
3. 教育・研究業績は、2003（平成15）年度から2007（平成19）年度までの5年間と2008（平成20）年度の最新の業績を含む内容を、年代の古い順から記載している。
4. 配列は、同じく2009（平成21）年度「大学評価」申請用大学基礎データのうち、表19全学の教員組織の学部、大学院研究科、センター等の各所属組織順とし、各所属組織では、所属専任教員の氏名の五十音順に記載している。



## 目 次

文 学 部 .....	5
現代社会学部 .....	85
コミュニケーション学部 .....	141
ビジネス学部 .....	187
文化創造学部 .....	227
医療福祉学部 .....	277
大学院ビジネス研究科会計専門職専攻 .....	399
留学生別科 .....	419
コミュニティ・コラボレーションセンター .....	422
キャリアセンター .....	430
健康スポーツ教育センター .....	431
外国語教育センター .....	433
教職・学芸員教育センター .....	454
教養教育センター .....	461
情報教育センター .....	464
学生相談室 .....	466



# 文学部

浅田 まり子	7	佐藤 成哉	45
阿部 一彦	9	佐藤 実芳	48
石黒 昭吉	10	菅野 育子	50
伊藤 昭道	12	都築 久義	52
伊藤 真理	13	寺尾 剛	53
岩下 紀之	15	富安 玲子	56
大久保 義男	16	外山 敦子	58
太田 直子	17	中嶋 真弓	61
大野 光子	18	中野 謙一	63
岡澤 和世	20	西荒井 学	64
小倉 齐	21	林 博司	65
小塩 允護	23	人見 恭司	66
樗木 勇作	25	平林 美都子	67
楠元 町子	27	増井 典夫	69
久野 幸子	29	松田 秀子	70
久保 朝孝	30	三和 義秀	72
小出 隆司	32	村主 朋英	74
COLEBORNE, Bryan E.	38	山崎 茂明	76
小久保 潤子	41	山田 幹郎	78
小林 素文	43	若山 真幸	79
櫻木 貴子	44	渡辺 かよ子	80





所属 文学部	職名 准教授	氏名 浅田まり子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
教養の音楽を担当し、音楽療法的な音楽の指導法を試み、協調性、創造性、集中力の養成をする指導法を研究した。	2003年4月～2006年3月	ヴォイストレーニング・サウンドスケープ・音楽療法・音楽理論などを導入した幅広く生涯学習となる音楽を講義し、合唱・合奏などの実技を指導した。	
教育学科としての総合演習、学校教育体験、初等音楽の担当をし、小学校教員として必要な知識と指導力を要請するための講義をした。	2007年4月～現在	現代社会と音楽について考え、音楽への興味や関心、基礎理論、弾き語り、ピアノ、リコーダーなどの楽器演奏の実技演習や鑑賞などで、人間形成としての音楽教育への理解を深めていくことを目標として講義した。	
本学公開講座として音楽療法講座を開講し、高齢者のための音楽療法の理論と実践を講義した。	2003年4月～現在	高齢者音楽療法理論の解説しながら、最高103歳までのグループホームでの音楽療法を実践した。ここでは、「その人らしさを大切にすること」を目標とし、生涯にわたってその人の歩んだ人生を大切に受け止め、その人の有する能力の保持、機能改善などを目指して進めた。	
NPO法人ラマモンソレイユの理事及び、音楽療法講師として障がい児の音楽療法実践をした。	2007年11月～現在	発達障がい、ダウン症、知的障がいの4～11歳児の音楽療法をそれぞれ個別に行っている。障がい児の生活環境や情緒の安定と、それぞれの個々の問題とする母子関係の改善や機能の発達を目標として音楽療法をした。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
小学校 家庭教育セミナー	2003年10月29日	名古屋市立藤が丘小学校において、*家庭セミナー「感性豊かな子に育てるには」*音楽療法からのメッセージ*というタイトルで講演をした。大学生を例に音楽のピアノなどの習わせ方、子供の気持ち、音楽の聴き方などを解説し講義した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
愛知淑徳大学アンサンブル・シュネッケ顧問・指揮	2003年～現在	楽器の特質を理解し、個人の技術の向上と芸術的価値を学び、協調性、創造性、集中力の養成をモットーとする弦楽合奏クラブの指揮や編曲もしている。毎年、定期演奏会(14回)や図書館・病院・老人施設・幼稚園などへの出張演奏もした。	
愛知淑徳大学混声合唱団&オーケストラ指揮	2003年～現在	本学式典用の特別編成の混声合唱団とオーケストラ(オーケストラは2005年度から)で、毎年、卒業式はファンファーレ・大学歌(北爪道夫作曲オーケストラ版)混声合唱曲(オーケストラ伴奏用に編曲)、入学式は愛知淑徳学園祝典序曲(北爪道夫作曲)、ファンファーレ・大学歌を演奏した。	
愛知淑徳学園創立100周年記念三同窓会合同コンサート(愛知芸術劇場大ホール)指揮	2005年10月15日	学園創立100周年記念として、中・高校、短大、大学の三同窓会の合同演奏会として混声合唱、マンドリン合奏、弦楽合奏の合同演奏で学園関係の歌4曲とベートーベン第9交響曲より、「喜びの歌」を抜粋し、編曲して演奏の指揮をした。	
愛知淑徳学園創立100周年記念祝典・コンサート(愛知芸術劇場コンサートホール)合唱指揮	2005年10月29日	学園創立100周年記念として、ウィーンフィルハーモニーオーケストラのライナー・ホーネック氏、ヴォルフガング・トムベック氏また三輪郁氏、錦織健氏を招き、祝典コンサートが開かれた。北爪道夫氏の愛知淑徳学園祝典序曲が初演され、学園歌、大学歌、美しく青きドナウも学園の高校生、大学生、卒業生、教員らで混声合唱を編成し、その合唱指揮をした。	
愛知淑徳大学混声合唱団キルシュ・ブリューテ・コール顧問・指揮	2003年～現在	本格的なヴォイス・トレーニングとア・カペラにより、純正律の美しい響きを探求したり、日本語の歌による表現を、混声合唱で練習している。このクラブは定期演奏会3回で、「2005年日本国際博覧会宣伝の看板点灯式&クリスマスコンサート(2003年12月)」などの地域社会の演奏会にも多数出演した。	

学生(愛知淑徳大学キルシュ・ブリューテ・コール部員)と卒業生などで合唱団を編成し、合唱指揮としてドイツに演奏旅行をした。	2007年2月28日～3月8日	ウィーン、ロンドン、アムステルダムなどから演奏者を迎えて編成された古楽器オーケストラや声楽ソリストと、現地の合唱団と合流し、練習後、ゴスラー、デュッセルドルフでバッハ「マタイ受難曲」を演奏し、文化交流もした。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
音楽療法的音楽教育の実践研究	単著	2006年3月31日	学び舎・教職課程研究創刊号		51頁～59頁
モーツァルト効果と教育への提案	単著	2008年3月31日	学び舎・教職課程研究第3号		31頁～40頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年～現在	日本音楽療法協会会員(日本音楽療法協会認定音楽療法師)				
2003年～現在	米国音楽療法協会会員				
2003年～現在	日本発声指導者協会会員				
2003年～現在	日本音楽療法学会会員				
2004年11月～現在	社団法人日本歌曲振興会会員				
2006年12月～現在	NPO法人ラマモンソレイユ理事(障がい児音楽療法講師)				

所属 文学部	職名 教授	氏名 阿部一彦	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを承けて授業内容等の改善を行った。		2003年4月～2007年3月	授業アンケートの指摘を承けて、国文学講義(近世文学)の授業時間の配分・構成、視聴覚教材の活用、一回(一時限)完結方式授業の展開、学生の参加等について改善を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『古典基礎』の教材作成と改訂		2002年4月～2005年3月	高校から大学への橋渡しをする入門科目の一つである『古典基礎』の授業をすべて自主編成の資料で行なっている。 (1)日本の伝統文化と現代～(10)古典文学と出版までB4用紙5枚～10枚の資料を作成し、随時改訂を加えている。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
学部長・授業内容等改善検討委員会委員として授業内容改善の講演会を企画し主催した。		2005年12月～2007年3月	本学の英語教育の過去と現在の状況、2006年度からの改善について報告を承け、討論、まとめを行った。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部長として文学部共通科目の設定、各学科の基礎を重視するカリキュラムの編成等に努力した。		2003年4月～2007年3月	語学科目・コンピューター活用科目を必修として学生の基礎的能力を培うとともに、「実践日本語表現法」を4単位必修とし、大学生ひいては社会人としての読み・書き・発表の能力を向上させる授業を設定、推進した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『近世文学研究の新展開』 『近世軍記と<落城譚>』	共著	2004年2月	べりかん社	堀切 実編	314頁～331頁
論文					
近世軍記と情報	単著	2005年3月	愛知淑徳大学国語国文第28号		97頁～122頁
戦国武将の評判	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第31号		134頁～120頁
『太閤記』と『武功夜話』	単著	2007年3月	愛知淑徳大学国語国文第30号		11頁～35頁
近世初期軍記と『武功夜話』	単著	2008年3月	「愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－」第33号		13頁～33頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年10月	愛知県教育委員会主催地域講座講師				
2005年11月	名古屋市高年大学講師				
2005年10月	稲沢市、小牧市生涯学習講座講師				
2005年10月～2007年10月	名古屋市生涯学習センター講師				
2002年4月～2008年3月	中日文化センター講師				

所属 文学部	職名 准教授	氏名 石黒 昭吉	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
参加型の授業の導入		2008年4月	毎時算数科問題を発表・解説させることで、学生のプレゼンテーション能力の育成、意欲喚起を図っている。		
コメントカードの活用		2008年4月	毎授業終了時に授業のコメントを記入させ学生の実態を把握し授業改善を図っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
愛知県高等学校数学研究会研究会誌 愛数	共著	2005年3月		愛数編集委員会、	2頁
愛知県立新川高等学校研究紀要 開鑿	共著	2005年3月		石黒 昭吉	2頁
愛知県高等学校数学研究会研究会誌 愛数	共著	2006年3月		愛数編集委員会、	2頁
愛知県立新川高等学校研究紀要 開鑿	共著	2006年3月		石黒 昭吉	2頁
小学校教科教育への提言	共著	2006年10月	愛知淑徳大学教育を語る会		6頁
愛知県高等学校数学研究会研究会誌 愛数	共著	2007年3月		愛数編集委員会、	2頁
愛知県立新川高等学校研究紀要 開鑿	共著	2007年3月		石黒 昭吉	2頁
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～2004年3月	愛知県高等学校数学研究会 数学科教育情報委員会 顧問				
2002年4月～2004年3月	愛知県高等学校数学研究会尾張地区数学教育研究会 会長				
2002年5月～2004年5月	愛知県数学教育会 副会長				
2002年10月	平成16年度愛知県高等学校数学研究会尾張地区研究発表大会の開催				
2003年10月	平成17年度愛知県高等学校数学研究会尾張地区研究発表大会の開催				
2003年5月～2005年5月	愛知县城山教育研究会高校部 会長				
2003年11月	平成15年度愛知县城山教育研究会研究発表大会の開催				
2004年4月～2005年9月	日本数学教育学会第85回総会・研究(愛知)大会実行委員(講習部担当部長)				
2004年11月	平成16年度愛知县城山教育研究会研究発表大会の開催				
2004年4月～2007年3月	愛知県生徒指導連絡協議会尾北地区地域連携生徒指導推進事業幹事会 委員長				
2004年4月～2007年3月	愛知県生徒指導連絡協議会尾北地区地域連携生徒指導推進事業推進委員会 委員長				
2004年4月～2007年3月	尾北地区中学校・高等学校生徒指導連絡協議会 委員長				
2004年4月～2007年3月	愛知県教育委員会高等学校教育課題研究 数学教育課程の研究総括責任者				
2004年5月～2007年5月	愛知県数学教育会 会長				
2004年10月	平成16年度 尾北地区地域連携生徒指導推進事業地域フォーラムの開催				

2005年6月～2007年6月	東海地方数学教育会 会長
2005年10月	平成17年度 尾北地区地域連携生徒指導推進事業地域フォーラムの開催
2006年10月	平成18年度 尾北地区地域連携生徒指導推進事業地域フォーラムの開催
2006年11月	東海地方数学教育会第53回研究(愛知)大会 の開催
2005年6月～2007年6月	日本数学教育学会理事

所属 文学部	職名 准教授	氏名 伊藤昭道	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
教職科目「教育実習指導」において実践の具体的な観点から講義内容を構成した。		2006年4月～現在	教育実習生の一日、教材教具の活用の仕方、教室でのプレゼンテーションの仕方、板書の方法等、ビデオ教材を活用し、学生が教育実習を具体的にイメージできるよう試みた。		
教職科目「道徳指導法」において道徳教育の変遷・歴史を踏まえて現行学習指導要領の「道徳」の内容・指導法について講義内容を構成した。		2006年4月～現在	明治期以降の道徳教育史料を読ませて、道徳的価値観の形成をめぐる国家や社会の関与の様子を理解させ、普遍的な道徳的価値観の形成の重要性について考えさせるよう努めた。		
授業アンケートを踏まえてシラバスを検討した。		2007年4月～現在	授業の内容構成、教材に検討を加え、授業の改善に努めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「教育実習指導」「道徳指導法」等担当科目について、教材プリントを作成した。		2006年4月～現在	担当科目は教育実践にかかわる授業内容であるので、教育現場のリアルな現状、動向を授業に反映させたいと考えている。そのため、具体的な資料の収集に努め、授業で活用している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教職課程委員会委員		2006年4月～現在	教職課程の運営に参加。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
新版 子どもの教育の歴史	共著	2008年3月31日	名古屋大学出版会	江藤恭二監修 篠田弘、鈴木正幸、加藤詔士、吉川卓治、伊藤昭道他31名	39頁、51頁
論文					
障害児教育の新たな展開	単著	2006年3月	愛知淑徳大学教職課程『学び舎』-教職課程研究-創刊号		82頁～96頁
重度重複障害児教育における教育課程編成の現状と課題	単著	2007年3月	愛知淑徳大学教職課程『学び舎』-教職課程研究-第2号		14頁～23頁
教育実習について	単著	2008年3月	愛知淑徳大学教職課程『学び舎』-教職課程研究-第3号		24頁～30頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1969年 5月～現在		日本教育学会会員、教育史学会会員			
1970年10月～現在		日本特殊教育学会会員			
1992年 5月～現在		日本カリキュラム学会会員			

所属 文学部	職名 准教授	氏名 伊藤真理	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
参考文献の紹介		2004年4月～現在	「授業評価」で、専門科目の授業では、初めて触れる専門用語や概念についての理解に戸惑う学生が多く見られることがわかった。そのため、テキストや配布資料などで、参考文献をできるだけ多く紹介している。		
グループ作業の導入		2002年4月～現在	『情報検索演習』などの演習科目では、授業課題を自分たちで解決する力を身につけることができるように、グループ作業を導入した。個人では行き詰まってしまうような場合でも、グループ内で討議しながら進めていくことにより、課題解決の方法を考察、発見することができる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「資料組織論」テキスト		2002年～(毎年改訂)	公刊されている「資料組織論」のテキストでは、国内の目録規則を中心として記述されており、情報の組織化の全体を捉えることが難しい。そこで、本テキストでは、国内だけでなく、国際的に重要な組織化においての重要な規則や概念を取り扱っている。また、図書、雑誌資料だけでなく、インターネット情報資源も視野にいれ、メタデータについても取り上げた。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部共通科目委員会		2002年4月～2003年3月			
司書課程委員会		2002年4月～現在			
学内情報活用推進委員会		2003年4月～2007年3月			
成績評価法改善検討委員会		2005年4月～2006年3月			
授業内容等改善委員会		2005年4月～2007年3月			
文学部教務委員		2005年4月～現在			
成績評価法等検討委員会		2006年4月～2007年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
サブジェクトゲートウェイ図書館情報専門職の新たなフロンティア	共著	2003年3月	筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター・モノグラフシリーズ, No.1	永田治樹監修; 緑川信之編著	19頁～30頁、 31頁～42頁、 51頁～62頁、 73頁～82頁
サブジェクトゲートウェイ2:知識集積の組織化	共著	2005年3月	筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター・モノグラフシリーズ, No.3	緑川信之、永田治樹、梁桂熟、鑄田拓哉	46頁～72頁
変わりゆく大学図書館	共著	2005年7月	勁草書房	逸村裕、竹内比呂也編	67頁～85頁 86頁～100頁
図書館・情報学研究入門	共著	2005年10月	勁草書房	三田図書館・情報学会編	121頁～124頁
整理技術研究グループ50周年記念論集	共著	2007年9月	日本図書館協会	日本図書館研究会整理技術研究グループ編	75頁～83頁
論文					
楽譜検索での検索戦術に関する利用者調査	単著	2003年3月	Journal of Library and Information Science, Vol.17		49頁～67頁
利用教育:情報検索の視点から	単著	2004年3月	館灯第43号		11頁～19頁
音楽図書館学	単著	2005年2月	Library and Information Science, No. 50		46頁
音楽情報へのアクセス	単著	2005年2月	中部図書館学会誌第46号		1頁～15頁



特集:情報活動と標準規格, 情報へのアクセス: 書誌情報の標準化	単著	2006年7月	情報の科学と技術第56巻7号		312頁～316頁
音楽情報のデジタル化とその可能性	単著	2006年8月	国際音楽資料協情報会日本支部ニューズレター第28号		8頁～111頁
特定主題分野の学術情報の提供: サブジェクトゲートウェイを中心に	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇第32号		1頁～9頁
日本の公共図書館での音楽情報サービス	共著	2007年9月	国際音楽資料協情報会日本支部ニューズレター第31号		12頁～19頁

その他

書評

図書館員の本棚: 「日本の音楽コレクション」		2003年	図書館雑誌, Vol.97, No.2	音楽図書館協議会創立30周年記念音楽図書館協議会専門・公共図書館部会編	120頁
------------------------	--	-------	---------------------	-------------------------------------	------

辞典

図書館情報学用語辞典		2007年	第3版、丸善	日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編	
------------	--	-------	--------	---------------------	--

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1998年11月	「音楽分野における主題アクセスの可能性: ARIS Music Thesaurusを例として」第46回日本図書館情報学会研究大会, 東京(青山学院大学)
1999年5月	「音楽分野におけるシンソーラスを利用した検索システムの検討」1999年度日本図書館情報学会春季研究集会, 東京(東洋大学)
2000年10月～2001年9月	米国音楽図書館協会主題アクセス委員会Dublin Core Element Set検討ワーキング・グループ委員
2002年4月	「電子情報資源の組織化におけるCORCシステムの利用」日本図書館研究会整理技術研究グループ月例研究会, 大阪(近畿大学会館)
2002年5月	「楽譜検索利用者調査」2002年度日本図書館情報学会春季研究集会, 京都(同志社大学)
2002年8月	“Multilingual Library System: LS/1 Library System.” IAML annual Conference, University of California, Berkeley, Calif., Aug. 7, 2002. Abstract (In English)
2003年4月～2004年3月	筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター共同研究員
2003年10月	「楽譜資料検索過程における利用者調査」第51回日本図書館情報学会研究大会, 筑波(筑波大学)
2004年5月	「音楽情報へのアクセス」平成16年度中部図書館学会総会・講演会, 名古屋(愛知淑徳大学)
2004年11月	「情報専門家による楽譜検索調査」第52回日本図書館情報学会研究大会, 大阪(関西大学)
2004年11月	「利用教育: 情報検索研究の視点から」平成16年度私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会研究集会, 名古屋(中京大学)
2005年4月～現在	国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部役員
2007年7月	“Music Information Services at Public Libraries in Japan.” IAML Annual Conference, Sydney Conservatorium of Music, Sydney, July 3, 2007. Abstract (In English)

所属 文学部	職名 教授	氏名 岩下紀之	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
		2006年6月	授業アンケートの指摘を踏まえ、工夫するところがあった。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学大学研究科長		2001年4月～2005年3月	研究科運営に専念。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
宗長連歌資料二種	単著	2004年3月	愛知淑徳大学、国語国文 第27号		87頁～112頁
『菟玖波集』付句の当座性について	単著	2005年3月	愛知淑徳大学、国語国文 第28号		41頁～59頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 准教授	氏名 大久保義男	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
1. 新しい教育情報の収集と提示					
2. 教材の開発を中心とした造形教育の優れた実践的指導力の育成					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
県立学校校長研修講演		2007年10月10日	愛知県総合教育センターに於いて、県立学校校長を対象に「管理職員としての危機管理」の演題で講演。		
東邦高等学校模擬授業講師		2007年11月28日	東邦高等学校に於いて、同校生徒を対象に「いい先生になるための条件」の演題で模擬授業を実施。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 教授	氏名 太田直子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2004年度 前期・後期 2005年度 前期・後期「授業アンケート」の実施		2004年6月7日、11月15日 2005年6月8日、11月15日	「米文学講義 I a.b」の「授業アンケート」をうけて、学生にその結果をフィードバックするとともに、自由記述で書かれた授業内での学生の疑問点・質問に対してプリントでもって補足した。2004年度のアンケート結果をうけて、2005年度の授業内容を再検討した。		
2007年度 前期・後期「授業アンケート」の実施		2007年6月8日、11月16日	「翻訳基礎」「翻訳演習」の「授業アンケート」をうけ、その結果を学生にフィードバックした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
全学英語教育運営委員会関連					
・「独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築」		2003年4月1日	平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(平成16年度・17年度も同課題名で採択)		
・「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」		2005年4月1日	愛知淑徳大学平成17年度研究助成特別教育研究(平成18年度まで)		
・「多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発」		2005年8月1日	平成17年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定(平成20年度まで継続)		
・「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」		2007年4月1日	愛知淑徳大学平成19年度研究助成特別教育研究(平成20年度まで継続)		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<i>The Unvanquished</i> 管見－短編 から小説へ－	単著	2001年3月1日	愛知淑徳大学論集－文学 部篇－第26号		13頁～25頁
<i>Go Down, Moses</i> 試論 I－ Mollieを中心にして－	単著	2002年3月1日	愛知淑徳大学論集－文学 部篇－第27号		13頁～25頁
フォークナー：短編小説の構図	単著	2004年3月1日	愛知淑徳大学論集－文学 部篇－第29号		11頁～22頁
<i>Mayday</i> におけるフォークナーの 自我探求	単著	2008年3月1日	愛知淑徳大学論集－文学 部篇－第33号		31頁～46頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～2008年3月		日本アメリカ文学会中部支部運営委員			

所属 文学部	職名 教授	氏名 大野光子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
大学院における指導法		2003年～現在	2003年以後は主に大学院の担当であったので、アイルランド文学研究指導を補強するため、アイルランドやアメリカより一流の実作者・研究者が来日する折に本学での講義を依頼し、少人数での指導や意見・情報交換をする機会を作ってきた。2005年にはアイリッシュ・タイムズ紙記者C・コールター氏、6年には詩人P・ミーハン氏とT・ドーガン氏、7年にはボストン大学教授M・ハウズ氏と詩人T・マッカーシー氏、8年には詩人N・ニー・ゴール氏がゲストとして来学、院生の論文にも繋がる刺激を与えた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
海外セミナーの担当		2003年～現在	英文学科の独自科目である海外セミナーの担当者として、英国の大学に研修プログラムを委託し、学生を派遣する役目を果たしている。本学の学生たちの修学に最も相応しい環境と教育内容を確保するために、2005年には3都市3大学を訪問、その中で最も相応しいと判断されたLeeds Metropolitan Universityを英文学科に提案し、同大学と契約、第1期生を2006年2月に送り出した。その後、同大学言語センターの都合により、Leeds Universityに派遣先を変更、2007年より長期研修(3ヶ月)と短期研修(5週間)の参加学生をそれぞれ5名と12名送り出した。今後は長期研修を主体により多くの学生の留学を実現する予定である。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
From 'English Literature' to 'Literatures in English': International Perspectives	共著	2005年7月	Universitätsverlag, Heidelberg, Germany	Michael Kenneally, et al.	345頁～349頁
Back to the Present: Forward to the Past: Irish Writing and History since 1798, Vol. I	共著	2006年	Rodopi, Amsterdam	Patricia A. Lynch, Joachim Fischer and Brian Coates, eds.	157頁～166頁
『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』	共著	2008年9月(予定)	世界思想社	風呂本武敏編	
論文					
Picture Bride: Fact or Image?—Immigration from Ireland and Japan	単著	2003年6月	ABEI Journal, The Brazilian Journal of Irish Studies, No. 5		141頁～151頁
The Mad Woman in the Village: Yeats's Poetry in the Satirical Tradition	単著	2003年9月	IASIL JAPAN, Journal of Irish Studies, Vol. XVIII		51頁～63頁
Yeats's Other Voices in Later Poems and Plays	単著	2004年9月	IASIL JAPAN, Journal of Irish Studies, Vol. XIX		26頁～37頁
Eavan Boland, 'Mise Eire'—女性詩人の反歌	単著	2004年4月	研究社、英語青年4月号		48頁～49頁
「ケルト」を語るイギリス—女性族長ブーディッカをめぐる—	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集	大野光子、河口和子、河合利江、右高将宏、若尾梓、大井佐代子、竹内梨絵子、森彩香	1頁～15頁
Gender and Heroism in Yeats's Dance Plays	単著	2008年9月(予定)	IASIL JAPAN, Journal of Irish Studies, Vol. XIX		

その他					
講演等			(招待・派遣助成組織・学会等)		
Yeats's Other Voices in Later Poems and Plays	単独	2003年8月6日	Yeats International Summer School, Sligo, Ireland		
大人になりたい子供たち、子供のままの大人たち:アイルランド文学・映画にみる「子供」像	単独	2003年11月15日	日本イギリス児童文学学会大会		
100年祭と〈女性〉－2004年のアイルランド文学	単独	2004年11月28日	南山大学英文学会大会		
公演:Poetry in Dialogue: Japanese Poetry Reading in Ireland		2006年4月26日～5月6日	Poetry Ireland, Ireland, 国際交流基金	高橋睦郎、四元康祐、榎木伸明、半澤潤、大野光子、「対話する詩」	
Gender and Heroism in Yeats's Dance Plays	単独	2006年8月4日	Yeats International Summer School, Sligo, Ireland		
書評					
The Field Day Anthology of Irish Writing, Vols. IV & V, Irish Women Writers Speak Out	単著	2003年9月	IASIL JAPAN, Journal of Irish Studies, Vol. XVIII		131頁～133頁
C. カーゾン著、榎木伸明訳、琥珀捕り	単著	2004年12月	日本アイルランド協会学術研究部、エール第24号		158頁～162頁
佐藤亮、異邦のふるさと「アイルランド」	単著	2005年10月	研究社、英語青年10月号		50頁～51頁
翻訳					
On Two Shores: New and Selected Poems by Mutsuo Takahashi	共訳(日英訳)	2006年	Dedalus Press, Dublin, Ireland	高橋睦郎原詩、榎木伸明序文、日英二カ国語詩集	全126頁
シェイマス・ヒーニー最新詩集抄	単独編・訳	2006年8月	思潮社、現代詩手帖8月号	Seamus Heaney原著	66頁～75頁
アイリッシュ・ハーブの調べ ケルトの神話集	監修・訳	2007年9月	春風社	河口和子、河合利江	全193頁
Poems: Yotsumoto Yasuhiro	共訳(日英訳)	2007年10月	Poetry Kanto 2007	四元康祐原著、Beverly Curranと共訳	78頁～90頁
イムラム／航海譚	単独訳	2007年5月	香美市立美術館、大坪美穂展－海界－	Nuala Ni Dhomhnaill原著	1頁～17頁
その他著作					
映画「イン・アメリカ」に見る「ケルト文化」の名残	単著	2004年1月	中日新聞夕刊		
名古屋市男女平等参画審議会答申－男女平等参画先進都市をめざして	共著	2004年11月	名古屋市	第1期名古屋市男女平等参画審議会委員	29頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在			IASIL JAPAN(国際アイルランド文学研究協会 日本支部)理事(2003年～)、編集委員(～2005年)、会長(2006年～)		
2003年4月～現在			日本アイルランド協会理事		
2003年4月～現在			名古屋アイルランド研究会顧問		
2003年4月～現在			愛知日英協会理事・副会長		
2003年4月～現在			(財)アジア保健研修所理事・常任理事(2004年4月～2006年3月)、専務理事(2006年4月～2008年3月)		
2003年4月～現在			(財)東海ジェンダー研究所評議員(～2005年3月)理事(2005年4月～)		
2002年12月～2004年12月			名古屋市男女平等参画審議会第1期委員および会長		
2006年10月～現在			名古屋市情報公開審査会委員		
2007年4月～現在			名古屋市個人情報保護審議会委員		

所属 文学部	職名 教授	氏名 岡澤和世	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
論集編集委員		2002年4月～2006年3月			
学生生活委員		2004年4月～2006年3月			
ジェンダー・女性学研究所運営委員		2002年4月～2006年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
ジェンダー女性学研究活動におけるICTの活用実態調査・研究成果報告書	共著	2003年4月	愛知淑徳大学	國信潤子他3名	30頁～51頁
論文					
情報行動研究の概念枠組み	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇第29号		23頁～39頁
学者のコミュニケーションにおける電子雑誌とインターネットの役割	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇第30号		1頁～20頁
情報探索行動研究の調査方法	単著	2005年3月	Journal of Library and Information Science, Vol. 18		9頁～24頁
情報アクセスと利用の公平性	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇第31号		17頁～36頁
情報探索行動研究の展望と動向	単著	2006年3月	Journal of Library and Information Science, Vol. 19		1頁～28頁
情報行動研究の展望と動向 2001-2004	単著	2008年3月	Journal of Library and Information Science, Vol. 21		21頁～44頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 教授	氏名 小倉 斉	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
3年生のゼミ「国文学演習Ⅰ(5)」における小レポート添削指導の導入	2006年4月～現在	学生の文章表現能力、レポート作成能力の低下に対応するため毎時間小レポートを提出させ、添削して返却することを続けた。その結果、一定の成果が上がった。	
4年生のゼミ「国文学演習Ⅱ(5)」における小レポート添削指導の導入	2006年4月～現在		
3年生のゼミ「国文学演習Ⅰ(5)」における導入教材の使用	2007年4月～現在	文学批評理論の基本を学ばせるために『批評理論入門』を通読。その後、『フランケンシュタイン』を教材に批評理論の応用を試みた。	
3・4年生のゼミにおけるゼミ合宿実施	2003年4月～現在	2泊3日の合宿を実施し、レポートの合評を通じてプレゼンテーションの方法を学ばせた。	
1年生の「国文学講義(5)近・現代」におけるDVD教材の使用	2007年4月～現在	授業アンケート結果にあった講義内容が難解であるという学生の意見に対応した教育内容・方法の改善の一例である。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
愛知県総合教育センター事業平成19年度10年経験者(高等学校教諭および養護教諭)研修(コミュニケーション能力開発コース講義)「今こそ教師が伝えたいこと」講師	2007年12月26日	「序 大学入学者＝現代の生徒(高校生)の実情」「Ⅰ かつて授業は「体験」であった」「Ⅱ 恥ずかしながら教師生活のささやかな経験を……」「Ⅲ 教師は「あわい」で語る「まれびと」(?)」「Ⅳ 「伝統(tradition)」ということばが示唆するもの」「結 (ことばで)考える力→(ことばで)表現する力＝生きる力」という内容で講演した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
学部	2003年4月～2006年3月		
教育内容等改善検討委員会委員			
自己点検・評価委員会委員	2003年4月～2006年3月		
運営委員会委員	2003年4月～現在		
学生生活委員会委員	2005年4月～2007年3月		
情報システム支援部運営委員会委員	2005年4月～2007年3月		
国文学科主任	2007年4月～現在		
教員資格審査委員会委員	2007年4月～現在		
研究助成委員会委員	2007年4月～現在		
入試実施委員長	2007年4月～現在		
大学院			
教務委員会委員	2003年4月～2006年3月		
全学			
大学協議会学部選出委員	2003年4月～2007年3月		
国際交流委員会学部・大学院選出委員	2004年4月～2006年3月		
全学統括入試実施委員長	2007年4月～現在		
<小説>がもっと面白くなる	2005年5月20日 三重県メノール女子学院高等学校で講義		
<小説>をより面白く<読む>ために―花袋『蒲団』を中心に―	2005年7月30日 オープンキャンパスで講義		
<小説>をより面白く<読む>ために―漱石『三四郎』を中心に―	2005年10月27日 岐阜県立多治見高校で講義 2005年11月19日 静岡県立浜松湖東高校で講義		
<小説>をより面白く<読む>ために	2006年10月20日 愛知県立春日井南高校で講義 2007年7月13日 名古屋市立緑高校で講義 2007年11月1日 岐阜県立多治見高校で講義		



文学部国文学科で何を学ぶのか？あるいはフィクションを読むことの意味		2007年7月13日名古屋市立緑高校で講義 2007年11月1日岐阜県立多治見高校で講義 2007年11月12日静岡県立袋井高校で講義			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
20世紀の戯曲Ⅱ 現代戯曲の展開	共著	2003年7月	社会評論社	日本近代演劇史研究会	208頁～215頁
夜窓鬼談	共訳註	2003年12月	春風社	小倉斉、高柴慎治	55頁～276頁
妖怪文藝(巻之壱)モノケ大合戦	共著	2005年9月	小学館	東雅夫	317頁～324頁
論文					
「ぼろんじ」(『ねむり姫』所収)を読む—〈越境〉に向かう旅—	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—第30号		74頁～84頁
『夜窓鬼談』の物語世界	単著	2005年8月	新日本古典文学大系 明治編第3巻「漢文小説集」月報		1頁～4頁
『六道の辻』と「マカベ」、あるいは「マカベ踊」	単著	2007年3月	愛知淑徳大学国語国文第30号		101頁～126頁
濫澤龍彦、没後二〇年目の再生	単著	2008年5月	日本近代文学第78集		328頁～331頁
口頭発表					
廢娼問題と(性)の啓蒙家・森鷗外(パネリスト)	単著	2005年4月7日	韓国木浦大学校、韓国全羅南道日語日文学会シンポジウム「日本文学の中の(性)の言説」		
『夜窓鬼談』の物語世界	単著	2005年7月26日	愛知淑徳大学星が丘キャンパス、日本近代文学会東海支部第20回研究会		
その他					
秋宵鬼趣談義	単著	2003年12月	春風倶楽部No.8		11頁
高木卓、『遣唐船』、大鹿卓、『谷中村事件』	単著	2004年7月	明治書院、日本現代小説大事典		348頁、1054頁、1186頁、1269頁
新たな〈帝国〉化に抗うために	単著	2004年10月	社会文学通信第72号		2頁
執筆ノート『夜窓鬼談』	単著	2005年5月	日本近代文学第72集		333頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2006年3月		日本文学協会委員			
2003年4月～2006年3月		日本社会文学会評議員			
2003年4月～2005年3月		日本社会文学会編集委員			
2005年10月6・20・27日、11月10・11日		中日文化センター秋季特別講座「近代文学の〈東京〉を読む」講師			
2008年4月～2012年3月		日本近代文学会評議員			

所属 文学部	職名 教授	氏名 小塩允護	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
一人一人の豊かな生活につながる授業づくり(鳥取県立米子養護学校平成19年度研修会)		2007年8月10日	知的障害のある人の社会参加の実態を題材に、自立と社会参加をうながす授業のあり方について講演した。		
三重県立特別支援学校西日野にじ学園平成19年度高等部教育課程学習会		2007年8月21日	知的障害のある人の就労の実態と当面の課題及び対応策について講演した。		
卒業生の進路動向から見た社会参加の課題(愛知県特別支援教育推進連盟平成19年度障害児の自立と社会参加推進会議)		2007年8月29日	特別支援学校卒業生の進路動向を題材に、社会参加を推進する上での課題について講演した。		
これからの自閉症教育のために(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所平成19年度自閉症教育推進指導者研修)		2007年11月19日	今後の特別支援学校における自閉症教育のあり方について講義した。		
発達障害のある人が働くこと、就労すること(静岡県立御殿場養護学校平成19年度公開講座)		2007年12月8日	発達障害のある人の社会参加の実態に基づき彼らが働くことの意義について講演した。		
子どもの成長発達を支える学校教育のあり方(静岡県立富士養護学校平成19年度公開研究会)		2007年12月13日	知的障害を題材に、子どものライフステージに応じた学校教育のあり方について講演した。		
ニーズのとらえと対応―障害観の変遷―(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所平成19年度第二期特別支援教育専門研修)		2008年1月18日	知的障害を題材に、障害のとらえ方と対応のあり方について講義した。		
就労をめぐる現状と課題(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所平成19年度第二期特別支援教育専門研修)		2008年2月12日	知的障害のある人の社会参加の実態に基づき就労を支援する学校教育のあり方を講義した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
発達障害白書2004	共著	2003年10月	日本文化科学社	編集:日本知的障害福祉連盟、小塩允護他96名	60頁～65頁、217頁
自閉症教育実践ガイドブックー今の充実と明日への展望ー	共著	2004年3月	ジアース教育新社	編著:独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、監修:小塩允護	総計103頁
発達障害白書2005	共著	2004年11月	日本文化科学社	編集:日本知的障害福祉連盟、小塩允護他90名	58頁～63頁、207頁～208頁
発達障害のある学生支援ガイドブックー確かな学びと充実した生活をめざしてー	共著	2005年5月	ジアース教育新社	編著:独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、監修:小塩允護	総計91頁
自閉症教育実践ケースブックーより確かな指導の追究ー	共著	2005年10月	ジアース教育新社	編著:独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、監修:小塩允護	総計156頁
発達障害白書2006	共著	2005年12月	日本文化科学社	編集:日本知的障害福祉連盟、小塩允護他95名	55頁～63頁
発達障害白書2007	共著	2006年12月	日本文化科学社	編集:日本発達障害福祉連盟、小塩允護他82名	61頁～93頁
発達障害のある学生支援ケースブックー支援の実際とポイントー	共著	2007年9月	ジアース教育新社	編著:独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、監修:佐藤克敏・小塩允護	総計120頁
発達障害白書2008	共著	2007年11月	日本文化科学社	編集:日本発達障害福祉連盟、小塩允護他80名	79頁
論文					
特別支援教育って何?	単著	2003年8月	学習研究社、実践障害児教育Vol.362		14頁～17頁

中度知的障害のある子どもの教育体制の充実	共著	2003年9月	日本文化科学社、全日本特別支援教育研究連盟機関誌「発達の遅れと教育」No.553	54頁～55頁
提言：特別支援学校(仮称)に自閉症教育部門を	単著	2004年1月	明治図書出版、障害児の授業研究No.94	12頁
展望：これまで・これからの高等部教育－職業学科の果たしてきた役割と成果－	単著	2004年3月	日本文化科学社、全日本特別支援教育研究連盟機関誌「発達の遅れと教育」No.559	4頁～6頁
巻頭提言：連続し発展する発達障害教育	単著	2004年7月	学習研究社、実践障害児教育Vol.373	1頁
分科会報告：自立活動(養護学校部会)	単著	2005年2月	日本文化科学社、全日本特別支援教育研究連盟機関誌「発達の遅れと教育」No.570	25頁
知的障害養護学校高等部における移行教育をめぐる現状と課題	単著	2005年3月	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所一般研究報告書「知的障害養護学校における職業教育と就労支援に関する研究」	3頁～18頁
知的障害養護学校高等部における進路及び職業教育に関する調査	共著	2005年3月	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所一般研究報告書「知的障害養護学校における職業教育と就労支援に関する研究」	19頁～52頁
知的障害養護学校高等部における現場実習に関する調査	共著	2005年3月	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所一般研究報告書「知的障害養護学校における職業教育と就労支援に関する研究」	53頁～83頁
「軽度」の問題	単著	2005年5月	明治図書出版、障害児の授業研究No.100	87頁
提言：コミュニケーションの機能を読み取る	単著	2005年7月	明治図書出版、障害児の授業研究No.101	
分科会報告：自立活動(共通部会)	単著	2006年2月	日本文化科学社、全日本特別支援教育研究連盟機関誌「発達の遅れと教育」No.582	37頁
論説：地域全体で支える進路指導	単著	2006年2月	東洋館出版社、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編集、特別支援教育Vol.20	9頁～13頁
自閉症のある子どもたちへの教育と支援	単著	2006年5月	日本文化科学社、全日本特別支援教育研究連盟機関誌「特別支援教育研究」No.585	2頁～5頁
巻頭提言：特別支援教育の浸透を願う	単著	2007年11月	学習研究社、実践障害児教育Vol.413	1頁
自閉症の障害特性を尊重する	単著	2008年1月	明治図書出版、特別支援教育の実践情報Vol.119	12頁～13頁

その他

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

#### 学会活動

2003年4月～現在

日本発達障害学会機関誌「発達障害研究」常任編集委員

2003年10月～2004年12月

日本特殊教育学会第42回大会準備委員

委員等活動

2001年7月～2007年6月

財団法人ベルマーク教育財団評議員

2002年1月～現在

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構・障害者職業総合センター研究評価委員

2004年2月～2005年3月

厚生労働省・発達障害支援に関する勉強会有識者メンバー

2004年9月～2007年3月

筑波大学附属久里浜養護学校運営指導委員

2005年1月～2005年3月

厚生労働省・発達障害支援に係る検討会委員

所属 文学部	職名 准教授	氏名 樗木勇作	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
2 作成した教科書、教材、参考書			
読める英文法・聞ける英音法(共著、英宝社)	2008年1月	英語の構造を把握するため、短い文から長い文へ段階的に訓練し、英文読解において内容把握をする練習と英語の音規則について習熟する訓練方法をまとめた。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
TOEICを尺度とした全学英語教育の現状と今後(ALC NetAcademyワークショップ、中日ビル)	2003年10月	大学入学時からTOEICを共通尺度とする本学の英語教育の現状と問題点を発表した。	
リメディアル教育、基礎強化教育におけるe-learningの可能性(ALC NetAcademyワークショップ、西南学院大学)	2004年12月	英語のリメディアル教育にe-Learningを生かす方法について発表した。	
全学英語教育とALC NetAcademy～基礎から発展レベルまで～(ALC NetAcademyワークショップ、京都薬科大学)	2005年6月	独自の電子カルテを活用した本学の英語教育の特徴について発表した。	
全学英語教育とALC NetAcademy～基礎から発展レベルまで～(ALC NetAcademyワークショップ、マナハウス)	2005年11月	授業でe-Learningを活用する方法や組織的なe-Learningへの取り組みについて発表した。	
高・大の英語教育を結ぶ 外国語センターの課題と役割(外国語教育メディア学会(LET)中部支部第67回(2006年度春季)支部研究大会シンポジウム、東海学園大学)	2006年5月	外国語センター提供の統一カリキュラム導入前と導入後の比較を行い、e-Learningを導入後に飛躍的な効果があったことを発表した。	
愛知淑徳大学における初年次英語教育～全学英語教育におけるマスカスタマイゼーション～(大学教育改革フォーラムin東海2007、名古屋大学)	2007年3月	高大接続において、画一的な指導を行うのではなく、個々の現状やニーズにあったきめの細かい指導を、大規模に行う組織態勢について発表した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
全学英語教育運営委員会関連  独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築	2003年4月	全学英語教育運営委員会の委員として、全学英語教育の改善と推進に取り組んだ。その主な成果は、以下のとおりである。 平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(平成16年度、平成17年度も同課題名で採択)。授業以外での学生の英語学習を支援する英語学習サポートプログラム「ASU English.com」を開始した。また、全学学生約7,000名のTOEIC IPテストスコア、履修状況、自己学習履歴をデータベース化した。	
「英語コミュニケーション」科目の設置	2004年4月	全学共通英語科目「言語活用科目(英語)」のうち、「英語コミュニケーション」から「同8」までの8科目のカリキュラムを策定し、全学で統一した授業内容とした。	
全学を対象としたオーダーメイド英語教育データベース化された電子カルテに基づく多角的英語学習サポートシステムの構築(平成16年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)への申請)	2004年4月	平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」に採択(平成16年度、平成17年度も同課題名で採択)されたプログラムを発展させ、同プログラムへの申請を行った。	
全学を対象としたオーダーメイド英語教育(平成16年度 文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)への申請)	2004年7月	平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」に採択(平成16年度、平成17年度も同課題名で採択)されたプログラムを発展させ、同プログラムへの申請を行った。	
全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充	2005年4月	愛知淑徳大学 平成17年度研究助成特別教育研究(平成18年度まで継続)。英語の基礎力育成を目標とした英語学習プログラム「基礎からのやり直し英語」を開始した。これは、TOEICテストスコア300点以下の学生を対象とした個人指導の添削・インターネット指導プログラムである。これによって、本学では、すべての学年とすべてのレベルに対応した英語教育プログラムが構築されたことになる。	
全学規模でのオーダーメイド英語教育(平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)への申請)	2005年4月	平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」に採択(平成16年度、平成17年度も同課題名で採択)されたプログラムを発展させ、同プログラムへの申請を行った。	

多文化共生を目指した発信型全学英語教育－モジュール化された体系的カリキュラム開発(平成17年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)への申請)	2005年5月	平成17年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムに選定された(「仕事で英語が使える日本人の育成」部門)。このプロジェクトは、本学の教育理念「違いを共に生きる」に沿い、地球市民として国籍・歴史・人種・宗教・環境・性などの違いを尊重する教育を行う一環として、多文化共生社会への理解を目標とする英語教育を行うものである。大学の英語教育の最終目標を、単にスキルの習得だけではなく、多文化共生社会への理解、その多様性に対する柔軟な視点を持った学生の育成としているのが特長で、学部を横断した専門教育と英語教育の連携を行い、コミュニケーション能力の醸成に努める。
多文化共生を目指した発信型全学英語教育－モジュール化された体系的カリキュラム開発(平成17年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)の継続実施)	2006年5月	平成17年度現代GPに選定されたプロジェクトの継続実施を行った。
多文化共生を目指した発信型全学英語教育－モジュール化された体系的カリキュラム開発(平成17年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)の継続実施)	2007年5月	平成17年度現代GPに選定されたプロジェクトの継続実施を行った。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
Antecedent-Contained Deletion and Phrasal Movement in LF	単著	2003年10月	名古屋大学英文学会、IVY、Vol. 36		63頁～82頁
イギリス英語・アメリカ英語におけるpromise補部	単著	2004年2月	研究社、英語青年、第149巻第11号		692頁～693頁
TOEIC学習へのe-Learning導入とその効果	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇一、第29号		39頁～50頁
大学英語教育へのTOEIC導入とe-Learning	単著	2004年5月	社団法人学士会、学士会会報第846号		88頁～95頁
On the Peculiarity of the Subject-Control Transitive Verb Promise	単著	2007年3月	名古屋大学英語学研究室、Exploring the Universe of Language		341頁～355頁

## III 学会等および社会における主な活動

1994年4月1日～現在	(財)日本英語検定協会 実用英語技能検定2次試験面接委員
--------------	------------------------------

所属 文学部	職名 講師	氏名 楠元町子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
1年生の「総合演習」(国際化と異文化理解)の授業で新聞記事とディベートの活用		2007年4月～	新聞記事から「異文化理解」に必要な最新の知識を得、それをディベートすることで、授業に参加した学生のコミュニケーション能力を高めるようにした。また小学校教員として実際の授業において、新聞記事の活用方法やディベートの授業方法を身につけられるようにした。		
1年生の「学校教育体験」の報告でのプレゼンテーションの工夫		2007年9月～	小学校教員としてプレゼンテーションを指導する事を想定して、いろいろな発表方法を考案し、漢字一文字で自分の考えを表現し、さらにグループ全体の考えを熟語にするというプレゼンテーションを実施した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
万国博覧会と中国—1904年セントルイス万博を中心に—	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集—現代社会学部・現代社会研究科 第一第10号		135頁～150頁
国際理解教育におけるパネル・ディベートの有効性—高等学校地理の授業実践を中心に—	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集—現代社会学部・現代社会研究科 第一第11号		89頁～100頁
日本の金融教育とその課題—日米高校生の金融基礎知識の比較を中心に—	単著	2006年3月	愛知淑徳大学—現代社会研究科研究報告創刊号		143頁～156頁
小学校社会科教育法への提言	単著	2006年10月	愛知淑徳大学「教育を語る会」ブックレットNo.2		8頁～12頁
多值的思考力育成へのパネル・ディベートの有効性—高等学校「公民科現代社会」の授業を中心として—	単著	2006年11月	中部教育学会紀要第6号		33頁～47頁
小学校社会科における問題解決能力育成—ディベート指導法を中心に—	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集—現代社会学部・現代社会研究科 第一第12号		111頁～122頁
国際関係史から見た万国博覧会—1904年セントルイス万国博覧会を中心に—	単著	2007年5月	法政論叢第43巻第2号		22頁～38頁
セントルイス万国博覧会における日本の展示品と評価	単著	2007年6月	愛知淑徳大学—現代社会研究科研究報告第2号		135頁～147頁
万国博覧会の展示と世界観の形成—1904年セントルイス万博を中心に—	単著	2007年7月	日本生涯教育学会論集第28号		1頁～10頁
金融教育における「生きる力」の育成—「株式学習ゲーム」の是非をめぐって—	単著	2008年3月	学び舎—教職課程研究— 第3号		41頁～51頁
その他 (研究発表)					
(学会発表)					

国際理解教育におけるディベートの有効性	単独	2004年6月12日	中部教育学会第53回大会		
ディベートにおける二値論と二元論の検討ーパネル・ディベートの試みを中心にー	単独	2005年6月18日	中部教育学会第54回大会		
人類史に影響を与えた展示を通じた学習	単独	2006年10月7日	日本生涯教育学会第27回大会		
国際関係史から見た万国博覧会ー1904年セントルイス万博を中心にー	単独	2006年11月25日	日本法政学会第105回総会及び研究会		
セントルイス万国博覧会とボランティア	単独	2007年11月10日	日本生涯教育学会第28回大会		

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年5月～現在	日本語教育学会会員
2004年5月～現在	中部教育学会会員
2004年5月～現在	日本教育学会会員
2005年9月～現在	日本法政学会会員
2005年10月～現在	日本生涯教育学会会員

所属 文学部	職名 教授	氏名 久野幸子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートの結果を参考に改善		2003年度	ゼミ合宿、学外授業実施 個別指導の強化		
授業アンケートの結果を参考に改善		2004年度	ゼミ合宿、学外授業実施、個別指導の強化、グループ活動の奨励		
授業アンケートの結果を参考に改善		2005年度	ゼミ合宿、学外授業実施、個別指導の強化、グループ活動の奨励		
授業アンケートの結果を参考に改善		2006年度	ゼミ合宿、個別指導の強化、グループ活動の奨励		
授業アンケートの結果を参考に改善		2007年度	ゼミ合宿、個別指導の強化、グループ活動の奨励		
2 作成した教科書、教材、参考書					
		2004年3月	『久野ゼミ卒論抄録集』		
		2005年3月	『久野ゼミ卒業論文要約集』		
		2006年3月	『久野ゼミエッセイ集』		
		2007年3月	『久野ゼミ卒業論文集』		
		2008年3月	『久野ゼミ卒業論文集』		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部情報メディアサービス部運営委員		2003年4月～2004年3月			
文学部情報メディアサービス部委員		2004年4月～2005年3月			
文学部学園広報編集委員		2004年4月～2008年3月			
文学部自己点検・評価実施委員		2006年4月～2008年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
十七世紀英文学と都市	共著	2004年6月	金星堂	十七世紀英文学研究会編	58頁～61頁
ヨーロッパの自殺観－イギリス・ルネサンスを中心に－	共著	2005年2月	英宝社	吉田幸子、岡村真紀子、斉藤美和	69頁～99頁
ザルツブルグの小枝	共著	2007年6月	大阪教育図書	柳五郎編著	253頁～264頁
論文					
翻訳					
ジョン・ダン『自殺論』	共訳	2008年8月出版	英宝社	吉田幸子、岡村真紀子、斉藤美和	
More's Literary Engagement with Colonial War in <i>Utopia</i> and its Aftermath	単著	2008年3月	愛知淑徳大学編集－文学部・文学研究科篇－第33号		47頁～59頁
その他					
作家の実体験と自伝形式	単著	2006年4月	Bronte Newsletter of Japan 第67号		1頁
学会発表:More's Literary Engagement with Colonial War in <i>Utopia</i> and Its Aftermath(国際トマス・モア学会)米国、アマーストにて	単独	2007年8月	国際トマス・モア学会		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在		日本ブロンテ協会会計監査			



所属 文学部	職名 教授	氏名 久保朝孝	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「学生による授業評価」の公開	2004年7月7日	<p>本学において学生による授業評価を実施することを想定した場合、そのよりよい方法ならびに必要と考えられる評価項目(基準)について、評価者としての学生の意見を集約し、「授業以前の評価」として3項目、「授業内容の評価」として18項目、「授業方法の評価」として20項目、「教員の姿勢の評価」として16項目、「授業運営の評価」として7項目、「授業後の評価」として6項目、合計70項目にまとめ、その「学生による授業評価」による授業評価を実際に行い(「国文学講義(2)中古b」の2クラス/2003.1.17)、その結果を集計して学科のホームページ上に公開した。現在全学的に実施されている「授業に関するアンケート」の先駆的試み。</p>			
授業内容(進行順)の再編成	2005年4月12日	<p>平成16年度後期「授業に関するアンケート」の結果をふまえて、各回の継承性を強化するために、全13講の授業内容の再編成(順序入替)を行い、効果をあげることができた。</p>			
2 作成した教科書、教材、参考書					
『伊勢物語』初段を読む(4刷)	2005年4月20日	<p>「国文学講義(2)中古a」の教材の一部として、解釈本文確定までの経緯、注釈書の多様性の実態等について、実践的に理解できるよう、書き込み式を含んだ16頁のA4判冊子を作成して使用している。</p>			
紫式部と源氏物語(2版)	2005年11月10日	<p>「国文学講義(2)中古b」の教材の一部として、紫式部の伝記、承図、源氏物語作者誕生の要因、紫式部日記等に見る源氏物語、文献目録などについて、12頁にまとめたA4判冊子を作成して使用している。</p>			
王朝女流日記を学ぶ人のために(第3刷)	2008年3月10日	<p>王朝女流日記の各作品と史的位置づけについて、専門研究者10人が分担執筆した。久保朝孝編、世界思想社刊、B6判302頁、2,233円(税別)。「国文学講義(2)中古b」の教科書として使用している。</p>			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
高等学校10年経験者研修講師	2007年7月31日	<p>愛知県立高等学校国語科教諭として採用されてから10年を経験した者に対して行う教科指導研修の講師を務めた(愛知県総合教育センター主催)。テーマを「国語科教材としての中古文学—王朝物語を中心に—」として、おもに伊勢物語の読みの深化と最前線の状況について講演した。</p>			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
博士学位審査委員	2003年4月～7月	課程博士審査(主査)			
文学部論集編集委員長	2003年4月～2005年3月				
文学部国文学科主任	2003年4月～2007年3月				
文学部入試実施委員長	2003年4月～2006年3月				
大学院文学研究科国文学専攻主任	2005年4月～2008年3月				
大学院文学研究科文学専攻主任(国文学コース代表)	2008年4月～現在				
全学履修制度検討委員	2005年4月～2007年3月				
大学院委員会委員	2007年4月～現在				
大学院文学研究科入試実施委員長	2007年4月～現在				
博士学位審査委員	2007年12月～2008年3月	論文博士審査(副査)			
放送大学面接授業講師	2007年12月15日～16日	テーマ:王朝の恋物語を読む(愛知地域学習センター)			
図書館長	2008年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					

論文					
続篇作者異聞『花鳥余情』から計量文献学まで	単著	2005年12月	おうふう、『源氏物語—宇治十帖の企て』	関根賢司編	206頁～211頁
紫式部日記研究文献目録稿	単著	2006年3月	私家版	久保朝孝編	全47頁
土御門殿と『紫式部日記』—邸宅のバトス—	単著	2007年5月	竹林舎、平安文学と隣接諸学1『王朝文学と建築・邸宅』	倉田 実編	246～262頁
「死」のことば	単著	2008年3月	清文堂出版、『王朝物語のしぐさのことば』	糸井通浩・神尾暢子編	134～140頁
その他					
書評					
津本信博著『日記文学の本質と方法』	単著	2003年12月	『平安朝文学研究』復刊第12号	平安朝文学研究会	147～151頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	中古文学会委員				
2003年7月～現在	全国大学国語国文学会委員				
2003年4月～現在	平安朝文学研究会委員				
2004年4月～2008年3月	日記文学研究会委員				
2003年4月～現在	愛知県稲門教育会幹事長				
2003年4月～現在	栄中日文化センター講師(枕草子、建礼門院右京大夫集、とはずがたり)				
2003年4月～現在	朝日カルチャーセンター名古屋講師(源氏物語)				
2004年12月22日	ちりゅう芸術創造協会「シアターカレッジ文芸学科(後期)」講師(知立市文化会館) 演題「伊勢物語を読む～許されざる恋と別れ」				
2007年12月13日	愛知学院大学モーニングセミナー講師(愛知学院大学本部記念講堂) 演題「源氏物語にみる究極の恋—光源氏と六条御息所—」				
2008年1月～6月	朝日カルチャーセンター名古屋特別講座講師及びコーディネーター (源氏物語千年紀記念「源氏、Who?—女たちの光る君」全6回)				
2008年3月～現在	市原国際奨学財団選考委員				
2008年4月～7月	栄中日文化センター特別講座講師及びコーディネーター (源氏物語千年紀記念「端役で光る源氏物語」全7回)				

所属 文学部	職名 准教授	氏名 小出 隆司	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
「小学校教科教育への提言ー明日の楽しい学校を目指してー豊かな生活科授業を創るためにー」	2006年10月31日	地域に根ざし、子どもの目線を大切に授業づくりの基本を提示した(24頁～28頁)。	
生活科の教材作り・・・近辺の雑草調べと教材化。小さな生き物調べと教材化。	2007年度前期	前期講座「初等生活」で、金子みすずの「スマレ」「魚」など詩を基にどのように学習づくりをするかの教材開発を試みた。	
地域素材の教材化	2007年度前・後期	後期生活科教育法で、身近な地域生活を素材にして、各グループごとにテーマをきめて教材開発をしミニ授業をした。また、期末レポートで「ミズ」をテーマにし、生活科授業を考察させた。優れた授業案と仮想の授業展開がいくつも出た。	
教材園・教材池づくり始め(実習園・池)	2007年度後期	生活科で実習活動がしたいという要望が多く、学科会議での討議をへて、学長にプランを提示し取り組みの許可を得た。12月より教材園づくりに取り組んでいる。	
絵本教材作り	2007年度前期	前期総合演習絵本『ぞうれっしゃがやってきた』を素材に、その成り立ち、歴史的背景、今日的意義、その広がりや学習して、絵本の持つ教育的価値を確認しあった。各自で「平和と命」をテーマに絵本を選び作品の価値を発表しあった。その上で、各自が創作作品を出し合い討議し、発表作品を選択した。さらに作品内容を討議し、紙芝居「シロがくれたもの」を作成して全体会で発表した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
愛知淑徳大学「教育を語る会ブックレット」No.2 小学校教科教育への提言ー明日への楽しい学校	2006年10月31日	豊かな生活科授業を創るために、基本的な詩人を明示した。地域に根ざし、子どもの目線で授業づくりを展開できるように提示した。	
初等生活講義レジュメ(15回分)	2007年4月～8月	②「学習指導要領」生活科学習についての基本認識・目標・内容等について歴史的経緯をたどり、その変遷の意義を考察した。また、教育現場で地域に根ざし、子どもと共に創り上げた諸実践と理論分析を示し授業づくりを考察した。教育現場の実践を紹介して、地域に根ざし、子どもとともに作り上げる生活科授業の楽しさを示した。	
総合演習講義レジュメ(4回分)	2007年4月～5月	【平和と命の尊厳さについて考える】この演習を始めるにあたり、拙著・絵本「ぞうれっしゃがやってきた」を書き上げた経緯、その歴史的背景、更にこの作品の持つ今日的意義を説いたもの。(アニメ映画、ミュージカル作品の紹介)	
生活科教育法 I (15回分)	2007年10月～1月	地域の素材をどのように教材化していくか、具体的な地域の条件(都市・都市近郊・海浜・山地など)を生かした教育課程作りをどうするか。また、題材作りにおける視点・題材観・留意点について、具体的な実践を重ね合わせて提示した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
東三河母親大会(蒲郡)《いまなぜ象列車か》パネラー: 大人と子どもの思いと行動	2003年7月6日	(多くが感想のお手紙、ビデオ、文集などの返礼をいただいている。)	
岩倉市立曾野小学校講師《象列車の話》 (平和と命学習発表会を成功させるために)	2004年1月20日		
鈴鹿市立国府小学校講師 《象列車の話》5・6年生、 《現職教育…地域に根ざした教育ー総合学習ー》	2004年1月21日		
刈谷市立衣浦小学校講師《ぞうれっしゃの話》	2004年1月30日		
三重県一志郡天白小学校PTA総会記念講演《走り続けるぞうれっしゃと子どもたち》	2004年2月22日		
京都府学童保育音楽会のための学習会講師(京都教育文化会館) 《象列車の話》…子どもたち 《平和と象列車》…指導員・父母	2004年2月28日		
京都府子ども音楽会(長岡市文化会館)審査員	2004年3月6日		

和泉生協音楽会・合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」事前学習会講師	2004年3月27日
京都市立日野小学校修学旅行(つちや旅館)平和学習講師	2004年4月27日
京都市立春日野小学校修学旅行(みよし旅館)平和学習講師	2004年5月20日
刈谷市立小垣江小学校・社会教育学級講師《子どもたちは今》	2004年6月10日
第12回中村ぞうれっしゃ合唱団音楽会(中村文化小劇場)《やまびこの詩一僕の紙飛行機 夢のせて》やまびこ共同作業所社会福祉法人化を祝して団長挨拶・出演	2004年7月18日
愛知サマーセミナー特別講座(愛知学院高等学校)「21世紀に走り続けるぞうれっしゃ」講師&大須賀ひできの大型紙芝居とコンサート	2004年7月19日
愛知平和のための戦争展(愛知中小企業センター)『ぞうれっしゃ』資料展示とミニステージ、大型紙芝居(本田百合子氏)&中村ぞうれっしゃ合唱団の合唱・戦争学習の会・パネラー《いまなぜぞうれっしゃか》	2004年8月11日～15日
テレビ東京レディーズ4:終戦記念番組「ぞうれっしゃ」小出隆司の話と八王子・渡良瀬ぞうれっしゃ合唱団の合唱	2004年8月20日
植田学区子ども会(公民館)アニメ「ぞうれっしゃがやってきた」とミニトーク	2004年10月11日
日本社会科学会(愛知教育大学):ぞうれっしゃ資料コーナー、アニメと話。インドネシア・スラバヤ大学の皆さんと交流。	2004年11月6日
京都府山城社会科研究会講師「いまなぜぞうれっしゃの歴史的背景」(田辺市長表敬訪問。懇談。記者会見(朝日・読売・京都新聞など)。北王英一氏郷里。郷土資料館長と懇談。)	2004年11月14日
田辺市平和集会。アニメ「ぞうれっしゃがやってきた」上映とミニトーク	2004年11月15日
名古屋市天白区母親大会講師(天白生涯教育センター)。	2004年11月27日
クリスマス学習会講師「いまなぜぞうれっしゃかーぞうれっしゃと歴史的背景」(臨時教師の会)	2004年12月24日
長崎からコープ平和コンサート「ぞうれっしゃがやってきた」(小出&中沢対談)。長崎テレビ放映・ながさきFM放送。	2005年1月23日
豊橋動物園講師(三河生協創立30周年記念・子ども平和企画)。「ぞうれっしゃ」の話と、親子で合唱(新城・蒲郡象列車合唱団)。	2005年4月3日
京都市立陵が岡小学校修学旅行平和学習講師(つちやホテル)	2005年4月26日
京都市立向島南小学校修学旅行平和学習講師(つちやホテル)	2005年5月12日
京都市立春日野小学校修学旅行平和学習講師(みよしホテル)	2005年5月12日
四日市市立中学生総合学習で【ぞうれっしゃの家】へ。「動物園を通して平和と戦争を考える」講話。	2005年5月19日
刈谷市立日高小学校PTA社会教育講座講師「いまなぜ象列車かー現代の教育と子育てを考えるー」	2005年5月26日
中学教科書・学習会講師(名古屋市議会議員・市民)	2005年6月16日
四日市・30人学級の実現を求める学習会講師(なやがくしゅうセンター): 今なぜぞうれっしゃかー現代の学校教育と子育てを考えるー	2005年6月18日
終戦記念日:朝日新聞掲載 戦争展「ぞうれっしゃがやってきた」紙芝居	2005年8月15日
宇都宮センター合唱団「ぞうれっしゃ」事前学習会講師	2005年8月21日
名古屋市立千鳥小学校授業参観日講師。「象列車の世界」	2005年9月16日
インド・チェンナイ補習学校創立30周年記念パーティ「ぞうれっしゃ」上演。同10月30日、声のメッセージを送る。	2005年10月14日
安城市立錦町小学校講師「ぞうれっしゃの世界」	2005年10月14日
瑞徳生涯教育センター講師【語り継ごう戦争体験】《NHKスペシャルドラマ「象列車がやってきた」(8月12日放映)を巡って》	2005年10月22日
市民ZOOネットワーク11月セミナー講師「戦争と動物園」(愛知NPO交流プラザ) 中日新聞朝刊掲載「平和や命の尊さ 絵本から感じて」(11月13日)	2005年11月12日
ぞうれっしゃは走るー戦後60年上中下連載ー水山和敏記者	2005年12月13日～15日
春日井市立北城小学校講師「象列車の世界」	2006年1月26日

象列車は走り続けるー平和を願い、命の尊さを伝える ROOS 3月号(72号)杉原美津子記者取材	2006年3月3日
岩谷産業KK.社内報「いずみ…人生いろいろ欄」掲載のため、日本放送作家駒田博之氏らから取材を受ける。	2006年3月28日
合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」6月18日公演の公開練習・ミニ講演講師 全国子ども議会開催【動物愛護・今考えていること】13人の子どもたちが意見表明。「ぞうれっしゃのなかまたち」の会主催(5月7日中日新聞掲載)。	2006年5月4日～5日
京都市立春日野小学校・修学旅行・平和学習講師「ぞうれっしゃの世界」(みよしホテル)	2006年5月11日
京都市立日野小学校・修学旅行・平和学習講師「ぞうれっしゃの世界」	2006年5月12日
JR横浜駅前岩崎学園研修会講師「象列車の世界と子育て」	2006年6月4日
河内長野市私学千代田学園短期大学文化祭講師「象列車の世界」	2006年6月17日
合唱組曲20年・絵本30年記念コンサート。出演。ウイン岐阜交響楽団。	2006年6月18日
高浜市立港小学校校人権集会。ミニ講演とアニメ「ぞうれっしゃがやってきた」上映	2006年6月20日
三重県菰野ぞうれっしゃ合唱団公演・講演講師「憲法9条と象列車の世界」(菰野公民館)。	2006年7月9日
可児ぞうれっしゃ合唱団コンサート事前学習会講師	2006年7月17日
小金井こぶし保育園講師「ぞうれっしゃのおはなし」	2006年7月28日
靖国神社文庫・取材・遊就館訪問、千鳥が淵訪問	2006年8月17日
堺市戦争展・音楽会・講演「憲法9条とぞうれっしゃの世界」	2006年8月19日
中村ぞうれっしゃ合唱団コンサート開催・挨拶・出演:合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」(中村文化小劇場)	2006年9月3日
名大留学生会館(桜山)造園テーマ「ぞうれっしゃ」打ち合わせ。(9月24日完成)	2006年9月5日
絵本『ぞうれっしゃがやってきた』中国語翻訳完成	2006年9月10日
【PEACE EGG IN 愛知】講師「象列車の世界を通して平和を考える」	2006年9月17日
市民講演会:今を生きるためにー憲法と人権の視点から(名古屋・市民会館)講師 「子どもとともに感性を育む～平和教育の実践を通して」	2006年9月24日
瑞穂市立牛牧小学校・全校児童講師「命の尊さを考える」	2006年10月3日
国際交流・南京公演「ぞうれっしゃがやってきた」に出演・参加(172名)。南京市各合唱団との共演。赤壁路小学校の児童・保護者の皆さんとグループに分かれて交流。2年生の児童の皆さんに絵本を紹介・読み聴かせ。	
岩倉南小学校講師「象列車の世界と子どもたち」。音楽劇のアドバイス。	2006年10月16日、30日
春日井市立西山小学校講師「象列車の世界と子どもたち」	2006年10月18日
中日教育賞受賞(中日パレス)受賞者を代表して挨拶。 ・関係記事:10月23日中日新聞朝刊。26日夕刊、27日朝刊、28日中日春秋。11月11日中日新聞朝刊コラム編集局デスク加藤幹雄(先生はただ一人)で紹介。	2006年10月26日
西尾9条の会・愛知教育大学9条の会講師「象列車の世界と9条」	2006年10月28日
金城学院中学校・図書館祭り講演会 講師「象列車の世界」	2006年11月10日
三重県緑ヶ丘養護学校文化祭講師「ぞうれっしゃ」講演と合唱構成(職員・生徒)	2006年11月11日
豊明市唐竹小学校1年生の皆さん「ぞうれっしゃのお話」講師	2006年11月14日
南京市の小学生女子2人&中国人留学生ホーム・ステイ	2006年11月30日
中村区役所9条の会学習会・講師(中村区役所集会室)	2006年12月25日
吉祥寺上田学園(象の花子)制作のため【ぞうれっしゃの家】を取材。	2007年1月3日
あいち子どもNPOの学習会講師「象列車の世界と子どもたち」(あいちNPO交流プラザ)	2007年1月13日
A・A・LA総会記念講演会講師「象列車の世界とアジア・ラテンとの連帯」(栄YWCA)	2007年2月10日
乳幼児託児所・職員研修会講師「今子どもたちは」(安城北公民館)	2007年2月15日
高齢者大学講師「今なぜぞうれっしゃかー平和と命の尊さを考える」(伏見NPO会館)	2007年2月19日
名古屋市立日吉小学校:平和学習講師「ぞうれっしゃの世界と子どもたち」	2007年2月20日

千葉歴教協研究集会。講師「走り続けて30年 今何故ぞうれっしやか」	2007年2月25日
多治見歌う会・リーダー学習会講師「ぞうれっしやの家」	2007年4月15日
名東区市立保育園・保母さんの学習会講師「象列車の世界」	2007年4月27日
ピース愛知会館。会館記念行事。記念講演講師「ぞうれっしや」の話と紙芝居、絵本「ぞうれっしやがやってきた」の原画展と資料展示(3F常設展示)	2007年5月4日～6日
京都市立春日野小学校修学旅行:平和学習講師「象列車の世界」	2007年5月10日
愛知淑徳大学後援会講演講師:「ぞうれっしやの世界より」	2007年5月12日
杉並ぞうれっしや合唱団20周年記念講演会講師「象列車の世界と子どもたち」(阿佐ヶ谷保育園ホール)	2007年5月20日
一宮市末広小学校教職員の皆さん【ぞうれっしやの家】で学習会	2007年6月2日
安城市北公民館母親学級講師「ぞうれっしやの世界と子どもたち」(安城北公民館)	2007年6月7日
カソリック名古屋教区協会学校教師会主催【子どもの集い2007 私たちに平和をもたらすイエスさま】講話「ぞうれっしやの世界と子どもたち」城北橋協会	2007年6月10日
一宮市立西成東小学校講師「象列車の世界と子どもたち」	2007年6月15日
名古屋市東部保育合同学習会講師「象列車の世界と子どもたち」(タンボボ保育園)	
日韓歴史教育交流会・名古屋シンポ主催(南山中高女子部)	2007年8月7日～10日
平和のための戦争展(名古屋市公会堂4F) ・象列車資料展示・紙芝居 ・ミニステージ講師「象列車の世界と現代」(14日)「帰ってきた平和地蔵」(15日)	2007年8月14日～17日
千葉県船橋市教職員組合教育研究会記念講演講師:「象列車の世界と子どもたち」	2007年8月24日
多治見親子歌う会学習会講師「象列車の世界と子どもたちへいまなぜぞうれっしやかへ」(多治見中学校音楽室)	2007年9月16日
第一村雲幼稚園・保護者会講師「象列車の世界と子どもたち」	2007年9月21日
きょうされん第30回全国大会・北信越東海ブロック選考会【聴いてよ!わたしたちの思い、みんなの主張コンクール】審査委員長。労働会館。	2007年9月22日
東京都世田谷区立千歳小学校4年生・保護者の皆さん「象列車の世界」講師。午後は2年生の国語の授業参観。	2007年10月5日
安城市立錦小学校6年生「象列車の世界と子どもたち」講師。	2007年11月2日
島田第2保育園「ぞうれっしやがやってきた」のお話。年長・園児の皆さんに。	2007年11月6日
一宮市立末広小学校6年生講師「象列車の世界と子どもたち」	2007年11月14日
名古屋市立南大高小学校6年生講師「象列車の世界と子どもたち」	2007年11月22日
瀬戸市・雪の聖母幼稚園・卒業生のクリスマス会講師「象列車の世界と子どもたち」	
小牧市立春日井小学校4年生講師「名古屋空襲と象列車」。	2007年12月14日
蒲郡市・西福寺【報恩講】講師「象列車の世界と子どもたち」	2007年12月16日
【すてきな教師講座】(臨時教員制度の改善を求める会主催)講師「小学校社会科:子どもとつくる教材と授業」(愛知県教育会館)	2008年1月19日
京都・立命館平和ミュージアム安藤館長さん始め職員・ボランティアの皆さん。来名。東山動物園案内と講話。	2008年2月13日
小学校教育実践研究会「近現代史講座大正期&環境教育について」(小出研究室)	2008年2月23日
イーストKK。加藤淑博ディレクター取材、収録。4月17日19:00～21:00フジテレビ系【アンビリバーボー】放映。「象を守った人々と象列車」(仮)	2008年3月4日
浜松市立中川小学校3年生講師「象列車と子供たち」。	2008年3月8日
中村区虎城会OB年度末学習会講師「今なぜ象列車か!」。	2008年3月14日
小学校教育実践研究会:「近現代史講座昭和期を考える&韓国留学体験(教員大大学)を語る」(小出研究室)	2008年3月15日

東京象列車引率の先生＝大澤峯蔵先生とニコニコママさんの会との懇親会講師「象列車の子どもたちと先生方」(山梨県上野原市＝コモアしおつ、ノースコム集会所)フジテレビ収録	2008年3月28日				
4 その他教育活動上特記すべき事項					
第38回中日教育賞受賞	2006年10月26日	絵本『ぞうれっしゃがやってきた』を通しての平和教育に対して。			
NHKスペシャル終戦60年企画ドラマ制作放映	2006年8月12日	小出隆司原作・矢島正雄脚本・吉永証演出・八千草薫・三浦友和・田中邦衛出演			
朝日新聞朝刊【ひと】掲載	2006年1月3日	「ぞうれっしゃを語り続けて30年」			
南京市と音楽を通しての国際交流	2006年10月6～9日南京・11月5～6日名古屋	中日・朝日、南京の各紙テレビなどで放映。			
『ぞうれっしゃがやってきた』絵本30年・合唱曲20年 記念音楽会、子供議会、全国交流会	2006年5月4日、5日	中日・朝日・読売など各紙、NHKはじめ名古屋テレビ・テレビ愛知などのニュースで紹介			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
ほほえみーぞうれっしゃがやってきたー	共著	2004年3月(第2期)	兵庫県教育委員会	人権教育新副読本編集委員会	52～55頁
シリーズ憲法9条 第2巻平和を求めた人々	共著	2005年12月	汐文社	歴史教育者協議会	32～35頁
石碑と銅像で読む近代日本の戦争	共著	2007年12月	高文研	歴史教育者協議会	68頁
鳴海小作争議をさぐる一現地見学案内ー鳴尾と鳴海での見どころ	共著	2003年11月	中部日本教育文化会	名古屋近代史研究会	128～132頁
わかってたのしい6年の社会科の授業	共著	2008年3月(改訂3刷)	大月書店	歴史教育者協議会(小出編集)	3～4頁、18～24頁(255頁)
論文					
子どもの視線を重視した平和と人権学習ー子どもの兵士について考えるー	単著	2004年3月1日	愛知教育大学『Piece of Peace & Human Rights』ー2004版	土屋武志共通科目「平和と人権」レポート集編集委員会	180頁～183頁
20世紀から21世紀へ走り続けるぞうれっしゃ	単著	2004年4月3日	あいち歴史教育No.8	愛知県歴史教育者協議会	152頁～160頁
『象列車がやってきた』秘話(上)(下)	単著	2005年10月1日、11月1日	『歴史地理教育』No.690、691	歴史教育者協議会	101頁、100頁～101頁
NHKスペシャル終戦60年企画ドラマ制作づくりー戦争に殺された象たちに涙「ぞうれっしゃがやってきた」誕生秘話(名タイ創刊60周年企画)	単独	2006年7月31日	名古屋タイムズ		新聞8段記事・写真入
憲法9条と「ぞうれっしゃ」の世界	講演記録	2007年8月1日	会誌38号(2007年子どもが主役になる社会科)	千葉県歴史教育者協議会	130頁～135頁
『ぞうれっしゃがやってきた』ー走り続けて30年ー(上)(下)	単著	2007年3月1日・4月1日	『歴史地理教育』Nos.711、713	歴史教育者協議会	60頁～65頁、78頁～83頁
特別展示「ある兵士が靖国神社に祀られるまで」	単著	2007年7月14日	あいち歴史教育No.11		45頁～58頁
あいちの子育てと教育と文化ー象列車が走った時すでに改憲の策動は始まっていた	単著	2006年6月4日	あいち県民教育研究所年報第14号		13頁～14頁
共同通信社より発信全国20紙終戦記念日の新聞(三好典子記者)	新聞	2006年8月10日～16日	山形、岩手、新潟新聞、愛媛、鹿島、中国新聞、日本海、山陰中央、神戸、北国、山陰、熊本、長崎、伊勢新聞など約20紙		
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1961年～現在まで		愛知学芸大学・愛知教育大学歴史学会会員・常任委員歴任・『歴史研究』執筆・歴史学会講演など。			

1967年～現在まで	歴史教育者協議会(全国委員・役員選考委員会委員長・全国大会分科会代表世話人)地域の歴史の掘り起こしと出版活動、現場学習と資料づくり、教研活動講師(社会科教育・平和教育・総合学習・生活科など)
1967年～現在まで	名古屋歴史科学研究会会員
1981年～現在まで	東海近代史研究会会員
1989年～現在まで	日本歴史学協会会員(日本学術会議会委員投票権)
1983年～現在まで	「ぞうれっしゃのなかまたち」の会・代表・事務局。平和教育・総合学習・地域文化共同づくり・コンサート・平和展・子供議会。 国際交流・全国の幼小中高大における学習発表・特別講義、地域生涯センター学習会、高年者大学などで講師。 主な活動【ぞうれっしゃの家】ホームページに掲載。
1983年～現在まで	修学旅行児童生徒【平和学習をテーマに東山動物園へ来園】案内と夜宿舎で講演。
日本・コリア名古屋シンポジウム主催	韓国・朝鮮・日本の研究者によるシンポジウム。(民間の手では日本で始めて)



所属 文学部	職名 教授	氏名 COLEBORNE, Bryan E.	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Jonathan Swift and Irish Studies		2005年～現在	Research into aspects of literature, language, bibliographical and textual studies, and linguistics, initially in the long eighteenth century, 1675-1825, but extending beyond that into areas of contemporary thought and practice.		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Melbourne Irish Studies Seminar, Newman College, University of Melbourne		2003年7月	Making Meaning out of Irish Names		
Aichi Shukutoku University, ASMAP Program		2005年11月	The Field Day Theatre Company: Fifth Province or Impasse?		
Aichi Shukutoku University, Department of Language and Literature		2005年12月	Language Is My Only Homeland		
Thirteenth Shamrock in the Bush Conference, St. Clement's Monastery, Galong, N.S.W.		2006年8月	The Field Day Theatre Company: Fifth Province or Impasse?		
Friends of the Library, Yass Valley Library, Yass, N.S.W.		2006年8月	Life in Japan Today		
IASIL-Japan, 23rd International Conference, Aichi Shukutoku University		2006年10月	Jonathan Swift and "the Whole People of Ireland"		
IASIL-Japan, 24th International Conference, Kobe Shinwa Women's University		2007年10月	Convener of Panel: Ulster Poets		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
Review of David Crystal, Language and the Internet (Cambridge: Cambridge University Press, 2001)	単著	2003年 11月	ATESOL (ACT), Canberra, ATESOL (ACT) Journal		31頁～32頁
Review of Edward Neafsey, Surnames of Ireland: Origins, Locations and History of Irish Families from Ancient Times to the 20th Century (Kansas City, Missouri: Irish Genealogical Foundation, 2002)		2003年11月	Centre for Irish Studies, Murdoch University, W.A., The Australian Journal of Irish Studies, Vol. 3		137頁～139頁
Biography of Mary Barber (c.1685-1755), poet		2004年3月	Oxford University Press, Oxford Dictionary of National Biography, 60 vols., Vol. III	H.C.G. Matthew and Brian Harrison, eds.	744頁～745頁
Biography of Thomas Parnell (1679-1718), poet and essayist		2004年3月	Oxford University Press, Oxford Dictionary of National Biography, 60 vols., Vol. XLII	H.C.G. Matthew and Brian Harrison, eds.	834頁～835頁

Biography of John Winstanley (1677?-1750), poet	2004年3月	Oxford University Press, Oxford Dictionary of National Biography, 60 vols., Vol. LVIX	H.C.G. Matthew and Brian Harrison, eds.	772頁
Review of Exploring the Dynamics of Second Language Writing, ed. Barbara Kroll (Cambridge: Cambridge University Press, 2003)	2004年6月	ATESOL (ACT), Canberra, ATESOL (ACT) Journal		47頁～48頁
Review of Peter Verdonk, Stylistics (Oxford: Oxford University Press, 2002)	2004年6月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 21, No. 2		85頁～87頁
“Builders of Today’s Schools”. Review of John Luttrell, The Inspector Calls: Catholic School Inspectors in Sydney 1848-1970 (Sydney: Catholic Education Office, 2003)	2004年7月	Archdiocese of Canberra, Catholic Voice, No. 190		13頁
“Tales of Memories Healed”. Review of Paul Glynn, The Wayside Stream: Reconciliation (Hunters Hill, N.S.W.: Marist Fathers Books, 2003)	2004年8月	Archdiocese of Canberra, Catholic Voice, No. 191		13頁
“Challenging the Establishment”. Review of Rachael Kohn, The New Believers: Re-Imagining God (Sydney: Harper Collins Publishers, 2003)	2004年10月	Archdiocese of Canberra, Catholic Voice, No. 193		17頁、20頁
Review of Irish Immigrants in the Land of Canaan: Letters and Memoirs from Colonial and Revolutionary America, 1675-1815, eds. Kerby Miller and others (New York: Oxford University Press, 2003)	2004年11月	Centre for Irish Studies, Murdoch University, W.A., The Australian Journal of Irish Studies, Vol. 4		339頁～342頁
Review of Chris Arthur, Irish Nocturnes (Aurora, Colorado: The Davies Group, 1999) and Irish Willow (Aurora, Colorado: The Davies Group, 1999)	2004年11月	Centre for Irish Studies, Murdoch University, W.A., The Australian Journal of Irish Studies, Vol. 4		343頁～344頁
Review of Ken Hyland, Second Language Writing (Cambridge: Cambridge University Press, 2003)	2004年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 22, No. 1		73頁～76頁
Review of Michael McCarthy and Felicity O’Dell, English Phrasal Verbs in Use (Cambridge: Cambridge University Press, 2004)	2004年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 22, No. 1		88頁～90頁
Review of An Uncomfortable Authority: Maria Edgeworth and her Contexts, eds. Heidi Kaufman and Chris Fauske (Newark, N.J.: University of Delaware Press, 2004)	2005年11月	Centre for Irish Studies, Murdoch University, W.A., The Australian Journal of Irish Studies, Vol. 5		165頁～166頁
Review of Dymphna Lonergan, Sounds Irish: The Irish Language in Australia (Adelaide: Lythrum Press, 2004)	2005年11月	Centre for Irish Studies, Murdoch University, W.A., The Australian Journal of Irish Studies, Vol. 5		171頁～174頁
Review of Chris Arthur, Irish Haiku (Aurora, Colorado: The Davies Group, 2005)	2006年10月	IASIL-Japan, Journal of Irish Studies, Vol.XXI		142頁～143頁

Review of Michael McCarthy and Felicity O'Dell, English Collocations in Use (Cambridge: Cambridge University Press, 2005)	2006年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 23, No. 1	40頁～41頁
Review of Oxford Guide to British and American Culture, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2005)	2006年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 23, No. 1	42頁～44頁
Review of Jane Spiro, Creative Poetry Writing (Oxford: Oxford University Press, 2004)	2006年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 23, No. 1	44頁～46頁
Review of Michael Swan, Practical English Usage, 3rd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2005)	2006年11月	English Australia, Sydney, EA Journal, Vol. 23, No. 1	46頁～48頁
Review of Letters of an Irish Patriot: William Paul Dowling in Tasmania, eds. Margaret Glover and Alf MacLochlainn (Sandy Bay, Tasmanian Historical Research Association, 2005)	2006年7月2日	Irish Studies Association of Australia and New Zealand, The Australasian Journal of Irish Studies, Vol. 6	113頁～115頁
Review of John Collins, Cool Waters, Emerald Seas: Diving Temperate Waters (Atrium, Cork, 2006)	2007年11月	The Australian Irish Heritage Network, Tintean, No. 2	27頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年～2005年	Literature Committee of the Australian Capital Territory Cultural Council, responsible for awarding grants and prizes
2003年～2005年	President, Friends of the Yass Valley Council Library, N.S.W., responsible for promoting the library in the local community
2003年～2005年	Council of the Bibliographical Society of Australia and New Zealand, responsible for managing the Society, including its journal, Script and Print
2004年～2005年	Register of Peers, Literature
2004年～2005年	Committee of the Australian Capital Territory Cultural Council, responsible for giving advice
2004年～2005年	Editorial committee of the Association of Teachers of English as a Second Language in the Australian Capital Territory (ATESOL ACT), responsible for overseeing the management of the ATESOL (ACT) Journal
2004年～2008年	History of the Book in Australia (HOB A) Committee, responsible for managing production of a three-volume history of print culture in Australia
2005年～2008年	International Advisory Board, Nagoya University of Commerce and Business Administration journal, NUCB Journal of Language, Culture and Communication, responsible for giving advice for the journal of the Faculty of Foreign Languages and Asian Studies
2005年～2008年	Editorial Advisory Board, The Australasian Journal of Irish Studies, responsible for giving advice for the journal of the Irish Studies Association of Australia and New Zealand

所属 文学部	職名 講師	氏名 小久保潤子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
英語で書かれたエッセイや小説の講読	2003年4月～2006年2月	毎回担当者を決め、トピックについてクラスでディスカッションを行った。これにより授業を活性化させ、全員が参加できる機会を設けることができた。また、学期末のレポートは必ずコメントをつけて返却し、良い点は積極的に評価のうえ、改善すべき点を指導した。この結果、学生の個性に応じた指導ができたと自負している。			
ビデオ教材を用いた教育の実践(専門/専門以外)	2003年4月～現在	小説の場合は当該作品か、同作家の映像化作品を鑑賞し、理解を促進した。原作と映像を比較し、相違があれば検討することで批評眼を培う訓練ができた。カポーティ、マラマッド、ホーソーン、バーンズ・ウルフなど。			
CALL教室を使った指導	2005年11月	コンピュータを使って、ボキャブラリーテストや文法問題に取り組んでもらい、個人レベルに合わせ弱点を見つけるのに役立った。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
新世紀アメリカ文学史	2004年12月～2006年3月	アメリカ文学・文化についての理解を促進するため、主要キーワードごとに解説を設けた本。神戸市外国語大学の英語講読担当時に参考図書として使用。授業で取り上げた作品への学生の理解を深めるのに役立った。			
英語リスニング能力向上のための教材の作成	2003年4月～現在	BS放送の英語ニュースやNHKの語学番組「100語でスタート! 英会話」「ビル君海外へ行く」「英語でしゃべらナイト」などを録画、学生の関心が高そうな箇所をピックアップして編集し、独自にリスニング訓練のための教材を作成。異文化理解にも役立った。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
講義内容の学生による授業評価① (神戸市外国語大学)	2004年2月～2006年2月	「理論に基づいた小説の読み方がわかった」「英文の読解力がついた」「解説がわかりやすく、英語で書かれた小説への理解が高まった」などの意見を得た。			
講義内容の学生による授業評価② (神戸松蔭女子学院大学、英語IV)	2005年9月	「学生の理解度を考慮してわかりやすく授業が進められた」について4.32ポイント(5段階評価、以下同じ)、「教員の授業に対する熱意が感じられた」4.32ポイント、「教員は学生の質問や意見に充分対応していた」4.50ポイントなどで高い評価を得た。また「わかりやすかった」「リスニング力が上がった」という意見が多く見られた。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
TOEIC学内試験の実施	2006年7月	手続き、学生指導、学内告知、申し込み受付、会場手配、試験実施、結果報告、データ作成など、学内試験に関することを全て一人で行った。			
学生のチューター	2006年4月～現在	学生のチューターとして、例えば欠席3回につき一回各科主任や学生課に報告している。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
新世紀アメリカ文学史(再掲)	共著	2004年10月	英宝社	森岡裕一、片瀬悦久、吉野成美、杉田和巳、沖野泰子、小久保潤子、他5名	14頁～26頁、76頁～84頁
新世紀アメリカ文学史[改訂増補版]	共著	2007年1月	英宝社	森岡裕一、片瀬悦久、吉野成美、杉田和巳、沖野泰子、小久保潤子、他9名	14頁～26頁、210頁～220頁
英米文学と依存(阪大英文学叢書第五号)	共著	2008年8月	英宝社		
論文					

Coverdale's Privative Sphere: An Analysis of the Narrator of <i>The Blithedale Romance</i>		1998年3月			68頁
Dissolved by Others: An Analysis of Coverdale in <i>The Blithedale Romance</i>	単著	1998年12月	Osaka Literary Review No.37		83頁～98頁
Domesticity Fails a Romancer: A Study on <i>The Marble Faun</i>	単著	1999年12月	Osaka Literary Review No.38		52頁～66頁
『完璧なる妻』のイメージ: 『瘧』におけるエイルマーの強迫観念	単著	2001年12月	待兼山論叢第35号		51頁～66頁
ロマンティック・ゴシック:19世紀アメリカン・ゴシック/ロマンスの不可分性	単著	2003年3月	フォーラムNo. 9		41頁～57頁
維持されるべき家庭: "Wakefield"における語り手のイデオロギー	単著	2003年10月	関西アメリカ文学第40号		5頁～18頁
Misleading Look: Representations of Gender in Nathaniel Hawthorne's Texts (博士論文)	単著	2005年9月	大阪大学大学院文学研究科		全200頁
『独身男の妥協: <i>The Blithedale Romance</i> における告白の必然性	単著	2005年10月	関西アメリカ文学第42号		5頁～18頁
その他					
『完璧なる妻』のイメージ: 『瘧』におけるエイルマーの強迫観念	単独	2001年9月8日	同志社女子大学、関西アメリカ文学会関西支部例会		
維持されるべき家庭: "Wakefield"における語り手のイデオロギー	単独	2002年10月14日	青山学院大学、日本アメリカ文学会第41回全国大会		
ロマンティック ゴシック: 19世紀アメリカン・ゴシックの一側面	単独	2002年12月7日	関西学院大学、三校合同談話会		
独身男の妥協: <i>The Blithedale Romance</i> における告白の必然性	単独	2003年10月11日	日本アメリカ文学会第42回全国大会(於椋山女学園大学)		
『ウェイクフィールド』を読み直す(ワークショップ)講師	共同	2004年5月21日	英知大学、日本ナサニエル・ホーソーン協会第23回全国大会		
自制とパッション: 『緋文字』における分裂した男性主体	単独	2004年10月16日	甲南大学、日本アメリカ文学会第43回全国大会		
拮抗するレトリック: 催眠術・錬金術・ <i>The House of the Seven Gables</i>	単独	2006年10月14日	法政大学、日本アメリカ文学会第45回全国大会		
黄金のレトリック: 『七破風の屋敷』におけるフィービーの機能	単独	2007年3月31日	関西大学、日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部		
『ウェイクフィールド』を読み直す	共著	2005年3月	『フォーラム』No.10		61頁～85頁
映画から見えてくるアメリカ文学、(英文学を新たな視点で読み直す)	単独	2008年2月9日	広島国際学院大学立町キャンパス		
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 教授	氏名 小林素文	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学校法人愛知淑徳学園愛知淑徳大学 学長		1989年4月～現在	総合企画委員会・大学協議会・大学院委員会・入 学試験委員会・自己点検評価委員会・総合情報メ ディア委員会等の招集・統括		
学校法人愛知淑徳学園理事長		1991年4月～現在	学園の全体的な統括		
学校法人愛知淑徳学園学園長		1996年6月～現在	法人が設置する学校の教学を統括		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～2004年3月	大学基準協会評議員				
2002年4月～現在	財団法人東山公園協会理事				
2002年4月～現在	愛知県私学協会常任理事				
2002年4月～現在	愛知県私立学校審議会委員				
2002年4月～2004年3月	東海テレビ放送株式会社放送番組審議会委員				
2002年4月～2007年7月	名古屋市人事委員会委員(2002年、2006年度人事委員長)				
2002年4月～現在	日本私立大学協会常務理事				
2002年4月～現在	財団法人愛知県私学振興事業財団 理事				
2002年4月～現在	愛知県私立大学協会副会長				
2002年6月～現在	日本私立大学協会中部支部副支部長				
2003年5月～現在	財団法人後藤報恩会評議員				
2004年4月～現在	財団法人大幸財団評議員				
2004年4月～2005年12月	愛・地球博ボランティアセンター顧問				
2005年11月～現在	財団法人私学研修福祉会理事				
2006年4月～現在	財団法人日本高等教育評価機構評議員				
2006年4月～現在	日本私立学校振興・共済事業団「私学共済年金制度研究委員会」委員				
2006年5月～現在	文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員(大学設置分科会)				
2007年5月～現在	文部科学省学術審議会専門委員(人文学及び社会科学の振興に関する委員会)				

所属 文学部	職名 講師	氏名 櫻木貴子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
非ネットワーク環境下およびネットワーク環境下における情報検索と情報管理の演習		平成15年4月～現在	インターネット等のネットワークが十分に整っていない環境下においては小規模データベース作成を実施した。また、ネットワーク環境下においては、無料で学生が利用可能で有用なオンライン・データベースを中心とした演習を実施した。		
PowerPointを活用した関連情報の提示		平成15年4月～現在	教科書として活用している資料に提示されず、配布資料上でも提示しにくい図表等をPowerPointを使用して提示した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
サーチエンジンを用いた大学生の情報検索過程の実験調査	共著	平成15年3月	愛知淑徳大学図書館情報学会、Journal of Library & Information Science, Vol.16	伊藤沙那	17頁～26頁
メタデータを中心とした新たな情報メディア組織化研修試案	共著	平成16年6月	図書館資料組織化研究会、資料組織化研究49号	北克一、村上泰子	1頁～14頁
司書課程科目履修学生によるWeb情報資源評価:評価における注目点と影響要因	単著	平成19年3月	愛知淑徳大学図書館情報学会、Journal of Library and Information Science, Vol.20		71頁～82頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 教授	氏名 佐藤成哉	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
理科(科学)への興味関心を高めるための工夫	2003年4月～現在	エネルギー・環境教育の視点から捉えたプレゼンCDを制作し授業に活用している。知識注入型ではなく、日常生活の中のさまざまな現象や生命活動との密接な関連性をも考慮しており、総合学習(教科横断)でも充分活用可能な教材である。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
クイズ・サイエンティスト	2003年4月～現在	教科理科の詳細な説明ではなく日常何気なく体験している現象を取り上げ、そこに含まれている科学の「不思議」を感じ、原因を「理解・説明」できるように工夫した教材である。	
地球は僕らの教室だ	2003年6月	総合的な学習の時間の副教材として制作し、全国中学校理科研究大会において配付した。本品は環境汚染度の計測実験集ではなく自然の仕組みの巧妙さや素晴らしさを体感・理解できるように工夫された教材である。	
実験教具「光通信の実験玉手箱」	2007年4月	エネルギー・環境教育の副教材として考案・商品化(中村理工工業)した。本品は光通信の仕組みを視覚的に理解させることにより、先端科学技術と日常生活との密接な関連性を認識させる上で非常に価値ある優れた教材である。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
(講演)科学が好きな子どもを育てるために	2003年6月27日	ソニー科学教育研究会・西日本大会(ソニー教育財団)	
(指導助言)化学変化でエネルギーを取り出そう	2003年11月13日	第53回九州理科教育研究大会(熊本県・玉名市立玉名中学校)	
(講演)「感じ考え実感する」を実践するための教材教具の工夫と効果的な利用方法	2004年7月6日	小学校理科教育実践講座(熊本県教育センター)	
(講演)科学する力を育む授業の創造	2004年8月11日	ソニー科学教育研究会・熊本大会(ソニー教育財団)	
(指導助言)「たのしい理科」授業のために	2004年8月24日	教科・領域等研修「小学校理科」研修講座(熊本市教育センター主催)	
(講演)21世紀のアインシュタインを熊本から	2005年6月27日	熊本県環境生活部環境保全課	
(講演)科学研究の進め方	2005年7月11日	熊本県菊池郡市理科部会(科学教育研究会)	
(指導助言)わくわくする科学実験をするための教材教具の工夫と利用法	2005年7月25日	熊本県理科実習教師の会	
(講演)子どもの知的好奇心を揺さぶる導入の在り方～理科好きな子どもを育てるために～	2005年8月23日	大分市小学校理科教育研究会	
(講演)これからの理科教育～小中学校の連携を見通して～	2005年8月25日	小中学校理科実技講習会(県教育センター主催)	
(講演)理科好きな子どもを育てるために	2005年11月30日	熊本県児童館連絡協議会	
(講演)科学と理科教育	2006年6月3日	ソニー科学教育研究会愛知支部・春季研修会	
(講演)化学領域の教材研究・作成～指導と評価の工夫～	2006年8月10日	熊本市教科領域等研修「中学理科」講座(熊本市教育センター)	
(講演)「たのしい理科」への誘い	2007年1月27日	日本初等理科教育研究会	
(指導助言)理科教材の研究と開発	2007年2月16日	愛知県教育委員会(授業名人活用推進事業)	
(講演)科楽への誘い	2007年5月25日	名古屋市理科教育研究会	
(講演)科学好きな子どもの育成～身近な事物事象の活用～	2007年7月2日	西尾市立中畑小学校校内研修会(JST:理科支援員配置事業の一環として)	
(模擬授業)子どもと科楽	2007年7月28日	愛知淑徳大学オープンキャンパス	
(講演)これからの理科教育～科学から科楽へ～	2007年8月23日	岡崎市立六ツ美西部小学校校内研修会(JST:理科支援員等配置事業の一環として)	
(講演・演習)食材を科学(楽)の目から～料理はサイエンス～	2007年9月26日～9月28日	JIAM戦略的政策形成型研修(全国市町村国際交流センター)	
(講演)自然のつばやき～宇宙船地球号の秘密～	2007年12月2日	子ども環境サミットー世界一受けたいEcoな授業ー(熊本県主催)の一環として	
(講演)食を科楽する	2008年1月25日	第56回愛知県学校給食研究大会(愛知県教委主催)	
(指導助言)食に関する指導の校内体制づくり	2008年2月14日	日進市立相野山小学校校内授業研究会	
(出前授業)科楽への誘い～教員養成をめざして～	2008年3月7日	愛知県立津島高等学校(愛知淑徳大学入試広報室)	



(模擬授業)科学から科楽へ～小学校教員をめざして～	2008年3月18日	愛知県立中村高等学校(愛知淑徳大学入試広報室)
<b>4 その他教育活動上特記すべき事項</b>		
熊本県教育委員会	2003年4月～2006年3月	・熊本県科学展(審査委員長:2000年～) ・中学校理科授業研究大会(指導助言:1990年～) ・現職教師のための実験講習会(講師:1989年～) ・出前実験わくわく科学教室(1998年～)
科学技術振興機構	2005年8月20日	「子どもの夢サイエンス～覗いてみよう科学の世界～」熊本大会実行委員会委員
	2005年4月～2006年3月	「理数大好きモデル地域事業」実行委員会及び実施推進委員会委員
(財)日本科学技術振興財団	2003年4月～現在	「青少年のための科学の祭典・熊本大会」実行委員長(1998年～)
	2003年4月～2005年3月	「新しい時代における地域の学習資源を活用した理工系人材育成に関する調査研究」検討委員
	2006年4月～2008年3月	「市民による科学技術リテラシー向上維持のための基礎研究」研究委員
独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センター	2003年4月～2007年3月	子ども夢基金による「小中学生のための科学実験教室」(熊本県内:4～5回/年)
独立行政法人 国立青少年教育振興機構	2007年8月23日 2007年9月9日	子ども夢基金による「子ども科学ふれあい教室」演示講師(会場:愛知県青年の家)
熊本大学教育学部教育実習委員会	2003年4月～2006年3月	副委員長(2000年4月～)
日本化学会	2007年3月26日	第24回化学教育有功賞「化学教育の活性化と新教材開発への貢献」

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
文部科学省検定教科書 新版たのしい理科	共著	2005年4月	大日本図書 平成17年度版	戸田盛和、有馬朗人、佐藤成哉、他41名	
新版中学校理科	共著	2006年4月	大日本図書 平成18年度版	戸田盛和、有馬朗人、佐藤成哉、他45名	
<b>論文</b>					
中学校の実践授業で使える二酸化窒素の簡易測定法の開発	共著	2003年9月	化学と教育第51(9)	佐藤成哉、井芹正生、大山寛、青井弘毅	564頁～566頁
茶を科学する	共著	2003年9月	理科の教育第52(9)	佐藤成哉、井上二夫	56頁～60頁
子ども一人一人が科学を楽しみ、主体的に取り組むための教材・教具の工夫	共著	2004年10月	理科の教育第53(10)	佐藤成哉、水村彦彦、島岡一則	56頁～60頁
環境教育の教材開発	共著	2004年	熊本大学教育学部紀要第53号(自然科学)	佐藤成哉、井上二夫、岩崎ゆかり	37頁～44頁
酸化チタンの光触媒作用を効果的に演示するための教材開発	共著	2005年4月	化学と教育第53(4)	佐藤成哉、井芹正生、木下和登	243頁～246頁
「ミニ遊園地づくり」からエネルギー教育を考える—想像から創造へ—	共著	2005年6月	理科の教育第54(6)	佐藤成哉、野田寛樹、土森英俊	420頁～423頁
自然のはたらきの素晴らしさを体感させる環境教育—環境教材実験集(CD版)の制作と授業実践—	共著	2005年7月	理科の教育第54(7)	佐藤成哉、野田寛樹、青井弘毅、田代博士、井上二夫	484頁～487頁
自然の叡智から学ぶ環境教育	共著	2005年9月	理科の教育第54(9)	佐藤成哉、井上二夫、中山幸博、野田寛樹	630頁～633頁
中学校の実践授業で使える陰イオン界面活性剤の簡易定量法の開発	共著	2005年9月	化学と教育第53(9)	佐藤成哉、井芹正生、青井弘毅	508頁～511頁
既習事項をもとにした生徒の好奇心や発想を生かす発展的な授業の工夫—化学変化にともなって出入りするエネルギー—	共著	2005年10月	理科の教育第54(10)	佐藤成哉、相浦哲、森崎信子、土森英俊	711頁～714頁
生きる力を育てるための単元構成—化学領域「いろいろな気体」の“物語化”を通して—	共著	2006年1月	理科の教育第55(1)	佐藤成哉、上村恭満、北岡幸起、吉田和親	54頁～59頁

## III 学会等および社会における主な活動

1971年9月～現在	日本化学会会員
------------	---------

1980年4月～現在	日本分析化学会会員
1986年12月～現在	日本化学会化学教育部会会員
2001年5月～現在	日本理科教育学会会員
2002年4月～現在	日本環境教育学会会員

所属 文学部	職名 准教授	氏名 佐藤実芳	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
視聴覚教材の活用		平成16年6月～現在	「学生アンケート」より、「教育原理」と「教育制度」の授業において、視聴覚教材の使用が高く評価されていることが明らかになったため、わかりやすく興味がもてる授業にするために、視聴覚教材の充実とその活用の工夫に毎年度努めている。		
講義室の環境の整備		平成17年4月～現在	講義開始時と終了時の挨拶、机上の整頓等を実施することにより、私語が減少し、講義室内の環境が改善された。この点に関して、「学生アンケート」から、授業中静かで落ち着いて授業が受けられると評価されている。		
聴覚障がい者のための講義ノートの作成		平成19年4月～平成20年1月	「教育原理」「教育制度」の受講者の中に聴覚障がい者が二人いたため、講義ノートを作成して提供した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『教育原理・教育制度』		平成16年4月1日	愛知淑徳大学教職課程の「教育原理」「教育制度」用のテキストを作成した。		
副教材プリントの作成		平成16年4月～現在	教育法規の分野を中心に『教育原理・教育制度』の補足用プリントを毎年作成している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教職課程委員会委員		平成15年4月～現在	教職課程委員会の委員として、教職課程の運営に参加している。		
資格教育センター運営委員会委員		平成17年4月～現在	資格教育センター委員会の委員として、資格教育センターの運営に参加している。		
文化創造学部表現文化専攻入学前指導委員		平成17年4月～平成19年3月	文化創造学部表現文化専攻の入学前指導委員として、入学前指導に携わった。		
文学部新学科検討委員会委員		平成17年10月～平成18年3月	平成18年度申請の文学部教育学科のカリキュラムの検討等に参加した。		
文学部教育学科設置準備委員会委員		平成18年4月～平成19年3月	教育学科設置準備委員会の委員として、カリキュラムの検討等に参加した。		
文学部教育学科教務委員		平成19年4月～現在	文学部教育学科の教務委員として、時間割作成等に関する教務に携わっている。		
「師範学校」(教職サークル)顧問		平成16年10月～現在	3年生開講科目「教師論」の受講者の要望で教職サークルを結成し、教育についての様々な学習と教育ボランティア活動等を支援している。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『乳児保育』	共著	平成15年4月	近畿大学豊岡短期大学	桑幸男、吉見昌弘、岡本美智子、中谷奈津子	21頁～41頁
『新版 子どもの教育の歴史－その生活と社会背景をみつめて－』	共著	平成20年3月	名古屋大学出版会	江藤恭二監修	40頁～45頁
論文					
男女共同参画社会の実現に向けた行政施策における学校教育の役割－国際社会の動きから、地方都市の施策まで－	単著	平成16年3月	愛知淑徳大学論集－文学部篇－第29号		51頁～65頁
関西の幼児教育・保育系の短期大学における男子学生進出の考察	単著	平成17年3月	愛知淑徳大学論集－文学部篇－第30号		21頁～34頁
大都市における小学校の統廃合に関する考察	単著	平成18年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部篇－第6号		21頁～40頁
連絡帳の教育的再評価	単著	平成18年3月	学び舎－教職課程研究－創刊号		70頁～81頁

過疎地における中学校の統廃合に関する考察－旧但東町の中学校の統廃合－	単著	平成19年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部篇－第7号	17頁～32頁
学校教育における食育－イギリスの食の2週間－	単著	平成19年3月	学び舎－教職課程研究－第2号	49頁～58頁
地方都市における男女共同参画の試みに関する考察－兵庫県豊岡市の男女共同参画プラン誕生の過程の分析－	単著	平成20年3月	愛知淑徳大学論集－文学部篇－第33号	1頁～17頁
フランスにおける「味覚の授業」－ビュイゼ・メソッドにもとづいて－	単著	平成20年3月	学び舎－教職課程研究－第3号	73頁～82頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2007年1月31日	名古屋市子ども青少年育家庭観等育成講座in愛知淑徳大学
2007年12月27日	名古屋市子ども青少年局家庭観等育成講座 in 愛知淑徳大学 (その2)
2007年6月～現在	名古屋市青少年交流プラザ運営審議会委員
2007年6月～現在	名古屋市青年の家運営審議会委員

所属 文学部	職名 教授	氏名 菅野育子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
演習科目での工夫		2003年4月～現在	講義科目については、毎回資料を作成して配布。さらにインターネット情報資源を活用して具体的事例を示した。情報検索の演習科目については、最新の情報検索システムを毎年追加して、実際の検索作業を実践できるように準備し情報検索用に準備されている「情報検索室」でティーチングアシスタント(大学院生)の補助も付け個人指導できる体制での授業を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『専門資料論』		2005年6月	日本図書館協会のJLA図書館情報テキストとして、司書課程科目の「専門資料論」のために刊行したものの。人文科学、社会科学、自然科学の3分野に分けて各分野における情報と資料の特徴、動向、問題点について論述した。その中で「人文科学分野の情報と資料」を分担執筆した。本書は司書課程を置く全国の大学で活用されている。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
司書課程委員会委員		2003年4月～2007年3月	委員長(2005年4月～)		
情報メディアセンター委員会委員		2003年4月～現在			
情報システム支援委員会委員		2003年4月～2007年3月			
学生生活委員		2006年4月～現在			
FD委員会委員		2006年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
専門資料論(JLA図書館情報学テキストシリーズ)	共著	平成17年6月	日本図書館協会	◎三浦逸雄編著	64頁～83頁
論文					
「情報とドキュメンテーション」に関する標準化	単著	平成15年6月	情報の科学と技術Vol.53、No.6		289頁～293頁
博物館資料を対象とした記述基準の分析	単著	平成16年3月	Journal of Library and Information Science, No.17		39頁～38頁
情報流通における標準化活動の現状と意義	単著	平成16年3月	現代の図書館Vol.42、No.1		31頁～38頁
欧州の情報政策による図書館、博物館間協力の可能性	単著	平成18年	アート・ドキュメンテーション研究No.13		3頁～9頁
書誌記述における雑誌名と機関名の扱い: SIST05, SIST06の改訂による完全表記	単著	平成19年12月	情報管理Vo.50、No.3		162頁～165頁
欧米における図書館、文書館、博物館の連携:Cultural Heritage Sectorとしての図書館	単著	平成19年12月	カレント・アウェアネスNo.294		10頁～16頁
その他(口頭発表)					
図書館資料と博物館資料の識別方法における違いとその背景	単独	平成15年10月	第51回日本図書館情報学会研究大会		
図書館、博物館間の情報共有化の可能性:政策から見た図書館、博物館間協力	単独	平成17年10月	第53回日本図書館情報学会研究大会		
博物館、文書館、図書館の協働連携活動	単独	平成18年3月	公開シンポジウム「文化・知識情報資源共有化とメタデータ」		

学生の個人的特性がWeb上における情報検索行動に及ぼす影響	共同	平成19年11月	三田図書館・情報学会2007年度研究大会	
欧米の博物館, 図書館文書館, の連携活動	単独	平成19年12月	横断的アーカイブズ論研究会2007年度成果報告	

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	科学技術情報流通技術基準委員会委員
2003年4月～現在	日本図書館情報学会編集委員会委員
2003年4月～現在	情報とドキュメンテーション標準化調査研究委員会委員
2005年3月～2006年3月	内閣府大臣官房管理室「公文書等の中間段階における集中管理の仕組みに関する研究会」委員
2006年3月～2007年3月	愛知県一宮市立中央図書館整備基本計画検討委員会委員長
2006年3月～2007年3月	科学技術情報流通技術基準SIST05及びSIST06分科会委員(主査)
2006年4月～現在	愛知県芸術文化センター運営会議委員
2006年4月～現在	岐阜県図書館運営会議委員

所属 文学部	職名 教授	氏名 都築久義	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業に関するアンケート調査		2005年6月6日	全学一斉に授業に関するアンケート調査を実施。「郷土文学」の受講生を対象に回答を得た。毎年、前後期に各一回ずつ行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「郷土の人と文学」		毎年4月に作成	「郷土文学」の講義ノートとして、中日新聞に連載した「文学ぶらりぶらり中部の人と作品」をまとめた。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学副学長		1995年4月～現在	大学協議会、総合企画委員会、大学院委員会、入学試験委員会、自己点検・評価委員会、総合情報メディアセンター委員会の委員、AO・クラブ推薦入試委員会委員長		
教養教育センター長		2000年4月～現在	教養教育運営委員会委員長		
外国語教育センター長		2003年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
日本文芸史(第7巻)	共著	2005年10月	河出書房新社	鈴木貞美他2名	195頁～210頁
日本文芸史(第8巻)	共著	2005年11月	河出書房新社	鈴木貞美他2名	53頁～62頁
昭和の戦争と文学者	単著	2007年8月	新日本印刷株式会社		303頁
論文					
「人生劇場」に描かれた父親像	単著	2004年4月	至文堂、国文学解釈と鑑賞第64巻第4号		172頁～177頁
石川達三の戦中・戦後	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科－第32号		33頁～44頁
旅と文学・吉江喬松「伊良湖の旅」	単著	2007年4月	至文堂、国文学解釈と鑑賞第72巻第4号		103頁～106頁
尾崎士郎のと坂口安吾	単著	2007年8月	『昭和の戦争と文学者』(前出)		278頁～299頁
尾崎士郎の文学的出発	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科－第33号		35頁～47頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年4月～現在		尾崎士郎作文賞審査委員長(愛知県吉良町が主宰する同町の小中学生を対象にした作文コンクール)			

所属 文学部	職名 教授	氏名 寺尾 剛	大学院における研究指導 当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
専門教育科目「卒論指導」では「平成16年度前記授業アンケート」結果報告を踏まえて時代・ジャンルを問わずテーマを自由に選ばせる。	2004年4月～現在	その結果、かなりユニークなテーマ・内容の卒論が多く見られるようになった。たとえば中国文学と歌謡曲、中国文学と絵画など。			
専門基礎科目「漢文基礎」では「平成16年度前記授業アンケート」結果報告を踏まえて中国古典文法を中心に講義。	2004年4月～現在	具体的には、句法中心主義をやめて、古典文法、あるいは漢字ごとの文法規則という観点から講義している。			
専門科目「中国文学講義」では「平成16年度前記授業アンケート」結果報告を踏まえて先秦漢魏晋南北朝文学を中国人の発想法という観点から講義。	2004年4月～現在	先秦漢魏晋南北朝から唐代までの文学を対象を絞っている。中国人の発想法、和漢比較といった見方に力点を置いて講義している。			
専門科目「中国文学演習」では「平成16年度前記授業アンケート」結果報告を踏まえて学生の意志を最大限に優先し、発表テーマも発表者の自主性を重んじることにしている。	2004年4月～現在	学生個々の個性を重んじることによってユニークな発表が多く見られた。			
「中国文学講義」「中国文学演習」の受講生を対象に、課外活動として、毎年10日前後の中国文学関係遺跡調査のための中国研修旅行を実施している。	2001年4月～現在	古今の著名な文学遺跡を実際に見ることによってより具体的に中国文学を理解させるという試みである。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
『中国語会話1A-2』(劉乃華と共著、三恵社)	2004年3月	言語活用科目中国語のための独自教材。			
『中国語購読1B』(単著、三恵社)	2004年3月	言語活用科目中国語のための独自教材。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部学生生活委員	2002年4月～2005年3月				
文学研究科情報メディアサービス部運営委員	2004年4月～2006年3月				
文学部教務委員	2005年4月～現在				
文学研究科教務委員	2007年4月～現在				
全学中国語教育運営委員	2003年4月～現在				
童話研究会顧問	2005年4月～現在				
ワンダーフォーゲル部顧問	2005年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
李白与九華山詩歌古跡化	単著(劉 維治訳)	2003年6月	新疆師範大学学報(哲学社 会科学版)2003年第2期		116頁～121頁
西域～辺塞詩の三つの謎	単著	2003年10月	大修館書店、月刊しにか 2003年10月号		68頁～73頁
關於中国“詩歌古跡”研究的意義	単著(劉 維治訳)	2003年10月	長江文芸出版社、『長江学 術』第5輯		64頁～69頁
「静夜思」－詩仙李白の楽府体詩	単著	2004年10月	藤樹社、書道界2004年10 月号		16頁～21頁
「垓下の歌」－虞美人への想い	単著	2004年11月	藤樹社、書道界2004年11 月号		16頁～21頁
謝朓の「玉階怨」－閨怨詩の魅力	単著	2004年12月	藤樹社、書道界2004年12 月号		16頁～21頁
王安石「元日」－中国の正月	単著	2005年1月	藤樹社、書道界2005年1月 号		16頁～21頁
陶潜「飲酒、其五」－悠然として 南山を見る	単著	2005年2月	藤樹社、書道界2005年2月 号		16頁～21頁
蘇軾「題西林壁」－東坡居士と 「廬山の真面目」	単著	2005年3月	藤樹社、書道界2005年3月 号		16頁～21頁
白雲愁色滿蒼梧－李白におけ る「蒼梧」と「海」	単著	2005年3月	研文出版、松浦友久博士 追悼記念 中国古典文学 論集		430頁～445頁



白居易「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」－廬山と平安人を繋ぐもの	単著	2005年4月	藤樹社、書道界2005年4月号	16頁～21頁
李白「望廬山瀑布」－香炉峰瀑布の謎	単著	2005年5月	藤樹社、書道界2005年5月号	16頁～21頁
元稹「三遣悲懷、其二」－唐代詩人とその妻	単著	2005年6月	藤樹社、書道界2005年6月号	16頁～21頁
梅堯臣「悼亡三首、其一」－悼亡詩の系譜	単著	2005年7月	藤樹社、書道界2005年7月号	16頁～21頁
陸游「沈園二首、其一」－消えやらぬ先妻への想い	単著	2005年8月	藤樹社、書道界2005年8月号	16頁～21頁
陸游「示兒」－南宋最大の詩人の遺産	単著	2005年9月	藤樹社、書道界2005年9月号	16頁～21頁
柳宗元「江雪」－左遷と山水詩	単著	2005年10月	藤樹社、書道界2005年10月号	16頁～21頁
柳宗元「与一柳柳州の望郷詩	単著	2005年11月	藤樹社、書道界2005年11月号	16頁～21頁
劉禹錫「元和十年自朗州召至京戲贈看花諸君子」－中唐詩人の筆禍事件	単著	2005年12月	藤樹社、書道界2005年12月号	16頁～21頁
劉禹錫「竹枝詞、其二」－中唐詩人と庶民の歌	単著	2006年1月	藤樹社、書道界2006年1月号	16頁～21頁
劉禹錫「石頭城」－金陵懷古詩の傑作	単著	2006年2月	藤樹社、書道界2006年2月号	16頁～21頁
杜牧「江南春絶句」－杜牧の金陵懷古詩	単著	2006年3月	藤樹社、書道界2006年3月号	16頁～21頁
伝・杜牧「清明」－制作者と「杏花村」の謎	単著	2006年4月	藤樹社、書道界2005年4月号	16頁～21頁
杜牧「題烏江亭」－杜牧の詠史詩	単著	2006年5月	藤樹社、書道界2006年5月号	16頁～21頁
許渾「咸陽城東樓」－水と風の詩人	単著	2006年6月	藤樹社、書道界2006年6月号	16頁～21頁
許渾「瓜洲留別李詡」－『和漢朗詠集』と許渾	単著	2006年7月	藤樹社、書道界2006年7月号	16頁～21頁
張祜「金山寺」－江中に浮かぶ名利	単著	2006年8月	藤樹社、書道界2006年8月号	16頁～21頁
張祜「何滿子」－白居易・元稹に疎まれた詩人	単著	2006年9月	藤樹社、書道界2006年9月号	16頁～21頁
李紳「憫農二首」－社会派詩人の本領	単著	2006年10月	藤樹社、書道界2006年10月号	16頁～21頁
韓愈「左遷至藍關示姪孫湘」－反骨詩人の気概	単著	2006年11月	藤樹社、書道界2006年11月号	16頁～21頁
孟郊「遊子吟」－苦吟派詩人の慈母のうた	単著	2006年12月	藤樹社、書道界2006年12月号	16頁～21頁
孟郊「登科後」－科挙合格の喜び	単著	2007年1月	藤樹社、書道界2007年1月号	16頁～21頁
賈島「題李凝幽居」－「推敲」故事の謎	単著	2007年2月	藤樹社、書道界2007年2月号	16頁～21頁
賈島「三月晦日贈劉評事」－三月三十日の惜春歌	単著	2007年3月	藤樹社、書道界2007年3月号	16頁～21頁
姚合「武功縣中作、其一」－苦吟派詩人の役人生活	単著	2007年4月	藤樹社、書道界2007年4月号	16頁～21頁
張籍「征婦怨」－庶民派詩人の樂府体詩	単著	2007年5月	藤樹社、書道界2007年5月号	16頁～21頁
王建「新嫁娘詞、其三」－新婚の妻を歌う	単著	2007年6月	藤樹社、書道界2007年6月号	16頁～21頁
李賀「雁門太守行」－鬼才李賀の出世作	単著	2007年7月	藤樹社、書道界2007年7月号	16頁～21頁
李賀「秋來」－墓中の幽鬼	単著	2007年8月	藤樹社、書道界2007年8月号	16頁～21頁
李商隱「無題」－晩唐の恋愛詩人	単著	2007年9月	藤樹社、書道界2007年9月号	16頁～21頁
李商隱「夜雨寄北」－李商隱の妻への想い	単著	2007年10月	藤樹社、書道界2007年10月号	16頁～21頁
温庭筠「商山早行」－温飛卿の最高傑作	単著	2007年11月	藤樹社、書道界2007年11月号	16頁～21頁

薛濤「春望詞四首、其三」－唐代最高の女流詩人	単著	2007年12月	藤樹社、書道界2007年12月号	8頁～13頁
薛濤「柳絮」－女校書の実力	単著	2008年1月	藤樹社、書道界2008年1月号	8頁～13頁
魚玄機「遊崇真觀南樓曙新及第題名処」－激情の女流詩人	単著	2008年2月	藤樹社、書道界2008年2月号	8頁～13頁
魚玄機「売残牡丹」－気高き女性の誇り	単著	2008年3月	藤樹社、書道界2008年3月号	8頁～13頁
金陵詩史における李白の意義(一)－李白詩に見える金陵の地名	単著	2008年3月	中国詩文研究会編、中国詩文論叢第26集	1頁～19頁
魚玄機「送別」－女流詩人の愛と死	単著	2008年4月	藤樹社、書道界2008年4月号	8頁～13頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1982年4月～現在	早稲田大学中国文学会会員
1982年4月～現在	中国詩文研究会会員
1987年4月～現在	日本中国学会会員
1987年4月～現在	宋代詩文研究会会員
2000年4月～現在	中唐文学会会員
2000年4月～現在	斯文会会員
2003年4月～現在	和漢比較学会会員
2006年4月～現在	日本中国語学会会員

所属 文学部	職名 教授	氏名 富安玲子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
フィードバック用紙の活用	2003年4月～現在	授業の最後に毎回意見、質問、感想をすべての担当授業で提出してもらい、次回にそれらを分類して答えたり、紹介することによって、前回の授業内容の確認とともに、同じ授業に参加している学生たちの考え方を知ることができ、15分位のフィードバックの時間が、授業への関心を深める効果をもつ様子は、授業アンケートの結果からも確認できた。	
学生の参加型授業の導入	2003年10月～現在	「カウンセリング」の授業では毎回ウォーミングアップやエクササイズを取り入れることによって、理論の理解や技法の意味づけを実践を通して体得することができ、それらの日常生活への活用のためにも役立つことが授業アンケートによっても確認できた。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
愛知県立学校新任教務主任研修(県総合教育センター)	2003年6月27日	「教育相談の内容と方法ーいじめ・不登校を中心にー」をテーマに講演	
春日井郡新川町社会を明るくする運動講演会	2004年7月1日	「子育てとカウンセリングマインドー気持ちを聴くためにー」をテーマに講演	
なごや女性カレッジ(名古屋市教育委員会)	2004年9月22日	(愛知淑徳大学共催)「生涯発達と自分探しー他者との関わりの中でー」をテーマに講演	
愛知県立学校教頭研修(県総合教育センター)	2005年1月18日	「教育における心理学の役割」のテーマのもとで教育における心を開き合う人間関係の構築について講演	
名古屋市千種生涯学習センター「女性セミナー・これからの私」	2005年5月26日	「男女平等参画社会の中の私」をテーマに講演	
豊田市立東丘幼稚園保育研究会	2005年10月26日	保育の難しい子の理解と援助についての研修を担当	
日本産業カウンセラー協会中部支部ステップアップ講座	2006年8月27日	「マイクロカウンセリング」についての研修を担当	
愛知地区教職員組合学習会	2006年10月18日	「聴くということー心を開き合う人間関係のためにー」をテーマに講演	
名古屋市港区青少年育成大会	2006年12月10日	「子育てとカウンセリングマインド」をテーマに講演	
愛知地区教職員組合教育対話集会	2007年6月23日	「心を開き合うために」をテーマに講演	
名古屋市西区天神山地区青少年育成推進大会	2007年11月14日	「子育てとカウンセリングマインド」をテーマに講演	
地域開発みちの会「知多・名古屋女性フォーラム」	2008年1月23日	「男女が創る明るい社会ー一人ひとりが輝くためにー」のテーマで講演	
名古屋市名東生涯学習センター「女性セミナー」	2008年3月6日	「輝き続ける女性であるために」のテーマで講演	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
学内 副学長	2003年4月～2007年3月	大学協議会、総合企画委員会の委員、教育内容等改善検討委員会、研究助成委員会、人権擁護委員会、自己点検評価委員会教育部門等各委員長	
文学部教育学科主任	2007年4月～現在	文学部における運営委員会、資格審査委員会、入試実施委員会各委員	
合唱団顧問	2003年4月～現在	クラブ活動としての女声合唱団の顧問	
学外			
名古屋市女性会館特別面接相談担当及び電話相談員の養成と研修	2003年4月～2004年3月	女性の特別面接相談、電話相談員のスーパービジョン、養成講座及びフォローアップ研修を担当	
名古屋市生涯学習アドバイザーの研修	2004年1月	成人の心理とカウンセリングについて担当	
「いのちの電話」相談員の養成	2003年2月～2007年6月	年1回「女性をめぐる諸問題」を担当	
「日本心理カウンセリング」講師	2003年8月～2007年3月	カウンセリング基礎コース「生涯発達心理学」を担当	
NPO法人「岐阜ソーシャルワークアソシエーション」講師	2003年8月～2007年9月	実践カウンセリング初級講座「生涯発達心理学」を担当	
四日市市男女共同参加センター相談室研修会	2005年8月～2008年2月	ケース検討や「自己一致」をテーマに研修を担当	
名古屋市男女平等参画推進センター専門相談員研修	2006年9月～2008年2月	相談の基本的なかわり技法・積極技法についての研修やケース検討を担当	
<b>II 研究活動</b>			

著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
「聴くということ」考	単著	2006年3月	学び舎－教職課程研究－ 創刊号		15頁～26頁
「『普通』ということ」考	単著	2008年3月	学び舎－教職課程研究－ 第3号		2頁～11頁
その他					
ジェンダー・女性学研究所誕生 の頃を思う	単著	2006年3月	ジェンダー・女性学研所 ニュースレター第21号		4頁
教科教育が活かされるために	単著	2006年10月	愛知淑徳大学「教育を語る 会」ブックレットNo.2「小学校 教科教育への提言」		63頁～66頁
教育とジェンダー－教育学科新 設に向けて－	単著	2007年3月	ジェンダー・女性学研所 ニュースレター第23号		4頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2004年6月	名古屋市特別職報酬審議会委員				
2003年4月～現在	名古屋市千種生涯学習センター協議会委員				
2003年4月～現在	愛知県がんセンター遺伝子解析研究倫理審査委員会委員				
2003年4月～現在	名古屋保護司選考会委員				
2003年4月～現在	名古屋市女性会館運営審議会委員				
2003年4月～2008年3月	名古屋市男女平等参画苦情処理委員				
2003年4月～現在	愛知県義務教育問題研究協議会委員				
2004年4年～現在	東海相談学会理事				
2006年1月～2006年3月	愛知県立大学外部評価委員会委員				
2008年1月～現在	日本マイクロカウンセリング学会理事				

所属 文学部	職名 講師	氏名 外山敦子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「実践日本語表現法」(文学部共通専門科目)関連					
口頭発表を踏まえたレポートの作成	2004年10月～現在	日本語における「書く」「話す」「読む」「聞く」「調べる」の総合的な学習を目指し、教員が指定した課題について、まずはグループで調査・口頭発表をし、その成果を踏まえて各自がレポートを提出する。グループ発表の過程で学生同士が議論を深めるため、レポートの質が大幅に向上した。			
各種検定試験の紹介及び検定結果の成績への加味	2005年4月～現在	学生の学習意欲喚起を目的として、「日本漢字能力検定」など日本語表現に関する検定試験への挑戦を呼びかけ、年間スケジュールの配布や自主学習のサポートなどを行った。なお、検定試験に合格した場合は、難易度に応じて本科目の評価に加味した。			
年度初と年度末の「基礎力診断テスト」の実施	2006年4月～現在	本科目受講前(4月)と受講後(1月)に同一の問題を使用してテストを行う。受講後の学習成果が、点数の伸びとなって確認できる。2006年度は、受講前に比べて受講後の平均点が25点上昇(52点→77点)した。			
論説文の採点基準の明確化	2007年4月～現在	論説文の採点基準を明確にし、可能な限り数値化することで改善点を分かりやすく示した。具体的には採点ポイントを「内容・構成」と「文章表現」とに分け、前者を加点法、後者を減点法で評価した。これにより、評価に関する質問がなくなり、修正箇所が学生に伝わりやすくなった。			
「日本漢字能力検定」「日本語文章能力検定」学内団体受検の実施	2007年11月10日、17日	学生の学習意欲喚起と受検の便宜を図るため、「日本漢字能力検定」と「日本語文章能力検定」の学内団体受検を実施し、のべ238名が受検した。その結果、「日本漢字能力検定」2級などに、のべ109名が合格した(合格率45.8%)。			
「国文学特殊講義 作品講読(古典)」(国文学科専門科目)関連					
「源氏物語を読むための基礎知識」の取り上げ方の工夫	2004年4月～現在	『源氏物語』の読解に必要な基礎知識(構成・巻名・梗概・作者・成立・話型・本文など)を、毎回1項目ずつ授業の最初の20分程度を使って取り上げ、残りの時間で作品を講読する。90分すべてを講読に割くよりも、授業の時間配分が明確になったことで、学生の集中力と意欲が増した。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
講義資料 源氏物語を読むための基礎知識25(総計32頁)	2008年3月1日	『源氏物語』の読解に必要な基礎知識(構成・巻名・梗概・作者・成立・話型・本文など)25項目について、1項目につきA4版用紙1頁に収まるようにポイントを絞って作成した講義資料集。「国文学特殊講義 作品講読(古典)」で使用。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
文学部共通専門教育科目 実践日本語表現法の現状と課題(文学部主催「授業改善・情報交流会」における報告)	2007年12月4日	高等学校における日本語表現技術教育の実態調査を踏まえ、大学初年時教育としての「実践日本語表現法」の開講意義を確認した上で、現在の学習内容や試行段階の授業実践及び課題について報告した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
特記事項なし					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
龍谷大学善本叢書 三条西公条自筆稿本源氏物語細流抄	共著	2005年3月	思文閣出版	龍谷大学仏教文化研究所編	83頁～1頁
人物で読む源氏物語6 紫の上	共著	2005年6月	勉誠出版	上原作和編	307頁～315頁
源氏物語の老女房	単著	2005年10月	新典社		総計240頁
源氏物語 宇治十帖の企て	共著	2005年12月	おうふう	関根賢司編	304頁～309頁

人物で読む源氏物語14 花散里・朝顔・落葉の宮	共著	2006年5月	勉誠出版	上原作和編	285頁～295頁
龍谷大学仏教文化研究叢書 日本古典随筆の研究と資料	共著	2007年3月	思文閣出版	糸井通浩編	61頁～71頁、429頁～473頁
王朝物語のしぐさとことば	共著	2008年4月	清文堂出版	糸井通浩・神尾暢子編	120頁～129頁
論文					
『源氏物語』老女房弁の「昔物語」－薫の〈原点回帰〉の契機として－	単著	2003年2月	日本文学第52巻第2号		10頁～19頁
『源氏物語』の「老いしらへる」人－反転する価値と、その逆説的有効性－	単著	2003年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第28号		39頁～51頁
〈母〉たちの浮舟物語－競り合う二人の召人－	単著	2005年3月	物語研究第5号		15頁～28頁
国文学科における『実践日本語表現法』の実践報告－プレゼンテーションの方法－	単著	2006年3月	愛知淑徳大学国語国文第29号		138頁～126頁
「伝わる話し方」のための10のルール－『実践日本語表現法』の授業現場から大学生の口頭表現を考える－	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第32号		55頁～64頁
『紫式部日記』消息文の方法－操作する〈情報〉／操作される〈情報〉－	単著	2008年1月	日本文学第57巻第1号		12頁～20頁
文学部共通専門教育科目『実践日本語表現法』の現状と課題	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第33号		71頁～90頁
その他					
機関誌『物語研究』第3号合評会報告	単独	2004年1月24日	物語研究会2004年1月例会		
『源氏物語』左大臣と致仕大臣－〈子を亡くす父〉の系譜－	単独	2007年3月11日	古代文学研究会2007年3月例会		

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

所属学会等	
1996年4月～現在	古代文学研究会会員(1999年9月～2001年8月、事務局代表。2005年9月～2007年8月、事務局会計)
1996年4月～現在	名古屋平安文学研究会会員
1996年4月～現在	中古文学会会員
1999年1月～現在	日本文学協会会員
2000年7月～現在	物語研究会会員(2003年4月～2005年3月、機関誌編集委員)
2006年6月～現在	全国大学国語国文学会会員
2008年3月～現在	初年次教育学会会員
2008年3月～現在	日本リメディアル教育学会会員
市民講座等講師	
2005年3月1日、8日、15日、26日	宇治市・城陽市・同志社女子大学共催「eラーニングで学ぶ これだけはおさえない『源氏物語』のツボ－謎の宇治十帖に迫る－」(全4回)
2006年4月～現在	龍谷大学RECコミュニティカレッジ京都「源氏物語を読む」・「紫式部日記を読む」(継続)
2007年4月～2008年3月	三重県立斎宮歴史博物館主催「古典文学講座『紫式部日記』を読む－紫式部の真実に迫る－」(全10回)
2007年6月15日、22日、29日、7月6日	宇治市・宇治市生涯学習センター主催「親子関係から読み解く『源氏物語』－紫式部からのメッセージ－」(全4回)
2008年2月8日、15日、22日、3月8日	京都文教大学主催「eラーニングで学ぶ源氏物語－4回でわかる源氏の世界－」(全4回)
2008年4月～現在	八幡市主催「やわた女性セミナー」(継続)
2008年4月20日	中日文化センター主催「端役で光る源氏物語」(第2回担当／全6回)
2008年5月30日	龍谷大学RECコミュニティカレッジ滋賀「入門・作家紫式部の世界」(第3回担当／全3回)
2008年6月6日、20日、7月4日、18日	宇治市・宇治市生涯学習センター主催「『紫式部日記』を読んでみよう－『源氏物語』誕生の舞台裏へ－」(全4回)
2008年6月29日	朝日カルチャーセンター主催「源氏、Who?－女たちの光る君」(第6回担当／全6回)

文化賞選考委員

2007年4月～現在

その他

2006年4月～2008年3月

2008年4月～現在

宇治市・宇治市教育委員会主催「紫式部市民文化賞」選考委員会委員委嘱

日本学術振興会科学技術研究費補助金「若手研究(スタートアップ)」採択

財団法人市原国際奨学団体研究助成採択

所属 文学部	職名 准教授	氏名 中嶋 真弓	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
義務教育小・中学校、さらには国語科担当指導主事としての経験を生かし、理論的な内容を学校現場でどのように生かすことができるかを具体的に事例を挙げながら授業を行っている。	2007年4月～現在	「授業アンケート」においても、学生達から「現場での様子を聞くことができよう」等の意見も多く聞かれた。教育現場は、初任者を育てると共に「即戦力」となる教師を求めていることも事実である。そのために、例えば、国語のこのような見方・考え方を実際の授業ではどのように発問したり、児童生徒に考えさせたりすればよいか等の具体例を提示しながら考えさせている。	
「平成19年度前期授業アンケート」結果報告を踏まえて、より授業にメリハリができるように工夫した。	2007年10月	受け身の授業ではなく、学生が参画できるような授業づくりを心がけており、それにおいては、学生達にも一定の評価を得ている。また、より授業にメリハリをもたせるために、「考える場、討議する場、書く場」等の学習活動を明確にし、動きのある授業にするように考えた。そのために、グループ交流やプレゼンによる発表等も行っている。	
「平成19年度後期授業アンケート」結果報告を踏まえて、配付資料の精選ならびに内容の構造化に努めた。	2008年1月	授業では、毎回プリントを活用するのであるが、十分理解させる時間がない場合もある。そのために、資料内容の精選を行うとともに、その資料の必然性や関連を考えながら、学生の思考にそった提示ができるように努めた。今後は、より視覚的に分かるようにするために、パワーポイント等も取り入れていきたいと考えている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
国語科指導案作成の指導に活用した教材	2007年4月～現在	国語科の授業を構想するために次に記す内容の自作資料(プリント)を活用した。[初等国語]では、授業イメージを持つことができるようにするために「その子らしさを生かす言語活動の実践」プリントを作成した。また、B領域書く力を付けるノート指導の重要性を伝えるために「課題作文の書き方を知ろう」「自己表現をしよう」「意見文の書き方を学ぼう」等、実際に現場において活用できるワークシートを提示し、説明した。さらに、A領域話す力を付ける指導として、「話し合いの仕方を知ろう」「コミュニケーションの仕方を知ろう」等のプリントを作成し、講義に活用した。[国語科教育法Ⅰ]では、特に学習指導案作成において「国語科学習指導案作成の基本的な考え方」「『お手紙』(教科書教材の題名)の学習指導案を書く」「評価規準設定の仕方及びその位置付け」のプリントを作成し、学生が自力でも学べるようにした。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
教育課程研究会(小学校)	2003年7月	「オープン講座」「郡上市講座」は、市が主催する講座に国語科指導主事として指導にあたった。「教育課程研究会」とは、小・中学校教員が3年に1度受ける研修である。国語科の指導主事として指導にあたった。「道徳計画訪問」とは、中学校区を単位として地域住民も招き、各校で道徳の授業を公開しさらに研究会を行うものである。道徳担当の指導主事も兼務しておりその指導にあたった。	
オープン講座(小学校)	2003年7月		
教育課程研究会(中学校)	2003年8月		
オープン講座(中学校)	2003年8月		
教育課程研究会(小学校)	2004年7月		
教育課程研究会(中学校)	2004年8月		
郡上市講座(小・中学校)	2004年8月		
道徳計画訪問の指導	2002年4月～2005年3月		
愛知淑徳大学教育を語る会	2006年8月		
4 その他教育活動上特記すべき事項			
女子バレー部顧問	2007年4月～現在		
情報メディアサービス部運営委員会委員	2007年4月～現在		



愛知淑徳大学教師の会会長		2007年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
国語学力アクションプラン 小学 2年の国語学力・絶対評価で鍛 える	共著	2003年1月	明治図書出版	中嶋真弓、榊原良子、揚村 智子、他10名	27頁～42頁
絶対評価への挑戦①	単著	2003年8月	明治図書出版		総計176頁
「物語を楽しむ」(『国語教室の マッピングー個人と共同の学び を支援するー』)	共著	2005年8月	明治図書出版 教育出版	塚田泰彦、中嶋真弓、他15 名	101頁～111頁
「書くこと」の習熟度別指導ステッ プワーク集 中学二年編	単著	2007年4月	明治図書出版		総計149頁
論文					
「音読・朗読」に適した教材とは ～音読・朗読で国語を好きに させる～	単著	2004年1月	明治図書出版、教育科学 国語教育No.640		34頁～37頁
語彙を豊かにする授業のアイ ディア～言葉のよさを考えさせて いく教育課程を構想しよう～	単著	2004年7月	明治図書出版、教育科学 国語教育No.646		82頁～84頁
基礎・基本の定着を図る選択国 語～情報活用能力を習熟させる 学習活動～	単著	2004年8月	ニチブン、CD-ROM版 中 学校国語科教育授業実践 資料集Vol.6 豊かな学びを 育てる選択教科 国語と総 合的な学習		9頁分
国語教師と司書教諭は両輪であ れ!～生徒の読書活動を生み出 すための指導の在り方～	単著	2004年8月	ニチブン、CD-ROM版 中 学校国語科教育授業実践 資料集Vol.7 主体的な学 習を保障する国語科の授 業ー学校図書館の支援ー		5頁分
効果的な補充的指導の開発～ 鮮明に授業が見える指導案作 成に向けて～	単著	2004年9月	明治図書出版、教育科学 国語教育No.648		81頁～83頁
書く能力の育成を目指して～B 領域の系統的指導の充実を図 る～	単著	2005年12月	明治図書出版、教育科学 国語教育No.663		68頁～71頁
〈小学校各教科教育への提言: 国語科〉小学校国語科教育の指 導	単著	2006年10月	愛知淑徳大学、教育を語る 会		3頁～7頁
言葉遣いの指導 中学校の実践 言葉への理解を深める学習の在 り方～単元名「人間が使う言葉 について考える」の単元学習を 中心に～	単著	2007年5月	明治図書出版、教育科学 国語教育No.680		52頁～55頁
2005年度版小学校国語科教科 書における古典教材採録のあり 方	単著	2008年3月	愛知淑徳大学教職課程、 『学び舎』編集委員会編、 学び舎ー教職課程研究会 ー第3号		62頁～72頁
その他					
審査評(小学校高学年の部)自 己の生活を豊かにする読みへの 挑戦	単著	2006年3月31日	岐阜県学校図書館協議 会、平成17年度青少年読 書感想文コンクール入選作 品集		105頁～107頁
本はともだち 第52回青少年読 書感想文コンクール(推薦図書 紹介)	単著	2006年7月11日	毎日新聞社		25頁に掲載
国語教育人物誌 岐阜県	単著	2006年10月1日	明治図書出版、教育科学 国語教育No.673		98頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年4月～2006年3月		平成17年度県青少年読書感想文コンクール審査委員・岐阜県学校図書館協議会役員			
1992年4月～現在		全国大学国語教育学会会員			

所属 文学部	職名 助教	氏名 中野 謙一	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
都留文科大学の情報(データベース作成と利用)A・Bにおける実習授業		2005年4月～2007年3月	国文学科1年生を対象に、国語国文学の研究や論文作成にコンピュータを活用する方法を指導した。		
「国文学講義 I (1) 上代b」におけるスライド使用		2007年4月～現在	図表や写本などの映像を用いて、学生の興味を深め、また視覚的に理解を高めようと試みている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
講義用スライド(「ヤマトタケル—景行記・倭建命物語—」「下巻試論—『猪甘の老人』を例に—」など)		2007年4月～現在	「国文学講義 I (1) 上代b」のためにPowerPointにより作成したもの。		
『2007年度国文学演習 I (1)b レポート集』		2007年10月～2008年1月30日	「国文学演習 I (1)b」の課題レポートを編集し、論文指導の参考資料としたもの。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
模擬授業(オープンキャンパス)		2007年7月28日	「学校で習わない『古事記』と題して大学の授業の一端を示した。		
出張模擬授業(岐阜県立加茂高等学校)		2007年9月19日	「古事記—ヤマトタケルの物語を読む」と題して大学の授業の一端を示した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
『古事記』中・下巻の敬称	単著	2005年3月	学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻、日本語日本文学創刊号		3頁～15頁
神代紀の異伝注記—第四段・第五段の編修—	単著	2006年3月	学習院大学文学部、研究年報第52号		75頁～94頁
『本朝皇胤紹運録』の利用—萬葉歌人高安王・市原王の系譜の検討から—	単著	2006年3月	学習院大学文学部国語国文学会、国語国文学会誌第49号		47頁～58頁
記紀間における顕宗天皇像の相違	単著	2006年3月	学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻、日本語日本文学第2号		1頁～12頁
その他					
講読「海佐知昆古と山佐知昆古」	単独	2006年9月	古事記学会9月例会		
口頭発表「『古事記』における皇位継承の論理—袁祁命の問題を中心に—」	単独	2007年6月	古事記学会大会		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 教授	氏名 西荒井 学	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
プレゼンテーション電子教材		2005年4月	「授業評価アンケート」の結果を踏まえて全面改訂		
プレゼンテーション電子教材		2007年9月	「授業評価アンケート」の結果を踏まえて一部改訂		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報システム支援部長		2000年4月～2004年3月			
総合情報メディアセンター運営委員会委員		2000年4月～2004年3月			
情報システム支援部運営委員会委員長		2000年4月～2004年3月			
情報教育センター運営委員会委員		2004年4月～現在			
入試委員会委員		2005年4月～2007年3月(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
研究助成委員会委員		2007年4月～現在			
文学部図書館情報学科主任		2005年4月～現在(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
文学部運営委員会委員		2005年4月～現在(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
文学部教員資格審査委員会委員		2005年4月～現在(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
文学部入試実施委員会委員		2005年4月～現在(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
文学部研究助成委員会委員		2005年4月～現在(ただし、2005年10月～2006年3月は除く)			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
情報技術基礎 I	共著	2004年4月	共立出版	三和義秀、小林久恵	2頁～4頁、20頁～33頁、66頁～140頁
情報技術基礎 II	共著	2004年4月	共立出版	三和義秀、小林久恵	168頁～178頁
プログラミング入門－Visual Basic.NET－	単著	2005年4月	共立出版		169頁
コンピュータ入門 I－Window操作からWord、PowerPointまで－	共著	2007年4月	共立出版	三和義秀、小林久恵	214頁
コンピュータ入門 II－コンピュータの基礎知識からExcelと統計処理まで－	共著	2007年4月	共立出版	三和義秀、小林久恵	187頁
Excel環境下でのシステム開発への挑戦－データベース機能の活用－	単著	2007年9月	共立出版		144頁
論文					
高等学校における教科「情報」の修得内容に関する実態調査－2006年度図書館情報学科新入生を対象として－	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第32号	三和義秀、小林久恵	1頁～14頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月26日		第46回(平成15年度)オフィスオートメーション学会全国大会実行委員会委員			
2006年9月6日		私立大学情報教育協会平成18年度大学教育・情報戦略大会(共同発表)			

所属 文学部	職名 教授	氏名 林 博司	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
視覚教育の充実		2003年4月～現在	学生の答案、授業アンケートの結果等を参考に、分かりやすい授業にするために、実験の展示、動画、コンピュータグラフィクス等を授業にとり込み、学生にも体験させるようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
		2004年4月	偏光の性質を理解するための教材、電磁波の性質を理解させるための教材。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学文学研究科長		2005年～現在	研究科運営に専念。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
バイオインフォマティクス	単著	2004年12月	情報の科学と技術、第54巻		629頁～633頁
遺伝暗号解読40周年:アンチコドン認識	単著	2006年7月	蛋白質・核酸酵素第51巻		838頁～839頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文学部	職名 講師	氏名 人見恭司	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業に関するアンケート(2004年度前期)		2004年6月8日	テキスト以外に補足のプリントを適宜作成し授業で使用するにより、「授業の難易度は適切であると思う」「授業はいろいろな意味で将来の生活や仕事に役立つと思う」などの項目で、学生から高い評価を得ることが出来た。		
授業に関するアンケート(2005年度前期)		2005年6月7日	授業内容に関連するビデオなどの視聴覚教材を適宜使用することにより、「授業の進み具合は適切である」「授業はいろいろな意味で人生のプラスになる」などの項目で、学生から高い評価を得ることが出来た。		
授業に関するアンケート(2006年度前期)		2006年6月6日	インターネット上の情報や新聞記事などの中から授業内容に関連する話題を探し、授業の中で適宜紹介して行くことにより、「授業は学習意欲や興味が増すように工夫されている」「授業はいろいろな意味で人生のプラスになる」などの項目で、学生から高い評価を得ることが出来た。		
授業に関するアンケート(2007年度後期)		2007年11月13日	Power Pointやマイクの使い方を工夫することにより、「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすい」「授業は総合的に見て満足できるものである」などの項目で、学生から高い評価を得ることが出来た。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
副教材プリント「実践日本語表現法」の作成		2004年4月～現在	「実践日本語表現法」の授業で使用するために、「引用の方法」「手紙文」についての補足プリントをそれぞれ作成。2006年に「話し言葉と書き言葉」「呼応する言葉」についての補足プリントを、2007年に「電子メール」についての補足プリントを追加して作成。それぞれ年度毎に改訂しながら現在に至る。		
小テストプリント1～16「実践日本語表現法」の作成		2004年4月～現在	「実践日本語表現法」の授業時に実施する16回分の小テストプリントを各年度毎に作成し、現在に至る。		
副教材プリント「古典詩歌」の作成		2004年9月～現在	授業で使用するために、『百人一首』の「和歌の技法」「歌人(六歌仙)」「出典」についてのプリントをそれぞれ作成。年度毎に改訂しながら現在に至る。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1981年4月～現在	名古屋大学国語国文学会会員				
1983年4月～現在	早稲田大学国文学会会員				
1983年5月～現在	和歌文学会会員				
1983年5月～現在	中古文学会会員				
1988年5月～現在	中世文学会会員				

所属 文学部	職名 教授	氏名 平林美都子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
プレゼンテーションの活用		2003年4月～2006年3月	「国際文化V(北米・英国)」の後半4週間ほどを学生のプレゼンテーションにあてることにより、学生が自発的に調べ、まとめ、発表する力をつけた。		
授業に関するアンケートの活用		2003年4月～現在	全学で実施されている「授業に関するアンケート」結果を踏まえて授業をするようにしている。具体的には、明瞭に話す、学生の理解度を把握する、学生を尊重した授業をするなどである。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
教材「北米文化 カナダ」作成		2003年10月	「国際文化V(北米・英国)」の教材として、カナダの地理、カナダの概要、カナダの略史、先住民と文化、カナダのメンタリティ、移民I,II、カナダ英語文学の各項目をまとめた(22頁)。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
『表象としての母性』を読む		2006年12月10日	愛知女性研究者の会ジェンダー研究会で、文学や映像の中の母性や母娘関係の描かれ方を考察した。		
中高年のエンパワーメント・ストーリー		2007年11月29日	名古屋市女性会館平成19年度主催講座で、英国映画『旅する女—シャーリー・バレンタイン』『カレンダー・ガールズ』から、中高年女性が直面する問題を取り上げ、そこから学ぶべき前向きな生き方を考察した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文化創造学部教務委員長		2004年4月～2005年3月			
文化創造学部情報メディアサービス部委員		2003年4月～2006年3月			
ジェンダー・女性学研究所所長		2007年4月～現在			
文学部英文学科主任		2007年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
表象としての母性	単著	2006年6月	ミネルヴァ書房		
イギリス祭事カレンダー	共著	2006年9月	彩流社	宮北恵子	
論文					
翻訳の創造性	単著	2003年9月	カナダ研究年報第23号		93頁～99頁
“Balin and Balan”をクイアで読む	単著	2003年9月	英文学研究第80巻第1号		1頁～12頁
語りえないものを語る—“Giving Birth”と“Ana Historic”	単著	2003年12月	カナダ文学研究第11号		31頁～41頁
ポストコロニアルの小説からラブストーリーの映画へ— <i>The English Patient</i> の改変—	単著	2004年3月	英語青年4月号		22頁～24頁
Something terrible had happened in Venice: Queer Reflection in <i>A Friend from England</i>	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部篇第4号		103頁～108頁
Women Hating: Christina Rossetti's Resistance to Gender Structure in 'Sister Poems'	単著	2004年3月	<i>Studies in English Literature</i> , Vol.45		1頁～21頁
映画における妊娠の表象	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部篇第5号		45頁～64頁
In Dreams Begins Responsibility: An Interview with Haruki Murakami	共著	2005年11月	<i>The Georgia Review</i> , Vol.59, No.3	Jonathan Ellis	548頁～567頁
'Queer' Balin in Tennyson's "Balin and Balan"	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部篇第6号		79頁～91頁
英国のヘリテージ映画	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部篇第7号		111頁～121頁

「今、ここ」の限界を越えて—『パワー・ブック』におけるストーリーの力	単著	2007年4月	『パワー・ブック』英宝社		295頁～316頁
“The Road from Colonos”における男性性とヘレニズム	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集文学部 篇第7号		61頁～70頁
<i>Twelfth Night</i> における「狂気」	単著	2008年3月	Evergreen第30号		19頁～27頁
翻訳					
パワー・ブック	単訳	2007年4月	英宝社		
その他(研究発表、講演)					
(研究発表) Something terrible had happened in Venice: Queer Reflection in <i>A Friend from England</i>	単独	2003年6月27日	European Intertexts (Naples)		
(講演) ポストコロニアリズムと翻訳理論	単独	2004年3月19日	第7回英語圏ポストコロニアル文学研究(中京大学)		
(研究発表) Writing “Underground”: Murakami Haruki’s Ethical Turn	単独	2005年9月2日	The Twenty-First Century Novel: Reading and Writing Contemporary Fiction (Lancaster)		
翻訳と書き換え—村上春樹の作品の英訳(シンポジウム、司会と講師)	単独	2006年4月22日	日本比較文学学会第21回中部大会(名古屋大学)		
The Myth of Motherhood and Gender Identity in Japanese Family	単独	2006年8月22日	Faculty of Political Science at Chian Mai University		
「キングス&クイーン」で考えたこと	単著	2006年9月6日	朝日新聞夕刊7面		
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	カナダ文学会理事				
2004年3月～現在	日本文学会中部支部理事				
2003年4月～現在	日本比較文学学会中部支部理事				

所属 文学部	職名 教授	氏名 増井典夫	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
		2006年4月～2008年4月	授業アンケート等を踏まえた上で、特に「国語学講義」での内容を大きく変更するなどの対応を取っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『概説現代日本のことば』(共著、朝倉書店)		2005年6月	明治以降大きな変化を遂げた日本語の語彙に注目して、近現代の語彙中心の概観を試みた、近現代の日本語を学ぶ学生のためのテキストとしてまとめたもの。第7章「和語の現代」執筆。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部教務委員長		2001年4月～2005年3月			
国文学科教務委員		2001年4月～2005年3月			
文学研究科教務委員長		2005年4月～2007年3月			
国文学専攻教務委員		2005年4月～2007年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『概説現代日本のことば』	共著	2005年6月	朝倉書店	佐藤武義、島田泰子、陳力衛、小林千草、田島優、犬飼守薫、増井典夫、大西拓一郎、揚妻祐樹	99頁～112頁
論文					
尾崎紅葉における形容語での「可」の用字－初期作品を中心に－	単著	2004年3月	愛知淑徳大学国語国文第27号		53頁～66頁
洒落本	単著	2004年9月	明治書院、日本語学臨時増刊号		142頁～148頁
近代語資料としての「真景累ヶ淵」「緑林門松竹」	単著	2006年3月	愛知淑徳大学国語国文第29号		25頁～35頁
近世後期上方語における“ちやつた”について	単著	2006年3月	東北大学、国語学研究第45号		26頁～34頁
近代語にみられる「トル」と「ヨル」について	単著	2007年3月	愛知淑徳大学国語国文第30号		53頁～65頁
近世後期上方語における“ちやつた”の扱いについて	単著	2007年10月	日本語の研究第3巻4号		82頁～85頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
日本語学会	会員				
日本言語学会	会員				
日本文芸研究会	会員				
社会言語科学学会	会員				
日本語文法学会	会員				



所属 文学部	職名 教授	氏名 松田 秀子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「ライフサイクルと健康」に意識調査と測定を導入		2005年4月～現在	ライフサイクルに合わせた運動と健康の維持・増進について、参考資料を作成・配布し、身近な問題を取り上げて講義している。具体的には、学生に意識調査を行い、体組成・骨密度を実際に測定し、フィードバックしている。さらに、その結果に基づいて授業を展開することにより、学生がより積極的に授業に参加できるように工夫している。授業アンケートの結果からも授業評価はよいことから、今後も継続していきたい。		
「スポーツ文化論」に視覚教材を活用		2006年4月～現在	毎時間、講義資料を配布し、話題になっているスポーツ事情を取り入れて、視聴覚教材を積極的に活用しながら展開している。また、学生がスポーツの文化に興味を持てるように、一部、クイズ形式の授業展開も導入することを試みた。授業アンケートの結果からみて総合的に学生が満足できる内容であったと思われる。		
「初等体育」に学習カードを活用		2007年4月～現在	小学校体育に関する基礎知識を学習し、運動領域の基本的な実践力を身につけることを目標に、毎時間テーマを決め授業を展開した。また、学生に毎時間、学習カードを記録・提出させ、それを個別指導することを試みた。授業アンケートの結果からみると学生の評価はよいが、初年度ということもあり、今後、より授業内容の充実を図りたい。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
大学体育指導者中央研修会「実技指導研修」の講師		2005年8月	大学体育指導者に対してバドミントンの「ゲームを楽しむ授業展開と効果的な指導方法について」講習を行い、大学体育第86号にその内容をまとめた。そして「大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発のための企画調査」報告書の中でユニークな授業実践として紹介された。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文学部学生生活委員会委員長		2003年4月～2005年3月			
教養教育委員会委員		2003年4月～現在			
人権擁護委員会委員		2004年4月～現在			
文学部学生生活委員会委員		2005年4月～現在			
文学部論集編集委員会委員		2005年4月～2006年3月			
健康科学教育センター長		2005年4月～2007年3月			
健康スポーツ教育センター長		2007年4月～現在			
大学協議会学部選出委員		2007年4月～現在			
バドミントン部顧問		2003年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
シニアからの健康づくりリーダーが語る生きがい生活ー	共著	2003年7月	生きがい研究会(株)スバル・アド	青山昌二、池上久子、加藤恵子、鶴原香代子、松田秀子、石川成道、井上千枝子、田中陽子、小澤教子、中島悦子、仁村良子、畠山孝子	21頁～30頁
論文					
大学生の体格と理想体型との関係	共著	2004年3月	大学保健体育研究第23号	池上久子、加藤恵子、鶴原香代子、松田秀子、小澤教子、田中陽子、青山昌二	1頁～7頁

大学生の健康と生活習慣	共著	2005年3月	大学保健体育研究第24号	松田秀子、池上久子、加藤恵子、鶴原香代子、田中陽子、青山昌二	9頁～25頁
ゲームを楽しむ授業展開と指導方法	単著	2005年12月	大学体育第86号第32巻2号		70頁～76頁
大学生の身体意識についてー理想とする体型と現実との関係ー	共著	2006年3月	愛知淑徳大学ー文化創造学部編ー第6号	鶴原香代子、池上久子、加藤恵子、松田秀子、田中陽子、青山昌二	51頁～64頁
男女大学生のサプリメント摂取に関する研究	共著	2006年3月	大学保健体育研究第25号	池上久子、松田秀子、鶴原香代子、田中陽子、中島悦子、青山昌二	11頁～20頁
骨粗鬆症の予防に関する基礎的研究	共著	2008年3月	大学保健体育研究第27号	池上久子、鶴原香代子、松田秀子、村本名史、加藤恵子、田中陽子、中島悦子	9頁～19頁

学会発表

大学生の身体意識についてー理想とする体型と現実との関係ー	共著	2004年11月13日	東海体育学会第52回大会	鶴原香代子、池上久子、加藤恵子、松田秀子、田中陽子、青山昌二	
男女大学生のサプリメント摂取状況	共著	2005年10月30日	東海体育学会第53回大会	池上久子、松田秀子、鶴原香代子、加藤恵子、田中陽子、中島悦子、青山昌二	
男女大学生のサプリメント摂取と食習慣について	共著	2006年11月26日	東海体育学会第54回大会	田中陽子、池上久子、加藤恵子、鶴原香代子、松田秀子、中島悦子	

専任教員の教育・研究業績(芸術分野や体育実技当の分野を担当する教員)

大学体育指導者中央研修会「実技指導研修」の講師	南山大学	2005年8月25日	「ゲームを楽しむ授業展開と指導方法について」講習会をした		
-------------------------	------	------------	------------------------------	--	--

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～2007年3月	東海地区大学体育連合評議員
2003年4月～現在	日本体育学会会員
2003年4月～現在	日本ゴルフ学会会員
2003年4月～現在	日本体育科教育学会会員
2003年4月～現在	日本体育測定学会会員
2005年9月～現在	日本バドミントン指導者連盟会員
2006年5月～現在	名古屋市スポーツ振興審議会委員

所属 文学部	職名 教授	氏名 三和義秀	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
授業目的、スケジュール、評価基準の明示	①2003年4月～現在	すべての担当科目において、第1回の授業時にガイダンスを行い、授業の学習目的、授業スケジュール、使用テキスト、成績評価の方法(定期試験、出席回数)を説明し、加えて定期試験終了時に問題、配点、及び模範解答を明示し、学生が試験結果を自己採点できるように努めている。	
電子メディア(教材)の活用	②2004年4月～現在	自作のテキストに加えて、授業のポイントをPowerPointに図形式でまとめ、視覚的な電子教材を援用しての授業内容の説明に努めた。	
グループによる学習内容確認時間の設定	③2007年4月～現在	プログラミングの実行結果など、学習内容を学生同士(グループ)で確認し合う時間を授業の中で設けている。授業アンケートにおいても、この時間の設定は学習内容の理解を促進し、意義ある時間という評価が多く、その成果を実感している。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
ネットワークリテラシーユビキタス社会におけるネットワーク活用のテクニック	2003年5月	文学部図書館情報学科1年生の教職課程「情報」を取得するための教科に関する必修科目である「ネットワークリテラシ」、及び全学のコンピュータ活用科目である「ネットワーク技術入門」におけるネットワークの基礎知識、HTMLの仕組みとホームページ作成、及びCGIプログラミングについて効果的に教授し、例題や練習問題を掲載した実習用テキストである。	
情報技術基礎Ⅰ－情報科学の基礎からInternet、Excelまで	2005年3月	全学のコンピュータ活用科目である「情報技術基礎Ⅰ」におけるコンピュータ技術、ネットワーク技術を利用する上で、利用者が持つべき必要最小限の専門知識について解説した実習用テキストである。	
情報技術基礎Ⅱ－Windows、Word、PowerPointを中心に	2005年3月	全学のコンピュータ活用科目である「情報技術基礎Ⅰ」におけるWindows XPの環境を前提に、基本的なパッケージソフトウェアの処理操作方法について利用者が持つべき必要最小限の専門知識について解説した実習用テキストである。	
例題で学ぶC言語プログラミングのテクニック	2005年3月	文学部図書館情報学科3、4年生の専門科目である「プログラム設計応用Ⅰ(C)」におけるC言語の基本文法を一通り学習し、その集大成として成績処理システムを試作して、C言語の知識を体系的に習得できる実習用テキストである。	
Excelで学ぶやさしい統計処理のテクニック 第2版	2005年10月	文学部図書館情報学科3、4年生の専門科目である「データ管理論Ⅰ(統計処理)」における統計処理の知識、及びExcelを統計処理に活用する方法を効果的に教授するための例題形式の実習用テキストである。	
ネットワークリテラシ入門	2008年3月	図書館情報学科の専門科目である「ネットワークリテラシ」にて使用するテキストとして、現代のWeb 2.0を背景とするコンピュータネットワークの最新の知識と技術を対象として、情報倫理を含めた大学生として持つべきネットワークリテラシを解説したテキストである。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
講演 The Actual State and the Existing Problems of Computer Education in Japanese University: With Emphasis on the Case of Aichi Shukutoku University in Japan	2005年8月19日	韓国の晋州教育大学にて開催されたConference of Korean Association of Information Educationにおいて、愛知淑徳大学のコンピュータ活用科目の目的、特徴、評価、課題等について講演を行った。	
教科「情報」の修得内容に関する実態調査: 図書館情報学科新入生を対象として	2006年9月6日	私立大学情報教育協会主催平成18年度大学教育・情報戦略大会において、高等学校での教科「情報」の履修状況、及び大学入学時におけるコンピュータスキルの実態調査の結果と大学での情報教育の課題について発表した(小林久恵・西荒井学との共同研究)	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
情報システム支援部長	2006年4月～		
情報教育センター長	2006年4月～		

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
ネットワークリテラシーユビキタス 社会におけるネットワーク活用の テクニック	単著	2003年5月	共立出版		141頁
情報技術基礎Ⅰ－情報科学の 基礎からInternet、Excelまで－	共著	2005年3月	共立出版	西荒井学、小林久恵	6頁～18頁
情報技術基礎Ⅱ－Windows、 Word、PowerPointを中心に－	共著	2005年3月	共立出版	西荒井学、小林久恵	1頁～29頁
例題で学ぶC言語－プログラミング のテクニック－	共著	2005年5月	共立出版	小林久恵	191頁
図書館・情報学研究入門	共著	2005年10月	勁草書房	三田図書館・情報学会編	95頁～98頁
Excelで学ぶやさしい統計処理 のテクニック 第2版	単著	2005年10月	共立出版		121頁
コンピュータ入門Ⅰ－Windows 操作からWord、PowerPointまで －	共著	2007年4月	共立出版	西荒井学・小林久恵	214頁
コンピュータ入門Ⅱ－コンピュ ータの基礎知識からExcelと統計処 理まで－	共著	2007年4月	共立出版	西荒井学・小林久恵	187頁
ネットワークリテラシ入門	単著	2008年3月	共立出版		127頁
<b>論文</b>					
The Actual State and the Existing Problems of Computer Education in Japanese University: With Emphasis on the Case of Aichi Shukutoku University in Japan	単著	2005年8月	Korean Association of Information Education・ (Proceedings of the 12th KAIE Summer Conference)		107頁～113頁
高等学校における教科「情報」 の修得内容に関する実態調査: 2006年度図書館情報学科新入 生を対象として	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集No.32	小林久恵・西荒井学	11頁～24頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1990年4月～現在	情報処理学会				
1990年4月～現在	情報科学技術協会				
1990年4月～現在	三田図書館・情報学会 1997年4月よりプログラム委員会委員				
2001年4月～現在	日本図書館情報学会				

所属 文学部	職名 教授	氏名 村主朋英	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
複合的なメディア教育の実践(情報学IIIおよびIV=図書館と情報検索の歴史)		2003年4月～現在	性格・機能の異なる教材を有機的に構成している。(1)テキストブック(歴史叙述および論考) (2)年表(自作;主要事項の整理および時系列の因果関係と空間軸上の相関関係の把握・知識発見のためのtool) (3)視覚資料集の映写(直観的理解の源泉,知識発見の素材)を毎時必ず併用,総合的・多角的な把握を促す。理解の補助としてTV・映画等の番組ソフトも必要に応じて使用する(1と3の交叉した性格と位置付ける)。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
図書館情報学年表		2003年4月～現在	人類の知識の組織化に関する総合的年表。知識・情報管理的営為を中心とし,情報技術及び図書館・情報サービスの発達史を網羅。(丸善刊行「図書館情報学ハンドブック」第2版,1999年のための原稿を再構成・修正・更新。)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
図書館・情報学研究入門	共著	2005年10月	勁草書房	三田図書館、情報学会編	担当部分「3.7 情報検索の歴史」85頁～86頁;同学会編集委員として全体構成企画に関与。
論文					
Library and information science education in Japan: Results of a 2005 survey of Shisho Certification	共著	2006年夏	Association for Library and Information Science Education, Journal of Education for Library and Information Science, Vol.47, No.3	Keita Tsuji, Yuko Yoshida, Makiko Miwa, Hiroya Takeuchi, Tomohide Muranushi and Masami Shibata	238頁～255頁
Electronic journals and their unbundled functions in scholarly communication: Views and utilization by scientific, technical and medical researchers in Japan	共著	2007年9月	Information Processing & Management, Vol.43, No.5	Keiko Kurata, Mamiko Matsubayashi, Shinji Mine, Tomohide Muranushi, and Shuichi Ueda	1402頁～1415頁
その他					
〔研究発表〕					
日本における図書館情報学・司書・司書教諭教育の現状	共著	2004年5月22日	青山学院大学、2004年度日本図書館情報学会春季研究会発表要綱	三輪真木子、村主朋英、上田修一、竹内比呂也、吉田右子、柴田正美	35頁～38頁
司書・司書教諭資格取得希望学生の意識についての調査	共著	2005年5月18日	専修大学、2005年度日本図書館情報学会春季研究会発表要綱	竹内比呂也、辻慶太、三輪真木子、村主朋英、吉田右子、柴田正美	43頁～46頁
大学における司書・司書教諭教育の実態	共著	2005年5月18日	専修大学、2005年度日本図書館情報学会春季研究会発表要綱	三輪真木子、村主朋英、竹内比呂也、吉田右子、辻慶太、柴田正美	39頁～42頁
大学における司書教諭資格科目の現状	共著	2005年8月20日～21日	日本教育情報学会第21回年会要綱	三輪真木子、村主朋英、竹内比呂也、吉田右子、辻慶太、柴田正美	頁～ 頁

司書資格科目担当教員に対する意識調査	共著	2005年10月22日～23日	慶應義塾大学、日本図書館情報学会、三田図書館・情報学会合同研究大会発表要綱2005	辻慶太、吉田右子、三輪眞木子、竹内比呂也、村主朋英、柴田正美	21頁～24頁
動向レビュー 情報学の知識構造を描き出す 試み：ジーンズによるKnowledge Map研究の概要	単著	2008年3月20日	国立国会図書館関西館図書館協力課、カレント・ウェアネスNo.295		23頁～27頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
学会 1999年4月～2005年3月 2005年4月～現在	(一般会員としての所属については省略) 日本図書館情報学会常任理事、事務局長 日本図書館情報学会理事				

所属 文学部	職名 教授	氏名 山崎茂明	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
学生による授業評価(情報メディア論)		2005年6月			
学生による授業評価(情報学:科学コミュニケーション)		2005年11月			
学生による授業評価(情報メディア論)		2006年6月			
学生による授業評価(情報学:科学コミュニケーション)		2006年11月			
学生による授業評価(情報メディア論)		2007年6月			
学生による授業評価(情報学:科学コミュニケーション)		2007年11月			
2 作成した教科書、教材、参考書					
Practical English for librarians & information specialists		2003年4月	図書館訪問、手紙・メール、就職情報を読む、図書館HPを見る		
Practical English for librarians & information specialists		2004年4月	図書館訪問、手紙・メール、就職情報を読む、図書館HPを見る		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文投稿のインフォマティクス	単著	2003年4月	中外医学社		167頁
インパクトファクターを解き明かす	単著	2004年3月	情報科学技術協会		51頁
看護研究のための文献検索ガイド(第4版)	共著	2005年7月	日本看護協会出版会	山崎茂明、六本木淑恵	3頁～34頁、59頁～74頁、137頁～147頁、169頁～204頁
パブリッシュ・オア・ペリッシュ	単著	2007年11月	みすず書房		183頁
論文					
科学発表倫理の確立	単著	2003年4月	応用物理第72巻第4号		466頁～470頁
科学の不正行為と出版倫理	単著	2003年5月	実験医学第21巻第7号		944頁～947頁
Comparison between impact factors and citations in evidence-based practice guidelines	共著	2003年8月	JAMA第290巻第6号	Nakayama T., Fukui T., Fukuhara S., Tsutani K., Yamazaki S.	755頁～756頁
Persentages reports of clinical trials, written in seven non-English languages, that have structured abstracts	共著	2003年12月	General Medicine第4巻第1号	Nakayama T., Yamazaki S.	7頁～10頁
Learning from each other: 医学情報サービス研究大会を振り返って	単著	2003年12月	医学図書館第50巻第4号		348頁～352頁
インパクトファクターとは	単著	2004年2月	医学のあゆみ第208巻第7号		624頁～625頁
インパクトファクターを考える	単著	2004年2月	医学のあゆみ第208巻第8号		680頁～681頁
研究者の業績評価に応用できるか	単著	2004年2月	医学のあゆみ第208巻第9号		758頁～759頁
医学図書館編集委員長時代を振り返って	単著	2004年3月	医学図書館第51巻第1号		29頁～32頁
EBM時代の総合医学雑誌	単著	2004年4月	EBMジャーナル第5巻第4号		482頁～489頁
医学雑誌の世界で起こっていること	単著	2004年10月	クリニカルプラクティス第23巻第10号		1014頁～1017頁

インパクトファクターの論点	単著	2004年11月	クリニカルプラクティス第23巻第11号		1126頁～1129頁
Lancet創刊者Thomas Wakleyへの旅(上)	単著	2004年11月	日本医事新報第4204号		43頁～47頁
Lancet創刊者Thomas Wakleyへの旅(下)	単著	2004年12月	日本医事新報第4205号		78頁～80頁
インパクトファクターのこれからを考える	単著	2004年12月	クリニカルプラクティス第23巻第12号		1258頁～1261頁
Adoption of structured abstracts by general journals and format for a structured abstract	共著	2005年4月	Journal of Medical Library Association第93巻第2号	Nakayama T., Hirai N., Yamazaki S., Naito M.	237頁～242頁
Nature Medicine論文ねつ造の背景を考える	単著	2005年12月	化学第60巻第12号		36頁～39頁
文献からみた医師・患者関係	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇第31巻		37頁～44頁
韓国ES細胞ねつ造事件の全貌	単著	2006年4月	化学第61巻第4号		16頁～21頁
公正な科学研究が私たちの生活を支える	単著	2006年6月	三田評論		42頁～45頁
オーサーシップ: 著者になるのは誰か	単著	2006年7月	ファルマシア第42巻第7号		727頁～730頁
19世紀フィラデルフィア医学ジャーナリズムの展開	単著	2007年5月	情報管理第50巻第2号		87頁～96頁
翻訳					
ORI研究倫理入門	単訳	2005年1月	丸善		163頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年6月	Share of reports of clinical trials, written in seven non-English languages, that have structured abstract共同発表 (Bath, UK)				
2005年4月～2006年3月	大阪大学医学研究科Scientific Misconduct検討委員会委員				
2005年4月～2006年3月	産業技術総合研究所研究ミスマンダクト調査委員会委員				
2006年4月～現在	大阪大学医学研究科研究公正委員会委員				
2004年4月～現在	Journal of Library and Information Science編集委員長(学科紀要)				



所属 文学部	職名 教授	氏名 山田幹郎 (耕士)	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
T.A. 制度の活用		2001年4月～2004年3月	名古屋大学言語文化科目(英語)に大学院博士後期課程の学生を毎年T.A.に採用して授業の活性化を図った。		
ゼミ制度の活用		2004年4月～現在	愛知淑徳大学文学部英文学科3年ゼミ生と具体的な教育研究成果をあげることにより授業の活性化を図った。		
学生参加型授業の導入		2004年4月～現在	「授業アンケート」結果を重視し、講義科目に学生による課題調査報告を部分的に導入、各授業の最後に設問形式の小ペーパーも書かせる等により授業の活性化を図った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
新訳 お婆さん物語 ジョージ・ピール作		2005年8月12日	前記ゼミ制度の活用の成果でゼミ生との共訳(私家版、33頁)。		
新訳 ベイコン坊とバンゲイ坊 ロバート・グリーン作		2007年3月18日	同ゼミ制度の活用の成果でゼミ生との共訳(私家版、23頁)。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学研究助成委員会委員		2004年4月～2006年3月	委員会活動に従事。		
名古屋大学英文学会講演		2004年4月17日	「シェイクスピアを読むこと」について話した。		
名古屋大学国際開発研究科博士論文副査		2005年3月25日	在職中主査を務めた国際コミュニケーション専攻生の学位記授与に出席。		
愛知淑徳大学文学部英文学科主任		2005年4月～2007年3月	学科運営に専念。		
台湾大学で講演		2005年6月10日	台湾大学のシェイクスピア学者彭鏡禧教授(Prof. Ching-His Perng)に招かれ、「Shakespeare and the Swan」について講演、質疑応答をうけた。		
文学部長		2007年4月～現在	学部運営に専念、併せて大学協議会等の委員会活動に従事。2008年3月12日には文学部全構成員による「文学部を語る会」を開催。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
シェイクスピアと白鳥の歌	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第30号		35頁～50頁
パリス伯爵考	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第32号		37頁～53頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
学会 1986年10月～現在		(現在、一般会員として所属するものは省略) 日本英文学会中部支部理事(2002年10月～2006年9月、副支部長)			

所属 文学部	職名 准教授	氏名 若山真幸	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
上越教育大学研究プロジェクト「小学校における英語教育カリキュラムの開発研究」		2003年7月17日	小学校での英語活動に向けてのインターネットやコンピュータを使った教材開発・研究		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
[愛知淑徳大学英語教育運営委員会関連]					
独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築		2005年4月～2006年3月	平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(平成16年度、平成17年度も同課題名で採択)		
全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充		2005年4月～2007年3月	愛知淑徳大学平成17年度研究助成 特別教育研究(平成18年度まで継続)		
多文化共生を目指した発信型全学英語教育 モジュール化された体系的カリキュラム開発		2005年8月～2008年3月	平成17年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策	共著	2003年7月	平成14年度報告書(科学研究費補助金基盤研究B(平成11～14年度)、研究代表者:齋藤九一)	齋藤九一、北條礼子他	全76頁
Some Issues on Linking Theory: the Argument Structure of Reflexive and Experiencer Verbs	単著	2004年3月	上越教育大学研究紀要第23巻第2号		597頁～609頁
A Historical and Semantic Approach to Lexical Passives	単著	2004年9月	上越教育大学研究紀要第24巻第1号		149頁～160頁
Faithfulness and Markedness in the Case System	共著	2007年3月	Exploring the Universe of Language	天野政千代、田中智之他	419頁～430頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2007年3月 2007年4月～現在		日本英語学会事務局財務係、新人賞担当書記科学研究費補助金基盤研究B「公立小学校への英語教育導入に伴う諸問題とその対策」、研究代表者:齋藤九一			

所属 文学部	職名 教授	氏名 渡辺かよ子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
			毎回授業の最後に小レポートを課して受講者の講義内容に関する理解把握と関心喚起に努め、それらを中間・期末の課題レポートと共にポートフォリオ評価として、各受講者の当該学期の学習内容の確認と成長促進を図っている。
2 作成した教科書、教材、参考書			
教育課程論	2003年9月		本学教職課程担当の梅村、小木曾と分担して、教育課程授業用テキストを執筆した。
新版子どもの教育の歴史	2008年3月		教育史の教科書を分担執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
メンタリング～地域から学校から、子どもの成長について考えてみませんか	2004年10月19日、10月26日、11月2日、11月16日、11月30日、12月7日		名古屋市港生涯学習センター主催講座(於:港生涯学習センター)
メンター制度の効果と課題	2004年11月7日		広島市教育委員会メンター制度シンポジウム基調講演(於:広島市青少年センターホール)
大学におけるピア・エディケーションの可能性:メンタリングの視点から	2004年12月3日		愛媛大学教育学生支援機構主催、学生による学生支援シンポジウム、基調講演(「特色ある大学教育支援プログラム」採択の事例に学ぶ)(於:愛媛大学共通教育大講義室)
ピアサポートによる学生の自己成長	2005年3月2日		産能短期大学能率科主催、特色ある大学教育支援プログラム、採択記念フォーラム、キャンパスコミュニティを活性化するキャンパスサービス学習、タテ・よこ・nanameのピアサポート、講話(於:産能短期大学)
メンター制度の未来	2005年12月4日		広島市教育委員会主催、広島市青少年メンター制度第2回定期研修会講演(於:アステールプラザ)
国立大学法人京都大学大学院教育学研究科・教育学部非常勤講師	2006年4月～2007年3月(2006年8月1日～3日)		「比較教育学講義」(集中)においてメンタリング運動の成果と課題に関する概説講義を行った。
国立大学法人大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻特任教授	2006年6月～2007年3月		文部科学省「魅力ある大学院教育イニシアティブ」大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成プログラム」事務局の運営助言を行った。
国立大学法人九州大学高等教育開発推進センター非常勤講師	2006年10月～2007年3月(2006年10月14日)		21世紀プログラム専攻教育科目「課題提示科目Ⅲ」において「教養論の歴史と課題:1930年代の教養論を手掛かりに」と題した講義を行った。
メンター制度について	2006年12月3日		広島市教育委員会主催、広島市青少年メンター制度第2回定期研修会講演(於:広島市中区地域福祉センター)
メンタリング・プログラムの歴史・理論・実践・課題	2007年3月17日		経営行動科学学会(JAAS)中部部会第1回ワークショップ(於:愛知学院大学栄サテライトセンター)
メンタリング・プログラムの概要と成果	2007年6月22日		<横浜型キャリアコンソーシアム庁内検討学習会:市民が一對一で青少年の自立を支援する横浜型メンタリング・プログラムの構築に向けて>講義(於:横浜市研修センター)
メンター制度について	2007年6月29日		生駒郡人権教育推進連絡協議会総会記念講演(於:安堵町役場会議室)
地域コミュニティにおける青少年育成のためのメンタリング・プログラム:各国の動向と成果に関する理論的検討	2007年7月1日		日本コミュニティ心理学会第10回大会、自主ミニシンポジウム『メンタリング・プログラムによるコミュニティ再生の可能性を探る』シンポジスト(於:九州大学西新プラザ)、『プログラム・論文集 日本コミュニティ心理学会第10回大会』28頁～29頁。
<メンタリング・プログラムと生涯発達支援>メンタリング運動の世界的動向と成果、その基礎理論	2007年8月29日		日本教育学会第66回大会、ラウンドテーブル『メンタリング・プログラムと生涯発達支援』企画・提案(於:慶應義塾大学)、『日本教育学会第66回大会発表要旨集録』358頁～359頁。
海外におけるメンター制度の現状について	2007年12月2日		広島市教育委員会主催、広島市青少年メンター制度第2回定期研修会講演(於:ホテルセンチュリー21、広島)
4 その他教育活動上特記すべき事項			
教職課程委員会	2003年4月～2008年3月		教職課程委員会の委員として、教職課程の運営に参加した。
教養教育委員	2003年4月～2004年3月		全学の教養教育委員会委員として、教養科目のカリキュラム編成に参加した。

人権問題相談員	2003年4月～2006年3月	学内の人権擁護に関する相談委員を務めた。
現代社会学部教務委員	2004年4月～2006年3月	現代社会学部教務委員として、時間割編成に関する教務を行った。
現代社会研究科教務委員	2005年4月～2006年3月	現代社会研究科教務委員として、時間割編成に関する教務を行った。
現代社会学部紀要編集委員	2005年4月～2006年3月	現代社会学部の紀要『愛知淑徳大学論集—現代社会学部・現代社会研究科篇—』の編集に参加した。
全学履習制度検討委員会委員	2005年4月～2006年3月	全学の履修制度検討委員会の委員を務めた。
文学部論集編集委員	2007年4月～現在	文学部論集の編集委員を務めている。
文学部FD委員	2007年4月～現在	文学部FD委員会委員を務めている。
教職・学芸員教育センター運営委員	2007年4月～現在	教職・学芸員教育センターの運営に参加している。
将来計画委員会第一委員会委員	2007年10月～現在	第一委員会委員を務めている。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
コミュニティ心理学ハンドブック	共著	2007年6月	東京大学出版会(全811頁)担当部分:「第Ⅲ章介入戦略と方法7メンタリング・プログラム」	日本コミュニティ心理学会編	245頁～255頁
新版子どもの教育の歴史	共著	2008年3月	名古屋大学出版会(全316頁)担当部分:「第3章現代の教育」のうち「20世紀の世界と子ども」「20世紀の子ども観と教育改革」	江藤恭二監修、篠田弘、鈴木正幸、加藤詔士、吉川卓治編	115頁～129頁
論文					
〈研究ノート〉米国高等教育におけるメンタリング・プログラムの研究成果と意義	単著	2003年6月	教育学研究第70巻第2号		213頁～221頁
メンタリング・プログラムと企業	単著	2004年3月	言語文化、愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会、第12号		49頁～63頁
米国の世代間メンタリング・プログラム	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—第4号		189頁～198頁
米英のメンタリング運動と生涯発達支援の革新	単著	2004年11月	日本生涯教育学会年報第25号		185頁～201頁
高等教育におけるメンタリング・プログラムの構造的特徴と類型	単著	2005年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集第10号		83頁～94頁
英国の青少年向け就業支援型メンタリング・プログラム	単著	2006年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集第11号		33頁～46頁
米国におけるメンタリング運動の誕生と発展の素描:BBBS運動を中心に	単著	2006年3月	現代社会研究科研究報告第1号		89頁～101頁
メンタリング概念生成史の試み: Mentorからmentorへ	単著	2006年3月	愛知淑徳大学、学び舎:教職課程研究第1号		60頁～69頁
オーストラリアにおける青少年向けメンタリング運動	単著	2006年7月	日本生涯教育学会論集27		121頁～130頁
米英豪における技術者向けメンタリング・プログラム	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集—現代社会学部・現代社会研究科篇—第12号		73頁～86頁
教員の初任者研修とメンタリングに関する比較考察:世界と日本の比較の視点から	共著	2007年3月	愛知淑徳大学、学び舎:教職課程研究第2号	大久保義男	4頁～13頁
英国の技術者養成におけるPDとメンタリング:環境・エネルギー工学関連の専門職協会を中心に	単著	2007年3月	愛知淑徳大学、現代社会研究科研究報告第2号		53頁～66頁
日本におけるメンタリング運動:広島市青少年メンター制度の事例を中心に	単著	2007年7月	日本生涯教育学会論集28		31頁～40頁

社会的包摂に向けたメンタリング運動:米国の特別な支援を必要とする青少年のためのプログラムを中心に	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－第33号		19頁～30頁
学校型メンタリング・プログラムと地域の人々	単著	2008年3月	愛知淑徳大学、学び舎:教職課程研究第3号		52頁～61頁
その他(学会発表)					
高等教育におけるメンタリング・プログラムの構造的特徴と類型	単著	2003年5月24日(神戸大学)	日本高等教育学会第6回大会発表要旨集		62頁～63頁
メンタリング・プログラムと企業	単著	2003年6月28日(玉川大学)	日本比較教育学会第39回大会発表要旨集録		136頁～137頁
社会的資本の増強としてのメンタリング運動と教育	単著	2003年8月26日(早稲田大学)	日本教育学会第62回大会発表要旨集録		64頁～65頁
米英のメンタリング運動と日本	単著	2003年11月30日(常葉学園大学)	日本生涯教育学会第24回大会発表要旨集録		15頁
各国のメンタリング・プログラムの成果と課題	単著	2004年6月27日(名古屋大学)	日本比較教育学会第40回大会発表要旨集録		226頁～227頁
米国のメンタリング運動と大学生:GEAR UPを中心に	単著	2004年7月24日(國學院大学)	日本高等教育学会第7回大会発表要旨集録		44頁～45頁
メンタリング運動における正義とケアの統合	単著	2004年8月26日(北海学園大学)	日本教育学会第63回大会発表要旨集録		98頁～99頁
Theoretical Justification and Practice of Mentoring Program in Japan	共著	2005年6月11日(米国University of Illinois at Urbana-Champaign)	SCRA (Society for Community Research and Action) 10th Biennial Conference, Conference Program	Nakashima, K. & Watanabe, N.	128頁
英国の青少年就業支援のためのメンタリング・プログラム	単著	2005年8月25日(東京学芸大学)	日本教育学会第64回大会発表要旨集録		150頁～151頁
20世紀アメリカ合衆国のメンタリング運動の誕生と展開	単著	2005年10月9日(東北大学)	教育史学会第49回大会発表要旨集録		160頁～161頁
オーストラリアにおけるメンタリング運動	単著	2005年10月30日(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター)	日本生涯教育学会第26回大会発表要旨集録		30頁
米国における教員養成のためのメンタリング・プログラム	単著	2006年6月3日(国立大学財務・経営センター)	日本高等教育学会第9回大会発表要旨集録		46頁～47頁
各国の教員養成におけるメンタリング・プログラム	単著	2006年6月26日(広島大学)	日本比較教育学会第42回大会発表要旨集録		212頁～213頁
メンタリング・プログラムの成果と評価方法	単著	2006年8月24日(東北大学)	日本教育学会第65回大会発表要旨集録		122頁～123頁
日本におけるメンタリング運動の誕生	単著	2006年9月16日(大東文化大学)	教育史学会第50回大会発表要旨集録		53頁～54頁
日本におけるメンタリング運動:広島市青少年メンター制度の事例を中心に	単著	2006年10月7日(常磐大学)	日本生涯教育学会第27回大会発表要旨集録		9頁
各国の理工系人材養成におけるメンタリング・プログラム	単著	2007年6月30日(筑波大学)	日本比較教育学会第43回大会発表要旨集録		138頁～139頁
社会的排除への対応としてのメンタリング・プログラムの成果と課題	単著	2007年8月29日(慶應義塾大学)	日本教育学会第66回大会発表要旨集録		160頁～161頁
米国のメンタリング運動における学校の役割	単著	2007年11月10日(国立教育政策研究所社会教育実践教育センター)	日本生涯教育学会第28回大会発表要旨集録		23頁
翻訳					
エイブラハム・フレックスナー『大学論:アメリカ、イギリス、ドイツ』	共訳	2005年11月	玉川大学出版部(全350頁)	坂本辰朗、羽田積男、犬塚典子(分担翻訳)	266頁～345頁
その他(論稿他)					

メンター制度シンポジウム報告書	共著	2004年11月	広島市教育委員会(全40頁)担当部分:「メンター制度の効果と課題～米国の事例を通して」	秋葉忠利、辻修壮、松陰正行、手嶋理香、波田幸恵、津村俊充、黒川浩明	3頁～17頁
ピア・エデュケーションの可能性(『学生による学生支援読本』第一巻)	共著	2005年3月	愛媛大学教育・学生支援機構、担当部分:「大学におけるピア・エデュケーションの可能性:メンタリングの視点から」	内野悌司、小島郷子、佐藤浩章	6頁～28頁
メンタリング運動	単著	2006年1月	『日本生涯学習研究e事典』(日本生涯教育学会編)		<a href="http://eiiten.javea.or.jp/">http://eiiten.javea.or.jp/</a>
メンターの語源(「世界のメンタリング」連載第1回)	単著	2006年8月	『Mentoring News』Vol.1(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		3頁
メンタリングとメンタリング・プログラム(「世界のメンタリング」連載第2回)	単著	2006年9月	『Mentoring News』Vol.2(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		4頁
メンタリングの成果(「世界のメンタリング」連載第3回)	単著	2006年10月	『Mentoring News』Vol.3(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		4頁
資料:小学校における教科教育(&コラム編集)(小学校教科教育への提言ー明日の楽しい学校をめざしてー)	共著(分担執筆)	2006年10月	『愛知淑徳大学「教育を語る会」ブックレットNo.2小学校教科教育への提言ー明日の楽しい学校をめざしてー』(愛知淑徳大学「教育を語る会」)	佐藤実芳	67頁～70頁(全71頁)
「米国におけるメンタリング」(「世界のメンタリング」連載第4回)	単著	2006年10月	『Mentoring News』Vol.4(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		4頁～7頁
英国におけるメンタリング(「世界のメンタリング」連載第5回)	単著	2006年11月	『Mentoring News』Vol.5(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		10頁～12頁
オーストラリアにおけるメンタリング(「世界のメンタリング」連載第6回)	単著	2006年12月	『Mentoring News』Vol.6(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		10頁～12頁
日本におけるメンタリング(「世界のメンタリング」連載第7回)	単著	2007年1月	『Mentoring News』Vol.7(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		10頁～12頁
メンタリングの未来(「世界のメンタリング」連載第8回)	単著	2007年3月	『Mentoring News』Vol.8(大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻「実践力向上のメンター制とPBリーダー養成」プログラム事務局)		5頁～8頁
メンタリングガイドブック(メンタリング～こころのケア講座～)	共監修	2007年3月	ライオンズクラブ国際協会335-A地区	渡辺直登、中島薫	全13頁

実践力向上のメンター制とPB リーダー養成プログラム:平成18 年度活動成果報告書(文部科学 省「魅力ある大学院教育」イニシ アティブ(2005-2006年)	共著	2007年3月	大阪大学大学院工学研究 科環境・エネルギー工学専 攻(全282頁)担当部分:「第 7章世界における本プログラ ムの位置づけ」	西嶋茂宏、小林紀、林洋一 郎、中島薫、齊藤修	173頁～190頁
カゴメ メンタリングプログラム ハンドブック	共編著	2007年9月	組織心理測定研究所	渡辺直登、中島薫、佐野達	全24頁
キリン メンタリングプログラム ハンドブック (理論編)	共編著	2007年11月	組織心理測定研究所	渡辺直登、中島薫、佐野達	全32頁
キリン メンタリングプログラム ハンドブック (実践編)	共編著	2007年12月	組織心理測定研究所	渡辺直登、中島薫、佐野達	全34頁
オーストラリアにおけるメンタリ ング運動	単著	2008年2月	日本生涯教育学会、日本 生涯学習研究e事典		<a href="http://ejiten.iavea.or.jp/">http://ejiten.iavea.or.jp/</a>
広島市青少年メンター制度とメ ンタリング運動	単著	2008年2月	日本生涯教育学会、日本 生涯学習研究e事典		<a href="http://ejiten.iavea.or.jp/">http://ejiten.iavea.or.jp/</a>

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年4月～2008年3月	名古屋市青少年問題協議会委員
2002年5月～2005年12月	『大学史研究』(大学史研究会)編集委員
2007年12月～現在	広島市青少年メンター制度アドバイザー

# 現代社会学部

渥美正子	87	清水洋	114
石田好江	89	清水裕二	116
石田米和	91	高橋敏郎	120
石橋千鶴子	92	竹村弘	123
太田浩司	94	谷沢明	124
大嶽浩	96	垂井洋蔵	126
大西誠	97	千葉善根	127
岡本晴彦	98	辻紘良	128
小川明子	101	西尾林太郎	130
小田茂一	103	秦忠夫	131
親松和浩	104	日色真帆	132
河辺泰宏	106	藤井麻湖	133
五島幸一	108	道尾淳子	135
齋藤基之	109	山田登世子	138
榊原國城	111	吉田邦彦	140
坂元多	113		





所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 渥美正子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
視聴覚教材を用いる 実践的な演習をとり入れる 見学の機会をつくる	2002年～現在	授業アンケートの結果、実例を写真やDVDで見たり、観察調査など実践的レポートを作成したことへの関心が高かったため、講義のなかに視聴覚教材や実践的演習をとり入れて学生の学習意欲を高めるようにしている。ゼミでは、レジュメ作成能力、パワーポイントでのプレゼン能力を高める指導をしている。またできるだけ多くの建築物を見学すること、住み手・つくり手と直接コミュニケーションをとることができる機会をつくるようにしている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
パワーポイントによる教材作成 DVDによる視聴覚教材作成	2002年～現在	住宅・住宅地・各種施設の写真や統計資料をできるだけ多くとり入れたパワーポイント教材を作成した。また数分程度に編集した動画も用い学習効果を高めるようにしている。これらの内容についての学生の反応、評価をみながら常に内容の修正を行うようにしている。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
「木の香る環境づくり県民運動」シンポジウム (主催:岐阜県)でパネリストとして発表	2005年2月16日	岐阜県主催「木の香る環境づくり県民運動」シンポジウムにおけるパネルディスカッション「木と住まい」で木に対する理解を深めるための教育面での方策について発表した(於:関市上之保木木センター)。本学では、日本で木の住まいが成立する背景や木の特性についての理解を深める内容の講義を展開していること、さらに林業が盛んである岐阜県加子母村で毎年ゼミ合宿を行い、木の住空間での居住体験及び地域に根ざした木造建築の見学を実施していることを報告し、こうした住教育は、学生の意識を向上させ木材をはじめとする日本の伝統的な自然素材への認識を高める効果があることを述べた。このシンポの内容については岐阜新聞(2月26日付)で特集が組まれた。	
「いきいき地域居住研究会・愛知」設立記念講演会で「高齢者の地域居住を支える住まい・施設のあり方ー高齢者向け住宅政策について」と題して発表	2005年11月5日	高齢者の住宅リフォームや居住施設のあり方について調査研究を行うことを目的に発足した「いきいき地域居住研究会・愛知」設立記念講演会のパネルディスカッション「高齢者の地域居住を支える住まい・施設のあり方」にて、高齢者向け住宅政策の現状と課題について発表した(於:日本福祉大学名古屋キャンパス)。	
「いきいき地域居住研究会・愛知」主催の講演会で「高齢者の地域居住の新動向① 岐阜市における高齢者グループリビングの試み」と題して発表	2006年3月11日	「いきいき地域居住研究会・愛知」主催の講演会にて、高齢者住宅の新しい試みである岐阜市のグループリビングの事例について講演した(於:日本福祉大学名古屋キャンパス)	
愛知県西三河事務所、東三河事務所消費生活講座及び一宮市消費生活講座での講師	2004年1月21日、11月30日、 2005年3月28日、6月21日、 11月9日、11月15日 2007年2月15日	豊かな住生活実現のための消費者教育として「ライフスタイルと生活財」「住まいは暮らしの器ー高齢期の住まいを考える」をテーマに講義を行った。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
加子母村ゼミ合宿	2001年8月～現在	日本でも有数の林産県である岐阜県の加子母村で、毎年ゼミ合宿を行っている。木造住宅や施設・木材加工現場・森林の見学や地産地消の生活体験などのプログラムで、講義で得た知識を体験的に理解することを目的としている。毎年の行事となっているため、村民との交流も深まり、卒論につながる学生もいる。この活動は毎年中日新聞(東濃版)に紹介されている。	
「人にやさしい街づくり講座」(愛知県)への参加	2004年8月～	愛知県が毎年行っている「人にやさしい街づくり講座」への参加を促している。グループでのフィールドワークがあり、誰もが住みやすい街を考える学習の場として効果的であり、引き続き卒論につなげていくことができる。	
<b>II 研究活動</b>			

著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
<b>論文</b>					
<b>〈論文〉</b>					
地方戸建住宅居住者の住宅選 択行動に関する研究(第1報) 新築戸建住宅取得者の施工業 者選択	共著	2004年3月	愛知淑徳大学現代社会学 部論集第9号	渥美正子、新田米子	59頁～76頁
地方戸建住宅居住者の住宅選 択行動に関する研究(第2報) 新築戸建住宅取得者による住宅 と施工業者に対する評価	共著	2004年3月	岐阜聖徳学園大学短期大 学部紀要第36集	新田米子、渥美正子	1頁～17頁
<b>〈報告書、その他〉</b>					
第9回人にやさしい街づくり賞の 記録	共著	2004年3月	愛知県建設部建築指導課 街づくりグループ	愛知県建設部建築指導課街 づくりグループ	12頁
木と健康、木と教育	共著	2005年2月	岐阜県農林水産局林業振 興室	岐阜県農林水産局林業振興 室	
第10回人にやさしい街づくり賞 の記録	共著	2005年3月	愛知県建設部建築指導課 街づくりグループ	愛知県建設部建築指導課街 づくりグループ	13頁～14頁
“集まって住む”ことで安心の住 まいを創りたい	共著	2006年3月	NPO法人アビィーフィール ド岐阜協会	渥美正子、河内美代子	1頁～17頁
アビィーフィールドハウスなかよ し村入居者ハンドブック	共著	2006年3月	NPO法人アビィーフィール ド岐阜協会	NPO法人アビィーフィールド 岐阜協会	1頁～14頁
ふるさと福祉村やないづ	共著	2006年3月	NPO法人アビィーフィール ド岐阜協会	渥美正子、河内美代子	
老後の住まいの新しい選択肢 - なかよし村	共著	2006年3月	NPO法人アビィーフィール ド岐阜協会	渥美正子、河内美代子	
第11回人にやさしい街づくり賞 の記録	共著	2006年3月	愛知県建設部建築指導課 街づくりグループ	愛知県建設部建築指導課街 づくりグループ	12頁
第12回人にやさしい街づくり賞 の記録	共著	2007年3月	愛知県建設部建築指導課 街づくりグループ	愛知県建設部建築指導課街 づくりグループ	4頁
第13回人にやさしい街づくり賞 の記録	共著	2008年3月	愛知県建設部建築指導課 街づくりグループ	愛知県建設部建築指導課街 づくりグループ	12頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
1999年9月～2006年2月	(財)介護労働安定センター岐阜支部講師				
2002年10月～現在	春日井市開発事業紛争調停委員会委員				
2003年6月～現在	愛知県建設部建築指導課「人にやさしい街づくり賞」選考委員				
2004年～現在	毎年開催される愛知県主催「ハウジング&リフォームあいち」における「人にやさしい街づくりシン ポジウム」でパネリスト				
2003年4月～2004年3月	「高齢期の住まいとしてのコレクティブハウスの可能性」(公益信託ぎふNPO基金助成金によるプロ ジェクト)のWGメンバーとしてコレクティブ形式の住まいの事例調査、市民への啓蒙のための見学 会・講演会の企画運営を行った。				
2004年4月～現在	高齢者グループリビング「なかよし村」(岐阜市)の建設にあたって、準備・企画段階から建設、居 住後の運営に参画				
2005年3月～現在	NPO法人アビィーフィールド(高齢者グループリビング)岐阜協会理事				
2006年3月24日	高齢者グループリビング「なかよし村」の開村式において「老後の住まい」と題して講演				
2005年7月～2006年3月	新しい高齢期居住研究会(愛知県、愛知県住宅供給公社委託事業)委員				
2006年4月～12月	岐阜県主催「ぎふの木で家づくりコンクール」審査員				
2006年4月～現在	四日市市旅館建築審査会委員				
2007年4月～現在	愛知県 あいち環境住まい・建築物整備検討委員会(CASBEEあいち検討)委員				

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 石田好江	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを受けての授業改善		2004年10月	第1回の授業アンケートにおいて、「成績評価についての説明がなされていない」の評価項目が若干低かったので、次回から平常点、フィードバックシート、定期試験についての成績評価における配分を明確に示すよう改善した。		
参加型(ワークショップ型)授業の導入		2006年4月	ケーススタディ科目において実施し効果を上げている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
・春日井市教務主任・校務主任研修		2003年8月22日	「学校教育と男女共同参画」をテーマに講演		
・学校法人 日本体育会 研修		2004年8月3日	「大学・学校におけるセクシュアル・ハラスメントの防止と対応」をテーマに講演		
・愛知医科大学 研修		2004年12月2日	「大学・職場におけるセクシュアル・ハラスメントの防止とその対応」をテーマに講演		
・名古屋造形芸術大学 研修		2005年6月23日	「大学におけるセクシュアル・ハラスメントの防止とその対応」をテーマに講演		
・三重県立川越高等学校「人権学習」講演		2005年11月1日	「高校生のためのジェンダー入門」を講演		
・三重県立川越高等学校「人権学習」講演		2006年11月8日	「高校生のためのジェンダー入門」を講演		
・椋山女学園大学研修		2007年1月15日	「大学におけるハラスメントの防止と対応」をテーマに講演		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・ジェンダー・女性学研究所所長		2003年4月～2007年3月			
・現代社会学部教務委員長		2003年4月～2005年3月			
・学部入学試験委員		2005年4月～2007年3月			
・現代社会研究科地域社会コース主任		2005年4月～2007年3月			
・学生部長		2007年4月～現在に至る			
・現代社会学部FD委員		2007年4月～現在に至る			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
規制改革と家庭経済の再構築	共著	2007年5月	建帛社	宮本みち子・御船美智子・石田好江ほか14名	53頁～67頁
論文					
市民事業におけるジェンダー構造	単著	2003年8月	経済科学通信(No.102)		51頁～57頁
今日の性別職務分離の特徴と改正均等法の理念	単著	2004年5月	大原社会問題研究所雑誌(No.546)		11頁～21頁
雇用分野における規制改革と家計行動	単著	2006年3月	家庭経済学研究(No.19)		17頁～22頁
2000年以降の労働市場にみるジェンダー再編の新局面	単著	2006年7月	女性労働研究(No.50)		22頁～27頁
低所得・長時間労働者世帯の生活実態—生活経営学におけるクイパリティ・アプローチの可能性	単著	2008年3月	生活経営学研究(No.43)		16頁～22頁
その他					
学会発表「家計行動視点からみたコミュニティ・ビジネスの再考」	単著	2003年6月	日本消費経済学会28回大会		
家政学事典	共著	2004年7月	朝倉書店	片山倫子ほか	193頁～194頁
経済学をジェンダー化する～フェミニスト経済学日本フォーラムの設立～	単著	2004年7月	女性労働研究(No.46)		110頁～113頁

海外文献紹介 ロニー・J・スタインバーグ著『職務評価における感情労働』	単著	2005年1月	女性労働研究(No.47)	72頁～79頁
書評 森ます美著『日本の性差別賃金—同一価値労働同一賃金原則の可能性』	単著	2007年3月	生活経営学研究(No.42)	65頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年5月～2006年4月	社会政策学会編集委員
2007年5月～現在に至る	社会政策学会査読専門委員
2003年6月～現在に至る	日本消費経済学会評議員
2004年8月～2007年7月	『女性労働研究』編集長
2003年4月～2007年3月	愛知地方最低賃金審議会委員
2003年4月～2004年3月	春日井市男女共同参画懇話会座長
2004年4月～2008年3月	春日井市男女共同参画審議会会長
2005年4月～現在に至る	愛知県男女共同参画相談員
2006年4月～現在に至る	名古屋市男女平等参画推進会議議長

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 石田米和	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
全ての講義について、出席票を兼ねたミニ・レポートを課し、講義を真剣に聴き、考える習慣を徹底させようとしている。	2003年4月～2008年3月	担当科目のほとんどが、半期制となり、必要最小限の範囲をカバーすることが困難である。授業アンケートでは、範囲が広すぎる、進み方が早すぎる等の意見もあるため、授業内容をレベル1(テキスト等を活用した自己学習)、レベル2(レベル1を前提とした授業)、レベル3(レポート、試験のための関連学習)の3つに区分し、自らが主体的に学ぶ態度の涵養を試みている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
教材として、講義、演習等のために、概要に記したWSを作成し配付した。	2003年4月～2008年3月	上記の考え方に沿って、特にレベル2では、テキストの補完的資料兼学習ガイドの役割を持たせたWS(ワークシート。自ら書き込むためのノート)を作成し、適宜配布している。同じくレベル1～3に合わせて、映像その他の資料を提示し、関心および理解の向上に努めている。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
	2003年4月～2008年3月	・特に、演習(ゼミ)活動の一環として、学外のシンポジウム、学会、展示会等への出席、施設等の視察を数回実施した。(但し、時間割やアクセス時間等の障害が多い)	
現代社会学部情報メディアサービス部運営委員	2003年4月～2008年3月		
現代社会学部論集編集委員	2005年4月～2008年3月		
現代社会学部進路支援委員	2005年4月～2008年3月		
<b>II 研究活動</b>			
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称
			編者・著者名(共著の場合のみ記入)
著書			
論文			
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>			
2003年4月～2008年3月	日本社会心理学会		
2003年3月～2008年3月	2004年より理事(東京地区)として活動、情報通信学会 日本NPO学会 学会活動に関連して、市民フォーラム21、名古屋市等のプロジェクトに参画		

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 石橋千鶴子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
留学生ゲストとの意見交換・交流			ゼミ、その他の授業において、留学生を含む異なる国からのゲストスピーカーを招き、意見交換・交流の機会を定期的に設けている。英語コミュニケーション実践の機会を増やすだけでなく、学生が文化の多様性を認識し、それに対応する柔軟な視点を培うことを目指している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『愛知淑徳大学現代社会学部 国際社会演習I 石橋ゼミ3年研究報告集(第1号) 地域研究:多文化共生社会の考察』		2004年2月	3年次石橋ゼミ全学生の論文集。教材としても使用。		
『愛知淑徳大学現代社会学部 国際社会演習I 石橋ゼミ3年研究報告集(第2号) 地域研究:多文化共生社会の考察』		2005年2月	3年次石橋ゼミ全学生の論文集。教材としても使用。		
『愛知淑徳大学現代社会学部 国際社会演習I 石橋ゼミ3年研究報告集(第3号) 地域研究:多文化共生社会の考察』		2006年2月	3年次石橋ゼミ全学生の論文集。教材としても使用。		
『愛知淑徳大学現代社会学部 国際社会演習II 石橋ゼミ4年研究報告集(第4号) 地域研究:多文化共生社会の考察』		2008年1月	4年次石橋ゼミ全学生の論文集。教材としても使用。		
『愛知淑徳大学現代社会学部 フィールドスタディ演習II 石橋ゼミ3年研究報告集(第5号) 地域研究:多文化共生社会の考察』		2008年2月	3年次石橋ゼミ全学生の論文集。教材としても使用。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
日本時事英語学会中部支部第43回研究例会における研究発表		2003年12月13日	「多文化・多言語社会の考察と時事英語教育の果たす役割」		
第48回大学英語教育学会全国大会研究発表		2004年9月3日	シンポジウム:コミュニケーションを目指すライティング指導——新しい方向を求めて——(4)「非英語専攻学生に対するパラグラフ・ライティング指導:パラグラフ概念の定着が支持文の創出を促す」		
大学英語教育学会中部支部談話会研究発表		2004年12月18日	「非英語専攻学生に対するパラグラフ・ライティング指導:パラグラフ概念の定着が支持文の創出を促す」		
日本時事英語学会中部支部第49回研究例会における研究発表		2006年12月9日	「パラグラフの認識から始まるライティング実践力:多文化化・情報化社会が求める英語能力」		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
全学英語教育運営委員会関連					
全学英語教育運営委員会の委員として、全学英語教育の改善と推進に取り組んだ。その主な成果は、以下のとおりである。					
「独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築」		2003年度～2005年度	2003年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(2004年度、2005年度も同課題名で採択)		
「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」		2005年度～2007年度	愛知淑徳大学 2005年度研究助成 特別教育研究		
「多文化共生を目指した発信型全学英語教育—モジュール化された体系的カリキュラム開発: 本プログラムの文化共生理解モジュール 対話力養成サブモジュール科目「Get together and Talk I (留学生との対話実践セミナー)」および「上級英語セミナー」の担当教員として企画・実施に関わる。		2005年8月～現在に至る	2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 選定		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『英語 新語・流行語ハンドブック』	共著	2006年11月20日	朝日出版社	編著者:英語新語研究会(代表 宮本倫好)	10頁～282頁にわたっている。
論文					
「非英語専攻の学生に対するパラグラフ・ライティングの指導とその効果」	単著	2004年3月3日	愛知淑徳大学 現代社会学部論集 第9号		77頁～89頁

「非英語専攻学生に対するパラグラフ・ライティング指導——パラグラフ概念の定着が支持文の創出を促す——」	単著	2005年3月3日	愛知淑徳大学論集 ー現代社会学部・現代社会研究科 篇ー 第10号		1頁～14頁
「英語の新語・新表現から見える家庭とそれを取り巻く社会状況ー米国を中心にー」	単著	2008年3月3日	同上 第13号		73頁～87頁
〈インターネットによる著作〉					
インターネットによる英語辞書配信:『辞書にない英語で世界がわかる』	共著	2005年4月より週2回発行、現在に至る。	朝日出版社	編著者:英語新語研究会 (代表 宮本倫好)	
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
1994年4月より現在に至る。	JACET(大学英語教育学会) 中部支部 ライティング研究会に所属				
1990年10月より現在に至る。	日本時事英語学会所属				
2002年より現在に至る。	日本語教育学会所属				
2000年7月より現在に至る。	英検1級面接委員				
2005年11月より現在に至る。	オーストラリア・ニュージーランド文学会所属				



所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 太田浩司	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
海外の学生との電子メールによるコミュニケーション		2001年～2005年	海外(アメリカ、台湾、タイ)の大学で学ぶ学生と本学の学生とをペアアップし、異文化間コミュニケーションやコンピュータなどで媒介されたコミュニケーションに関する意見交換をさせた。		
体験学習の導入		2001年～2007年	講義においてシミュレーション、ロールプレーに加えて車椅子による学内探索を行い、またコンピュータを使用した実習を取り入れ、一方的な受身の授業にならないようにした。		
海外研修		2005年9月、2006年9月	タイ(バンコク)のテレビ局視察、大学訪問と学生交流を行った。		
		2007年9月	アメリカ、カリフォルニア州、サンディエゴの2大学での授業参加、交流、テレビ局など訪問を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
課外活動(バスケットボール部、男子)コーチ					
エンカウンターキャンプアドバイザー					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Culture and intergenerational communication: Implications of cultures for communication across age groups	単著	2004年4月	Hong Kong City University Press	Ng, S.H., Candlin, C. N., & Chiu, C.Y. (編)	183頁～201頁
Cultural issues in communication and aging	共著	2004年1月	Lawrence Erlbaum	Pecchioni, L., Sparks, L., Nusbaum, J., Coupland, J. (編)	167頁～207頁
Challenging intergenerational stereotypes across Eastern and Western cultures	共著	2003年5月	University Press of America	Giles, H., McCann, R., Noels, K., (著), Kaplan, M.S., Henkin, N.Z., & Kusan, A. T. (編)	13頁～28頁
論文					
Beliefs about intra- and intergenerational communication in Japan, the Philippines, and the United States: Implications for older adults' subjective well-being.	共著	2007年6月	Communication Studies 58号	Giles, H., Somera, L.B. (著)	173頁～188頁
Beliefs about intergenerational communication across the lifespan: Middle age and the roles of age stereotyping and respect norms.	共著	2005年12月	Communication Studies 56号	McCann, R., Giles, H., Dailey, R. (著)	293頁～311頁
Accommodation and non-accommodation across the lifespan: Perspectives from Thailand, Japan, and the United States of America	共著	2003年6月	Communication Reports, 16号	McCann, R., Giles, H., Caraker, R. (著)	69頁～91頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2007年9月～現在		International Communication Association Membership委員会委員			

2005年5月～2007年5月	International Communication Association Intergroup Communication分科会長
2002年7月～現在	International Association of Language and Social Psychology アジア代表理事
2003年5月～現在	International Communication Association, Intergroup Communication Interest Group, 年次大会発表論文査読委員
2003年5月～2005年8月	International Communication Association, Instructional and Development Communication Division, 年次大会発表論文査読委員
2004年5月～現在	International Communication Association, Instructional and Development Communication Division 博士論文賞評価委員
2003年11月～2004年12月	National Communication Association, Ageing and Communication Division 年次大会発表論文査読委員

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 大嶽 浩	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
文学作品の利用－大岡昇平『野火』－		2004年5月	作品中にある「…この道は私が生まれて初めて通る道…」および「私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。」という表記から、「法と慣習」の問題を比較・検討。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
法と文学－文学作品にみる法学(1)－		2005年5月	文学作品を利用して、法と法律の違い、具体的には特に「法と条理」の問題を比較・検討。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
法と文学－文学の利用(Ⅱ)－	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－現代社会学部・現代社会研究科篇－(第12号)		1頁～11頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 大西 誠	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
メディアプロデュース演習・海外研修の実施		2005年9月13日～18日 2006年9月8日～13日 2007年9月20日～25日	タイ国チュラロンコン大学と協力し、学生間の異文化交流とメディア研修を実施。ゼミ生を対象として映像プレゼンテーション能力の向上を図る。(タイ放送11ch、NHKバンコクほか)		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
映像編集とメディアリテラシー～リニア編集の意義再考～		2003年10月12日	日本教育工学会第19回全国大会の自由研究「メディア教育・メディアリテラシー」において発表		
映像教育と実習作品の評価 ―学生の作品をめぐって―		2005年10月2日	第12回日本教育メディア学会年次大会の自由研究において発表		
社会的表現能力を高める映像教育(2)		2006年10月15日	第13回日本教育メディア学会年次大会の自由研究において発表		
アジアにおける教育放送 ―ウェブ時代の番組制作―		2007年10月20日	第14回日本教育メディア学会年次大会の自由研究において発表		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
ワールドユースミーティングin名古屋2003(50分)		2004年7月	映像記録としてVTR制作		
「吉島家住宅」「飛騨の里・民俗村」		2005年12月	エンカウンターキャンプにおけるフィールドワークの記録映像を2本制作		
ワールドユースミーティング2007		2007年8月	学生を指導して番組制作を行いCATVのスターキャットにて放送		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
社会的表現能力を高める映像教育	単	2003年11月	日本教育メディア学会第10回大会発表論文集		98頁～101頁
学生間の国際交流の実践と今後の課題	単	2005年10月	第12回日本教育メディア学会年次大会発表論文集		54頁～57頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2007年10月～現在		2008年10月18日～19日、愛知淑徳大学で実施する年次大会の担当理事として開催・実施準備に当る 第15回日本教育メディア学会年次大会事務局長および実施委員長			

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 岡本晴彦	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
建築構造科目における「変形特性把握模型」の使用	2006年7月～現在	科目「建築構造Ⅰ」の学生による「授業アンケート」結果において「内容が難しい」という回答が見られた。それに対する改善の一つとして、構造部材(はり等)の変形特性を学生に理解してもらうために、変形しやすい材料(スポンジ)を用いた特性把握模型を用意した。これを授業において学生自らに動かしてもらい、理解度向上を図った。関連する授業のたびごとに複数回に渡って実施した。これは言語による説明と併せて視覚的な理解を与えることができ、効果が大きかった。	
鉄筋コンクリートはりの小型試験体を用いた破壊様相の把握	2007年1月～現在	科目「建築構造設計法」において、鉄筋コンクリートはりの強度理論を説明するとともに、鉄筋コンクリートはりの小型試験体に力を与えて破壊させる実験を行い、破壊する様相を視覚により学生が認識できるようにした。これは強度理論をより深く理解する上で効果が大きかった。	
建築用コンクリート製品製作工場の見学	2006年9月13日 2007年9月14日 2008年1月19日	3年生のゼミの学生を対象として、建築用コンクリート製品製作工場の見学を行った(場所:三重県)。コンクリート用型枠の設置、鉄筋の配置、コンクリートの打設の過程と品質管理方法を実際の生産施設において見学し、製品に触れることを通じて、教室内のみでは得られない実体を通じた学習の機会を学生に与えることができた。	
研究開発と設計・施工の関係に関するビデオによる事例紹介	2007年6月 2007年12月	3年生のゼミの学生に某ドーム球場の設計・施工に関する記録映像ビデオを見せ、研究開発と新しい技術を適用した建築設計・施工との関連を説明した。これは、技術は日々、進歩していること並びに技術者の社会的使命を具体的に理解させる上で効果があった。	
課題提出時における個別指導の実施	2006年7月～現在	科目「建築構造Ⅱ」における課題(構造計算問題)の提出時に学生に対して面接を行い、学生が内容を十分に理解できていない部分について個別指導を行った。対話による指導を通じて内容理解度を向上させることができた。	
宿題の実施	2006年6月～現在	これは学生による「授業アンケート」結果において「内容が難しい」という回答が見られたことに関する対処の一つである。科目「建築構造Ⅰ」において、3回の授業に2回の割合で、授業内容の復習となる宿題を課した。これを次回授業のはじめに提出させた。これは内容理解と科目に対する興味を深めるために効果があった。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
教材「科目 建築構造Ⅰ 教材テキスト」	2006年4月～現在	「科目 建築構造Ⅰ」の講義に用いる教材テキストを作成した。基本的な重要事項を学生が理解しやすいようにすることに重点をおいて執筆した。これを授業において学生に配布した。	
教材「科目 建築構造Ⅱ 教材テキスト」	2006年4月～現在	「科目 建築構造Ⅱ」の講義に用いる教材テキストを作成した。基本的な重要事項を明確に示すとともに例題を通じて理解を深めるように配慮をした。これを授業において学生に配布した。	
教材「科目 建築構造設計法 教材テキスト」	2007年4月～現在	「科目 建築構造設計法」の講義に用いる教材テキストを作成した。原理の理解に重点を置くとともに図を多用することにより理解を深めるように配慮をした。これを授業において学生に配布した。	
教材「科目 都市環境デザイン概論 教材テキストー建築における構造の役割」	2006年 6月～現在	「科目 都市環境デザイン概論」の講義に用いる教材テキストを作成した。これは1年生用科目の教材であるため、写真映像を用いた事例を多く含めることにより、困難無く理解できるように工夫をした。これを授業において学生に配布した。	
教材「空間構成自由度向上のための建築構造」	2007年1月～現在	これは「プレストレストコンクリート構造」に関し、建築空間設計への先進的適用方法について自分の行った事例を通して解説している教材である。これを通じて建築構造科目の多面的な意義を学生に理解してもらうことを意図している。	

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
事例発表「建築構造科目の意義理解のための教材事例」		2007年2月19日		学内の教員により構成された研究会である「研究交流会」において、建築構造科目の多面的な意義について学生に理解を深めてもらうために私が作成した教育用教材「空間構成自由度向上のための建築構造」をスライドを用いて発表した。教材をさらに理解し易くするための意見交換を行った。	
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部情報メディアサービス委員会・委員		2007年4月～現在			
現代社会学部学生生活委員会委員		2007年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
性能評価型PC規準に向けて一 設計手法とその課題 ー2004年度日本建築学会大会 構造部門(PC構造)パネルディ スカッション資料	共著	2004年8月	社団法人 日本建築学会	西山峰広・加藤 博人・ 中塚 侖・丸田 誠・岡本晴 彦・松原正安・深井 悟・大 迫一徳	42頁～44頁
プレストレスト(鉄筋)コンクリート 部材の終局性能評価手法ー考 え方の基礎から最前線までー	共著	2005年1月	社団法人 日本建築学会	中塚 侖・菅田昌宏・浜原正 行・河野 進・北山和宏・岡 本晴彦他7名	127頁～134頁
PC構造研究の現状、新PC規準 へ向けての活動およびプレス トレス技術を有効利用した建物例 ー2007年度日本建築学会大会 構造部門(PC構造)パネルディ スカッション資料	共著	2007年8月	社団法人 日本建築学会	深井 悟・岡本晴彦・福井 剛・北山和宏・増田安彦・丸 田 誠・松原正安他3名	5頁～21頁
論文					
Design for Shear of Prestressed Concrete Beam-Column Joint Cores	共著	2007年11月	American Society of Civil Engineers, Vol.133, No.11.	Masayuki Hamahara, Minehiro Nishiyama, Haruhiko Okamoto, Fumio Watanabe	1520頁～1530頁
高鋼材係数の圧着プレストレスト コンクリート梁降伏後の柱梁接 合部挙動	共著	2003年7月	社団法人 日本コンクリート 工学協会、コンクリート工学 年次論文報告集, Vol. 25, No.2.	田中秀人・岡本晴彦・太田義 弘	715頁～720頁
PC造柱梁接合部研究委員会報 告 第2年度までの中間報告 そ の1 研究概要	共著	2003年10月	社団法人 プレストレストコ ンクリート技術協会、第12回 プレストレストコンクリートの 発展に関するシンポジウム	岡本晴彦・渡邊史夫・浜原正 行・西山峰広	129頁～132頁
PC造柱梁接合部研究委員会報 告 第2年度までの中間報告 そ の2 実験結果と評価	共著	2003年10月	社団法人 プレストレストコ ンクリート技術協会、第13回 プレストレストコンクリートの 発展に関するシンポジウム	浜原正行・渡邊史夫・岡本晴 彦・西山峰広	133頁～136頁
委員会報告「プレストレストコン クリート造柱梁接合部設計指針 (案)」	共著	2008年 6月	社団法人 プレストレストコ ンクリート技術協会発行、 「プレストレストコンクリート」 第50巻第3号	PC造柱梁接合部研究委員 会 31名	91頁～96頁
その他					
研究発表					
高鋼材係数の圧着プレストレスト コンクリート梁の曲げ靱性評価	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集、構造IV、 No.23512.	田中秀人・岡本晴彦・太田義 弘	1023頁～1024頁
既存建物の空間拡張技術の開 発-アウターケーブルにより補強 された既存梁の力学挙動	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集、構造IV、 No.23332.	慶 祐一・田中秀人・岡本晴 彦・毛井崇博・角 彰・木林 長仁	663頁～664頁
壁柱・プレストレストフラット プレート架構の力学性状に関する 研究	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集、構造IV、 No.23204.	室屋哲也・山本正幸・菅谷公 彦・毛井崇博・岡本晴彦・太 田義弘	407頁～408頁
アンボンドPC梁と鉄筋コンクリ ート柱との接合部の地震荷重下 における性状	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講 演梗概集、構造IV、 No.23459.	岡本晴彦・浜原正行	917頁～918頁

プレストレストコンクリート部材の終局限界変形に関する既往実験結果の評価	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造IV、C-2、No.23475.	田中秀人・岡本晴彦・中塚 侑	949頁～950頁
コーベルと鉄骨梁の圧着接合面における滑り耐力	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造IV、C-2、No.23596.	毛井崇博・岡本晴彦・田中秀人・太田義弘	1191頁～1192頁
スラブ開口を有する壁柱・フラットプレート架構の力学性状に関する研究	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造IV、C-2、No.23064.	室屋哲也・山本正幸・樋口満・毛井崇博・岡本晴彦・太田義弘	127頁～128頁
プレストレスを導入したPRC造柱部材に関する実験的研究(その1 実験概要)	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造IV、C-2、No.23198.	河合 拓・山本正幸・太田博章・岡本晴彦・木村秀樹・石川裕次	395頁～396頁
プレストレスを導入したPRC造柱部材に関する実験的研究(その2 実験結果の検討)	共著	2004年8月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造IV、C-2、No.23199.	石川裕次・山本正幸・太田博章・岸田信子・木村秀樹・岡本晴彦	397頁～398頁
高力ボルトにより接合された鋼板コンクリート構造耐震壁の地震荷重下における力学性状に関する実験的研究 その1 実験概要	共著	2006年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造II、No.21479.	岡村丈史・伏見実・武田浩・神地正紀・木村秀樹・宮内靖昌・太田義弘・岡本晴彦	957頁～958頁
高力ボルトにより接合された鋼板コンクリート構造耐震壁の地震荷重下における力学性状に関する実験的研究 その2 実験結果	共著	2006年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集、構造II、No.21480.	武田浩・岡村丈史・伏見実・神地正紀・木村秀樹・宮内靖昌・太田義弘・岡本晴彦	959頁～960頁
解説					
PC圧着構造における最近の研究動向	共著	2003年8月	社団法人 プレストレストコンクリート技術協会、「プレストレストコンクリート」、Vol.45、No.4.	岡本晴彦・是永健好	22頁～27頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
学会・協会 委員会活動					
2000年4月～2007年3月	社団法人 日本建築学会 プレストレストコンクリート構造運営委員会 委員				
1997年4月～2007年3月	社団法人 日本建築学会 プレストレストコンクリート規準指針小委員会 委員				
2003年8月～2007年3月	社団法人 日本建築学会 PC常時荷重設計法ワーキンググループ 主査				
2007年4月～現在	社団法人 日本建築学会 PC常時荷重設計法小委員会 委員				
2000年4月～2005年3月	千葉県耐震判定協議会 判定委員				
2001年4月～2004年9月	社団法人 プレストレストコンクリート技術協会 PC造柱梁接合部研究委員会 幹事				
2007年11月～2008年3月	財団法人 日本建築センター 「プレストレストコンクリート造技術基準解説及び設計・計算例」編集委員会 委員				
2007年 7月～現在	社団法人 日本コンクリート工学協会 プレストレス技術の有効利用研究委員会 委員				
講演					
2004年 8月30日	社団法人 日本建築学会大会にて 構造部門(PC構造)パネルディスカッションにおいて講演 題目「常時荷重に対する設計」				
2007年 8月31日	社団法人 日本建築学会大会にて 構造部門(PC構造)パネルディスカッションにおいて講演 題目「常時における性状」				

所属 現代社会学部	職名 准教授	氏名 小川明子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
メディアリテラシー論における授業案の工夫		2002年度より現在に至る	インターネットの教育現場での活用を通して、新聞、テレビで話題にされないニュースの検索、意見の収集を通じて、マス・メディアと自らの位相を確認し、新たな発信方法を学ばせている。また各授業ごとに提出物を設け、その内容や感想に対してフィードバックも行っている。		
東京大学メルプロジェクトとの連動		2002年度より2005年度まで	メディアと表現、学びとリテラシープロジェクト(東京大学情報学環)と連携し、実践を通してメディアについて体験的に学べるよう授業内容を設定。たとえば、インタビュー記事の作成等を自ら行うことで自らとメディアの関係を客観的に見直せることを目的にしている。メンバーにはまた、誤報やメディアと人権等についての講師として授業に参加してもらうこともある。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1)異文化理解、メディア理解のためのカリキュラムとWEB実践「アジアの不思議」		2002年度より現在に至る	日本の学生が自らの文化を映像クイズにまとめ、アジア各地の学生と相互交流する中で、異文化交流、メディア表現を体験できるカリキュラム。2002年度情報文化学会大会で実践例を発表。また、毎年演習Ibにおいて、新潟大学等との交流授業にこのカリキュラムを活用。 Website www.localmysteries.net		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
(2)「ローカルという文化表象ーオルタナティブメディアの可能性と限界」		2004年10月2日	日本社会情報学会第10回大会「ローカルという文化表象ーオルタナティブメディアの可能性と限界」と題して発表(共:東北大講師坂田邦子、北海道東海大講師崔銀姫)地域間の文化交流とメディアリテラシーの関係について、「アジアの不思議」プロジェクト実践をもとに発表した。		
(3)「Seeking alternative way of cross-cultural communication」		2005年7月8日	International Association for Inter-Cultural Communication Studies Taipei大会「Seeking alternative way of cross-cultural communication」と題し、異文化交流とメディアの役割について、「アジアの不思議」ウェブ教育実践から見た「メディアリテラシー」を論じた。		
(4)「メディアにおける<ローカル>の表象」		2007年6月30日	「カルチュラル・タイフーン」名古屋(ウィルあいち)において、ローカルの不思議プロジェクトの教育的効果についての報告を行った。(共:坂田邦子、北村順生、崔銀姫)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部教務委員		2003年より2006年	2005年度カリキュラムの改訂に携わり、メディアを体系的に学べるよう、配置を工夫した。		
CCC(コミュニティ・コラボレーション・センター)構想委員/運営委員		2004年より現在に至る	大学における地域貢献について、フィールドスタディ、インターンシップ、サービスマーケティング、ボランティアなどの視点から検討し、新たなセンターの立ち上げに携わった。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
NPO/NGOのメディア利用と表現の多様性	共著	2003年3月	『メルの環』トランスアート社	東京大学メルプロジェクト編	60頁～67頁
アスケ・ダム「メディア・アート・コミュニケーション」翻訳・訳者解題	共著	2003年10月	『メディアプラクティス』せりか書房	吉見俊哉・水越伸編	97頁～112頁
「ローカル・メディアとしてのテレビ」	共著	2003年3月	『社会情報学ハンドブック』東京大学出版会	吉見俊哉・花田達朗編	98頁～101頁
「テレビをつくって、見せる」	共著	2005年7月	『メディアリテラシーの道具箱』東京大学出版会	東京大学メルプロジェクト/民放連メディアリテラシープロジェクト編	66頁～87頁



「愛・地球博をめぐるメディア、そして情報」「市民パビリオンの仕掛人たち」	共編著	2006年8月	『私の愛した地球博』リベラ出版	加藤晴明・岡田朋之・小川明子編	155～172頁, 192～210頁
「メディアと地方情報・思想・暮らしの画一化」	共著	2006年9月	『都市の暮らしの民俗学』吉川弘文館	新谷尚紀・岩本通弥編	35頁～61頁
「ローカルの不思議」	共著	2008年3月出版予定	『メディア・ワークショップ』東京大学出版会	水越伸／東京大学メルプロジェクト編	未定
「小さな物語の公開、そして共有」	共著	2008年8月出版予定	『非営利放送とは何か』ミネルヴァ書房	松浦さと子編	未定

#### 論文

民放テレビ局におけるオルタナティブな番組コンテンツ導入への課題と可能性	共著	2003年10月	2001～2002年度科学研究費基盤研究C(2)研究成果報告書	坂田邦子と共著	138頁～154頁
「地域とメディア研究の課題」	単著	2005年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集10号		329頁～338頁
「可能態としてのCATV、そしてパブリック・アクセス送手調査をもとに」	単著	2005年3月	社会情報学研究9号1巻		13頁～26頁
「地域理解のためのメディアリテラシー実践」	共著	2005年6月	教育メディア学会研究11巻2号	北村順生・坂田邦子・崔銀姫と共著	73頁～79頁
「BBCが探る新たな公共放送像」	単著	2005年9月	放送レポート		38頁～41頁
「支配網としてのメディア(1862-1912)ー豊橋を例に」	単著	2006年11月	(韓国)翰林日本学第11輯(日本語 韓国語)		207頁～279頁
「デジタル・ストーリー・テリングの可能性 BBCキャプチャー・ウェールズを例に」	単著	2006年3月	社会情報学研究10巻2号		25頁～35頁
「明治期豊橋から見た中央集権的メディア・システムの形成」	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集 現代社会学部／現代社会研究科篇 第12号		27頁～40頁
「主観的表現への回帰?ー英国、北欧、日本における住民参加型放送をめぐる覚書」	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集 現代社会学部／現代社会研究科篇 第13号		105頁～118頁
「イギリス調査報告」	単著	2008年3月	Crest2007年度水越グループ研究報告	Crest Exprimio チーム編	未定

#### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2002年4月～現在	日本マス・コミュニケーション学会会員 2005～2006年度／2007～2008年度マルチメディア研究部会幹事
2002年4月～現在	日本社会情報学会会員
2004年7月～現在	日本時事英語学会会員
2000年4月～現在	市民とメディア研究会あくせす 運営委員
2006年6月～現在	MellPlatz(メディア・リテラシーに関する研究・実践グループ)運営メンバー。2006年度事務局担当
2004年12月～現在	JST・CREST研究グループMedia Exprimio(情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築)メンバー
2001年1月～2006年3月	東京大学情報学環MELL(メディアと教育、リテラシーと学び)プロジェクトメンバー
2005年6月～2006年3月	愛知県「新しいIT施策のあり方」研究会 アドバイザー
2005年6月～2006年3月	愛知県自治研修所 2005年度政策研究セミナー「県民とのコミュニケーション活性化に向けた広報公聴について」グループ 指導教官

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 小田茂一	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
研究進捗報告手法のマルチメディア化		2007年4月～	演習(ゼミ)での各人の課題研究の中間報告などで、内容に合わせて、動画・静止画・図表・レジュメなど最適な方法を学生が選択しプレゼンテーションをおこなうよう工夫している。そのことで、各メディアへのリテラシーの育成も心がけている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
絵画の「進化論」～写真の登場と絵画の変容		2008年2月	「メディアとコミュニケーションIV(ヴィジュアル)」の教科書として使用		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
日本アートマネジメント学会 第6回全国大会 研究報告「被爆建物のミッションと創造空間化」		2004年11月20日	於 鳥取県智頭町石谷家住宅(概要は、発表論文集 7頁～8頁)		
社会の動向に応えた文化活動をめざして～衛星放送開始時期の番組制作から考えたこと 講演		2005年 7月31日	広大アートファーム 第4回 座談会(広島大学教育学部)		
日本アートマネジメント学会 第7回全国大会 研究報告「リアル・バーチャル共存展示からグローバルコモンズとしての美術館へ」		2005年11月26日	於 赤レンガ倉庫 横浜市(概要は、発表論文集. 15頁～18頁)		
日本教育メディア学会 第13回年次大会 発表「『鑑賞授業』における作品選択および指導者の意義」		2006年10月14日	於 北海道教育大学 札幌市(概要は、発表論文集 122頁～123頁)		
日本アートマネジメント学会 第8回全国大会 研究報告「作品選択による『鑑賞授業』での達成感の差異～受け手である子どもの意識から～」		2006年11月25日	於 大分県立文化芸術短期大学 大分市(概要は、研究報告予稿集. 2頁～5頁)		
日本教育メディア学会 第14回年次大会 発表「授業を通じた学生のマルチメディア観の改善」		2007年10月20日	於 カレッジプラザ 秋田市(概要は、発表論文集. 42頁～43頁)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
「ふるさと発見!ビデオ教室」(第1回)の制作指導		2004年7～8月	自分たちの暮らす地域を見つめた放送用5分番組作りに取り組む広島県内の小中学生の指導(NHK会長特賞)		
「ふるさと発見!ビデオ教室」(第2回)の制作指導		2005年6～8月	自分たちの暮らす地域を見つめた放送用5分番組作りに取り組む広島県内の小中学生の指導		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
絵画の「進化論」～写真の登場と絵画の変容	単著	2008年2月27日	青弓社		総計205頁
論文					
学校教育におけるグループ鑑賞についての一考察	単著	2007年9月	2005,2006年度 地域政策論集(広島大学社会科学研究所・地域政策ゼミナール)	戸田常一 編	149頁～170頁
その他					
墨の線のバリエーションで描く『籠』～in the cage,in the basket	単著(個展)	2004年5月10～15日	ギャラリー樺 GT2		14点
テレビによる教育の変遷と教育テレビ番組のウェブ活用	単著	2007年6月30日	愛知淑徳大学 現代社会研究科研究報告 第2号	現代社会研究科 研究報告編集委員会 編	166頁～168頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年4月～現在		日本アートマネジメント学会 会員			
2005年4月～現在		広島大学マネジメント学会 会員			
2006年4月～現在		日本教育メディア学会 会員			

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 親松和浩	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
野外(定点)観察		2001年4月～現在	ゼミでの猪高緑地における定点野外観察		
自分史の作成指導と冊子化		2001年4月～現在	現代史を自分と重ねて理解し成果を形にする(2年ゼミ)		
ゼミ論文作成指導と冊子化		2006年4月～現在	3年ゼミの成果を形にする		
卒業論文の冊子化		2002年3月～現在	4年ゼミ生の卒業論文の冊子化		
コンピュータ言語スクイークの活用したリテラシー教育		2002年4月～現在	次世代型コンピュータ総合環境スクイークを用いたリテラシー教育		
ゼミでのグループウェア活用による双方向性教育の実践		2002年4月～現在	Yahoo Group, mixi		
ゼミの学外研修		2002年4月～現在	高山・飛騨小坂(2002年9月)、北海道(2005年8月)、雪の科学館・金沢(2006, 2007年9月)		
2 作成した教科書、教材、参考書					
DVD“Squeakers(スクイーカーズ)日本語字幕作成分担”		2004年1月	コンピュータ言語スクイークの紹介DVD(英語版はエミー賞を4部門受賞)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Squeakers DVDの日本語字幕作成の顛末と見どころ(共著)		2004年1月	第2回コンピュータを用いた創造・連携・協調に関する国際会議(C5 2004)		
スクイークで遊んだ2つの事例報告:小1の男の子と文系学生		2005年1月	第3回コンピュータを用いた創造・連携・協調に関する国際会議(C5 2005)		
開花の微速度撮影～パソコンを利用した撮影と映像処理～		2004年11月	日本理科教育学会 第51回東海支部大会		
Squeakを用いた暦の教材の試作		2005年11月13日	日本理科教育学会 第52回東海支部大会		
情報技術とこれからの理科教育		2007年11月17日	日本物理学会四国支部企画講演会(高知大学)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部高校教員免許課程設置申請担当		2004年4月～2005年3月	地歴及び情報		
現代社会学部教務委員長		2005年4月～2007年3月	現代社会学部教務全般の担当		
現代社会学部入試実施委員長		2007年4月～現在	現代社会学部入試実施全般の担当		
高校での講演「大学で何を学ぶか」		2004年5月、2005年5月	名古屋市立商業高校		
高校での講演「大学で何を学ぶか」		2004年8月、2005年8月	三重県立川越高校		
高校での講演「大学で何を学ぶか」		2007年9月	名古屋市立名東高校		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
Saturation of Nuclear Matter and Radii of Unstable Nuclei	共著	2003年4月	Progress of Theoretical Physics 109	K. Oyamatsu and K. Iida	631頁～650頁
Proton-nucleus elastic scattering and the equation of state of nuclear matter	共著	2003年10月	Physics Letters B 576	Kei Iida and Kazuhiro Oyamatsu and Badawy Abu-Ibrahim	273頁～280頁
Empirical properties of asymmetric nuclear matter to be obtained from unstable nuclei	共著	2003年10月	Nuclear Physics A718	K. Oyamatsu and K. Iida	363c頁～366c頁
Neutron Optical Potentials in Unstable Nuclei and the Equation of State of Asymmetric Nuclear Matter	共著	2003年6月	Proceedings of the 2002 Symposium on Nuclear Data, JAERI-Conf 2003-006	K. Oyamatsu and K. Iida	225頁～231頁
核物質の状態方程式と中性子星構造	共著	2003年8月	Proceedings of the 5th Symposium on Science of Hadrons under Extreme Conditions, JAERI-Conf 2003-009	K. Oyamatsu and K. Iida	106頁～114頁
Relativistic equation of state for supernova and neutron star	共著	2003年10月	Nuclear Physics A721	H. Shen, H. Toki, K. Oyamatsu and K. Sumiyoshi	1048c頁～1051c頁

Surface tension in a compressible liquid-drop model: Effects on nuclear density and neutron skin thickness	共著	2004年8月	Physical Review C 69	Kei Iida and Kazuhiro Oyamatsu	37301頁～
Nuclear radius deduced from proton diffraction by a black nucleus	共著	2004年9月	Physical Review C 69	A. Kohama, K. Iida, and K. Oyamatsu	064316頁
Saturation of Asymmetric Nuclear Matter	共著	2004年4月	Proceedings of the 2003 Symposium on Nuclear Data, JAERI-Conf 2004-005	K. Oyamatsu and K. Iida	184頁～189頁
Reaction cross section described by a black sphere approximation of nuclei	共著	2005年7月	Physical Review C 72	A. Kohama, K. Iida, and K. Oyamatsu	024602頁
Equation of State of Nuclear Matter, Neutron Rich Nuclei in Laboratories, and Pasta nuclei in Neutron Star Crusts	共著	2005年9月	Origin of Matter & Evolution of Galaxies 2003	K. Oyamatsu and K. Iida	407頁～416頁
“くろたま”描像で眺望した原子核	共著	2006年3月	原子核研究49	小濱洋央、飯田圭、親松和浩	27頁～31頁
時空の科学としての暦の歴史	単著	2006年3月	現代研究科研究報告創刊号		157頁～163頁
Symmetry energy at subnuclear densities and nuclei in neutron star crusts	共著	2007年1月	Physical Review C 75	K. Oyamatsu and K. Iida	015801頁
Formula for Proton-Nucleus Reaction Cross Section at Intermediate Energies and Its Application	共著	2007年5月	Journal of the Physical Society of Japan 76	K. Iida, A. Kohama, and K. Oyamatsu	044201頁
Variational calculation for the equation of state of nuclear matter at finite temperatures	共著	2007年6月	Nuclear Physics A791	H. Kanzawa, K. Oyamatsu, K. Sumiyoshi and M. Takano	232頁～250頁
主題講義II「子供とメディア」実施報告	共著	2007年6月	現代研究科研究報告2号	親松和浩、太田浩司	161頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年7月～2004年7月	日本原子力学会 編集委員				
1994年5月～2005年9月	日本原子力学会／日本原子力研究所 シグマ研究委員会 専門委員				
2006年2月～現在	日本原子力研究開発機構 シグマ委員会 専門委員				
1994年5月～現在	理化学研究所 共同研究員				

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 河辺泰宏	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
学生によるボランティア活動の定期的実施		1998年度～現在	体験学習の一貫として年1回、愛知県半田市の所有する登録有形文化財「旧カプトビール工場」の一般公開に合わせて、建物ガイドを行っている。		
海外研修旅行の企画・引率		2000年～現在	体験学習の一貫として毎年、欧州を中心に西洋建築見学の旅を企画・引率している。		
スライドによる視覚情報の充実		2003年4月～現在	授業アンケートの結果に基づいてスライドによる視覚情報の内容を一層充実し、講義で取り扱う建築のイメージ喚起のため最初にいくらかのスライドを見せてから講義に入るようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
西洋建築史図版集の作成		2008年4月～現在	これまで使用してきた教科書を廃止し、より授業内容に即した視覚的資料を冊子として出版するため、試験的に教材として新たに図版集を作成し、授業で使用している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部大学協議会委員		2003年4月～2007年3月			
学生部長		2003年4月～2007年3月			
学資援助委員会委員長		2003年4月～2007年3月			
全学学生生活委員会委員長		2003年4月～2007年3月			
教務連絡会委員長		2003年4月～2007年3月			
全学修学ネットワーク基本構想検討委員会委員長		2004年4月～2005年3月			
全学履修制度検討委員会委員長		2005年4月～2007年3月			
成績評価法改善検討委員会委員		2005年4月～2007年3月			
学生生活サポート委員会委員長		2005年4月～2007年3月			
学生生活満足度調査専門委員会委員長		2005年4月～2007年3月			
研究助成委員会委員		2001年4月～現在			
人権擁護委員会委員		2003年4月～2007年3月			
キャンパス整備委員会委員		2005年4月～2007年3月			
自己点検評価委員会委員		2005年4月～現在			
将来構想委員会第2委員会委員長		2007年4月～現在			
現代社会学部長		2007年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
古代ローマ「完成」への道	共著	2003年9月	Newton	青柳正規ほか2名	26頁～53頁
オナイアンズ 建築オーダーの意味～古代・中世・ルネサンスの古典オーダー～	共著	2004年9月	中央公論美術出版	日高健一郎ほか4名	3頁～9頁、205頁～225頁、277頁～293頁
論文					
III 学会等および社会における主な活動					
1978年4月～現在		日本建築学会会員			
1981年4月～現在		名古屋日伊協会会員			
1985年4月～現在		建築史学会会員			
2008年1月～現在		ZIP-FM番組審議会副委員長			
2004年7月～		朝日カルチャーセンター主催講演旅行「近江商人の街と建築家ヴォーリズ」			
2004年7月～		アートマネジメント学会東海支部主催講演会「歴史的遺産に対する保存概念の芽生え」			

2004年11月～

近畿日本ツーリスト主催講演会「エジプトの古代遺跡に学ぶ」

2008年4月～6月

名古屋日伊協会創立50周年記念講演「世界三大ドームの叡智」

2008年4月～

朝日カルチャーセンター主催講演会「石造建築の限界に挑む」

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 五島幸一	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを受けての授業改善		2005年6月、2006年6月、 2007年6月	学生による「授業に関するアンケート」を実施した結果を踏まえて、学生に対する成績評価のあり方を明確にする。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
ニュースの真実はどこ？		2004年7月1日	愛知県女性総合センター「ウィル愛知」にてニュース報道を授業の題材として取り入れる際の仕方および注意点について話す。		
ニュースが映し出すもの		2006年10月14日	岐阜県鶯谷高校にて、高校2年生を対象に、新聞やテレビに代表されるメディアの教育の大切さについて話した。		
ニュースの報道する側の意図		2006年10月28日	刈谷市教育委員会主催の男性社会人対象の講演で、大学の授業におけるニュース報道の取り入れ方について話した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部長		2003年4月～2007年3月			
コミュニティ・コラボレーションセンター長		2007年4月～現在			
現代社会研究科メディアプロデュースコース主任		2007年4月～2008年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
「アメリカにおける災害報道のレトリック的分析--New York Timesを中心として」	単著	2005年9月	時事英語学研究(日本時事英語学会誌)第44号		1頁～13頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年10月～2005年9月		日本時事英語学会理事			
2001年10月～2003年9月		日本時事英語学会学会誌編集委員長			
2001年10月～2004年9月		日本時事英語学会理事・中部支部長			
2004年10月～2005年9月		日本時事英語学会理事・副会長			
2005年10月～2006年9月		日本時事英語学会監事			
2006年10月～2007年9月		日本時事英語学会副会長			
2006年10月～現在		日本時事英語学会理事・中部支部長			

所属 現代社会学部	職名 准教授	氏名 齋藤基之	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
電子メールの活用	2003年4月～現在	「建築環境学Ⅰ」「建築環境学Ⅱ(2005年9月～)」「建築環境学実験」「計画演習Ⅱ(2005年1月まで)」「都市環境デザイン概論」では、受講生全員に対して講師の電子メールアドレスを公開し、受講生からの個別の質問に対応している。また、レポート等の提出にも電子メールの利用を推奨しており、学術研究の基礎技能としての情報技術の活用法を実践的に指導している。	
フィードバック型教育の実施	2003年4月～現在	「建築環境学Ⅰ」「建築環境学Ⅱ(2005年9月～)」「建築環境学実験」「計画演習Ⅱ(2005年1月まで)」では、上述の通り電子メールを利用して受講生からの個別の質問に対応するとともに、重要な質問については授業時に全受講生の前で回答・解説を行うことで、授業内容の理解度の向上に努めている。また、学生から提出されたレポートを授業時に可能な限り多数取り上げ紹介・解説を行うことで、授業の幅を広げるとともに、学生の学習意欲を高めるよう心がけている。なお、「建築環境学Ⅰ」「建築環境学Ⅱ」の学期末試験については、解答解説の機会を設けている。	
学生による授業評価	2003年4月～現在	「建築環境学Ⅰ」「建築環境学Ⅱ(2005年9月～)」「都市環境デザイン概論」では、毎回の授業終了時に簡単なアンケートを実施し、授業内容・解説の難易度、進行速度、関心の度合い、講師の講義技術等について学生からの意見を求めている。また、アンケート結果は速やかに集計し、次回および次年度の講義に役立てている。2004年度からは、大学で実施する「授業に関するアンケート」の調査結果も併せて活用している。	
パソコンソフトの活用	2003年4月～現在	今日の社会的環境においては、コンピュータの活用は必要不可欠な技術であると考えられる。「建築環境学実験」における実験演習のデータ解析やレポート作成にマイクロソフト・エクセル、「計画演習Ⅱ(2005年1月まで)」における学生によるプレゼンテーションの際にはマイクロソフト・パワーポイントの使用を推奨するとともに、操作方法の指導を併せて行っている。	
学生による自発的学習の評価	2003年4月～現在	大学における授業では、教室における講義を単に聴講するだけでなく、それを発端に学生自らが資料収集・実践への応用等を行うことにより、理解度を深め、関心の対象を広げることが重要である。「建築環境学Ⅰ」「建築環境学Ⅱ(2005年9月～)」「建築環境学実験」「計画演習Ⅱ(2005年1月まで)」では、講師が指示したテーマによるレポートとは別に、授業内容に関連して学生自らが設定したテーマに基づく「自主レポート」の提出を受け付けており、成績評価にも反映している。学生の自主的な学習意欲や研究心の向上に効果を発揮していると考えられる。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
「建築環境学Ⅰ」スライド教材	2003年4月	当該授業の全13回分の講義内容について、マイクロソフト・パワーポイントを利用したスライド教材を計377枚作成した。写真・グラフを数多く使用し、学生に敬遠されがちな工学的内容を視覚・感覚的に理解できるよう留意した。学生による授業に関するアンケート調査も参考にしながら、次年度以降も追加・変更等を重ね、資料の改良・改善をすすめている。	
「都市環境デザイン概論」スライド教材	2003年4月	担当する2回分の講義内容について、マイクロソフト・パワーポイントを利用したスライド教材を計70枚作成した。当該授業は建築学全般への導入にあたる講義であり、初めて建築を学ぶ学生が講義内容をより身近に感じられるよう、実在の建築物の写真やグラフ等を数多く用いるよう心がけた。	



「建築環境学Ⅱ」スライド教材	2005年9月	当該授業の全13回分の講義内容について、マイクロソフト・パワーポイントを利用したスライド教材を計338枚作成した。写真・グラフを数多く使用し、学生に敬遠されがちな工学的内容を視覚・感覚的に理解できるよう留意した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学内の委員会活動等	2003年4月～2005年3月	現代社会学部出版編集委員会委員			
	2004年4月～2007年3月	現代社会学部情報システム支援委員会委員			
	2004年4月～2006年3月	現代社会学部進路支援委員会委員			
	2005年4月～2007年3月	現代社会学部学生生活委員会委員			
	2005年4月～現在	情報教育センター運営委員会委員			
	2005年4月～2007年3月	学内情報活用推進委員会委員			
	2006年4月～2007年3月	現代社会学部ホームページ委員会委員			
	2007年4月～現在	情報システム支援部運営委員会委員			
	2007年4月～現在	現代社会学部教務委員会委員			
	2007年4月～現在	現代社会学部情報システム支援委員会委員長			
	2007年4月～現在	現代社会研究科院生室管理委員会委員長			
	2008年4月～現在	キャリアセンター運営委員会委員			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
亜熱帯沖縄における温熱感覚 調整要素としての着衣量の実態 調査	共著	2003年8月	日本建築学会環境系論文 集、第570号	仲松亮、堤純一郎、新川亮 樹、安井文男、斎藤基之、石 井昭夫	21頁～27頁
学会発表					
公立学校教室への冷房導入に 関する基礎的研究	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集D-1 環境工学 I	斎藤基之、石井昭夫、塩月 義隆、前田修、北山広樹	939頁～940頁
オープンプラン型小学校におけ る快適性に関する研究 その4 暖冷房の使用状況と教室環境 について	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集D-1環境工学 I	北山広樹、斎藤基之、石井 昭夫、塩月義隆、前田修	941頁～942頁
オープンプラン型小学校におけ る快適性に関する研究 その5 教室の音環境について	共著	2003年9月	日本建築学会大会学術講 演梗概集D-1 環境工学 I	前田修、塩月義隆、石井昭 夫、北山広樹、斎藤基之	943頁～944頁
その他					
風のゆらぎ、感覚のゆらぎ	単著	2003年9月	「住まいと電化」日本工業出 版		5頁～8頁
Prediction of clothing insulation in an outdoor environment, based on questionnaires	共著	2005年8月	ELSEVIER ERGONOMICS BOOK SIRIES Volume 3: Environmental Ergonomics	斎藤基之、石井昭夫、大井 元	355頁～360頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1990年4月～現在	日本建築学会会員				
1996年5月～現在	空気調和・衛生工学会会員				
1997年3月7日	1級建築士免許(登録番号:第272613号)				
1999年12月～現在	人間－生活環境系学会会員				
2001年4月～2004年3月	日本建築学会 熱的快適域SWG・温熱指標と評価SWG 委員(環境工学委員会温熱感WG)				
2001年4月～2004年3月	人間－生活環境系学会 温熱指標等研究委員会委員				

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 榊原國城	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2005年度前期「授業に関するアンケート」結果報告を受けて		2005年7月28日	アンケート結果はやや向上。視聴覚教材を多く取り入れたことの結果あり。		
2005年度後期「授業に関するアンケート」結果報告を受けて		2005年12月5日	14項目全体の平均値が前回より0.5ポイント上昇し改善努力が結実した。		
2007年度前期「授業に関するアンケート」結果報告を受けて		2007年7月27日	授業内容が難しいという受講生に対し、より丁寧な説明と図版等の使用を試みた。		
2007年度後期「授業に関するアンケート」結果報告を受けて		2008年1月18日	授業中の私語への注意と丁寧な板書が改善点のポイント。期末試験結果のフィードバックを実施。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
心理学を学ぶ(改訂版)		2008年8月出版	1996年に文教資料協会から出版した同名の教科書の全面改訂版。第5章「人柄の理解」および第8章「人の生活に見られる心の働き 人間アラカルト」第4節「現代社会とキャリア選択」を担当。第5章第1節では個人差に関するパーソナリティ・性格・感情・知能などという心理学的用語を、「人がら」と関連させながら、それらの基本的な意味内容を整理し、「性格」の概念を中心に人がらの本質に迫った。第2節では人の性格がどのように形成されていくのかを人間の発達過程との関連で解説。第3節では性格に関する主要な理論を紹介。第4節では心理測定および評価方法を具体的に述べた。第8章第4節では高校生の進路選択と女性管理職の登用をテーマとした。編者 神谷育児		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部地域社会コース主任		1999年4月～2005年3月			
現代社会学部フィールドスタディコース主任		2005年4月～2007年3月			
現代社会研究科地域社会コース主任		2007年4月～2008年3月			
現代社会学部入試実施委員長		2001年4月～2005年3月			
全学統括入試実施委員長		2005年4月～2007年3月			
学生による授業評価実施案作成委員会委員		2003年10月～2004年3月	各学部より選出された委員の協議により、授業アンケート項目を作成。		
教育内容等改善委員会委員		2004年4月～2006年3月	授業アンケート実施およびFD実践に関する諸問題を協議。		
学生生活満足度調査専門委員会委員		2005年4月～2007年3月	2006年7月に調査報告書を発行。		
なぎなた部顧問		2005年4月～2008年3月	2006・2007年度、全日本および東日本なぎなた選手権大会にて個人上位入賞するなど対外試合において好成績を収めている。		
コミュニケーション研究科学位(博士)論文審査		2003年12月～2004年2月	コミュニケーション研究科より委嘱され、副査として博士学位論文審査を行った。		
現代社会研究科学位(博士)論文審査		2006年12月～2007年2月	主査として博士学位論文審査を行い、現代社会研究科として初の学位(博士)を授与した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
地方自治体職員の職務遂行能力形成過程	単著	2004年9月	風間書房		134頁
論文					
地方自治体職員の職務遂行能力形成過程に関する研究	単著	2003年4月	名古屋大学2002年度博士学位論文		137頁
職務遂行能力自己評価に与えるOJTの効果ー地方自治体職員を対象としてー	単著	2005年1月	産業・組織心理学研究第18巻第1号		23頁～31頁
大学生の環境問題意識に及ぼす環境広告イメージの影響	共著	2005年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集第10号	榊原國城・岩田夏実・種岡真由美	303頁～314頁

大学生の満足感と教育環境要因	共著	2007年3月	コミュニティ心理学研究第10巻第2号	安田恭子・若杉里美・榊原國城	175頁～185頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
1999年4月～現在		春日井市行政改革推進委員			

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 坂元 多	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①視聴覚教育教材を用意 ②討議法、発見学習法等の教育目標に適した教育方法を工夫している。		2007年4月～現在 2007年4月～現在	①演習では視聴覚教材を多用する。 ②講義「映像演出」では提示した資料から法則法を見出す訓練を実施している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
映像記録・映像教材の開発について		2007年7月	FD実施のための資料教材作成		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
映像記録・映像教材の開発について		2007年7月26日	愛知淑徳大学現代社会研究科FD委員会主催による意見交換会のリソースパーソンとして発言した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報メディアサービス部部长		2001年4月～2004年3月	図書館長よしてシステム機器の高度化、新機種の導入をはかるとともに、組織の合理化に努力した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 清水 洋	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
最新の研究成果の授業への反映と授業評価アンケート結果をふまえた授業改善		2003年4月～現在	最新の資料と研究成果(2005年度には本学の内外研修制度を利用してシンガポール国立大学に10ヵ月間研究留学)を基に時間をかけて授業の準備を行い、受講生に最新の情報を提供するとともに、学説や理論などを平易に説明する努力をした。また、授業評価の結果を踏まえて、学生の独創力を養い、授業への集中力を高めるための工夫をした。経済や歴史の基礎学力に欠ける学生がいるため、余り高レベルの授業内容とならないようにし、また視聴覚機器を用いて学生の集中力を高める工夫をした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①『シンガポールの経済発展と日本』②都市国家シンガポールの高等教育機関－シンガポール国立大学を中心に－③シンガポールの「偉大な」大学		①2004年5月～②2007年4月～③2007年6月～	①専門書として刊行されたが、比較的容易な内容のため、学部・研究科の担当科目のテキストとして使用。②と③はシンガポールの高等教育をテーマとする論文であり、学部の演習や研究科の授業で資料として使用。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
シンガポール国立大学と私		2006年10月23日	現代社会学部の「研究交流会」でシンガポールと日本の高等教育機関について研究発表を行った。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教務委員(学部)		2006年4月～2008年3月	フィールドスタディコースの教務を担当		
コース主任(研究科)		2003年4月～2005年3月、2007年4月～2008年3月	国際社会コースの主任としての校務		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
シンガポールの経済発展と日本	単著	2004年5月	コモンズ		総計242頁
Japan and Singapore: A Multidisciplinary Approach	共著	2006年9月	McGraw-Hill Education (Singapore)	Tsu Yun Hui, Thang Leng Leng, Teow See Heng, et al.	53頁～82頁、115頁～148頁
Japanese Firms in Contemporary Singapore	単著	2008年7月	シンガポール国立大学出版局		総計282頁
論文					
キックマンの海外戦略	単著	2004年3月	『現代社会学部論集』第9号		19頁～32頁
The development of tourism in Singapore since the mid-1960s	単著	2005年3月	『現代社会学部論集』第10号		15頁～29頁
‘Professional housewives’ and the economic development of Japan	共著	2005年3月	『現代社会学部論集』第10号	村上日鶴	271頁～86頁
日本の対カンボジアODAの成果と問題点	共著	2005年3月	『現代社会学部論集』第10号	吉田麻美	287頁～302頁
The Indian merchants of Kobe and Japan’s trade expansion into Southeast Asia before the Asia-Pacific War	単著	2005年3月	『Japan Forum』第17巻第1号、Routledge (London).		1頁～24頁
The eclectic paradigm and zenekon in Singapore	単著	2006年	『現代社会研究科研究報告』創刊号		55頁～70頁
都市国家シンガポールの高等教育機関－シンガポール国立大学を中心に－	単著	2007年3月	『愛知淑徳大学論集－現代社会学部・現代社会研究科篇』第12号		57頁～72頁
シンガポールの「偉大な」大学	単著	2007年6月	『シンガポール』239号		30頁～35頁
Japan and the rise of China in contemporary Singapore	単著	2008年3月	『愛知淑徳大学論集－現代社会学部・現代社会研究科篇』第13号		89頁～104頁

Theories of migration and the Okinawan fishermen in coloniala Singapore	単著	2008年6月	『現代社会研究科研究報告』第3号	27頁～42頁
その他				
新書紹介 - シンガポールの経済発展と日本	単著	2004年9月	『シンガポール』228号	45頁
新書紹介 - Japan and Singapore: A Multidisciplinary Approach	単著	2006年12月	『シンガポール』237号	51頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>				
2006年9月		京都大学東南アジアセンター機関誌、『東南アジア研究』の覆面審査員		

所属 現代社会学部	職名 准教授	氏名 清水裕二	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
マルチメディア教材を使用した講義	2001年4月～現在	パワーポイントやビデオ、DVD、CDなどによって、講義に関係する写真や動画を見せながら授業を進行し、学生の授業理解を深いものに行っている。	
授業アンケートを受けての授業改善	2001年4月～現在	学期末に授業評価アンケートを行い、授業改善に役立てている	
インテリアデザインの実践的教育(計画演習Ⅲ)	2001年4月～現在	毎年、東京のギャラリー間で開催された建築系展覧会の巡回展を当校で開催している。計画演習Ⅲでは、その展覧会場の展示構成、空間デザイン、施工を、都市環境デザインコースの学生たちに行わせ、インテリアデザインの計画から施工まで一連の過程を実践的に学ぶ特徴的な授業となっている。毎年一般の入場者や他大学の教員からも高い評価を受けている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
授業用パワーポイント	2001年4月～現在	パワーポイントやビデオ、DVD、CDなどによって、講義に関係する写真や動画を見せながら授業を進行し、学生の授業理解を深いものに行っている。	
計画演習Ⅲ授業記録DVDの作成	2004年3月～現在	都市環境デザインコース準備室の協力により、計画演習Ⅲの授業過程を記録したビデオ・写真を編集し、まとめたDVDを制作している。授業や、ガイダンス、オープンキャンパスなどで上映され、当コースの特徴的な授業を紹介する強力なツールとなっている。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
第二回 日本展示学会賞作品賞ノミネート	2006年3月	2005年夏に開催した「原広司展:ディスクリート・シティ」の会場構成・デザインと、これまでの計画演習Ⅲの授業での一連の取り組みが評価され、第二回日本展示学会賞作品賞にノミネートされ、日本展示学会HPに候補作品として掲載されている。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
東海地区合同卒業設計展	2004年3月10日 2005年3月9日～11日 2006年3月6日～8日 2007年3月20日～21日 2008年3月21日～23日	東海地区の建築系大学・専門学校の卒業設計作品を一堂に展示し、合同講習会を行っている。普段交流の少ない東海地区の建築教育に横の繋がりをもち、全体のレベルアップを目指している。2008年は、愛知淑徳大学の他、名古屋大、名古屋工大、豊橋技科大、福井大、名市大、法政大、名城大、愛工大、椙山女学園大、東海工専、岐阜工専、河井塾トライデントから50名の参加者があった。	
団地再生卒業設計賞展	2004年10月12日～15日 2005年11月16日～30日 2006年11月21日～12月3日 2007年10月23日～11月4日	NPO団地再生研究会が主催する団地再生をテーマとした卒業設計を対象とした設計賞展。東京で開催された、団地のリノベーションという今日的な課題に対して全国から応募があった公募展を名古屋でも開催することで、東海地区の学生の問題意識を高めることを目指す。	
シンポジウム ストック活用における建築デザインの可能性 団地トークショー&放談2006 住宅再生最前線と名古屋の展望	2004年10月15日 2005年11月23日 2006年12月3日 2007年10月28日	団地再生卒業設計賞展にあわせて開催したシンポジウム。名古屋で活動する研究者、建築家をパネリストに招き、スクラップアンドビルドから、リノベーション、コンバージョンへとシフトしつつある日本の建築状況について議論をした。学生にとっても新たな視点を獲得するいい機会となった。	
広小路ルネッサンス	2005年10月～2006年3月	名古屋市都市再生推進課が主宰する納屋橋一伏見のまちづくりワークショップに、都市環境デザインコース有志と参加した。他に、名古屋大、名古屋工大、名市大、椙山女学園大の学生と教員、地元住民、市民がグループを組んで調査を行い、議論を経てパネル、模型に案をまとめた。各グループ案は、INAXショールームとオアシス21で展示され、市民と直接ふれあいながら意見の交換を行った。	

設計競技 釜山エコセンターコンペ 立川市新庁舎設計者選定競技 塩尻市大門中央通り地区市街地再開発ビル設計選定競技 住宅セレクションvol.2家の風景・風景の家 第1回 六花の森Tea House Competition	2004年7月 2005年8月 2006年9月 2008年1月 2008年2月	学生有志とグループを組んで、実施を前提とした設計競技に参加した。学生たちにとっては、短期間でコンセプトワークから設計、プレゼンテーションまで一連の設計過程を経験することができ、課題のみならず、将来の設計活動にもつながる貴重な体験となった。
都市の森再生ワークショップ	2008年1月	3年ゼミ生が主体となって、名古屋市で伐採された街路樹の再生について、子供たちの意識を高めるワークショップを行った。伐採された街路樹の切れ端を使ってフォトフレームを作成し、楽しみながら、街路樹の再生利用を進めている都市の森再生工房の活動を紹介した。子供たちと触れ合いながら環境問題への意識を高めさせるのは難しい課題であったが、人に伝えるために自分たちの知識や意識が高まった事が大きな収穫となった。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
リノベーションの現場テーマ5 パラサイトと名古屋のリノベーション	共著	2005年12月	彰国社	五十嵐太郎+リノベーション・スタディーズ編	145頁～185頁
論文					
大名古屋論#1 凡庸な都市のためのフィールドワーク	共著	2003年7月	10+1 2003 No.31/ INAX出版	清水裕二十宇野享+五十嵐太郎	182頁
言語空間と現実空間の越境者 「風土から文学への空間」書評	単著	2003年12月	新建築住宅特集2003年12月号/ 新建築社		12頁
大名古屋論#番外編 万博オルタナティブあるいは万博補完計画	共著	2004年9月	10+1 2004 No.36/ INAX出版	清水裕二十宇野享+五十嵐太郎 他	187頁～192頁
愛知万博を、地元の専門家はどのように見ているのか(対談)	共著	2004年12月	建築ジャーナル2004年12月号/ 建築ジャーナル	清水裕二十武藤隆+曾田忠宏+原宏	52頁～55頁
冠婚葬祭、その他諸々、名古屋建築図鑑	共著	2005年4月	建築ジャーナル2005年4月号/ 建築ジャーナル	清水裕二十武藤隆+恒川和久+山田幸司+横関浩	12頁～13頁
愛知万博バヴァリオンレポート	単著	2005年8月	ディーテイル・ジャパン2005年8月号/ リード・ビジネス・インフォメーション		105頁
建築は未来への投企である	単著	2007年8月	C&D146号2007vol.38/ 名古屋CDフォーラム		37頁
これからの住まいの在り方(対談)	共著	2007年12月	C&D147号2007vol.38/ 名古屋CDフォーラム		70頁～75頁
その他					

## III 学会等および社会における主な活動

1992年4月～現在 2006年4月～現在 2002年2月～現在	日本建築学会正会員 日本建築家協会東海支部設計競技コンペ委員 名古屋建築会議 名古屋で活動する研究者、教員、建築家、アーティストによって構成される、名古屋の活性化を目標とした団体。展覧会、イベント、調査・プロジェクトの雑誌発表などを通して、名古屋のおもしろさや将来像を市民に提示する活動を展開している。 建築設計活動 2004年 トオリニワの家(2世帯住宅/新潟市/新建築住宅特集2004年12月号掲載) 2005年 大福町の家(2世帯住宅/岐阜市)				
展覧会・演奏会・競技会等					
展覧会					
ギャラリー間巡回展					2000年より東京のギャラリー間の巡回展を当校で開催している。
この先の建築	愛知淑徳大学8号棟5階 プレゼンテーションルーム	2003年7月24日～8月7日			30代から70代の各世代の建築家が「この先の建築とは？」という問いかけに模型で回答を寄せた展覧会。
高橋てい一/第一工房展	愛知淑徳大学8号棟5階 プレゼンテーションルーム	2004年7月25日～8月8日			80歳を越えてなお建築界の一线で活躍する高橋てい一の40年以上に渡る建築設計の軌跡をたどる。



原広司展:ディスクリート・シティ	愛知淑徳大学8号棟5階 プレゼンテーションルーム	2005年7月24日～8月7日	初期作品から最新プロジェクトを概観しながら建築論でも多大な影響力をもつ原広司の理論と実践を浮かび上がらせる。
日本の現代住宅1985-2005	愛知淑徳大学8号棟5階 プレゼンテーションルーム	2006年7月23日～8月6日	ギャラリー間が誕生してからの20年間に、日本で建てられた123の代表的住宅作品を模型で概観する展覧会。20年間の住宅デザインの変遷が見て取れる展示となっている。
アトリエ・ワン/千葉学展	愛知淑徳大学8号棟5階 プレゼンテーションルーム	2007年7月22日～8月5日	若手建築家として人気が高い二組のカップリング展。現代日本の建築デザイン潮流をリードする両者の活動を概観する格好の展示。
第一回 大名古屋展 パラサイトが名古屋を 変える?!	愛知芸術文化センター スペースX	2003年12月9日～14日	名古屋建築会議が主催する展覧会。パラサイトあーきてくちや、セレモニー、アングラ、ダンボールハウス、ヴォイド、パチカフェといったキーワードをもとに名古屋に特徴的な都市空間に光をあて、その可能性を提示する。
第二回 大名古屋展 どんぐりひろばプロ ジェクト	名古屋市市政資料館 高岳一清水地区のどんぐりひろば	2005年7月27日～9月29日	名古屋市独特の空間であるどんぐりひろば。現在は少子高齢化のなかで有効利用されずに放置されていることも多いこの空間に、新たな利用法や地域活性化の鍵となる役割を提案する。
東海地区合同卒業設計展	第一回 名古屋大学 第二～五回 名古屋市立 大学	2004年3月10日 2005年3月9日～11日 2006年3月6日～8日 2007年3月20日～21日 2008年3月21日～23日	東海地区の建築系大学・専門学校の卒業設計作品を一堂に展示し、合同講評会を行っている。普段交流の少ない東海地区の建築教育に横の繋がりをもち、全体のレベルアップを目指している。2008年は、愛知淑徳大学の他、名古屋大、名古屋工大、豊橋技科大、福井大、名市大、法政大、名城大、愛工大、椋山女学園大、東海工専、岐阜工専、河井塾トライデントから50名の参加者があった。
団地再生卒業設計賞展	名古屋都市センター	2004年10月12日～15日 2005年11月16日～30日 2006年11月21日～12月3日 2007年10月23日～11月4日	NPO団地再生研究会が主催する団地再生をテーマとした卒業設計を対象とした設計賞展。東京で開催された、団地のリノベーションという今日的な課題に対して全国から応募があった公募展を名古屋でも開催することで、東海地区の学生の問題意識を高めることを目指す。
シンポジウム ストック活用における建築デザインの 可能性 ストック活用における建築デザインの 可能性 団地トークショー&放談2006 住宅再生最前線と名古屋の展 望	名古屋都市センター	2004年10月15日 2005年11月23日 2006年12月3日 2007年10月28日	団地再生卒業設計賞展にあわせて開催したシンポジウム。名古屋で活動する研究者、建築家をパネリストに招き、スクラップアンドビルドから、リノベーション、コンバージョンへとシフトしつつある日本の建築状況について議論をした。学生にとっても新たな視点を獲得するいい機会となった。
ワークショップ 広小路ルネッサンス	INAXショールーム…オアシス21	2005年10月～2006年3月	名古屋市都市再生推進課が主宰する納屋橋一伏見のまちづくりワークショップに、都市環境デザインコース有志と参加した。他に、名古屋大、名古屋工大、名市大、椋山女学園大の学生と教員、地元住民、市民がグループを組んで調査を行い、議論を経てパネル、模型に案をまとめた。各グループ案は、INAXショールームとオアシス21で展示され、市民と直接ふれあいながら意見の交換を行った。
都市の森再生ワークショップ	長久手町平成こども塾「丸太の家」	2008年1月	3年ゼミ生が主体となって、名古屋市内で伐採された街路樹の再生について、子供たちの意識を高めるワークショップを行った。伐採された街路樹の切れ端を使ってフォトフレームを作成し、楽しみながら、街路樹の再生利用を進めている都市の森再生工房の活動を紹介した。子供たちと触れ合いながら環境問題への意識を高めさせるのは難しい課題であったが、人に伝えるために自分たちの知識や意識が高まった事が大きな収穫となった。
建築設計 トオリニワの家	新潟市	2004年7月竣工	2世帯住宅/新建築住宅特集2004年12月号掲載

大福町の家	岐阜市	2005年8月竣工	2世帯住宅
設計競技			
釜山エコセンターコンペ	大韓民国釜山市	2004年7月	大韓民国釜山市において公開展示及び公開審査。設計競技記録集に収録。
立川市新庁舎設計者選定競技	東京都立川市	2005年8月	立川市において公開展示及び公開審査。
塩尻市大門中央通り地区市街地再開発ビル設計選定競技	長野県塩尻市	2006年9月	塩尻市において公開展示及び公開審査。設計競技記録集に収録。
住宅セレクションvol.2家の風景・風景の家	千葉県旭市	2008年1月	設計競技記録集に収録。
第1回 六花の森Tea House Competition	北海道河西郡中礼内村	2008年2月	札幌市において公開展示及び公開審査。設計競技記録集に収録。

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 高橋敏郎	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
現代デザイン史における資料スライドのPC化	2003年9月～	2003年度の後期から担当となった現代デザイン史の講義における画像資料をPC化し、パワーポイントを用いた授業とした。授業評価でも学生の評価は高い。順次画像の追加、訂正を行っている。	
空間形成術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ	2005年4月～	全4講で空間デザインと建築架構の関係について時代と共に架構法が変化し、空間が変わってくることを概説。特に近代以降の新材料による根本的な架構法の変化とテクノロジーの発達による構造と空間の大変化の関係を画像を用いて説明した。ゼミにて使用。	
計画演習Ⅰにおける演習課題の改訂、授業方法の変更	2005年10月～2008年1月	2003年度に前任者から引き継いだ、2年次以降の空間設計の内容を考慮して計画演習Ⅰの授業内容の大幅な改訂を行い、また、授業も講義部分を大幅に増やすなど、他の授業との連携を考慮した内容に大幅に変更した。	
作品公開による学習意欲向上への取り組み	2005年10月～	ゼミ課題として提出された作品をゼミ内の講評会のみならず、競技設計、コンペ、コンクールへの応募をし、機会あるごとに学内に展示・公開している。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
イージーチェア(制作基礎訓練のための原寸設計図)	2004年4月～	卒業制作のための基礎訓練用に各種ディテール、製作工程を含む椅子を設計。その教育カリキュラムに沿って毎年数名の学生が基礎訓練を受け、卒業制作ではオリジナルデザインの椅子の設計、制作に取り組んでいる。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
学内における建築同好会(建築研究サークル)の育成と指導	2003年12月～現在	現代社会学部都市環境デザインコースの学生を中心に結成された建築研究サークルの顧問を引き受けている。ほぼ毎月見学会を実施、外部の講演会、シンポジウム、展覧会の見学や過去2階の海外建築見学旅行の実施と引率、展覧会の実施など、指導・育成に努めている。	
学外競技設計への参加指導(第8回飛騨高山学生家具デザイン大賞)	2003年7月	3年生のゼミ課題の一環として「第8回飛騨高山学生家具デザイン大賞」高山のベンチに15名が応募。椅子の構造、デザイン、人間工学などにつき講義、設計指導。	
学外競技設計への参加指導(コイズミ国際学生照明デザインコンペ)	2004年2月	3年生のゼミ課題の一環として「第17回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」に15名が応募。照明工学、照明デザインなどにつき講義、設計指導を行った。	
海外建築作品、海外の街並フィールドワーク・講義(ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー)	2004年3月	自身の研究旅行に合わせて、3・4年生対象に、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリーの建築と街並の建築研修旅行を実施した。(参加者21名)事前の勉強会(講演会)を開催し、建築案内パンフレットの作成も学生が行い、指導、引率した。	
卒業制作における家具設計、制作の指導	2004年4月～2005年1月	卒業制作の家具設計、制作を自らのアトリエを開放して指導。制作練習、設計、試作、本番制作と行いかなり高度な作品を仕上げ、新聞でも報道された。(3名)	
学外競技設計への参加指導(天童木工家具デザインコンクール2004)	2004年7月	3年生のゼミ課題の一環として「第6回天童木工家具デザインコンクール2004」16名が応募。椅子の構造、デザイン、人間工学などにつき講義、設計指導を行った。	
学外競技設計への参加指導(コイズミ国際学生照明デザインコンペ)	2005年2月	3年生のゼミ課題の一環として「第18回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」に12名が応募。照明工学、照明デザインなどにつき講義、設計指導を行った。	
海外建築作品、海外の街並研修引率(オーストリア、チェコ、ハンガリー)	2005年3月	自身の研究旅行に合わせて、3年生対象に、オーストリア、チェコ、ハンガリーの建築と街並の建築研修旅行を実施、指導、引率した。(参加者8名)	

学外競技設計への参加指導(第9回飛騨高山学生家具デザイン大賞)	2005年7月	3・4年生のゼミ課題の一環として「第9回飛騨高山学生家具デザイン大賞」環境家具”に28名が応募。椅子の構造、デザイン、人間工学などにつき講義、設計指導を行った。
海外建築作品、宗教遺跡フィールドワーク引率(タイ、カンボジア)	2005年9月	自身の研究旅行に合わせて、1・2年生対象に、タイ、カンボジアの建築と遺跡の研修旅行を実施、指導、引率した。(参加者3名)
学外競技設計への参加指導(暮らしのなかの木の椅子展)	2005年11月	卒業制作に並行して椅子作品を設計。家具設計の登竜門である「暮らしの中の木の椅子展」に応募するのを指導。(在学生3名、卒業生2名)
学外競技設計への参加指導(コイズミ国際学生照明デザインコンペ)	2006年2月	3年生のゼミ課題の一環として「第19回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」に16名が応募。照明工学、照明デザインなどにつき講義、設計指導を行った。
海外建築作品、海外の街並フィールドワーク引率(モロッコ、スペイン)	2006年3月	自身の研究旅行に合わせて、2・3年生対象に、モロッコ、アンダルシア(スペイン)の建築と街並の研修旅行を実施した。事前の勉強会(専門家を招いた講演会)を開催し、建築案内パンフレットの作成も学生が行い、指導、引率した。(参加者6名)
海外建築作品、海外の街並フィールドワーク引率(イングランド、スコットランド)	2006年9月	自身の研究旅行に合わせて、2・3年生対象にイングランド、スコットランドにマッキントッシュの建築・家具、建築と街並の建築研修旅行を実施した。事前の勉強会を開催し、建築案内パンフレットの作成も学生が行い、指導、引率した。(参加者14名)
学外競技設計への参加指導(コイズミ国際学生照明デザインコンペ)	2007年2月	3年生のゼミ課題の一環として「第20回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」に16名が応募。照明工学、照明デザインなどにつき講義、設計指導を行った。選外優秀賞1名。
海外建築作品、宗教遺跡フィールドワーク引率(カンボジア、ベトナム)	2007年3月	自身の研究旅行に合わせて、1・2年生対象に、カンボジアの遺跡とベトナムの建築と街並の建築研修旅行を実施、指導、引率した。事前の勉強会((専門家を招いた講演会)を開催して勉強し、奥地まで出かけ研修を行った。(参加者3名)
学外競技設計への参加指導(第10回飛騨高山学生家具デザイン大賞)	2007年7月	3・4年生のゼミ課題の一環として「第10回飛騨高山学生家具デザイン大賞」環境装置”に28名が応募。椅子の構造、デザイン、人間工学、歴史的街並の捉え方などにつき講義、設計指導を行った。
学外競技設計への参加指導(コイズミ国際学生照明デザインコンペ)	2008年2月	3年生のゼミ課題の一環として「第21回コイズミ国際学生照明デザインコンペ」に10名が応募。照明工学、照明デザインなどにつき講義、設計指導を行った。優秀賞 佳作 入賞1名
海外建築作品、海外の街並フィールドワーク引率(ポルトガル)	2008年3月	自身の研究旅行に合わせて、2年生対象にポルトガルの宗教建築と街並の研修旅行を実施した。世界遺産の宗教施設の研修と奥地のレコンキスタ、スペインーポルトガル戦争当時のままの城砦の街のフィールドワークを行い指導、引率した。(参加者2名)

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
保存情報 I	共著	2005年8月	(社)日本建築家協会東海支部 愛知地域会保存研究会	(社)日本建築家協会東海支部 愛知地域会保存研究会 編	46頁、47頁、74頁、75頁、94頁、95頁、190頁、191頁
論文					
C.R. マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究(その6)	単著	2003年10月	日本インテリア学会研究発表梗概集(第15号)		41頁、42頁
C.R. マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究(その7)	単著	2005年10月	日本インテリア学会研究発表梗概集(第17号)		93頁、94頁
C.R. マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究(その8)	単著	2007年10月	日本インテリア学会研究発表梗概集(第19号)		93頁、94頁
作品発表					
間伐材を使用したイス・ベンチシステム	共同	2005年10月	日本インテリア学会パネル発表、研究発表梗概集(第17号)	岩田茉莉、高橋敏郎	

マッキントッシュスタイルの照明器具	単独	2004年2月 2007年7月	西南学院大学 ギャラリー「ゆんたく」		
栓材によるダイニングセット	単独	2007年7月	ギャラリー「ゆんたく」		
作品製作					
マッキントッシュスタイルの照明器具	単独	2004年2月 2007年7月	西南学院大学 ギャラリー「ゆんたく」		
栓材によるダイニングセット	単独	2007年7月	ギャラリー「ゆんたく」		
その他					
「福祉」断章	単著	2003年5月	CIP2003 中部インテリアプランナー協会		11、12頁
「東欧3カ国建築研修旅行」	単著	2003年5月	CIP2003 中部インテリアプランナー協会		22、23頁
バルカン半島のキリスト教建築文化とその比較	単著	2004年4月	ARCHITECT(社) 日本建築家協会東海支部 愛知地域会		8頁
紛争の地・バルカン半島	単著	2004年7月	ARCHITECT(社) 日本建築家協会東海支部 愛知地域会		10頁
名古屋駅地区地下空間サインシステム計画	共著	2005年10月	名古屋市		
栄地区地下空間サインシステム計画報告書	共著	2006年3月	名古屋市		
スコットランド・マッキントッシュ紀行	単著	2006年2月～ 2007年1月(全12回)	ARCHITECT(社) 日本建築家協会東海支部 愛知地域会		表表紙、中表紙
「ジブラルタルを渡る/モロッコ・スペインアンダルシアの街と村」 魅力あふれるイスラムの旅	共著	2006年5月	ARCHITECT(社) 日本建築家協会東海支部 愛知地域会	大塚、中垣、赤川、神谷、梶田、栢本、三宅、山川、高橋	10、11、12、13頁
「インテリアプランナーの仕事」 CIPのこれから(座談会)	共著	2006年5月	CIP2006 中部インテリアプランナー協会	小宮、井上、内藤、各務、高橋、石田、林、木辺	2頁～9頁
クメールの至宝/アンコール遺跡群を旅して	共著	2006年5月	ARCHITECT(社) 日本建築家協会東海支部 愛知地域会	堀田、福田、北沢、道家、佐々木、横井、福山、鈴木、高橋	10、11、12、13頁
展覧会・演奏会・競技会等					
暮らしのなかの木の椅子展(コンクール)	単独	2005年11月	朝日新聞名古屋本社	家具設計の登竜門である「暮らしの中の木の椅子展」に応募。	
「一高橋敏郎の仕事—マッキントッシュの椅子・復刻展+木工塾」展	単独	2007年7月21日～ 7月31日	ギャラリー「ゆんたく」	新作家具、ミニチュア家具、木の切り抜きおもちゃ、照明器具の作品と木工塾の作品3点、C.R. マッキントッシュの椅子の復刻作品24点の展覧会。	
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年11月～現在	名古屋市広告・景観審議会サイン部会委員を委嘱される				
2002年4月～2004年3月	中部インテリアプランナー協会理事、福祉・シックハウス特別委員会委員長				
2002年4月～現在	日本インテリア学会評議員、日本インテリア学会東海支部役員(現在に至る)				
2004年4月～現在	中部インテリアプランナー協会理事				
2002年5月～2008年4月	日本建築家協会愛知地域会研修委員長(現在に至る)				
2004年11月～2005年3月	名古屋市名古屋駅地区地下空間サインシステム検討委員会委員				
2005年12月～2006年3月	名古屋市栄地区地下空間サインシステム検討委員会委員(座長)				

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 竹村 弘	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを受けての授業改善		2008年1月	「授業アンケート」の結果、総合評価は3.6→3.8へ上昇したが、「自由記述」で指摘のあった板書の文字を大きく書くことに、引き続き心がけたい。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
日本の百年		2007年10月	人口・出生率・死亡率・合計特殊出生率・平均寿命・国内総生産・成長率などのデータ更新		
日米失業率の比較		2007年10月	日米失業率の推移		
日本の経済財政見通し		2008年1月	2011年度までの経済財政見通し		
環境問題道路公害・アスベスト		2008年3月	環境問題マスコミ報道		
地方開発の光と影		2008年3月	末期過疎からの脱却		
日本の人口		2008年3月	古代から近代、近代から将来の人口		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
歴史的な変革期にある日本経済	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集		13頁～26頁
人口減少と日本経済	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集		15頁～29頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 谷沢 明	大学院における研究指導 当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
提示資料の改善(パワーポイントによる映像教材の改善)		2003年～現在	「授業アンケート」を踏まえ現地調査の情報を視覚的に伝える教育効果を工夫		
提示資料の改善(DVDビデオによる映像教材の制作)		2003年～現在	同上。DVDビデオ34作品を制作。タイトルをHPで公開して活用を促進		
インターネットによる参考資料の提示		2003年～現在	現地調査の課題レポート作成指導の事例集としてHP「町並み紀行」を作成公開		
国内調査実習「飛騨高山」「郡上八幡」でフィールドワークを実施・指導		2005年5月～現在	体験学習・野外調査推進のため授業科目「フィールドワークⅠ」を担当		
国内調査実習「沖縄の離島」でフィールドワークを実施・指導		2007年8月～現在	体験学習・野外調査推進のため授業科目「フィールドワークⅡ」を担当		
国内実地研修「北海道」「沖縄」でフィールドワークを実施・指導		2005年9月～現在	体験学習・野外調査推進のため「フィールドワークⅤ及びⅥ」を担当		
大学院・地域社会プロジェクトでフィールドワークを実施・指導		2005年8月～現在	2005年度大韓民国・2006年度済州島・2007、2008年度中華人民共和国でフィールドワークを実施		
2 作成した教科書、教材、参考書					
印刷教材『フィールドワークで探る民俗と生活文化』		2005年4月	フィールドワーク論Ⅰ・フィールドワーク論Ⅱ・民俗学のテキスト、87頁		
映像教材「DVDビデオ」の制作		2005年4月～現在	「民俗芸能」「フィールドワークの記録」等34作品を制作		
映像教材「フィールドワーク論Ⅰ パワーポイント集」		2007年12月(改訂)	合計12作品(1作品につき、スライド約60点、毎年改訂)		
映像教材「フィールドワーク論Ⅱ パワーポイント集」		2007年12月(改訂)	合計14作品(1作品につき、スライド約60点、毎年改訂)		
映像教材「民俗学パワーポイント集」		2007年12月(改訂)	合計12作品(1作品につき、スライド約60点、毎年改訂)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
体験学習や野外調査等の教育実践についてPHで情報発信		2003年4月～現在	「学外教育フィールドワークの記録」として参加学生の評価・感想を含めてHP上に掲載		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学部・大学院現代社会研究科において学外教育フィールドワークの実施		2003年4月～現在	体験学習や野外調査等に学生が参加する機会の増大に努め教育効果を上げた		
現代社会学部新入生教育フィールドワークの実施		2003年4月～2005年3月	新入生教育の企画・立案・指導を毎年担当しコーディネーター役を務めた		
現代社会学部フィールドワークの実施		2003年4月～2005年3月	年2回の研修旅行を実施・指導しフィールドワークのリーダー育成に努めた		
現代社会研究科地域社会コース主任		2001年4月～2005年3月	コース内の研究教育の活性化に努めた		
現代社会研究科長		2005年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
歴史・風土・文化を活かした地域づくりに関する研究(一)～事例研究・郡上八幡:景観形成と人の営みを中心に～	単著	2004年3月	愛知淑徳大学『愛知淑徳大学現代社会学部論集』第9号		1頁～14頁
歴史・風土・文化を活かした地域づくりに関する研究(二)～事例研究・飛騨高山:景観形成と地域社会の連帯を中心に～	単著	2005年3月	愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集』第10号		31頁～50頁
歴史・風土・文化を活かした地域づくりに関する研究(三)～事例研究・木曾妻籠宿:地域づくりの志と課題～	単著	2006年3月	愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集』第11号		1頁～17頁
瀬戸内の港町における地域づくりに関する研究	単著	2006年3月	愛知淑徳大学『現代社会研究科研究報告』創刊号		1頁～15頁

四国・中国地方における地域づくりに関する研究	単著	2007年3月	愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集』第12号	41頁～56頁
山陰地方における地域づくりに関する研究	単著	2007年3月	愛知淑徳大学『現代社会研究科研究報告』第2号	1頁～14頁
屋敷境の造形―地域の個性を読む	単著	2007年4月	古川修文先生御退職記念誌刊行委員会	10頁～24頁
東北地方における地域づくりに関する研究	単著	2008年3月	愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集』第13号	31頁～44頁
その他				
中部地方における伝統的民家の保存・再生からまちづくりへ	単著	2003年5月	日本民俗建築学会「民俗建築」第123号	39頁～40頁
城下町犬山を歩く	単著	2004年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」創刊号	163頁～172頁
木曾川をはさんだ町並みの形成	単著	2004年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」創刊号	151頁～162頁
新しい街の近所づきあい	単著	2004年3月	(財)政策科学研究所「21世紀フォーラム」No93	4頁
人と水とのつきあい方～木曾川流域を歩いて学んだこと～	単著	2005年4月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第2号	292頁～300頁
フィールドワークの楽しみ～生活空間を読む～	単著	2005年4月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第2号	214頁～241頁
木曾川流域における水に関わる生活空間の特性	単著	2005年4月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第2号	59頁～86頁
岐阜県郡上市、水に親しむ民家の暮らし	単著	2005年5月	日本民俗建築学会「民俗建築」第127号	118頁～119頁
木曾川流域の生活文化遺産	単著	2006年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第3号	179頁～202頁
木曾川流域の文化的景観	単著	2007年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第4号	264頁～280頁
沖縄県伊是名村伊是名集落	単著	2007年5月	日本民俗建築学会「民俗建築」第131号	113頁
木曾川流域の棚田とその保全	単著	2008年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第5号	219頁～236頁
木曾川を楽しむ文化	単著	2008年3月	木曾川学研究協議会「木曾川学研究」第5号	294頁～298頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	木曾川学研究協議会木曾川民俗・伝統文化部会座長。毎年「木曾川学セミナー」「木曾川学シンポジウム」で講演等。
2006年4月～現在	科学研究費(基盤研究B)「日本における漁業・漁民・漁村の総合的調査」の「漁業集落の形成過程の調査・研究」研究分担。
2007年10月	日本民俗建築学会シンポジウム(科学研究費事業)「瀬戸内の小島に残る港町の保存の意義と活性のあり方」パネリスト。
2008年4月～現在	長久手町総合計画審議会委員



所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 垂井洋蔵	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
CADによる建築設計基礎教育方法の改善		2005年4月	CADシステムの更新と、基礎設計教育のための新しい教材作りをおこなった		
建築デザイン基礎教育段階へのコンピュータ応用実験		2007年4月～現在	建築デザインを学び始めた初期の学生を対象に、手作業によるデザインの発想トレーニングとコンピュータによる表現力の向上を組み合わせることでCAD教育の改善に生かすことを目指している。スケッチなど手による発想とCADソフトによる表現を組み合わせる課題を学生に実践させることによって、発想力を高めることができる課題作りを提案した。		
スケッチ作品展		2007年10月	手作業とCADを組み合わせる技法を使った演習による、学生の建築スケッチ作品展を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
CAD基礎演習課題		2000年4月～現在	第2学年演習科目CAD基礎演習用の課題と解説 毎年改訂		
建築計画論 I 教材の改訂		2007年4月	建築計画論 I (住宅)の教材(15頁)と視聴覚資料(パワーポイント、DVD)の改訂		
建築計画論 II 教材の改訂		2007年4月	建築計画論 II (建築各論)の教材(15頁)と視聴覚資料(パワーポイント、DVD)の改訂		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
海外建築家の招聘による講義		2001年10月	イリノイ工科大学准教授 J. Gang氏を招いて3年生対象に講義を行った		
海外建築作品フィールドワークと講義		2005年3月	3年生対象にベルリン周辺の近代建築研修旅行と A.Germann氏による講義		
学外競技設計への参加指導		2005年6月	3年生ゼミの一環として「9坪ハウス」コンペに10作品応募		
学外建築家による講演会の企画		2006年 2007年	学外の組織事務所でも活躍する建築家を招き講演と学生との交流を2006年から毎年企画している		
スケッチ展		2007年6月	3年生ゼミ所属学生と共同で手描表現とCGを組み合わせた表現方法によるスケッチ展を行った		
都市環境デザインコース主任		2003年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
Some Notes on Impact of Computing on Design	単著	2007年3月	Group For Microcomputing in Architecture ETH-Z CAD AD 1D		5頁～8頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年9月27日	中華人民共和国天津大学建築学科で同学学生対象に講演(「建築の源現象について」)				
2005年10月25日	ロシア モスクワチャイコフスキー音楽院で市民対象に講演(「表現としての真実—日本文化理解のために」)				
2005年7月～2006年3月	愛知郡長久手町南部地区新設小学校建設検討委員会副委員長、プロポーザルコンペ審査委員				
建築設計					
グループホーム	2003年竣工	富山県魚津市	鉄骨構造1階建て		
デイサービス ショートステイ	2005年竣工	富山県魚津市	RC構造2階建て		

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 千葉善根	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
中山道の食文化	単著	2004年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集 第9号		33頁～58頁
奥州街道・浜街道の食文化	単著	2005年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集 第10号		51頁～68頁
仙台・伊達藩の食文化	単著	2007年6月	愛知淑徳大学 現代社会研究科研究報告第2号		15頁～34頁
京・大坂の食文化	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集第13号		1頁～14頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1963年1月～現在	日本農芸化学会会員(現在に至る)				
1970年1月～現在	日本生物工学会(旧日本発酵工学会)会員(現在に至る)				
1981年1月～現在	日本酪農科学会会員(現在に至る)				
1981年1月～現在	日本食品科学工学会(旧日本食品工業学会)会員(現在に至る)				
1992年1月～現在	日本伝統食品研究会会員(現在に至る)				
1995年4月～現在	日本農芸化学会中部支部評議員(現在に至る)				

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 辻 紘良	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
学年の枠を超えた研究グループの構成による研究指導の実践。		2003年4月～現在	「車いすの経路誘導システムの研究」を対象に、大学院生から学部生まで併せて5～6名の研究グループを構成し、システム構築に必要な移動負担度の推定とシステム開発を実施。研究企画から、生理量計測実験、および検証まで一貫して実施。学生同志協調し、かつ互いに補完しあって技術を継承し、企画から実施まで一貫して研究を推進。これによる研究の積み上げの継承と、学年の枠を超えた人的交流の促進と研究の深さの水準向上を果すことができた。		
卒論グループ研究の実践		2005年4月～2008年1月	「デジタルテレビの映像品質に関する調査分析」をテーマとし、卒論のグループ研究を進めた。意識調査票の作成やデジタル・アナログ放送の視聴実験準備・実施を通して3～4名で構成するグループの意思疎通や協調の重要性を実践的に理解できた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
実験装置製作		2003年4月～2004年3月	車椅子の移動負担度を計測するための、横断勾配装置、段差装置を共同して製作した。移動計測用の台車を用意し、セットアップした。移動負担度計測実験意識調査票を作成し、実験調査を行った。		
視聴実験装置セットアップ		2005年4月～12月	デジタルテレビ・アナログテレビ視聴実験用にセットアップ。デジ・アナテレビ映像品質意識調査票を作成。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
研究指導による国内外論文発表 アイデア論文応募		2003年4月～現在	国内外論文発表12編(内国際会議2編)、アイデア論文応募2編(愛知県ITS推進協議会)、		
学内研究発表会発表		2003年4月～	現代社会学部開催「フィールドワークセミナー」発表4回、2003年～2006年		
学内メディア作品展示		2003年4月～現在	オープンキャンパス及び学祭開催時における学生のコンピュータメディア作品展示		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
受賞		2004年10月23日 2005年3月14日	愛知県「あいちのITSアイデア募集事業」アイデア論文 優秀賞受賞(野沢成裕他ゼミ生5名) 愛知淑徳大学長表彰受賞(同上ゼミ生5名)		
現代社会研究科教務委員長 教務連絡会委員		2003年4月1日～現在 2003年4月1日～現在			
情報システム支援部運営委員会委員 現代社会学部情報システム支援委員会委員長		2003年4月1日～2007年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
車いすの移動負担度推定に関する実験と計測	共著	2004年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集、第9号	辻紘良、川澄未来子、増岡孝之、野澤成裕	123頁～136頁
車いす経路誘導システムにおける移動負担度の推定	共著	2004年3月	第31回OR学会中部支部研究発表会アブストラクト集	増岡孝之、野澤成裕、辻紘良、川澄未来子	9頁～12頁
歩行者支援システムにおける移動負担度の推定	共著	2004年11月	第24回交通工学研究発表会論文報告集	辻紘良、川澄未来子、増岡孝之、野澤成裕	301頁～304頁
身近になったITS、その有用性	単著	2005年2月	第6回長久手ITSセミナー、レジュメ集	辻紘良	6頁
車いすの移動に伴う生理負担量の推定－計測法の基礎検討－	共著	2005年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集、第10号	辻紘良、増岡孝之、野澤成裕、川口理恵、川澄未来子	69頁～82頁
Estimation method of traveling load originated from driving a wheelchair for a pedestrian assistance traffic system	共著	2005年5月	5th Conference on Gerontechnology (Technology for Smart Aging)	H. Tsuji, T. Masuoka, N.Nozaawa, E. Kawaguchi, K. Kawasumi	Paper Session PS1a-3,4頁

車いすの移動に伴う生理負担量の推定—コスト推定法の基礎検討—	共著	2006年3月	愛知淑徳大学現代社会学部論集、第11号	辻紘良、川口理恵、野澤成裕、増岡孝之	19頁～31頁
車いすの経路誘導システムにおける生理的リンクコストの推定	共著	2006年3月	2006年度第33回OR学会中部支部研究発表会アブストラクト集	野澤成裕、川口理恵、前口直輝、久村栄里、辻紘良	29頁～32頁
視聴実験にもとづくデジタル放送の映像品質に関する分析	共著	2006年3月	現代社会研究科研究報告、第1号	辻紘良、辻ゼミデジタル放送研究グループ	14頁
車いすのナビにおける移動負担度の推定	共著	2006年9月	日本オペレーションリサーチ学会2006年秋季研究発表会アブストラクト集	辻紘良、野澤成裕	302頁～303頁
色彩計測にもとづくデジタルテレビ放送の映像品質に関する分析	共著	2007年3月	現代社会研究科研究報告、第2号	辻紘良、勝野礼女、原田有理子	14頁
色彩計測に基づくデジタルテレビ放送の映像品質に関する分析	共著	2007年5月	日本色彩学会誌(第38回全国大会要旨集)、Vol.31, Supplement 2007	辻紘良、勝野礼女、原田有理子	76頁～77頁
ITSによる人にやさしい社会の実現	単著	2007年9月	コンピュータ利用教育協議会(CIEC)第69回研究会、講演レジメ	辻紘良	6頁
Estimation Model of Physiological Traveling Load for a Wheelchair Navigation System	共著	2007年10月	Proceed.s of The 14th World Congress on Intelligent Transport Systems (ITS'07), TP No.3080,	Hirayoshi Tsuji, Narihiro Nozawa	6頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月1日～現在	社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部運営委員
2003年4月1日～現在	技術研究組合走行支援道路システム開発機構特別会員
2003年4月1日～現在	社団法人照明学会特別会員
2004年4月1日～現在	愛知県ITS推進協議会特別会員
2005年2月6日	愛知県長久手町第6回ITセミナー招待講演
2006年3月13日～2007年3月	日本OR学会2006年秋季研究発表会実行委員及び特別セッションオーガナイザー
2007年9月29日	コンピュータ利用教育協議会第69回研究会招待講演

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 西尾林太郎	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
人形等玩具や図版等を教材として使用する授業を実施		2003年度～2006年度	「日本政治外交史」において、人形、双六、錦絵等を使いながら近世の日朝関係や近代の日中関係および憲法制定に関する授業を実施し、これに対する学生の評価もよかった。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
		2003年～2007年9月	ゼミの学生とともに韓国、台湾、中国のいずれかを訪問しフィールドワークを実施すると共に現地の学生たちと交流		
現代社会学部国際社会コース主任		2003年4月～2005年3月			
現代社会研究科国際社会コース主任		2005年4月～2007年3月			
現代社会学部フィールドスタディーコース主任		2007年4月～現在に至る			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
大正デモクラシーの時代と貴族院	単著	2005年2月	成文堂		439頁
論文					
原内閣下における貴族院の動向	単著	2004年3月	愛知淑徳大学現代社会学部編集(第9号)		107頁～122頁
碑、玩具、版画に表現された日清戦争	単著	2006年3月	現代社会研究科研究報告(第1号)		45頁～63頁
談話会の成立－明治末年における華族の政治活動	単著	2006年3月	『現代政治学の課題』成文堂		343頁～364頁
その他					
学位	2007年5月	早稲田大学大学院政治学研究科	博士(政治学)		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年3月～2007年9月		日本法政学会理事			

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 秦 忠夫	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
表現力の訓練を目指した小テストの実施		2003年4月～2008年3月	「経済学概論1」「国際金融論」「国際経済論」などの講義科目では、それぞれ数回の小テスト実施し、添削・返却して表現力の向上を心がけるよう指導。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『国際金融のしくみ』(第3版)(有斐閣)		2007年9月10日	全13章(299頁)の国際金融の教科書で1996年に発行した初版を2002年に新版として改訂し、さらに今回第3版として改訂したもの。第1章から第12章(1頁～212頁)と用語解説(273頁～293頁)を執筆。		
プリント教材「国際経済システム」		2007年3月1日	大学院講義科目「国際経済システム論」のために作成したB4 13頁のプリント教材の改訂版。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
総合情報メディアセンター副所長		2004年4月～2008年3月	下部組織の「センター会議(教育・研究のための情報環境・施設の整備・強化を目的とする委員会)」、「情報セキュリティ委員会」の調整役。		
情報メディアサービス部長		同上	図書館運営統括。2007年度は私立大学図書館協会東海地区協議会理事校業務も統括。		
大学協議会委員		2004年4月～2008年3月			
自己点検・評価委員会委員		同上			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『国際金融のしくみ』(第3版)	共著	2007年9月	有斐閣	秦忠夫・本田敬吉	1頁～212頁、275頁～293頁
論文					
その他					
「国際通貨」	単著	2007年1月	自由国民社『現代用語の基礎知識』2007年版		554頁～562頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 日色真帆	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
設計コンペへの応募(大学院プロジェクト科目)		2004年7月, 2005年8月	履修学生と、授業の一環として実際に建設される設計競技(04年は韓国釜山のエコセンター、05年立川市庁舎)に応募。(05年は清水裕二助教授と共同)		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教務委員		2003年4月～2004年3月	都市環境デザインコース担当		
論集編集委員		2005年4月～2006年3月	論集第11号の編集		
研究交流会委員		2005年4月～2006年3月	研究交流会3回の企画運営		
学生生活委員		2007年4月～	学部委員長		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
空間要素	共著	2003年7月	井上書院	日本建築学会編	74頁, 156頁～159頁, 162頁, 163頁, 167頁, 169頁, 172頁～175頁, 179頁, 201頁, 217頁
環境行動のデータファイル	共著	2003年9月	彰国社	高橋鷹志+チームEBS	46頁～47頁, 98頁～99頁
空間学事典(改訂版)	共著	2005年4月	井上書院	日本建築学会編	11頁, 120頁, 130頁, 131頁
空間デザイン事典	共著	2006年7月	井上書院	日本建築学会編	96頁～99頁
論文					
Wayfindingの意地悪さ	単著	2003年8月	建築雑誌 Vol.118 No.1508		18頁～19頁
「文系」の建築教育	共著	2006年10月	建築雑誌 Vol.121 No.1552	清水裕二	48頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年4月～		日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会委員			
2001年4月～		日本建築学会建築計画委員会空間研究小委員会委員(2008年度主査)			
2003年4月～		愛知県まちなみ建築賞選考委員(2005～08年度委員長)			
展覧会・演奏会・競技会等					
愛知淑徳中学高校新校舎・既存棟改修		名古屋市千種区	2007年3月竣工	私立中学高校の校舎建替工事の設計監理(有限会社タラオ・ヒロ・アーキテツツ、株式会社日本設計と共同)	
第8回タイル・デザインコンテスト 入賞		株式会社ダントー主催	2007年	愛知淑徳中学高校新校舎で入賞(有限会社タラオ・ヒロ・アーキテツツ、株式会社日本設計と共同)	
新潟県見附市立今町小学校改築事業設計プロポーザル 優秀賞		新潟県見附市	39326	小学校建替え設計プロポーザル2等(有限会社タラオ・ヒロ・アーキテツツと共同)	

所属 現代社会学部	職名 准教授	氏名 藤井麻湖	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを受けての授業改善		2005年度後期授業以降	「授業アンケート」の結果を踏まえて、当日の授業内容のまとめを必ず授業の最後にレポートすることにした。		
授業アンケートを受けての授業改善		2005年度後期授業以降	「授業アンケート」の結果を踏まえて、学生の関心の所在の動向を知るために卑近な話題でのコメントを書かせ、それに授業の内容を関連付けて次回の授業でコメントした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
フィールドワークⅧの記念文集		2007年3月	2006年度8月におこなったフィールドⅧのモンゴル海外研修の参加者のレポートを冊子として編集・参加者全員に配布した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
現代社会学会の講演会の企画		2005年12月14日	現代社会学部学会において、国立民族学博物館名誉教授(国立民族学博物館元館長)石毛直道氏の講演会を企画した。		
学生生活委員会関連の上映及び講演会の指導		2005年11月2日	学生生活委員会において、学生の持ってきた企画である、映画監督浜田佐知氏を招いての「百合祭」上映と講演会のやり方をアドバイスした。		
研究交流委員会での発表		2005年9月16日	教員の親睦交流を兼ねた交流会において「私のモンゴル英雄叙事詩研究－歴史学と人類学のはざままで」というタイトルで発表した。		
ジェンダー研究所での発表		2005年9月25日	ジェンダー女性学研究所の研究会(石田好江先生代表)で研究発表を行った。		
現代社会学会の講演会の企画		2007年7月3日	現代社会学部学会において東京外国語大学元教授三木亘氏の講演会を企画した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
モンゴル英雄叙事詩の構造研究	単著	2003年11月	風響社		309頁
ユーラシア草原からのメッセージ－遊牧研究の最前線	共著	2005年3月	平凡社	松原正毅・小長谷有紀・楊海英編著	中国青海省土族の民話『黒馬』における隠された物語 215頁～235頁
論文					
昔話の技法における冒頭コードの意義－モンゴル英雄叙事詩研究からの視角－	単著	2005年7月	昔話－研究と資料33号		111頁～121頁
謎々における馬－モンゴル英雄叙事詩の隠喩研究の補完として	単著	2006年秋号	言語文化学会論集27号		133頁～143頁
モンゴルの葬送儀礼	単著	2008年3月	万葉古代学研究所第6号		195頁～213頁
英雄叙事詩『ジャンガル』における七沖の痕跡－ジャンガルが7歳のときに権力を掌握するモチーフについて	単著	2008年3月	北東アジア研究別冊第1号		187頁～226頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1989年4月～現在	日本モンゴル学会会員				
1999年4月～現在	日本民族学会(現在の日本文化人類学会)会員				
2001年4月～現在	日本口承文藝学会会員				
2001年4月～現在	言語文化学会会員				
2002年4月～現在	The International Association for Mongol Studies(Ulaanbaatar, Mongolia)				



2004年4月～2008年3月	「北・中央ユーラシアにおける異文化の波及と相互接触による文化変容の歴史的研究」 2004年度基盤研究B(一般)(代表者:島根県立大学総合政策学部助教授 井上治)における研究協力者(2006年度より研究分担者)
2006年7月	「『元朝秘史』研究における文学研究の構築—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として」 2006年度基盤研究C(一般)(代表者:愛知淑徳大学現代社会学部フィールドスタディコース講師 藤井麻湖)
2007年11月～現在	内陸アジア史学会会員

所属 現代社会学部	職名 助教	氏名 道尾 淳子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「計画演習Ⅲ(調査実測)」展覧会設計における事前準備段階としての学外教育計画を立案実施	2007年6月	出展者である建築家の実作品を訪問見学し、現地での図面の読解、実測等を行う機会を新たに計画した。学生の行う会場計画に実感や実寸の感覚が期待された。			
「計画演習Ⅲ(調査実測)」展覧会制作過程および講演会の記録映像制作(DVD)	2007年4月～8月	演習期間中、写真および映像による記録を随時行い、スライドおよびDVDメディアに編集した。学生が自らの作業過程を振り返り、成果を客観視する材料となった。また、展覧会関係者への報告として好評を得た。			
「空間設計Ⅰ(設計基礎)」設計製図における手書き図面およびドローイングの参考図書の選出と図書展示企画の立案実施	2007年7月～	都市環境デザインコースの共通図書を選定し、演習の参考資料となる図書を用いた企画展を行った。学生がより多くの優れた図面およびドローイングを見る機会をととして、自主的な学習が期待された。			
「空間設計Ⅱ(小規模施設)」における敷地模型の見本制作および敷地区の制作	2007年10月～	模型制作の基本と自由な表現方法の一見本として、課題の敷地模型を制作し、エスキース時間に設置した。			
「空間設計Ⅳ(複雑な施設)」最終作品講評会におけるゲストクリティック招集の立案実施	2007年12月～	演習時は3先生による中間講評会ははじめ計5回の講評会が行われた。最終作品講評会では、最終成果をより客観的に講評してもらうためゲストクリティックを招集した。学生にとっては、作品意図を伝え、多くのアドバイスを獲得する緊張感のある機会となった。			
「空間設計Ⅴ(都市複合施設)」作品のデジタルアーカイブ化	2007年7月～	最終講評後のプレゼンテーションパネルについて、汎用性の高いPDF形式のデータファイルの提出を徹底したことにより、スムーズな作品のアーカイブ化が適った。適切なデータサイズ、複数データのまとめ方をはじめ、コンピュータ操作についてマニュアルを作成し、学生の習得に役立つよう努めた。			
「卒業研究」における学内展、全体講評会、卒業研究展(学外展)の企画立案実施	2007年9月～	学内外問わず、4年間の集大成を完成度の高い展覧会会場でもてもらう、また、展示を行うことで学生も作品に対するより多くの意見を得る機会となることを目標として、全体の段取りを行い、学生、教職員、外部業者との調整を行った。			
「卒業研究」卒業研究展出展作品のデジタルアーカイブ化	2008年1月～	学外で実施する卒業研究展出展者のプレゼンテーションパネルを、PDF形式のデータファイルとして提出してもらい、上記同様、スムーズな作品のアーカイブ化が適った。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
名古屋市の地図資料のアーカイブを作成	2007年1月～	都市を読み解く素材として、200以上の地図を独自に作成し随時追加更新している。それぞれの地図をレイヤーとして自由に重ね合わせ、映像、ヴィジュアルブックなどを作品発表し、展覧会、講演会も行っている。(Web公開は、 <a href="http://www.works-tm.com/layered_map_nagoya/">http://www.works-tm.com/layered_map_nagoya/</a> より)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
札幌市立高等専門学校での講義(計3回)	2003年4月～8月、2004年9月～2005年3月	建築環境論、建築計画特論、デザイン概論の講義(90分間)を各一回ずつ担当した。スライド及び資料を作成した。			
札幌市立高等専門学校附属研究所海外派遣特別研究員研究報告会	2005年3月	2003年4月～2005年3月までの研究内容を公開発表した。			
名古屋市立大学芸術工学部での講義(計2回)	2006年5月	名古屋市の都市構造およびフィールドワークについて講義を行なった。スライド及び資料を作成した。			
名古屋市立大学での公開講座(計1回)	2006年9月	名古屋市の都市構造について講義を行なった。スライド及び資料を作成した。			
名古屋市立大学での公開講座(計1回)	2007年5月	名古屋市の都市構造について講義を行なった。スライド及び資料を作成した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・特になし					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数

著書					
・なし					
論文					
札幌市市街地における隙間空間に関する研究	共著	2003年6月	2003年度日本建築学会北海道支部研究発表会、および、報告集、No.76	◎道尾淳子・那須聖・八代克彦	379頁～382頁
札幌市市街地における隙間空間に関する研究・その1:隙間空間の平面寸法による分類	共著	2003年9月	2003年度日本建築学会大会(東海)、および、大会学術講演概要集、F-1分冊	◎道尾淳子・那須聖・八代克彦	269頁～270頁
札幌市市街地における隙間空間に関する研究・その2:隙間空間の使われ方と季節による差異	共著	2003年9月	2003年度日本建築学会大会(東海)、および、大会学術講演概要集、F-1分冊	◎八代克彦・道尾淳子・那須聖	271頁～272頁
都市における住所の表記と町の規模の変遷に関する研究:名古屋市中心部の町界町名整理と現行の住所表記から	共著	2006年9月	2006年度日本建築学会大会(関東)、および、大会学術講演概要集、F-1分冊	◎道尾淳子・伊藤恭行	859頁～860頁
歴史地区の歩行者専用空間の成立条件に関する研究	単著	2007年1月	修士学位論文、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科		総計234頁
歴史地区における歩行者空間の成立要因に関する研究:重要伝統的建造物群保存地区27地区を事例として	共著	2007年9月	2007年度日本建築学会大会(九州)、および大会学術講演が異様集、F-1分冊	◎道尾淳子・伊藤恭行	519頁～520頁
その他					
札幌市市街地における隙間空間に関する研究	共著	2003年6月	2003年度日本建築学会北海道支部研究発表会	◎道尾淳子・那須聖・八代克彦	
札幌市市街地における隙間空間に関する研究・その1:隙間空間の平面寸法による分類	共著	2003年9月	2003年度日本建築学会大会(東海)	◎道尾淳子・那須聖・八代克彦	
札幌市市街地における隙間空間に関する研究・その2:隙間空間の使われ方と季節による差異	共著	2003年9月	2003年度日本建築学会大会(東海)	◎八代克彦・道尾淳子・那須聖	
札幌市立高等専門学校附属研究所海外派遣特別研究員一年次報告書	単著	2004年3月	札幌市立高等専門学校附属研究所		総計12頁
札幌市立高等専門学校附属研究所海外派遣特別研究員二年次報告書	単著	2005年3月	札幌市立高等専門学校附属研究所		総計42頁
名古屋市新教育館の建築提案と現地調査報告		2005年5月～2006年6月	名古屋市、名古屋市教育委員会	西川正純、道尾淳子他	建築図面、模型
都市における住所の表記と町の規模の変遷に関する研究:名古屋市中心部の町界町名整理と現行の住所表記から	共著	2006年9月	2006年度日本建築学会大会(関東)	◎道尾淳子・伊藤恭行	
第一回卓プロジェクト展覧会: Layered Map Nagoyaプロジェクト—白壁編(名古屋市立大学)	共催	2006年7月15日～2006年7月17日		◎道尾淳子、安念聡子他	地図、パネル
Layered Map Nagoyaプロジェクト—覚王山編、ギャラリートーク(覚王山アパート)	主催	2006年7月29日～2006年7月30日		浅野末紗子、道尾淳子他	地図、パネル、映像
色・音・匂いの地図づくりワークショップ2(ウィル愛知)	主催	2006年9月3日		◎道尾淳子、松河剛司他	
色・音・匂いの地図づくりワークショップ(榎木館)	主催	2006年10月26日		◎道尾淳子、松河剛司他	<a href="http://www.works-tm.com/layered_map_nagoya/ion/">http://www.works-tm.com/layered_map_nagoya/ion/</a>
麗しきマチ(名古屋市民ギャラリー—矢田)	共催	2006年11月2日～2006年11月4日		伊藤孝紀、鶴飼昭年、道尾淳子他	地図、パネル、映像
麗しきマチ2(名古屋市民ギャラリー—矢田)	共催	2007年3月6日～2007年3月11日		伊藤孝紀、鶴飼昭年、道尾淳子他	地図、パネル、映像
第5回カルチュラル・タイフーン2007 in 名古屋: 白壁の色音匂いの地図づくりワークショップ展(名古屋市政資料館)	共催	2007年6月29日～2007年7月1日		◎道尾淳子、磯谷直昭、藤井啓一郎、遠藤泉他	地図、パネル、映像

第5回カルチュラル・タイフーン 2007 in 名古屋: パネルセッション『<まちづくり活動>を通じた「公的/私的」の再編』(名古屋 市市政資料館)	共催	2007年6月30日		鶴本花織、S.KLIEN、道尾淳 子他
歴史地区における歩行者空間 の成立要因に関する研究: 重要 伝統的建造物群保存地区27地 区を事例として	共著	2007年9月	2007年度日本建築学会大 会(九州)	◎道尾淳子・伊藤恭行

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

<学会活動>	
2003年～現在	(社)日本建築学会
2007年～現在	(社)日本都市計画学会
<設計競技選者>	
2007年10月13日	第2回(社)愛知建築士会主催学生コンペ「半田赤レンガ・ルネッサンス」一次審査員
<その他の活動>	
2006年1月～現在	Layered Map Nagoya プロジェクト
2006年4月～2006年9月	名古屋学生コンソーシアム
2006年5月～現在	IONプロジェクト

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 山田登世子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートをうけての改善		2003年4月～現在	授業内容に興味のある学生を集めるために講義題目を「ファッション・ブランド論」と変更。「聞きやすさ」のため毎回マイクの音量に注意する。学生の学習を助け、かつ教師とのコミュニケーションに役立つように頻繁にショートテストを行い、次週に採点結果や講評を公開する。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
			『ブランドの条件』ポール・モラン『シャネル』(訳書) 『シャネルー最強ブランドの秘密』		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学生の問題関心の調査		2003年4月～現在	ショートテストに「自由コメント」欄を設けて、学生の要望や意見を調査している。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
恍惚	単著	2005年9月	文藝春秋		171頁
モードの帝国	単著	2006年1月	筑摩書房		235頁
晶子とシャネル	単著	2006年1月	勁草書房		337頁
ブランドの条件	単著	2006年9月	岩波書店		203頁
Made in ブランド	単著(智 世賢訳)	2007年	Hyunsil Studies	(『ブランドの条件』韓国語 訳)	238頁
シャネル——人生を語る	単著	2007年9月	中央公論新社	(ポール・モランの翻訳)	275頁
黒の男たち	共著	2008年2月	京都服飾文化研究財団『時 代を着る』深井晃子ほか35 名		209頁～216頁
シャネルー最強ブランドの秘密	単著	2008年3月	朝日新聞社		209頁
論文					
黒の脱構築	単著	2003年6月	岩波書店 講座『文学』第 12巻		135頁～236頁
ブランドとカリスマのおかしな関 係	単著	2003年6月	ポーラ文化研究所『化粧文 化』43号		60頁～67頁
ダンディな悪徒	単著	2004年12月	文藝春秋『文学界』58巻12 号		231頁～236頁
ブランド品が高く売れる理由	単著	2006年12月	毎日新聞社『エコノミスト』 第84巻68号		56頁～59頁
マリー・アントワネットーラグジュ アリー女王	単著	2007年2月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第1回		96頁～99頁
ウジェニー皇后ーブランドは后 妃から	単著	2007年3月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第2回		98頁～101頁
印象派の美女たちーセーヌのカ エル娘	単著	2007年4月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第3回		84頁～87頁
椿姫ーはかなき美女のアイコン は	単著	2007年5月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第4回		84頁～87頁
エステルーフランスの真珠夫人	単著	2007年6月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第5回		96頁～99頁
花咲く乙女たちーヴィーナスの 誕生	単著	2007年7月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第6回		78頁～81頁
マルグリット・デュラスー書かれた 海	単著	2007年8月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第7回		108頁～111頁
サラベルナールー女優のオーラ	単著	2007年9月	NHK『フランス語会話』連載 「フランス美女伝説」第8回		100頁～103頁

美女たちの宝石戦争—ドゥミ・モント秘話	単著	2007年10月	NHK『フランス語会話』連載「フランス美女伝説」第9回	98頁～101頁
コレット—自転車に乗る女学生	単著	2007年11月	NHK『フランス語会話』連載「フランス美女伝説」第10回	98頁～101頁
ココ・シャネル—破壊しに、と彼女は言う	単著	2007年12月	NHK『フランス語会話』連載「フランス美女伝説」第11回	96頁～99頁
ココ・シャネル—モード、それはわたしたち	単著	2008年1月	NHK『フランス語会話』連載「フランス美女伝説」第12回	100頁～103頁

#### 書評

ゾラ『パリの胃袋』	単著	2003年5月	朝日新聞	2003年5月11日
ミュラ『ブランシュ先生の精神病院』	単著	2003年10月	日経新聞	2003年10月12日
稲葉真弓『風変わりな魚たちへの挽歌』	単著	2003年6月	東京新聞	2003年6月29日
中島京子『FUTON』	単著	2003年7月	朝日新聞	2003年7月23日
カラー『文学理論』	単著	2003年11月	朝日新聞	2003年11月9日
アルセーヌ・ルパン	単著	2003年12月	毎日新聞	2003年12月28日
田之倉稔『ダヌツィオの楽園』	単著		朝日新聞社『論座』104号	316頁-317頁
バルト『新たな生のほうへ』	単著	2004年1月	朝日新聞	2004年1月25日
ブルックス『肉体作品』	単著	2004年2月	日経新聞	2004年2月8日
工藤庸子『宗教vs国家』	単著	2007年3月	日経新聞	2007年3月11日

#### 評論その他

もっとも美しい恋	単著	2004年9月	文藝春秋『文学界』第58巻9号	42頁～104頁
万博とブランド	単著	2005年2月	毎日新聞	2005年2月25日
半歩遅れの読書術	単著	2006年11月	日経新聞(連載)	2006年11月5日～19日
シャネルのラグジュアリー革命	単著	2006年12月	産経新聞	2006年11月9日
小説はメタモルフォーズ	単著	2007年5月	学会会報864号	99頁～103頁
大衆を虚に遊ばせた詩—阿久悠追悼	単著	2007年8月	日経新聞	2007年8月3日
ヴィトン、名古屋人のツボ	単著	2007年12月	朝日新聞	2007年12月13日
欲望のあやうい戯れ	単著	2008年3月	アムアソシエイツ 『L'OFFICIELジャポン』	84頁～85頁
美空ひばりの「舟歌」がきこえる—阿久悠頌	単著	2008年4月	藤原書店『環』33巻	

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2005年5月30日	国土交通省報告「歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会」 於、京都
2006年5月28日	「与謝野晶子」について講演 於、堺市立女性センター
2006年10月21日	「晶子とシャネル」について講演 於 姫路文学館
2007年5月19日	大学ブランディングについて講演 於、甲南女子大
2007年2月22日	NHK「いきいきホットライン」に出演 於、NHK放送局
2007年12月6日	トップブランドについて講演 於、名鉄タクシー交通会館

所属 現代社会学部	職名 教授	氏名 吉田邦彦	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業記録の作成		2003年4月～現在	「都市環境デザイン演習」において、毎回授業内容について、全ての受講者に持ち回りで授業記録(議事録)を作成させている。授業記録を作成することによって、演習のねらい、演習内容(他の人が行っている研究内容を含めて)、進捗状況についての理解が深まる。また、授業記録は、すべてコンピュータを利用して作成させ、将来企業等に就職した場合の実務訓練を兼ねている。		
パソコンソフトの活用とプレゼンテーション技術の向上		2003年4月～現在	授業では、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトを利用している。授業評価に寄せられた意見等をもとに、さらに理解しやすい授業を目指している。また、演習等において、学生にも、課題レポートの報告にパワーポイント等を利用してプレゼンテーションを行わせ、コンピュータの利用技術とプレゼンテーションの技術の向上を図っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
ネットワーク時代における建築情報標準化技術－建築生産情報統合ガイドブック・3－	共著	2004年8月	(社)日本建築学会	(社)日本建築学会	18頁～21頁
論文					
キャンパスFMとFM教育の推進を！	単著	2007年5月	(社)日本ファシリティマネジメント推進協会、JFMA Current、No.127		2頁～3頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年4月～現在	(社)日本建築学会 情報システム技術委員会 情報連携小委員会 委員				
2004年4月～現在	(社)日本建築学会 建築計画委員会 ワークスペース研究小委員会 委員				
2004年4月～2008年3月	日本オフィス学会 企画委員会 委員長				
2004年4月～現在	日本オフィス学会 オフィスレイアウト研究部会 委員				
2004年4月～2007年3月	日本オフィス学会 監事				
2007年4月～現在	日本オフィス学会 理事				

# コミュニケーション学部

巖 津……………	143	杜 英 起……………	163
市 村 多加子……………	144	新 美 明 夫……………	165
植 村 勝 彦……………	145	西 出 隆 紀……………	167
小 川 一 美……………	147	二 宮 昭……………	168
沖 田 庸 嵩……………	149	馮 富 榮……………	170
窪 田 守 弘……………	150	古 井 景……………	172
河 野 文 光……………	151	McGEE, Jennifer J. ……	175
後 藤 秀 爾……………	152	McDANIEL, Edwin R. ……	176
斎 藤 和 志……………	154	松 尾 貴 司……………	178
坂 田 陽 子……………	156	松 本 青 也……………	179
清 水 遵……………	158	山 内 啓 介……………	181
CHARLEBOIS, Justin M. ……	160	吉 崎 一 人……………	183
DANNY, Molden T. ……	161	米 倉 五 郎……………	185





所属 コミュニケーション学部	職名 講師	氏名 巖 萍	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
成績評価法の再検討		2006年6月、11月 2007年6月、11月	「中国語作文Ⅰ」の「授業アンケート」を受けて、学生にその結果をフィードバックするとともに、学生の学習意欲を更に高めるために、各科目の成績評価方法を再検討した。		
電子メールの活用		2006年～現在	受講生全員に対して講師の電子メールアドレスを公開し、受講生からの個別質問や作文提出などに対応している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
「入門初期における効果的な中国語発音指導のあり方への一考察」		2007年10月6日	日本中国語学会、2007年度東海支部例会<創立十周年特別企画>(於:愛知大学車道校舎)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
「非中国語専攻学生のための「聴解教材・II」の開発研究」		2008年4月1日	愛知淑徳大学2008年度研究助成特別教育研究(2009年度まで継続)		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『目的論と組織学習論——組織学習のダイナミクスに関する考察——』	単著	2006年3月	名古屋大学大学院経済学研究科		102頁
論文					
「組織の生成・発展プロセスと組織学習——目的論的アプローチ——」	単著	2006年6月	名古屋大学大学院経済学研究科『経済科学』Vol. 54, No.1.		13頁～29頁
「雑論組織学習理論体系的構建」	単著	2006年11月	復旦大学世界経済研究所『世界経済展望』No.22		30頁～33頁
「現代漢語における外来語の借用——文化的視点から——」	単著	2007年3月	『愛知淑徳大学論集』第7号		153頁～162頁
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
2003年4月	Academy of Management				
2005年4月	日本経営学会				
2005年4月～現在	経営哲学学会				
2006年4月	日本情報経営学会				
2006年4月	日本中国語学会				

所属 コミュニケーション学部	職名 准教授	氏名 市村多加子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
保護的措置としての社会参加 型社会奉仕活動	共著	2006年3月	家庭裁判月報	小林悟他20名	第58巻第3号 165頁～201頁 総計36頁
家庭裁判所における非行臨床 ーその構造上の特徴と意義	単著	2008年3月	「場としての臨床」ー愛 知淑徳大学心理臨床相談 室紀要		第12巻37頁～53頁 総計17頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
講演・講師					
2004年8月		愛知県高等学校教員10年目研修講師:最近の少年非行の実情			
2005年12月		名古屋市小中学校校長会研修会パネラー:最近の若者気質について			
2007年2月		名古屋市小中学校校長会研修会講師:最近の少年非行と生徒指導			
2007年2月		名古屋市守山区女性会講師:非行が語るものー親子関係から			

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	植村勝彦	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
3年ゼミにおける共同研究の実施と報告書の作成		2003年4月～現在		2003年度より、3年ゼミの方針を、それまでの卒論作成に向けての個人別研究の集積から、ゼミ生共通の一つのテーマに基づく共同研究を実施し、最終的に年度末に研究成果を報告書にまとめる形式のものに変更した。現在までの報告書の題目は、『児童養護施設とコミュニティ心理学』(65pp.)、『高齢者とコミュニティ心理学』(66pp.)、『高齢者施設で働く介護職者のエンパワーメント』(86pp.)、『精神障害者小規模作業所における人と環境の適合』(80pp.)、『子育て不安・子育て支援問題へのアプローチ』(114pp.)の5冊を刊行した。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
植村勝彦・高島克子他編『よくわかるコミュニティ心理学』		2006年10月		新しい心理学である「コミュニティ心理学」を、初めての読者にわかるように、1項目につき2頁または4頁に収めた事典形式の書籍。参考図書として活用した。		
植村勝彦編『コミュニティ心理学入門』		2007年6月		わが国におけるコミュニティ心理学の初めての本格的な教科書を編集し、採用した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
コミュニケーション研究科心理学専攻主任		2003年4月～2005年3月				
コミュニケーション学部長		2004年4月～2008年3月				
コミュニケーション研究科長		2004年6月～2007年3月				
心理臨床相談室長		2004年6月～2005年3月				
コミュニケーション研究科へ提出された「課程博士」論文の主査		2003年10月～2004年3月		山口桂子氏論文「新卒看護師のストレス反応に関連する要因の研究」		
同 上		2006年12月～2007年11月		白尾久美子氏論文「がんにより手術を体験する人々に対する心理的サポートに関する研究」		
同 「論文博士」論文の主査		2007年3月～2008年2月		奥村太志氏論文「精神障害者の理解と看護援助に関する研究」		
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
『ストレススケールガイドブック』	共著	2004年2月	実務教育出版	パブリックリサーチセンター(編)	335頁～349頁 359頁～377頁 全372頁	
スキレップ・ティード・トレス著『コミュニティ心理学』(翻訳)	単訳	2005年4月	ミネルヴァ書房			
『よくわかるコミュニティ心理学』	共著	2006年10月	ミネルヴァ書房	植村勝彦・高島克子・箕口雅博・原裕視・久田満(編)	2頁～5頁 8頁～11頁、24頁～27頁、56頁～57頁、62頁～65頁、92頁～93頁	
『コミュニティ心理学入門』	共著	2007年6月	ナカニシヤ出版	植村勝彦(編)	1頁～22頁、47頁～69頁、71頁～94頁、161頁～182頁	
『コミュニティ心理学ハンドブック』	共著	2007年6月	東京大学出版会	日本コミュニティ心理学会(編)	36頁～38頁、39頁～54頁、130頁～145頁	
論文						
がん患者の術前・術後の心理的状況	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－,4号	◎白尾久美子・植村勝彦	87頁～97頁	
The Relationship between Functional Disability and Depressive Mood in Japanese Older Adult Inpatients	共著	2004年6月	Journal of Geriatric Psychiatry and Neurology, 17(2)	◎Joji Ohnishi, H.Umegaki, Y.Suzuki, Katsuhiko Uemura et al.	93頁～98頁	

病院に勤務する看護師のバーンアウトに影響を及ぼす要因の検討	共著	2006年10月	藤田学園医学会誌,30巻4号	◎水野正延・植村勝彦	27頁～29頁
がん告知を受け手術を体験する人々の心理的過程	共著	2007年3月	質的心理学研究,6号	◎白尾久美子・山口桂子・大島千英子・植村勝彦	158頁～173頁
病棟コミュニティと看護師との関係性の検討	共著	2007年3月	愛知さわみ看護短期大学紀要,3巻	◎水野正延・植村勝彦	47頁～56頁
適応指導教室が不登校生徒に対してもつ機能の現状と期待ー正規校としての位置づけを求めてー	共著	2008年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇ー,8号	◎植村勝彦・岸澤正樹	109頁～124頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在(2004年より副会長)	日本コミュニティ心理学会理事(1998年より)				
2003年4月～2006年3月	東海心理学会理事				
2003年4月～現在(2004年より副会長)	名古屋市名東生涯学習センター協議会委員(1988年より)				

所属	コミュニケーション学部	職名	准教授	氏名	小川一美	大学院における研究指導 当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年	月	日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
(1)「対人コミュニケーション論」という授業における授業法等の工夫		2005年4月	～	現在		授業内での学生の思考時間を確保するため、書き込み式の講義ノートを作成し使用させることで効率的かつテンポの良い授業実施を目指した。その結果、「授業アンケート」などでも講義ノートの評価は高く、2007年度まで改訂を繰り返しながら使用を続けている。
(2)「データ解析Ⅰ」という授業における授業法等の工夫		2004年4月	～	現在		他の授業担当教員と共に、2004年から2006年までは詳細な授業プリントを作成し使用していたが、使いやすさ等を考え、2007年度からはテキストを作成し使用している。本授業内容は卒業研究実施時にも役立つため、授業終了後も学生が使用され続ける等、テキストは学生からの評判も高い。
2 作成した教科書、教材、参考書						
(1)対人コミュニケーション論－講義ノート－		2005年4月、	2006年4月			編著:小川一美,印刷・製本:株式会社プリンテック
(2)2007年度 対人コミュニケーション論－講義ノート－		2007年9月				編著:小川一美,印刷・製本:株式会社ダイテック
(3)2007年度 データ解析Ⅰ 資料集		2007年4月				編著:新美明夫・小川一美,印刷・製本:株式会社ダイテック
(4)2008年度 データ解析Ⅰ 資料集		2008年4月				編著:新美明夫・小川一美,印刷・製本:株式会社ダイテック
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
(1)授業改善・情報交流会での発表		2006年12月				本学で開催されている授業改善・情報交流会で、「講演」ではなく「授業」をするためには…というタイトルで発表を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項						
(1)愛知淑徳大学学園広報編集委員		2004年4月	～	現在		
(2)愛知淑徳大学コミュニケーション学部論集編集委員会委員		2004年4月	～	2006年3月		
(3)愛知淑徳大学コミュニケーション学部情報システム支援委員会委員		2006年4月	～	2008年3月		
(4)愛知淑徳大学キャリアセンター運営委員会委員		2008年4月	～	現在		
(5)文化系クラブ「Free Music」顧問		2005年4月	～	現在		
(6)同好会「FC猪高緑地」顧問		2006年4月	～	現在		
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
新しい中等教育へのメッセージー ともに学びをつくるー	共著	2003年8月	黎明書房	編者:名古屋大学教育学部 附属中・高等学校	81頁～84頁	
学校教育で育む「豊かな人間関 係と社会性」ー心理学を活用し た新しい授業例Part2ー	共著	2005年2月	明治図書	編者:吉田俊和・廣岡秀一・ 斎藤和志	47頁～76頁	
心理学	共著	2005年3月	ナカニシヤ出版	編者:浦上昌則・神谷俊次・ 中村和彦	192頁～193頁	
ことばのコミュニケーションー対 人関係のレトリック	共著	2007年10月	ナカニシヤ出版	編者:岡本真一郎	66頁～80頁	
心理学ー第2版ー	共著	2008年3月	ナカニシヤ出版	編者:浦上昌則・神谷俊次・ 中村和彦	202頁～203頁	
論文						
二者間発話量の均衡が会話者 が抱く相手と会話に対する印象 に及ぼす効果	単著	2003年10月	電子情報通信学会技術研 究報告, Vol.103 No.410		37頁～42頁	
二者間発話量の均衡が観察者 が抱く会話者と会話に対する印 象に及ぼす効果	単著	2003年12月	実験社会心理学研究, 第 43巻, 第1号		63頁～74頁	

「社会志向性」と「社会的コンピ テンシ」を教育する(4)－中学3 年生を対象とした授業実践－	共著	2003年12月	名古屋大学大学院教育発 達科学研究科紀要, 第50 巻	◎吉田俊和・斎藤和志・石田 靖彦・小川一美・坂本剛・出 口拓彦・小池はるか・廣岡秀 一	142頁～144頁 158頁～161頁
クリティカルシンキング	単著	2004年3月	愛知作業療法, 第12巻		36頁～39頁
中学生の考える「社会」への探 索的アプローチ	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－コミュ ニケーション学部篇－, 第5 号	◎斎藤和志・小川一美	35頁～44頁
テキストマイニングによる中学生 の自由記述データの探索的分 析－個人特性および人口学的 変数との関連から－	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－コミュ ニケーション学部篇－, 第6 号	◎小川一美・斎藤和志	83頁～93頁
日常的コミュニケーションにおけ る話題の収集を指して－テー マの重要性判断に基づく検討－	共著	2006年3月	対人社会心理学研究, 第6 号	◎多川則子・小川一美・斎藤 和志	71頁～79頁
手がかり情報の相違が二者間会 話に対する印象に及ぼす影響	単著	2006年9月	社会言語科学, 第9巻		27頁～36頁
自己開示が友人関係満足感およ び心理的幸福感到及ぼす効 果－メディア利用と付き合い期 間に着目して－	共著	2007年3月	コミュニケーションと人間, Vol.16	◎榎原久美子・小川一美	35頁～44頁
会話セッションの進展に伴う発話 の変化: Verbal Response Modes の観点から	単著	2008年2月	社会心理学研究, 第23巻		269頁～280頁
聴く態度尺度作成の試み－セル フ・モニタリング, 社会的スキル, 精神的健康との関連から－	共著	2008年3月	コミュニケーションと人間, Vol.17	◎田邊美由紀・小川一美	31頁～42頁
その他					
コミュニケーションの概要	単著	2006年11月	月刊ばんぶう CLINIC BAMBOO, 2006年11月号		17頁～19頁
対人コミュニケーションのメッ セージ特徴が印象形成と親密化 過程に及ぼす効果	単著	2007年3月	名古屋大学大学院教育発 達科学研究科博士論文		1頁～138頁
書評「社会的スキルを測る: KISS-18ハンドブック」	単著	2007年11月	社会心理学研究, 第23巻		203頁～204頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
学会活動					
2002年5月～2003年5月	東海心理学会事務局幹事				
2007年4月～現在	日本グループ・ダイナミクス学会理事(全国区)				
社会的活動					
2006年4月～2007年3月	静岡県静岡工業技術センター客員研究員				
2006年10月～現在	社団法人日本産業カウンセラー協会講師				
2007年11月	安城市職員健康管理研修講師				
その他					
2007年4月～2009年3月	科学研究費補助金若手研究(B)「会話スキルトレーニングにおける客体的自覚および知識の効果に関する研究」				

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 沖田庸嵩	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
選択必修科目である「脳とコミュニケーション」における配布資料の改善		2007年10月～現在	授業評価で以前より、パワーポイントで図を多用した講義は理解しやすいとの評価を得ていたが、さらに配布資料を充実させて、受講時のノート記入負担を軽減し、授業理解に心が配れるようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
顔の再認記憶課題によるERP-old/new effectの検討	共著	2005年6月	臨床脳波 第47巻 第6号	立花久大・木田安宣・武田正中・芳川浩男・沖田庸嵩	463頁～467頁
ERP repetition effectを用いた顔の記憶	共著	2006年8月	臨床脳波 第48巻 第8号	立花久大・木田安宣・武田正中・川端啓太・奥 智子・黒田信人・沖田庸嵩	378頁～382頁
文字属性分類の課題切り替え—事象関連脳電位を用いた検討—	共著	2006年12月	生理心理学と精神生理学 24巻 3号	梅林 薫・沖田庸嵩・清水 遵	237頁～247頁
左右視野呈示の顔・漢字に対する記憶探索 —事象関連脳電位を用いた検討—	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集 7巻		113頁～127頁
Recognition memory for unfamiliar faces in Parkinson's disease: Behavioral and electrophysiologic measures	共著	2007年4月	Parkinsonism and Related Disorders Vol.13, No.3	Kida Y, Tachibana H, Takeda M, Yoshikawa H, Okita T.	157頁～164頁
視野内・視野間意味プライミング—事象関連脳電位を用いた研究—	共著	2008年6月	心理学研究 79巻 2号	加藤公子・沖田庸嵩	143頁～149頁
課題切り替えにおける刺激セットと反応セット—ERPによる比較—	共著	印刷中	心理学研究	梅林 薫・沖田庸嵩	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2000年11月～現在	日本臨床神経生理学会(評議員)				
2000年11月～2006年11月	日本臨床神経生理学会(編集委員)				
2002年11月～2007年11月	心理学評論(編集委員)				
2003年5月～現在	日本生理心理学会(理事)				
2003年11月～2007年11月	日本心理学会(編集委員)				



所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 窪田守弘	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
発表「学生の日本語表現力を育てるために」		2007年12月12日	FD委員会主催の授業改善情報交流会にて発表。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
映画でチャイニーズ		2003年12月1日	映画を通して中国語や中国文化を学ぶ参考書を作成した。		
映画でジャパニーズ		2004年10月1日	映画を通して日本語や日本文化を学ぶ参考書を作成した。		
映画でベトナム		2007年3月6日	映画を通してベトナム語やベトナム文化を学ぶ参考書を作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
名古屋市立桜台高等学校「生き方・あり方」に関する講演会		2003年6月19日	映画の中の人生(生き方・あり方)について講演した。		
Korea.@Nagoya Forum 2003		2003年10月28日	日韓の文化交流に関するシンポジウムのコーディネーターを務めた。		
第34回愛知県私学教育研修会		2003年11月18日	戦時下映画の子どものイメージについて講演した。		
<アジア平和と韓半島>国際学術会議		2003年11月20日	Cultural Exchanges through Movies in Asiaについて講演した。		
2006年度日本語教育学会春季大会シンポジウム発表		2006年5月20日	シンポジウム「映画・アニメ・マンガ」でのコーディネーター及び発表を行った。		
2007年度映画英語教育学会(ATEM)関西支部第5回大会特別研究発表		2007年10月20日	「字幕翻訳家の言語感覚について」と題して発表。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
言語コミュニケーション学科教務委員		2003年4月～2006年3月			
言語コミュニケーション学科主任		2006年4月～2008年3月			
学部入学試験委員長		2006年4月～2008年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
映画で日本文化を学ぶ人のために	編著	2007年11月	世界思想社		全344頁
論文					
映画にみられる子どもの文化	単著	2003年3月	愛知淑徳大学コミュニケーション学部編第3号		49頁～63頁
色に込められたメッセージ(小説『パルムの僧院』)	単著	2003年3月	愛知淑徳大学言語文化 Vol. 11		12頁～22頁
日本映画における日本人のイメージ	単著	2004年3月	愛知淑徳大学言語文化 Vol. 12		1頁～15頁
日本映画における日本人のイメージ	単著	2004年3月	愛知淑徳大学コミュニケーション学部編第4号		57頁～70頁
「あなたの名前は何ですか？」における一考察	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集		1頁～11頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2000年～2007年		映画英語教育学会(ATEM)理事、東海支部長			
2000年～2007年		日本語教育学会大会実行委員副委員長			
		異文化間教育学会			
		異文化コミュニケーション学会			

所属 コミュニケーション学部	職名 講師	氏名 河野文光	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートの実施およびそれに基づく教材呈示方法の改善		2007年6月・11月	大学の自己評価の取り組みの一つとして実施された学生による授業アンケートを行い、その結果に基づいて、その都度ビデオ教材や関連資料などを用いた分かりやすい教材の呈示方法の改善を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
動作法による教師のストレス・マネジメント	単著	2003年10月	日本臨床動作学会、臨床動作学研究第7巻		23頁～31頁
上海国際学術交流の経緯と課題	単著	2004年11月	東海・北陸心理リハビリテーション研究会、会報第22号		14頁～18頁
Development of Psycho-Rehabilitation in China	共著	January-June 2005年	Special Issue on: Psycho-Rehabilitation Issues in Asia and Islamic World. In Saudi Journal of Disability and Rehabilitation, Volume 11, Number 1, 2	Bunkou Kouno, Hiroshi Morisaki, Katsuaki Ikeda	95頁～99頁
糖尿病を発症している知的障害者への動作法の適用 —生活動作の変容と浮腫の快方をおとして—	単著	2007年3月	日本リハビリテーション心理学会、リハビリテーション心理学研究、第33巻2号		1頁～12頁
ある自閉症児の動作訓練導入への一考察 —トレーニー・トレーナー・スーパーバイザーのやり取りから「わかる」こと—	単著	2008年3月(印刷中)	吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要、第4号		137頁～146頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2004年3月		東海・北陸心理リハビリテーション研究会代表幹事			
2003年4月～現在		愛知動作療法療育親の会顧問			
2003年4月～現在		日本リハビリテーション心理学会資格認定委員会評議員			
2004年4月～現在		東海・北陸心理リハビリテーション研究会副会長			

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	後藤秀爾	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
「人間関係論」「カウンセリング論」等における講義内容と授業法の工夫。		2003年4月～2004年3月		前任校・愛知学泉大学における講義科目では、次の工夫を行なった。①大人数講義での双方向授業を行なうため「感想とリクエストメモ」を使用する。②『千と千尋の神隠し』『ロングバケーション』など話題の映像作品を素材とする。ゼミ形式の授業では、個別の関心を発展させたボランティア活動に取り組ませた。		
「分析心理学」等における講義内容と授業法の工夫。		2004年4月～現在		愛知淑徳大学での授業展開も基本的に同じ考え方である。講義科目は、学生のクエストで『ハリポッター』『ゲド戦記』を素材に加えた。ゼミでは、障害児療育ボランティアから卒論へと発展させた。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
愛知学泉大学コミュニティ政策学部運営委員		2003年4月～2004年3月		同学部運営委員として学生相談室の立ち上げと運営、セクハラ相談の学生向け手引き作成、障害学生対応、ボランティア活動支援、資格問題対応など担当。		
同大学同学部就職委員長		2003年4月～2004年3月		1年次から各学年ごとの就職対応マニュアルの作成。		
愛知淑徳大学コミュニケーション学部教養教育委員		2004年4月～2006年3月				
愛知淑徳大学コミュニケーション学部学生相談員		2004年4月～現在				
同大学院コミュニケーション研究科情報メディアサービス部運営委員		2005年4月～2006年3月				
同大学コミュニケーション学部学生生活委員長・大学祭顧問・コミュニケーション学会顧問		2006年4月～2008年3月				
同大学コミュニケーション学部・同大学院心理学研究科情報メディアサービス部運営委員		2008年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
21世紀の心理臨床	共著	2003年6月22日	ナカニシヤ出版	森田美弥子・川瀬正裕・金井篤子編	60頁～66頁	
論文						
現代社会と思春期モーニング『千と千尋の神隠し』についての分析心理学的考察ー	単著	2003年12月	愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要・第6号		63頁～82頁	
「言えなかった母へのことば」はどうなったー清滝裕子さん論文へのコメントー	単著	2004年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第19巻		70頁～72頁	
軽度発達障害児支援をめぐる今日的課題ー臨床心理学に求められることと出来ることー	単著	2005年3月	愛知淑徳大学紀要コミュニケーション学部篇・第5号		13頁～34頁	
自閉症の子を遺して逝く母の思いー連絡ノートを通してどこまで支えられたのかー	単著	2005年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第9巻		9頁～18頁	
世代間伝達概念の臨床的有用性ー幻想の子どもと想像の子どもー	共著	2005年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第20巻	◎清滝裕子・後藤秀爾他6名	19頁～23頁	

おジャ魔女Nちゃんの求めたものはー大崎園生さんのケース報告へのコメントー	単著	2005年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第20巻		79頁～90頁
児童虐待加害親の心理ー初期介入と予防のための理解に向けてー	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇・第6号		19頁～33頁
リストカット少女たちのロールシャッハ反応ーその身体性と情緒性ー	単著	2006年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第10巻		3頁～14頁
創造性と乳幼児の能力	共訳	2005年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第20巻	◎鈴木真之・後藤秀爾他6名	25頁～34頁
就学前高機能自閉症児への発達支援ー実態調査と集団参加プロセス	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇ー第7号	◎後藤秀爾・大見幸子	49頁～66頁
集団不適応児の遊戯面接事例ートイレ強迫から電車マニアへ3年間の展開過程ー	単著	2007年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第11巻		13頁～21頁
「グッドタイミングなバッドニュース」が意味することー福元理英さんのケース報告へのコメントー	単著	2007年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第22巻		46頁～48頁
プリ子のプリは何のプリー宇野千咲香論文へのコメントー	単著	2007年3月	岐阜大学心理相談研究第6号		13頁～16頁
宮崎吾朗の『ゲド戦記』における時代性ー原作者の求めた普遍性との対比からー	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇ー第8号		23頁～39頁
自閉症スペクトラムにおける解離性障害ー現実生活を生きる自分を探してー	共著	2008年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第12巻	◎後藤秀爾・河合裕子・大矢義実	3頁～13頁
「非行少年の求めたもの」の次に知るべきことはー大矢義実さんの論文へのコメントー	単著	2008年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第12巻		67頁～69頁
高機能自閉症児の学校適応支援に関するー考察ー内的危機状態の理解と対応ー	共著	2008年3月	心理臨床一名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要ー第21巻	◎福元理英・藤秀爾他5名	23頁～33頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	名古屋市子ども青少年局子育て家庭部保育課嘱託障害児保育指導委員会委員／同障害児保育巡回指導員／同中堅Ⅳ・統合保育研修会講師(1970年4月～)
同上	社会福祉法人あさみどりの会理事・評議員(1999年10月～)
同上	愛知県総合教育センター心理判定員(1996年4月～)
同上	名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室嘱託指導員(1985年4月～)
2003年4月～2005年3月	名古屋市民間保育園連盟子育てカウンセラー養成講座講師(2001年4月～)
2005年4月～2006年3月	愛知県教育委員会豊田加茂地区特別支援教育連携協議会会長
2006年4月～現在	愛知県臨床心理士会会長・常任理事・代議員
2006年4月～現在	愛知県教育委員会生涯学習課主催・発達障害セミナー講師

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 齋藤和志	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①「2004年度前期授業アンケート」結果報告を踏まえて「心理統計基礎」の授業資料を作成 ②「2004年度後期授業アンケート」結果報告を踏まえて「対人行動論」の授業資料を作成 ③「2005年度後期授業アンケート」結果報告を踏まえて「社会的行動の心理学」の授業資料を作成		①2004年6月～現在 ②2004年12月～現在 ③2005年6月～現在	①「心理統計基礎」はテキストを使用しているため、補助的な課題については配付資料を作成し、解説をWebで公開することにした。 ②と③の授業は、基本的に同一の系統である。すべて、配付資料を作成し、PowerPointで授業を行っている。配付資料および授業で提示した資料についてはWebで公開している。また、③の段階から、印刷可能な資料と閲覧のみ可能な資料を分けるようにしている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①副教材「心理統計基礎」の作成 ②授業資料「コミュニケーション心理学概論Ⅰ(社会心理学)」の作成 ③授業資料「対人行動論」の作成 ④授業資料「社会的行動の心理学」の作成		①2004年4月～現在 ②2004年4月～現在 ③2004年度 ④2005年4月～現在	①、②、③「心理統計基礎」、「コミュニケーション心理学概論Ⅰ」、「対人行動論」における配付資料およびプレゼンテーション資料(PowerPoint)をWeb上で公開(ただし、学内からのアクセス限定)。 ④配付資料をWeb上で公開、提示資料を閲覧用としてWeb上で公開(どちらも、学内からのアクセス限定)。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・全学進路支援委員(コミ研)		2004年度			
・ジェンダー・女性学研究所運営委員		2004年度～2007年度			
・学部自己点検・評価実施委員		2004年度・2005年度			
・大学院教務委員		2005年10月～現在			
・ジャズダンス部顧問		2005年10月～現在			
・学生生活満足度調査専門委員		2005年度・2006年度			
・学部情報メディアサービス委員		2006年度・2007年度			
・人権擁護相談員		2006年4月～現在			
・環境に関する講演会実行委員会		2008年1月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
学校教育で育む「豊かな人間関係と社会性」ー心理学を活用した新しい授業例Part2ー	共編	2005年2月	明治図書	吉田俊和・廣岡秀一・齋藤和志(編)	192頁
論文					
「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(4)ー中学3年生を対象とした教育実践ー	共著	2003年12月25日	名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 第50巻	◎吉田俊和・齋藤和志・石田靖彦・小川一美・坂本剛・出口拓彦・小池はるか・廣岡秀一	141頁～164頁
中学生の考える「社会」への探索的アプローチ	共著	2005年3月10日	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇 第5号	◎齋藤和志、小川一美	35頁～44頁
テキストマイニングによる中学生の自由記述データの探索的分析ー個人特性および人口学的変数との関連からー	共著	2006年3月15日	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇 第6号	◎小川一美、齋藤和志	83頁～93頁
日常的コミュニケーションにおける話題の収集を指してーテーマの重要性判断に基づく検討ー	共著	2006年3月30日	大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学講座対人社会心理学研究 第6号	◎多川則子、小川一美、齋藤和志	71頁～79頁
事前情報が対人認知に及ぼす影響ー職業ステレオタイプによる選択的情報処理ー	共著	2007年3月30日	コミュニケーションと人間 第16巻	◎古市めぐみ・齋藤和志	1頁～12頁

就職に関する情報探索行動尺 度の作成	共著	2007年12月28 日	名古屋大学大学院 教育発達科学研究 科紀要 第54巻	◎矢崎裕美子・斎藤和志・高 井次郎	127頁～134頁
-----------------------	----	-----------------	----------------------------------	----------------------	-----------

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

学会活動	
2003年12月	日本学校心理士会東海支部第9回総会時研修会講師
2005年4月～現在	日本社会心理学会 社会心理学研究編集委員
2005年7月～現在	日本学校心理士会愛知支部 会計監査
2007年4月～現在	日本グループ・ダイナミクス学会常任理事(事務局担当)
社会における活動	
2004年5月～6月	日進市社会教育講座講師

所属 コミュニケーション学部	職名 准教授	氏名 坂田陽子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
発達心理学 認知の生涯発達心理学		2004年4月～現在	発達心理学の講義では、自作の乳児発達ビデオとDVD 赤ちゃんの生後1年間の驚くべき能力(ナカニシヤ出版、自身編集・執筆)を用いて、子どもの変化を伝えている。これは、机上の内容に偏らず、本来の子どもの姿を目で見てとらえられるうえに、1人の子どもの変化を縦断的に1年間分見ることができるので、授業評価によると学生には非常に好評のようである。学生が飽きないように、毎回なるべくビデオ等を使って、子どもの姿を提示するようにしている。認知の生涯発達心理学では、高齢者の心理学を中心に講義を行っている。テキストを抜粋した話ばかりでなく、学生の興味がわくように自らの実験結果や論文を紹介しながら講義内容を伝えている。また紹介した自身の研究結果をもとに発展させながら、生涯発達のさまざまな理論を概説している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
実験で学ぶ発達心理学(ナカニシヤ出版、自身編集・執筆) 認知のエイジング:入門編(北大路書房、自身監訳) DVD 赤ちゃんの生後1年間の驚くべき能力(ナカニシヤ出版、自身編集・執筆)		2004年4月～現在	すべての授業・各時間において、パワーポイントを使用し、スクリーンに映して講義を行っている。加えて必ずパワーポイントの内容を概説したプリントを配布している。テキストも使用し、概説を行っている。テキストは、認知のエイジング:入門編(自身監訳)、実験で学ぶ発達心理学(自身編集・執筆)を使用。また、DVD 赤ちゃんの生後1年間の驚くべき能力(ナカニシヤ出版、自身編集・執筆)を見せながら子どもの実際の姿も紹介している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教務委員補佐(学科内)		2003年9月～2005年3月			
教務委員		2005年4月～2006年3月			
教務委員会委員長		2006年4月～2008年3月			
情報システム支援委員会委員長		2008年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
認知のエイジング:入門編	共訳	2004年3月	北大路書房	口ノ町康夫・坂田陽子・川口潤(監訳)	195頁～246頁
実験で学ぶ発達心理学	共著	2004年4月	ナカニシヤ出版	杉村伸一郎・坂田陽子(編者)	12頁～21頁
児童心理学の進歩 2007年度版	共著	2007年6月	金子書房	日本児童研究所(編)、担当頁 坂田陽子・湯川良三(著)	63頁～87頁
DVD 赤ちゃんの生後1年間の驚くべき能力	共著	2007年9月	ナカニシヤ出版	坂田陽子・高田雅弘(著者)	51分、解説書11頁
認知発達心理学入門	共著	2008年5月	ひとなる出版	加藤義信(編者)	12頁～27頁
認知心理学	共著	2008年9月	有斐閣	箱田裕司・荻原滋・都築誉史・川畑秀明(編者)	
論文					
Aging and shifts of visual attention in saccadic eye movements.	共著	2004年4月	Experimental Aging Research, Vol.30 (2).	©Kaneko,R., Kuba,Y., Sakata,Y., & Kuchinomachi,Y.	149頁～162頁
対話を伴うビデオ映像を幼児はよく憶えるか?	共著	2004年12月	発達心理学研究第15巻第4号	©坂田陽子・川合伸幸	376頁～384頁

方向感覚と視覚的注意の関連について	共著	2005年3月	コミュニケーションと人間(愛知淑徳大学学科論文集)第14巻	◎国玉絵美・坂田陽子	23頁～32頁
顔刺激に対する視覚的注意の予備的検討ー視覚認知の生涯発達モデルの構築をめざしてー	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部篇ー第6巻	◎坂田陽子・亀井 宗・熊田孝恒	95頁～102頁
時間に関する主観的感覚が時間評価に及ぼす影響ー若齢者と高齢者の比較ー	共著	2006年3月	コミュニケーションと人間(愛知淑徳大学学科論文集)第15巻	◎井上真里・坂田陽子	11頁～18頁
Skeleton video that allows users to interact with images.	共著	2006年7月	International conference on Collaboration Technologies (CollabTech) 2006 (Tsukuba, Japan)	◎Morikawa, O., Sakata, Y., & Maesako, T.	31頁～36頁
方法論からみた乳幼児発達研究の動向	単著	2008年3月	教育心理学年報 第47集		51頁～60頁
顔刺激からの注意の解放における加齢の影響	共著	印刷中	発達心理学研究	◎久保南海子・坂田陽子	

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1993年4月～現在	私立 住の江幼稚園 スクールカウンセラー
2001年6月～現在	独立行政法人 産業技術総合研究所 客員研究員
2003年8月, 2005年8月, 2007年8月	臨床発達心理士指定科目取得講習会講師
2003年10月1日～2004年9月30日	アイホン株式会社より受託研究
2005年4月～現在	私立 ポートタウン保育園 スクールカウンセラー
2006年1月1日～2006年12月31日	日本発達心理学会機関誌編集委員
2007年1月1日～2007年12月31日	日本発達心理学会機関誌常任編集委員
2008年1月1日～現在	日本発達心理学会機関誌編集委員
2007年4月～現在	犬山市保健センター幼児健康診査事後指導員



所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	清水 遵	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
授業評価に基づいた視聴覚教材の活用		2005年～現在		講義では脳や身体の構造、機能など生物学的な解説をする必要から、文系の学生にとっては難解という意見があった。教科書やプリントでは理解がたい箇所については動画などを取り入れた視聴覚教材を取り入れた。また、出来るだけ身近な問題を取りあげるようにして、学生のモチベーションを高めるよう努力している。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
パワーポイント及び動画教材		2005年～現在		シラバスに基づき毎授業時間のポイント及び簡単なプレゼンテーション実験をパワーポイントにより作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
コミュニケーション心理学科主任 (文学部コミュニケーション学科主任兼務)		2003年4月～2006年3月		(2002年4月より)		
コミュニケーション学部入試実施委員長		2004年4月～2006年3月				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
論文						
Effect of Robot-Assisted activity on senior citizen - Indicators of HVA, MHPG and CS concentration in saliva-	共著	2003年12月	Journal of Analytical Bio-Science Vol.26 No.5	◎K. Suga, M. Sato, H. Yonezawa, S. Naga, J. Shimizu	435頁～440頁	
痴呆高齢者へのロボット介在活動の可能性	共著	2003年12月	日本看護医療学会雑誌(第5巻第2号)	◎須賀京子・佐藤美紀・永忍夫・清水遵	1頁～8頁	
選択的注意が視覚刺激評価段階における反応準備処理に及ぼす影響	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第4巻)	◎加藤公子・吉崎一人・清水遵	49頁～56頁	
自己体験情動想起中の脳内活動源および情動情報伝達の検討 - 怒り情動を対象としたダイポール解析の試み-	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第4巻)	◎野々さゆり・清水遵・杉本助男	117頁～128頁	
居合い道の修練とリラックス効果	共著	2004年9月	健康創造研究会誌(第3巻第2号)	◎光永勉・永忍夫・清水遵	113頁～118頁	
悲しい気分と音楽聴取行動 - KJ法を用いた質的分析-	共著	2004年11月	情報処理学会研究報告(第57巻第11号)	◎安田恭子・西和久・清水遵	59頁～64頁	
神経性大食症クライアントにおける球体イメージーション体験療法中のEEGトポグラフィ- 4年7ヶ月間の軌跡-	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第5巻)	◎野々さゆり・江口昇男・古井景・清水遵・杉本助男	89頁～96頁	
The effect of lemon fragrance on simple mental performance and psychophysiological parameters during task performance.	共著	2005年12月	J. UOEH(産業医大誌) Vol.27 (4)	◎R. Kawamoto, C. Murase, I. Ishihara, M. Ikushima, J. Haraga, J. Shimizu	305頁～313頁	
食事摂取量に伴う知覚および生理指標の検討-平均摂取量と指尖脈波振幅比-	共著	2005年12月	看護人間工学研究誌 Vol.5	◎中島佳緒里・清水遵	11頁～16頁	
コンピュータVASの作成およびその妥当性の検討	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第6巻)	◎櫻井優太・山本正平・清水遵	103頁～113頁	

生理指標による感情障害のスクリーニングの検索-早期発見・早期診断における有用性-	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第6巻)	◎古井景・舟橋寛美・清水遵	11頁~18頁
代替・補完療法と個人特性との関係	共著	2006年3月	名古屋市立大学看護学部紀要(第6巻)	◎大川明子・加藤みわ子・宮地由紀・石黒千映子・久米龍子・竹谷英子・清水遵	7頁~12頁
軽度の運動が慢性ストレスにおよぼす影響について-唾液中Cortisol濃度、気分評定による検討-	共著	2006年3月	生物試料分析(第29巻第2号)	◎加藤みわ子・伊藤康宏・永忍夫・清水遵	146頁~150頁
Salivary buffering action as an indicator of chronic stress.	共著	2006年3月	Journal of Analytical Bio-Science Vol.29 No.2	◎Miwako Kato, Shinobu Naga, Jun Shimizu	157頁~161頁
足浴の効果の検討-皮膚表面温, 深部温, 唾液中s-IgA及び主観的状态の変化-	共著	2006年3月	愛知きわみ看護短期大学紀要(第2巻)	◎須賀京子, 白井裕子, 百合純子, 佐久間佐織, 藤井徹也, 加藤みわ子, 清水遵	53頁~62頁
基礎看護学実習における学生のストレスと免疫能	共著	2006年3月	愛知きわみ看護短期大学紀要(第2巻)	◎須賀京子, 井野恭子, 佐久間佐織, 坂田由紀, 加藤みわ子, 清水遵	63頁~68頁
高齢者への能動的・受動的音楽療法の効果 -生理指標を用いて-	共著	2006年6月	日本音楽療法学会誌(第6巻1号)	◎久保田進子, 伊藤孝子, 中川浩, 加藤みわ子, 永忍夫, 清水遵	17頁~22頁
個人の不安特性が甘味感受性におよぼす影響	共著	2006年6月	日本食生活学会誌(第17巻1号)	◎加藤みわ子, 伊藤康宏, 永忍夫, 清水遵	44頁~48頁
文字属性分類の課題切り替え-事象関連脳電位を用いた研究-	共著	2006年12月	生理心理学と精神生理学(第4巻3号)	◎梅林薫, 沖田庸嵩, 清水遵	237頁~247頁
ストレス反応タイプの違いが内分泌反応に及ぼす影響と音楽のストレス軽減効果	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第7巻)	◎山本正平, 清水遵	141頁~152頁
自覚されないストレスラーとしての7°ヘッドダウンベッドレスト状態(7° Head-Down Tilt)の心理的および生理的評価	共著	2007年3月	生物試料分析(第30巻2号)	◎加藤みわ子, 伊藤康宏, 長岡俊治, 永忍夫, 清水遵	144頁~149頁
Positive musical effects on two types of negative stressful condition.	共著	2007年4月	Psychology of Music Vol.35 No.2	◎Yamamoto, M., Naga, S., Shimizu, J.	249頁~275頁
蓄積的疲労感が塩味の閾値におよぼす影響	共著	2007年10月	日本食生活学会誌(第18巻2号)	◎加藤みわ子, 伊藤康宏, 永忍夫, 清水遵	140頁~144頁
大学生の長期に渡る試験ストレスが唾液中MHPG濃度, HVA濃度におよぼす影響	共著	2007年12月	生物試料分析(第30巻5号)	◎加藤みわ子, 伊藤康宏, 永忍夫, 清水遵	404頁~414頁
Impairment of Recovery by Relaxing Music from Uncontrollable Stress.	共著	2007年12月	Toukai Journal of Psychology Vol.3	◎Yamamoto, M. & Shimizu, J.	28頁~39頁
ペットロボット介入活動が認知症高齢者の心身に及ぼす影響 -唾液試料を指標とした検討-	共著	2008年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部編-(第8巻)	◎清水遵, 須賀京子, 永忍夫	101頁~110頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月~現在	日本生理心理学会 評議委員(1998年4月より)
2004年4月~現在	日本生理心理学会 編集委員
2006年5月~現在	日本生理心理学会 編集副委員長

所属 コミュニケーション学部	職名 講師	氏名 CHARLEBOIS, Justin M.	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Students are challenged to critically engage with linguistics and communication-related issues. They are evaluated through written assignments		2006～present	Learning is supported through the use of a variety of mediums including lecture, group work, and whole class discussions.		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Textbooks, handouts, and question and answer sessions support student learning		2006～present	A variety of primary and secondary source materials are used.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
映画で日本文化を学ぶ人のために	共著	2007年10月		窪田守弘	26頁～49頁
Intercultural Communication: A Reader	共著	2009年	12th edition: Tompson-Wadsworth	L.A. Samovar, R.E. Porter, E.R. McDaniel	Language, culture, and social interaction 237頁～243頁
論文					
How Japanese Frame Community of Practice Involvement	単著	2006年5月	異文化コミュニケーション		75頁～88頁
"Having it All": Sex and the City and FPDA	単著	2007年3月	愛知大学論集コミュニケーション		13頁～23頁
Repositioning Discursive Psychological Research	単著	2008年3月	愛知大学論集コミュニケーション		13頁～22頁
The Discursive Construction of Having-it-all	単著	2008年5月	異文化コミュニケーション		93頁～105頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005～present		異文化コミュニケーション学会; Member, Journal Editorial Board			
2007～present		日本社会学会			

所属 コミュニケーション学部	職名 准教授	氏名 DANNY, Molden T.	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
I teach courses in communication, specifically in rhetoric and argumentation. These classes are usually discussion oriented and use both standard pencil and paper exams as well as performance based evaluation.		2003年4月～2008年3月	Presentations include debates, speeches, presentations and skits. Pen and paper exams included both essay type exams and multiple choice exams.		
2 作成した教科書、教材、参考書					
In most courses, I use materials that I produce. I have used textbooks in some classes, however, I prefer to generate my own worksheets and exams. In some cases, I use newspapers and magazines as part of the text of the class.		2003年4月～2008年3月	Materials produced include the main text for both a class in writing and presentation and a more detailed text for communication strategies (a class in debate) for both the first year and the second year of the class.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
東海英語教育実践者フォーラムで発表しました。		2006年8月17日	日本の英語教育の進む道		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
論集編集委員会		2003年～2008年			
国際交流委員会		2005年～2008年			
情報システム支援委員会		2006年～2008年			
成績評価法改善検討委員会		2006年～2008年			
GCC盛置準備委員会		2007年～2008年			
GCC運営委員会		2008年～現在に至る			
言語コミ専攻教務委員会		2007年～2008年			
交流文化盛置準備委員会		2008年～現在に至る			
GCC教務委員会		2008年～現在に至る			
コミュニケーション学部教務委員会		2008年～現在に至る			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Eminem and the Rhetoric of "Real": The implications of "keeping it real" on ethics and credibility. in Communication Ethics, Media, & Popular Culture	単著	2005年	Peter Lang Publishing, Inc.		181頁～198頁
Sunshine 1, 2, 3: Sunshine English Course 1, 2, 3	共著	2005年2月	Kairyudo	佐野正之、山岡俊比古、松本青也、佐藤寧 ほか33名	
論文					
Happily Ever After? Children's literature about internment	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部篇ー第4号		99頁～104頁
Virtual Communities: Seeking out community on the internet	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部篇ー第5号		115頁～124頁
On Heroes and Villains in Classic Rhetoric: Why we study the past to understand the present	単著	2005年3月	言語文化Vo.l.13		36頁～45頁
No Sense of Place: Comparing Disney's Epcot and Aichi's Expo	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部篇ー第6号		65頁～70頁
Assumptions and Translations: Janet Malcolm's Freudian Rhetoric	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部篇ー第7号		87頁～94頁

Magical Group Realism: Waterboys and Swing Girls as examples of Japanese Cinema and Culture	単著	2007年3月	言語文化Vol.15		21頁～30頁
その他					
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年11月～2006年11月	米国ナショナルコミュニケーション(NCA)学会企画委員				
2003年11月～2004年11月	米国NCA Asian Pacific Studies Division副部長				
2004年11月～2005年11月	米国NCA Asian Pacific Studies Division部長				
2005年11月～2006年11月	米国NCA Asian Pacific Studies Division前部長				
2003年～現在に至る	外国語教育メディア学会中部支部運営良委員				

所属	コミュニケーション学部	職名	准教授	氏名	杜 英起	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
画像教材の工夫		2008年4月		自作の教材を使い、中国語を教えると同時に、中国の歴史、中国人の生活、民族風習、日中文化交流の歴史、文化の違いなど、ビデオ、DVDなどを利用して、生徒に生の中国情報を伝えるように工夫しています。そのため、学生達は中国に対する興味が湧いてきたようです。これからも、講義内容を合わせて、新しい日中情報を画像に取り入れて、生徒に紹介しようと思います。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
中国語教材の作成 中国語聴解Ⅰ、Ⅱ 日中比較文化論 中国語聴解Ⅲ、Ⅳ ビジネス中国語 中国語作文入門 中国語文学講読Ⅰ、Ⅱ 現代中国事情		2006年4月 2005年4月 2006年4月 2005年4月 2005年4月 2004年4月 2005年10月		他人と共同で、中国語教材を作りました。中国語聴解ⅠⅡ 日中文化比較論中国語聴解ⅢⅣ ビジネス中国語中国語作文入門中国語文学講読ⅠⅡ 中国現代事情		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
多媒体在華語教学中的应用与存在的問題		2003年12月		台湾で開催する第7回世界華語文教学検討会に参加し、“多媒体在華語教学中的应用与存在的問題”という論文を発表した		
オリジナルe-Learning中国語教育の試み		2004年9月		私立大学情報教育協会が主催する「情報発表会」で、“オリジナルe-Learning中国語教育の試み”という論文を発表し、奨励賞を受賞した		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
中・日文化比較、隣家之眼	共著	2005年3月	南開大学出版社	馮富栄・杜英起	86頁分	
商務中文	共著	2005年3月	マナハウス	馮富栄・杜英起	86頁分	
漢訳日多媒体教程	共著	2007年11月	北京外語教学及研究出版社	馮富栄・杜英起	50頁分	
中国語新幹線 商務表現 上	共著	2008年6月	北京語言大学出版社	馮富栄・杜英起	50頁分	
中国語新幹線 商務表現 下	共著	2008年6月	北京語言大学出版社	馮富栄・杜英起	50頁分	
論文						
漢日比喩形象的民族特色	単著	2001年12月	漢字文化 第4期		48頁～50頁	
漢語植物詞文化函義来源例談	単著	2001年12月	語文之友 第24期		102頁～105頁	
漢語方位詞的文化函義	共著	2003年2月	異文化コミュニケーション研究, 第6号	馮富栄・杜英起	163頁～169頁	
中国古代の人名文化	共著	2003年3月	愛知淑徳大学ーコミュニケーション学部編一, 第3号	馮富栄・杜英起	97頁～104頁	
日本における中国語教育について①	共著	2003年3月	言語文化, 第11号	馮富栄・杜英起	38頁～48頁	
日本における中国語教育について②	共著	2003年3月	愛知淑徳大学ーコミュニケーション学部編一, 第4号	馮富栄・杜英起	143頁～156頁	
論日本の結構改革	単著	2003年3月	言語文化, 第12号		26頁～36頁	
簡述中日漢字文化的異同	単著	2004年3月	愛知淑徳大学ーコミュニケーション学部編一, 第5号		45頁～60頁	
オリジナルe-Learning中国語教育の試み	共著	2004年11月	情報教育方法研究, 第7巻	馮富栄・杜英起	11頁～15頁	
日中飲食文化異同	単著	2007年3月	愛知淑徳大学ーコミュニケーション学部編一, 第7号		39頁～47頁	

漢字中の数字文化	単著	2007年9月	高校外語教学及研究2007 年第三集		4頁～7頁
中国漢字字体文化	単著	2007年12月	漢語教学研究2006、2007 年号		139頁～149頁
漢字和漢語語彙	共著	2008年3月	言語文化, 第16号	王澤鵬・杜英起	1頁～4頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	新美明夫	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
		2004年度～現在		「授業に関するアンケート」に基づき、「パーソナルメディア論」等の授業における配付資料、提示資料を改訂。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
心理尺度データベース		2001年8月～現在		「心理学研究法調査演習」「卒業研究」等で、学生が随時利用できるように、学内LAN上で公開している心理尺度の教育用データベース。現在1716尺度を掲載。順次蓄積中		
心理学研究法調査演習: 累積資料倉庫		2003年度～現在		「心理学研究法調査演習」の成果として学生たちの作成した調査票と報告書を、先輩たちが参照できるよう学内LAN上で公開。		
卒業論文のウェブ資料化		2003年度～現在		「専門演習」「卒業研究」の成果としてのゼミ生の卒業論文を、先輩たちが参照できるよう学内LAN上で公開。		
データ解析 I 授業資料		2002年度～2006年度		「データ解析 I」における配付資料、および関連授業のテキストとの対応関係をウェブ資料として学内LAN上で公開。		
データ解析 I 資料集2007年度版		2007年4月		2年次科目である「データ解析 I」のテキストとして、共同担当者である小川一美先生と共同で作成。		
データ解析 I 資料集2008年度版		2008年4月		2年次科目である「データ解析 I」のテキストとして、共同担当者である小川一美先生と共同で作成。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
コミュニケーション学部教務委員会 委員長		2002年4月～2006年3月				
全学履修制度検討委員会 委員		2005年2月～2006年3月				
コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科主任		2006年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
調査実験 自分でできる心理学	共著	2007年4月	ナカニシヤ出版	大野木裕明・宮沢秀次・二宮克美(編)	146頁～149頁	
論文						
大学時代の友人関係の維持と役割行動期待	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－第4号	◎新美明夫・松尾貴司・永田忠夫	105頁～115頁	
携帯電話利用における結婚効果について	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－第5号	◎新美明夫・松尾貴司・永田忠夫	61頁～76頁	
初期成人期の母娘関係に関する研究－母娘システムとしての分析－	共著	2005年3月	医療福祉研究 第1号	◎永田忠夫・新美明夫・松尾貴司	94頁～113頁	
初期成人期の母娘関係に関する研究(Ⅱ)－母娘システムの分散構造分析－	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－第6号	◎新美明夫・永田忠夫・松尾貴司	71頁～82頁	
教育用「心理尺度データベース」の改訂(2006年版)	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部篇－第7号	◎永田忠夫・新美明夫	95頁～110頁	
初期成人期にある娘とその母親との関係－母娘システムとしての分析－	共著	2007年5月	家族心理学研究21巻1号	◎永田忠夫・新美明夫・松尾貴司	31頁～44頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						
1979年～現在		日本心理学会会員				
1993年～現在		日本教育心理学会会員				



1980年～現在	日本特殊教育学会会員
2003年～現在	日本社会心理学会会員
2006年～現在	日本家族心理学会会員
1985年～現在	日本ヒューマンインタフェース学会会員
1989年～現在	東海心理学会会員

所属	コミュニケーション学部	職名	准教授	氏名	西出隆紀	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
大学院生に対する授業アンケート		2007年11月		コミュニケーション研究科FD交流会にて発表		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
コミュニケーション学部進路支援委員		2003年～2005年				
コミュニケーション学部FD委員		2006年～2008年				
コミュニケーション研究科進路支援委員		2005年～2006年				
コミュニケーション研究科FD委員		2007年～現在				
コミュニケーション学部学生生活委員		2008年～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
「21世紀の心理臨床」	共著	2003年6月	ナカニシヤ出版	蔭山英順編	47頁～59頁	
「臨床心理学から見た生徒指導・教育相談」	共著	2004年4月	ブレーン出版	川島一夫・勝倉孝治編	55頁～67頁	
ミルトン・H・エリクソン全集 第2巻 感覚、知覚および心理生理学的過程の催眠性変容	共訳	2005年6月	二瓶社	羽白誠編訳	314頁～415頁	
心理査定実践ハンドブック	共著	2006年9月	創元社	氏原寛・岡堂哲雄編	779頁～784頁	
論文						
「思春期不登校児に対するグループアプローチ」(紙上シンポジウム)	共著	2003年	International Journal of Counseling and Psychotherapy, Vol. 1.	西村馨・西出隆紀	13頁～17頁	
Study on feelings of school avoidance, depression, and character tendencies among general junior high and high school students.	共著	2003年	Psychiatry and Clinical Neurosciences vol. 57	Honjo S., Sasaki Y., Kaneko H., Tachibana K., Murase S., Ishii T., Nishide Y. & Nishide T.	464頁～471頁	
否定的評価懸念が強迫傾向に及ぼす影響についてー完全主義との関連でー	共著	2004年3月	コミュニケーションと人間第13巻	鈴木恵美・西出隆紀	53頁～62頁	
Locus of controlと青年期の友人関係についてー被統制感と心理的距離という指標を用いてー	共著	2006年3月	コミュニケーションと人間第15巻	橋本明美・西出隆紀	29頁～33頁	
消防職員の間関係・一次ミーティングが惨事ストレス反応に及ぼす影響について	共著	2007年3月	コミュニケーションと人間第16巻	矢澤沙緒里・西出隆紀	61頁～70頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						
1992年～現在		名古屋市障害児保育巡回指導員				
2000年～2006年		名古屋市スクールカウンセラー(桜山中学校)				
2006年～現在		名古屋市スクールカウンセラー(原中学校)				
2003年～2007年		日本家族心理学会編集委員				

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 二宮 昭	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートの実施およびそれに基づく教材呈示方法の改善		2004年6・11月、2005年6月・11月、2006年6・11月、2007年6・11月	大学の自己評価の取り組みの1つとして実施された学生による授業アンケートを行い、その結果に基づいてパワーポイントなどを用いた分かりやすい教材の呈示方法の改善を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
大学院コミュニケーション研究科教務委員長		2004年4月～2005年3月			
教育内容等改善検討委員会委員		2004年4月～2006年3月			
心理臨床相談室室長		2005年4月～現在			
大学院コミュニケーション研究科心理学専攻主任		2005年4月～2008年3月			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
障害者の『こころ』－育ち、成長、かかわり－	共著	2003年7月	学術図書出版	編集者:池田勝昭・目黒達哉 共著者:池田勝昭・二宮昭他10名	138頁～152頁
障害特性の理解と発達援助 第2版	共著	2006年5月	ナカニシヤ出版	編集者: ㄆ外字(ca47)地勝人 他共著者: ㄆ外字(ca47)地勝人・二宮昭他36名	131頁～140頁
障害者の心理・『こころ』－育ち、成長、かかわり－	共著	2007年4月	学術図書出版	編集者:池田勝昭・目黒達哉 共著者:池田勝昭・二宮昭他18名	138頁～151頁
論文					
動作法的アプローチによる自閉性障害児のコミュニケーションの発達援助－子どもと援助者との「やりとり」の分析－	単著	2004年3月	場としての臨床－愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要－, 第8巻		15頁～21頁
コミュニケーションの視点からみた重度・重複障害の行動問題	単著	2004年3月	2001～2003年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)報告書 行動特性とその臨床的対応に関する心理学的研究		16頁～20頁
動作法体験を通した中学生の「生きる力」の変容－自体感・無気力感からの検討－	共著	2007年3月	リハビリテーション心理学研究, 第33巻2号	◎平野銘子・二宮昭	37頁～50頁
心理リハビリテーションのコミュニケーション－「わたし」「あなた」そして「なかま」－	単著	2007年3月	場としての臨床－愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要－, 第11巻		3頁～11頁
胎児異常の告知から産後36ヵ月までの母親の不安と抑うつ－縦断的研究－健常児をもつ母親との比較から－	共著	2007年4月	母性衛生, 第48巻1号	◎堀田法子・種村光代・鈴木薫・山口孝子・下方浩史・二宮昭	29頁～37頁
幼児における他者をだます能力の発達－誤信念課題への実験参加形態とだまし意図との関連から－	共著	2008年3月	コミと人間, Vol.18	◎浅井洋美・二宮昭	1頁～10頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2005年3月		日本リハビリテーション心理学会監事			
2003年4月～現在		春日井市心理リハビリテーション事業講師			

2004年4月～現在  
2005年4月～現在  
2006年12月～現在

東海・北陸心理リハビリテーション研究会会長  
日本リハビリテーション心理学会理事  
日本特殊教育学会監事

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	馮 富榮	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
1) 授業の工夫;2) 宿題提出の仕方の工夫;3) 練習問題作成の工夫;4) e-Learning中国語教育の試み。左の工夫によって、授業に関するアンケート調査からは「1)楽しい;2)自然に頭に本文が入る」などの結果が得られた。5段階評価の15項目の平均は、ここ数年、すべて4.5程度である。教育効果も上がり、学生の質も上がった。詳しくは右の概要を参照		2003年4月～現在		1) 毎回単語テストをすることによって、普段の復習を促すように工夫した;2) 繰り返して読ませることによって、中国語の表現が自然に身につくように工夫した;3) メディア教材を作成することによって中国語学習への興味を持たせ、学習への意欲を高めることができるように工夫した。4) HPを利用して宿題を提出してもらうので、繰り返し練習することが必要である。なぜなら、練習問題がすべて正解しないと、宿題の提出はできないようになっているからである。よって、学習した内容をマスターした学生が増えた。5) HSK試験問題の出題方式に倣って練習問題を作ったので、学生のHSK受験成績が上がった。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
「中国語入門」「中国語作文入門」「中国語読解入門」「中国語会話入門」「中国語聴解Ⅰ」「中国語聴解Ⅱ」「中国語聴解Ⅲ」「中国語聴解Ⅳ」「中国語表現」「中国文学講読Ⅰ・Ⅱ」「中国文学Ⅰ・Ⅱ」「日中比較文化論」「中国現代事情」「ビジネス中国語Ⅰ・Ⅱ」と「中国語読解1A・2」、計15冊の教材を他の先生と協力して作成した。今年は非中国語専攻の学生向けの「中国語聴解」の教材の作成に取り組んでいる		2003年4月～現在				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
社団法人 私立大学情報教育協会 全国大学IT活用教育方法研究発表会にて「オリジナルe-Learning中国語教育の試み」という研究を発表した。		2004年11月		授業の質的向上が認められ、私立大学情報教育協会より奨励賞を受賞した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
学部学生生活委員会委員長		2008年4月～2010年3月				
全学中国語教育検討委員会主任		2003年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
中・日文化比較——隣家之眼——	共著	2005年5月	南開大学出版社	馮富榮編	127頁を担当	
国際日本語能力テスト1、2級最新聴力補導	共著	2005年6月	南開大学出版社	馮富榮編	80頁～226頁	
国際日本語能力テスト3、4級最新聴力補導	共著	2005年10月	南開大学出版社	馮富榮編	71頁～200頁	
多媒体HSK(基礎)模擬考試試題集	単著	2006年3月	北京語言大学出版社		165頁を担当	
漢訳日多媒体教程	共著	2007年10月	北京外語教学与研究出版社	馮富榮編	1頁～160頁	
中国語新幹線 初級表現上	単著	2008年3月	北京語言大学出版社		総67頁	
中国語新幹線 初級表現下	単著	2008年3月	北京語言大学出版社		総96頁	
中国語新幹線 商務表現上	共著	2008年6月	北京語言大学出版社	馮富榮編	51頁～123頁	
中国語新幹線 商務表現下	共著	2008年6月	北京語言大学出版社	馮富榮編	51頁～124頁	
中国語新幹線 中級表現上	単著	2008年4月	北京語言大学出版社		総129頁	
中国語新幹線 中級表現下	単著	2008年4月	北京語言大学出版社		総124頁	
論文						
日本における中国語教育について②	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部編—第4号	馮富榮・杜英起	97頁～104頁	
オリジナルe-Learning中国語教育の試み	共著	2004年11月	情報教育方法研究 第7巻	馮富榮・杜英起	11頁～15頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						

1997年～現在	日本中国語学会
1992年～現在	日本教育心理学会
1997年～現在	現代中国語研究会
2002年～現在	日本語教育学会

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	古井 景	大学院における研究指導 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
精神医学の講義において、学生一人一人にそれぞれ別の事例を与え、各自で事例の検討考察をさせている。授業評価に於ても、知識偏重ではなく、臨床精神医学を実感できると好評を得ている。		2003年～現在		学生一人一人にそれぞれ別の事例を与えるため、他者のまねではなく、各自で事例の検討考察をしなければならない。また、事例の考察であるため、用語説明のような紋切り型の記述ではなく、何かの資料をそのまま転記するような作業では対応できない。授業で学んだ知識を十分に理解し、具体的な事例の症状・エピソードに結びつけて知識を活用し、自分自身の考えで課題に取り組む様に工夫している。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
教科書:心理療法の実践、 医療現場に生かす臨床心理学、 ゴム風船の中で生きる若者たち ―自称「うつ病」とその対応―、 臨床心理学にとつての精神科臨床 ―臨床の現場から学ぶ― 参考書:心理療法ハンドブック		2004年4月 2004年9月 2006年7月  2007年6月  2005年9月		心理療法を学ぼうとする上での実践的な内容で書かれた入門書に加え、医療現場で必要とされる臨床心理学の知識、企業で抱える「うつ」の問題への理解と対応、精神科における臨床心理学と言った、各分野に分かれた内容で、臨床心理学を学ぶ学生、臨床心理士を目指す大学院生の教科書となる書籍を作成。 また、心理療法をする上で必要な事柄をまとめた参考書(辞書)を作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
学科学生生活委員		2003年4月～2005年3月				
大学院学生生活委員		2004年4月～2005年3月				
大学院コミュニケーション研究科学生生活委員		2004年4月～2006年3月				
学科進路支援委員		2006年4月～2008年3月				
大学院進路支援委員		2006年4月～2008年3月				
学校医		2005年4月～現在				
保健管理室長		2007年4月～現在				
教養教育委員		2008年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
心理療法の実践	共著	2004年4月	北樹出版	成田義弘編	150頁～163頁	
医療現場に生かす臨床心理学	共著	2004年9月	朱鷺書房	菅佐和子編	19頁～25頁、194頁～199頁	
心理療法ハンドブック	共著	2005年9月	創元社	乾吉佑他編	512頁、530頁、555頁～556頁、558頁～559頁	
ゴム風船の中で生きる若者たち ―自称「うつ病」とその対応―	単著	2006年7月	ゆいぽおと		224頁	
臨床心理学にとつての精神科臨床 ―臨床の現場から学ぶ―	共著	2007年6月	人文書院	渡辺雄三 総田純次 編	292～298頁	
論文						
医師からみた臨床心理アセスメント	単著	2003年7月	臨床心理学 第3巻4号		486頁～493頁	
職場不適応の理解と対応	単著	2004年3月	場としての臨床―愛知淑徳 大学心理臨床相談室紀要 ―第8巻		3頁～8頁	
バウム・テストにおける得点化の 試み	共著	2004年3月	場としての臨床―愛知淑徳 大学心理臨床相談室紀要 ―第8巻	©田中久美子・古井景・塩見 利明	9頁～14頁	

高校生の自我機能評価と教諭の生徒に対する印象との関係についての研究	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部編ー第4号	◎森田英嗣・寺本亮・古井景	173頁～188頁
医療人としてのコミュニケーションとインフォームドコンセント	単著	2004年3月	医療放射線防護 NEWSLETTER No.39		52頁～60頁
職域における抑うつと完全主義との関係について	共著	2004年9月	産業衛生学雑誌46巻5号	◎清水光栄・古井景	173頁～180頁
現実適応と抑うつ	単著	2005年1月	産業保険愛知 Vol.26		2頁～9頁
神経性大食症クライアントにおける球体イメージネーション体験療法中のEEGトポグラフィ	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部編ー第5号	◎野々さゆり・江口昇勇・古井景・清水遵・杉本助男	89頁～96頁
日本版I FEEL Picturesの事例的研究ー心理的問題が疑われるケースの検討ー	共著	2005年3月	コミュニケーションと人間 Vol.14	◎榎原恭子・古井景	43頁～52頁
母親と妊婦の日本版 I FEEL Pictures 反応の比較検討	共著	2005年10月	東海心理学研究第1巻	◎長屋佐和子・辻佐知子・古井景・深津千賀子	30頁～38頁
Acute effects of cigarette smoking on the heart rate variability of taxi drivers during work	共著	2005年10月	Scand. J. Work Environ Health;31(5)	◎Kobayashi, F., Watanabe, T., Akamatsu, Y., Furui, H., Tomita T., Ohashi, R., Hayano, J.	360頁～366頁
広汎性発達障害と診断された事例への心理療法ーSullivan理論を中心とした事例の理解と考察ー	共著	2006年3月	コミュニケーションと人間 Vol.15	◎熊谷明子・古井景	45頁～54頁
生理指標による感情障害のスクリーニングの検討ー早期発見・早期診断における有用性ー	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部編ー第6号	◎古井景・船橋寛美・清水遵	11頁～18頁
ゴム風船の中で生きる若者たち	単著	2006年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第10巻		15頁～25頁
育児教室に通う母親を対象にした情緒応答性を把握する試みー日本版 I FEEL Pictures を用いた事例研究ー	共著	2007年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第11巻	◎坪井久美子・古井景	39頁～48頁
対人援助職を目指す学生の適応と情動知能ならびにセルフ・エスティームとの関係(2)	共著	2007年8月	ヒューマン・ケア研究 第8号	◎管千索・管眞佐子・小正浩徳・古井景・管佐和子	51頁～68頁
職場不適応事例への理解と対応ー精神的自立に目を向けて	単著	2007年12月	産業保健15巻4号		216頁～219頁
軽度の発達障害と軽度な発達障害	単著	2008年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第12巻		15頁～19頁
「バウム・テストで枠をつける効用ーロールシャッハ・テストとのテストバッテリーにおいてー	共著	2008年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第12巻	◎藤吉倫子・寺本亮・田丸陽子・森田英嗣・熊谷明子・林友里恵・坪井久美子・古井景	21頁～26頁
閉塞性睡眠時無呼吸患者における昼間の眠気とうつ症状との関係についてーうつと不眠をめぐってー	共著	2008年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第12巻	◎松岡亜由子・塩見利明・古井景	27頁～35頁
その他					
竹内論文「強い信念と精神力を持ってやれる自分を作りたい」と訴えて来談した男性との面接課程 をよんで	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集ーコミュニケーション学部編ー第4号		89～92頁
受理面接の重要性と見立ての意義	単著	2005年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第9巻		55頁～56頁
非日常的で現実的な場から日常的な現実の場へ	単著	2006年3月	場としての臨床ー愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要ー第10巻		49頁～52頁
「主訴」として記載されるものの意味ー永田美恵子さんのケース報告に寄せてー	単著	2006年3月	椋山臨床心理研究 第6号		100頁



親による乳児の情緒読み取りに関する研究－育児支援における有用性の検討－	共著	2006年5月	2003・2004・2005年度科学研究費補助(基盤研究C)研究成果報告書	研究代表者 深津千賀子 研究分担者 古井景, 濱田庸子, 井上果子	154頁
-------------------------------------	----	---------	---------------------------------------	--------------------------------------	------

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2002年4月～現在	日本心身医学会評議員
2006年4月～現在	中部心身医学会評議員
2003年4月～2006年3月	愛知臨床心理士会常任理事
2003年4月～現在	労働福祉事業団愛知産業保健推進センター産業保健特別相談員
2008年4月～現在	日本不安障害学会評議員
2007年5月	第59回中部心身医学会会長
2007年6月	第14回日本産業保健学会 教育講演Ⅱ
2008年3月	第16回日本総合診療学会 教育講演

所属 コミュニケーション学部	職名 准教授	氏名 McGEE, Jennifer J.	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Computers and Communication, Media Literacy, Argumentation, Public Speaking		2003年4月～2008年3月	I focus on practical learning through doing; students do a great deal of speaking, arguing, and using computers in my class to get practical experience with language skills. I evaluate largely through essays, speeches, and other kinds of presentations.		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Sometimes I use textbooks in classes, however, I prefer to make my own materials and exams.		2003年4月～2008年3月	I usually give students readings and examples drawn from books of essays or from current events (newspapers, magazines, etc. ) I sometimes make my own readings to clarify points for the students.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Debate Coaching presentation at Aichi Educational Center		2003年8月～2007年8月	Every August I give a presentation about how to coach and teach debate for high teachers in the Aichi area.		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報メディアサービス委員会		2004年～2005年			
進路支援委員会		2004年～現在			
教養教育委員会		2004年～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
“In the End, it’s All Made Up”: The Ethics of Fanfiction and Real Person Fiction. in Communication Ethics, Media, & Popular Culture Eds. Phyllis M. Japp, Mark Meister, and Debra K. Japp. (ISBN:0- 8204-7119-4)	単著	2005年	Peter Lang Publishing, Inc.		146頁～160頁
論文					
A Real Man: Gender and Sexuality in the United States '2004 Public Election.	単著	2005年3月	言語文化Vol.13		25頁～35頁
Online Citations: A Retrospective of Emerging Norms in Early Publications.	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－コミュ ニケーション学部篇－第5 号		107頁～114頁
Imagined Communities on Display: Country Pavilions at the 2005 Aichi Expo.	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－コミュ ニケーション学部篇－第6 号		115頁～124頁
Stephen Colbert and the Washington Correspondents’ Dinner: Swiftian Irony and Multiple Audiences	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－コミュ ニケーション学部篇－第7 号		81頁～86頁
Romantic, Strange, and Cool:3 Visions of Japan in Western Popular Culture.	単著	2007年3月	言語文化Vol.15		13頁～20頁
その他					
III 学会等および社会における主な活動					

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 <b>McDANIEL, Edwin R.</b>	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Students are challenged to engage in a wide variety of learning activities, which draw on classroom activities and on outside work. Each lesson attempts to demonstrate how the student can make immediate practical application of the information.		San Diego State University 2003年4月～2004年12月 Aichi Shukutoku University 2005年4月～Present.		Depending on course subject, a mix of lecture, student interactive discussion, and practical application activities were employed. Students were measured through written assignments and oral reports. 2004年 Outstanding Faculty Award, San Diego State University; 2005年 Outstanding faculty Award, San Diego State University.	
2 作成した教科書、教材、参考書					
To support student learning, a variety of course specific materials have been constructed, each related to a specific learning objective.		San Diego State University 2003年4月～2004年12月 Aichi Shukutoku University 2005年4月～Present.		Prepared materials include: Lecture outlines; case studies, topic handouts, reference lists, reading packets, and course workbooks. New and evolving information is continually incorporated into the course materials.	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Panel member at Western States Communication Association Annual Convention.		2004年2月		Panel title: Widening the Online Circle: Pedagogy and Practice. Presented information concerning the advantages of using online programs to provide students continuing information on course activities and grades.	
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Intercultural Communication: A Reader	共著	2005年3月	11th ed; Tompson-Wadsworth	L.A. Samovar & R. E. Porter	This is an edited text consisting of 448 pages.
Communication Between Cultures	共著	2006年3月	6th ed.; Tompson-Wadsworth	L. A. Samovar & R. E. Porter	28頁～80頁; 123頁～153頁; 229頁～255頁
Speaking in a Multicultural Society	共著	2006年3月	Oxford University Press	L. A. Samovar	1頁～113頁
Intercultural Communication: A Reader	共著	2008年3月	12th ed.; Cengage - Wadsworth	L. A. Samovar & R. E. Porter	This is an edited text consisting of 482 pages.
論文					
Changing Japanese Organizational Communication Patterns: The influence of Information Technology	単著	2004年12月	San Diego State University Center for International Business and Research: Working Paper Series C-040-015		1頁～12頁
Understanding Intercultural Communication: A Review of the Basics	共著	2005年3月	Intercultural Communication: A Reader, 11th ed; Tompson-Wadsworth	L. A. Samovar & R. E. Porter	6頁～15頁
Culture and Communication in Japanese Organizations	単著	2006年1月	Freiberger Beitrage zur interkulturellen und Wirtschaftskommunikation		249頁～270頁
Japanese Cultural Patterns in Contemporary Literature+ An Application of Opler's Cultural Themes Theory	単著	2006年3月	Bulletin of Aichi Shukutoku University: Faculty of Communication Studies, Vol. 6		47頁～56頁
Group Affiliation in Contemporary Japan	単著	2007年3月	Bulletin of Aichi Shukutoku University: Faculty of Communication Studies, Vol. 7		67頁～79頁

Understanding Intercultural Communication: Some Working Principles	共著	2008年3月	Intercultural Communication: A Reader, 12th ed.; Cengage - Wadsworth	L. A. Samovar & R. E. Porter	6頁～17頁
Enculturation of Values in the Educational Setting: Japanese Group Orientation	共著	2008年3月	Intercultural Communication: A Reader, 12th ed.; Cengage - Wadsworth	E. Katsumata	365頁～376頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Japan-US Communication Association	Founding Member (2002年); Member at large of Executive Committee (2003年～Present); Paper reviewer for JUCA panels at National Communication Conference (2003, 2004, 2005, 2007年).
National Communication Association	Member (2001年～Present)
Western Journal of Communication	Article Reviewer 2003年
Japan America Society (Los Angeles, CA)	Member (2001年～Present)
Urasenke School of Tea, San Diego, CA Chapter	Member (2001～2008年); Advisor (2003～2008年); Master of Ceremonies 25th Anniversary Celebration (2004年7月); Representative to 1st North American Conference (2003年9月).
Japanese Friendship Garden, San Diego, CA	Member (2001～2008年); Volunteer (2001～2005年)
Travelers Aid Society - San Diego, CA Airport	Worked as volunteer at information desk two days each month (2004年7月～2005年12月)

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 松尾貴司	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2004年度の授業アンケートの結果を踏まえて、授業における提示資料の電子化を実施		2005年4月～	「ノンバーバル行動」および「比較心理学」に関する授業アンケートの結果、授業時に提示する資料が分かりづらいとの指摘があり、これに対応するためにすべての授業資料を電子化した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
比較心理学およびノンバーバル行動のWeb版授業資料の作成		2005年4月～	1. で記したように講義資料を電子化し、これらの資料をWeb上で自由に見られるように加工、公開した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報教育センター運営委員		2005年4月～			
日本学術振興会特別研究員の受入		2006年4月～2007年3月	日本学術振興会特別研究員を受入、研究指導をおこなった。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
大学時代の友人関係の維持と役割行動期待	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－, 第4号	◎新美明夫・永田忠夫	105頁～115頁
携帯電話利用における結婚効果について	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－, 第5号	◎新美明夫・永田忠夫	61頁～76頁
非言語的行動の調整に関する覚醒理論検討のための基礎的研究	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－, 第5号		97頁～105頁
初期成人期の母娘関係に関する研究－母娘システムとしての分析－	共著	2005年3月	医療福祉研究, 第1号	◎永田忠夫・新美明夫	94頁～113頁
初期成人期にある娘とその母親との関係－母娘システムとしての分析－	共著	2007年5月	家族心理学研究, 第21号	◎永田忠夫・新美明夫	31頁～44頁
覚醒水準の変化がノンバーバル行動の調整におよぼす影響	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇－, 第8号		69頁～78頁
報告書					
空間性情動の様態と発生に関する総合的研究－実験研究と事例研究の成果融合の試み－	共著	2005年5月	2002・2003・2004年度科学研究費補助(基盤研究B)研究課題番号:14310044	研究代表者:辻敬一郎・研究分担者:加川元通・久野能弘・鈴木睦夫・石井澄・芳賀康朗	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～2008年3月		応用動物行動学会評議員			

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 松本青也	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①メーリングリスト活用による対話の活性化と所属意識の涵養(専門演習:ゼミ) ②毎回の授業についてのアクションのEメールによる提出(応用言語学概論)		①2003年4月～現在 ②2005年4月～現在	①は、2001年4月より、ゼミ内のコミュニケーションを活性化するため、自己紹介から、教材配布、質疑応答、研究発表の相互評価、課題提出まで、全てのことメーリングリストを活用して大きな効果をあげている。②は、新入生対象の授業なので、毎回の感想以外に大学生活についての質問なども自由に送らせ、授業の冒頭で紹介する進め方が好評で、授業アンケートでも極めて高い評価を得ている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①英語科教育法:テキストとして使用する教材を自主制作 ①専門演習:テキストとして使用する教材を自主制作		①2003年4月～現在 ②2003年4月～現在	①A4版43頁。2001年4月より、毎年度改訂する。 ②A4版38頁。2001年4月より、毎年度改訂する。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
(講義)小学校英語活動の意義	2003年4月12日	愛知淑徳大学公開講座			
(発表)e-learningの現状:Global English	2003年7月13日	文部科学省大学共同利用機関メディア教育開発センター(名古屋外国語大学)			
(講演)英語教育の情報化—その課題と可能性	2003年8月8日	金沢市教職員研修会			
(講演)授業の情報化	2003年8月20日	名古屋市英語教員研修会			
(発表)e-learningの現状:Global English	2003年9月7日	文部科学省大学共同利用機関メディア教育開発センター(清泉女子大学)			
(講演)電子辞書の効用	2003年11月8日	高校の授業に活かす『電子辞書セミナー』			
(講演)英語教育をどう変えるか	2004年1月30日	愛知県高等学校英語教育研究会			
(講義)小学校英語活動の意義	2004年4月24日	愛知淑徳大学公開講座			
(講演)視野を広げる英語学習	2004年6月12日	愛知県小牧南高校講演会			
(セミナー)英語教育はどう変わるべきか	2004年8月18日	東海英語教育実践者フォーラム			
(講演)21世紀の英語教育—その課題と可能性—	2004年8月23日	金沢市教職員研修会			
(講義)小学校英語活動を考える	2005年4月23日	愛知淑徳大学公開講座			
(講演)早期英語教育の展望	2005年11月9日	苫小牧市教育研究会			
(指導助言)実践的コミュニケーション能力の育成	2005年11月19日	全国英語教育研究大会(全英連岐阜大会)			
(講演)英語コミュニケーションへの動機づけ	2006年6月17日	岐阜県高等学校教育研究会英語部会研究大会			
(講演)デジタルメディアが可能にした新しい英語コミュニケーション	2006年11月16日	SELHi研究協議会公開講演(愛知県御津高等学校)			
(講演)英語は楽しく使うもの	2007年6月24日	新英語教育研究会愛知支部・英語教育講演会(安城市民会館)			
(講演)日常の授業を見直すために	2008年1月18日	名古屋市立高等学校英語研修講座			
(講演)ICTを活用した新しい英語習得法	2008年2月23日	PEERネットワーク講演会(中国学園大学)			
(講演)英語は楽しく使うもの	2008年3月15日	SELHi愛知啓成高等学校特別講演会			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・言語コミュニケーション学科主任	2003年4月～2006年3月	(1993年度より)			
・コミュニケーション研究科言語コミュニケーション専攻主任	2005年4月～2007年3月				
・コミュニケーション研究科科長	2007年4月～2008年3月				
・コミュニケーション学部長	2008年4月～現在				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
PCOLAデジタル版英語科教育授業実践資料集 理論編3	共著	2005年9月	ニチブン	◎平田和人・松本青也・他16名	131頁～137頁
文部科学省検定教科書 Sunshine English Course 1, 2, 3	共著	2006年2月	開隆堂出版 2006年度版	佐野正之・山岡俊比古・松本青也・佐藤 寧・他33名	各巻127,123,115頁

英語は楽しく使うもの	単著	2006年12月	朝日出版社		総計163頁
<b>論文</b>					
INPUTでのマルチメディアの活用	単著	2003年5月	STEP英語情報 5-6月号		44頁～47頁
OUTPUTでのインターネットの活用	単著	2003年7月	STEP英語情報 7-8月号		48頁～51頁
授業の情報化	単著	2003年9月	STEP英語情報 9-10月号		48頁～51頁
英語教師のマルチメディア教材活用法	単著	2003年10月	英語教育 Vol.52 No.8		76頁～79頁
ICT活用によるプロジェクト	単著	2003年11月	STEP英語情報 11-12月号		46頁～49頁
e-Learningの可能性	単著	2004年1月	STEP英語情報 1-2月号		56頁～59頁
これからの英語教育	単著	2004年3月	STEP英語情報 3-4月号		56頁～59頁
学校英語教育におけるICTの活用	単著	2004年3月	言語文化 第12号		37頁～48頁
最新英語学習法	単著	2004年8月	英語教育 Vol.53 No.5		8頁～10頁
英語授業評価の観点	単著	2005年3月	言語文化 第13号		16頁～24頁
ICT活用による英語教育の可能性	単著	2005年6月	英語教育実践学		69頁～79頁
英語教育における共同プロジェクト	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部篇-第6号		35頁～46頁
インターネットを活用したコミュニケーション活動	単著	2007年10月	英語教育 Vol.56 No.8		81頁～84頁
英語教育における発信へのパラダイムシフト	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集-コミュニケーション学部篇-第8号		55頁～68頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	実用英語技能検定試験(英検)1級面接委員(1993年度より)				
2003年4月～2004年3月	外国語教育メディア学会(LET)理事、副会長、中部支部長(1999年度より)				
2004年4月～現在	外国語教育メディア学会(LET)中部支部評議員、運営委員				
2003年4月～現在	中村英語教育賞審査委員(1993年度より)				
2005年12月～現在	全国ジュニア英語スピーチ・コンテスト(日本LL教育センター主催)中部地区大会審査委員長				

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	山内啓介	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
ホームページに授業の進捗を提示		2003年4月～現在		研究室サイト 日本語表現演習科目		
留学生日本語学習支援 ウェブサイト		2003年～2005年		研究室サイトにリンク 敬語・論文作成		
テレビ会議システムを用いた日本語遠隔教育実験		2004年5月～2007年6月		研究室パソコンと中国南京市の交流大学		
2 作成した教科書、教材、参考書						
「応用言語学・日本文化論・日本語学」発表報告集		2004年3月		教材 学生のゼミ卒業論文を編集		
「応用言語学・日本文化論・日本語学」発表報告集		2005年3月		教材 学生の発表報告集を編集		
「応用言語学・日本文化論・日本語学」発表報告集		2006年3月		教材 学生のプロジェクト研究発表集		
「応用言語学・日本文化論・日本語学」発表報告集		2007年3月		教材 学生のプロジェクト研究発表集		
「応用言語学・日本文化論・日本語学」発表報告集		2008年3月		教材 学生のプロジェクト研究発表集		
源氏物語テキスト論		2008年3月		参考書 論文集を		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
日本語の教育と研究 やる気と効果について		2004年3月13日		講演 日本語教師勉強会 於南京		
日本語授業の構成と評価		2004年9月18日		講演 日本語教師勉強会 於南京		
日本語指導の現場 発音指導と作文指導を中心として		2005年10月23日		講演 無錫日本語教育交流会 於無錫		
日本語論文の指導と方法		2006年9月9日		講演 南京師範大学 於南京		
話題の助詞「は」について		2007年9月22日		講演 日本語教師勉強会 於南京		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
学部学生生活委員会委員長		2003年～2004年				
学部自己点検・評価実施委員会委員		2005年度				
院教務委員会委員		2005年～2006年				
学部教務委員会委員		2006年～2007年				
大学院コミュニケーション専攻主任		2007年～現在				
学部言語コミュニケーション学科主任		2008年～現在				
長久手町国際交流協会日本語教育講座		2007年1月		長久手町国際交流協会		
総合国語科目における高大連携授業の試み		2008年1月		連携高校 県立松平高校		
日本語の研究について 語の検索		2005年3月14日		講演 天津外国語学院 於天津		
日本語のコミュニケーション		2005年3月16日		講演 南京師範大学 於南京		
現代の新日本語事情		2007年9月15日		講演 淮海工学院 於江蘇省		
白居易文学が与えた影響		2007年10月24日		講演 南京師範大学 於南京		
中日友好にある日中同源のこと		2008年3月28日		講演 徐州師範大学 於徐州		
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
論文						
マルチメディア日本語教育実現 を目指した実践	共著	2004年3月	世界の日本語教育<日本語 教育事情報告編>第7 号 国際交流基金	◎村松由起子・山内啓介・鄭 玉和 ほか2名		
日本語の教育と研究 やる気と 効果について	単著	2004年9月	日本語論壇 新日本文学 研究会会誌		1頁～12頁	
コミュニケーションという語の検 索	単著	2005年3月	言語文化No.13 愛知淑徳 大学言語コミュニケーション 学会		46頁～60頁	
中国における日本語教育の事 例研究 一江陰。無錫プロジェ クトをとおして一	単著	2006年3月	言語文化No.14 愛知淑徳 大学言語コミュニケーション 学会		31頁～45頁	
正月の由来	単著	2006年12月	日本語論壇 新日本文化 研究会会誌		1頁～9頁	



日本語助辞「は」の本質	単著	2008年3月	言語文化No.16 愛知淑徳 大学言語コミュニケーション 学会	16頁～30頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>				
2001年～2007年	LETメディア語学教育学会中部支部評議員・運営委員			
2004年度	日本語教育国際研究大会研究発表者査読委員 昭和女子大学			

所属 コミュニケーション学部	職名 教授	氏名 吉崎一人	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「脳への認知心理学的接近」の授業資料をWeb上に呈示		2005年度～2007年度	学生の授業アンケート結果に基づき、パワーポイントのスライドを授業後に閲覧できるようにした。学生に復、テスト時の勉強に役立てるように促した。		
「脳への認知心理学的接近」の評価方法の工夫		2005年度～2007年度	中間テスト並びに期末テストを実施し、授業理解の評価精度を高め、テスト結果を返却するようにした。		
「研究法演習実験法」の授業目標達成への工夫		2003年度～2007年度	毎週の授業ごとに課題をだし、それを積み重ねることによって最終レポートが完成できるようにした。毎回添削し、学生にフィードバックした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報システム支援部委員		2004年度～2005年度			
自己点検・自己評価委員		2006年度～2007年度			
人権擁護委員		2005年度～2007年度			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
D-CAT(注意機能スクリーニング検査)使用手引き改訂版	共著	2006年2月	FIS	八田武志・伊藤保弘・吉崎一人	44頁
論文					
Do people send e-mail with their own mobile phone on the designated day? :Executing an intended act as a function of frequency of use of memory strategies and the significance of the task.	共著	2003年6月	Psychologia, 46巻, 2号	©Tohyama, T. & Yoshizaki, K.	119頁～128頁
Hemispheric metacontrol of a mental addition task in right- and left-handers.	共著	2003年12月	Journal of Human Environmental Studies, 1巻, 2号	©Yoshizaki, K. & Hatta, T.	1頁～8頁
選択的注意が視覚刺激評価段階における反応準備処理に及ぼす影響	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集 -コミュニケーション学部篇- -, 第4号	©加藤公子・吉崎一人・清水遵	49頁～56頁
生物的並びに非生物的手がかりが注意の空間方向定位に与える影響	共著	2004年12月	人間環境学研究, 2巻, 2号	©吉崎一人・吉田佳介・杉本助男・佐々木洋	41頁～49頁
集団式児童注意能力検査作成の試み(I)-学年差, 性差の検討-	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集 -コミュニケーション学部篇- -, 第5号	©吉崎一人・遠山智子・坂香里・星野恵子・小木曾千尋・加藤公子	125頁～139頁
半球間干渉は非対称性を示すのか? -ストループ様課題を用いた検討-	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集 -コミュニケーション学部篇- -, 第5号	©西村律子・吉崎一人	77頁～88頁
The effects of learning experience on bihemispheric processing	共著	2005年7月	International Journal of Neuroscience, 115巻, 7号	©Yoshizaki, K. & Hatta, T.	937頁～948頁
集団式児童注意能力検査作成の試み(II)-検査の妥当性の検討-	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集 -コミュニケーション学部篇- -, 第6号	©遠山智子・吉崎一人・加藤公子	115頁～130頁
The effect of facial context and task demand on reflexive orienting from an observed gaze.	共著	2006年12月	Toukai Journal of Psychology, 第2巻	©Yoshizaki, K., Yasuda, Y., Kamei, S., Nakamura, J., & Sugimoto, S.	20頁～28頁

A hemispheric division of labor aids mental rotation.	共著	2007年5月	Neuropsychology, 21巻, 3号	©Yoshizaki, K., Weissman, D. H., & Banich, M. T.	326頁～336頁
大域および局所情報処理が半球間相互作用に与える影響	共著	2007年12月	心理学研究, 78巻, 5号	©西村律子・吉崎一人	519頁～527頁
文字探索課題における優位視野が選択的注意に及ぼす影響	共著	2007年12月	人間環境学研究, 5巻, 2号	©吉崎一人・西村律子・津田昌子・藤田知加子	27頁～34頁
一側視野および両視野呈示条件における選択的注意	共著	2008年3月	愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—, 第8号	©西村律子・吉崎一人・安井万祐子	79頁～87頁
知覚的負荷並びに左右両視野への分割呈示が選択的注意に及ぼす影響	共著	2008年	心理学研究, 第79巻, 第2号	©吉崎一人・西村律子	
Interhemispheric interaction in word- and color- matching of kanji color words	共著	2008年	Japanese Psychological Research 第50巻, 3号	©Yoshizaki, K., Sasaki, H., & Kato, K.	

### III 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	日本神経心理学会評議委員
2005年4月～現在	東海心理学会 東海心理学研究常任編集委員

### IV その他(研究助成)

科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)	2003年～2005年 左右半球間の干渉作用に関する認知神経心理学的検討 (研究代表者)
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2006年～2008年 選択的注意と半球間相互作用に関する認知神経心理学的検討(研究代表者)

所属	コミュニケーション学部	職名	教授	氏名	米倉五郎	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
①学部1～2年生の授業では、白板の文字を学生が見やすく書いた。②3～4年生のゼミではボランティア活動について指導し卒業論文の作成に結実させた。③大学院生には、各病院臨床での実習研修を実施とともに心理臨床相談室の事例について助言し修士論文を指導した。		2003年4月～2008年3月		①は学部1年生の大教室での講義ではロールプレイによる講義などを行いつつ、「臨床心理学への招待」をテキストとして臨床心理学の概要を講義した。2年生の精神分析療法では、心理臨床の実務を踏まえつつ精神分析学の理論について講義した。②の3～4年生のゼミ生の教育指導ではテキストによる臨床心理学の基礎的な理論学習も重視しつつ学生のボランティア活動による卒業研究を指導した。③の大学院生の教育活動では、最先端の発達理論の学習とともに個人指導による修士論文の指導に努めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
①心理療法の実践 ②心理療法ハンドブック ③臨床心理学にとっての精神医学		①2004年4月15日 ②2005年9月10日 ③2007年6月10日		①では、臨床心理学の教科書として出版された本書の第3章:「思春期と青年期の心理療法」について事例をふまえて執筆した。 ②では、神経症などについて概説した。本書は大学院生が心理療法について学ぶ基礎的なテキストである。③も同じく、大学院での講義で使用されたり、臨床心理士が心理臨床の現場でも参考となるテキストであるが、第5章「臨床の現場から学ぶ臨床心理学的面接」を執筆した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
①愛知県臨床心理士会総会での講演 ②日本心理臨床学会ワークショップでの講師 ③愛知県立小牧高校にて講演 ④愛知県スクールカウンセラー研修会での講師		①2003年4月27日 ②2005年9月5日 ③2005年9月28日 ④2005年11月20日		①医療領域での臨床心理士の役割について講演した。 ②日本心理臨床学会ワークショップにおいて「医療領域における他職種との協働」のテーマで講師を担当した。 ③高校生に対して「自分を大切にすること」と題して講演した。 ④スクールカウンセラーの事例報告についての助言とコメントをした。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
・コミュニケーション学部・心理学研究科論集編集委員長を担当する。		2008年4月1日～現在				
・ジェンダー女性学研究会運営会委員を担当する。		2008年4月1日～現在				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
心理療法の実践	共著	2004年7月1日	北樹出版	成田善弘 編	44頁～62頁	
医療現場に生かす臨床心理学	共著	2004年9月10日	朱鷺書房	菅佐和子 編	62頁～71頁	
こころの日曜日	共著	2005年5月1日	朝日文庫	菅野泰蔵 編	140～141頁、222頁～223頁	
心理療法ハンドブック	共著	2005年9月1日	創元社	乾吉佐 編	532頁、552頁	
臨床心理学にとっての精神科臨床	共著	2007年6月10日	人文書院	渡辺雄三・総田純次 編	176頁～190頁	
日本の心理臨床の歩みと未来	共著	2007年8月10日	人文書院	木之下隆夫 編	97頁～115頁	
論文						
対話心理療法と心理査定(法)との総合的アプローチ	単著	2005年3月25日	場としての臨床第9巻 －愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要－		3頁～8頁	
高機能広汎性発達障害の心理査定法と心理療法	単著	2007年3月	場としての臨床第11巻 －愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要－		23頁～37頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						

1995年4月～現在	名古屋ロールシャッハ研究会世話人
2003年4月～2007年9月	日本心理臨床学会での座長学会での研究発表の座長を担当する。
2003年5月	愛知県臨床心理士会総会医療領域セミナーでの講演
2005年11月	日本臨床心理士資格認定協会資格審査特別審査官を担当する。
2006年3月24日～26日	日本心理臨床学会主催 大学院合宿研修会の講師
2006年6月4日	三重県臨床心理士会主催 研修会講師
2006年11月および2007年11月	日本ロールシャッハ学会での座長学会での研究発表の座長を担当する。
2007年4月～現在	日本ロールシャッハ学会教育研修委員
2007年11月	日本臨床心理士資格認定協会資格審査特別審査官を担当する。
2008年9月	日本心理臨床学会ワークショップ病院臨床における集団心理療法のワークショップ講師を担当する。

# ビジネス学部

浅井 敬一朗	189	JOLLY, James A.	208
石坂 綾子	191	ジョリー 幸子	211
石橋 善弘	193	林 誠	214
上原 衛	194	福本 明子	217
梅田 敏文	198	藤井 正志	219
大塚 英揮	200	三浦 信宏	220
國信 潤子	202	三矢 幹根	221
小池 弘道	204	森下 允之	224
真田 幸光	206	諸上 茂光	225



所属	ビジネス学部	職名	准教授	氏名	浅井敬一郎	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
(1)ひとり発言		2003年4月～現在		自己紹介も満足にできない状態の新ゼミ生(2年生)に1回のゼミ中に必ず1度は質問させ、報告者には何とか回答を見い出させ、議論ができるレベルにまで持って行く。これを2年間続けると4年次での就職等の面談においても物怖じすることのないなどの成果が得られた。		
(2)共同レポートの作成		2003年4月～現在		3年次のゼミにおいて、テキスト輪読とは別に、1グループ5名で「元気な企業とは何か」というテーマを与え、共同レポートを作成させ、パワーポイントで発表させる。積極的、自主的に企業行動を調査することにより、企業の現実の戦略についての理解が深まった。		
(3)マネジメントゲーム		2003年7月～現在		より実践的なビジネス感覚を体感させるために、演習(ゼミ)において夏期休暇及び春期休暇を利用してマネジメントゲームの合宿を行い固定費の意味、キャッシュフローの意味、投資の意思決定の難しさなど、経営とはどのようなことかを実感させるものである。さらに外部講師として税理士や中小企業大学の講師を招き、より理解を深めるよう務めている。		
(4)ゼミ対抗ディベート		2005年12月～現在		議論をする力をより高めるため、ゼミ内だけでなく、ゼミ対抗のディベートを行うように、甘えを無くし、証拠を基にした、ロジカルな議論をできるようにする試み。大成功であり、今後も続ける予定であり、		
2 作成した教科書、教材、参考書						
(1)ストラテジーベーシック		2007年10月～現在		1年生向けに企業の経営戦略についての解説をした教材を作成した。より理解を深めるために、具体的な事例が記載された資料の配付。また、一方通行の講義にならないように随所に、小問題を設け、なぜこうなるのかを具体的に考えさせるよう工夫した。A4版26枚。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
・ビジネス学部学生生活委員長		2004年4月～2006年3月		オフィスアワー(毎週火曜日昼休み)の学生相談、全学委員会、クラブ連盟顧問		
・学生生活満足度調査委員		2005年4月～2006年3月				
・ビジネス学部大学院ビジネス研究科教務委員		2007年10月～2008年3月				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
中国工業化の農村的基礎	共著	2004年3月	名古屋大学工業化叢書 I	竹内常善	106頁～124頁	
現代経営学概論	共著	2006年9月	税務経理協会	櫻井克彦	149頁～167頁	
論文						
イノベーションとスキル修得を目的とした人材育成のあり方	単著	2005年2月	『型技術』20巻3号		22頁～24頁	
工学技術の進展とスキルマネジメント	単著	2005年3月	『愛知淑徳大学ビジネス学部紀要』創刊号		1頁～13頁	
グローバル化とスキルの捉え方	単著	2006年3月	『愛知淑徳大学ビジネス学部紀要』第2号		1頁～11頁	
2007年問題とスキル伝承	単著	2006年4月	『型技術』21巻6号		76頁～80頁	
中国プラスチック金型における技術革新の導入とスキル	単著	2007年10月	『日本経営学会誌』第20号		130頁～139頁	
日本における金型産業の特徴	単著	2008年3月	『愛知淑徳大学ビジネス学部』		1頁～12頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						



2006年9月	日本経営学会全国大会(於:慶応大学) グローバル化におけるイノベーションとスキル
2007年10月	日本中小企業学会全国大会(於:中京大学) 金型産業における技術革新の導入とスキルの変化

所属 ビジネス学部	職名 准教授	氏名 石坂綾子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①「平成15・16・17・18年度後期授業アンケート」を踏まえて、「金融システム論」の各国の金融システムの解説が終了するごとに、重要なポイントを確認するためのプリントを作成		2003年10月～	① 金融システムについての専門用語は、学生がこの授業で初めて修得するものであり、世界有数の金融機関の種別や名称も難解である。そのため、授業での解説に加え、各国ごとの解説が終了するごとに、用語の意味や金融機関の特徴を改めて確認する目的でプリントに取り組み時間を設け、理解に努めた。		
②「平成19年度授業アンケート」を踏まえて、「現代ビジネス事情Ⅱ」授業導入部、後半部に産業ごとの基礎的な知識と今後の課題・展望についての解説を追加		2007年10月～	② この授業の目的は、アメリカ・ヨーロッパ諸国におけるビジネス情勢を解説することであるが、近年のビジネス界は激しい変貌を遂げており、産業の成長と衰退が目まぐるしい。また、M&Aの進展により新興企業が既存の大企業を呑み込む下剋上の時代にもなった。まず産業についての基礎的な知識が土台としてあるならば、授業内容についてさらに理解が深まるとの意見があったことから、導入部に基礎的な知識の解説、後半部分の最後に今後の課題と展望を提示する三段階の形式に改善した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①授業資料冊子「経済学概論」		2003年4月～	①(全11章、26頁)は、マクロ経済学・ミクロ経済学の理論を開講対象の学部1年次向けに平易に解説したものである。		
②授業資料冊子「金融システム論」		2003年4月～	②(全IV章、25頁)は、「Ⅰ.1980・1990年代の金融世界」「Ⅱ.日本の金融システム」「Ⅲ.ヨーロッパ諸国の金融システム」「Ⅳ.アメリカの金融システム」の各章から構成され、現在の金融システムの再編と各国金融システムの特徴をレジュメ形式でまとめたものである。		
③教材プリント「現代ビジネス事情Ⅱ」		2005年10月～	③(全30枚)は、「1 教育内容・方法の工夫」の項目で記載した「現代ビジネス事情Ⅱ」の授業のために作成したものである。自動車・金融・鉄鋼・流通・食品・高級ブランド、高速鉄道などを事例に挙げている。		
④教材プリント「国際ビジネス特講Ⅰ・Ⅱ」		2006年4月～	④(全20枚)は、国際ビジネスにおけるトピックスを概説し、論点を提示している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・コミュニケーション学部ビジネスコミュニケーション学科学生生活委員		2003年4月～2004年3月			
・コミュニケーション学部ビジネスコミュニケーション学科教務委員		2003年4月～2004年3月			
・ビジネス学部学生生活委員		2004年4月～2005年3月			
・学園広報編集委員		2004年4月～2006年3月			
・ビジネス学部・ビジネス研究科自己点検評価委員		2006年4月～2008年3月			
・人権擁護委員		2003年4月～			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
新自由主義と戦後資本主義—欧米における歴史的経験—	共著	2006年12月	日本経済評論社	権上康男	255頁～299頁
論文					
1950年代西ドイツにおける内外経済不均衡 —「社会的市場経済」(新自由主義)の危機—	単著	2005年3月	2002～2004年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書 権上康男編著『ネオリベリズムと戦後資本主義(1945～73年)』		59頁～79頁

「社会的市場経済」におけるマ ロ経済政策 —1950年代の景気 安定化を事例として—	単著	2005年3月	2002～2004年度科学研究 費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 福澤直 樹編著『第二次世界大戦後 ドイツにおける社会的市場 経済・社会主義的市場経 済・社会主義計画経済』	41頁～56頁
西ドイツにおける「通貨価値安 定」の意義 —内外経済不 均衡への対応—	単著	2005年3月	2002～2004年度科学研究 費補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 福澤直 樹編著『第二次世界大戦後 ドイツにおける社会的市場 経済・社会主義的市場経 済・社会主義計画経済』	57頁～74頁
西ドイツにおける国際収支危機 —1961年3月マルク切り上げを めぐる攻防—	単著	2006年3月	『愛知淑徳大学論集 ビジ ネス学部・ビジネス研究科 篇』第2号	27頁～42頁
マルクの通貨交換性をめぐる議 論(1952-1955) —「ドイツの世 界市場への復帰」との関連にお いて—	単著	2008年3月	『愛知淑徳大学論集 ビジ ネス学部・ビジネス研究科 篇』第4号	35頁～54頁

その他

#### 研究発表

1950年代ドイツにおける内外不 均衡	単著	2004年12月	ドイツ資本主義研究会 (ADWG.NF)	於 専修大学神田校 舎
ドイツマルク切り上げをめぐる攻 防 —1961年3月を事例として—	単著	2006年3月	現代金融研究会国際金融 史部会	於 東京大学大学院 経済学研究科
ドイツマルクの交換性回復(1952 ～1955)	単著	2007年12月	現代金融研究会	於 麗澤大学東京研 究センター
書評 山口博教授 『ドイツ証券 市場史 -取引所の地域特性と 統合過程-』	単著	2008年1月	『歴史と経済』第198号	66頁～68頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

学会活動	
・1995年5月～現在	政治経済学・経済史学会(旧土地制度史学会)会員
・1995年5月～現在	社会経済史学会会員
・1998年5月～現在	日本金融学会会員
・2004年12月～現在	ドイツ資本主義研究会(ADWG. NF)会員
その他(公的研究助成)	
・2003年度～2005年度	科学研究費補助金基盤研究(B)(1)(課題番号14330023) 研究代表者 権上康男(横浜国立大学大学院国際社会研究科) 「ネオリベラリズムと戦後資本主義(1945～73年)」
・2003年度～2005年度	科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(課題番号14530094) 研究代表者 福澤直樹(名古屋大学大学院経済学研究科) 「第二次世界大戦後ドイツにおける社会的市場経済・社会主義的市場経済・社会主義計画経済」
・2006年度～2008年度	科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号18730232) 研究代表者 石坂綾子 「IMF体制におけるドイツ・マルク(1958～1973年)」

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 石橋善弘	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「統計学Ⅰ」「統計学Ⅱ」			「統計学Ⅰ」「統計学Ⅱ」の講義において、理論のみならず、コンピュータ・ソフトを用いて実践的な教育を実施している。		
「プログラミング特講」			「プログラミング特講」の講義において、プログラミングの基礎となる数学的考え方、論理的な思考法にも重点をおいた教育を実施している。		
「統計特講Ⅰ」「統計特講Ⅱ」			大学院「統計特講Ⅰ」「統計特講Ⅱ」においては、最近開発された統計処理法もふくめ例題を多用して、聴講生の理解が進むよう工夫している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Ferroelectrics Thin Films	共編	2005年	Springer	M.Okuyama and Y. Ishibashi	
論文					
Exact Expressions for Dielectric Properties of Ferroelectric Thin Films	共著	2007年	JPSJ 76, No. 10	Y. Ishibashi and M. Iwata	104702-1頁～8頁
Domains and Domain Walls in Ferroelectric BIT	共著	2007年	JJAP 46, No.1	Y. Ishibashi and M. Iwata	272頁～275頁
Lattice Model of Ferroelectric Superlattice	共著	2007年	Ferroelectrics 354	Y. Ishibashi and M. Iwata	8頁～12頁
The Pedigree of Ferroic Domain Investigation in Japan	単著	2005年	Mat. Sci. & Eng.B120		2頁～5頁
Landau Theory of Phase Transition in P[VdF-TrFE]	共著	2005年	JJAP 44, 9A	Y. Ishibashi and M.Iwata	6624頁～6628頁
Landau Theory of Phase Transition in P[VdF-TrFE]:Hysteresis Loop	共著	2005年	JJAP 44, 9A	M. Iwata and Y. Ishibashi	6667頁～6669頁
Polarization Reversals of 90 Degree Domain Walls	共著	2005年	JJAP 44, 10A	Y. Ishibashi, M. Iwata and E. Salje	7512頁～7517頁
Dispersion Relation of Third Order Nonlinear Susceptibility	共著	2004年	JPSJ 73, No.8	Y. Ishibashi, H. Orihara, R. Blinc and R. Pirc	2323頁～2325頁
Theoretical Models of Ferroelectric Thin Films	単著	2004年	Trans. Mat. Res. Soc. Japan 29, No.4		1055頁～1058頁
Structure of Interfaces in Layered Ferroelectrics	共著	2004年	JPSJ 73, No.11	C. H. Tsang, H. K. Chew and Y. Ishibashi	3158頁～3165頁
セラミックスの電磁氣的・光学的性質	共著	2004年	セラミクス 39巻10号	岩田真、石橋善弘	865頁～870頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1997年度より現在に至る	トヨタ理化学研究所 理事				
2001年度～2004年度	日本物理学会 代議員				
1993年より現在に至る	強誘電体国際会議 日本代表				
2003年より現在に至る	強誘電体アジア会議 顧問委員				
	Ferroelectrics Editor				
	Integrated Ferroelectrics Editor				
2007年1月1日～2008年12月31日	科学研究費委員会専門委員(日本学術振興会)				

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 上原 衛	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
(1) インターネット、電子メールの教育面での活用	2003年4月～	昨今の情報化社会においては、インターネットを活用した情報収集、コミュニケーションが不可欠である。「基礎演習Ⅰ、Ⅱ」ではインターネットを活用した情報収集の方法や、それらの分類、分析の方法等、テーマ研究を通して実践的に学習させるプログラムを導入している。さらに、学生への学習指導、連絡には電子メールを最大限活用することにより、情報技術の活用方法を実践指導している。また、携帯電話等のモバイルを利用した情報通信も利用し、最先端の情報技術の活用を実践指導している。	
(2) パソコンを利用した統計分析の指導	2003年4月～	情報化社会においては膨大なデータを収集し、分析する能力が一層重要になってくると考えられる。「基礎演習Ⅰ、Ⅱ」では、膨大な情報を分析するための基礎となる統計学をパソコンを利用しながら習得するよう指導している。これにより、実社会でのデータ分析の実施とその分析結果に基づく新企画・新提案の作成ができる、即戦力となる能力を育成している。	
(3) パソコンを利用したプロジェクト・ファイナンスのシミュレーション研修の実施	2004年3月31日 2005年1月21・24日 2006年1月16・17・30日	国際協力機構(JICA)と東京リサーチインターナショナル(現三菱UFJリサーチ&コンサルティング)主催のカザフスタン・アゼルバイジャン両国行政府ならびに国営銀行の職員を対象としたプロジェクトファイナンス研修において、パソコンを利用したプロジェクトファイナンスのキャッシュフロー、バランスシート、損益計算書や各種分析方法の研修を行った。プロジェクトファイナンスのキャッシュフロー分析を中心にパソコンでのシミュレーション方法を演習方式で指導した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
情報リテラシーの応用	2004年8月	Windowsの高度操作、WORD、EXCELの高度操作、ネットワークの操作、ACCESSの基本操作を学び、より高度で広範囲な情報技術の知識とスキルを習得するための書籍。本書は、レポートや論文、ビジネス文書や表作成などを想定して、実践的なノウハウを身につけるための、大学生の3年生程度を対象とした教科書、または、ビジネスマンの応用書としての位置づけである。本書の第4章(80ページ)を担当。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
愛知中小企業家同友会の「2006インターンシップ受入企業会議」で講演	2006年7月27日	愛知中小企業家同友会が主催した、「2006インターンシップ受入企業会議」において、「インターンシップに臨むにあたって—中小企業でのインターンシップへの期待—」という内容で講演を行った。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
(1) コミュニケーション学部(2004年度からはビジネス学部)進路支援委員	2003年4月～2006年3月	企業での人事部在籍経験を活かし、コミュニケーション学部の進路支援委員として学生の進路支援についてその責務を果たした。特に、インターンシップ実施については、受入先機関確保のためのパンフレット作成や、企業訪問をおこない、中心的な役割を果たした。	
(2) インターンシップの推進	2004年4月～現在	2004年度ビジネス学部発足と同時に、学生が在学中に就業を経験することによるキャリア育成のためのインターンシップをビジネス学部の専門科目として担当。さらに、2007年度からインターンシップを愛知淑徳大学のすべての学部(6学部)に拡大させ、講義とインターンシップ研修を担当。講義の受講生は500名以上、インターンシップ研修は200名以上参加するまでになり、愛知淑徳大学のインターンシップ推進に努めている。	

(3) 早稲田大学大学院理工学研究科経営システム工学専門分野 大野高裕教授研究室 博士課程ゼミにオブザーバーとして参加	2001年9月～現在	早稲田大学大学院理工学研究科経営システム工学専門分野 大野高裕教授研究室(コストマネジメントを中心とする管理会計に関する研究を行なう研究室)の博士課程ゼミのオブザーバーとして参加し、研究ならびに助言を行なっている。
(4) 明治大学2003年度、2004年度、2005年度総合講師「先端的グローバル・ビジネスとITマネジメント」のオムニバス形式の講義の講師	2003年6月 2004年6月 2005年6月 2006年6月 2007年12月	明治大学における文部科学省の学術フロンティア推進事業に認定されたプロジェクトの研究成果を明治大学の総合講座においてオムニバス形式で各研究者が講義を行なった。サプライチェーンマネジメントが、情報通信ネットワークとITの進展に伴いe-SCMというマネジメントコンセプトへ移行している。ここでは、「e-SCMのマネジメント SCMからe-SCMへ」について講義を行った。
(5) 愛知工業大学経営情報科学部非常勤講師	2003年9月～2008年3月	愛知工業大学 経営情報科学部において、「ビジネスシミュレーション実習」(毎週2コマ、3年生選択科目)の非常勤講師を務めている。本実習では、模擬的な企業経営の実習を、パーソナルコンピュータを主教材とし、マルチメディア情報の加工をネットワーク環境への応用を組み合わせるビジネスシミュレーションを実施している。実習の前半は高度なマルチメディア情報処理技術の修得に当て、後半は、ビジネスゲームと、マーケティング・ゲームが中心となっているが、講座全体を総合し、e-コマース環境の作成を試みる。仮想企業の実験的運営によって、企業経営の難しさを実感するとともに、各種管理技法を深く理解することが可能となる。 また、2005年4月から9月まで愛知工業大学 経営情報科学部において、「生産情報システム論」の非常勤講師を務めた、本講では、経営管理のための生産情報システムの全体的な仕組みと構造を明らかにし、その基礎および応用を理解することを講義の目的とした。具体的には、生産情報システムの基本、生産管理、人的資源管理、財務管理と金融工学、品質管理、工場計画と設備管理、新製品開発に係わる生産情報システムについて講義し、最後に、現在最も注目されている戦略的な経営管理手法の一つであるサプライチェーン・マネジメントについて可能な限り具体的な実践例を利用しながら講義を行った。全体を通して、具体例の解説、問題提起と解答という形式で講義を進め、学生の理解を深めつつ指導を行った。
(6) 文部科学省認定の学術フロンティア推進事業「先端的グローバル・ビジネスとITマネジメントーGlobal e-SCMに関する研究」の研究メンバー(明治大学商学研究所の特任研究員)として参画。(明治大学社会科学研究所における5年間のプロジェクト)	2002年4月～2007年3月	明治大学商学部研究所で立ち上げた“Global Business”と“e-コマース”の二つのリサーチプロジェクトを発展的に統合するとともに、両者のシナジーを追及するための新たなマネジメントコンセプトとして「Global e-SCM」を提示し、その理論構築を共同展開していくための共同研究プロジェクトを2002年4月に立ち上げた。本プロジェクトは文部科学省の学術フロンティア推進事業に設定されている。このプロジェクトの「TOC戦略サブ・プロジェクト」(経営システム論、経営工学の研究者と実務者によるe-SCMにおける資材所要量計画の同期化に関する研究)のメンバー(特任研究員)として参加した。
(7) 文部科学省科研費研究(基盤研究(C)(1))「ジョイントターンシップと人材情報システムに関する研究」の研究分担者として参画。	2004年4月～2007年3月	山梨学院大学経営情報学部 金子勝一助教授を研究代表者とする、科研費研究。大学と企業・行政・地域との関係におけるインターンシップの位置づけについて、人的資源管理論・組織論・情報管理論といった経営学的立場からその理論的枠組みを構築するもの。
(8) 日本大学法学部経営法学科のインターンシップ講義のゲストスピーカー	2004年7月17日 2005年5月21・28日,10月15日 2006年7月15日,10月14・21日 2007年6月1・8日,10月19日	日本大学法学部経営法学科におけるインターンシップ授業のゲストスピーカーとして、講義を行った。講義内容は、実社会における具体例をととした職業観と人生について解説し指導を行った。また、情報化社会における企業のリスク・マネジメントの重要性、企業の社会的責任に対する企業の取り組み姿勢と現状について解説し、学生との討議を通じて実社会についての理解を深めさせた。

(9) 明治大学オープンリサーチセンター「クオリティ志向型人材育成とスマート・ビジネス・コラボレーションー経営品質科学に関する研究ー」の共同研究者として参加	2007年4月～2012年3月	明治大学におけるオープンリサーチセンターに認定されたプロジェクト(「クオリティ志向型人材育成とスマート・ビジネス・コラボレーションー経営品質科学に関する研究ー」)の共同研究者として参加。このプロジェクトは、「トータル・マネジメント・クオリティ」「スマート・ビジネス&マーケティング」「マネジメント・インフォメーション・クオリティ」「ヒューマン・リソース・クオリティ」を研究するもの。
--	-----------------	---

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
グローバルSCM サプライチェーン・マネジメントの新しい潮流	共著	2003年5月	有斐閣	編著者: 山下洋史、諸上茂登、村田潔。共著者: 山下洋史、諸上茂登、村田潔、他13人	227頁～233頁
情報リテラシーの応用術	共著	2004年4月	近代科学社	共著者: 伊東俊彦、梅田敏文、三浦信宏	126頁～205頁
スマート・シンクロナイゼーション	共著	2006年3月	同文館	編著者: 山下洋史、村田潔。共著者: 山下洋史、村田潔、他15人	226頁～234頁
論文					
職場内コンピューティング(OJC)と水平的OJT	共著	2003年4月	日本経営工学会 経営システム 第13巻第1号	共著者: 山下洋史	29頁～33頁
“Third Risk” Involved in e-SCM	単著	2003年8月	International Management System Conference in San Diego State University		1頁～8頁
Global e-SCMにおける「三重のリスク増大」と全体最悪化の防止	共著	2004年3月	明治大学商学論叢第86巻特別号	共著者: 山下洋史	75頁～86頁
グローバル化と情報化の進展に伴うSCMにおけるリスクマネジメントについて	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇第4号		21頁～34頁
バランス・スコアカードを利用した戦略的リスクマネジメント	単著	2004年7月	日本経営工学会 経営システム 第14巻第2号		100頁～104頁
サプライチェーンにおけるCSR連鎖-CSRによる信頼と埋め込みの構築フレームワーク-	単著	2005年3月	明治大学商学論叢第87巻特別号		85頁～97頁
バランス・スコアカードとWebベースのリスクアセスメント・ツールによる内部統制におけるコントロールとサポートの共存	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集ビジネス学部篇創刊号		45頁～60頁
ファジィ・エントロピーを用いたSRI投資銘柄選択比率の決定	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ビジネス学部・ビジネス研究科篇第2号		57頁～72頁
コントロールとサポートの両立によるERMの構築-BSCとWebを利用したリスク・アセスメント・ツールによる高-低エントロピーの循環と信頼の構築-	単著	2007年3月	日本経営システム学会 学会誌Vol.23, No.2		41頁～47頁
CSR評価とSRI投資銘柄選択比率決定方法-ファジィ・エントロピーに基づく拡大推論の導入-	単著	2007年3月	日本経営システム学会 学会誌Vol.23, No.2		15頁～22頁
ERM体制を構築・維持するためのITへの対応とセルフ・アセスメント	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集-ビジネス学部・ビジネス研究科編- 第3号		1頁～15頁
投資家の価値判断を反映したSRI投資銘柄選択比率の決定方法 -ファジィ・エントロピーを用いた重みつき多因子情報路モデル-	共著	2007年6月	日本経営工学会論文誌 Vol.58, No.2	共著者: 山下洋史、大野高裕	125頁～135頁

KCM(ナレッジ・チェーン・マネジメント)・e-KCMによるERMの構築	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集ービジネス学部・ビジネス研究科編ー第4号		55頁～67頁
インターンシップにおける動機づけ衛生因子に関する研究	共著	2008年3月	愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーション 創刊号	共著者:小林三太郎	
学生のワーク・モチベーションとキャリア教育	共著	2008年3月	愛知淑徳大学 コミュニティ・コラボレーション 創刊号	共著者:小林三太郎	

その他

インターナル・コントロールから「インターナル・マネジメント」へー内部統制におけるコントロールとサポートの共存ー	単著	2003年5月	第30回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集		143頁～146頁
「インターナル・マネジメント」における高ー低エントロピーの両立フレームワーク	単著	2003年5月	第30回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集		159頁～162頁
低エントロピー源としての経営倫理と「第三のリスク」	共著	2003年5月	第30回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集	共著者:山下洋史	163頁～166頁
ネガティブ・ベンチマーキングと「第三のリスク」	共著	2003年5月	第30回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集	共著者:山下洋史、後藤智之	139頁～142頁
インターナル・マネジメントにおける高ー低エントロピーの循環モデル	単著	2003年11月	第31回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集		45頁～48頁
ブルウィップ効果におけるリスクの過大評価	単著	2003年11月	第31回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集		49頁～52頁
情報社会における「第三のリスク」の存在ー企業のブランドと信頼を失墜させるリスクー	単著	2003年12月	第二回失敗学会年次大会		
企業の社会的責任から企業群の社会的責任へ(サブプライチェーンマネジメントにおけるリスクマネジメントを例として)	単著	2004年6月	第32回日本経営システム学会全国大会講演論文集		33頁～36頁
SRI(社会的責任投資)における評価要素のウェイト決定方法に関する研究	共著	2005年5月	第34回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集	共著者:山下洋史、大野高裕	32頁～35頁
企業の社会的責任(CSR)に対する投資面から見た評価に関する研究	共著	2005年5月	日本経営工学会2005年度春季大会予稿集	共著者:山下洋史、大野高裕	190頁～191頁
株式投資におけるSRIのダウンサイド・リスク抑制機能ーテイル・リスクを増大させる第三のリスクー	単著	2006年12月	第37回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集		244頁～247頁
COSOの視点から見たSLAのあり方について	共著	2007年6月	第38回日本経営システム学会全国研究発表大会講演論文集	共著者:内田勝也、林 誠	92頁～95頁

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2000年8月～現在	日本経営システム学会会員(2003年5月～2005年5月まで理事。2005年5月～2007年5月まで常任理事、組織委員長。2007年5月～現在まで理事・中部支部副支部長)。
2001年11月～現在	日本経営工学会会員(2003年7月～財務委員。現在に至る)。
2003年7月～現在	失敗学会会員



所属	ビジネス学部	職名	教授	氏名	梅田敏文	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
講義科目「情報倫理」の教育方法の工夫		2007年6月		当該科目について受講学生のアンケートを行い、授業内容、教材、教授方法、態度などについて学生の評価を得、今後の教育方法の改善点を検討した。		
講義科目「ITと職業倫理」の教育方法の工夫		2007年11月		当該科目について受講学生のアンケートを行い、授業内容、教材、教授方法、態度などについて学生の評価を得、今後の教育方法の改善点を検討した。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
情報リテラシーの応用(共著)		2004年9月		基礎的な情報リテラシー知識を取得した人を対象に、より高度なパソコン操作のスキルや知識を提供するために執筆されている。本人は、「第1章 情報技術と情報倫理」(1頁～11頁)の部分と「第5章 Accessによるデータベースの構築」(206頁～254頁)の部分執筆している。		
情報倫理(共著)		2004年12月		情報倫理に関する主要な論点を識別し、現在どのような議論が行なわれ、問題解決のためにどのような取組みがなされようとしているのか論じている。本人は、「第3章 情報倫理のフレームワーク」(89頁～121頁)の部分執筆している。		
「情報倫理」の教材		2007年3月		講義用資料として、全8章全86頁の資料作成を行い受講者に配布した。内容は「情報倫理とは何か」「情報化社会を支える技術とその影響」「企業と情報化社会」「eビジネスと情報倫理」「ICTとユーザー」「プライバシー」「知的財産権」「コンピュータ犯罪と対策」である。		
「ITと職業倫理」の教材		2007年9月		講義用資料として、全6章全67頁の資料作成を行い受講者に配布した。内容は「職業とは何か」「職業の倫理」「倫理判断のベースとなる考え方」「企業の倫理」「ICTと倫理」「内部告発」である。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
効果的なプレゼンテーション技術の向上		2006年1月		学内における授業改善・情報交流会で発表。内容は、授業へのアプローチ、プレゼンテーション技法、授業における実例から構成されている。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
AO・特別推薦入学試験委員会委員		2003年4月～2008年3月				
情報教育センター長		2004年4月～2006年3月				
情報システム支援部長		2004年4月～2006年3月				
ビジネス学部長		2006年4月～				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
グローバルSCM	共著	2003年5月	有斐閣	山下洋史、諸上茂登、村田潔	216頁～226頁	
情報リテラシーの応用	共著	2004年9月	近代科学社	伊東俊彦、上原衛、梅田敏文、三浦信宏	1頁～11頁、206頁～254頁	
情報倫理	共著	2004年12月	有斐閣	村田潔	89頁～121頁	
スマート・シンクロナイゼーション	共著	2006年3月	同文館	山下洋史、村田潔	67頁～74頁	
論文						
コンピュータ倫理のカテゴリ分析	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部編4号		35頁～48頁	
倫理的判断の観点からみた情報行動の構造と要素	単著	2004年3月	経営情報学会デジタルソサイアティとポスト情報社会研究部会編		114頁～123頁	

信頼の観点からみたeビジネスの倫理体系についての試論	単著	2007年3月	経営情報学会ユビキタス社会の潮流研究部会編	41頁～51頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>				
2003年4月～2004年3月	経営情報学会「デジタルソサイアティとポスト情報化社会」研究部会主査			
2003年4月～2004年3月	経営情報学会理事			
2003年8月～2004年3月	経営情報学会 Webタスク委員会副委員長			
2003年10月～2003年11月	名東生涯学習センターの講師 「情報化社会とは」「情報リテラシー」「情報倫理」など5回にわたって講演			
2004年11月～2005年1月	名東生涯学習センターの講師 「情報化社会の到来」「情報化社会でどう生きるか」について2回にわたって講演			

所属 ビジネス学部	職名 准教授	氏名 大塚英揮	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
小テストを活用した双方向型教育	2002年4月～	授業の実際の進行に関しては、毎回次のような構成にしている。最初の10分間で前回の小テスト解説→60分授業→最後の20分で授業に關係する小テスト、という構成である。小テストは一枚の紙を半期通じて使用、毎回の答えを続けて書いていく。添削では、答えのポイントとなる部分を書くこともあれば、個別に答えに不足している部分を追加質問として書いておくこともある。これにより、学生の授業に対するモチベーションは飛躍的に高まっている。	
ホームページによる教育情報の公開	2002年4月～	学外のサーバーをレンタルし、ゼミナールの公式ホームページを作成、運営している。ゼミナールにおける研究調査結果の公表、研究、資料収集に役立つ情報を掲載し、2002年4月から学外に公開している。	
インターネット、電子メールの教育場面での活用	2001年4月～	授業で配布した資料の配付、及びゼミナールにおける宿題の提出にゼミナールのホームページを利用している。学外のサーバー上に、ファイルアップロードCGIとファイルを添付できる掲示板のCGIを設置し、メンバーのみがアクセスできるアクセス権を設定し、ペーパーレスでの書類交換を実現している。	
他大学との合同ゼミナールの開催	2002年12月～(毎年12月)	ゼミナールでは、他大学(2002年～2004年は慶應義塾大学商学部、2005年以降は目白大学経営学部、東洋大学経営学部)のゼミと毎年12月に合同ゼミナールを実施している。合同ゼミでは、ゼミで行ったグループ研究の発表と、前もって設定した1つのテーマに基づくディベートを行っている。この合同ゼミは、学生の勉強に対するモチベーションを高めること、視野を広げることに貢献している。	
ゼミナールにおけるグループ調査研究の作成指導	2002年4月～	ゼミナールに所属する3年生に1つのテーマにそって全員で協力して調査研究を行う「グループ研究」の実施指導を2000年以降毎年行っている。このグループ研究は、毎年11月の学園祭において一般の方を前に行う中間発表、その後合同ゼミナールにおける最終発表を経て完成となる。最終目標として外部の方に対する発表の機会を設定することで、研究に取り組むモチベーションを高めると同時に、プレゼンテーション能力の向上にもつながっている。また全員で一つのテーマに団結して取り組むことで、チームワークの大切さと団体行動をする上でのノウハウも学生は習得できるという効果もあらわれている。	
日本学生経済ゼミナールへの参加	2006年4月～	2006年からは、経営・経済系統ゼミナールの全国的組織である、「日本学生経済ゼミナール」に加盟、中部部会の幹事校に任命された。毎年冬に開催される全国大会に参加し、日本学生経済ゼミナールに所属する他大学ゼミとグループ研究論文をベースに討論を行う予定である。この試みは、グループ研究に取り組むモチベーションアップに貢献することが期待されている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
補助教材としてのプリント作成	2002年4月～	全ての担当講義について穴埋め式のプリントを補助教材として作成、配布している。穴埋め式にすることで、学生は授業に集中しやすくなるという効果が期待できる。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
静岡産業大学経営学部カリキュラム委員	2002年4月～2003年3月	情報マネジメント学科における『eコマースマネジメントコース』の立ち上げ、及び経営学部における商学系科目のカリキュラム作成に尽力した。	
愛知淑徳大学ビジネス学部教務委員	2005年4月～2007年3月		

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
地域金融機関のサービス・マーケティング	共著	2006年12月	近代セールス社	住谷宏	85頁～107頁、151頁～171頁
論文					
『過程』としてのマーケティング－マーケティング戦略論の動態化に関する一考察	単著	2003年3月	日本消費経済学会年報第24集		131頁～141頁
流通現象の過程認識を求めて－制度主義から新オーストリア派へ	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－ビジネス学部篇 創刊号		61頁～78頁
非価格パラメータの最適決定－新古典派とマーケティング	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集－ビジネス学部・ビジネス研究科篇 第2号		73頁～90頁
寡占下における垂直的品質競争	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集－ビジネス学部・ビジネス研究科篇 第4号		69頁～80頁
地域金融機関のサービスマーケティング－理想的なサービスエンカウンターの実現に向けて	単著	2008年9月発行 予定	実践経営学会機関誌 No.45		掲載決定
III 学会等および社会における主な活動					
2001年4月～現在	日本商業学会会員				
2001年4月～現在	実践経営学会会員				
2001年4月～現在	日本消費経済学会会員				
2002年4月～現在	日本物流学会会員				

所属	ビジネス学部	職名	教授	氏名	國信潤子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
1)海外大学におけるゼミ研修		2002～2007年		「2002～2005年演習の学生15名ほどを対象に毎年、海外研修タイ・チェンマイ大学で実施。日本企業の海外進出、労働問題、保健問題、少数民族問題などについてタイの専門家、企業管理者などによる講義、討議を実施。」		
2)学外活動によるゼミ研修		2006年9月		2006年9月17名のゼミ生を対象に沖縄県における研修を実施。沖縄産業、環境問題、基地問題を現地訪問と、専門家による講義・討議を実施。		
3)企業訪問内外ゲストスピーカー招聘		2002～2007年		学生自主企画で東海地区企業訪問、海外からのゲストスピーカー招聘等を実施		
4)就職活動情報交流		2002～2007年		先輩学生の就職活動について体験、準備すべきことなどについて情報交流会開催。就職活動についてのアンケート作成。調査実施・分析。ゼミにて共有。		
5)授業感想、質問聴取と学生へのフィードバック		2002～2007年		講義などの後に毎回感想カードに300字ほどの感想、質問を書かせ、次回授業で回答、紹介。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
1)「女性学・男性学～ジェンダー論入門～」伊藤、國信他共著 有斐閣 増し刷り6刷目		2002～2007年		「ジェンダー論」「ビジネスと社会」等の授業にテキストとして活用		
2)JICA, UNESCO資料の教材化等		2002～2007年		開発とジェンダーに関わる資料をJICA, UNESCO, など国際機関の資料から抜粋紹介、英語資料などを授業で活用		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
実践報告 於 広島大学		2005年		日本評価学会2005年大会において、「ジェンダー評価と社会教育」について広島大学にて報告 部会長 村松安子;東京女子大学教授		
三重県等で教師対象研修講師		2002～2005年		地方自治体、高校教師研修会などで男女共同参画の現状と国際比較についての講演		
学外講演		2005年～2006年		テレビ出演等によって男女共同参画、女性の地位向上の必要性、実態、国際比較をコメント、講演		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
国際機関の情報活用		2003～2007年		UNESCOなどの国際機関の日本政府を通じての活動に参加、そこでのアドバイス、調査などを実施、その結果から開発途上国における女性の地位、教育実態、生活状況などのデジカメ写真、資料などを授業で紹介。		
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
Divide and Connect Peril and Potentials of ICT	co-author	2004年	Asia and South Pacific Bureau of Adult Education India	Ed. by Robert Francis Garcia	83頁～100頁	
「女性学・男性学～ジェンダー論入門」	共著	2002年～2005年(増刷・第6刷)	有斐閣	國信、伊藤、樹村		
論文						
「沖縄社会のジェンダー関係～女性の共同支配と変容、産業化の過程～」	単著	2007年	紀要第9号 世界人権問題研究センター刊			
「4年生共学大学学部におけるジェンダー・女性学領域の教育」	共著	2002年3月	日本私立学校振興・共済事業団補助金による調査報告書	調査研究代表者;國信共同研究	A4 180頁	
「ジェンダー・女性学研究・活動におけるICTの活用実態調査・研究成果報告書」	共著	2003年3月	科学研究費補助金基礎研究調査報告 基盤研究C(1)課題番号13837034	調査研究代表者;國信共同研究		

「イギリス(イングランド)の大学におけるジェンダー女性学教育のカリキュラム～アングリヤ・ポリテクニク大学(在ケンブリッジ)の事例を中心に～」 「開発途上国における成人識字教育協力の実践事例の収集と分析、日本の教育経験を踏まえた成人教育モデルの適応可能性について中間報告」		2003年3月	日本女性学会誌「女性学」第8号		
Learning Resource Center Monitoring and Evaluation 2004 with special focus on LRCs in Lao PDR and Indonesia, co-author with Ehsanur Rahman	2004年 共著	UNESCO Asian Cultural Center, Tokyo	A4版 56頁	ノンフォーマル教育 協力研究会 代表 国立教育政策研究所国際研究・協力部長 渡辺良	A4 165頁 國信担当部分 115頁～133頁
Development Cooperation and Academism in Non-Formal Education -Sweden and Germany as case studies- Report of UNESCO under UNESCO/Japan Funds-in Trust for the Promotion of International Cooperation and Mutual Understanding-	共著	2005年3月			A4 102頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2006年3月	調査:ラオス、カンボジア、インドネシア、中国における女性の生涯学習、職業訓練実態調査 ユネスコ文化センター実施の調査に専門家として参加
2006年7月	国際会議:国際協力機構、国立女性教育会館共催 於 国際協力機構研修所 「成人女性の職業、技能教育、識字教育」対象:アジア、南太平洋諸国からの専門家
2006年8月	調査報告:国立教育政策研究所 ラオス、インドネシアにおける女性の職業教育実態報告 国際会議出席・報告、中国重慶 中国における生涯学習、成人学習の実態。 ユネスコ文化センター、中国成人教育協会、ドイツ成人教育協会共催
2006年9月	ASPBAE 理事会 アジア南太平洋成人教育協議会理事会 インドネシア ジョクジャカルタにて開催
2005年	日本評価学会発表 於 広島大学 報告 国際協力にみるジェンダー視点
2004年11月	Asian South Pacific Bureau of Adult Education General Assembly at Yogyakarta, Indonesia Coordinator of Gender Issue Workshop
2002年～2007年	International Feminist Journal of Politics, Editorial Board Member, Head Editorial in UK
2005年～2007年	ACCU(ユネスコアジア文化センター)委員
2002年～	世界人権問題研究センター嘱託研究員 京都市
2003年～2006年	犯罪被害者サポートセンター 愛知 常任理事
1996年～2006年	東アジア女性フォーラム 委員 元事務局長
2003年～2005年	名古屋市家庭裁判所委員
1996年～2006年	Asian South Pacific Bureau of Adult Education, Executive Board Member, Head Office in India

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 小池弘道	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
<p>①再履修学生の目線にあわせた教育レベルに変更  ②論文テストを多く採用し、考える力のレベルアップを図った  ③理解度をチェックし、授業内容のレベルを決めるのに活用  ④授業の評価方法について分りやすく説明  ⑤学生の悩みや質問を聞き、答えてあげる場を設定  ⑥リーダーシップ、チームワーク、企画力の育成を図った。NPO法人(ジャカランタクラブ)とタイアップして、タンザニアと日本の親善のためのイベントの企画・実施に参画  ⑦ゼミ生に対し、忍耐力アップと英語能力アップのためのサブゼミの実施(試験的なもの)  ⑧読む・書く能力の早期レベルアップとコミュニケーション力の向上(ゼミ2年生対象)  ⑨思考力を鍛える(ゼミ4年生対象)</p>	<p>①2003年度前期および後期  ②2004年4月～  ③2004年4月～  ④2004年10月～  ⑤2005年4月～  ⑥-①2005年5月27日  ⑥-②2006年7月  ⑥-③2006年10月29日  ⑥-④2008年2月2日  ⑦-①2006年10月～2007年1月  ⑦-②2007年4月～  ⑧2007年1月～  ⑨2007年1月～</p>	<p>①英文ジャーナル、和文ジャーナル教育において、第1回目と第2回目の授業で受講者のレベルを把握し、教育内容をレベルにあった内容に、大きく修正した。②〇×テストと論文テストを併用したが、学生から〇×テストを増やして欲しい旨の要望があった。しかし、それは論文を書くのが苦手だからだと分った。そこで書き方を指導しながら、書く回数を増やすようにした。③受講生の多い授業(80名以上)は、理解度が十分に把握できないため、適宜(多くは、3回目の授業の最後)理解度を把握するため、今まで説明した内容についてのアンケートを実施し、その後の授業に反映させた。④当大学で実施している「授業アンケート」において2004年後期の授業において、授業の評価方法の評価点が低かったため、それ以後は評価方法を分りやすく説明することとした。⑤研究室を開放し、お昼休みには、来たい学生は、どのようなテーマでも相談に来て良いことにした。その結果、毎日数人の学生が来て、いろいろな悩みを話し合う場ができた。  ⑥-①愛知万博のタンザニア館でのバックアップ、ファッションショー、現地産品の販売などを担当。⑥-②小牧市主催のタンザニアとの親善パーティに参加し、現地特産品の販売やファッションショーを共同で実施。⑥-③名古屋市と愛知県後援の栄オアシスで実施されたワールドコラボのイベントに参加し、ファッションショーや現地の紹介、産物の販売をし、大勢の観客に見てもらった。⑥-④タンザニア大使館主催の刈谷市での親善パーティに、ゼミ生が出席して事前の段取り、当日の受付、接待係、連絡係、ファッションショーのモデル、物品販売などを12人でサポートして、大いに感謝された。⑦-①毎週月および水曜日第5限 ⑦-②2年生と3年生のゼミ生のうちの希望者に、英会話のサブゼミを実施。TOEIC500点以上を目指した ⑧2006年にゼミに入ってきた学生は、文章を書く・人前で話す能力の低い学生が多く、授業に支障が出た。それを解消するために、2007年は春休み前に、ゼミに入ってくることの決まった1年生の学生に対し、文章力・会話力を高めコミュニケーション力をつけるために本を配布し、それを読破させた。そして、一泊研修でコミュニケーションの大切さを教える。更に本の内容を要約したレポートを提出させることにした。⑨3年生の春休みに、論文の書き方についてゼミで講義すると共に、本を与えて読ませた。4月に要約を提出させた。それを踏まえ、4月の卒論製作の授業で思考力についての指導をする。更に、7月から12月に掛けては、ゼミ生を4グループ(1グループ3～4人)に分け、サブゼミとして毎週1回程度の活動をさせた。内容は、各メンバーの卒論を取り上げて考えさせ、自分の考え方は何かについて、徹底的に議論させ、自分流の内容でまとめさせた。その内容を後期の授業で発表させ議論させて、各人の思考力を鍛えた。</p>	
2 作成した教科書、教材、参考書			

<p>①「国際経営と人事管理」という教科書の作成(雇用・能力開発機構生涯職業能力開発促進センターの依頼により作成)</p> <p>②国際経営とヒューマンリソースマネジメント(授業用及び一般販売用として)</p> <p>③ビジネス外書講読に、「訴訟」に関するの記事を集め、資料を作成して使用</p> <p>④のユダヤの智慧について、タルムードから抜粋して資料として作成し、ビジネス・コミュニケーションやゼミの授業で使用。</p> <p>⑤ビジネス外書講読の授業用に「環境問題」を取り上げた資料を作成</p> <p>⑥コミュニケーション不足で起きたトラブル事例を資料として作成し、ビジネス・コミュニケーションの授業などで活用</p> <p>⑦最新の労働基準法の中から重要なものを抜粋して資料を作成、ヒューマンリソースマネジメントで使用</p>	<p>①2003年7月1日</p> <p>②2004年4月1日</p> <p>③2006年5月～</p> <p>④2006年5月～</p> <p>⑤2006年10月～</p> <p>⑥2007年5月～</p> <p>⑦2007年10月～</p>	<p>①新講座開講のためのテキスト。内容は、日本と欧米の考え方の違いについて、工作上及び人間関係の面から解説した。そのうえで、国際経営のアプローチの仕方を3つに分類して説明した。続いて日本の労働市場、労働慣行の変化を講義し、それを踏まえてこれからの人事管理のあり方について説明した。更に、心を開いた場づくりの重要性を解説した。②編集者:小倉修一日本で常識と思われていることが、海外では常識でない場合も多い。常識を疑って自分で考えてみるといういろいろなことが分かってくる。そのような感覚を持って、日本と欧米との考え方における違いを、人間関係やビジネスにおける具体的な例で考えてみる。そのうえで、海外でビジネスをする場合において、“現地流に合わせず”、“自分流を通す”、“自分流と現地流の融合”に分類して、著者の経験をもとに仕事上のアプローチを考えてみる。さらに、グローバル化が進んでいく中で、日本の人事管理がどのようになっていくかについて考察した。③海外では、訴訟に関する記事が多いので、それに関する資料を収集し、プリントを作って授業で活用。④ユダヤ5000年の智慧と言われる「タルムード」の中から、学生に理解しやすいものを抜粋して、ビジネス・コミュニケーションの授業用の資料としてまとめた。⑤ビジネス外書講読の授業に、最近特に重要として取り上げられることの多い環境問題をまとめて、プリントを作成した。⑥コミュニケーション不足で起きた国際間のトラブルについて、体験談などの事例をまとめ資料として作成し、ビジネス・コミュニケーションの授業やゼミの授業で活用⑦ヒューマンリソースマネジメントの授業用として、労働法を理解しておいてもらうべきと考え、最新の労働基準法の重要部分を抜粋して、授業用資料を作成した。また、ゼミの授業や就職活動の指導などでも活用</p>			
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>					
<p>異文化バリアの越え方(東京都世田谷区の比較文化研究グループ)</p>	<p>2007年12月1日</p>	<p>国際社会でビジネスにおいて、郷に入って郷に従うべきことと従うべきでないことについての解説</p>			
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>					
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の 名 称</p>	<p>単著・ 共著の別</p>	<p>発行または 発表年月</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名 (共著の場合のみ記入)</p>	<p>該当頁数</p>
<p>著書</p>					
<p>国際経営とヒューマンリソースマネジメント</p>	<p>単著</p>	<p>2004年4月1日</p>	<p>(株)マナハウス</p>		<p>50頁</p>
<p>論文</p>					
<p>III 学会等および社会における主な活動</p>					
<p>1999年4月～2004年3月</p>	<p>異文化コミュニケーション学会中部支部副支部長</p>				
<p>1995年4月～2007年3月</p>	<p>異文化コミュニケーション学会メンバー</p>				



所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 真田幸光	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
学生と教員の双方向によるディスカッション形式による授業運営。ビジネスの現場と理論との差異を分析、解説する授業運営。		2003年4月～2008年3月	授業の前段でその都度トピックスを取り上げ、学生に対する情報提供を行った上でディスカッションするという形式を取っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
各学期ごとに印刷物による資料を作成した上で講義		2003年4月～2008年3月	パワーポイントによって作成した授業のキーポイントをまとめ、教材として提供している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
韓国経済の解剖	単著	2001年7月	文真堂	松本	237頁～252頁
早わかり韓国	共著	2002年6月	日本実業出版社	真田幸光	18頁～68頁及びその他一部
市場経済下のモンゴル	共著	2002年7月	新評論社	関満博	第十章全て
北東アジア開発銀行(NEADB)創設と日本の対外協力政策	共著	2002年2月	東京財団	トウ照彦	第三章地域性開発金融機関の経験と教訓を主として担当
元気なまちのスゴイしかけ	共著	2006年7月	PHP総合研究所	佐々木陽一	主としてさいたま市、函館市などを執筆
中国の日系企業が直面した問題と対処事例	共著	2007年3月	海外職業訓練協会	真田幸光	全体監修と総括コメント
論文					
対中国投資の現状と見通し	単著	2001年3月	海外投融资情報財団		31頁～39頁
韓国債券市場の現状分析と考察	単著	2001年2月	国際通貨研究所		15頁～25頁
東アジアにおける通貨政策の連携とその深化	共著	2002年12月	総合研究開発機構	トウ照彦	96頁～124頁
外資系企業と日本企業の対中戦略	単著	2002年9月	日本貿易振興会中国経済 2002年9・10月号		76頁～89頁
外資系企業の対中事業戦略 韓国・台湾企業の対中戦略を中心として	単著	2003年3月	日本貿易振興会中国経済 2003年4月号		80頁～95頁
中国企業の対日投資意欲に関する考察	単著	2003年10月	日本貿易振興会中国経済 2003年11月号		58頁～69頁
北朝鮮の対外政策に関する調査・研究	単著	2004年1月	内閣府		1頁～76頁
最新中国事情 中国情勢に関する考察	単著	2004年月	亜細亜大学アジア研究所 所法		8頁～12頁
最新韓国経済状況	単著	2004年12月	北陸AJEC 月報		28頁～35頁
北朝鮮における経済管理改善措置の導入が北朝鮮体制に及ぼす影響に関する調査・研究	単著	2005年3月	内閣府		1頁～68頁
日本企業の対中投資意欲と中国企業の新戦略	単著	2005年4月	日中経済協会 月報		4頁
大学・地域活性化への提言	単著	2005年3月	千葉商科大学研究所報		21頁～24頁
台湾とのビジネス交流に関する考察	単著	2003年9月	財団法人交流協会 交流 No.705		1頁～9頁
東北アジアにおける日本の経済的役割の評価と展望	単著	2005年10月	対外経済政策研究所・ロシア科学院東方額研究所		88頁～106頁

アジア経済の発展とインド	単著	2006年1月	常陽産業研究所JIRニューズ		44頁～47頁
モンゴル国 経済開発の現状と課題	単著	2006年2月	総合研究開発機構 月刊NIRA政策研究		52頁～59頁
北朝鮮の中国経済依存状況に関する調査・研究	単著	2006年3月	内閣府		76頁
中国のASEAN接近と各国の対応	共著	2007年3月	日本貿易振興機構	伊藤剛	全体総括の一部と中国、朝鮮半島
北朝鮮問題と米ドル	単著	2007年9月	現代コリア		10頁～21頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1999年1月～現在	社会基盤研究所客員研究員
1999年1月～現在	日本格付研究所客員研究員
1999年1月～現在	国際通貨研究所客員研究員
2003年4月～現在	日本災害医療支援機構(JVMAT)評議員
2004年6月～現在	スズキ財団評議員
2005年7月～現在	トップマネジメントクラブ理事・評議員・顧問
2004年4月～現在	モンゴル商工会議所 日本地域顧問
1998年2月～現在	日本国際経済学会メンバー
2005年11月～現在	NPO法人パンゲア理事
2004年4月～現在	現代韓国朝鮮学会メンバー
2003年4月～現在	東アジア経済経営学会メンバー
2006年4月～現在	ドラッカー学会メンバー
1997年12月～現在	アジア経済研究所日韓フォーラムメンバー
1993年9月～現在	韓国金融研修院外部講師
2002年4月～現在	慶応義塾体育会野球部理事
2006年7月～2007年3月	日本貿易振興機構 中国の経済・外交戦略の実態と今後の東アジア研究会委員
2005年7月～現在	さいたま市産業展開推進本部アドバイザー
2005年7月～現在	海外職業訓練協会(OVTA)国際アドバイザー
2005年3月	笹川財団ウズベキスタン経営学講座外部講師
2004年11月～2005年3月	株式会社日本総合研究所「中東・北朝鮮・両岸問題に関するシナリオ・プラン
2004年8月～2005年2月	日中経済協会「中国東北振興調査研究会」委員
2004年11月～現在	埼玉県企業誘致推進会議委員
2004年10月～現在	埼玉ちゃれんじ企業経営者表彰審査委員
2004年10月～2005年3月	さいたま市長直轄諮問委員会「新産業振興プロジェクトチーム」チームリーダー委嘱
2004年6月～2005年3月	愛知県国際交流大都市圏構想推進委員会実務者ワーキンググループ主査
2004年5月～2005年3月	神奈川県21世紀の県政を考える懇親会部会員
2003年11月～現在	埼玉県知事直轄諮問委員会「経済振興プロジェクトチーム」チームリーダー委嘱
2003年7月～2004年1月	内閣府「北朝鮮の対外政策に関する調査・研究」委嘱
2003年6月～2003年8月	国際協力銀行「中小企業支援室／研究会」外部講師
2003年6月	埼玉県産業クラスター委員会委員
2003年6月～平2004年3月	愛知県幸田町住宅マスタープラン委員会委員長
2003年6月～2004年3月	愛知県幸田町防災委員会委員
2002年11月～現在	飯田市環境関連産業創造支援事業インキュベート委員
2003年1月～2003年3月	埼玉県産業クラスター形成基礎調査検討会顧問
2001年4月～2002年6月	東京財団委嘱研究員
2000年4月～2001年3月	総合研究開発機構委嘱研究員

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 JOLLY, James A.	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
			1. 英語での各種数値、計算、読み方で基教、序数、和、差、積、商等の例を一覧表に作成、配布。 2. 愛知淑徳大学「授業に関するアンケート」の結果: 2004・7 平均値4.1/5.0 2004・12 平均値4.0/5.0 2005・7 平均値4.0/5.0 2005・7 平均値4.0/5.0 2005・12 平均値4.0/5.0		
2 作成した教科書、教材、参考書					
			英語語彙の基本的ラテン語語根:5課から構成されるセットで、機能を重視した英語の語彙として、その読解能力を向上する目的で、ラテン語の語根の分析(decoding)と統合力(encoding)への説明と練習問題を内容とする。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
		2003年2月18日	「名古屋ビジネスセミナー」日本貿易振興会(JETRO)ビジネスサポートセンター主催、(東京・BSCホール於)プレゼンテーション1「名古屋で国際ビジネス」について講演		
		2005年7月27日	愛知県教育センター主催、県立中・高等学校教師の夏季英語教育研修、English phonetics lecture and drill(調音音声学の理論講義に伴う現職教員研修の講師)を務める。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
(学術論文) 1. Supplemental Thoughts to Bennett's Model: Characterization of a Sojourner's Initial Experience・(異文化センシティブティ・モデルに関する一考察—ソジョナーの定住初期における感情的特徴)	共著	2001年2月	異文化コミュニケーション研究 Intercultural Communication Studies, Vol4, pp.113-127, Aichi Shukutoku University, School of Graduate Studies, Dept. of Intercultural Communication	当該分野ではその妥当性を広く認められているベネットの異文化センシティブティ・モデルではあるが、その6段階に分割された発表段階の以前に、ソジョナー(海外短期定住者)が経験すると仮定される“Infatuation” Stageの存在を、アンケート用紙を送付、回収することによって、証明を試みた論文。	113頁～127頁
2. ユーモアで表現されるステレオタイプ—異文化間における価値観の表現に関する一考察	共著	2003年	言語文化, No.11, 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会	日本人は言語活動において(欧米、又はアジアの国々と比較対照すると)ユーモアのセンスと表現法が豊かでないといわれる。そのような概念のもとにステレオタイプに関する各国の価値観を考慮、分析するものである。	23頁～37頁

3. Teaching of Content Course in a Foreign Language: Nonverbal Communication Taught in English to Japanese University students	共著	2004年 Spring	Intercultural Communication Studies Vol, XII International Association for Intercultural Studies (IAICS), USA	通常の大学の講座は母国語によるContentコースか、英語のスキルコースの二つに大別される。当該のゼミ教育においては、Nonverbal Communication という contentを英語で講義し学習者も英語でスピーチや Presentationを実施している。その当該ゼミ学習の目的、教授法、学生のアンケート調査による反応等を記述、分析したものの。	12頁～28頁
4. Coding Aids for Building English Vocabulary	単著	2004年	愛知淑徳大学論文集 コミュニケーション学部編、第4号、	学習者が外国語(英語)を習得するにあたり、語彙を拡大、強化していく方法の一つとしてのcoding-encodingの理論をetymological approach的観点より探求したもの	71頁～76頁
5. The New Uniformity of Law in International Trade	単著	2005年	愛知淑徳大学論集—ビジネス学部編—創刊号	世界の国々の貿易法にとって代わる国際統一貿易法の最新の傾向について記述したもの。	79頁～93頁
6. The ICC Model in The Formulation of New Uniform International Law	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集—ビジネス学部編—第2号	益々拡大の一途をたどる「新統合国際貿易法」の必要性に伴い、世界中の私的セクターのビジネスリーダー達は、当該法の成立、伝播に更なる主張と活動的な役割を実施している。当稿では上記法の主要な用語、インコタームス等の履行方法、及び国際紛争解決事業、法的書類、国際企業活動の為にトレーニング資料等についても考察する。	91頁～100頁
7. Where are the Japanese Going with Their New Law Schools?	共著	2006年9月	Hawaii Bar Journal, Volume 10, Number 9, Hawaii State Bar Association	新たな日本の法科大学院システム進展の背景に関する報告 日本法体系の効果と変化に関する議論	32頁～35頁
(その他)					
1. 連続セミナー	単著	1990年1月～現在まで (今後も継続の予定)	豊田合成株式会社	豊田合成株式会社の社員研修セミナー講師として、下記のテーマで現在まで16年間にわたり、アメリカ人の法的思考について講義している。 1. アメリカにおけるビジネス及び法律的文化 2. 機会均等法と差別行為 3. ビジネス行動におけるアメリカの“法的思考” 4. 合衆国での生活に関連する法的関心: 可と不可 5. 英国慣例法に対するアメリカの適応と米国連邦制度 6. 米国法曹界システムへの入門 7. その他	

2. 名古屋弁護士会セミナー	単著	1993年4月～現在まで (今後も継続の予定)	名古屋弁護士会	下記のテーマで、アメリカ法 の特色について現在まで12 年間講義している。 1. 合衆国法律に関するアメリ カ人への助言 2. 法的事項に関するアメリカ の態度への入門 3. 合衆国家族法 4. 合衆国における製造物責 任法 5. 合衆国遺言書及び遺産 6. 英語文契約書の内容の討 議 7. 合衆国訴訟の特殊問題 8. その他(継続)
----------------	----	----------------------------	---------	--

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年～現在に至る	Hawaii State Bar Association
2001年～現在に至る	American Bar Association (Section of International Law)
2001年～現在に至る	The American Society of International Law
2001年4月～現在に至る	Washington State Bar Association (現在に至る)
2001年4月～2004年3月	異文化コミュニケーション学会中部支部財務委員長
2002年4月～2003年3月	「愛知県国際化推進プラン」委員会委員

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 ジョリー 幸子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
1. 調音音声学の理論説明 2. 授業評価の各学期毎の平均値		2003年度～現在	1. 学生の英語発音面を強化する為、Articulatory Phonetics(調音音声学)の理論説明に最初の一コマを費やす。 2. 本学における授業評価の各学期毎の平均値(5.0満点)中 2004(前期:4.4 後期:4.4) 2005(前期:4.5 後期:4.6) 2006(出席状況良好者平均 前期 4.8 後期 4.9)(平均 前期 4.6 後期 4.9) 2007(出席状況良好者平均 前期 4.4 後期 4.9)(平均 前期 4.7 後期 4.9)		
2 作成した教科書、教材、参考書					
			1. 当該単位の内容に即した教材(例:印欧語族、世界の宗教、非言語手段の下位分野を日英両語で要約した表等)をその都度作成、学生に配布。 2. 参考書:「日本人の常識はどこまで通じるか:異文化交流で失敗しないために」 共著、2003年4月18日(再販)、風媒社		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
		1. 2003年～現在	1. 愛知県総合教育センター主催 県立高校及び県立中学校英語教師の為にArticulatory Phoneticsについての講演及びワークショップを毎年夏季に実施。		
		2. 2003年	2. 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会第3回研究大会にて「短期海外研修に基づく非言語行動意識の推移—異文化コミュニケーション的見地よりの一考察—」を発表		
		3. 2004年	3. 「異文化コミュニケーション学会2004年年次大会」The SIETAR Japan Annual Conference(於関西大学高槻キャンパス)で「外国語を媒介言語として教えるコンテンツコースの実践:非言語コミュニケーション学を英語で日本人学生に教える教授法」について発表。使用言語は英語。		
		4. 2005年	4. 「異文化コミュニケーション学会」The SIETAR Japanの年次大会にて「外国語を使用して、コンテンツコースを教える」を発表。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
		1. 2003年～2007年	日本英語検定協会(英検)東海・中部地区1級の面接審査員		
		2. 2004年～2006年	本学大学院コミュニケーション研究科:異文化コミュニケーション専攻 専攻主任教授;大学院委員会;運営委員会;教員資格審査委員会;入試実施委員会;自己点検・評価実施委員会		
		3. 2005年～現在	本学大学院ビジネス研究科、研究助成委員会;情報メディアサービス部運営委員会;本学学部教養教育委員会		
		4. 2005年	財務省税関局より、功労賞(10年間にわたる英語弁論大会審査委員長を継続した功績)		
		5. 2006年～現在	公益信託愛・地球博開催地域社会貢献活動基金運営委員		
		6. 2007年～現在	愛知国際化推進計画策定検討会委員		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					

非言語コミュニケーションにおける「右」と「左」の概念－異文化コミュニケーション的見地からの一考察	単著	2004年3月	愛知淑徳大学コミュニケーション学部篇、第4号	右 (dextral) と左 (sinistral) の概念は各々の文化において、その考え方、実行の習慣が異なり「不浄の手」等の重要な文化的要素となる。右と左の持つ意義と実践を描写、分析したもの。	77頁～85頁
現職者教員のための調音声学研修: 英語教授学的見地より	単著	2004年3月	言語文化愛知淑徳大学、No. 12	茨城県筑波市で開催された全国高等学校英語教育者研修における筆者の調音声学研修の講義、ワークショップの内容と、参加者を被験者として収集したアンケートの結果を数値的、及び筆記内容を基盤にまとめ、分析解釈したもの。	16頁～25頁
学年別による英語語彙力の相違: 履修年数と得点間の関係について	単著	2004年3月	言語コミュニケーション研究愛知淑徳大学No. 4	大学における英語教育のカリキュラム、又はその履修の方法等により、高学年になるに従って、必ずしも英単語語彙数が、強化、拡大されるとは限らない。理工系の大学等においてはむしろ反対の場合もある。当稿においては本学のコミュニケーション学科の学生1年から4年生までを被験者として1人40分間かけて、100の単語を各々の同意義語、反意語を識別するアンケート調査を実施し、その相関関係を探ったもの。	30頁～34頁
Teaching of Content Course in a Foreign Language: Nonverbal Communication Taught in English to Japanese University students	共著	2004年	INTERCULTURAL COMMUNICATION STUDIES VOL.XII International Association for Intercultural Studies (IAICS), USA	通常の大学の講座は母国語によるContentコースか、英語のスキルコースの二つに大別される。当該のゼミ教育においては、Nonverbal Communicationというcontentを英語で講義し、学習者も英語でスピーチやPresentationを実施している。その当該ゼミ学習の目的、教授法、学生のアンケート調査による反応等を記述、分析したもの。	12頁～28頁
非言語コミュニケーションにおける上・下の概念と具現化: 異文化間のコミュニケーション的一考察	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集ビジネス学部篇創刊号	日本は縦社会 (Vertical Society) と呼ばれ、社会行動の概念上の上下の使い分けは勿論のこと、非言語上の動作、位置などについても厳密な使い分けを要求される文化、習慣をもっている。それ等の現象を他の国々と比較、対照し考察した。	95頁～108頁
色彩の持つ非言語的機能: 異文化コミュニケーション学的見地からの通時的・共時的的一考察	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ビジネス学部篇第2号	人の社会行動において、色彩は避けて通れないコミュニケーションの一手段である。他民族・多文化の交流する今日のグローバルな日常生活での色の意味するもの、その機能等を通時的及び、共時的に分析、記述した考察。	101頁～116頁

### III 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	異文化コミュニケーション学会中部支部支部長 (創立者)
2003年4月～現在	中部日本香港協会常任理事
2003年4月～現在	日本BPW東海クラブ国際委員長
2003年4月～現在	中部愛媛県人会理事
2003年4月～現在	中部松山中学・松山東高等学校同窓会副会長
2003年4月～現在	財務省 (旧大蔵省) 名古屋税関英語スピーチコンテスト審査委員長

2003年4月～現在	能楽師梅若六郎後援会会員
2003年4月～現在	鈴木正三「ワモカゲ小町研究会」会長
2003年4月～現在	International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS) USA 会員
2003年4月～現在	SIETAR (Society for Intercultural Education, Training and Education) USA 会員
2003年4月～現在	異文化間教育学会会員
2003年4月～現在	日本IBM主催「なごや会議」招聘参加（於滋賀県長浜市）
2003年4月～現在	(名古屋城)本丸御殿復元フォーラム会員
2003年4月～現在	多文化関係学会会員
2006年1月～現在	愛知県国際交流協会会員
2006年4月～現在	能・狂言「鳳の会」会員



所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 林 誠	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
ASPグループウェアを活用した教育	2006年4月～	どのような企業のどのような職種においてもIT知識・能力は必要不可欠である。基礎演習においては、①文書作成能力 (Word, Excel, PowerPoint)、②情報収集能力 (インターネットの辞書、RSS、ニュース、グーグルの活用)、③コミュニケーション能力 (メール、メーリングリスト、ブログ、SNS) といったIT基本リテラシーとセンスを習得させている。ヤフーグループのASPグループウェアを徹底活用し、学習やイベントのスケジュール、ゼミ配布教材データ、学生の課題データを共有することが可能な仕組みを作り、基本リテラシーを前提とした授業を進めている。他の学生が提出した課題も閲覧が可能なナレッジマネジメントと教室だけでなく、24時間いつでもどこでも学習が可能な体制により、効果を上げている。	
リクエスト講義	2006年12月	基礎演習において、教員の実務経験(コンサルティング、資格取得分野)から、学生の関心が高いと思われるテーマを10項目程度設定し、学生の投票とアンケート結果によって講義を行った。また学生が他の学生の得意分野の講師をリクエストする講義も実施した。学生からは、初級シスアドや簿記試験合格の学習方法、株取引で儲けるコツについての講義があった。	
身近な情報の正規化とデータベース化	2007年4月～	情報システム論 I (DB) では、ERモデルやデータベースの正規化など抽象的に思考するのが苦手な学生が多い。そのため、身近な情報を題材にした演習を毎回おこなっている。具体的には、学生がスーパー等で購入したレシート、図書やビデオレンタルの管理に必要な情報、航空機のフライト情報等を抽出し、データベース設計をおこなうことで、正規化の重要性を理解させる授業を進めている。	
パソコンを使ったeビジネスモデルの作成	2007年12月	eビジネスの講義において、年間3回はコンピュータ実習室を使って演習をおこなっている。インターネットに実際にアクセスし、検索サイトの活用方法、ショッピングモール、広告の種類(バナー広告、メール広告、アフィリエイトプログラム)、ブログとSNSの仕組みなどネットを活用したマーケティングの手法を学習させている。また、eビジネスの代表的な成功事例のサイトを閲覧させ、ベストプラクティスを抽出させたり、学生にeビジネスのビジネスモデルやビジネスプランを作成させるなど実践的な学習をおこなっている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
情報システムの分析・設計	2007年10月	情報システム論 II (設計) の科目において、EA (Enterprise Architecture) をベースにした教材を開発した。EAは、組織全体の業務とシステムを統一的手法でモデル化し、業務とシステムを同時に改善することを目的とした設計手法であるが、市販の書籍では大規模企業向けの内容が多く、学生にはなじみにくい。そこで学生がアルバイトなどでも経験することが多い身近な小売店のケースを開発した。簿記や販売管理の基礎的知識があれば理解できる簡易的な業務システムを題材にDFDやWFA、ERDなどの設計手法を使って演習・学習ができるものとした。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
山梨学院大学経営情報学部非常勤講師	2002年4月～2007年3月	山梨学院大学経営情報学部において、「起業論」と「ビジネスモデル論」の非常勤講師を担当した。	
会計教育センター長	2006年4月～2007年3月		

明治大学商学研究所特任研究員	2007年4月～現在	文部科学省学術フロンティア推進事業「クオリティ志向型人材育成とスマート・ビジネス・コラボレーションー経営品質科学に関する研究」の研究プロジェクトに参画。ヒューマン・リソース・クオリティサブプロジェクトのメンバーとして研究をおこなっている。			
日本大学生産工学部非常勤講師	2007年4月～現在	マネジメント工学科財経経営コースの必須科目「知識経営」(前期1コマ)、選択科目「ビジネスモデル」(後期1コマ)、「ビジネスプラン及び演習」(後期1コマ)を担当している。「知識経営」では、ナレッジマネジメント(KM)の基本理論とケースを中心に指導し、MAKE-JAPAN、PRISM、バランススコアカードなどの評価指標をもとに学生にアセスメントさせる授業をおこなっている。「ビジネスモデル」では、経営戦略、事業戦略策定の基本原則とプロセスを学習し、インフルエンスタイプを使ったビジネスモデル作成演習、企業の競争戦略の構造をポーターのフレームで分析する演習等、学生がより理解を深めやすい授業をおこなっている。「ビジネスプラン及び演習」では、まずビジネスプラン(事業計画書)の概要と構成について学習した上で、学生個人ごとにテーマを設定し、実際にビジネスプランを作成し、授業でプレゼンテーションやディスカッションをしながら講義する形態を取っている。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
グローバルSCM 能力開発最前線	共著	2003年5月	有斐閣	山下洋史・諸上茂登・村田潔	242頁～250頁
スマート・シンクロナイゼーション	共著	2003年12月	中央職業能力開発協会	中央職業能力開発協会	165頁～194頁
ERP導入実践ガイド	共著	2006年3月	同文館	山下洋史・村田潔	86頁～94頁
ビジネスキャリア検定試験標準 テキスト「経営情報システム情報 化企画2級」	共著	2006年1月	日経BP	日経BP	36頁～37頁
ビジネスキャリア検定試験標準 テキスト「経営情報システム情報 化活用2級」	監修・共 著	2007年11月	中央職業能力開発協会	共同監修：島田達巳	監修全495頁、共著 218頁～233頁
	監修	2007年11月	中央職業能力開発協会		全427頁
論文					
e-KCMとナレッジコミュニティに 関する研究	共著	2004年3月	明大商学論叢第86巻特別 号	共著者：山下洋史	53頁～61頁
コンピュータウィルス対策とeナ レッジチェーンマネジメントに関 する研究	共著	2006年3月	日本経営システム学会誌 Vol22 No.2	共著者：川中孝章・山下洋史	65頁～71頁
e-KCMとナレッジワーカーに関 する研究	単著	2006年3月	明大商学論叢第88巻特別 号		45頁～56頁
EAと政府のIT投資評価に関す る研究	単著	2006年3月	愛知淑徳大学ビジネス学 部・ビジネス研究科紀要第2 号		117頁～130頁
EAとITガバナンスに関する研究	単著	2007年3月	愛知淑徳大学ビジネス学 部・ビジネス研究科紀要第3 号		49頁～62頁
その他					
(学会発表)					
EAと政府IT調達の課題	単著	2005年10月	第35回日本経営システム学 会講演論文集		182頁～185頁
EAを支援するプロジェクトマネジ メントの機能に関する研究	単著	2005年10月	第35回日本経営システム学 会講演論文集		186頁～189頁
Web2.0によって進化するe- KCMの研究	単著	2007年6月	第38回日本経営システム学 会講演論文集		184頁～187頁
COSOの視点からみたSLAのあり 方について	共著	2007年6月	第38回日本経営システム学 会講演論文集	共著者：上原衛、内田勝也	92頁～95頁
(専門誌寄稿)					

現場の見える化を実現し、経営を強くする～RFID連携でトレーサビリティシステム構築を実現する～	単著	2007年3月	中堅中小企業情報化の処方箋第14巻(ソフトバンクパブリッシング)	30頁～33頁
ERP導入で企業を強くする～リアルタイム経営とITガバナンスの確立	単著	2007年10月	中堅中小企業情報化の処方箋第16巻(ソフトバンクパブリッシング)	28頁～31頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～2004年3月	国家資格中小企業診断士実務補修指導員
2003年5月～2004年4月	社団法人中小企業診断協会東京支部中央支会政策委員
2003年4月～現在	中小企業総合機構登録スタッフ
2003年4月～現在	東京都中小企業振興公社専門家派遣事業支援専門家(0631-専241号)
2004年4月～現在	日本危機管理学会理事
2004年4月～2006年3月	柏市立柏第五中学校評議員
2004年4月～2007年3月	株式会社アイドゥ取締役
2004年7月～2007年6月	株式会社ヌーズ・ヌー取締役
2004年11月～現在	会計検査院CIO補佐官スタッフ
2005年2月～現在	特定非営利法人ITC-METRO設立、代表理事
2005年5月～2007年4月	日本経営システム学会理事
2006年4月～2007年3月	厚生労働省ホワイトカラー能力評価試験制度委員
2006年4月～2007年3月	中央職業能力開発協会情報審査委員
2007年5月～現在	日本経営システム学会常任理事(兼組織委員長)
2007年4月～現在	厚生労働省ビジネスキャリア検定試験委員
2007年10月～現在	総務省行政管理局電子政府推進委員

所属 ビジネス学部	職名 准教授	氏名 福本明子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
各授業で、学生の発言やグループワークが多くなるように工夫	2004～2007年	*「英語プレゼンテーション」「交渉術・ディベート」では、全員に予習課題のまとめを授業のはじめに発表させることにより、予習を定着させ、考えを事前にまとめ、授業中に発話するパターンを定着させた。*「異文化トレーニング」「交渉術・ディベート」「異文化コミュニケーションII」では、履修学生数の関係で、グループワークを多く取り入れ、グループで課題の議論・発表を1ヶ月に数回取り入れた。 *全てのクラスで、授業中に学生を出来る限り多く指名し、発話の機会を設けた。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
授業「英語プレゼンテーション」のティーチング・マニュアル作成・改編	2004～2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「基礎演習I・II」のティーチング・マニュアル作成	2004～2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「専門演習I・II・III」のティーチング・マニュアル作成	2004～2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「異文化コミュニケーションI・II」(学部生用)のティーチング・マニュアル作成・改編	2004～2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「異文化コミュニケーション」(留学生用)のティーチング・マニュアル作成・改編	2005～2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「交渉術・ディベート」のティーチング・マニュアル作成	2005～2006年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「異文化トレーニング」のティーチング・マニュアル作成	2005～2006年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
授業「ビジネス・コミュニケーション」のティーチング・マニュアル作成	2007年	授業で用いる資料、講義計画の蓄積と修正			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
知多翔洋高校(出張授業)	2005年12月12日	「産業社会と人間」:英語を使って仕事をするについて自分の体験を踏まえて授業			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
全学英語教育運営委員会関連	2004年4月～現在				
全学英語教育運営委員会の委員として、全学英語教育の改善と推進に取り組んだ。その主な成果は、以下のとおりである。					
「独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築」	1999年3月31日 (2004年度・2005年度より参加)	2003年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(2004年度、2005年度も同課題名で採択)			
「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」	2001年3月31日 (2005年度より参加)	愛知淑徳大学 2005・2007年度研究助成 特別教育研究(2008年度まで継続)			
「多文化共生を目指した発信型全学英語教育モジュール化された体系的カリキュラム開発」	2005年	2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム 選定、授業の企画・実施(2008年度まで継続)			
また、採択・選定されなかったものの以下の申請を行った。 ・「全学規模でのオーダーメイド英語教育」(2005年度「特色ある大学教育支援プログラム」)					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Cross-Cultural and Intercultural Work Group Communication Between Japanese and U.S. Americans.	共著	2003年	Small group communication: Theory and practice (8th ed). 出版社: Brown and Benchmark	R. Hirokawa, R. Cathcart, L. Samovar, L. Henman 共著者: Oetzel, J., & Meares, M. M	239頁～252頁
論文					
Communicating across Time and Experiences: How did the Survivors of the Great Hanshin Earthquake Convey Their Messages by Negotiating Cultural Norms?	単著	2003年6月	日本コミュニケーション学会 ヒューマン・コミュニケーション研究31号		91頁～109頁

Transforming Conflicts over Memories into Constructive Dialogues: Interrogating Japanese Communication, National Identities, and Collective Memories about World War II.	単著	2003年12月	ニューメキシコ大学 コミュニケーション・ジャーナリズム学部 博士論文	1頁～364頁
原爆偏見を巡る集団の記憶の検証—集団の記憶のリテラシーを求めて—	単著	2004年6月	日本コミュニケーション学会 ヒューマン・コミュニケーション研究32号	19頁～44頁
Y2K and the Construction of Risk Perception in the Media: Newspapers in Japan and the United States	単著	2005年3月	Keio Communication Review 27号	99頁～115頁
War Memories and the History Textbook Controversy in2000—2001: Seeking Constructive Dialogues over War Memories	単著	2006年	Intercultural Communication Studies XV: 1	221頁～236頁
Everett M. Rogers 先生と Diffusion of Innovation	単著	2007年2月	日本コミュニケーション研究者会議 2006 Proceedings Vol. 17	15頁～34頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2004年12月～現在	日本コミュニケーション研究者会議 運営、事務局(2007～)担当
2006年	SIETAR Japan 紀要査読委員

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 藤井正志	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
平成18年年度前期「授業に関するアンケート調査」結果をふまえ、授業内容・方法について工夫をする。		2007年1月	・授業方針、評価方法について、再三に亘って授業時間内に説明している。 ・学生たちの理解状況、出席状況把握のためミニテストを実施し、ミニテストと期末試験の評価比率についても公表している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「国際金融入門」		2004年3月	担当科目「国際金融論」テキスト 96頁		
「金融論講義ノート」		2005年9月	担当科目「金融論」テキスト 106頁		
パワーポイントによる教材(スライド)作成		2006年度	・担当科目「金融論」「国際金融論」の各授業に使用するために必要な説明用スライドを作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
ビジネスコミュニケーション研究所長		1999年度			
ビジネスコミュニケーション学科主任		2000年度～2002年度			
国際交流センター長		2003年度～2006年度			
国際交流センター長(再任)		2007年度～現在			
長期海外履修制度検討委員会 委員長		2007年度			
大学院ビジネス専攻主任		2007年度～現在			
ビジネス学部教務委員		2007年度～現在			
ビジネス学部 学会誌 編集委員		2007年度			
国際交流センター開設科目 “Japan’s Global Interface”を新設しコーディネーター役をつとめた。		2005年～2007年度	留学生等を対象として、日本のビジネス、文化、国際交流等について複数の教員が英語で授業を行う。講義はオムニバス方式にて実施。		
証券研究中部学生連盟・春期セミナーにおける講演		2005年6月	「日本のメガバンクは国際金融市場の中で生き残れるのか」について講演を行った。		
中京大学経済学部兼任講師		2007年度	「アメリカ経済論」を講義		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
米銀の証券発行に伴う情報開示義務に関する一考察	単著	2001年4月	経営財務研究叢書20		55頁～72頁
—SECと銀行監督官庁による監督範囲の議論を中心に— 金融持ち株会社の証券業務とその検査・監督体制について	単著	2002年3月	愛知淑徳大学論集		111頁～127頁
—米国GLB法制定後の変更点を中心に— 米国における金融検査・監督体制について	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集		129頁～142頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1999年～現在		日本金融学会			
1999年～現在		証券経済学会			
1999年～現在		日本経営財務研究学会			

所属	ビジネス学部	職名	教授	氏名	三浦信宏	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
大規模教室での教育効果を上げるために、チーム制を導入した		2005年4月		大規模教室であっても、4～5名のチームに分け、チーム内の役割を明確にし、チーム単位の討論と発表を中心に行った。これにより、学生の授業への参加意識を改善した。		
事例を中心としたワークショップ型授業を実施した		2005年10月		学生の動機付けのために、プロジェクト・マネジメント理論の解説においては、実社会での活用に近いように、多くのケーススタディを取り入れ、グループ討論を実施した。		
プロジェクトの理論と人間関係とのバランスを考慮した授業を実施した		2007年10月		プロジェクトのプロセスの臨場感を高める為に、物語風の教材をリーディング・アサメントとし、授業では、プロジェクトのヒューマンスキルに重点を置くようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
『Microsoft Office XPを使った情報リテラシーの応用』の執筆		2004年8月		コンピュータ活用科目「情報技術基礎Ⅲ」の授業内容に対応した教科書であり、情報倫理から基本OSのカスタマイズ、WORD、EXCEL、ACCESSの応用操作までをカバーしている。		
パワーポイントによる教材(スライド)作成		2005年3月		プレゼンテーション、流通情報システム論、プロジェクト管理の各授業に使用する為の説明用スライドを作成した。		
プロジェクトのケーススタディを元に物語風にアレンジした教材を作成		2007年8月		今年から2年生が加わった為に、プロジェクト管理の授業を学生に身近に感じて興味を持たせる意味で、理論だけでなくストーリー性を重視した説明用教材を作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
情報表現力を磨く情報リテラシー演習	単著	2001年4月	近代科学社		172頁	
Microsoft Office XPを使った情報リテラシーの基礎	共著	2002年4月	近代科学社	斎木邦弘、三浦信宏、白井晴男、乙名 健	13頁～54頁、280頁～318頁	
Microsoft Office XPを使った情報リテラシーの応用	共著	2004年8月	近代科学社	伊東俊彦、上原 衛、梅田敏文、三浦信宏	15頁～68頁	
Microsoft Office2003を使った情報リテラシーの基礎	共著	2005年10月	近代科学社	切田節子、三浦信宏、白井晴男、乙名 健	25頁～72頁	
Microsoft Office2007を使った情報リテラシーの基礎	共著	2007年10月	近代科学社	切田節子、三浦信宏、小林としえ、乙名 健	25頁～100頁	
論文						
感情プロフィール検査(POMS)から見た思考支援ツールの効果	単著	2003年3月	愛知淑徳大学論集(コミュニケーション学部篇)第3号		121頁～138頁	
プロジェクト・マネージャのタイプ分けと適性評価	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集(コミュニケーション学部篇)第4号		157頁～171頁	
ソーシャル・スタイルから見たプロジェクト・マネージャの適性評価	単著	2004年3月	宮城大学事業構想学部紀要2003		155頁～165頁	
クラスター分析によるマネジメント・スタイル特性の類型化	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集(ビジネス学部篇)創刊号		109頁～123頁	
SSMの活用によるリスクの可視化の試み	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集(ビジネス学部篇)第4号		99頁～114頁	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						

所属 ビジネス学部	職名 准教授	氏名 三矢幹根	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
数学的要素の強い科目を文系学生に分かりやすくするための工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	数学的要素が強い科目だが、文系学生が対象なので、数式を使いながらもできる限り分かりやすい説明を心がけた。数式の展開過程の厳密な理解を求めるのではなく、可能な限りパワーポイントで図解し直感的イメージで概念を理解できるよう工夫した。計算問題はトピックごとに予め用意しておいたエクセルによるオリジナル計算用ワークシートを配布し、各トピックの内容が概念的に正しく理解できていれば、容易に正しい答えを導き出せるよう工夫した。	
理解を深め記憶を定着しやすくするための授業構成の工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	各授業の構成は、①学ぶべきトピックを説明 → ②例題 → ③練習問題 → ④復習問題 → ⑤宿題小テスト、としたので類似問題を短期間の間に複数考えることで理解を深め、記憶が定着しやすいうように工夫した。	
宿題を提出する動機づけのための工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	①理解を深めるために宿題小テストをほぼ毎回課したが、宿題と取り組むモチベーションを高めるために宿題小テストの成績評価に占めるウェイトを30%とし、期末試験のウェイトは70%とすると第1回目講義から繰り返し説明した。②期末試験は宿題小テストの中から同一または類似問題を出題すると繰り返し説明し、宿題小テストと真剣に取り組むモチベーションを高める工夫をした。	
授業に出席する動機づけのための工夫:金融工学/ファイナンス概論	2007年10月～	授業に出席するモチベーションを高めるため、出席点(12回基準の講義換算で無欠席=6点、1回欠席=5点、2回欠席=4点、3回以上欠席=0点)を与えた。	
文系学生を対象としているので宿題および期末試験で計算作業の負担を軽減するための工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	実際のビジネスの現場で行うのと同様に、宿題および期末試験ではエクセルや金融電卓を活用して計算問題に取り組みました。狙いは通常の電卓を使った計算作業そのものの速さや正確さを評価するのではなく、学んだ各トピックの内容を概念的に正確に理解しているかどうかを確認、評価するために計算作業にかかる負担を最小限にするための工夫をした。	
授業の内容に興味を持たせるための工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	授業で学んだことが実際の生活やビジネスでどのように役立っているかを時折脱線して説明した。また、授業で学んだ内容を正確に理解して活用できる人はビジネスの現場でどれほど希少で求められる存在であるかも事例を示して説明した。	
学生の反応を確かめながら授業内容の難易度を修正:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	宿題小テストの結果と授業中の学生の反応を確かめながら授業内容の難易度を修正した。2007年度後期授業アンケート結果(ファイナンス概論)によれば、授業の内容が難しいと感じる学生が少なからず存在したので、難易度をさらに修正した。	
期末テストの傾向と対策を説明し、テスト勉強をしやすくする工夫:数理ファイナンス/金融工学/ファイナンス概論	2007年4月～	期末テストの直前週の授業は総復習および期末テストの傾向と対策の説明に充て、学生が効果的で効率的なテスト勉強ができるよう工夫した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
パワーポイントでオリジナル講義ノートを作成 数理ファイナンス(2007年4月～7月) 金融工学(2007年10月～2008年2月) ファイナンス概論(2007年10月～2008年2月)	2007年4月～2008年2月	学生がノート取りではなく、授業の内容の理解に意識を集中できるようにするため、毎回の授業の内容はすべてパワーポイントで可能な限り図解したオリジナルの詳細な講義ノートを作成し、それを印刷したものを学生に配布した(25～30スライド/講義)。	
エクセルによるオリジナル計算用ワークシートを作成 数理ファイナンス(2007年4月～7月) 金融工学(2007年10月～2008年2月) ファイナンス概論(2007年10月～2008年2月)	2007年4月～2008年2月	数学が苦手でも数値計算が正確にできるようにするため、各トピックに対してエクセルによるオリジナル計算用ワークシート(実務レベルの計算プログラム)を作成して学生に配布した。このワークシートは金融電卓とともに宿題小テストおよび期末試験でも活用させた。機械ができることは機械にやらせ、人間は人間にしかできないことに意識を集中するのが生産性の高いビジネスの基本。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			



4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
個人投資家が株で生活するための必須4要素	単著	2002年1月	日本文芸社、「北浜流一郎のこの株で儲ける2002年新春号」		17項～20項
反転の間合いをシステム化でとらえる	単著	2003年1月	日本文芸社、「北浜流一郎のこの株で儲ける2003年新春号」		14項～16項
生涯現役の株式トレード技術	単著	2006年2月	パンローリング		総計290項
何故個人投資家は失敗するのか	単著	2006年8月	エコノミスト8月増刊 投資の達人株		10項～13項
生涯現役の株式トレード技術【生涯現役のための海図編】	単著	2007年11月	パンローリング		総計321項
論文					
Exploring a formulated off-market generic swap pricing model which uses swap rates to discount cash flows into present value instead of using implied zero coupon yields calculated from prevailing swap rates	単著	1998年8月	英国国立リーズ大学経営学大学院		総計77項
その他					
金融計算の考え方(金利編45ページ&外為編43ページ)	単著	1989年10月	手書き、取引先事業法人財務部へ無償限定配布		総計88項
DVDブック:生涯現役の株式トレード技術	単著	2006年5月	パンローリング		(90分)
DVDブック:生涯現役の株式トレード技術実践編	単著	2006年8月	パンローリング		(6時間)
DVDブック:生涯現役の株式トレード技術《銘柄選択の型と検証法》	単著	2007年1月	パンローリング		(90分)
DVDブック:生涯現役の株式トレード技術《ゆらぎ取り、その考え方と手順》	単著	2007年2月	パンローリング		(60分)
DVDブック:生涯現役の株式トレード技術《生涯現役のための海図編》	単著	2008年2月	パンローリング		(60分)
III 学会等および社会における主な活動					
【学会活動】	第68回証券経済学会全国大会参加、於、関西大学				
2007年10月13日、14日					
【社会における活動】					
1990年3月	《セミナー》デリバティブ(10時間):伊藤忠商事東京本社財務部、約10名、於、伊藤忠商事本社				
1990年6月	《セミナー》デリバティブ(10時間):日商岩井東京本社財務部、約20名、於、日商岩井本社				
1991年2月	《セミナー》デリバティブ(10時間):東ソー東京本社財務部、約10名、於、東ソー東京本社				
1994年12月	《セミナー》デリバティブ(10時間):豊田通商本社財務部、約10名、於、豊田通商本社				
2000年2月15日	《講演》日本経済の見方(2時間):日本特殊陶業本社及び協力企業社長会、約150名、於、日本特殊陶業本社				
2001年1月26日	《コンサルティング》東北六県トラック厚生年金基金理事会における新規投資顧問会社選定、於、仙台ホテル				
2006年4月22日	《講演》「出版記念セミナー 生涯現役の株式トレード技術」、約400名、於、ホテルフロラシオン青山、パンローリング主催				
2006年7月22日	《講演》「生涯現役の株式トレード技術実践編」、約60名、於、新宿住友生命ビル、パンローリング主催				
2006年12月10日	《講演》「生涯現役の株式トレード技術 銘柄選択の型と検証法」、約500名、於、天満研修センター、パンローリング主催				

2007年1月26日	≪講演≫「生涯現役の株式トレード技術 ゆらぎ取り、その考え方と手順」、約1500名、於、昭和女子大人見記念講堂、パンローリング主催
2008年1月26日	≪講演≫「生涯現役の株式トレード技術 生涯現役のための海図編」、約1200名、於、メルパルクホール東京、パンローリング主催

所属 ビジネス学部	職名 教授	氏名 森下允之	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
担当科目(外国為替論、国際投融資論、銀行ビジネス論)の教育上の工夫(基礎知識の完全習得と現在ビジネスに関する大局的な把握を目指す)			単位をとるための授業でなく、卒業後に頭に残る授業をする。話題になっている問題、ニュースを積極的にとりあげる。資料は最新のデータ、記事を使用する。学生に考えさせるため質問・対話をしながらすすめる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
現代ビジネス事情(国際投融資論)の教材		2006年3月(毎年更新)			
銀行ビジネス論の教材		2006年9月(毎年更新)			
外国為替論の教材		2006年9月(毎年更新)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
コミュニケーション学部情報メディアサービス委員会 委員長		2000年4月～2002年3月			
コミュニケーション学部情報システム支援委員会 委員長		2002年4月～2004年3月			
コミュニケーション学部ビジコミ学科 学会誌 編集委員長		2001年4月～2004年3月			
ビジネス学部教務委員会 委員長		2004年4月～2006年3月			
ビジネス学部運営委員会 委員		2004年4月～			
ビジネス学部学生委員会 委員長		2006年4月～2008年3月			
ビジネス学部進路指導委員長		2008年4月～			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
外国為替論	単著	2001年3月	愛知淑徳大学ビジネスコミュニケーション学会、ビジネスとコミュニケーション Vol.1		54頁～59頁
国際投融資論	単著	2002年3月	愛知淑徳大学ビジネスコミュニケーション学会、ビジネスとコミュニケーション Vol.2		63頁～68頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年5月		愛知淑徳学園100周年記念講演会企画元(当時 国際金融情報センター理事長、現在 島根県知事) 溝口善兵衛			

所属 ビジネス学部	職名 講師	氏名 諸上 茂光	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
ppt・ビデオ教材等を利用した授業の実施		2006年4月～	授業の理解を助けるために積極的にパワーポイントを使い視覚的に分かりやすい授業を心がけた。また、必要に応じ、ビデオ教材などを利用することによって、授業の内容がどのように実社会と関係するのかわかるように工夫した。		
授業内演習を取り入れた講義の実施		2006年4月～	一方的な講義で終わってしまわない様に、授業内で重要な部分の理解を助けるような演習問題を解かせたり、授業で取り上げた話題やビデオ教材等に対する意見やポイントを整理するための時間を取ったりした。また、随時学生に発表の機会を設け、これに対する議論を行なうことで学生の積極的な関与を促した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報教育センター運営委員会委員		2006年4月～			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
嗅周皮質の可塑性に基づく受動的連合形成のモデル	共著	2003年9月	日本神経回路学会誌 Vol.10	末光厚夫, 森田昌彦	123頁～129頁
選択的不感化に基づく文脈依存的ニューロン活動のモデル化	共著	2003年11月	情報技術レターズ Vol.2	末光厚夫, 森田昌彦	149頁～152頁
Context-dependent sequential recall by a trajectory attractor network with selective desensitization	共著	2003年11月	Proceedings of the Third International Conference on Neural Networks and Artificial Intelligence	M. Morita, K. Murata	235頁～238頁
下側頭葉における文脈依存的連想の計算論的モデル	共著	2004年8月	電子情報通信学会論文誌 J87-D-II	末光厚夫, 森田昌彦	1665頁～1677頁
Two-attribute hypothesis in the visual feature integration process	共著	2004年11月	Proceedings of The Second International Workshop on Man-Machine Symbiotic Systems	M. Morita	173頁～180頁
選択的不感化法を適用した層状ニューラルネットの情報統合能力	共著	2004年12月	電子情報通信学会論文誌 J87-D-II	森田昌彦, 村田和彦, 末光厚夫	2242頁～2252頁
視覚系における情報統合および連合記憶のメカニズム	単著	2005年3月	筑波大学大学院システム情報工学研究科, 博士論文		
現代広告における外国人モデル起用についての考察:コケージアン・モデル使用広告の認知的・心理的効果の検証	単著	2005年9月	国際ビジネス研究学会『年報2005』		77頁～88頁
形式ニューロンモデルを応用した広告効果の動態的モデルの構築	共著	2008年3月	日本経営システム学会誌, Vol.24 No.2	諸上詩帆	27頁～34頁
その他					
下側頭葉における文脈依存的連想のモデル	共著	2003年6月	電子情報通信学会技術報告, Vol.103	末光厚夫, 森田昌彦	No.152

消費者の予備知識水準が広告の情報処理の深さに及ぼす影響	単著	2003年11月	日本消費者行動研究学会第27回消費者行動研究コンファレンス報告要旨集		15頁～18頁
顔に対するヒトの優先的な認知処理特性が広告・広報認知に与える影響	単著	2003年11月	日本広報学会第9回研究発表大会予稿集		37頁～42頁
選択的不感化を用いた二層ニューラルネットワークとその汎化能力	共著	2003年11月	情報科学技術フォーラム講演集	村田和彦, 森田昌彦	FIT2003 H-022
多層パーセプトロンの限界とその解消	共著	2004年2月	電子情報通信学会技術報告, Vol.103, No.773	森田昌彦, 村田和彦, 末光厚夫	103頁～108頁
複数の属性を持つ視覚作業記憶の情報表現に関する研究	共著	2004年2月	Technical Report on Attention and Cognition	古徳雅史, 森田昌彦	No.21
現代広告における外国人モデル起用についての考察:白人モデル使用広告の認知的、心理的効果の検証	単著	2004年11月	第11回国際ビジネス研究会全国大会自由論題報告要旨		189頁～192頁
形式ニューロンモデルを応用した広告効果の動態的モデルの構築	単著	2005年10月	日本経営システム学会第35回全国研究発表大会講演論文集		236頁～239頁
広告効果の動態的モデルに基づく態度変容パターンシミュレーション実験	共著	2006年11月	日本経営システム学会第37回全国研究発表大会講演論文集		78頁～81頁
ニューロマーケティングの現状と今後の展開	単著	2007年12月	日本広告学会第38回全国大会研究報告要旨集		36頁～40頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2000年4月～現在	電子情報通信学会会員
2001年4月～現在	日本神経回路学会会員
2003年4月～現在	日本社会心理学会会員
2003年4月～現在	日本消費者行動研究学会会員
2003年4月～現在	日本広告学会会員
2003年10月～現在	日本広報学会会員
2004年4月～現在	日本貿易学会会員
2004年4月～現在	国際ビジネス研究会会員
2004年9月～現在	日本経営システム学会会員 (2005年5月～ 評議員, 組織委員)

# 文化創造学部

荒川 洋 治	229	鶴 原 香代子	256
梅 田 卓 夫	231	TOFF Mika	259
榎 田 勝 利	232	とりいかずよし	261
大 野 清 幸	234	永 井 聖 剛	262
CURRAN, Beverley F.M.	236	中 郷 慶	263
川 澄 未来子	239	中 野 弘 三	266
酒 井 晶 代	242	BUI CHI TRUNG	268
島 田 修 三	244	皆 川 修 吾	270
清 水 良 典	247	楊 衛 平	272
杉 本 一 直	249	吉 村 英 夫	273
角 田 達 朗	250	若 松 孝 司	274
曹 述 燮	253		



所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 荒川洋治	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
詩の原理		2003年4月～	近・現代の詩人たちの主要作をテキストに、詩のことばの位置と機能を、わかりやすく解説。		
作者と読者		2004年4月～	受講者自身が、詩人の作品の「作者」となって、自作への質問に答えるなど、多様な視点から作品理解を進めた。		
文学史の理解		2005年4月～	詩、小説の分野での主要な人名のプロフィール一覧を作成する、あるいは作成の指導を行い、文学史総体の理解を深めるようにした。		
素材・表現の差異		2006年4月～	類似した素材・情景を扱う作品の比較、検証を通して、表現の独自性を解説。		
時代のことば		2007年4月～	時代の変遷による言語・表現の変化を観察し、詩の読解を深めるようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
文学史の流れ		2003年4月～	詩を含めた日本近代文学史の流れを図にして、わかりやすく説明し、詩と小説、評論の関わりに理解を深めるようにした。		
詩の歴史		2004年4月～	上記・図表に新資料を交え、詩の歴史を解説。		
地域の文学		2005年4月～	詩と流通、出版との関わりを学ぶため、編集者の業績などをプリントにまとめた。「地方の詩史」についての資料を配布、地域と文学の関係にも留意した。		
テキストの移動		2006年4月～	草野心平「青い花」、室生犀星「寂しき春」など改作例の一覧をつくり、作者の表現意識の推移を一望した。		
ことばをめぐる歴史		2007年4月～	白川静、藤堂明保などの語源解釈の手法を見つめ、「ことば」をめぐる歴史を解説。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
書く・読む・思う(講演・富山県高岡文化ホール)		2003年7月25日	近代、現代の小説作品と日常生活との関わりをもとに、読者の手法を語る。		
青春の詩と言葉(講演・東京、読売ホール)		2005年7月30日	近代詩人の思春期に生まれた作品を紹介し、出発期のことばを論じる。		
生誕百年・高見順の世界(講演・福井県立図書館)		2007年5月12日	生誕百年の高見順の詩・小説・批評・日記などを論じ、昭和期文学の世界を語る。「湯たんぼ雀」「東橋新誌」などに言及。		
詩と印刷と青春(講演・東京、読売ホール)		2007年7月28日	「作家の誕生」期における自主制作の創造性を論じる。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
忘れられる過去	単著	2003年7月	みすず書房		
詩とことば	単著	2004年12月	岩波書店		
心理	単著	2005年5月	みすず書房		
世に出ないことば	単著	2005年9月	みすず書房		
文芸時評という感想	単著	2005年12月	四月社		
黙読の山	単著	2007年7月	みすず書房		
論文					
古代ローマの「銀の道」を行く	単著	2004年8月	芸術新潮第55巻第8号		175頁～189頁
百年に会う	単著	2005年1月	新潮創刊100年記念『名短篇』		462頁～465頁
国語をめぐる12章	単著	2006年7月	文學界第60巻第7号		130頁～139頁
文芸時評の百年	単著	2006年11月1日	毎日新聞・夕刊		第4面
チチチ	単著	2007年5月	文學界第61巻第5号		10頁～12頁



文学談義	単著	2007年9月30日	日本経済新聞	第36面
読者の声	単著	2007年11月	諸君!第39巻第11号	89頁
日記の「新年」	単著	2007年12月17日	毎日新聞・夕刊	第4面

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～2008年3月(毎週火曜日)	TBSラジオ「日本全国8時です」出演
2003年4月～2008年3月(不定期)	NHKラジオ「ラジオ深夜便」出演
2003年4月～2008年3月(不定期)	NHK教育テレビ「視点・論点」
2007年4月17日～5月27日	第5回小林秀雄賞受賞記念「荒川洋治展」開催(福井県立図書館)
2008年3月1日～6月29日	詩画展「三国古詩」開催(福井県坂井市・オノメモリアル)

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 梅田卓夫	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
a 創造的文章表現法の指導		2001年4月～現在	文化創造学部表現文化専攻の「日本語表現法」、「クリエイティブ・ライティング」、および文学部国文科の「文章表現」において実作演習の方法を取り入れた授業を行い、創造的な文章を書くための技法を習得させるよう努めている。「はじめて本当に文章の書き方を学んだ」との反応が返ってきている。		
b 現代詩創作と研究のための総合的な授業の展開		2002年4月～現在	「言語表現Ⅴ」「表現文化基礎演習Ⅱ」「表現文化研究Ⅰ～Ⅳ」の各(現代詩部門)において、概説、小グループによる研究発表、討論、創作と相互批評(合評)を積み上げ、受講者の現代詩への視野を広めつつ、感性をみがき、創作力・鑑賞力を向上させることをめざす授業を行っている。		
c 人間精神に占める「読書」の役割の研究、およびその授業化		2001年9月～現在	学校図書館司書の資格のための科目「読書と豊かな人間性」の授業を担当し、人類文化のなかの書物、歴史のなかの図書館、人格形成における識字と読書の役割、などにわたって認識を深めるとともに、本人の長年に及ぶ読書体験を加味しながら、読書のもたらす豊かさを再認識させる授業内容を追究している。		
d 作品としての「自分史・エッセイ」創作法の研究		2004年9月～現在	大学院修士表現専攻のための科目「ライフライティング実作演習」において、一般社会人の参加をも前提としつつ、成人が体験や思索を文章作品としてまとめる場合に必要で実際の文章力の養成に重点を置いた演習を展開している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
風景 梅田卓夫詩集	単著	2006年11月	西田書店		160頁
論文					
詩を作る学生たち	単著	2004年6月	詩誌『アルファ』144号		8頁
詩を作る学生たち'05年	単著	2005年9月	詩誌『アルファ』149号		6頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2004年～2005年		東京都国立市公民館主催の市民向け文章講座講師			

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 榎田勝利	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2004年度前期「授業に関するアンケート」結果をふまえ、授業内容・方法について工夫をする。		2004年7月1日	・授業方針、評価方法等に関しては期間中、繰り返し説明するようにしている ・学生たちからの授業内容等のフィードバックを得るため、毎時間メモを配布し、その結果を出来るだけフォローアップすることに努めている		
2 作成した教科書、教材、参考書					
国際協力ノボランティア用語集		2005年4月1日	国際ボランティア論、国際協力論の補助教材、米国NPOインターンシップの事前研修で使用する専門用語および関連ホームページを紹介 93頁		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
米国NPOインターンシップ10年の記録集		2006年2月10日	1996年からスタートした米国NPOインターンシップ10年間の記録 29頁		
多元文化専攻主任 資格審査委員会委員 文化創造学部運営委員会委員 特色GP申請準備委員会委員					
文化創造学部長就任		2007年4月～2008年3月			
文化創造学部長再任		2008年4月～2010年3月			
サービスマーケティングの実践(フィールドワーク)		2005年9月30日～10月2日 静岡県天竜市 2006年9月20日～9月22日 愛知県美浜町 2007年9月21日～9月23日 愛知県犬山市	2年ゼミ生を対象に地域の国際化・活性化をテーマに実践から学ぶ教育を実施		
サービスマーケティングの実践(スタディツアー)		2005年8月25日～9月3日 バンコク、ロブリー県 2006年8月29日～9月8日 バンコク、ロブリー県 2007年8月29日～9月8日 バンコク、ロブリー県	3年ゼミ生を対象に国際交流・協力活動の企画から実施、評価までを行う		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
国際交流・協力活動入門講座II	共著	2004年9月11日	明石書店	編著	9頁～35頁、123頁～126頁、252頁～266頁
ボランティア白書2005	共著	2005年3月	日本青年奉仕協会	ボランティア白書編集委員会	132頁～134頁
「愛・地球博」のボランティア活動の成果を未来につなぐ～創造型ボランティアセンターをめざして～	共著	2006年7月	NPOジャーナル Vol. 14 発行:関西国際交流団体協議会 発売:明石書店		
論文					
Civil Participation in the EXPO & Community Improvement	共著	2005年9月22日～24日	The 2nd Assembly of the Association of Cities and Regions Hosting an International Exhibition (AVE) 報告書		114頁～118頁
韓国政府における映画振興政策—1987年以降を中心として—	共著	2008年3月1日	愛知淑徳大学論集—文化創造学部・文化創造研究科 8号	鈴木奈緒美	85頁～100頁
日系オーストラリア人2世のアイデンティティ～日系オーストラリア人2世の成人男女を対象としたインタビュー調査をもとに～	共著	2008年3月1日	愛知淑徳大学論集—文化創造学部・文化創造研究科 8号	山田梨津子	117頁～132頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1999年4月～現在	日本NPO学会会員
1999年4月～2005年	国際ボランティア学会会員理事
2000年4月～現在	異文化間教育学会会員
2002年12月～2006年7月	愛・地球博ボランティアセンター経営企画委員長
2001年5月～現在	アジア車いす交流センター理事、理事長
2002年8月～2004年3月	岡崎市国際化推進検討委員会会長
2003年7月～2005年3月	愛知県国際交流大都市圏構想策定委員会委員
2006年2月～現在	モリゾー・キッコロ着ぐるみ使用についての審査委員会委員長
2005年4月～現在	なごや国際交流団体協議会会長
2006年8月～現在	愛・地球博ボランティアセンター理事長
2006年6月～現在	姉妹自治体交流表彰(総務大臣賞)審査委員会委員(副委員長)
2006年8月～2007年3月	春日井市国際化推進施策研究会会長
2006年12月～2007年3月	常滑市国際化推進施策委員会顧問
2007年4月～現在	ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)日本代表
2007年1月～2008年1月	IAVEアジア太平洋地域ボランティア会議 in 愛知・名古屋実行委員会委員長
2007年9月～2008年3月	生物多様性条約第10回締約国会議誘致構想策定委員会(COP10)委員

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 大野清幸	大学院における研究指導 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
「メーリング・リストを利用した情報共有と授業改善」	2001年以降継続	担当授業科目ごとに受講者専用メーリング・リストを設定し、授業担当者および受講者同士の情報共有を目指した授業改善を実践中である。	
「ネット掲示板を利用した情報共有と授業改善」	2003年以降継続	英語科教育法1のために受講者専用ネット掲示板を設定し、授業担当者および受講者同士の情報共有を目指した授業改善を実践中である。	
高雄市(台湾)で開催された英語プレゼンテーション大会 ASEP2004への院生引率=文化創造研究科「国際交流実践演習III」	2004年12月22～27日	http://www.kageto.jp/asep/2004/ http://ajds.nsysu.edu.tw/1000214853/asep2004/	
高雄市(台湾)で開催された英語プレゼンテーション大会 ASEP2005への院生引率=文化創造研究科「国際交流実践演習III」	2005年12月22～27日	http://www.kageto.jp/asep/2005/ http://ajds.nsysu.edu.tw/1000215919/asep2005/	
2 作成した教科書、教材、参考書			
「言語獲得研究のための文献目録データベース (Bibliography Database for Language Acquisition Research=BDLAR)」 http://cow.lang.nagoya-u.ac.jp/jbib/jbibsearch.html	2001年以降継続	インターネット上で文献検索できるように本データベースを構築し、授業・学習指導などにも利用した。言語学・応用言語学・英語学・国語学・日本語学・日本語教育学・英語教育学・発達心理学・保育学などの多領域に散在する文献情報を丹念に収集した。本件は、言語獲得研究のための文献目録データベースである。	
英語教育から見たASEPとWYM:活動に対する評価 http://www.kageto.jp/asep/2005/re/4-ono.htm	2006年1月5日	ASEPとWYMの活動に対して、英語教育の面から見た評価を行った。関連するリンク集を作成し、付記した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
「基礎教育と語学教育の留意点」愛知淑徳大学教育内容等 改善検討委員会主催、第1回「教育内容等改善」について の意見交換会	2001年1月30日	(1)電子メールによる課題提出および学生とのコミュニケーション	
「総合的学習の時間」に備える:「調べ学習」のノウハウ」外国語 教育メディア学会(LET)中部支部メディア活用研究会 第7回月例研究会	2001年3月10日	新学習指導要領の目玉のひとつである「総合的学習の時間」において、インターネットを利用した「調べ学習」がお手軽な方法として、取り入れられるだろうと予測しているが、子ども達に「生きる力」を身につけてもらうためには、これにも方法論が必要であると思う。長年、「情報活用」に関心を持ってきた者として、現実生活に利用できる「研究方略」の留意点について講演した。大学における基礎教育と語学教育における留意点からヒントになるものを提示した。	
「授業方法と授業改善方法:私の実践」愛知淑徳大学 文化 創造学部多元文化専攻主催、多元文化専攻教授法改善懇 話会	2001年10月22日	電子メールによるアンケート調査と授業改善。授業方法の留意点7点。	
「愛知淑徳大学文化創造学部における英語教育:TOEIC導 入によるカリキュラム考察」愛知淑徳大学文化創造学部多元 文化専攻主催、多元文化専攻教授法改善懇話会	2001年10月22日	共著者:中郷 慶、大野清幸。これまで英語能力と関係すると直感的に思われていた様々な因子について、その真偽をTOEIC IPテストのデータによって検証した。3つの調査をもとに、6つの仮説を検証し、(1)～(4)については、正しいことを立証した。(5)～(6)については、立証されなかった。	
「大野式「暗号解読法」: ディクテーション重視のリスニング強化授業」 中京大学教養部英語系列主催フォーラム「私の英語教育」	2002年2月13日	下記の文献を参考にして開発した、「大野式「暗号解読法」:ディクテーション重視のリスニング強化授業」について報告した。  グレゴリー・クラーク 1993.『グレゴリー・クラーク先生の「暗号解読法」があなたの英語に奇跡をおこす!』同文書院を参照した。	
英語教育から見たASEPとWYM:活動に対する評価 http://www.kageto.jp/asep/2005/re/4-ono.htm	2006年1月5日	ASEPとWYMの活動に対して、英語教育の面から見た評価を行った。関連するリンク集を作成し、付記した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
文化創造学部予算委員会予算委員 情報システム支援部運営委員会委員 教職課程委員会委員 文化創造学部入試実施委員長 文化創造学部多元文化専攻専攻主任 FD委員会委員	2000年度～2001年度 2000年度～2007年度 2000年度以降 2004年度以降 2007年度以降 2008年度以降		

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
「愛知淑徳大学文化創造学部における英語教育:TOEIC導入によるカリキュラム考察」	共著	2002年3月8日	『愛知淑徳大学論集:文化創造学部篇』第2号	中郷 慶・大野清幸	80頁～103頁
「日本語指示詞の直示用法の獲得(1):一女兒1歳6ヶ月から1歳11ヶ月までの予備的研究」	単著	2005年3月7日	『愛知淑徳大学論集:文化創造学部篇』第5号		1頁～19頁
「日本語指示詞の直示用法の獲得(2):一女兒2歳0ヶ月から2歳5ヶ月までの予備的研究」	単著	2008年3月7日	『愛知淑徳大学論集:文化創造学部・文化創造研究科篇』第8号		23頁～47頁
その他					
「言語獲得研究のための文献目録データベース」		2001年以降継続	<a href="http://cow.gsid.nagoya-u.ac.jp/jbib/jbibsearch.html">http://cow.gsid.nagoya-u.ac.jp/jbib/jbibsearch.html</a>	©大野清幸、他	
III 学会等および社会における主な活動					
2002年度～2003年度	日本言語科学学会会計監査				
2004年度	日本言語科学会選挙管理委員長				
2001年度～2005年度	国際教育交流協会面接委員				

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 CURRAN, Beverly F.M.	大学院における研究指導 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		1),2), 3), 4), 5),を行うにあたって次の点に留意している。 *Interest:学習は興味を持つことから始まる学術的な学習だけではなく、学生が興味を持つことも教材に入れて学ばせる。	
1)異言語・異文化翻訳・メディアトランスレーション・映像翻訳		*Real-World Relevance:学習はリアルティのある知識が大切だと思う。ライティング、文学や翻訳に着いて発表するため作家や翻訳者を招待する。例えばあるすばらしい卒論はゲスト・ライターの詩の翻訳についてだった。学生と著者は送返信していた。オリジナル翻訳に関する卒論ができた。上級英語の授業でもゲスト・スピーカーがいる。	
2)英語ライティング1・日記・アカデミックライティング・ビジネスライティング・電子メール		*Learning by Doing:英語を使う能力をつける目的がある。特に、インターンシップで自己紹介ができるし、国際研究大会で自信を持って発表することができる。例えば、2005年1月末、大学院生2人がフロリダ州大学の国際映画研究大会で初めて英語で論文を発表した。私は同行して応援した。そして今年の4年生のゼミ学生(4月から大学院生)が英語で書いたジェンダーにかする論文をアカデミックジャーナルに提出した。	
3)上級英語・英語表現方法(プレゼンテーション)		*Intellectual Honesty:研究方法として、文献のコピーでなく自分の中で消化して自分のものにする。自分自身の考えと言葉で論文を書く。	
4)英文学・アメリカ文学		*Access: いつでも学生は私にアクセスできる。電子メールでも研究室でも。ランチタイムに話したり、サポートをしたりできる。	
5)基礎演習(研究方法)		*Evaluation:学生の評価の際には能力よりもいかに時間をかけ努力をし成すことができたかを重視している。	
6) 国際文化交流文化翻訳			
2 作成した教科書、教材、参考書			
教科書の代わりに、教材を自分で作成する。プリントを準備し、映画、新聞の記事、マンガ、小説や詩を使い、ゲストスピーカーを招待しあする。ゼミ学生の研究のために、DVDや本など配る。		例えば翻訳のゼミでHarry Potterの翻訳が出る前に学生が自分で少し翻訳して、後で翻訳本と比較する。  IT機器を学生が使いこなすことができるようになることを奨励している。例えばコンピューターは論文を書くだけでなく、インターネットから研究の資料を受けとったり、blogを作って、自分の研究を発表したりする。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
“Performances of the Translator within Literature”	2004年8月(単)	International Comparative Literature Association (ICLAL)国際文学研究大会、香港	
“The Embedded Translator: A Coming Out Story”	2004年11月(単)	International Conference on Translation and Conflict,ヨーロッパ研究センター、サルフォード大学、マンチェスター市、イギリス	
“Dry Lips Moves to Tokyo: Does Indigenous Drama Translate?”	2004年11月29日(単)	ゲスト・スピーカーシリーズ、翻訳やインターカカルチャル研究センター、マンチェスター大学、マンチェスター市、イギリス	
“Linguistic Camouflage: The Translator Embedded in Canadian Fiction and International War Zones”	2005年6月(単)	TransCanada: Literature, Institutions, Citizenship 文学研究大会、バンクーバー市、カナダ	
「グローバル英語における架空的な翻訳者」	2005年11月25日(単)	「グローバルライゼーションと文学の将来」シンポ、明治学院大学、東京	
「カナダ文学におけるアイルランド人」	2006年6月7日(単)	アイルランド研究講座シリーズ、NHK文化センター、名古屋	
“Camp Performances in Canadian History: Kerri Sakamoto’s The Electrical Field”	2006年6月24日(単)	日本カナダ文学 第24回研究大会、京都産業大学、京都	

“Learning or Lost in Translation? First Nations and Aboriginal Theatre in Japanese Translation and Performance”	2006年8月(単)	International Federation for Theatre Research (IFTR)国際研究大会, ヘルシンキ、フィンランド
「エコポエトリーの紹介」	2006年10月22日(単)	「環境文学をよむ」講座シリーズ、名古屋大学、名古屋
“Glocal Identities in Kerri Sakamoto’s The Electrical Field and One Hundred Million Hearts”	2007年1月12日(単)	カナダ研究ゲスト・スピーカー講座シリーズ、明治学院大学、東京
“Linguistic, Cultural, and Political Translation”	2007年6月14日(単)	Cultural Plaza 講座シリーズ、南山大学、瀬戸キャンパス
“How do you say ‘Mr Charlie’ in Japanese? James Baldwin’s Blues for Mister Charlie in Japanese Translation and Performance”	2007年6月(単)	James Baldwin: Work, Life, Legacies 文学大会、ロンドン大学、ロンドン
“Daphne Marlatt’s ‘The Gull’ and ‘The Given’: the poem as play, the novel as poem”	2008年6月14日(単)	日本カナダ文学 第26回研究大会、関西外語大学、大阪

#### 4 その他教育活動上特記すべき事項

文学的なプログラム、カナダ館、愛知球博	2005年4月～9月23日	学生たちはすべてのカナダ館のカナダ作家の朗読会に参加できた。
Gender and Film: Disney’s Women	2005年6月～7月(5回) 単	講座シリーズ、名古屋市男女平等参画推進センター、名古屋
Gender and Film: Working Women	2006年7月(4回)	講座シリーズ、名古屋市男女平等参画推進センター、名古屋
Gender and Film: Romeo and Juliet	2007年7月(4回)	講座シリーズ、名古屋市男女平等参画推進センター、名古屋
Gender and Film: Women in the Media	2008年7月(4回)	講座シリーズ、名古屋市男女平等参画推進センター、名古屋

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
Damaged in Translation: The Fictional Translator in Canadian and Australian Writing (博士論文)	単著	2006年4月提出	Department of English and Comparative Literature, Murdoch University, Perth Australia		466頁
Theatre Translation Theory and Performance in Contemporary Japan: Native Voices, Foreign Bodies	単著	2008年(出版予定)	St. Jerome Publishing, Manchester UK		220頁
<b>論文</b>					
“My Own Story, In Other Worlds: Currents of Cultural Memory and Autobiographical Drift in Daphne Marlatt,” (2005年); “The Translator and the Photographer,” (2006年) “The Limited Visibility of the Translator in The Pleasures of Conquest” (2007年); “Linguistic Damage: Fear of Other Languages in David Malouf’s Remembering Babylon” (2008年)	単	2005年～2008年	論集、文化創造学部、愛知淑徳大学5号～8号		65頁～77頁(2005年); 1頁～18頁(2006年); 1頁～16頁(2007年); 1頁～18頁(2008年)
“From the Well of Loneliness to the akarui rezubian: Western Translations and Japanese Lesbian Identities”	共	2005年	Genders, Transgenders and Sexualities in Japan. Eds Mark McLelland & Romit Dasgupta. London: Routledge	James Welker	65頁～80頁
“The Fictional Translator in Anglophone Literatures”	単	2005年	Linguistica Antverpiensia (4)		183頁～199頁
“Ondaatje’s The English Patient and Altered States of Narrative”	単	2005年	Comparative Cultural Studies and Michael Ondaatje’s Writing. Ed. Steven Totosy. West Lafayette Indiana: Purdue University Press		16頁～26頁



"Against the grain: the Canadian desert"	単	2005年	Multiculturalism: Canada and India. Eds RK Dhawan & DK Pabby. New Delhi: Prestige	30頁～43頁
"A Question of Choice: Is Deepa Mehta's Fire a Lesbian Film?"	単	2006年	Lesbian Voices: Canada and the World-Theory, Literature, Cinema. Ed. Subhash Chandra. New Delhi: Allied Publishers	225頁～241頁
"Camp Identity in The Electrical Field"	単	2006年	Journal of the Canadian Literary Society of Japan (14)	10頁～26頁
"Dry Lips Moves to Tokyo: Does Indigenous Drama Translate?"	単	2007年	Canadian Cultural Exchange: Translation and Transculturation/Echanges culturel au Canada. Traduction et transculturation. Eds Norman Cheadle and Lucien Pelletier. Sudbury: Laurentian University Press	441頁～463頁
"The Embedded Translator: A Coming Out Story"	単	2007年	Translation and Interpreting Conflict. Ed. Myriam Salama-Carr. Amsterdam: Rodopi	233頁～250頁
"Invisible Indigeneity: First Nations and Aboriginal Theatre in Japanese Translation and Performance"	単	2007年	Theatre Journal 59.3	449頁～465頁
"Linguistic Damage: Fear of Other Languages in David Malouf's Remembering Babylon"	単	2008年	Fact and Fiction: Readings in Australian Literature. Eds Amit Sarwal & Reema Sarwal. New Delhi: Authorpress.	156頁～186頁
"Citizenship, Interrupted: The Dialogic Interpreter in <i>Obasan</i> "	単	2008年	West Coast Line 58	132頁～145頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

イベントコーディネーター、学術的なプログラム、カナダ館、愛知球博	2005年4月～9月。カナダ館、VIPラウンジ、招待した作家はTim Wynne-Jones、Robert Lalonde、Ann-Marie MacDonald、Shannon Thunderbird & Sandra Horne、France Daigle、Karen Levine、Marie-Francine Hebert、Bertrand Gauthier
朗読会のコーディネーター	2001年～2005年：Tomson Highway、Margaret Atwood、Richard Cavell & Peter Dickinson、Linda Gaboriau & Melissa auf der Mier、Paula Bilbrough、Pamela Banting、Fred Stenson、Joy Kogawa、Katherine Govier、Nicole Brossard & Erin Moure、Lee Maracle、Roy Miki、Larissa Lai、Daphne Marlatt、Michael Crumme、Sarah Holland-Batt
講演会ゲストスピーカー	2005年11月15日、名古屋千種ロータリークラブ。講演のテーマ：パブリック・アート
シンポのゲストスピーカー	2005年11月25日、明治学院大学、東京。グローバルイズムと文学の将来。論文のテーマは「グローバル英文学における架空的な翻訳者」
本批評	Knowlson, James and Elizabeth. Beckett Remembering, Remembering Beckett. Journal of Irish Studies, Volume XXI, 2006: 140-141; Takahashi, Mutsuo. On Two Shores: New and Selected Poems. Trans. Mitsuko Ohno and Frank Sewell. Journal of Irish Studies, Volume XXI, 2006: 143-145; Cockerill, Hiroko. Style and Narrative in Translations: The Contribution of Futabatei Shimei. The Translator 14(1), 2008: 170-174.

所属 文化創造学部	職名 准教授	氏名 川澄未来子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
・電子メディア(WWW、マルチメディア等)の授業内活用		2001年～現在	画像・映像素材の提示、ファイルサーバーを介した課題配布・収集等。		
・学生の達成水準の定量評価および結果開示		2001年～現在	指定評価項目に対し学生自身が5段階評価し、結果を統計処理して開示。		
・学外発表(学会・コンテスト等)に向けての学生指導		2003年～現在	顔学会で発表(2004)、感性工学会発表(2006)、色彩学会発表(2007)等。		
・就職を視野に入れた資格取得学習の支援		2001年～現在	CGクリエイタ検定、マルチメディア検定、色彩検定等。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
・コンピュータ科目の教材作成		2001年～現在	授業ポイントをまとめたプリント教材、PowerPoint教材を作成。		
・専攻HPの企画・制作		2002年～現在	在学生向けの資料・情報提供ツールとして制作。		
・専攻卒論集CD/DVD「REPRESENTATION」企画・編集・制作		2003年～現在	在学生向け教材、学外研究機関向け広報媒体として制作。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・コンピュータ活用委員(キャンパス代表)		2001年～2003年度	全学コンピュータ科目の企画・運用等。		
・情報システム支援部運営委員(学部代表)		2001年～2005年度	コンピュータ機器・施設等の利用・運用等。		
・成績評価検討委員(キャンパス代表)		2005年度	GPA導入に向けた手法・手続き等を具体的に検討。		
・その他学部内委員活動		2001年～現在	学生生活委員(2003,2007,2008)・紀要編集委員(2002～03)・予算委員(2001～現在)等。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
色彩用語事典	共著	2003年	東京大学出版会	日本色彩学会編	183頁、333頁～334頁
自動車樹脂材料の高機能化技術集	共著	2008年3月31日	技術情報協会	技術情報協会編	第9章第3節
論文					
～NEDO共同開発～ヒューマンセンタードITSビューエイドシステム 運転支援情報の提示方法の開発 ドライバに信頼される運転支援情報の提示方法の実現を目指して	共著	2003年	画像ラゴ, Vol.14 No.3	石垣裕嗣・加藤一弥・川澄未来子・三木修昭	55頁～58頁
特集 官能検査の自動化 知覚しやすい文字デザイン 車載ディスプレイにおける研究開発検討	共著	2003年	映像情報February 2003	白井了・中野倫明・山本新・加藤一弥・石垣裕嗣・川澄未来子	19頁～23頁
ものづくりと感性-芸術と工学-	単著	2003年	自動車技術会中部支部報 No.53		26頁～29頁
Displaying method in on-board display(2)-Route guidance method based on sex differences-	共著	2003年6月9日	IEEE Intelligent Vehicles Symposium	M.Kawai, M.Kawasumi, T.Nakano, S.Yamamoto	357頁～360頁
視覚探索課題における視線移動とパターン処理/シリアル処理の関係に関する一考察	共著	2003年	ヒューマンインタフェースシンポジウム2003	小山茉莉・川澄未来子・古橋武	5頁～8頁
車いすの移動負担度推定に関する実験と計測	共著	2004年	愛知淑徳大学現代社会学部論集、第9号	辻紘良・川澄未来子・増岡孝之・野澤成裕	123頁～135頁
クルマの表情と年齢印象の評価	共著	2004年	日本顔学会誌, Vol.4, No.1	川澄未来子・藤原孝幸・興水大和	107頁～111頁

自動車のヘッドランプにおける感性品質の評価	共著	2004年	日本顔学会誌, Vol.4, No.1	山森幸奈・川澄未来子・尾形透	162頁
顔ことばによる自動車フロントマスクの表情の評価	共著	2004年	日本顔学会誌, Vol.4, No.1	大脇真理・川澄未来子・藤原孝幸・輿水大和	161頁
車の色・質感の計測と設計	単著	2004年	2004年度電気関係学会東海支部連合大会(シンポジウム)		S2-4
車いす経路誘導システムにおける移動負担度の推定	共著	2004年3月6日	日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部第31回中部支部研究会発表会	増岡孝之, 野澤成裕, 辻絃良, 川澄未来子	9頁～12頁
Human-Friendly Method for Display Drive Assist Information	共著	2005年5月19日	11th World Congress on ITS Nagoya	K.Kato, H.Ishigaki, T.Nakano, S.Yamamoto, M.Kawasumi	No.3302
車いすの移動に伴う生理負担量の計測	共著	2005年	愛知淑徳大学現代社会学部論集、第10号	辻絃良・増岡孝之・野澤成裕・川口理恵・川澄未来子	69頁～82頁
Estimation method of traveling load originated from driving a wheelchair for a pedestrian assistance traffic system	共著	2005年5月25日	5th Conference on Gerontechnology	H.Tsuji, T.Masuoka, N.Nozaawa, R.Kawaguchi, M.Kawasumi	PS1a3
Human-Friendly Information Display in Accordance with Degree of Urgency and Driver Alertness	共著	2005年5月19日	7th International Conference on Quality Control by Artificial Vision	H.Ishigaki, K.Kato, S.Yamamoto, T.Nakano, M.Kawasumi	131頁～135頁
車フロントマスクの顔メディア性の実験的考察	共著	2005年	第11回画像センシングシンポジウムSSII05	川澄未来子・藤原孝幸・輿水大和	453頁～454頁
カーナビにおける女性向け地図表示方法の検討	共著	2006年	ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.8, No.3	川合真弓・川澄未来子・中野倫明・山本新	83頁～90頁
自動車リアランプの感性品質評価-車格とデザインの関係-	共著	2006年	第8回日本感性工学会大会予稿集2006	川澄未来子・林美恵子・古田愛子・高木美優・夏目和典・横川麻美	112頁
自動車フロントマスクにおける表情と年齢印象の評価研究-似顔絵線画を使った分析-	共著	2006年	第8回日本感性工学会大会予稿集2006	川澄未来子・林美恵子・安藤佳奈子・山川愛子・藤原孝幸・輿水大和	111頁
Analysis of facial expression and perceived age for designing automotive frontal views	共著	2007年1月9日	Proc. of International Workshop on Advanced Image Technology(IWAIT2007)	T. Fujiwara, M. Kawasumi, H. Koshimizu	122頁
地図の色調に対する印象評価研究-国籍別・年齢別被験者の比較-	共著	2007年5月12日	日本色彩学会誌, Vol.31、SUPPLEMENT	川澄未来子・桑原京介・石井由加里	100頁～101頁
自動車リアランプに対する印象評価研究-実物・写真紙・Web実験の比較-	共著	2007年5月12日	日本色彩学会誌, Vol.31、SUPPLEMENT	川澄未来子・古田愛子・夏目和典・仲田麻美	98頁～99頁
Analysis and Evaluation of Facial Expression and Perceived Age for Designing Automotive Frontal Views	共著	2007年5月25日	Proc. of 8th International Conference on Quality Control by Artificial Vision	T. Fujiwara, M. Kawasumi, H. Koshimizu	
テレビドアホンのユーザビリティ評価-ユーザ属性別の比較検	共著	2007年9月5日	ヒューマンインタフェースシンポジウム2007	川澄未来子・玉木克志・高幡幸太郎・阿部智仁・花井香織	723頁～728頁
中高年の認知症早期発見システムの検討	共著	2007年12月6日	第6回ITSシンポジウム2007～安全と共生のITS～	嘉藤晃・野田龍臣・山田宗男・川澄未来子・山本修身・中野倫明・山本新	1頁～26頁
まばたきの変化と操舵特性からドライバの意識低下状態の推定	共著	2007年12月6日	ビジョン技術の実利用ワークショップ(VIEW2007)	鈴木麻以・川澄未来子・山本修身・中野倫明・山本新	I-14
自動車教習所向け高齢者の運転能力測定システムの開発	共著	2008年3月6日	動的画像処理実利用化ワークショップ(DIA2008)	牛田将弘・平岡雅丈・野田龍臣・山田宗男・川澄未来子・松田克己・山本修身・中野倫明・山本新	O4-2

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年4月～現在	電気学会パターン認識適用環境拡大協同研究委員会中部地区委員会(運営委員)
2003年4月～現在	中京大学人工知能高等研究所(所員)
2003年4月～現在	日本色彩学会東海支部(代議員)
2004年11月～現在	愛知県ITS推進協議会(特別委員)

2003年4月～現在	受託研究契約:株式会社小糸製作所「ランプデザインの感性評価」
2003年4月～2005年3月	科研費:基盤研究(B)「ドライバの特定とそのドライバの特性に基づく運転支援・経路案内情報の提示・表示方式」
2003年5月～2004年2月	受託研究契約:トヨタ自動車株式会社「自動車内装部品から受ける視覚的刺激に対する心理的反応に関する研究」
2006年1月～現在	受託研究契約:アイホン株式会社「インターホンのユニバーサルデザイン」
2006年4月～2007年3月	受託研究契約:株式会社豊田中央研究所「車意匠デザインの時代性の解明」

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 酒井晶代	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
学外授業を活用したゼミの充実・発展		2002年度～現在	3年ゼミ生を対象として、毎年、夏期休暇を利用したゼミ合宿(学外授業)を実施している。短編創作や読書会、施設見学等を通して児童文学への関心を深めると同時に、目的地やスケジュールを学生間の話し合いで決定させ、仲間づくりの場になるよう配慮している。		
作品公開による学習意欲の向上		2003年度～現在	ゼミで提出された作品を授業内で読みあうのみならず、各種公募への投稿、児童文学団体(中部児童文学会)の例会・セミナーでの合評など、学外にも公開し、評価の対象としてもらうよう努めてきた。		
「児童文化論」授業アンケートに伴う授業方法の工夫		2004年4月～現在	2004年度より導入された「授業に関するアンケート」では、その結果を踏まえて授業方法を工夫している。技術的な事柄はもとより、授業の目的についても振りかえり、見直す機会となっている。		
「言語表現H(児童文学)」授業アンケートに伴う授業方法の工夫		2004年10月～現在			
2 作成した教科書、教材、参考書					
「児童文学ゼミ文集」の発行		2003年度～現在	ゼミ生の卒業論文・制作を編んだ文集。2年間のゼミのまとめとして毎年度末に発行している。また、1学年下のゼミ生にも配布し、卒業論文・制作の指導に活用している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
ラウンドテーブル 児童文学と教育(その1) 大学教育における『児童文学』(日本児童文学学会第53回中部例会)		2004年9月25日	提言者として参加。「読むことと創ることの間で」という題で、ゼミでの実作指導の方法や学生の児童文学受容の様子について報告した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
公共図書館等主催の講座講師		2003年度～2006年度	東海市立中央図書館(2003年9月)、美和町図書館(2004年7月)など、計8件。いずれも児童文学や子どもの読書に関するもの。		
創作グループ等での合評会講師		2003年度～2004年度	「中部児童文学セミナー」(2003年7月、2004年8月)など、計3件。		
セクシャル・ハラスメント相談員		2000年度～2003年度	いずれも、学内での校務・委員会活動である。		
進路支援委員		2002年度～2003年度			
星ヶ丘キャンパスカリキュラム検討委員		2002年度～2003年度			
学部教務委員		2004年度～2005年度			
研究科教務委員		2004年度～2006年度			
学部予算委員		2006年度			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
文化と子ども—子どもへのアプローチ—	共著	2003年5月	建帛社	浅岡靖央、加藤理編・酒井晶代ほか分担執筆	115頁～135頁
たのしく読める日本児童文学(戦前編)	共著	2004年4月	ミネルヴァ書房	鳥越信編・酒井晶代ほか分担執筆	140頁～141頁、146頁～147頁、164頁～165頁、214頁～215頁
たのしく読める日本児童文学(戦後編)	共著	2004年4月	ミネルヴァ書房	鳥越信編・酒井晶代ほか分担執筆	74頁～75頁、82頁～83頁、102頁～103頁、106頁～107頁
児童文学研究、そして、その先へ(下)	共著	2007年11月	久山社	宮川健郎、横川寿美子編・酒井晶代ほか分担執筆	55～71頁
論文					
キャラクターができるまで—いとうひろし「おさるシリーズ」の場合	単著	2003年4月	日本児童文学(第49巻第2号)		22頁～26頁
「ちようちよだけに、なぜなくの」この教材の魅力	単著	2004年7月	実践国語研究(第28巻第7号)		9頁～13頁

物語が生まれる場所—富安陽子『ほころの神さま』に描かれた秘密基地—	単著	2004年8月	児童文芸 (第50巻第4号)		12頁～15頁
「わかりにくさ」に目をこらす	単著	2005年6月	日本児童文学 (第51巻第3号)		33頁～35頁
明治20年代における「児童文学」ジャンル—幼少年雑誌を手がかりとして—	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集(文化創造学部篇)(第7号)		1頁～11頁
挿絵に見る『小公女』受容—1946～1954年まで—	単著	2007年4月	研究<子どもと文化>(第10号)		1頁～12頁
曲がり角の予感	単著	2007年6月	日本児童文学 (第53巻第3号)		34頁～36頁

その他

「日本の子どもの本100選(1868～1945年)」における書誌・解題の作成	共著	2004年4月	大阪国際児童文学館ホームページ	大阪府立国際児童文学館編・酒井晶代ほか作成担当	『白い雀』(小出正吾)、『ドン氏の行列』(太田博也)、『おちいさんのランプ』(新美南吉)、『風と花びら』(平塚武二)、『朝顔作りの英作』(岡本良雄)、『煉瓦の煙突』(下畑卓)、『北国の犬』(関英雄)、『動物ども』(椋鳩十)、『甚左どんの草とり』(徳永直)、『花のき村と盗人たち』(新美南吉)
「日本の子どもの本100選(1946～1979年)」における書誌・解題の作成	共著	2005年4月	大阪国際児童文学館ホームページ	大阪府立国際児童文学館編・酒井晶代ほか作成担当	『ゲンと不動明王』(宮ロシづえ)、『銀色ラッコのなみだ』(岡野薫子)、『肥後の石工』(今西祐行)、『天使で大地はいっぱいだ』(後藤竜二)、『天保の人びと』(かつおきんや)
事典の項目執筆	共著	2005年9月	『日本童謡事典』東京堂出版	上笙一郎編・酒井晶代ほか項目執筆	50頁～51頁、100頁～101頁、171頁～172頁、174頁、329頁～330頁、403頁(一部、編者との共同執筆を含む)
口頭発表「明治20年代における「児童文学」ジャンルの編成—幼少年雑誌を手がかりとして—」	単著	2005年10月	日本児童文学学会第44回研究大会(於同志社大学)		
「明治期主要児童雑誌内容目次データベース」作成委員会への参加	共著	2006年度	日本学術振興会・科学研究費補助金(研究成果公開促進費・研究成果データベース)交付による	作成代表者・小松聡子(大阪国際児童文学館)、作成分担者・酒井晶代ほか計8名	
口頭発表「大学生とライトノベル」	単著	2008年3月	日本児童文学学会第63回中部例会(於名古屋市公会堂)		

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年11月～2003年10月	日本児童文学学会 評議員
2003年11月～2005年10月	日本児童文学学会 理事
2005年11月～2007年10月	日本児童文学学会 評議員
2007年11月～現在	日本児童文学学会 理事
1996年度～2006年度	名古屋市児童図書選定協議会 委員
1998年度～2006年度	名古屋市青年の家運営審議会 委員

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 島田修三	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①4年生のゼミ「表現文化研究Ⅲ」(短歌創作)における短歌総合誌の新人賞応募を課題化 ②「2004年度前期授業アンケート」結果報告を踏まえて「国文学講義(1)上代」の授業導入部に副教材のプリントを使用 ③「2004年度後期授業アンケート」を踏まえて「国文学講義(1)上代」授業導入部に副教材を追加 ④「2005年度後期授業アンケート」を踏まえて「言語表現F(現代短歌)」に副教材のプリントを追加		①2003年4月～ ②2004年10月～ ③2005年4月～ ④2006年10月～	①は3年生から始まる短歌創作ゼミの学生が4年生になった時点で、「短歌」「短歌研究」「歌壇」の総合誌のいずれかの新人賞に応募することを課題とし、明確な創作の動機を育てようとした試みである。2003年度、2006年度には「短歌研究」新人賞佳作になった学生、2005年度には「短歌」新人賞の最終候補作になった学生も現れ、学生の創作意欲を高める効果を上げている。②、③ともに国文学講義(テキストは古代和歌)に関する「授業アンケート」結果に講義内容が難解であるという学生の意見に対応した教育内容・方法の改善である。②では「異文化としての古代」という副教材を作成し、古代の生活文化を平明に解説し、学生にまず古代への関心興味を持たせることに努めた。③はその内容をさらに拡充したものである。④は主として現代短歌に限定した授業内容に対する「授業アンケート」の歴史的背景がわからないという意見に基づいて、古典和歌・近代短歌の簡潔な歴史を整理した副教材プリントを作成し、学生の近代以前の歴史的知識を補おうとしたものである。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①副教材プリント「異文化としての古代」1～3の作成 ②副教材プリント「異文化としての古代」4～5の追加作成 ③副教材プリント「簡単短歌史」の作成		①2003年4月～ ②2004年10月～ ③2006年10月～	①、②は「1 教育内容・方法の工夫」の項で記した「国文学講義(1)上代」の授業のために作成したものである。古代の生活文化を現代日本人から見れば「異文化」としてとらえ、「袖ふり」「男女の贈答歌」「宴席の作法」といった内容のプリントを①で作成し、学生の反応が良い事実を踏まえ、②において「旅の信仰」「雨への恐れ」のプリントを追加した。③は「1 教育内容・方法の工夫」の項で記した「言語表現F(現代短歌)」の授業のために作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
①豊かな表現のために(愛知県2003年度高等学校10年経験者研修) ②古代の表現(愛知県2004年度高等学校10年経験者及び養護教諭10年経験者研修) ③豊かな表現力のために(愛知県2005年度高等学校10年経験者及び養護教諭10年経験者研修) ④教師って何?(愛知県2006年度高等学校10年経験者及び養護教諭10年経験者研修)		①2003年12月26日 ②2004年12月27日 ③2005年12月27日 ④2006年12月26日	①国語教材としての現代短歌を題材として、時代と文学との関係関係について講演した。 ②国語教材としての古代和歌を題材として、異文化としての古代について講演した。 ③国語教材としての古代和歌を題材として、古代の生活文化との関連で講演した。 ④教師に備わるべき人間的な教養や洞察力について実践的な経験に基づいて講演した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・文化創造学部表現文化専攻主任		2000年4月～2004年3月	文化創造学部表現文化専攻の運営に関わり、同学部の教授会運営委員会、教員資格審査委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会等の委員		
・文化創造学部学部長		2004年4月～2007年3月	文化創造学部の運営に関わり、大学協議会、総合企画委員会、入試委員会、自己点検・評価委員会、研究助成委員会、FD委員会等の委員		
・大学院文化創造研究科創造表現専攻主任		2004年4月～2007年3月	文化創造研究科創造表現専攻の運営に関わり、同研究科の運営委員会、教員資格審査委員会、入試実施委員会等の委員		
・副学長		2007年4月～現在	大学協議会、総合企画委員会の委員、研究助成委員会、FD委員会、人権擁護委員会、総合実験等材料費執行計画委員会、TA委員会の委員長		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
名歌・名句鑑賞事典	共著	2004年9月10日	三省堂	秋尾敏・秋山佐和子・浅田徹・島田修三 他104名	35項目(5頁分)

セミナー万葉の歌人と作品第12巻 万葉秀歌抄	共著	2005年11月15日	和泉書院	内田賢徳・坂本信幸・神野富一・島田修三他82名	173頁～174頁
「おんな歌」論序説	単著	2006年3月9日	ながらみ書房		総計322頁
窪田空穂一人と文学一	共著	2007年6月20日	窪田空穂記念館編 終書房	小高賢、内藤明、島田修三、来嶋靖生	61頁～83頁
歌集 東洋の秋	単著	2007年12月5日	ながらみ書房		総計257頁
論文					
短歌革新運動と万葉	単著	2003年4月25日	上代文学会、「上代文学」90号		24頁～35頁
清純から始まった一恋愛歌に見る時代性一	単著	2003年7月1日	本阿弥書店、「歌壇」第17第7号		36頁～40頁
火の見櫓への眼ざし一岡部桂一郎『一点鐘』論一	単著	2003年11月1日	角川書店、「短歌」第51巻第11号		142頁～145頁
閉じた未来と輝かぬ現在一山崎方代と穂村弘のことなど一	単著	2004年1月1日	角川書店、「短歌年鑑」第51巻第1号		156頁～159頁
感覚的表現をめぐる	単著	2004年1月1日	まひる野会、「まひる野」第59巻第1号		47頁～49頁
茂吉と幸綱の歌日記	単著	2004年1月1日	本阿弥書店、「歌壇」第18第1号		44頁～47頁
私の古代和歌1～5(連載)	単著	2004年1月9日、16日、23日、30日、2月6日	朝日新聞(夕刊)		1680字×5回
異人たちと歌人たち一シンポジウム 現代歌人会議を読む 斎藤茂吉と「逆白波」の歌	単著	2004年2月1日	角川書店、「短歌」第52巻第2号		84頁～89頁
玉城徹『香貫』写実再興のために	単著	2004年3月31日	日本現代詩歌文学館、「日本現代詩歌研究」第6号		83頁～97頁
水脈の一滴一三枝昂之の批評一	単著	2004年3月1日	短歌新聞社、「短歌現代」第27巻第3号		72頁～73頁
吉野秀雄と万葉集	単著	2004年4月1日	東京四季出版、「短歌四季」第21巻第8号		48頁～49頁
大空は梅のにはほひにかすみつつ	単著	2004年7月10日	學燈社、「國文學」第18巻第8号		112頁～118頁
万葉集 作歌の万能ソフトとしての古典	単著	2004年7月1日	本阿弥書店、「歌壇」第18巻第7号		40頁～43頁
異化された現実	単著	2004年7月1日	短歌新聞社、「短歌現代」第27巻第7号		31頁～33頁
様式とエロスと一春日井建論一	単著	2005年1月1日	まひる野会、「まひる野」第60巻第1号		43頁～45頁
古格と新風と一『古今集』の歌びと一	単著	2005年1月1日	角川書店、「短歌年鑑」第52巻第1号		178頁～183頁
八〇年代という気分一ライトヴェアスの青春一	単著	2005年3月1日	短歌新聞社、「短歌現代」第28巻第3号		34頁～37頁
『小園』/『白き山』一茂吉歌集総解説一	単著	2005年7月1日	本阿弥書店、「歌壇」第19巻第7号		44頁～47頁
蕉門連衆の批評と添削	単著	2005年9月1日	至文堂、「国文学 解釈と鑑賞」第70巻第9号		148頁～151頁
文学表現の峠	単著	2005年9月1日	まひる野会、「まひる野」第60巻第9号		42頁～45頁
座禅青年とその後一柳宣宏の歌の問いかけるもの一	単著	2005年12月1日	本阿弥書店、「歌壇」第19巻第12号		68頁～73頁
をにの文体一『黒豹』の文体について一	単著	2006年3月1日	まひる野会、「まひる野」第61巻第3号		94頁～99頁
天降りしレイバン一歌語と現代短歌一	単著	2006年6月1日	角川書店、「短歌」第54巻第6号		76頁～78頁
茶碗、土瓶、石ころ一山崎方代論一	単著	2006年6月1日	本阿弥書店、「歌壇」第20巻第6号		38頁～41頁
古代の宴と歌	単著	2006年8月1日	角川書店、「短歌」第54巻第8号		126頁～131頁
新 歌人群像 島田修二一戦後を醒めず一	単著	2006年10月1日	まひる野会、「まひる野」第61巻第10号		44頁～48頁
ジャーナリズムと似て非一「私」の批評一	単著	2006年11月1日	日本放送出版協会、「NHK短歌」通巻116号		64頁～67頁
	単著	2006年11月1日	本阿弥書店、「歌壇」第20巻第11号		36頁～41頁



鷗外の「翁さん」 －事実と想像力－	単著	2007年2月1日	まひる野会、「まひる野」第62巻第2号	38頁～40頁
「アララギ」系と「非アララギ」系 －その「接近」と「反発」－	単著	2007年2月1日	短歌研究社、「短歌研究」第64巻第2号	50頁～51頁
歴史を生きるということ－戦争体験は風化していくのか－	単著	2007年2月1日	角川書店、「短歌」第55巻第2号	92頁～96頁
古典の色彩 －古代の白のことなど－	単著	2007年4月1日	本阿弥書店、「歌壇」第21巻第4号	42頁～45頁
命なりけり －窪田章一郎の古典思慕－	単著	2007年4月1日	まひる野会、「まひる野」第62巻第4号	40頁～42頁
新派和歌という峠	単著	2007年6月1日	短歌新聞社、「短歌現代」第30巻第6号	32頁～35頁
現代短歌アンソロジー ＜本＞30首選と鑑賞	単著	2007年7月1日	日本放送出版協会、「NHK短歌」通巻124号	46頁～48頁
現代短歌アンソロジー ＜鳥＞30首選と鑑賞	単著	2007年8月1日	日本放送出版協会、「NHK短歌」通巻125号	46頁～48頁
現代短歌アンソロジー ＜乗り物＞30首選と鑑賞	単著	2007年9月1日	日本放送出版協会、「NHK短歌」通巻126号	46頁～48頁
世の常のこと －歌のテーマと「われ」－	単著	2008年1月1日	短歌新聞社、「短歌現代」第30巻第6号	52頁～53頁
飲食と性格－モチーフの拡大－	単著	2008年1月1日	まひる野会、「まひる野」第63巻第1号	37頁～39頁
ハレ歌の秀歌三十首選と鑑賞	単著	2008年3月1日	角川書店、「短歌」第56巻第3号	80頁～83頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

学会活動等	
1982年4月～現在	早稲田大学国文学会評議員
1990年4月～現在	美夫君志会常任理事
1997年4月～現在	現代歌人協会理事
2003年4月～現在	上代文学会理事
短歌大会選者等	
2003年4月29日	第18回蒲郡俊成短歌大会 選者 於、蒲郡市民会館
2003年10月2日	第15回国民文化祭 やまがた文芸短歌大会 選者 於、上山市体育文化センター
2004年4月29日	第19回蒲郡俊成短歌大会 選者 於、蒲郡市民会館
2004年9月28日	第53回源実朝を偲ぶ仲秋名月歌会 選者 於、熱海起雲閣
2005年1月22日	沼津御用邸記念公園歌会 選者 於、御用邸記念公園
2005年4月29日	第20回蒲郡俊成短歌大会 選者 於、蒲郡市民会館
2006年4月29日	第21回蒲郡俊成短歌大会 選者 於、蒲郡市民会館
2006年10月15日	碧南市観光協会主催 大浜てらまち俳句ing 選者 於、碧南市立大浜公民館
2006年11月12日	第18回国民文化祭 やまぐち2006短歌大会 選者 於、岩国市民会館
2007年4月29日	第22回蒲郡俊成短歌大会 選者 於、蒲郡市民会館
2007年10月21日	碧南市観光協会主催 575ワールド万派句 大浜てらまち俳句ing 選者 於、碧南市立大浜公民館

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 清水良典	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業評価を受けて授業方法を改善した。		2001年12月～2007年12月	プリントを配布し、また板書を大きくし、理解しやすくした。 視覚教材を多用し、視覚的な分かりやすさを拡充した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『自分づくりの文章術』(筑摩書房)		2003年8月1日	「表現創造原理Ⅰ(フィクション生成論)」で教科書として使用		
『村上春樹がくせになる』(朝日新聞社)		2006年10月1日	「表現文化研究Ⅰ」で教科書として使用		
『2週間で小説を書く!』(幻冬舎)		2006年11月1日	「表現文化基礎演習Ⅲa.b)で教科書として使用		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
「17歳の風景」上映会パネラー		2005年7月1日	若松孝二監督の最新作「17歳の風景」の上映会および講演会でパネラーを務めた。		
町田康講演会をコーディネートした。		2005年12月13日	町田康氏を講師に迎え「告白」朗読と講演を立案実施した。		
重松清講演会をコーディネートした		2006年12月18日	重松清氏を講師に迎え、学術講演を立案実施した		
諏訪哲史講演会をコーディネートした		2008年1月19日	諏訪哲史氏を講師に迎え、学術講演を立案実施した		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学部教務委員長として学部の教務活動を指揮した。		2001年4月～2003年3月			
表現文化専攻主任として専攻の運営監督に当たった。		2004年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
三島由紀夫の表現	共著	2001年3月	勉誠出版	佐藤秀明、和田博文、今村忠純、松本徹他	52頁～65頁
読書のすすめ 第6集	共著	2001年5月	岩波書店	牛島信明、木田元、轡田隆史他	37頁～44頁
谷崎潤一郎必携	共著	2001年10月	学燈社	千葉俊二、前田久徳、伊吹和子、塩崎文雄他	11頁～15頁、34頁～35頁、48頁～49頁、52頁
村上春樹がわかる	共著	2001年11月	朝日新聞社	加藤典洋、原善、新城郁夫、佐藤秀明他	24頁～29頁
笹野頼子 虚構の戦士	単著	2002年4月	河出書房新社		全190頁
自分づくりの文章術	単著	2003年8月	筑摩書房		全219頁
図説名言で読む日本史人物伝	共著	2004年8月	学習研究社	鈴木啓之、滝澤美貴、渡辺誠他	176頁～181頁、183頁～185頁、188頁、190頁～191頁
日本女性文学大辞典	共著	2006年1月	日本図書センター	田辺聖子、小森陽一、金田一秀徳他	244頁～245頁、299頁～300頁
現代女性作家読本②小川洋子	共著	2005年11月	鼎書房	高根沢紀子、高橋真理、千葉俊二他	128頁～131頁
現代女性作家読本⑤笹野頼子	共著	2006年2月	鼎書房	千葉正昭、山下真史、山▽外字(9433)真紀子他	9頁～13頁
村上春樹がくせになる	単著	2006年10月	朝日新聞社		全236頁
2週間で小説を書く!	単著	2006年11月			全234頁
文学の未来	単著	2008年7月	風煤社		全350頁
論文					
ロンドンの孤独と憂鬱	単著	2003年7月	教育出版	『夏目漱石Ⅰ現代日本の開化ほか』	185頁～189頁
〈異種〉への懸想	単著	2003年9月	青土社	「ユリイカ」第35巻第13号	71頁～79頁
にぎやかな「私」史	単著	2003年10月	思潮社	「現代詩手帖特集版・高橋源一郎」	63頁～69頁

フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン	単著	2004年1月	新書館	「大航海」第49号	52頁～57頁
秘められた共和国	単著	2004年2月	青土社	「ユリイカ」第36巻第2号	135頁～141頁
教科書をつくるジレンマ	共著	2004年4月	筑摩書房	『教育とはなんだ』	重松清編、61頁～74頁
<雑記>の出自	単著	2004年5月	河出書房新社	「KAWADE夢ムック・林芙美子」	88頁～93頁
泣きたがる「彼ら」が支える片山恭一現象	単著	2004年5月20日	毎日新聞	「毎日新聞」文化面	
永遠の文章家	単著	2004年11月	文藝春秋	「文學界」第57巻第11号	209頁～215頁
『「死の棘」日記』と『死の棘』	単著	2005年5月	文藝春秋	「文學界」第58巻第5号	144頁～153頁
吉行淳之介原論	単著	2005年9月	文藝春秋	「文學界」第58巻第9号	246頁～255頁
近代文章の新展開	単著	2006年1月	至文堂	「解釈と鑑賞」第71巻第1号	48頁～55頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2001年～2004年	『戦後短編小説再発見』全18巻編集委員 講談社文芸文庫 井口時男、川村湊、富岡幸一郎との編集委員
2005年4月より	信濃毎日新聞書評委員 信濃毎日新聞社 書評執筆
2005年4月より	名古屋市文化振興事業団評議員 名古屋市文化振興事業団

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 杉本一直	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
下記の教科書『はじめて学ぶロシア文学史』(ミネルヴァ書房)を用いた新たな文学史学習の試み。		2004年4月1日	多元文化専攻専門科目「多元文化研究」における文学史学習に導入。従来の時代概説と作家紹介以外に、できるだけたくさんの方の代表作品の断章を対訳で読む(原典鑑賞)を通して、概念的・論理的理解だけではなく、作品の感覚的な享受を重視した。その結果、文学史に対する学生の関心度は格段に増した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『はじめて学ぶロシア文学史』(ミネルヴァ書房)		2003年9月1日	それぞれの時代を専門とする研究者たちによる詳細な文学史解説。時代概説に加えコラム、代表的作家に関する本格的評論、作品の原文と対訳から成り、より具体的に学習できるよう工夫されている。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
大学院文化創造研究科教務委員長		2004年度～2007年度			
文化創造学部学生生活委員長		2006年度～2007年度			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『はじめて学ぶロシア文学史』	共著	2003年9月	ミネルヴァ書房	藤沼貴、水野忠夫、井桁貞義	335頁～398頁
『文化の透視法～20世紀ロシア文学・芸術論集』	共著	2008年3月	南雲堂フェニックス	伊東一郎、宮澤淳一	257頁～272頁
論文					
「1939年、バリのロシア人」	単著	2004年6月	日本ロシア文学会中部支部「会報」		1頁～15頁
「埋葬された種子～ウラジーミル・ナボコフの第二の亡命～」	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集、文化創造学部・文化創造研究科篇、第6号		39頁～49頁
「V.ナボコフ著『断頭台への招待』論～小説と演劇のはざま～」	共著	2008年3月	愛知淑徳大学論集、文化創造学部・文化創造研究科篇、第8号	岩崎真由美	49頁～70頁
研究発表					
「ヴァシーリー・シシコフ」をめぐって		2003年6月	日本ロシア文学会中部支部研究会		
Ultima Thuleをめぐって		2005年6月	日本ナボコフ協会大会		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月より現在に至るまで		日本ロシア文学会学会誌「ロシア語ロシア文学」の編集委員として、論文審査や編集作業を担当する。			
2004年4月より現在に至るまで		日本ナボコフ協会大会、講演会、研究会の企画や、印刷物発送、予算管理など、運営業務一般を行う事務局担当。			

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 角田達朗	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
自作CD・DVDによる図版・動画の活用	2001年6月～現在に至る	演劇等の視聴覚表現について講ずる授業において、図版や動画をビデオCDにまとめ、これをスクリーンに投射することによって、効率的かつ印象的に提示できるようにしている。	
演劇鑑賞のための課題設定	2001年11月～現在に至る	演劇を講ずる授業において、鑑賞課題を指定し、鑑賞レポートを課している。演劇は生(ライブ)の表現であり、これに直接接すること無しには真の理解はありえないからである。	
課題レポートの添削	2001年11月～現在に至る	特に専門性の高い授業科目において、学生の学力と文章表現能力とを向上させるため、レポートを添削して返却し、書き直させた上で成績評価している。	
照明・音響機器を用いた舞台表現のシミュレーション	2001年11月～現在に至る	演劇を講ずる授業において、星が丘キャンパス・ミニシアターに既設の照明・音響機器を用いて、都会の夕焼け・田舎の夕焼け・火事・深夜・雨降り・海辺などの情景を作り、舞台効果の基本的な考え方を体感的に理解できるようにしている。	
課題レポートの教材化	2002年5月～現在に至る	演劇を講ずる授業において、学生が鑑賞課題について提出する課題レポートを事項別に整理してプリントにまとめ、これを元にして授業を組み立てている。学生が鑑賞課題について、そして演劇について理解を深めるためには、一方的に上演解釈や演劇論を語るよりも、学生の解釈や認識を踏まえて語るという双方向性が必要と考えるからである。	
鑑賞課題関係者との対話の実施	2002年7月～現在に至る	鑑賞課題の演出者や出演者を授業に招いて、鑑賞課題についての対談をし、学生の質問にも答えている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
能『葵上』抄	2001年6月	全55分のビデオCD。「表現文化総合講座Ⅱ」において能について講ずるために作成。解説用に「能『葵上』の舞台進行」と題するプリントも作成し、配布している。	
古代ギリシアの演劇	2001年9月	古代ギリシアの演劇に関する図版25点を収録したデータCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において使用し、随時改訂している。解説用に「古代ギリシアの演劇」と題するプリントも作成し、配布している。	
古代ローマの演劇と見世物	2001年10月	古代ローマの演劇と見世物に関する図版14点を収録したデータCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において使用し、随時改訂している。解説用に「古代ローマの演劇」と題するプリントも作成し、配布している。	
中世・近世ヨーロッパの演劇	2001年10月	中世・近世ヨーロッパの演劇に関する図版33点を収録したデータCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において使用し、随時改訂している。解説用に「中世・近世ヨーロッパの演劇」と題するプリントも作成し、配布している。	
近代ヨーロッパの演劇	2001年11月	近代ヨーロッパの演劇に関する図版9点を収録したデータCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において使用し、随時改訂している。解説用に「近代ヨーロッパの演劇」と題するプリントも作成し、配布している。	
少年王者館の舞台装置	2001年11月	劇団・少年王者館の公演記録ビデオから、特色ある装置転換を行っている場面、計12場面を収録した全45分のビデオCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において使用するために作成。	
鑑賞課題鑑賞ノート集成	2001年12月～現在に至る	演劇を講ずる授業において、学生が鑑賞課題について提出する課題レポートを事項別に整理してプリントにまとめたもの。鑑賞課題は毎年異なるため、毎年新たに作成している。	
能『船弁慶』抄	2002年1月	全50分のビデオCD。「視聴覚表現Ⅱ(舞台芸術)」において能について講ずるために作成。解説用に「能『船弁慶』の舞台進行」と題するプリントも作成し、配布している。	

初期映画に見る演出	2002年4月	映画創成期にフランス・イギリス等で作られたごく短い映画12本を収録した、全10分のビデオCD。「演出論」において使用。解説用に「初期映画に見る演出」と題するプリントも作成し、配布している。
『論語』解釈の諸問題	2002年4月	『論語』公冶長篇から高等学校の漢文の教科書に採られている章を選び、どのような解釈が提起されているか、解釈の相違がどこから生じるのかをまとめたもの。(14頁)「漢文学概説」において使用し、随時改訂している。
マンガ表現の特質	2002年5月	マンガ表現に関する図版27点を収録したデータCD。「演出論」において使用し、随時改訂している。
大塩平八郎の思想	2002年5月	江戸時代の代表的な陽明学者であり、大塩平八郎の乱の首謀者としても知られる大塩中斎の著作から、中国思想の展開を概観し、それが日本人にどのような影響を与えたかを知るための手立てとなる文章を選んで載せた。(22頁)「中国思想史」において使用し、随時改訂している。
諸子百家の思想とその時代	2004年5月	『論語』『墨子』『老子』『韓非子』から、その思想の骨格を示す文章を選んで載せ、その社会背景、他の思想勢力との相違を解説するプリント。(10頁)
音楽の心理作用	2005年5月	同一の映像に異なるBGMをつけ、その印象がいかに異なるかを比較するDVDビデオ。全25分。
演劇の社会的活用1「琉球王国の芸能」	2007年4月	琉球王国の芸能が外交手段として活用されていたこと、組踊りと呼ばれる歌舞劇が国家事業として創造されたことを伝えるDVDビデオ。45分
演劇の社会的活用2「サイコドラマ」	2007年4月	演劇をうつ病などの治療に応用するサイコドラマについて紹介するDVDビデオ。10分
演劇の社会的活用3「不登校の朗読劇」	2007年4月	不登校体験を有する高校生たちがそれを乗り越えるために自らの体験を朗読劇として上演する様子を描くドキュメンタリーのDVDビデオ。10分
演劇の社会的活用4「ボランティアの介護劇」	2007年4月	介護ボランティアとして活動する主婦のグループが自らの体験と活動を広めるべく演劇活動に取り組む様子を描くドキュメンタリーのDVDビデオ。45分
舞台に立つということ1「大衆演劇女形の世界」	2007年4月	大衆演劇の女形と舞台経験の無い女性との対話を通して、舞台に立つことの意味を考えるDVDビデオ。45分
舞台に立つということ2「障害者プロレス」	2007年5月	障害者によるプロレス団体に所属してリングに立ち続ける女子学生を追うドキュメンタリーのDVDビデオ。30分
舞台に立つということ3「大野一雄 故郷に舞う」	2007年5月	老いとケガによって体の自由を失ってもなお舞台に立ち続ける舞踏家を追うドキュメンタリーのDVDビデオ。60分
演劇における伝統と現代1「市川団十郎バリ公演」	2007年5月	市川団十郎一家による歌舞伎界初のバリ・オペラ座公演を追うドキュメンタリーのDVDビデオ。60分
演劇における伝統と現代2「観世鍔之丞」	2007年5月	能楽の革新に尽力した先代・観世鍔之丞の芸と生きざまを追うドキュメンタリーのDVDビデオ。60分
演劇における伝統と現代3「白州正子」	2007年5月	女性初の能楽師となる資格を得ながらそれを放棄した白州正子の生きざまを追うドキュメンタリーのDVDビデオ。60分
現代演劇の多様化と原点回帰1「第一回利賀フェスティバル」	2007年6月	1982年に開催された第一回利賀フェスティバルの模様を伝えるドキュメンタリーのDVDビデオ。60分
現代演劇の多様化と原点回帰2「万歳と漫才」	2007年6月	漫才を題材として、芸能の革新は原点回帰でもあることを伝えるDVDビデオ。45分
演劇と時代背景1「寺山修司と団塊世代」	2007年6月	1960年代の演劇革新運動が当時の社会状況といかに関連していたかを、アングラ演劇の旗手寺山修司に焦点を当てて考察するDVDビデオ。60分
演劇と時代背景2「古代ギリシア演劇」	2007年6月	世界最古の演劇である古代ギリシア演劇の誕生が当時の社会状況といかに関連していたかを説明するためのデジタル図版集。
演劇と共同性1「花祭の鬼」	2007年7月	奥三河地方に伝承される花祭りの中で、演劇的儀礼が共同体の世界観をいかに表現しているかを考えるDVDビデオ。10分
演劇と共同性2「演劇に取り組む小学生」	2007年7月	自発的に演劇に取り組む小学生グループの様子を描き、現代の演劇においてどのようなことが共有可能かを考えるDVDビデオ。20分
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
文化創造学部学生生活委員	2000年4月～2002年3月	
文化創造学部情報システム支援部運営委員	2002年4月～2004年3月	

文化創造学部情報メディアサービス部運営委員長	2004年4月～2006年3月				
文化創造学部進路支援委員長	2004年4月～2006年3月				
文化創造学部教務委員長	2006年4月～2008年3月				
文化創造学部表現文化学会顧問	2002年4月～2008年3月				
学生劇団「月とカニ」の上演指導	2000年4月～2001年8月	文化創造学部の発足直後に誕生した学生演劇サークル「月とカニ」の顧問となり、第一回から上演活動を指導して上演のノウハウを習得させ、第三回公演では学外の劇場での公演を実現した。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
うたかたの散弾－角田達朗演劇 論集－	単著	2007年5月1日	クリタ舎		1頁～282頁
論文					
能『鶴飼』替間	単著	2006年3月1日	愛知淑徳大学論集－文化 創造学部編－第6号		108頁～130頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1982年11月～1997年10月	劇団・少年王者館団員				
1988年2月～1991年8月	バンド・遊星ミンツ団員				
1990年4月～現在	日本中国学会会員				
1991年8月～現在	欺文会会員				
1999年1月～現在	日本近代演劇史研究会会員				
1999年4月～現在	日本演劇学会会員				
2001年1月～現在	演劇ユニットconcept theater Edge代表				

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 曹 述燮	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
1) コンピューター室を利用したレポート作りの実習	各年度前期～現在に至る	多元文化基礎演習の授業目標を「レポートが書けるチョゼミ生」と定め、ネット検索による資料の入手法、入手した資料の評価および管理法、レポート作りのルールと表現テクニック等の実技能力の反復実践を通してレポート作成力の向上を図っている。	
2) 中国古典の読解と現今の応用テーマ研究とその発表	2003年前期	中国文学1の授業では、敬遠されがちな中国古典の難解さの克服を目指し、悦楽、朋友、異性、適時、学問など受講生の関心事を講義テーマに選定、古典はこれらをどう扱っているか、そして学生自身はこれらをどう受けとめているか等について発表または議論する場とした。学生からは、古典の価値を再発見した、講義に積極的に参加していると感じた、物事を論理的に考える力がついたなどの反応が得られた。	
3) 韓国語・韓国文化実地研修の実施	2003年8月 2005年8月 2007年8月	21世紀のよきパートナーとしての韓国探訪を趣旨に、大邱カトリック大学や梨花女子大学で、韓国の言語や文化に対する知識の習得および多彩な韓国・多様な韓国人に触れ合う韓国語・韓国文化の実地研修を三・四週間にわたって実施する。参加した学生たちは、研修対象となる韓国語・韓国文化・韓国人を含む韓国をじっくり体験学習するほか、自己なる日本を第3者として問い直す体験をし異文化理解のベースを身につける。	
4) 学外教育活動の実施	2003年5月 2004年8月 2005年6月	東アジアの文化に関心を持つゼミ生たちの知的好奇心の刺激および学習仲間の相互理解による学習意欲の増進のためのメンバーシップトレーニング。たとえば、2002年には、朝鮮時代の仏教芸術に焦点を当てて京都の高麗美術館で催された企画展「朝鮮の仏さま」を観覧すると同時に、天台宗の寺院・三十三間堂の1001体の「十一面千手千眼観世音菩薩」像と北法相宗の本山である音羽山清水寺の本尊「十一面千手千眼観世音菩薩」像などを観覧し、東アジア文化の根幹となる仏教の理解を深めた。	
5) 「韓国と日本の大学生生活と若者文化」を語る	2003年1月	隣国の同年代の大学生たちの現状を理解し、相互理解の増進を図る意図により、姉妹校の大邱カトリック大学からのヴィジターを囲んで韓国における大学生生活の実情を聞くと同時に日本文化を紹介する時間を持ち、相互の質疑応答で大学生生活に対する意見交換を行った。	
6) 学外教育活動「先輩たちと語ろう」の企画	2004年8月 2005年6月 2007年11月	ゼミ生の学問に対する意識啓発を目的に、学外教育活動の時間を利用して「先輩たちと語ろう」というプログラムを企画、文化創造研究科所属の院生を招聘し、大学院進学の動機、研究関連の内容、院生生活の実情などを身近に触れる時間とした。	
7) 「日本帝国時代における韓国・朝鮮の教育論」の研究	2005年8月	院生の修了課題論文作成のアドバイザー補助としての研究活動。院生と一緒に当該資料の検索作業、解説作業、翻訳作業、資料の整理作業などに従事する。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
1) 『ソウルそれとも釜山』	2003年5月1日	韓国語基礎の復習とそれを踏まえた中級の学習が可能であるように編集した韓国・朝鮮語の語学教材。韓国語の初級・中級が要領よく身につくように編集されている。(134頁)	
2) 『韓国・朝鮮を知る』	2003年5月1日	韓国・朝鮮の生活環境、二国体制の韓国・朝鮮半島、韓国・朝鮮民族の基層文化、人生儀礼、歳時風俗、日本と朝鮮半島、現今の韓国・朝鮮半島情勢などの内容からなる韓国・朝鮮概説書で、外国文化Ⅲ(韓国・朝鮮)の教材として編集されたもの。韓国・朝鮮文化に興味を持っている学生たちが、特定の文化事象を研究する前に韓国・朝鮮に関する基礎的な知識を得るために大いに役立っている。(81頁)	



3)『始めよう韓国語会話』	2004年4月1日	韓国・朝鮮に着いたその日から使える日常の実践的な表現をふんだんに盛り込んでいる現代実用初級韓国語読本。「韓国・朝鮮語会話1・2」のテキストとしての使用を考慮して作成したもの。本学非常勤講師と共著。(153頁)
4)『初めての韓国・朝鮮語』	2005年4月1日	韓国・朝鮮語学習入門者のための教授や学習教材としての利用を想定し、最低24回にわたる教授や学習、多くは30回の教授や学習で韓国・朝鮮語の入門レベルがマスターできることを目安にしている語学テキスト。全体の構成は、文字の習得および発音の基本から韓国・朝鮮語文法の基礎、基本文型を中心に段階的に扱っており、各課は、会話体の本文、新出単語、ポイント、練習の部門で構成されている。(231頁)
5)『使おう韓国語会話』	2006年10月1日	会話の初級レベルの実力を持ちあわせている韓国・朝鮮語学習者のために作成された中級レベルの韓国・朝鮮語会話学習読本。使える韓国・朝鮮語会話を身につけることを目指し、韓国・朝鮮で時と場に応じて用いられる実践的な表現をふんだんに盛り込んでいる。本学非常勤講師との共著(205頁)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1)講演「外国語文化海外実地研修プログラムの効果的な活用のために」	2004年9月1日	大学在学中各種休暇期間を利用して行う現地での語学文化研修プログラムを効果的に活用するためには、第一、研修およびその周辺事情に対する定かな情報を収集し、当該研修プログラムが個人の要求に相応すること、第二、参加対象国の言語・文化に対する肯定的な理解があること、第二、グローバル化・多元化している国際社会に対する認識を持つことなどを中心に説く。(主催：韓国大邱カトリック大学東アジア学科、場所：大邱カトリック大学)
2)特別授業「韓国・朝鮮の食文化とハングルの世界」	2005年1月1日	愛知淑徳高校で実施している特別授業「国際文化を考える」のために、韓国・朝鮮の食の世界を概観しながら、食文化一般について考える。またハングル(韓国・朝鮮文字)を学び、初歩の韓国語学習を体験する内容の特別授業を行う。(主催・場所：愛知淑徳高校)
3)公開講座「韓国語を楽しもう」	2005年4月～2005年7月 2007年4月～2007年12月	ハングルの読み書きになれ、韓国の言語・文化の理解、そして現地人とのコミュニケーション意欲を高める動機づくりを主眼にした生涯学習のお手伝い。学習のための題材としてはちまたで噂になっている映画、ドラマのセリフなどを用い、韓国の文字と映像の世界、そして韓国文化に対する理解が深めていく。
4)文化創造学部主催 授業改善・情報交流会の話題提供「社会変動に伴う歴史・文化教育の変化を考える」	2007年2月1日	東アジア経済共同体云々の昨今。日本・韓国・中国の各国は、近現代における日韓関係、日中関係、韓中関係の真相を、自国民にどう伝えているのか、そしてどう伝えるか。そして日本人生徒を対象にする外国人教員は上記の話題をどう伝えているか、そしてどう伝えるかについて問いかける。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1)多元文化専攻論集編集	2007年4月～現在に至る	新学部、新専攻の論集委員として学部論集のあり方、規格、投稿規程などの編集にかかわる諸般事項を審議決定し、創刊号から第3号までの発刊に努める。
2)全学共通科目中国語教育の内容と方法の検討による教育効果の向上	2002年4月～現在に至る	社会で通用する中国語運用の可能な人材育成を目標に、中国語教育の内容として漢語水平考試(HSK)の導入、教育方法として中国語の全学共通科目化の推進を企画し、全学の中国語教育の内容充実化および教育効果向上に努める。
3)人権問題に関する学内外の教育環境改善	2002年4月～2005年3月	ジェンダー、障害、国籍などによる区別ないしは差別によって起こりうる人権侵害の未然防止のために広報活動を行うなど、全学の人権擁護委員として快適な教育環境整備に努め、すべての学生・教職員が個人として尊重され、公正で安全な環境の下に、勉学、研究、教育に専念し、職務に従事することができる学内外の教育環境作りを目指す。

4) 教育実習生の訪問指導	2003年5月 2004年4月 2005年5月	教員志望学生の教職課程の一環として行われる教育実習に対し、名古屋市内、愛知、岐阜および三重などの各地の中高校で教育実習を行っている学生を訪問し、勤務状況の把握、授業の参観、実習と関連する相談の受け付けなどの教科指導などを行う。
5) 韓国・朝鮮語教育懇談会の主催	2004年8月 2005年7月 2007年7月	文化創造学部の言語活用科目(韓国・朝鮮語)、そして全学共通言語活用科目(韓国・朝鮮語)教育の活性化および科学・体系化を期し、授業担当教員、実務者および当該専門家たちより韓国・朝鮮語教育に関する貴重な意見を求め議論しあう懇談会を主催する。
6) 映画上映とトーク【ポーランド・韓国映画の現在】、韓国映画部のトークおよび通訳	2005年5月1日	学園創立100周年・大学開学30周年記念講座、映画上映とトーク【ポーランド・韓国映画の現在】。ポーランドからは、ドキュメンタリーを中心に制作されているマルチン・コシャルカ監督、韓国からは、2005年の春『氷雨』が日本で公開されたキム・ウンスク監督を招いて行われた映画上映&トークショーの韓国映画部においてトーク及び通訳を勤める。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
1. 『冥報記』の応報について—前半—	単著	2003年3月	『愛知淑徳大学論集』文化創造学部篇第3号		13頁～24頁
2. 『冥報記』の応報について—後半—	単著	2004年3月	『愛知淑徳大学論集』文化創造学部篇第4号		1頁～10頁
3. 龍の危機とその説話的展開	単著	2005年3月	『愛知淑徳大学論集』文化創造学部篇第5号		21頁～43頁
4. 富貴功名、得志顕達の展開—通過《枕中記》及其系列作品的分析—	単著	2007年3月	『愛知淑徳大学論集』文化創造学部篇第7号		33頁～49頁

## III 学会等および社会における主な活動

1991年3月～現在	大韓民国嶺南中国語文学会会員
1991年10月～現在	名古屋大学中国語文学会会員
1992年7月～現在	東方学会会員

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 鶴原香代子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
出席カード(質問、感想等)の活用	2003年4月～現在	『ライフサイクルと健康』:「授業アンケート」の結果から、「教員の話し方、授業の進み具合や時間配分」、「いろいろな意味で将来の生活や仕事に役立つ」などは毎回高い評価を得ているが、講義やVTR時に「睡魔に襲われる。私語が気になる。」の意見がみられる。その策として、出席カードを活用して、学生に授業の疑問点や質問、感想等を記入してもらい、次の授業に反映させるよう努めたことで多少の改善が認められた。また、今年度は学生に身体組成や骨密度、1週間の身体活動量(歩数計)の計測、食状況の記録をさせ、摂取と消費について学生自身のデータを当てはめ講義した結果、学生の意識が高まり、生活習慣を見直すなどの効果が得られた。なお、授業内容に即した視聴覚教材の使用は毎回評価が高いので、今後も、教材の充実をはかり、その活用方法を検討していきたい。	
視聴覚教材の活用	2005年6月～現在	『スポーツと文化』:資料配布やVTRやOHCの活用は「分かりやすく楽しく学べる」と学生の評価(2007年6月実施の「授業に関するアンケート」)も高く、効果的であったことから、さらに、映像や写真等の視聴や時間帯を工夫し活用した。プリント配布についても、新聞やスポーツ紙等から身近な話題を拾い、学生に投げかけることで関心や興味を深めることに繋がったように思われる。しかし、「先生の声は聞きやすい。」との意見の一方で、やはり「後部座席の私語を注意してほしい。」の意見がみられた。マイクの音量調節(2005年)や授業内のミニレポートの作成等(2006年)により多少の改善は見られたように思うが、引き続き課題となる。	
カロリーカウンターの計測	2003年4月～現在	『スポーツ科学』:授業の前後に体重計測を行い、毎時間の身体活動量をカロリーカウンターを装着させ計測することで、自己の運動量や体調をコントロールすることを身につけ、日常生活や将来の健康生活に活用できるよう工夫している。学生自身も歩数計の進み具合が楽しみのようである。2005年と2006年6月の『授業アンケート』の全ての項目において高い評価であった。このことから、総合的にみて学生が積極的に参加する満足のいく授業であったと思われる。	
授業記録の記入	2003年4月～現在	『運動と健康』:学生自身にその日の体調、授業の目標、感想等を記録させることが、学生自身のモチベーションを高めることに繋がり、一連のスキルの修得にも効果的であったと思われる。	
グループワーク	2005年4月～現在	『レクリエーション療法Ⅰ』:グループでアイデアを出し合いながら授業を進め、発表し、意見交換をすることによって、使用目的や場所に適したゲームや遊びを考案するのに役立てた。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
大学協議会	2004年4月～2008年3月	大学の運営に関する事項を審議する。	
星ヶ丘キャンパス人権擁護相談員	2004年4月～現在	人権侵害に関して相談を希望する学生、教職員の相談に対応する。	
教養教育運営委員会	2001年4月～現在	教養教育センターの教員資格審査等に関して審議する。	
FD委員会	2004年4月～2008年3月	教育の質の向上を図るために、教育内容・方法の改善等を検討する。	
文化創造学部学生生活委員会	2004年4月～2007年3月	学生の福利厚生をはじめ、クラブ・サークル活動等に対する指導や支援を行う。	
文化創造学部学論集編集部会	2004年4月～現在	教員の研究成果を編集、発行する。	

学園広報編集委員		2002年4月～2004年3月		学園広報の編集、発行を行う。	
II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
シニアからの健康づくりデータ が語る生きがい生活ー	共著	2003年7月	生きがい研究会(株)スバル・アド	青山昌二・池上久子・加藤恵子・鶴原香代子・松田秀子・石川成道・井上千恵子・田中陽子・小澤教子・中島悦子・二村良子・畠山孝子	34頁～40頁、99頁～101頁、105頁～108頁
論文					
高齢者の肥瘦の自己評価別に みた食習慣	共著	2003年3月	愛知淑徳大学論集ー文化創造学部篇ー第3号	鶴原香代子・池上久子・加藤恵子・青山昌二	111頁～122頁
大学生の体格と理想体型との 関係	共著	2004年2月	『大学保健体育研究第23号』東海地区大学体育連合	池上久子・加藤恵子・鶴原香代子・松田秀子・小澤教子・田中陽子・青山昌二	1頁～7頁
東海地区大学体育・スポーツ実 技科目受講学生の授業に関す る意識について	共著	2004年2月	『大学保健体育研究第23号』東海地区大学体育連合	鶴原香代子・寺田邦昭・池田隆二・武藤紀久・山本裕二	9頁～29頁
大学体育実技授業に対する履 修者の意識	共著	2004年2月	『大学保健体育研究第23号』東海地区大学体育連合	寺田邦昭・池田隆二・山本裕二・武藤紀久・鶴原香代子・伊藤功子	31頁～38頁
大学保健体育受講学生の授業 に関する意識ー1979年と1990 年及び2002年との比較	共著	2004年3月	『大学体育第1号』全国大学体育連合	寺田邦昭・山本裕二・鶴原香代子・池田隆二・武藤紀久	33頁～42頁
大学生の健康と生活習慣	共著	2005年3月	『大学保健体育研究第24号』東海地区大学体育連合	松田秀子・池上久子・加藤恵子・鶴原香代子・田中陽子・青山昌二	9頁～25頁
大学体育実技授業に関する教 師と学生の意識の差	共著	2005年3月	『大学保健体育研究第24号』東海地区大学体育連合	寺田邦昭・山本裕二・池田隆二・武藤紀久・鶴原香代子・伊藤功子	27頁～34頁
大学生の身体意識について ー理想とする体型と現実との関 連ー	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集ー文化創造学部・文化創造研究科篇ー第6号	鶴原香代子・池上久子・加藤恵子・松田秀子・田中陽子・青山昌二	51頁～64頁
男女大学生のサプリメント摂取 に関する研究	共著	2006年3月	『大学保健体育研究第25号』東海地区大学体育連合	池上久子・松田秀子・鶴原香代子・加藤恵子・田中陽子・中島悦子・青山昌二	11頁～20頁
男女大学生のサプリメント摂取と 体格に関する意識	共著	2007年3月	『大学保健体育研究第26号』東海地区大学体育連合	加藤恵子・池上久子・鶴原香代子・田中陽子・松田秀子・中島悦子	1頁～10頁
骨粗鬆症の予防に関する基礎 的研究:大学生の骨密度,身体 活動量, 体格, 生活習慣に対す る意識調査	共著	2008年3月	『大学保健体育研究第27号』東海地区大学体育連合	池上久子・鶴原香代子・松田秀子・加藤恵子・田中陽子・中島悦子	9頁～19頁
その他					
初経遅延評価システムの活用と 女子高校生の生活実態につい て	共同研究	2003年11月	東海体育学会第51回大会 (名城大学天白キャンパス)	鶴原香代子・藤井勝紀・石垣亨・正美智子・花井忠征・池上久子	抄録集33頁～34頁
高齢者の肥瘦自己評価の分析	共同研究	2003年11月	東海体育学会第51回大会 (名城大学天白キャンパス)	青山昌二・池上久子・井上千枝子・鶴原香代子	抄録集39頁
女子高校生の摂食態度と月経 周期状態	共同研究	2004年3月	日本発育発達学会第2回大会 (愛知工業大学エクステンションセンター12号館)	鶴原香代子・石垣亨・藤井勝紀	抄録集55頁
大学生の身体意識についてー理 想とする体型と現実との関連ー	共同研究	2004年11月	東海体育学会第52回大会 (静岡大学共通教育B棟)	鶴原香代子・池上久子・加藤恵子・松田秀子・田中陽子・青山昌二	抄録集21頁～22頁
男女大学生のサプリメント摂取 状況	共同研究	2005年10月	東海体育学会第53回大会 (愛知大学車道校舎本館)	池上久子・松田秀子・鶴原香代子・加藤恵子・田中陽子・中島悦子・青山昌二	抄録集10頁
成人女性における身体組成、骨 密度の加齢変化と身体組成、骨 密度間の相関分析	共同研究	2006年11月	東海体育学会第54回大会 (岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス)	久世早苗・藤井勝紀・斉藤由美・鶴原香代子・館俊樹	抄録集22頁

男女大学生のサプリメント摂取と食習慣について	共同研究	2006年11月	東海体育学会第54回大会 (岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス)	田中陽子・池上久子・加藤恵子・鶴原香代子・松田秀子・中島悦子	抄録集29頁
ベンチプレスにおける男子大学生の最大拳上パワー	共同研究	2006年11月	東海体育学会第54回大会 (岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス)	村本名史・水藤弘使, 鶴原香代子・松田秀子・布目寛幸・池上康夫	抄録集37頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2002年1月～2004年12月	東海体育学会監事
2004年1月～2007年12月	東海体育学会理事
2008年4月～現在	東海体育学会研究交流委員
2006年4月～現在	東海地区大学体育連合評議員
2000年4月～現在	千種区体育協会理事
2004年2月、2006年2月	(財)日本体育協会公認フィットネストレーナー専門科目(体力測定)検定試験検定員

所属 文化創造学部	職名 准教授	氏名 TOFF, Mika	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
①英語表現法の学力向上	①2003年9月～	①様々なライフライティングの例を扱い、学生たちに自分のオートバイオグラフィーを書かせた。英語を用いて自分の人生を文章化し、語学の力を伸ばすだけでなく、様々な角度から物事を見る視点を養い、今までの自分自身を見つめ、自己アイデンティティの確立に手助けをしてきた。	
②ライティング I、IIの基礎力の向上	②2003年4月～	②教師とのメールのやりとりやエッセイライティングを通して日常的な出来事を英文にして表現する活動を行い、学生たちにより長い文章を書くことに慣れさせるとともに、読み手を意識した内容のある文章を書く力を伸ばす手助けをした。	
③プレゼンテーションの実践的指導	③2003年4月～	③自分自身のことを伝えたり、物語を語ったり、物事を説明したり、自分の意見を伝えたり、調査した内容を伝えたりする実習を通して、声の大きさや、アイコンタクトなど相手を意識して話し、自信をもって話すことの大切さを実習を通して指導した。	
④多元文化研究 I、II、III、IVとしての表現力の向上	④2003年4月～	④色々な国の文学作品や映画等を題材にし数多くのライフライティングを読み研究する授業を行った。また実際に自分自身のライフストーリーを英文で書かせることによって英語で自分を効果的に表現することを学ぶ援助を行った。	
⑤ダイアリー&デ일리ライフにおける、日記を題材としたライティング力の向上	⑤2004年4月～	⑤日常の出来事を観察しクリエイティブな文章で書き留める練習を通し表現力を高める練習を行った。学生が書いた文を互いに読ませたり、出版されている日記やオンライン上のジャーナル等を読み、ディスカッションを通して内容を深める訓練を行った。	
⑥授業アンケートの結果に対する授業改善の努力	⑥2007年6月, 11月	⑥授業アンケートにおける学生からの評価をみると、成績の評価方法が明確でないと感じている学生が未だにいる。授業をすべて英語で行っているため、評価方法の説明も英語で行っているが、全受講生に伝わるように今後は印刷物で配布したい。またライティング指導に関して、従来にも増して各学生の英語力と学習段階をみて個人に応じたフィードバックを与えている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
ライティング指導のための教材	2003年4月～	インターネットに載っている英文記事を使って、語彙を増やし文章の構成の仕方を考えさせるハンドアウトを作成し、授業で用いた。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
文部科学省指定Super English Language High School(略してSELHi)特別講師	2004年4月～2006年3月	SELHi指定校である愛知県立千種高等学校より高大連携教育の特別講師として招聘され、国際教養科2年生に対してエッセイライティングを指導した。英語力の非常に高い帰国子女の生徒から英語が得意でない生徒まで幅広い英語力の生徒たちに対して、レベル別に授業を行い、授業内容やフィードバックの与え方を工夫した。また、担当の高校英語教諭とサポートし合いながら、各々の段階で効果的にライティングの力を伸ばす実践を行った。ここで得られた成果を今後全入学時代を迎える大学教育において幅広い英語力の学生たちに対応するための授業に生かしたいと考えている。また、教員研修の講師として同校教員12名に対して講演を行った。高校と大学における英語教育の現状に対する情報交換をすることで、高校から大学に移行する英語教育を効率的にスムーズに行うための方向性が見えた。	
文化創造学部多元文化専攻学生生活委員	2004年4月～2006年3月		
文化創造学部多元文化専攻教務委員	2006年4月～2008年3月		

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
論文					
My Life Story in Other Words	単著	2003年3月	愛知淑徳大学論集－文化 創造学部－第3号		97頁～110頁
「自分を表現する力を育てる」ラ イティング活動	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－文化 創造学部篇－第5号		79頁～86頁
エッセイ・ライティング指導:英語 力に応じたフィードバックの与え 方	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文化 創造学部篇－第7号	山森孝彦	61頁～75頁
Through Different I's : expressing the self in young Japanese women's life writing in English	単著	2009年予定	Life Writing: The State of the Art and the Spirit of the Age		
その他					
口頭発表					
E-mailとLife Writing指導におけ るフィードバック	単著	2004年9月	大学英語教育学会 (JACET)全国大会		
エッセイライティング指導:英語力 に応じた フィードバックの与え方	共著	2006年6月	大学英語教育学会(JACET) 中部支部大会	山森孝彦	
Through Different I's : expressing the self in young Japanese women's life writing in English	単著	2007年7月	Spirit of the Age Conference(Kingston University, London)		
Through Different I's : expressing the self in young Japanese women's life writing in English, revised	単著	2007年8月	大学英語教育学会(JACET) サマーセミナー		
III 学会等および社会における主な活動					
1986年7月～現在	日本英語協会面接委員				
1987年4月～現在	大学英語教育学会(JACET)会員				
2003年4月～現在	ライティング研究会会員				

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 とりい かずよし	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
マンガ作品の新人賞応募、又は持ち込み等における指導。			せっかくの生徒の作品も応募、または持ち込みする出版社の選択を見誤ると作品が没することがあるので、それを的確に指示する。もつといえ、雑誌の選定、作品ジャンルの選択が重要とされる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
遠近法、1点透視～3点透視における背景の描き方、人物の顔、手足の描き方などを、自身で写真を撮り絵に起こし、作		2004年4月～	作品創りのプロセスでもっとも基本であり重要な絵を描くためにどうすればよいかという具体的な教材。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
よみがえる金鯱伝説	共著	2005年3月	名古屋城博開催委員会		統計4頁
NTTドコモPR冊子	共著	2004年7月	NTTドコモ		統計16頁
NTTドコモPR冊子	共著	2006年2月	NTTドコモ		統計17頁
単ロボットくん1巻		2006年3月	小学館		380頁
単ロボットくん2巻		2006年3月	小学館		398頁
トイレット博士		2007年3月	フランス コーネリアス		480頁
コロコロ伝説3		2007年7月	小学館		42頁
コロコロ伝説8		2007年10月	小学館		24頁
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 文化創造学部	職名 准教授	氏名 永井聖剛	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
先行研究・参考文献「引用・参照」マニュアルの作成と配布	2004年4月～2007年4月	論文・レポート作成に必要な、先行研究・参考文献の「引用」の仕方などに関するマニュアルを作成し、専攻の学生に配布した。演習で活用。			
「授業に関するアンケート」結果の授業へのフィードバック	2004年4月～2007年1月	テーマ・内容とも学生の興味や理解の程度を測るために利用。文学作品の読解の講義ではどうしても話が抽象的になるので、アンケート評価値を参考にレベルを調整するようにしている。また、板書・プリント・映像などの教材作成にも参考にしている。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
「言語表現Ⅲ・近代小説」「言語表現Ⅳ・現代小説」「表現創造原理Ⅳ・レトリック論」の講義資料	2004年4月～2007年1月	毎時、自作の講義レジュメ(B4・1～2枚)を配布。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
朗読と言語の多様性に関する一考察—太宰治「走れメロス」を教材として—	2006年7月8日	早稲田大学国語教育学会・朗読の理論と実践の会における口頭発表。小説教材の朗読方法に関する報告と提言。			
越境と変身—太宰治「ヴィヨンの妻」に読む〈自己〉と〈社会〉	2006年11月1日	太宰治「ヴィヨンの妻」の教材提案。早稲田大学教育学部の教員養成GPの一プログラムとして。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
情報メディアサービス委員(学部委員長)	2006年4月～2008年3月				
人権擁護委員	2005年4月～現在				
教職課程委員	2005年4月～現在				
情報システム支援部(学部委員長)	2006年4月～2008年3月				
情報教育センター運営委員	2005年4月～2008年3月				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
声の力と国語教育	共著	2007年3月	学文社	大津雄一・金井景子編	162～186頁
自然主義のレトリック	単著	2008年2月	双文社出版		318頁
論文					
ふたつの〈事実〉—水蔭「十人斬」と花袋『重右衛門の最後』—	単著	2003年6月	『日本文学』第52巻第6号(日本文学協会)		44頁～56頁
自己表現の機構—島崎藤村「處女地」を視座とした表現指導の考察—	単著	2004年3月	『早稲田大学国語教育研究』第24号(早稲田大学国語教育学会)		69頁～81頁
一九二一年前後の自然主義文学者—再構成される島崎藤村—	単著	2004年3月	『文學1921年前後』(西早稲田近代文学の会)		1頁～16頁
池澤夏樹「最後の一片」・他者の他者としてのわたし—文学教材の人称表現をめぐる試論—	単著	2004年6月	『早稲田研究と実践』第25号(早稲田中・高等学校)		67頁～77頁
〈書くこと〉と〈忘れること〉—田山花袋「蒲団」、煩悶のゆくえ—	単著	2005年5月	『文學と批評』第10巻第1号(文藝と批評の会)		23頁～36頁
「無技巧」の修辞学的考察—田山花袋の文体練習と修辞学の動向をめぐる—	単著	2006年3月	『愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—』第6号(愛知淑徳大学文化創造学部)		132頁～152頁
田舎教師の復讐—田山花袋『田舎教師』における自己肯定の方法—	単著	2006年5月	『日本近代文学』第74集(日本近代文学会)		108頁～123頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	早稲田大学国語教育学会委員				
2003年4月～2005年3月	日本近代文学会運営委員				
2005年4月～2008年3月	日本近代文学会東海支部事務局(幹事)				

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 中郷 慶	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
「授業に関するアンケート」に基づく授業の改善	2007年11月16日	2007年度前期の「英語トレーニング2(英語発音)」における「授業に関するアンケート」では、「授業はシラバスに記載された目的・目標に沿って進められている」に対する回答は5が58%、4が38%だった。また、「授業の成績評価基準について説明がなされている」は5が55%、4が28%、3が17%であった。授業計画や成績評価について明示したハンドアウトを別途、授業で配布し、シラバスの内容と成績評価の基準についていっそうの徹底を図ったところ、2007年後期の「英語音声学II」では、「シラバスに記載された目的・目標に沿って進められている」に対する回答が5は84%、4が13%と向上した。「成績評価基準についての説明」についても、5が92%、4が3%と向上した。	
授業における各種メディアの積極的活用	2003年4月1日	「英語音声学I」「英語音声学II」や「英語発音トレーニング」などの授業において、カセットテープ、VTR、CD-ROM、DVD、iPodなどの映像・音声メディアを積極的に活用し、学生の理解の向上に努めた。また、「多元文化総合講座I」においても、プレゼンテーションソフトとプリント資料を活用し、学生が積極的に授業に参加できる工夫をした。	
学生への英語発音指導	2003年4月1日	愛知淑徳大学文化創造学部「英語トレーニング2(英語発音)」、文学部英文学科「英語音声学I」「同II」などで、日本人が間違いやすいリズムやイントネーションなどの問題を中心に扱い、映画の台詞、ポップソング、小説の朗読なども利用しながら、英語の発音を指導し、英語の音声面への学生に関心を喚起した。「英語トレーニング2(英語発音)」(旧カリキュラムの授業名「英語発音トレーニング」)は2002年度以降、「英語音声学」は1999年度以降、毎年担当している。	
「多元文化基礎演習」の実施	2003年4月1日	愛知淑徳大学文化創造学部では、新入生への教育として、レポートの作成、文献や情報の検索など、大学での研究活動の基本的なノウハウを教えるための授業「基礎演習」を各専攻が実施しており、有意義な成果を上げている。「基礎演習」の担当者は、学生の1年次のクラス担任となる。文化創造学部の設置にあたり、構想委員会委員として「基礎演習」の開設に携わり、毎年、「多元文化基礎演習」を専攻内の他の教員とともに担当している。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
読める英文法・聞ける英音法	2008年1月15日	中郷 慶・柳 朋宏・中川直志・二村慎一・樗木勇作・Beverley Curran著 全13ユニットをBoost your reading skillsとBoost your listening skillsの二部構成とし、reading skillsではつまづきやすい文法事項と句型を厳選し、スラッシュリーディング、空所補充、単語の並べ替えによる英作文などの練習問題を通して、文法力・読解力向上を図る。さらにlistening skillsでは英語のリズムやイントネーション、特に母音・子音、連結や同化、脱落などの英音法を学び、リスニング能力向上を目指す。 本書の企画と編集を行い、Unit 1～8のBoost your listening skillsの執筆を担当。付属教授用資料の執筆、付属CD作成。 (総頁数148) 本人の担当部分(10頁～12頁を含め全26ページ)	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
(講演)英語発音の常識と非常識:あなたの発音をよくするために	2003年11月27日	長野県短期大学の学生を対象にした講演。発音やリスニング上達のための留意点、訓練方法を、自身の体験も交えながら講演した。	

(講演)英語の学び方のヒント:大学時代にしておきたいこと	2004年4月3日	中京大学における「英語学習デー」の講演会。英語のリスニング力とスピーキング力を向上させるための訓練方法の紹介と実践を中心に、大学時代に身に付けておきたい英語力とその学習方法を講演した。
(発表)English Education at Aichi Shukutoku University	2006年11月18日	2006年度中京大学国際英語学部英米文化学科教育ワークショップ(中京大学)における発表。TOEICスコアを共通の尺度とした愛知淑徳大学における全学英語教育の取組と、AS MAP(現代GP選定プログラム)の運営や課題などについて、英語で講演した。また、TOEICスコアと発音テスト、クローズテストとの相関関係についての研究発表も行った。
(発表)愛知淑徳大学における英語教育と今後の課題	2007年10月8日	日本英文学会中部支部第49回大会(愛知淑徳大学)特別シンポジウム「大学英語教育のこれから」の中で、講師の一人として愛知淑徳大学における英語教育の特徴を、特に現代GP(現代的教育ニーズ取組支援プログラム)選定プログラムAS MAPの全学的英語教育の概要を説明し、本学のTOEICスコアの分析に基づく今後の大学英語教育の課題などについて講演した。
「英語発音ワークショップ」講師	2003年3月29日～30日 2003年8月9日～10日、 8月23日 2006年8月26日～27日 2007年3月31日 2007年9月1日～2日 2008年3月29日～30日	名古屋YWCA学院が主催する英語教育セミナー「英語発音ワークショップ」の講師として、現役の英語教師、英語教師志望者、一般社会人を対象に、英語発音指導を行った。
「GDM発音ワークショップ」講師	2006年5月27日～28日 2007年5月19日～20日	GDM英語教授法研究会が主催する英語発音ワークショップで、講師の一人として、現役の英語教師、英語教師志望者、一般社会人を対象に、英語発音指導を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
全学英語教育運営委員会関連		全学英語教育運営委員会の委員として、全学英語教育の改善と推進に取り組んだ。その主な成果は、以下のとおりである。
「独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築」	2003年4月1日	2003年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」採択(2004年度、2005年度も同課題名で採択)。授業以外での学生の英語学習を支援する英語学習サポートプログラム「ASU English.com」を開始した。また、全学学生約7,000名のTOEIC IPテストスコア、履修状況、自己学習履歴をデータベース化した。
「英語コミュニケーション」科目の設置	2004年4月1日	全学共通英語科目「言語活用科目(英語)」のうち、「英語コミュニケーション1」から「同8」までの8科目のカリキュラムを策定し、全学で統一した授業内容とした。
「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充」	2005年4月1日	愛知淑徳大学 2005年度研究助成 特別教育研究(2006年度まで継続)。英語の基礎力育成を目標とした英語学習プログラム「基礎からのやり直し英語」を開始した。これは、TOEICテストスコア300点以下の学生を対象とした個人指導の添削・インターネット指導プログラムである。これによって、本学では、すべての学年とすべてのレベルに対応した英語教育プログラムが構築されたことになる。
「多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発」	2005年8月11日	2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定(「仕事で英語が使える日本人の育成」部門)。このプロジェクトは、本学の教育理念「違いを共に生きる」に沿い、地球市民として国籍・歴史・人種・宗教・環境・性などの違いを尊重する教育を行う一環として、多文化共生社会への理解を目標とする英語教育を行うものである。大学の英語教育の最終目標を、単にスキルの習得だけではなく、多文化共生社会への理解、その多様性に対する柔軟な視点を持った学生の育成としているのが特長で、学部を横断した専門教育と英語教育の連携を行い、コミュニケーション能力の醸成に努める。
全学英語教育運営委員会委員	2001年度～現在	
<b>II 研究活動</b>		

著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
ウィズダム英和辞典(第2版)	共著	2007年1月	三省堂	井上永幸・赤野一郎(編)	(総頁数2144) 例文の校閲と追加用 例の作成を担当。 (共同執筆のため、 本人担当部分抽出 不可能)
読める英文法・聞ける英音法	共著	2008年1月	英宝社	中郷 慶・柳 朋宏・中川直 志・二村慎一・樗木勇作・ Beverley Curran	10頁～12頁、20頁～ 22頁、34頁～36頁、 44頁～49頁、60頁～ 62頁、72頁～74頁、 82頁～84頁、93頁～ 94頁
<b>論文</b>					
TOEICスコアで測定される英語 運用能力と発音テストおよびク ローズテストとの関連について	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集 一文化 創造学部・文化創造研究科 篇一 第7号		77頁～93頁
The Linear Order of Coordinates	単著	2007年3月	Exploring the Universe of Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday, Department of English Linguistics, Nagoya University		187頁～202頁
大学英語のこれから(特別シン ポジウムプロシーディングス)	共著	2008年3月	中部英文学 第27号	原田邦彦・石川有香・渡辺義 和・中郷 慶・松本 茂・樗木 勇作	63頁～82頁
<b>その他</b>					
English Education at Aichi Shukutoku University	単著	2006年11月	平成18年度中京大学国際 英語学部英米文化学科教 育ワークショップ, 中京大学		
愛知淑徳大学における英語教 育と今後の課題	単著	2007年10月	日本英文学会中部支部第 49回大会, 愛知淑徳大学		
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
1992年4月～現在	名古屋大学英文学会会員				
1992年5月～現在	近代英語協会会員				
1992年5月～現在	日本英文学会会員				
1992年10月～現在	日本英文学会中部支部会員				
1992年11月～現在	日本英語学会会員				

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 中野弘三	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
講義形式の授業の講義資料の充実		2005年4月～	授業アンケートにおける学生からの指摘に答えて、講義に用いるプリント(講義資料)を口頭での講義をより理解しやすいよう、充実する。講義項目を列挙するだけではなく、重要項目には可能な限り詳しい解説を加え、受講生が講義の復習をする際に役立つようにした。また、重要項目については受講生の理解を深めるための練習問題を多くつけることにした。		
論文指導上の工夫		2007年4月～	ゼミの学部生や院生が論文を作成する際の作成の手順や参考文献の収集の方法について、論文のテーマに関わりなく一般的に述べることのできる手順や方法をまとめて学生たちに示し、論文作成を容易にするよう努めた。すべての受講生に効果があるわけではなかったが、院生や論文作成意欲のあるゼミ学部生には有効であったように思われる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
平成15年度京都外国語大学夏期特別英語セミナー講師		2003年8月3日	京都外国語大学が主催する中学校・高等学校英語教員対象の夏季セミナーで「英語学から見た英会話」と題する講義を行い、英語の会話表現の特徴を最近の語用論研究の成果を踏まえて解説した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
法表現の主観的用法と客観的用法	単著	2003年5月	財団法人語学教育研究所編『市河賞36年の軌跡』		67頁～71頁
On the Development of the Intersubjective Function of Epistemic Adverbs in English	単著	2003年12月	Studies in Modern English (The Twentieth Anniversary Publication of the Modern English Association) 英潮社		11頁～28頁
ぼかし言葉(hedge)の機能	単著	2005年3月	JELS 22 (Papers from the Twenty-second Conference of the English Linguistic Society of Japan)		131頁～140頁
意味変化の機能主義的分析	単著	2006年3月	『愛知淑徳大学論集(文化創造学部・文化創造研究科)』第6号		65頁～78頁
事態(event)と命題(proposition)	単著	2008年3月	『中部英文学』第27号		59頁～62頁
英語中間構文再考	共著	2008年3月	『愛知淑徳大学論集(文化創造学部・文化創造研究科)』第8号	島津万佑子・中野弘三	73頁～86頁
書評					
E.C.Traugott and R.B. Dasher, Regularity in Semantic Change	単著	2003年12月	『英文学研究』第80巻 第2号		134頁～138頁
R. Hickey, ed., Motives for Language Change	単著	2006年5月	English Linguistics 23		137頁～162頁
学会発表					
意味変化の機能主義的分析		2003年11月	日本英語学会第21回大会(ワークショップ)		

ぼかし言葉(hedge)の機能	2004年11月	日本英語学会第22回大会 (研究発表)		
事態(event)と命題(proposition)	2007年10月	中部英文学会第59回大会 (シンポジウム)		
学術講演				
語の意味変化—事態表現から 対話表現へ	2005年9月	金城学院大学英文学会		
語用論化(pragmaticalization)の 背景	2005年12月	愛知・岐阜・三重談話会		
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>				
1985年5月～2007年4月	近代英語協会理事			
1985年11月～2007年10月	日本英語学会評議員			
1996年4月～現在	市河賞選考委員会選考委員			

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 BUI CHI TRUNG	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
講義内容を図表や映像を活用		学生に講義内容の理解促進だけでなく分析や整理能力を醸成、毎回感想文を書かせて理解度・関心と学習意欲を高める。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
NPOがよくわかる本～はじめてNPOに触れる人のために	2002年11月30日	NPOの基礎知識と実践についてのQ&A方式と愛知県内のNPO活動データ。編集:ブイチトルン、石井伸弘。著者:後房雄。pp59。特定非営利活動法人市民フォーラム21・NPOセンター発行	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
「地域文化と国際交流を考えるワークショップ『地球が舞台』in利賀」	2003年9月13日	国際交流基金・サントリー文化財団主催。パネリスト参加	
「ポスト万博から中部が始まる」	2004年5月18日	地方シンクタンク協議会中部ブロック主催シンポジウムのパネリスト参加	
「グローバル都市ネットワークにおける人間安全保障」研究会 一在留?在住?移住? 社会意識についての一考察」	2005年5月25日	中部大学主催事業、日本社会における在住外国人の現状・課題に対する対応・対策について人間の安全保障観点からの考察・提言	
「地域における多文化共生事業への対応とその可能性」	2005年11月24日	三重県国際交流財団主催学習会講演。	
愛・地球博「平和へのハーモニー・地球市民フォーラム」	2005年7月10日	愛・地球博会場にてフォーラムパネリスト参加	
「オーストラリアにおけるベトナム人社会」	2005年12月4日	静岡文化芸術大学異文化研究会主催、オーストラリア移民社会におけるベトナム人コミュニティ形成と特徴について発表。	
「多文化ソーシャルワーカーの受け皿と支援の方法 一今あるギャップを埋めるには?」	2006年2月24日	(財)豊田市国際交流協会・(財)愛知県国際交流協会・豊田市主催。全体コーディネーターとして参加	
「グレーター・ナゴヤ クラスターフォーラム2007」 「グレーター・ナゴヤの魅力向上に向けて～地域の視点から～」パネルディスカッション	2007年1月19日	経済産業省・文部科学省推進プロジェクト合同成果発表会主催フォーラム・パネリスト参加。GNI協議会の活動として関係自治体の長、産業界、大学等のトップ参加の下、官民一体で外資を活用した地域経済発展に外国人労働者の役割等について提言した。	
日本における外国人児童生徒の教育の現状と課題	2007年8月 各1週間5カ国にて放送	NHK国際放送局(NHK World Radio Japan)と世界4カ国(豪・英・オランダ・スウェーデン)との共同制作(英語版)のコメンテーター	
日本における外国人労働者の現状と課題	2007年9月12日	ベトナム・ホーチミン人文社会大学主催、新国際交流棟落成式記念講演会、日本における外国人労働者の受入れ現状、特にベトナム研修生に関する問題と今後の対応等について記念講演	
日本への労働輸出における戦略的政策の必要性	2007年9月19日	ベトナム・NguoiLaoDong新聞	
ODA財源の活用法―日本の経験を学ぼう	2007年12月1日	ベトナム・TuoiTre新聞	
多文化共生のまちづくり	2007年11月13日	全国市町村国際文化研究所と長崎県主催、日本社会の多文化性の歴史、現在と今後の共生社会実現の可能性についての基調講演	
多文化社会とNPOの役割	2007年11月15日	岐阜県池田町・神戸町議会共催、日本の国際交流、多文化社会形成の現状とNPOの社会的役割の可能性について両町議会議員及び町長・幹部に対して講演	
市民フォーラム21・NPOセンターの10年と今後の課題	2007年12月5日	国際セミナー 日本のNPO法成立と市民活動の発展について市民フォーラム21・NPOセンターを事例に説明、今後のNPOの社会的役割について発表	
From Particular People to General Society: The Pathway of Volunteerism in Japan	2007年12月9日	ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)アジア太平洋地域会議主催、National Report Sessionにおいて報告	
ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)アジア太平洋地域会議のNational Report Session	2007年12月9日	ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)アジア太平洋地域会議主催、National Report Sessionの全体コーディネーター	
地域の多文化共生の対応と課題	2008年1月26日	茨城県東海村国際交流協会主催研修会講演	
中部日本におけるベトナム発見	2008年2月15日	Aichi Senior College学習会主催、古代よりの国際交流活動、特にベトナムと中部日本との関係について講演	
その他多数			

4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学国際交流委員会委員		2004年4月1日より現在至る		愛知淑徳大学の国際交流活動等について運営参加	
愛知淑徳大学コミュニティコラボレーションセンター設立準備委員～現在は運営委員		2004年10月より現在至る		コミュニティコラボレーションセンター設立準備委員として企画運営。2006年9月より正式設立後運営委員	
愛知淑徳大学多元文化学会担当教員		2004年4月1日より現在至る		学生運営委員と共に講演会・セミナー企画運営	
愛知淑徳大学パイチトルンゼミ海外合宿		毎年9月約10日間		ゼミ2・3年生全員をベトナムの国際協力活動体験及び植林事業参加	
タイ・チェンマイ大学社会科学部、ベトナム・ホーチミン人文社会大学交流提携事業				04年1月より本学文化創造研究科との学生インターンシップ・教員交流事業担当。	
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
NPOがよくわかる本～はじめてNPOに触れる人のために	共編	2002年11月30日	市民フォーラム21・NPOセンター	編集:パイチトルン、石井伸弘。著者:後房雄。	担当総頁59頁
論文					
市民・ボランティア参加による組織運営 財団法人豊田市国際交流協会(TIA)の事例	単著	2004年9月1日	明石書店	榎田勝利編:国際交流の組織運営とネットワーク	161頁～173頁
外国人の子どもの教育一不就学の現状から提言へ	共著	2005年2月	名古屋国際センター。財団法人名古屋国際センター設立20周年記念論文集	パイチトルン、小島祥美。監修:武者小路公秀	55頁～62頁
発展途上国におけるHIV/AIDS対策の実証研究 ―北部タイにおける政府とNGOとの協働政策を中心に―	共著	2008年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部・文化創造研究科編	中川 翔平、パイチトルン	101頁～115頁
III 学会等および社会における主な活動					
1987年	愛知県国際交流協会「国際交流推進功労者」賞受賞				
1993年	日本青年会議所「TOYP The Outstanding Young Persons大賞・通産大臣賞」受賞				
1999年～現在	ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)会員				
2000年4月～現在	NPO学会会員				
2000年4月～現在	総務省・自治体国際化協会 自治体国際協力アドバイザー				
2001年11月	中日新聞社「第49回中日社会功労賞」受賞				
2004年6月～現在	特定非営利活動法人市民フォーラム21・NPOセンター代表理事				
1997年5月～現在	特定非営利活動法人開発教育協会理事				
2003年度	愛知県国際交流大都市圏構想策定委員会委員				
2004年度	愛知県国際交流大都市圏構想多文化共生事業推進委員会委員				
2001年4月～2004年3月	2005年日本国際博覧会愛知県パビリオン構想策定委員会委員				
2001年度	2005年日本国際博覧会愛知県パビリオン県民参加ワーキンググループ委員				
2004年度	環境省・中部地区環境パートナーシッププラザ(仮)運営検討会委員				
2003年4月～2005年9月	2005年日本国際博覧会「地球市民村」事業アドバイザー				
2005年度	総務省・自治体国際化協会「地域における多文化共生事業促進委員会」委員長				
2005年度	愛知県「留学生等の活躍の場について検討を行うワーキンググループ」座長				
2005年11月	愛知県「第57回愛知県表彰・社会活動功労賞」受賞				
2006年4月～2007年3月	ボランティア活動推進国際協議会(IAVE)アジア太平洋地域会議実行委員会副委員長				
2005年度・2006・2007年度	愛知県多文化共生推進事業先行委員会委員				
2007年度	愛知県外県営住宅共生支援事業委託先選定委員会委員				
	その他多数				



所属 文化創造学部	職名 教授・研究科長	氏名 皆川修吾	大学院における研究指導 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
担当している授業科目の中で、以下が評価対象科目:多元文化総論(2006年度以降「文化盛衰論」に名称変更)・1-4年生・必修・履修生180名前後 日本政治外交論・1-4年生・選択・履修生70名前後	2002・03・04・05・06・07年度前期 2002・03・04・05・06・07年度前期	教育内容は、何を学ぶか学生にとって明白になるように、毎回の講義が課題設定され、各々の授業が自己完結型となっている。各授業は、理論を現実(歴史)で検証しているのが特徴。両講義とも、学生の理解度を高めるため、視聴覚教材を使用し、中間テストを各々4回おこなった。両講義とも2002・03・04・05・06・07年度と過去6回学生のアンケート調査の対象となった。学生の要望をできる限り実現できるよう努力した結果、回を重ねるごとに受講生の授業評価は上がっている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
DVDに取められたNHKドキュメンタリーを選別し、授業内容 要旨とセットになった教材を作成した。対象になった授業科目: 学 部:国際文化(IIIロシア);国際理解(戦争と平和);多元文化総論(文化盛衰論);日本政治外交論	2002・03・04・05・06・07年度 2002・03・04・05・06・07年度	学生の学び取る技術と教師の教える技術の統合を図るために、これら教材は作成され、学生に目的意識と勉学の楽しさを持たせる工夫をした。そして教師と学生間の相互信頼を醸成し、教育効果をあげた。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
(1)多元文化専攻主任としての貢献	2001・02・03年度	1. 本専攻の教育活動全般を監督し、最大限の教育効果を得るために、本専攻専任教員の目的意識、相互理解、志気を高めるなどして、専攻主任の指導力を発揮した。 2. 学生の学習能力や理解度を高めるため本専攻専任教員による教授法研究会を各週開催した。ここでは各々の教員がローテーションで自己の学生への教育実態を報告し、専任教員間でフリーな意見交換をし、お互いに学習し、教授法を研鑽した。本専攻への入学生の資質、および、在校生の本専攻への要望は多様化・多元化しており、変容する環境での教授法の向上は効果的な授業運営を図っていくうえで避けて通れない重要事項であった。 3. 多元文化専攻は複眼的な視野を持つ教育指向が本専攻の長所であったが、同時に多様性の対象を拡大したために、若干網羅的なカリキュラムとなっていることを認識した。これらを是正するため、本専攻の特徴がより明示されるよう再構成し、2004年度より国際理解を軸に、言語文化・外国文化・現代文化を扱うカリキュラムを構成した。	
(2)学外講師による招へい講義 外務省による「外交講座」	2005年度	国際理解を深めるため、実務専門家から実践の問題点を学んだ。講師は外務省人道人權課長・若木孝氏、テーマは「人間の安全保障」	
(3)学外での実践教育 多元文化研究(演習)	2003・04・05・06・07年度	2003年度より皆川ゼミ(学部)は、16大学から構成されている名古屋国際関係合同ゼミに参加している、参加校の多くが研究報告の形式をとるなかで、皆川ゼミと名古屋大学法学部定方ゼミは毎年テーマを定め、ディベートを展開している。3時間に及ぶディベートは、ゼミ生らに問題意識をもたせ、論理的思考を培い、客観的な判断をする「場」を提供している。このディベートが行われる数週間前の学内大学祭(11月初旬)でも、一般市民の参加を経てディベートを催している。テーマが時事問題だけに(2004年度:自衛隊のイラク派遣問題、05年度:戦後処理問題、06年度:米軍基地再編問題、07年度:朝鮮半島問題と六カ国協議)、市民と熱のこもった討論が展開された。これらの体験は、学生に学ぶ意欲をかきたて、同時に知性や理性の有効性を検証させることができた。	

(4) 研究科長・国際交流専攻主任としての貢献	2004・05・06・07年度	研究科長として、定期的に両専攻院生の学習状況やカリキュラム編成を調査分析して行くなかで、創造表現専攻の教育は期待以上の効果をもたらし、今後も引き続きこのような教育効果が期待できることが判明した。他方、国際交流専攻は期待していた教育効果が得られていないことが分かったため、専攻内で企画構想委員会を設け検討した。その結果、現専任教員の適材適所の再配置を主眼に、目的指向を持ったコースの名称変更と新たにカリキュラムをもって再構成した。2006年度より新カリキュラムが施行され、年ごとに院生数も増え、期待通りの成果をあげている。
-------------------------	-----------------	--

4 その他教育活動上特記すべき事項		
多元文化専攻主任	2002・03年度	文化創造学部多元文化専攻運営統括
AO・クラブ推薦入試委員会委員	2004・05・06・07年度	
文化創造研究科長	2004・05・06・07年度	文化創造研究科運営統括
研究科国際交流専攻主任	2004・05・06・07年度	文化創造研究科国際交流専攻運営統括
大学協議会委員	2004・05・06・07年度	意思決定機関
大学総合企画委員会委員	2004・05・06・07年度	協議機関
大学院入試委員会委員	2004・05・06・07年度	入学試験等実施要項第3・5条
自己点検・評価委員会委員	2004・05・06・07年度	自己点検・評価委員会規程第4条第1項第1号
総合情報メディアセンター委員会委員	2004・05・06・07年度	総合情報メディアセンター規程第7条第1項第3号
研究助成委員会委員	2004・05・06・07年度	研究助成委員会規則第3条第1項第2号
学資援助委員会委員	2004・05・06・07年度	学資援助規程第4条第2項
TA委員会委員	2004・05・06・07年度	
大学院委員会	2004・05・06・07年度	学則第11条第3・4号 2005年度に同委員会小委員会(学部・大学院教育の連携)委員長に任命され、学部・大学院5年修了プログラム案をまとめ、大学協議会に提議した。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
ロシア連邦議会－制度化の検証: 1994～2001	単著	2002年8月	溪水社		総計191頁
論文					
Managed Parliamentary Democracy in Russia	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部編－(第4号)		109頁～133頁
Parliamentary Democracy in Russia at a Crossroads	単著	2004年7月	北海道大学スラブ研究センター 夏期国際シンポ報告集		355頁～382頁
Towards Global Standard: The Impact of Globalization on Japanese Culture at Political and Societal Levels	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部編－(第5号)		87頁～94頁
The impact of Globalization on Japanese Politics under the Koizumi Government: Leadership in the Process of Institutionalization.	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－文化創造学部編－(第7号)		123頁～139頁

## III 学会等および社会における主な活動

ロシア・東欧学会	学会理事、2005年度学会企画委員長、学会紀要論文審査員
日本国際政治学会	会員、学会紀要論文審査員
日本政治学会	会員
日本比較政治学会	会員
オーストラリア学会	会員
北海道大学スラブ研究センター	特別研究員、2008年3月、公開講座「ブーチン大統領の後継者・メドヴェージェフとは誰か」
北方領土対策協議会	委員、過去15年間、北方領土の日に県民大会で講演、2007年6月北方領土訪問
FEC国際親善協会	FEC相談役、FEC Newsに論説多数掲載

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 楊 衛平	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業のアンケートを踏まえて、「伝統食文化に由来する食養生におけるお茶と酒の役割」「生き生き漢方ABC」等の副教材としてのプリントを作成・使用する。		2006年4月～	学生にとって将来に役立つ実践できる内容を授業に取り組んで、分かりやすく解説し、授業に興味と意欲を持たせて、積極的に参加してくれるために努めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
		2006年4月～	個々の授業に対応する資料を編集・作成してプリントとして配布。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
a. 2007年度に、学生を引率、異文化の現地調査を実施。			b. 2008年度に地域文化交流研究プログラム(メコン川流域文化交流)に参加。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
歴代漢方名作選	監修	2007年11月	有)漢字情報システム	凱希メディアサービス	
論文					
アトピー性皮膚炎の外治療法	共著	2001年1月	東方医学Vol.17 No.1	吉田政己	49頁～54頁
アトピー性皮膚炎の中医学治療法	単著	2003年7月	「小児疾患の身近な漢方治療」MEDICAL VIEW出版		55頁～63頁
中国の食養生・薬食同源について	単著	2005年3月	愛知淑徳大学論集(文創)第5号		95頁～105頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2000年4月～現在		日中文化協会常務理事			
2007年5月～現在		WAFCA理事			
東洋医学会会員・東方医学会会員 基盤研究(C)(研究機関:2008-2010)研究課題名:力情報を活用した鍼治療教育訓練システムの開発。研究代表者:陣連怡(藤田衛生学園)、連携研究者:楊衛平					

所属 文化創造学部	職名 教授	氏名 吉村英夫	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
毎週ミニレポートを提出させ、週刊「講座通信」作成		2006年4月より	現在約330号		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「クリエイティブライティングA」ミニ教科書作成		2001年4月より	「名作短詩短文集」		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
「教育実践一行詩父よ母よ」		1995年8月20日	全国国語教育研究大会記念講演 大阪市にて(60分)		
教育実践「一行詩について」		2005年8月14日	NHKラジオ第2放送文化講演(60分)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
ワクワク近代文学八話		1990年2月	高校出版		256頁
ローマの休日ーワイラーとヘプバーン		1991年7月	朝日新聞社刊		255頁
同上 文庫化		1994年	朝日文庫		289頁
一行詩(往信)父よ母よ	撰著	1994年7月	学陽書房		180頁
一行詩(返信)息子よ娘よ	撰著	1994年7月	学陽書房		168頁
		1995年	韓国にてハングル訳出版		140頁、143頁
大いなる幻影考・1930年代フランス映画私記		1995年9月	学陽書房		237頁
完全版(男はつらいよ)の世界		1997年4月	集英社		405頁
同上 文庫化		2005年12月	集英社文庫		415頁
松竹大船映画——小津、木下、山田太一、山田洋次の描く(家族)		2000年11月	創土社		297頁
誰も書かなかったオードリー		2001年8月	講談社+α文庫		301頁
放浪と日本人——寅さんの源流をさぐる		2005年10月	実業之日本社		330頁
吉村英夫講義録 チャップリンを観るほか		2008年1月	草の根出版会		272頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 文化創造学部	職名 准教授	氏名 若松孝司	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
基礎演習授業における授業形式の工夫	2004年4月1日	大学生生活をはじめるとにあたっての基礎的な情報やレジュメ・レポートの作成方法、演習授業におけるプレゼンテーションの方法、図書館やインターネットをはじめとする各種資料の収集法について、少人数授業というメリットを生かして、できるだけ教員が前面に出ることのないよう、学生の自主性を重視した授業運営につとめている。	
授業アンケートを受けての授業内容の工夫	2005年6月1日	本学では前期と後期の講義期間中に1回づつ、授業アンケートを実施している。そこに記されていた学生の要望等を踏まえて、たとえばパワーポイントを用いた授業では、文字の大きさをスライド切り替え時間の調整、写真資料の活用などの工夫を行った。また、アンケート結果は授業内に学生に公表した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
環境文化基礎演習テキスト	2005年4月1日	文化創造学部環境文化専攻1年次の必修授業「環境文化基礎演習」に使用するためのテキストであり、大学生生活をはじめるとにあたっての基礎的な情報やレジュメ・レポートの作成方法、演習授業におけるプレゼンテーションの方法、図書館やインターネットをはじめとする各種資料の収集法についてまとめたもの。	
多元文化基礎演習テキスト	2006年4月1日	文化創造学部多元文化専攻1年次の必修授業「多元文化基礎演習」に使用するためのテキストであり、大学生生活をはじめるとにあたっての基礎的な情報やレジュメ・レポートの作成方法、演習授業におけるプレゼンテーションの方法、図書館やインターネットをはじめとする各種資料の収集法についてまとめたもの。上記の環境文化基礎演習テキストの改訂版。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
論文レポート作成と大学での学習についての講演	2003年8月26日	岐阜県立大垣西高等学校において、教員を対象とした文章作成法ならびに大学における学習のあり方について講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2004年7月20日	愛知学院大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2005年7月18日	同朋大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2005年12月16日	岐阜県立多治見北高等学校において、総合学習の一環として高校生対象に文章作成法に関する講演を行った。	
大学における学習についての講演	2006年5月27日	名古屋市のナディアパークにおいて、高校生を対象にした学習法の講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2006年7月17日	同朋大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
大学における学習についての講演	2006年10月14日	名古屋市のナディアパークにおいて、高校生を対象にした学習法の講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2006年12月15日	岐阜県立多治見北高等学校において、総合学習の一環として高校生対象に文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年6月17日	四日市市内において、総合学習の一環として高校生対象に文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年7月16日	同朋大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年7月22日	愛知学院大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年8月25日	同朋大学において、学生を対象とした文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年9月26日	中京大中京高等学校において、総合学習の一環として高校生対象に文章作成法に関する講演を行った。	
論文レポート作成についての講演	2007年12月1日	岐阜県立多治見北高等学校において、総合学習の一環として高校生対象に文章作成法に関する講演を行った。	

4 その他教育活動上特記すべき事項					
教務委員		2001年4月1日～ 2008年3月31日			文化創造学部文化創造学科環境文化専攻の教務委員として、日常の教務運営とともに募集停止を受けた科目整理その他の事務的処理を担当している。
学会担当		2001年4月1日～ 2006年3月31日			本学においては、各学部・学科・専攻において各学会が組織され、教員と学生との協力のもとで、学生の学習能力と意欲を高めることを目的としている。これに対して、教員側の主要メンバーとして学生を指導し、また、学会機関紙を作成・発行することによって学会活動の向上と発展に寄与した。
情報メディアサービス部運営委員		2007年4月1日～ 2008年3月31日			図書館における書籍や雑誌、AV資料の選定・購入を通して、学生の教育環境の充実に努めた。
特別教育研究「グローバル化とジェンダー」の実施		2007年4月1日～ 2009年3月31日			2007年度研究助成 特別教育研究「グローバル化とジェンダー」をテーマにした研究の実施、及びその研究成果を生かした教育プログラムの構築を進めた。
ジェンダー・女性学研究所運営委員		2007年4月1日～ 2008年3月31日			ジェンダーという概念を軸に、「違いを生きる」という本学の建学の理念を具現化した教育および社会生活のためのプログラム作成に寄与した。
キャリアセンター運営委員		2008年4月1日～ 2010年3月31日			企業インターンシップにおける学生選抜及び指導を行った。
II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
イラク戦争におけるメディア報道に関する一考察	単著	2004年3月	愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—第4号		67頁～88頁
世界システムへの包摂—世界システムの視から見る沖縄の従属構造—	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—第6号		93頁～129頁
ジェンダーフリー・バッシングに関する一考察	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—第7号		139頁～151頁
III 学会等および社会における主な活動					
2004年2月26日	大学入試解答速報(中日新聞) 共同者:公文宏和、植田雅之、中野伸二、若松孝司 大学入試問題の解答例と講評(本人担当部分抽出不可能)				
2005年2月26日	大学入試解答速報(中日新聞) 共同者:公文宏和、植田雅之、中野伸二、若松孝司 大学入試問題の解答例と講評(本人担当部分抽出不可能)				
2006年2月28日	大学入試解答速報(中日新聞) 共同者:公文宏和、植田雅之、中野伸二、若松孝司 大学入試問題の解答例と講評(本人担当部分抽出不可能)				
2007年2月26日	大学入試解答速報(中日新聞) 共同者:植田雅之、中野伸二、若松孝司 大学入試問題の解答例と講評(本人担当部分抽出不可能)				
2007年10月13日	名古屋市女性会館において、「開発と女性」というテーマで講演を行った。				
2008年2月26日	大学入試解答速報(中日新聞) 共同者:植田雅之、中野伸二、若松孝司 大学入試問題の解答例と講評(本人担当部分抽出不可能)				
2008年4月1日～2010年3月31日	愛知県男女共同参画審議会委員				



# 医療福祉学部

安藤 富士子	279	高橋 啓介	345
井口 昭久	286	高橋 俊彦	348
伊藤 勝也	292	高橋 伸子	350
伊藤 照子	293	瀧 誠	352
伊藤 春樹	294	多田 萬里子	360
井脇 貴子	297	棚橋 昌子	361
太田 龍朗	303	田邊 宗子	362
大野 竜三	305	谷口 明広	363
大庭 紀雄	314	谷口 純世	365
小口 将典	317	永田 忠夫	367
加藤 正子	318	西 和久	370
川嶋 英嗣	320	丹羽 英人	376
川瀬 芳克	322	初谷 良彦	377
木村 淳也	334	春見 静子	379
神波 幸子	335	平井 淑江	381
酒井 美和	337	船崎 康宏	383
佐々木 政人	338	三宅 養三	385
杉浦 信彦	340	宮田 Susanne	388
鈴木 朋子	341	吉田 敬	392
諏訪 真美	343	渡邊 一功	394





所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 安藤 富士子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学生生活委員		2008年4月1日	視覚科学専攻において学生生活委員を担当し、学生指導に当たっている。		
視覚科学会顧問		2008年4月1日	視覚科学会の顧問を担当し、学生が学会を運営するにあたっての指導を行っている。		
愛知淑徳クリニック内科医師		2008年4月1日	愛知淑徳クリニックの内科医師として地域診療にあたるとともに学生の健康管理に務めている。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
長寿科学事典	共著	2003年4月	医学書院	祖父江逸郎	233頁～235頁、269頁～270頁、287頁～288頁、295頁～298頁、
嚙下に伴う事故。エビデンスに基づく対策とチームワークのために	共著	2003年9月	第一出版「高齢者の疾病と栄養改善へのストラテジー」	斉藤昇・高橋龍太郎	492頁～496頁
老年医療の歩みと展望	共著	2003年12月	メディカルビュー社	日本老年医学会	218頁～221頁
メンタルヘルス事典	共著	2005年8月	同朋舎	上里一郎・末松弘行・田畑治・西村良二・丹羽真一	235頁～242頁
看護のための最新医学講座(第2版)第17巻	共著	2005年9月	中山書店	井藤英喜	56頁～61頁
今日の治療指針2006	共著	2006年1月	医学書院	山口徹・北原光夫・福井次矢	1116頁～1117頁
老年学テキスト	共著	2006年11月	南江堂	飯島節・鳥羽研二	225頁～234頁
アクティブシニア社会の食品開発指針	共著	2006年9月	Science Forum.	津志田藤二郎・高城孝助・小久保貞之・横山理雄	128頁～137頁、172頁～175頁
論文					
Relationship of resting Energy Expenditure with Body Fat Distribution and Abdominal Fatness in Japanese Population	共著	2003年1月	J Physiol Anthropol 22	Okura T, Koda M, Ando F, Nino N, Shimokata H	47頁～52頁
Refractive errors and factors associated with myopia in an Japanese population	共著	2003年1月	Jpn J Ophthalmol.23	Shimizu N, Nomura H, Ando F, Nino N, Shimokata H	6頁～12頁
高齢者の入院または死が家族の「死への不安」に及ぼす影響	共著	2003年2月	家族看護学研究 8(2)	坪井さとみ・新野直明・安藤富士子・藤本よし子・斎藤伊都子・加藤美羽子・下方浩史	181頁～187頁
MTHFR Gene Polymorphism as Risk Factor for Silent Brain Infarcts and White Matter Lesions in Japanese General Population: NILS-LSA Study	共著	2003年5月	Stroke, 34(5)	Kohara K, Fujisawa M, Ando F, Tabara Y, Niino N, Miki T, Shimokata H	1130頁～1135頁
Age-related Change in Contrast Sensitivity Among Japanese Adults	共著	2003年3月	Jpn J of Ophthalmol,47(3)	Nomura H, Ando F, Niino N, Shimokata H, Miyake Y	299頁～303頁

Association of polymorphisms of interleukin-6, osteocalcin, and vitamin D receptor genes, alone or in combination, with bone mineral density in community-dwelling Japanese women and men	共著	2003年7月	J Clin Endocrinol Metab 88	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	3372頁～3378頁
Association of polymorphisms in the estrogen receptor alpha gene with body fat distribution in middle-aged and older Japanese population	共著	2003年4月	Intern J Obes,27	Okura T, Koda M, Ando F, Niino N, Ohta S, Shimokata H	1020頁～1027頁
Dietary Magnesium Intake and the Future Risk of Coronary Heart Disease (The Honolulu Heart Program)	共著	2003年9月	Am J Cardiol 92	Abbott RD, Ando F, Masaki KH, Tung KH, Rodriguez BL, Petrovitch H, Yano K, Curb JD	665頁～669頁
Genetic deficiency of a mitochondrial aldehyde dehydrogenase increases serum lipid peroxides in community-dwelling females	共著	2003年8月	J Hum Genet,48	Ohsawa I, Kamino K, Nagasaka K, Ando F, Niino N, Shimokata H, Ohta S:	404頁～409頁
Association of the mitochondrial DNA 15497G/A polymorphism with obesity in a middle-aged and elderly Japanese population	共著	2003年8月	J Hum Genet 113	Okura T, Koda M, Ando F, Niino N, Tanaka M, Shimokata H	432頁～436頁
Prevalence of self-perceived auditory problems and their relation to audiometric thresholds in a middle-aged to elderly population	共著	2003年5月	Acta Otolaryngol.,123(5)	Uchida Y, Nakashima T, Ando F, Niino N, Shimokata H	618頁～626頁
Factors associated with long hospital stay in Geriatric wards in Japan	共著	2003年6月	Geriatrics and Gerontology International,3(2)	Umegaki H, Ando F, Shimokata H, Yamamoto S, Nakamura A, Endo E, Kuzuya M, Iguchi A	120頁～127頁
Association of Polymorphisms of Paraoxonase 1 and 2 Genes with Bone Mineral Density in Community-Dwelling Japanese	共著	2003年9月	J Hum Genet 48(9)	Yamada Y, Ando F, Niino N, Miki T, Shimokata H	469頁～475頁
Comparison of hematologic or biochemical parameters among elderly hospital patients, institution-dwelling residents, and health check-up examinees	共著	2003年3月	Geriatrics and Gerontology International. 3(3)	Yamamoto R, Asai K, Miura S, Kimata T, Ando F, Iguchi A	137頁～144頁
Association of polymorphisms of the osteoprotegerin gene with bone mineral density in Japanese women but not men	共著	2003年6月	Mol Genet Metab 80	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	344頁～349頁
Association of a polymorphism of the dopamine receptor D4 gene with bone mineral density in Japanese men.	共著	2003年11月	J Hum Genet 48	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	629頁～633頁
男性ホルモンの加齢変化と生活機能自立度(活動能力指標)との関連	共著	2003年2月	日本未病システム学会雑誌 9(2)	安藤富士子・福川康之・中島千織・藤澤道子・新野直明・下方浩史	275頁～278頁
日本人の長寿要因	共著	2003年4月	日本医事新報. 4119	下方浩史・安藤富士子	100頁
加齢変化と老年症候群	共著	2003年7月	総合臨床. 52(7)	安藤富士子・下方浩史	2060頁～2065頁
生理的老化と病的老化	共著	2003年10月	Medicina 40(10)	下方浩史・安藤富士子	1636頁～1637頁
入浴中の事故を防止するためのポイント	単著	2003年7月	高齢者けあ. 3(7)		24頁～28頁
日本の老化・老年疫学への新たなストラテジー	共著	2003年6月	日本老年医学会雑誌 40(6)	下方浩史・安藤富士子	569頁～572頁
Cognitive Function in Japanese Elderly with Type 2 Diabetes Mellitus	共著	2004年1月	J Diabetes and its complications, 18	Mogi N, Umegaki H, Hattori A, Maeda N, Miura H, Kuzuya M, Shimokata H, Ando F, Iguchi A	42頁～46頁

The relationship between intraocular pressure and refractive error adjusting for age and central corneal thickness	共著	2004年1月	Ophthalmic Physiol Opt 24	Nomura H, Ando F, Niino N, Shimokata H, Miyake Y	41頁～45頁
Visual acuity in a community-dwelling, Japanese population and factors associated with visual impairment	共著	2004年1月	Jpn J Ophthalmol 48	Iwano M, Nomura H, Ando F, Niino N, Miyake Y, Shimokata H	37頁～43頁
The impact of health problems on depression and activities in middle-aged and older adults: Age and social interactions as moderators	共著	2004年1月	J Gerontol B Psychol Sci, 59B(1)	Fukukawa Y, Nakashima C, Tsuboi S, Niino N, Ando F, Kosugi S, Shimokata H	19頁～26頁
Association of cholecystokinin-A receptor gene polymorphism with alcohol dependence in a Japanese population	共著	2004年2月	Alcohol & Alcoholism 39(1)	Miyasaka K, Yoshida Y, Matsushita S, Higuchi S, Maruyama K, Niino N, Ando F, Shimokata H, Ohta S, Funakoshi A	25頁～28頁
Association of a polymorphism of the matrix metalloproteinase-9 gene with bone mineral density in Japanese men	共著	2004年2月	Metabolism 53 (2)	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	135頁～137頁
加齢及び全身性基礎疾患の歪成分耳音響放射に及ぼす影響	共著	2004年2月	Otol Jpn 14(2)	内田育恵・中田誠一・植田広海・中島務・新野直明・安藤富士子・下方浩史	154頁～159頁
Age differences in the effect of physical activity on depressive symptoms	共著	2004年2月	Psychol Aging, 19(2)	Fukukawa Y, Nakashima C, Tsuboi S, Kozakai R, Doyo W, Niino N, Ando F, Shimokata H	346頁～351頁
Mitochondrial ALDH2 Deficiency as an Oxidative Stress	共著	2004年1月	Ann NY Acad Sci 1011	Ohta S, Ohsawa I, Kamino K, Ando F, Shimokata H	36頁～44頁
地域在住の中高齢者の抑うつに関連する要因:その年齢差と性差	共著	2004年2月	心理学研究 75(2)	坪井さとみ・福川康之・新野直明・安藤富士子・下方浩史	101頁～108頁
Klotho遺伝子G-395A多型と認知機能障害	共著	2004年1月	日本未病システム学会雑誌 10(1)	下方浩史・西田裕紀子・新野直明・安藤富士子	49頁～51頁
Werner helicaseの遺伝子変異と地域在住中高年者の血圧・心疾患	共著	2004年1月	日本未病システム学会雑誌 10(1)	安藤富士子・藤澤道子・新野直明・下方浩史	52頁～54頁
地域在住高齢者の転倒恐怖感に関連する要因の検討	共著	2004年1月	日本未病システム学会雑誌 10(1)	西田裕紀子・新野直明・小笠原仁美・安藤富士子・下方浩史	97頁～99頁
中高年者の口腔所見に関する研究	共著	2004年1月	日本未病システム学会雑誌 10(1)	譽田英喜・新井康司・角保徳・藤澤道子・安藤富士子・新野直明・下方浩史	100頁～102頁
Association of Colecystokinin 1 Receptor and $\beta$ 3-Adrenergic Receptor Polymorphisms with Midlife Weight Gain	共著	2004年12月	Obes Res 8(12)	Koda M, Ando F, Niino N, Shimokata H, Miyashita K, Funakoshi A	1212頁～1216頁
Alcohol Dehydrogenase 2 Variant is Associated with Cerebral Infarction, Lacunae, LDL-Cholesterol and Hypertension in Community-dwelling Japanese Men	共著	2004年9月	Neurology 63(9)	Suzuki Y, Fujisawa M, Ando F, Niino N, Ohsawa I, Shimokata H, Ohta S	1711頁～1713頁
The Clock Drawing Test as a Valid Screening Method for Mild Cognitive Impairment	共著	2004年6月	Dement Geriatr Cogn Disord 18	Yamamoto S, Mogi N, Umegaki H, Suzuki Y, Ando F, Shimokata H, Iguchi A	172頁～179頁
加齢及び全身性基礎疾患の聴力に及ぼす影響	共著	2004年5月	Otol Jpn 14(5)	内田育恵・中島務・新野直明・安藤富士子・下方浩史	708頁～713頁
Interactions between health and psychological changes in Japanese - the NILS-LSA	共著	2004年4月	Geriatrics and Gerontology International 4(4)	Shimokata H, Ando F, Fukukawa Y	S289頁～291頁
在宅介護における予防医学一 要介護度の悪化を防ぐ一	単著	2004年1月	日本老年医学会雑誌 41(1)		61頁～64頁
高齢者介護技術のTPO-入浴介助	単著	2004年12月	GPnet. 50(12)		26頁～31頁

高齢者の抑うつと脂肪摂取.	共著	2004年6月	臨床栄養 104(6)	安藤富士子・下方浩史	724頁～727頁
高齢者におけるサプリメントの利用状況	共著	2004年6月	臨床栄養 104(6)	今井具子・安藤富士子・下方浩史	769頁～772頁
体脂肪分布と合併症、身体活動量、フィットネスの関連	共著	2004年7月	臨床スポーツ医学 21(7)	下方浩史・小坂井留美・北村伊都子・安藤富士子	733頁～739頁
Interactions between health and psychological changes in Japanese -the NILS-LSA	共著	2004年4月	Geriatrics and Gerontology International. 4 (Suppl)	Shimokata H, Ando F, Fukukawa Y	S289頁～S291頁
老人医療の問題点	共著	2004年2月	現代医学 52(2)	井口昭久・河内尚明・遠藤英俊・梅垣宏行・安藤富士子	291頁～300頁
Differences in the relationship between lipid CHD risk factors and body composition in Caucasians and Japanese	共著	2005年2月	Int J Obes 29(2)	Iwao N, Iwao S, Muller DC, Koda M, Ando F, Shimokata H, Kobayashi F, Andres R	228頁～235頁
Association of polymorphisms of the androgen receptor and klotho genes with bone mineral density in Japanese women	共著	2005年1月	J Mol Med 83(1)	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	50頁～57頁
Relationships of muscle strength and power with leisure-time physical activity and adolescent exercise in middle-aged and elderly Japanese women	共著	2005年5月	Geriatrics and Gerontology International 5	Kozakai R., Doyo W. , Tsuzuku S., Yabe K., Miyamura M., Ikegami Y. , Ando F. , Niino N., Shimokata H	182頁～188頁
中年期地域住民における転倒の発生状況	共著	2005年4月	保健の科学. 47(4)	小笠原仁美・新野直明・安藤富士子・下方浩史	301頁～305頁
中高年者における余暇身体活動および青年期の運動経験と骨密度との関連	共著	2005年1月	総合保健体育科学 28(1)	小坂井留美・道用亘・安藤富士子・下方浩史・池上康男	1頁～7頁
中高年者における歩行動作の特徴	共著	2005年1月	総合保健体育科学 28(1)	道用亘・小坂井留美・安藤富士子・下方浩史・布目寛幸・池上康男	37頁～45頁
Cholecystokinin A receptor gene promoter polymorphism and intelligence.	共著	2005年3月	Ann Epidemiol 15(3)	Shimokata H, Ando F, Niino N, Miyasaka K, Funakoshi A	196頁～201頁
Association of a -1997G>T polymorphism of the collagen 1 $\alpha$ 1 gene with bone mineral density in postmenopausal Japanese women	共著	2005年1月	Hum Biol 77	Yamada Y, Ando F, Niino N, Shimokata H	27頁～36頁
Is there a relevant effect of noise and smoking on hearing? A population-based aging study	共著	2005年2月	Int J Audiol, 44(2)	Uchida Y, Nakashima T, Ando F, Niino N, Shimokata H	86頁～91頁
Relationship between astigmatism and aging in middle-aged and elderly Japanese	共著	2005年2月	Jpn J Ophthalmol. 49(2)	Asano K, Nomura H, Iwano M, Ando F, Niino N, Shimokata H, Miyake Y	127頁～133頁
友人との死別が成人期の抑うつに及ぼす影響—年齢および家族サポートの調節効果—	共著	2005年1月	心理学研究, 76(1)	福川康之・西田裕紀子・中西千織・坪井さとみ・新野直明・安藤富士子・下方浩史	10頁～17頁
Association of polymorphisms in CYP17, MTP, and VLDLR with bone mineral density in community-dwelling Japanese women and men	共著	2005年1月	Genomics 86	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	76頁～85頁
地域在住中高年者における転倒恐怖感の要因に関する縦断的検討	共著	2005年1月	日本未病システム学会雑誌, 11(1)	西田裕紀子・新野直明・小笠原仁美・安藤富士子・下方浩史	101頁～103頁
Serum total and free testosterone level of Japanese men: a population-based study	共著	2005年12月	Int J Urol 12	Okamura K, Ando F, Shimokata H	810頁～814頁
閉じこもりの心理的・社会的要因とその対策	単著	2005年10月	日本リハビリテーション学会誌, 42(10)		684頁～690頁
Association of a microsomal triglyceride transfer protein gene polymorphism with blood pressure in Japanese women	共著	2006年1月	Int J Mol Med 17(1)	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	83頁～88頁

Effect of smoking habit on age-related changes in serum lipids: cross-sectional and longitudinal analysis in a Japanese large cohort	共著	2006年1月	Atherosclerosis 185(1)	Kuzuya M, Ando F, Iguchi A, Shimokata H	183頁～199頁
Association of alcohol dehydrogenase 2*1 allele with liver damage and insulin concentration in the Japanese	共著	2006年1月	J Hum Genet 51(1)	Suzuki Y, Ando F, Ohsawa I, Shimokata H, Ohta S	31頁～37頁
四訂および五訂日本食品標準成分表を用いて算出した栄養素等摂取量推定値の比較	共著	2006年1月	日本栄養・食糧学会誌. 59(1)	今井具子・安藤富士子・新野直明・下方浩史	21頁～29頁
Association of polymorphisms in forkhead box C2 and perilipin genes with bone mineral density in community-dwelling Japanese individuals	共著	2006年1月	Int J Mol Med 18(1)	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	119頁～127頁
Klotho gene promoter polymorphism and cognitive impairment	共著	2006年2月	Geriatr Gerontol Int 6(2)	Shimokata H, Ando F, Fukukawa Y, Nishita Y	136頁～141頁
地域在住高齢者の抑うつに関連する要因－日常生活能力に着目して－	共著	2006年1月	日本未病システム学会雑誌 12(1)	西田裕紀子・新野直明・安藤富士子・下方浩史	101頁～104頁
栄養摂取と骨密度減少との関連への遺伝子の影響に関する研究	共著	2006年1月	日本未病システム学会雑誌 12(1)	下方浩史・安藤富士子・今井具子・中村美詠子	180頁～184頁
閉経女性の体力と骨密度の関連にMMP-12(A-82G)が及ぼす影響	共著	2006年1月	日本未病システム学会雑誌 12(1)	安藤富士子・小坂井留美・道用亘・下方浩史	188頁～191頁
Association of SH-2 containing Inositol 5'-phosphatase 2 gene polymorphisms and hyperglycemia	共著	2006年7月	Pancreas. 33	Ishida S, Funakoshi A, Miyasaka K, Shimokata H, Ando F, Taguchi S	63頁～67頁
Distortion product otoacoustic emissions and tympanometric measurements in an adult population-based study	共著	2006年4月	Auris Nasus Larynx,33(4)	Uchida Y, Ando F, Nakata S, Ueda H, Nakashima T, Niino N, Shimokata H	397頁～401頁
Dietary supplement use by community-living population in Japan: Data from the National Institute for Longevity Sciences Longitudinal Study of Aging (NILS-LSA)	共著	2006年6月	J. Epidemiol, 16	Imai T, Nakamura M, Ando F, Shimokata H	249頁～260頁
Age-related changes of postural stability and physical function in middle-aged and elderly Japanese	共著	2006年10月	Japanese Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, 55(Suppl)	Kozakai R, Doyo W, Ando F, Shimokata H	S227頁～230頁
Preproghrelin Leu72Met variant contributes to overweight in middle-aged men of a Japanese large cohort	共著	2006年7月	Intern J Obes 30	Kuzuya M, Ando F, Iguchi A, Shimokata H	1609頁～1614頁
老化に関する長期縦断疫学調査の概要と栄養疫学的側面からみた中高年の心理的健康	共著	2006年1月	基礎老化研究. 30(1)	安藤富士子・下方浩史	9頁～14頁
知能の加齢変化	共著	2006年7月	総合リハビリテーション 34(7)	安藤富士子・福川康之・西田裕紀子	643頁～648頁
中高年者の口腔保健と喫煙－喫煙は8020達成の阻害因子	共著	2006年5月	8020推進財団会誌 5	安藤富士子・下方浩史	94頁～95頁
Association of gene polymorphisms with blood pressure and the prevalence of hypertension in community-dwelling Japanese individuals	共著	2007年4月	Int J Mol Med 19	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	675頁～683頁

Age-specific change of prevalence of metabolic syndrome: Longitudinal observation of large Japanese cohort	共著	2007年4月	Atherosclerosis 191	Kuzuya M, Ando F, Iguchi A, Shimokata H	305頁～312頁
地域在住中高年齢者の骨代謝マーカーによる骨量減少/骨粗鬆症予測	共著	2007年1月	Osteoporosis Japan 15(1)	竹村真里枝、松井康素、原田敦、安藤富士子、下方浩史	28頁～32頁
Association of candidate gene polymorphisms with bone mineral density in community-dwelling Japanese women and men	共著	2007年7月	Int J Mol Med 19	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	791頁～801頁
Effects of the interaction between lean tissue mass and estrogen receptor $\alpha$ gene polymorphism on bone mineral density in middle-aged and elderly Japanese	共著	2007年2月	Bone 40	Kitamura I, Ando F, Koda M, Okura T, Shimokata H	1623頁～1629頁
一般地域住民における腹部肥満感受性因子の網羅的検討	共著	2007年1月	日本未病システム学会雑誌. 13(1)	安藤富士子・北村伊都子・甲田道子・大藏倫博・下方浩史	144頁～147頁
加齢とメタボリックシンドローム一年齢別にみたメタボリックシンドロームのウェスト基準値の妥当性	共著	2007年1月	日本未病システム学会雑誌. 13(1)	下方浩史・安藤富士子・北村伊都子・甲田道子・大藏倫博	136頁～138頁
地域在住中高年齢者・高齢者のエピソード記憶に関する横断的検討	共著	2007年1月	日本未病システム学会雑誌.13(1)	西田裕紀子・丹下智香子・福川康之・安藤富士子・下方浩史	74頁～77頁
No association between rs7566605 variant and obesity in Japanese	共著	2007年11月	Obes Res 15(11)	Kuzuya M, Ando F, Iguchi A, Shimokata H	2531頁～2534頁
地域在住中高年齢者の耐糖能と果物摂取量に関する横断的検討	共著	2007年2月	日本未病システム学会雑誌. 13(2)	安藤富士子・今井具子・北村伊都子・大塚礼・下方浩史	341頁～343頁
地域在住中高年齢者の生活の質-WHO QOL26を用いた検討	共著	2007年2月	日本未病システム学会雑誌.13(2)	西田裕紀子・丹下智香子・安藤富士子・下方浩史	308頁～310頁
地域在住男女高齢者の主観的幸福感に傷病体験が及ぼす影響の検討	共著	2007年2月	日本未病システム学会雑誌13(2)	丹下智香子・西田裕紀子・安藤富士子・下方浩史	305頁～307頁
高齢者の抑うつのおくみを探る-長期縦断疫学研究の結果から-	単著	2007年1月	MediCafe. 2(1)		9頁～10頁
「国立長寿医療センター研究所・老化に関する長期縦断疫学研究 (NILS-LSA)」～老化・老年病の発症・進行・予防策を明らかにするために～	単著	2007年1月	果樹試験研究推進協議会誌.4(1),		5頁
アンチエイジングのための食事	共著	2007年7月	クリニカルプラクティス、26(7)	今井具子、安藤富士子	536頁～540頁
「美味しい」食生活	単著	2007年11月	果実日本.62(11)		1頁
Bone mineral density in post-menopausal female subjects is associated with serum antioxidant carotenoids	共著	2008年2月	Osteoporosis International 19	Sugiura M, Nakamura M, Ogawa K, Ikoma Y, Ando F, Yano M	211頁～219頁
Association of genetic variants of MAOA and SH2B1 with bone mineral density in community-dwelling Japanese women	共著	2008年5月	Mol Med Rep 1	Yamada Y, Ando F, Shimokata H	269頁～274頁
疾患ゲノム研究の現況:骨粗鬆症	共著	2008年2月	Clinical Calcium 18(2)	下方浩史・安藤富士子	155頁～161頁
骨粗鬆症の危険因子	共著	2008年3月	Medicina 45(3)	安藤富士子・下方浩史	430頁～433頁
その他					
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					

学会活動	
1999年～現在	日本老年医学会評議員
2000年～現在	日本老年医学会指導医
1999年～現在	日本老年医学会広報委員会委員
2003年1月～現在	日本疫学会評議員
2006年6月～現在	日本抗加齢医学会評議員
2006年1月～現在	日本未病システム学会評議員
2007年10月～現在	日本応用老年学会理事
2006年4月～	日本公衆衛生学会査読委員
学会座長	
2004年9月25日	第15回 日本老年医学会東海地方会 一般演題座長
2005年6月17日	第42回 日本老年医学会総会 一般演題座長
2006年1月23日	第16回 日本疫学会学術総会 一般演題座長
2006年6月7日	第48回 日本老年医学会総会 一般演題座長
2006年6月7日	第48回 日本老年医学会総会 ミニレビュー司会
2006年9月9日	第17回 日本老年医学会東海地方会 一般演題座長
2006年11月25日	第6回 日本Men's Health医学会 ランチョンセミナー座長
2007年6月21日	第49回 日本老年医学会 一般演題座長
2007年7月21日	第7回 日本抗加齢学会シンポジウム12 「精神と加齢」 座長
2007年9月8日	第18回 日本老年医学会東海地方会 一般演題座長



所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 井口昭久	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートによりプリントをクイズ形式とした		2007年10月	学生たちの授業中における集中力を維持するために試みた。効果は大いに上がった		
2 作成した教科書、教材、参考書					
倫理MR継続教育用テキスト		1003年3月	高齢者終末期医療のあり方を解説し、事前指定所の持つ役割や安楽死の倫理などを解説した。		
内科学		2003年5月	老化には生理的老化と病的老化があるが老化について解説した		
老年医学		2003年7月	老年期終末期医療などを解説した		
看護のための最新医学講座		2005年8月	介護保険制度などを解説した。		
これからの老年学		2008年3月	介護からサイエンスまで老年学を分かりやすく解説した		
老年医学テキストブック		2008年5月	老年医学のテキストを監修		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
生活者として的高齢者(神戸看護研修会)		2007年7月4日	高齢者の人口動態、高齢者の病態などを講演した		
元気に老いる(名古屋老人クラブ)		2008年2月16日	老化、寿命などについて講演した		
高齢者の糖尿病(リュウマチ痛風財団)		2008年2月25日	高齢者の糖尿病の特徴について講演した		
元気に老いる(愛知ホスピス研究会)		2007年6月9日	高齢者の終末期医療について講演した		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
クリニックで糖尿病の臨床					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
1 理MR継続教育用テキスト	共著	2003年4月	エルゼビアサイエンスミクス	共著者:井口昭久、植村和正	188頁～195頁
2 内科学第8版	共著	2003年4月	朝倉書店	総編集者:杉本恒明, 小俣政男, 水野美邦編集者:伊藤貞嘉, 岡 芳知 他共著者:井口昭久 他	65頁～69頁
3 老年医学		2003年6月	朝倉書店	編集者:荻原俊男共著者:井口昭久 他	304頁～306頁
4 予防のための最新医学講座第17巻老人の医療 第2版	共著	2005年4月	中山書店	共著者:益田雄一郎、井口昭久	524頁～531頁
5 予防とつきあい方シリーズ老年病・認知症～長寿の秘訣～	共著	2005年3月	メディカルレビュー	監修:荻原俊男編集者:池上博司、楽木宏実共著者:益田雄一郎、井口昭久	258頁～259頁
論文					
1 Epigallocatechin-3-Gallate binding to MMP-2 inhibits gelatinolytic activity without influencing the attachment to extracellular matrix proteins but enhances MMP-2 binding to TIMP-2.	共著	2003年1月	Arch Biochem Biophys415巻1号	共著者:Cheng XW, Kuzuya M, Kanda S, Maeda K, Sasaki T, Wang QL, Tamaya-Mori N, Shibata T, Iguchi A	126頁～132頁
2 Green tea catechins inhibit the cultured smooth muscle cell invasion through the basement barrier.	共著	2003年1月	Atherosclerosis166巻1号	共著者:Maeda K, Kuzuya M, Cheng XW, Asai T, Kanda S, Tamaya-Mori N, Sasaki T, Shibata T, Iguchi A	
3 Plasma adiponectin plays an important role in improving insulin resistance with glimepiride in elderly type 2 diabetic subjects.	共著	2003年2月	Diabetes Care26巻2号	共著者:Tsunekawa T, Hayashi T, Suzuki Y, Matsui-Hirai H, Kano H, Fukatsu A, Nomura N, Miyazaki A, Iguchi A	285頁～289頁

4 Longitudinal follow-up study of adenoviral vector-mediated gene transfer of dopamine D2 receptors in the striatum in young, middle-aged, and aged rats: a positron emission tomography study.	共著	2003年2月	Neuroscience121巻2号	共著者:Umegaki H, Ishiwata K, Ogawa O, Ingram DK, Roth GS, Oda K, Kurotani S, Ikari H, Senda M, Iguchi A	479頁～486頁
5 The Age-Associated Changes of Dopamine-Acetylcholine Interaction in the Striatum.	共著	2003年3月	Exp. Gerontol.38/39巻	共著者:Kurotani S, Umegaki H, Ishiwata K, Suzuki Y, Iguchi A	1009頁～1013頁
6 Deficiency of the cysteine protease cathepsin S impairs microvessel growth	共著	2003年5月	Circulation Research92巻5号	共著者:Shi GP, Sukhova GK, Kuzuya M, Ye Q, Du J, Zhang Y, Pan JH, Lu ML, Cheng XW, Iguchi A, Perrey S, Lee AM, Chapman HA, Libby P	493頁～500頁
7 Deficiency of gelatinase A suppresses smooth muscle cell invasion and development of experimental intimal hyperplasia.	共著	2003年11月	Circulation108巻11号	共著者:Kuzuya M, Kanda S, Sasaki T, Tamaya-Mori N, Cheng XW, Itoh T, Itohara S, Iguchi A	1375頁～1381頁
8 Increased expression of elastolytic cysteine proteases, cathepsins S and K, in the neointima of balloon-injured rat carotid arteries.	共著	2004年1月	Am J Pathol164巻1号	共著者:CHENG Xian Wu, Kuzuya M, Sasaki T, Arakawa K, Kanda S, Sumi D, Koike T, Maeda K, Tamaya-Mori N, SHI Guo-Ping, Saito N, Iguchi A	243頁～251頁
9 緩和医療の行われていない療養型病床群2施設における痴呆性高齢者の終末期医療に関する研究	共著	2004年1月	日本老年医学会雑誌41巻1号	共著者:平川仁尚、益田雄一郎、木股貴哉、植村和正、葛谷雅文、井口昭久	99頁～104頁
10 The relationship between functional disability and depressive mood in Japanese older adult inpatients.	共著	2004年2月	Journal of Geriatric Psychiatry and Neurology17巻2号	共著者:Onishi J, Umegaki H, Suzuki Y, Uemura K, Kuzuya M, Iguchi A	93頁～98頁
11 Gene transfer of endothelial NO synthase, but not eNOS, plus inducible NOS regressed atherosclerosis in rabbits.	共著	2004年2月	Cardiovasc Res61巻2号	共著者:Hayashi T, Sumi D, Packiasamy AR Juliet, Matsui-Hirai H, Asai-Tanaka Y, Kano H, Fukatsu A, Tsunekawa T, Miyazaki A, Iguchi A, Ignarro LJ	339頁～351頁
12 Green tea catechins inhibit neointimal hyperplasia in a rat carotid arterial injury model by TIMP-2 overexpression.	共著	2004年3月	Cardiovasc Res62巻3号	共著者:CHENG Xian Wu, Tamaya-Mori N, Koike T, Maeda K, Nishitani E, Iguchi A	594頁～602頁
13 Long-term prognosis and satisfaction after percutaneous endoscopic gastrostomy in a general hospital.	共著	2004年4月	Geriatrics and Gerontology International4巻	共著者:Onishi J, Masuda Y, Kuzuya M, Ichikawa M, Hashizume M, Iguchi A	127頁～131頁
14 Pitavastatin, a 3-Hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme A Reductase Inhibitor, Blocks Vascular Smooth Muscle Cell Populated-Collagen Lattice Contraction.	共著	2004年6月	J Cardiovasc Pharmacol43巻6号	共著者:Kuzuya M, CHENG Xian Wu, Sasaki T, Tamaya-Mori N, Iguchi A	808頁～814頁
15 Effects of home massage rehabilitation therapy for the bed-ridden elderly: a pilot trial with a three-month follow-up.	共著	2005年1月	Clinical Rehabilitation19巻1号	共著者:Hirakawa Y, Masuda Y, Kimata T, Uemura K, Kuzuya M, Iguchi A	20頁～27頁
16 Philadelphia Geriatric Center morale scale in a Japanese nursing home for the elderly.	共著	2005年1月	Geriatrics and Gerontology International5巻1号	共著者:Onishi J, Masuda Y, Suzuki Y, Endo H, Iguchi A	71頁～73頁
17 Influence of behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) and environment of care on caregivers' burden.	共著	2005年2月	Archives of Gerontology and Geriatrics41巻2号	共著者:Onishi J, Suzuki Y, Umegaki H, Nakamura A, Endo H, Iguchi A	159頁～168頁

18 Predictive model for assessing cognitive impairment by quantitative electroencephalography	共著	2005年3月	Cognitive and Behavioral Neurology18巻3号	共著者: Onishi J, Suzuki Y, Yoshiko K, Hibino S, Iguchi A	179頁～184頁
19 全国の医学科・看護学科における終末期医療・看護教育の実態調査	共著	2005年5月	日本老年医学会雑誌42巻5号	共著者: 平川仁尚、益田雄一郎、植村和正、葛谷雅文、野口美和子、木股貴哉、井口昭久	540頁～545頁
20 Mechanisms of the inhibitory effect of epigallocatechin-3-gallate on cultured human vascular smooth muscle cell invasion.	共著	2005年9月	Arteriosclerosis Thrombosis and Vascular Biology25巻9号	共著者: Cheng XW, Kuzuya M, Nakamura K, Liu Z, Di Q, Hasegawa J, Iwata M, Murohara T, Yokota M, Iguchi A	1864頁～1870頁
21 L-Citrulline and L-arginine supplementation retards the progression of high-cholesterol-diet-induced atherosclerosis in rabbits.	共著	2005年11月	Proceedings of the National Academy Sciences of the United States of America102巻	共著者: Hayashi T, Juliet PA, Matsui-Hirai H, Miyazaki A, Fukatsu A, Funami J, Iguchi A, Ignarro LJ	13681頁～13686頁
22 Behavioral, Psychological, and Physical Symptoms in Group Homes for the Older Adults with Dementia.	共著	2006年1月	International Psychogeriatrics18巻1号	共著者: Onishi J, Suzuki Y, Umegaki H, Endo H, Kawamura T, Imaizumi M, Iguchi A	75頁～86頁
23 Endothelial cellular senescence is inhibited by nitric oxide: implications in atherosclerosis associated with menopause and diabetes.	共著	2006年1月	Proc Natl Acad Sci U S A103巻45号	共著者: Hayashi T, Matsui-Hirai H, Miyazaki-Akita A, Fukatsu A, Funami J, Ding QF, Kamalanathan S, Hattori Y, Ignarro LJ, Iguchi A	17018頁～17023頁
24 Localization of Cysteine Protease, Cathepsin S, to the Surface of Vascular Smooth Muscle Cells by Association with Integrin $\alpha v \beta 3$ .	共著	2006年2月	American Journal of Pathology168巻2号	共著者: Cheng XW, Kuzuya M, Nakamura K, Di Q, Liu Z, Sasaki T, Kanda S, Jin H, Shi GP, Murohara T, Yokota M, Iguchi A	685頁～694頁
25 Underappreciated predictors for post discharge mortality in acute hospitalized oldest-old patients.	共著	2006年2月	Gerontology52巻2号	共著者: Iwata M, Kuzuya M, Kitagawa Y, Suzuki Y, Iguchi A	92頁～98頁
26 Selective iNOS inhibitor, ONO1714 successfully retards the development of high-cholesterol diet induced atherosclerosis by novel mechanism.	共著	2006年2月	Atherosclerosis187巻2号	共著者: Hayashi T, Matsui-Hirai H, Fukatsu A, Sumi D, Kano-Hayashi H, Rani P JA, Iguchi A	316頁～324頁
27 Factors associated with cognitive impairment in elderly patients with diabetes mellitus.	共著	2006年3月	Journal of American Geriatric Society54巻3号	共著者: Suzuki M, Umegaki H, Heda S, Mogi N, Iguchi A	558頁～559頁
28 The nutritional status of frail elderly with care needs according to the mini-nutritional assessment	共著	2006年3月	Clinical Nutrition25巻	共著者: Izawa S, Kuzuya M, Okada K, Enoki H, Koike T, Kanda S, Iguchi A	962頁～967頁
29 End-of-life care at group homes for patients with dementia in Japan Findings from an analysis of policy-related differences	共著	2006年3月	Archives of Gerontology and Geriatrics43巻3号	共著者: Hirakawa Y, Masuda Y, Uemura K, Kuzuya M, Kimata T, Iguchi A	962頁～967頁
30 高齢重度認知症患者および高齢進行癌患者の在宅終末期ケアに関する研究 ～在宅終末期ケアを推進する診療所群における前向き研究から～	共著	2006年3月	日本老年医学会雑誌43巻3号	共著者: 平川仁尚、益田雄一郎、葛谷雅文、井口昭久、旭多貴子、植村和正	355頁～360頁
31 Underuse of medications for chronic diseases among the oldest of community-dwelling Japanese frail elderly.	共著	2006年4月	Journal of the American Geriatrics Society54巻4号	共著者: Kuzuya M, Masuda Y, Hirakawa Y, Iwata M, Enoki H, Hasegawa J, Chen XW, Iguchi A	598頁～605頁

32 Effect of emergency percutaneous coronary intervention on in-hospital mortality of very elderly (80+ years of age) patients with acute myocardial infarction.	共著	2006年5月	International Heart Journal47巻5号	共著者:Hirakawa Y、Masuda Y、Kuzuya M、Kimata T、Iguchi A、Uemura K	663頁～669頁
33 Effect of MMP-2 deficiency on atherosclerotic lesion formation in ApoE-deficient mice.	共著	2006年5月	Arteriosclerosis Thrombosis and Vascular Biology26巻5号	共著者:Kuzuya M、Nakamura K、Sasaki T、Cheng XW、Itohara S、Iguchi A	1120頁～1125頁
34 Modulating role of estradiol on arginase II expression in hyperlipidemic rabbits as an atheroprotective mechanism.	共著	2006年5月	Proc Natl Acad Sci U S A103巻27号	共著者:Hayashi T、Esaki T、Sumi D、Mukherjee T、IguchiAChaudhuri G	10485頁～10490頁
35 ElastolyticCathepsin Induction/Activation System Exists in Myocardium and Is Upregulated in Hypertensive Heart Failure	共著	2006年5月	Hypertension48巻5号	共著者:Cheng XW、Obata K、Kuzuya M、Izawa H、Nakamura K、Asai E、Nagasaka T、Saka M、Kimata T、Noda A、Nagata K、Hai Jin、Guo-Ping Shi、Iguchi A、Murohara T、Yokota M	979頁～987頁
36 A simple method of plaque rupture induction in apolipoprotein E-deficient mice	共著	2006年6月	Arteriosclerosis Thrombosis and Vascular Biology26巻6号	共著者:Sasaki T、Kuzuya M、Nakamura K、Cheng XW、Shibata T、Sato K、Iguchi A	1304頁～1309頁
37 Differences in inhospital mortality between men and women with acute myocardial infarction undergoing percutaneous coronary intervention (PCI)in Japan: Tokai Acute Myocardial Infarction Study (TAMIS)	共著	2006年6月	American Heart Journal151巻6号	共著者:Hirakawa Y、Masuda Y、Uemura K、Kuzuya M、Kimata T、Iguchi A	1271頁～1275頁
38 Evaluation of gender differences in caregiver burden in home care: Nagoya Longitudinal Study of the Frail Elderly (NLS-FE)	共著	2006年6月	PSYCHOGERIATRICS6巻	共著者:Hirakawa Y、Kuzuya M、Masuda Y、Enoki H、Iwata M、Hasegawa J、Iguchi A	91頁～99頁
39 Day Care Service Use Is Associated with Lower Mortality in Community-Dwelling Frail Older People	共著	2006年9月	J Am Geriatr Soc54巻9号	共著者:Kuzuya M、Masuda Y、Hirakawa Y、Iwata M、Enoki H、Hasegawa J、Iguchi A	1364頁～1371頁
40 Functional Recovery of the Striatal Cholinergic System in Aged Rats by Adenoviral Vector-mediated Gene Transfer of Dopamine D2 Receptor	共著	2006年10月	Mech Ageing Dev.127巻10号	共著者:Umegaki HYamaguchi YIshiwata、K、Roth GS、Ingram DK、Iguchi A	813頁～815頁
41 Attitudes toward disclosing the diagnosis of dementia in Japan	共著	2006年12月	Int. Psychogeriatr12巻	共著者:Umegaki H、Onishi J、Suzuki Y、Endo H、Iguchi	1頁～13頁
42 Nitric oxide (NO) is a new clinical biomarker of survival in the elderly patients and its efficacy might be nearly equal to albumin.	共著	2007年1月	Nitric Oxide16巻1号	共著者:Osawa M、Hayashi T、Nomura H、Funami J、Miyazaki A、Ignarro LJ、Iguchi A	157頁～163頁
43 Which two questions of Mini-Mental State Examination (MMSE) should we start from?	共著	2007年1月	Archives of Gerontology and Geriatrics44巻	共著者:Onishi J、Suzuki Y、Umegaki H、Kawamura T、Imaizumi M、Iguchi A	43頁～48頁
44 認知症診療に対する態度に関する医師会会員へのアンケート調査 地域における認知症の診療体制の確立のために	共著	2007年1月	日本老年医学会雑誌44巻1号	共著者:梅垣宏行、鈴木裕介、葛谷雅文、井口昭久	102頁～106頁
45 老人保健施設における投薬内容の現状	共著	2007年1月	日本老年医学会雑誌44巻1号	共著者:長谷川潤、葛谷雅文、大西丈二、鈴木裕介、井口昭久	132頁

46 訪問看護サービス利用者の身体計測指標と生命予後についてthe Nagoya Longitudinal Study of Frail Elderly(NLS-FE)より	共著	2007年3月	日本老年医学会雑誌44巻2号	共著者:榎裕美,葛谷雅文,益田雄一郎,平川仁尚,岩田充永,井澤幸子,長谷川潤,井口昭久	212頁~218頁
47 終末期医療・看護に関する授業と医学生の死生観との関係	共著	2007年3月	日本老年医学会雑誌44巻2号	共著者:平川仁尚,益田雄一郎,葛谷雅文,井口昭久,植村和正	247頁~250頁
48 メタボリックシンドローム有病率の加齢変化と過去16年間の有病率の動向	共著	2007年5月	内分泌・糖尿病科24巻5号	共著者:葛谷雅文,安藤富士子,井口昭久,下方浩史	522頁~528頁
49 終末期医療・看護教育に関する医学生の識調査	共著	2007年5月	日本老年医学会雑誌44巻3号	共著者:平川仁尚,益田雄一郎,葛谷雅文,井口昭久,植村和正	380頁~383頁
50 脳皮質下虚血病変の臨床的意義 認知症における白質病変と精神運動速度の関連	共著	2007年5月	日本老年医学会雑誌44巻3号	共著者:葛谷雅文,鈴木裕介,長谷川潤,井口昭久	328頁~330頁
51 ADAS単語カードを用いた遅延再生課題の軽度認知機能低下者識別に対する有用性:外来もの忘れ検査利用者を対象とした検討	共著	2007年7月	日本老年医学会雑誌44巻4号	共著者:河野直子,梅垣宏行,鈴木裕介,山本さやか,茂木七香,井口昭久	490頁~496頁
52 療養型病床群1施設における心肺蘇生および急性期病院への転院に関する家族の希望	共著	2007年7月	日本老年医学会雑誌44巻4号	共著者:平川仁尚,益田雄一郎,葛谷雅文,井口昭久,植村和正	497頁~502頁
53 Pitavastatin:efficiency and safety in intensive lipid lowering	共著	2007年8月	Exper Opin. Phrmachothr. 14	共著者:T. Hayasi, Y. Yokote .A.iguchi	2315頁~2327頁
54 急性心筋梗塞で入院した認知症高齢者の管理と予後 大規模多施設研究TAMISの二次解析結果から	共著	2007年9月	日本老年医学会雑誌44巻5号	共著者:平川仁尚,益田雄一郎,葛谷雅文,井口昭久,植村和正	606頁~610頁
55 老年科における外来認知症診療の現状と展望 名古屋大学医学部附属病院老年科「外来もの忘れ検査」の利用統計から	共著	2007年9月	日本老年医学会雑誌44巻5号	共著者:河野直子,梅垣宏行,茂木七香,山本さやか,鈴木裕介,井口昭久	611頁~618頁
56 Association between feeding via percutaneous endoscopic gastrostomy and low level of caregiver burden.	共著	2007年9月	J Am Geriatr.55(9)	共著者:Enoki H,Hirakawa Y,Masuda Y,Iwata M,Hasegawa J,Izawa S,Iguchi A,Kuzuya M	1484頁~1486頁
57 Nitric oxide metabolites are associated with survival in older patients.	共著	2007年9月	J Am Geriatr Soc.55(9)	共著者:Hayashi T,Nomura H,Osawa M,Funami J,Miyazaki A,Iguchi A	1398頁~1403頁
58 Anthropometric measurements of mid-upper arm as a mortality predictor for community-dwelling Japanese elderly: the Nagoya Longitudinal Study of Frail Elderly (NLS-FE).	共著	2007年10月	Clin Nutr.26(5)	共著者:Enoki H,Kuzuya M,,Masuda Y,Hirakawa Y,Iwata M,Hasegawa J,Izawa S,Iguchi A,	597頁~604頁
59 No association between rs7566605 variant and being overweight in Japanese	共著	2007年11月	Obesity (Silver Spring)15(11)	共著者:Kuzuya M,Ando F,Iguchi A,Shimokata H	2531頁~ 2534頁
60 デイケア(サービス)利用と上腕筋面積との関連 the Nagoya Longitudinal Study of Frail Elderly(NLS-FE)より	共著	2007年12月	栄養-評価と治療24巻6号	共著者:榎裕美,平川仁尚,井澤幸子,岩田充永,長谷川潤,井口昭久,葛谷雅文	558頁~562頁
61 Lack of body weight measurement is associated with mortality and hospitalization in community-dwelling frail elderly	共著	2007年12月	Clin Nutr.26(6)	共著者:Izawa S,Enoki H,Hirakawa Y,Masuda y,Iwata M,Hasegawa J,Iguchi A,Kuzuya M	764頁~770頁
62 Angiogenic activity of bFGF and VEGF suppressed by proteolytic cleavage by neutrophil elastase.	共著	2007年12月	Biochem Biophys Res Commun.364(2)	共著者:Ai S,Cheng XW,Inoue A,Nakamura K,Okumura K,Iguchi A,Murohara T,Kuzuya M	395頁~401頁
63 Impact of lipid levels in elderly diabetic individuals	共著	2008年2月	Circulation Journal72巻	共著者:T. Hayashi, S. Kawasima, H. Itoh, N. Ymada, A. Iguchi et al.	218頁~225頁
64 アンチエイジング	単著	2008年2月	日本医師会雑誌136巻2月		226頁~227頁

65 Factors associated with lower Mini Mental State Examination scores in elderly Japanese diabetes mellitus patients.	共著	2008年7月	Neurobiol Aging29(7)	共著者:Umegaki H,limurro S,Kaneko T,Araki A,Sakurai T,Ohashi Y,Iguchi A	1022頁～1026頁
---	----	---------	----------------------	--	-------------

その他

1 老年学の提唱	単著	2004年7月	老年医療の歩みと展望		292頁～294頁
2 老年医学の展望	座談会	2007年1月	Geriatric Medicine45巻1号	井口昭久, 大島伸一, 佐々木英忠, 折茂肇	59頁～70頁
3 高齢者のターミナルケアの課題	単著	2007年2月	GPネット2月2号		13頁～17頁
4 高齢者を取り巻く諸問題 医療と介護保険制度改革の動向】高齢者の尊厳と終末期医療	単著	2007年2月	Geriatric Medicine45巻2号		159頁～163頁
5 老人が元気に暮らすための健康知識 老年で元気に暮らすには	単著	2007年5月	日本老年医学会雑誌44巻 Suppl.		34頁
6 知っておくべき新しい診療理念 アンチエイジング	単著	2008年2月	日本医師会雑誌136巻11号		2226頁～2227頁
7 Aさんへの手紙	単著	2008年2月	臨床と研究85巻		1頁～2頁

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1981年～現在	神経内分泌学会評議委員
1986年～現在	日本肥満学会評議委員
1986年5月～現在	内分泌学会評議委員
1987年5月～現在	糖尿病学会評議委員
1994年11月～現在	認知症学会評議委員
1996年6月～現在	老年医学会理事
1996年12月～現在	認知症学会理事
1997年7月～現在	動脈硬化学会評議委員
1998年5月～現在	糖尿病合併症学会評議委員
1999年1月～現在	老年学会理事
2001年4月～現在	愛知県介護保険審査会会長
2002年4月～現在	老年精神医学会評議委員
2003年1月～2005年3月	厚生労働省長寿科学総合中間、事後評価委員
2004年2月～現在	名古屋市高齢者施策推進協議会会長
2005年4月～現在	厚生労働省長寿科学、事前評価委員

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 伊藤勝也	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
精神障害当事者、現場精神保健福祉士との交流の試み		2005年12月 2006年1月 2007年7月	精神保健福祉に関心はあっても、精神障害者との接触体験のない学生が大半であり、授業内容の理解のネックにもなっている。そうした現状をふまえ、当事者を招き体験を聞くとともに、担当精神保健福祉士と当事者との対話を通じて実践紹介を試みた。演習等の方式として定着を企ていく予定である。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
基礎演習テキストの作成(共同執筆)		2003年4月	新入生向けテキストとして、精神障害者の実情の紹介及び支援の一端を担う精神保健福祉士の役割のあらましを紹介した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
精神保健福祉と実習先との連携の強化		2004年4月～2006年3月	精神保健福祉士養成の上で実習は以後の自立の出发点として重要な位置付けを持つが、その在り方については未確立な点も多々ある。加えて、現場は「障害者自立支援法」の施行に伴い、変革の時期を迎えており、その推移を現場と大学が共有することなしには、実習者との意見交換を施設毎に実施した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
第8回保健所公衆衛生全国研究交流会 於労働会館(名古屋市)		2006年6月	分科会『自立支援法』助言者		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～現在	精神保健福祉法改正による市町村への一部移管に伴う支援 愛知県日進市への支援 精神保健福祉法(3回/月)相談者 関係者連絡会議での助言(市福祉課・社協 保健センターヘルパー他 1回/月)				
2002年～03年度	愛知県一宮 安城 津島保健所館内市町村職員研修講師 「地域精神保健福祉の進め方」				
2002年度	精神障害者小規模授産施設『ゆったり工房』				
2003年4月～現在	社会福祉法「あじさいの会」理事 精神障害者に関連する法人の諸事業への支援				

所属 医療福祉学部	職名 講師	氏名 伊藤 照子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
症例ビデオの使用およびシミュレーションの実施		2008年4月	視覚障害者(児)への支援方法を学ぶうえで障害者の立場を理解することは重要である。そのために症例ビデオの使用および弱視擬似体験を実施する。また、視覚障害者にゲストスピーカーとして話をしてもらう。		
実習科目において 少人数に対する技術指導 異常者のシミュレーション ロールプレアの導入		2008年4月	技術指導を少人数に分けて行うことにより、きめ細かい指導ができる。 視力、視野、眼位検査等で異常者の検査を理解するために被験者に異常環境を負荷して行う。 現地実習にそなえ、ロールプレアを導入する。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
なし					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
なし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
なし					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
The remnants of crossed fixation observed in teenaged children with esotropia.	共	2004年4月	Binocula Vis Strabismus 2004; 19(2)	Hirai T Amano E Ito T Tsuzuki K Miyake Y	88-94
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 伊藤春樹	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
(1)社会福祉現場実習の新システム導入			2004年度—ITを利用してテレビ電話会談システムを導入準備して日常的に大学教員の学生への指導を強化する方向性を模索した(システム完成)。また、発表会に現場の指導者が参加するシステムの完成によって、学生の実習教育を充実させた。		
(2)小学生の習熟度別学習支援の導入		2003年4月～2006年3月	社会福祉現場実習の教育に健常者の子どもがどのように学習するかを研究、観察するために、ボランティア活動として小学校の学習に参加することを通して、障害者の理解をすすめることにある程度の効果をもたらした。これをノーマライゼーションの理解のために導入した。生涯学習としてボランティア活動の発表と検討をさせることによって、授業を展開した。		
(3)ボランティア活動を授業のテーマに導入		2004年4月～2005年3月	人間総合研究Ⅱという授業で、知的障害者のレクリエーション活動を組織するための方策と実践を展開。授業時間内に障害者の次のスポーツレクリエーションをどのように展開するか議論するとともに、前回の報告と反省。最終的に報告書として、40ページほどのものをまとめた。この全てが授業展開の基本になっている。		
(4)e-Learningを用いた社会福祉国家試験対策プログラムの作成。		2007年～現在	社会福祉士の国家試験合格者が非常に低いことから、学生の自主的学習を管理指導するという視点を導入して、合格率の向上を図るものである。システムとしてのe-Learningはほぼ完成。		
(5)地域貢献を取り入れた有効な教育方法の研究—介護保険分析を通して		2007年～現在	介護保険制度の研究をする一方、この制度に伴う分析を通して地域貢献を目指すもので、大学院教育の中で地域貢献のあり方を専攻として、総合的に研究しようとするものである。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
(2)「社会福祉援助技術」演習・現場実習ガイドサブノート		2004年9月1日	「社会福祉援助技術」演習と現場実習を関連させながらの指導体制を確立するために、学生への説明と学生の演習、実習に望むときの姿勢を明確にした。(共著 浦澤正三、伊藤春樹、加藤春樹、橋本伸也)		
(3)「社会福祉援助技術」演習・現場実習ガイドサブノート Tr.		2006年3月1日	2004年度から実施した中での問題点を明確にして、さらに充実したものとした。(共著 浦澤正三、伊藤春樹、加藤春樹、橋本伸也)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
介護保険分析—小樽市の過去五年間のデータから介護予防を考える—	共	2005年10月	筒井書店	伊藤春樹・橋本伸也	(10頁～60頁、68頁～94頁)(94頁)
論文					
E-mailによるレポート提出の利点と欠点	単	2003年3月	藤女子大学人間生活学部人間生活学科『人間生活学研究』第10号		1頁～12頁
新しい実習系他の中での事例研究—痴呆性老人に対する関わりを中心に—	共	2003年12月	藤女子大学紀要 第二部41号	伊藤春樹、加藤春樹、堀井泰明	15頁～31頁
『ふれあいまちづくり事業』の考察—地域福祉政策としての実践評価をととして—	共	2004年3月	藤女子大学人間生活学部人間生活学科『人間生活学研究』第11号	伊藤春樹、舟木幸弘	1頁～19頁

痴呆介護と人権—福祉の視点から	単	2006年12月	人間学紀要、上智人間学会 34号		29頁～49頁
登別市における第二被保険者の介護保険受給者の現状分析	共	2006年12月	藤女子大学紀要 第二部 41号	伊藤春樹、橋本伸也	
登別市の人口と介護保険事業	共	2005年3月	藤女子大学人間生活学部人間生活学科『人間生活学研究』第12号	伊藤春樹、橋本伸也	11頁～26頁
要介護度の変化から見た一つの現実—介護保険の認定結果から—	共	2005年3月	藤女子大学人間生活学部人間生活学科『人間生活学研究』第13号	伊藤春樹、橋本伸也	27頁～51頁
登別市における「福祉のまちづくり推進」への調査分析	共	2005年12月	藤女子大学紀要 第二部 42号	伊藤春樹、鳥居一頼他3名	33頁～52頁
苫小牧市における介護保険分析	単	2005年12月	藤女子大学紀要 第二部 43号		53頁～74頁
介護予防に期待するもの	単	2006年1月	藤女子大学福祉研究所年報 Vol. 1. No. 1		25頁～38頁
発達支援プログラムと地域療育診断会議のあり方—十勝管内市町村の実態についての考察から—	共	2006年3月	北海道ノーマライゼーション研究No. 18	伊藤春樹、船木幸弘、伊藤則博	83頁～118頁
「介護保険分析を通じた今回の改正の影響に関する一考察—北海道苫小牧市を事例として—」	単	2006年11月	日本介護経営学会研究論文		Web上での発表
過去5年間の介護保険データから「死」をみつめて	単	2006年12月	人間学紀要上智人間学会 36号		79頁～97頁
介護保険分析にみる性差	共	2007年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第3号	伊藤春樹、佐々木政人	11頁～25頁
釧路市における介護保険分析	共	2007年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第4号	伊藤春樹、田引俊和	71頁～78頁
介護予防と介護保険制度	単	2008年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第4号		1頁～13頁
カトリック社会福祉施設・機関の使命・役割について	共	2008年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第4号	伊藤春樹、神波幸子、春見静子、谷口純世	25頁～44頁
その他					
高齢者の医療と福祉	単	2000年12月	ボランティアネットワーク		3頁
北海道ボランティアコーディネーター実態調査報告書—2004年—	共	2004年8月	NPO法人北海道ボランティアコーディネーター協会		全72頁
現代社会に必要な福祉とは？—助ける者、助けられる者の立場から—	単	2004年12月	札幌生と死を考える会『希』Vol.21		5頁～7頁
非該当と認定されることの意味	単	2005年11月24日	介護新聞		
要介護1などの増加する意味	単	2005年12月1日	介護新聞		
申請者に占める男女割合の意味	単	2005年12月8日	介護新聞		
要介護5の意味するもの	単	2005年12月15日	介護新聞		
初回認定結果が意味するもの	単	2005年12月22日	介護新聞		
更新申請が意味するもの	単	2006年1月1日	介護新聞		
施設サービスの意味するもの	単	2006年1月12日	介護新聞		
訪問、通所サービスの意味するもの	単	2006年1月19日	介護新聞		
要介護度別に見た介護サービスの意味するもの（要支援・用介護1）	単	2006年1月26日	介護新聞		
要介護度別に見た介護サービスの意味するもの②（要介護2）	単	2006年2月9日	介護新聞		
要介護度別に見た介護サービスの意味するもの③（要介護3）	単	2006年2月16日	介護新聞		

要介護度別に見た介護サービスの意味するもの②（要介護4, 5）	単	2006年2月23日	介護新聞	
要介護1や要介護2、認定者の予後が意味するもの	単	2006年3月9日	介護新聞	
要介護3、要介護4や要介護5、認定者の予後が意味するもの	単	2006年3月23日	介護新聞	
介護の意味するもの	単	2006年3月30日	介護新聞	
話速と聴解力に関する研究	単	2006年3月	2005年度「専修学校教育重点支援プラン事業実施報告書	全91頁
高齢者福祉施設における介護予防プランの実態について—生活モデル型支援プランの確立に向けて—	共	2006年3月	札幌市老人福祉施設協議会報告書—2004年度・2006年度	全65頁
介護保険の分析—「第4期千歳市高齢者保健福祉計画・千歳市介護保険事業計画」の基礎資料として—	単	2008年3月	千歳市からの委託研究報告書	全50頁
元気力回復プラン—介護保険の分析—	共	2008年3月	福井県、介護保険適正化計画	全53頁
介護保険分析報告書(越前市)	単	2008年3月	福井県越前市	全87頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	日本社会福祉学会会員
2003年4月～現在	日本生命倫理学会会員
2003年4月～2006年3月	社会福祉法人「ノマド会」理事・評議員
2003年4月～現在	日本カトリック教育学会
2003年4月～2006年3月	北海道沙流郡門別町「情報公開・個人情報保護審査会」委員
2003年4月～2005年12月	社会福祉法人「藤の園」理事・評議員
2003年4月～現在	上智人間学会
2003年4月～2004年3月	石狩市生涯学習推進協議会委員
2003年4月～2006年3月	「札幌カリタス」運営委員
2003年4月～2007年3月	総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度」専門評価委員
2003年4月～2006年3月	北海道薬科大学「臨床研究倫理委員会」委員
2003年8月～2006年3月	社会福祉法人「はるにれの里」理事
2003年8月～現在	社会福祉法人「はるにれの里」評議員
2005年4月～2007年4月	NPO法人「札幌マック」理事・評議員
2005年4月～現在	日本地域福祉学会会員
2005年10月～現在	日本介護経営学会会員
2005年11月～2007年3月	苫小牧包括支援センター運営委員会アドバイザー
2005年12月～現在	千歳市包括支援センター運営委員会委員長
2007年4月～2008年1月	学校法人聖母の家学園 幹事
2007年5月～現在	学校法人メリノール学園 理事、評議員
2008年1月～現在	学校法人聖母の家学園 理事、評議員

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 井脇貴子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
授業アンケート結果を参考にした授業内容の改善	2006年6月～	年2回実施されている授業アンケートの結果を参考にし、授業内容を改善した。	
「聴覚障害」の授業における実践的な内容への取り組み	2004年4月～	実際の臨床体験、障がい者の心理と不利益等の実際のエピソード等を折り返すことで、講義だけでは理解しにくい授業内容の理解を深めた。	
実体験を伴う授業	2005年4月～	聴覚障害を学ぶ前には耳栓を利用した擬似的聴覚障害を、視覚聴覚二重障害を学ぶ前には耳栓・アイマスクを利用した擬似的視覚聴覚二重障害を体験してもらい、授業内容の実際的な理解の促進をはかった。	
聴覚障害をシュミレートした音像の活用	2005年4月～	高度感音性難聴者が人工内耳を装用した場合のような「きこえ」が獲得できるのかを、フィルターを使用して作成した音像を用いて理解の促進をはかった。	
ゲストスピーカーの招聘	2005年4月～	工学系の講師を招き物理学側面から聴覚検査の信頼性と妥当性についての講義の機会をもち理解を深めた。また視覚聴覚二重障がい者を講師として招き、移動及びコミュニケーション等について体験談を聞くことにより学習の内容を深めた。	
国家試験問題の利用	2004年4月～	担当教科において国家試験問題を利用して学習内容の般化と国家試験の下準備にあてた。	
電子メールの活用	2005年4月～	オフィス・アワーや諸連絡はメーリングリストやダイレクトメールを利用し、連絡の簡素化と円滑化をはかった。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
臨床場面を編集したアルバム教材の作成	2004年10月	小児の入院、手術、退院の様子を時系列にそって写真と日記で説明した教材を作成し、臨床場面の理解促進をはかった。	
臨床場面を具体的に示すビデオの作成	2004年10月	人工内耳を装用する患者さんの初診から手術、そしてリハビリテーションまでのプロセスをビデオを制作して臨床上の流れの理解の促進につとめた。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
(学内における実践)			
言語聴覚学臨床セミナーの開催	2005年2月～2007年	本専攻の歴史がまだ浅いため言語聴覚士の職務の実際について新入生の理解を深めイメージ化を促進するため、現業に携わっている言語聴覚士を講師として招いて講演を行った。	
2006年度医療福祉学部主催授業改善・情報交流会で模擬授業	2006年11月1日	学生にわかりやすい教授法をテーマとして「聴覚障害と聴覚補償、そして聴覚障害学生の支援について」という題でアニメーション及びパワーポイントを使用して教員を対象とした公開模擬授業を担当した。	
(学外における実践)			
和歌山県立特殊教育中堅者研修会講師	2003年6月5日	「聴覚障害児の教育」－人工内耳について－というタイトルで聴覚障害児と教育の重要性について講演した。	
第5回近畿教育オーソロジー研究協議会講演会・講習会講師(於大阪)	2003年7月19日～20日	「人工内耳(リ)ハビリテーション」について近畿地区の聾学校の教員を対象に発表すると共に、聾学校教員の症例報告に指導・助言を行った。	
2003年度大阪府盲・聾・養護学校教育免許法認定講習会講師	2003年8月6日	「心身障害の幼児、児童又は生徒の心理」、「生理および病理」、「聴覚音声生理及び病理」に関する科目について講演した。	
兵庫県立姫路聾学校職員研修会講師	2004年3月4日	人工内耳のしくみ、聴覚活用、学校生活における留意点等について講演した。	
兵庫県耳鼻咽喉科医会研修会(於神戸)	2004年7月4日	「小児人工内耳(リ)ハビリテーションの実際」について、兵庫県下の耳鼻咽喉科の勤務医および開業医を対象に講演した。	
京都府立聾学校職員研修会講師	2004年7月23日	きこえと内言語の発達に関して、実際的な検査法とアプローチの仕方について講演した。	

大阪大学耳鼻咽喉科開業医会研修会(於大阪)	2004年7月31日	「人工内耳のリハビリテーション」について、大阪大学出身の耳鼻咽喉科開業医を対象に講演した。
第6回近畿教育オーディオロジー研究協議会講演会・講習会講師(於大阪)	2004年8月18日～19日	近畿地区の聾学校教員で組織される近畿教育オーディオロジー連絡協議会の総会で「人工内耳の基礎とリハビリテーション」について講演するとともに、教員の「人工内耳の事例報告」で指導助言を行った。
第24回聴覚言語障害研究会(於 名古屋)	2004年12月11日	「小児の人工内耳」について、愛知県下の言語聴覚士、聾学校教員を対象に人工内耳を装着後の言語獲得と聴覚活用について発表した。
2003年度愛媛大学公開講座「人工内耳教育セミナー」講師(於 松山)	2004年12月20日～21日	聴覚障害の教育および(リ)ハビリテーションに関わる学校・学級・施設等の教職員を対象として、全国に約300名在籍する人工内耳装着児の医学的、教育的、福祉的、心理的フォローについて講義、指導・助言をした。
2004年度愛媛大学公開講座「人工内耳教育セミナー」講師(於 松山)	2005年1月23日～24日	聴覚障害の教育および(リ)ハビリテーションに関わる学校・学級・施設等の教職員を対象として、人工内耳装着児の医学的、教育的、福祉的、心理的フォローおよび聴取能力の評価方法について講義、指導・助言をした。
2005年度大阪府盲・聾・養護学校教育免許法認定講習会講師	2005年7月25日	「心身障害の幼児・児童又は生徒の心理」、「生理および病理」、「聴覚音声生理及び病理」に関する科目について講演した。
第2回東海教育オーディオロジー研究協議会講演会・講習会講師(於大阪)	2005年7月30日～31日	「東海地区の聾学校教員を対象に「人工内耳の基礎とリハビリテーション」というタイトルでわかりやすく人工内耳全般について説明をし、続いて「ことばや聴覚活用を育てる—人工内耳装着児を例に—」というタイトルで人工内耳装着児への具体的なことばの教え方、聴覚の活用の促し方についてビデオなど具体的な資料を見せて説明した。人工内耳を装着された方への具体的なことばの教え方、聴覚の活用の促し方についてビデオなど具体的な資料を提示し説明した。
第7回近畿教育オーディオロジー研究協議会講演会・講習会講師(於大阪)	2005年8月18日～19日	近畿地区の聾学校教員を対象に「人工内耳の基礎」「人工内耳のリハビリテーション」について講演するとともに、教員の「人工内耳の事例報告」で指導助言を行った。
札幌医科大学市民公開講座「小児難聴・人工内耳」(於札幌)	2005年11月3日	札幌市民を対象に「幼児人工内耳の実態」というサブタイトルで難聴に対する理解深めることを目的として、人工内耳が果たす役割と医療、教育及び家族の関わり等について講演した。
2005年度言語聴覚士研修会(於国立リハビリテーション学院)	2005年11月30日	平成17年度言語聴覚士研修会「乳幼児の難聴児のハビリテーション」というテーマのもと、「幼小児への人工内耳の適用」というタイトルで全国の現任言語聴覚士を対象として、医療専門職として人工内耳の医学的適応からその後の聴覚活用、構音及び言語指導に実際と研究結果について発表した。
2005年度愛媛大学公開講座「人工内耳教育セミナー」講師(於 松山)	2005年12月17日～18日	「小児人工内耳のハビリテーション」について、全国から公開講座に参加した聾学校教員および難聴児通園施設の指導員を対象に人工内耳装着前後の家族及び児に対する心理的支援や実際の聴覚活用プログラム及び言語発達について講義、指導、助言をした。
2005年度東海教育オーディオロジー研究協議会第3回講習会(於名古屋)	2006年7月31日～8月1日	「人工内耳の最新情報」というタイトルで東海地域の聾学校および難聴学級等に所属する教員を対象として、増加傾向にある人工内耳装着児へのかわりや人工内耳機器に関する最新情報について、海外の動向も交えて講演した。
2005年度「補聴と聴覚活用を語るサマーフォーラム」(於横浜)	2006年7月22日	「両耳聴効果」というテーマで人工内耳と補聴器の両耳装着効果について実践例とデータを用いて、聾学校教員・ことばときこえの教室教員・難聴児通園施設指導員を対象として講演した。
人工内耳友の会ACITA東海小児部会講演会	2006年7月23日	「人工内耳装着児への心理的援助」と題し、人工内耳装用者及び人工内耳装着児の養育者を対象として、小児にもインフォームドコンセントが大切なこと、きこえることの心理的影響等について講演した。
2006年度日本耳鼻咽喉科学会東海地方支部補聴器認定医講習会(於名古屋)	2006年7月30日	東海地区の耳鼻咽喉科医を対象として「補聴器の装着指導」、「福祉医療と相談」の2科目について講演した。

第8回近畿教育オージオロジー研究協議会講演会・講習会 講師(於大阪)	2006年8月17日～18日	近畿地方において聾学校で難聴教育に携わる教員で構成されている本会講習会で①「人工内耳の基礎」、②「人工内耳の応用」の2講座の講師を務めた。①では聞こえのしくみ、人工内耳の歴史、日本における人工内耳の経緯、人工内耳の基本的な原理と構造、補聴器との違い、適応基準、装用効果と限界、(リ)はビリテーション、教育機関との連携について、②では(リ)ハビリテーションの意義と目的、音声処理方法とマップ、聴覚活用の評価、機器に関する問題の早期発見と迅速な対応、家族支援・心理的支援を含めた聴覚環境の整備、チームアプローチ、機器の管理、個人差や限界の理解について講演した。
2006年度大阪府小児耳鼻咽喉科研究会(於大阪)	2006年9月30日	大阪府下の耳鼻咽喉科を対象として「小児における人工内耳の装用効果」というタイトルで聴取能の改善や言語発達に関する利点と問題点などについて講演した。
2007年度日本耳鼻咽喉科学会東海地方支部補聴器認定 医講習会(於名古屋)	2007年7月8日	東海地区の耳鼻咽喉科医を対象として「補聴器の装用指導」、「福祉医療と相談」の2科目について講演した。
第9回近畿教育オージオロジー研究協議会講演会・講習会 講師(於大阪)	2007年8月31日～22日	聾学校で難聴教育に携わる教員を対象として①「人工内耳の基礎」、②「人工内耳の応用」の2講座の講師を務めた。①では聞こえのしくみ、人工内耳の歴史、日本における人工内耳の経緯、人工内耳の基本的な原理と構造、補聴器との違い、適応基準、装用効果と限界、(リ)はビリテーション、教育機関との連携について、②では(リ)ハビリテーションの意義と目的、音声処理方法とマップ、聴覚活用の評価、機器に関する問題の早期発見と迅速な対応、家族支援・心理的支援を含めた聴覚環境の整備、チームアプローチ、機器の管理、個人差や限界の理解について講演した。
京都府立聾学校医療専門職研修会(於京都)	2007年9月19日	日本で最も長い歴史を持つ京都府立聾学校の教員を対象として「人工内耳について」について、その原理と構造、適応基準、ハビリテーション、言語発達等について講演した。
子どものきこえを支援する会交流会(於福岡)	2007年12月9日	「人工内耳装用人工内耳への支援」というタイトルで講演後、福岡大学医学部耳鼻咽喉科教授中川尚志先生、愛媛大学教育学部教授高橋信雄先生と、特にコミュニケーションモード、学力の補償、自我の形成についてなど支援の内容についてシンポジウムを行った。
2007年度中国四国教育オーディオロジー研究協議会 秋 の合同研修会(於香川)	2007年12月16日	中国四国地区の聾学校の教員を対象として、「聴覚障害児と人工内耳」について、新種機種、適応基準、ハビリテーション、言語発達等について講演した。
2007年度聴覚障害児支援冬季研修会(於名古屋)	2008年1月12日～13日	全国の難聴児通園施設、難聴学級教員、聾学校教員等を対象に「人工内耳装用児への支援」という題で、養育者への支援、児への心理的支援、聴覚補償・聴覚活用・言語発達・発声発語支援等について講演した。
日本教育オーディオロジー研究協議会「第4回上級講座」 講師(於大阪)	2008年2月9日～11日	全国の聾学校すでに初級・中級講習会を受けてきた教員を対象として「人工内耳」について、受講者参加型でディスカッション形式の講演を行った。
大阪大学医学部に「聴覚障害」についてゲストスピーカーとして 授業(於吹田)	2008年3月3日	医学部5回生を対象として耳鼻咽喉科の授業のうち「聴覚障害」の特に小児への人工内耳の適応について講義を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
実習施設の開拓	2004年9月～	2006年から始まる第1期生の臨床実習依頼のため知己の言語聴覚士及び耳鼻咽喉科を訪問した。新たに10数箇所の実習施設の開拓に寄与した。
学園広報編集委員	2004年4月～2008年3月	愛知淑徳学園広報誌「学園だより」の企画及び編集に携わった。
医療福祉研究科教務準備委員	2005年4月～2006年3月	医療福祉研究科の開設に向け、カリキュラム及び履修要覧を作成した。またコミュニケーション障害学専攻の非常勤講師の選定依頼などを行った。
学園広報編集委員	2004年4月～2005年3月	2004年4月に医療福祉学部が開設され、その第1回の学術論集の企画及び編集に携わった。
医療福祉研究科教務委員	2006年4月～	2006年4月に開設した医療福祉研究科の教務委員として、教育課程の運営等の役割を果たした。

医療福祉研究科倫理委員会委員	2006年4月～2008年3月	医療福祉領域の研究において倫理的側面から諸問題について検討し、委員としての役割を果たした。
学生生活サポート委員会第6委員会委員	2007年4月～	2007年に教育学科に入学した聴覚障害者の情報補償等についての支援など、本学で勉学していくための援助を検討し実践した。
愛知県言語聴覚士会設立準備委員	2004年1月～2005年6月	言語聴覚士の資質向上、社会的地位の確立を図り、コミュニケーション障害を抱える方・ご家族に対する支援と地域へ貢献、相互交流を果たすことを目的とした職能団体愛知県言語聴覚士会の設立に向け準備委員として携わり、規約を作成した。
愛知県言語聴覚士会理事・研修部長	2005年6月～2007年5月	愛知県言語聴覚士会が2005年6月に設立され、研修部長として専門研修会、新人研修会を総括し愛知県の言語聴覚士の資質の向上に努めた。
愛知県言語聴覚士会理事・学術局長	2007年5月～	愛知県言語聴覚士会において学術局長として学部部と研修部の長として専門勉強会、専門研修会、新人研修会、学術講演会を総括し愛知県の言語聴覚士の資質の向上に努めた。
大阪教育大学非常勤講師	2001年4月～	特殊教育特別専攻科「言語障害特講Ⅲ」の講義を担当
県立広島大学非常勤講師	2005年4月～	保健福祉学部コミュニケーション障害学科「聴覚系障害学」の講義を担当
大阪大学医学部特任研究員	2006年8月～	人工内耳の研究に携わる

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
人工内耳装用初期における装用効果の評価	単著	2003年7月	全日本病院出版会、ENTONI 27	◎井脇貴子	36頁～45頁
人工内耳機器の特徴とその選択	共著	2003年7月	全日本病院出版会、ENTONI 27	共著者:◎久保武、井脇貴子	6頁～12頁
人工内耳の普及と難聴教育	単著	2005年4月	ミネルヴァ書房、発達102号	◎井脇貴子	53頁～57頁
診療所における先端補聴器機に関する説明は? 人工内耳・人工中耳・埋め込み型骨導補聴器など 人工内耳の聞き取り成績と学校教育	単著	2007年4月	全日本病院出版会、ENTONI74号	◎井脇貴子	48頁～55頁
<b>論文</b>					
人工内耳装用児における手術方法と術後成績の比較検討	共著	2003年11月	耳鼻と臨床、49、6	共著者:◎馬秀嵐、井脇貴子、久保武	421頁～425頁
Cortical processing of tactile language in a post-lingually deaf-blind subject	共著	2004年2月	Neuroreport、9;15(2)	共著者:◎Y. Osaki, M. Takasawa, K. Noda, H. Nishimura, A. Ihara, T. Iwaki, M. Imaizumi, T. Yoshikawa, N. Oku, T. Kubo	287頁～291頁
Comparison of speech perception between monaural and binaural hearing in cochlear implant patient.	共著	2004年5月	Acta Otolaryngol、124(4)	共著者:◎T. Iwaki, N. Matushiro, SR. Ma, T. Sato, E. Yasuoka, K. Yamamoto, T. Kubo	358頁～362頁
Complications of cochlear implant surgery	共著	2005年6月	Operative Techniques in Otolaryngology Head and Neck Surgery Vol.16, Issue2	共著者:◎T. kubo, S. Matsuura, T. Iwaki,	154頁～158頁
Neural mechanism of residual inhibition of tinnitus in cochlear implant users	共著	2005年10月	Neuroreport 17;16(15)	共著者:◎Y. Osaki, H. Nishimura, M. Takasawa, M. Imaizumi, T. Kawashima, T. Iwaki, N. Oku, K. Hashikawa, K. Doi, T. Nishimura, J. Hatazawa, T. Kubo.	1625頁～1628頁
The change of the auditory function in children with cochlear implant	共著	2005年7月	Lin Chuang Er Bi Yan Hou Ke Za Zhi 19(13)	共著者:◎Ma X, Iwaki T, Kubo T.	598頁～599頁

先天性難聴児に対する言語指導の50年の歩みとこれから—人工内耳装用児の聴取能および言語発達の経過について	単著	2006年7月	音声言語医学47巻3号	◎井脇貴子	298頁～305頁
Auditory and tactile processing in a postmeningitic deaf-blind patient with a cochlear implant.	共著	2006年9月	Neurology 12;67(5)	共著者:◎Osaki Y, Takasawa M, Doi K, Nishimura H, Iwaki T, Imaizumi M, Oku N, Hatazawa J, Kubo T.	887頁～890頁
アドバンスト・バイオニクス社の最新人工内耳機器 HiRes 90Kインプラントの使用経験	共著	2006年12月	耳鼻咽喉科展望49巻6号	共著者:◎渡邊暢浩、高橋真理子、宮本直哉、村上信五、井上ひとみ、出口正裕、関谷芳正、井脇貴子	354頁～359頁
新生児聴覚検診の役割-難聴が確定した場合の対処-人工内耳	共著	2007年6月	耳鼻咽喉科・頭頸部外科79巻7号	共著者:◎井脇貴子、多田麻佐美、久保武	501頁～506頁
その他					
抄録集					
クリプトコッカス髄膜炎による盲聾症例への人工内耳手術	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻1増刊	鈴木基之, 土井勝美, 大崎康宏, 野田和裕, 山本好一, 井脇貴子, 久保武	72頁～73頁
高齢者への人工内耳埋め込み手術とその成績	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻4号	久保武, 井脇貴子	378頁
人工内耳と補聴器の両耳装用における両耳聴効果 語音聴取能(67-S語表, Japanese HINT)に関する検討	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻4号	松代直樹, 佐藤崇, 井脇貴子, 土井勝美, 安岡絵理, 久保武	418頁
盲聾者における言語機能 PETによる解析	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻4号	大崎康宏 土井勝美, 高沢正志, 野田和裕, 西村洋, 井脇貴子, 山本好一, 今泉昌男, 鈴木基之, 吉川卓也, 奥直彦, 畑澤順, 久保武	478頁
「療養経過シナリオ」の有用性の検討 喉頭摘出と人工内耳の2疾患について	共著	2003年5月	医療マネジメント学会雑誌4巻1号	北村有子, 大野ゆう子, 久保武, 井脇貴子, 東村昌代, 長谷川敏彦, 柿川房子	169頁
補聴器と人工内耳の両耳装用効果 P300による他覚的評価	共著	2003年9月	Audiology Japan46巻5号	山本好一, 松代直樹, 佐藤崇, 井脇貴子, 久保武	517頁～518頁
人工内耳両側同時埋め込み手術とその効果について	共著	2003年9月	Otology Japan13巻4号	久保武, 井脇貴子, 山本好一	336頁
人工内耳と補聴器の両耳装用における両耳聴効果について方向感に関する検討	共著	2003年9月	Otology Japan13巻4号	松代直樹, 佐藤崇, 安岡絵理, 西村洋, 井脇貴子, 久保武	337頁
日本語版Hearing in Noise Test(J-HINT)の開発と標準値について	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻9増刊	井脇貴子、久保武	977頁
バイモーダル装用(人工内耳と補聴器の両耳同時装用)の両耳聴効果について(第1報) 67-S語表・Japanese HINTに関して	共著	2003年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報106巻9増刊	松代直樹, 佐藤崇, 井脇貴子, 土井勝美, 安岡絵理, 久保武	977頁
人工内耳埋め込み術と副作用予防の工夫	共著	2004年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報107巻4号	久保武, 井脇貴子, 山本好一	414頁
人工内耳使用下での方向感に関して バイモーダル装用とバイノーラル装用での検討	共著	2004年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報107巻4号	松代直樹、佐藤崇、安岡絵理、井脇貴子、久保武	414頁
両耳人工内耳装用者における語音聴取能と方向感について	共著	2004年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報107巻4号	井脇貴子、安岡絵理、佐藤崇、松代直樹、久保武	415頁
語音聴取評価検査CI-2004を用いた人工内耳装用児の評価	共著	2004年10月	Audiology Japan47巻5号	井脇貴子、久保武	519頁～520頁
人工内耳装用児の機種による成績比較	共著	2004年9月	日本耳鼻咽喉科学会会報107巻9増刊	井脇貴子、中川あや、増村千佐子、山本好一、久保武	820頁
盲聾患者における人工内耳術後の脳活動	共著	2005年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報108巻4号	大崎康宏, 高沢正志, 土井勝美, 西村洋, 井脇貴子, 今泉昌男, 奥直彦, 畑澤順, 久保武	440頁
人工内耳装用児の長期成績	共著	2005年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報108巻4号	井脇貴子、久保武	441頁
人工内耳導入前後に小児に現われた心理的サインについて	共著	2005年9月	Audiology Japan48巻5号	井脇貴子、久保武	395頁～396頁



盲聾患者における人工内耳長期装着時の脳活動	共著	2005年9月	Otology Japan15巻4号	榎本主佑, 大崎康宏, 西村洋, 土井勝美, 井脇貴子, 久保武	521頁
高齢化社会に対応した人工内耳の適応	共著	2006年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報109巻4号	久保武, 井脇貴子, 佐々木和	360頁
サイトメガロウイルス感染症による聴覚障害児の人工内耳装着経過について	共著	2006年6月	小児耳鼻咽喉科(0919-5858)27巻2号	井脇貴子, 松浦尚子, 久保武	185頁
コクレアN24人工内耳装着小児におけるNRT測定と行動閾値の関係	共著	2006年9月	Audiology Japan 49巻5号	佐々木知, 井脇貴子, 久保武	675頁～676頁
ADRO(Adaptive Dynamic Range Optimization)機能を搭載した人工内耳と補聴器の両耳装着効果について	共著	2006年9月	Audiology Japan 49巻5号	井脇貴子, 久保武	687頁～688頁
人工内耳装着用児における韻律聴取の検討	共著	2007年1月	音声言語医学 48巻1号	松浦尚子, 井脇貴子	64頁～65頁
盲聾患者における人工内耳長期装着時の脳活動	共著	2007年4月	日本耳鼻咽喉科学会会報110巻4号	大崎康宏, 西村洋, 土井勝美, 榎本主佑, 井脇貴子, 木村泰之, 梶本勝文, 奥直彦, 畑澤順, 久保武	269頁
小児における箱形スピーチプロセスサブリントと耳掛け形スピーチプロセッサ3Gの聴取成績についての検討	共著	2007年9月	Audiology Japan 50巻5号	川端文, 新谷朋子, 和野美鈴, 金泉悦子, 氷見徹夫, 井脇貴子	539頁～540頁
Vibrant Soundbridge人工中耳と補聴器の両耳装着者の聴取能について Japanese Hearing in Noise Testを使用して	共著	2007年9月	Audiology Japan 50巻5号	井脇貴子, 佐々木知, 大崎康宏, 近藤千雅, 久保武	569頁～570頁
Vibrant Soundbridge人工中耳と対側補聴器併用者の聴取能	共著	2007年9月	Otology Japan 17巻4号	佐々木知, 近藤千雅, 大崎康宏, 井脇貴子, 土井勝美, 久保武	369頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年12月4日～6日	運営委員	第4回アジア太平洋人工内耳学会 台湾
2004年6月27日	相談員	第4回アジア太平洋人工内耳学会の運営委員として学会の運営に携わった。 大阪府難聴者協会「元気の出る集い」 難聴者協会主催の「元気の出る集い」における難聴相談コーナーで相談員として医療管理、補聴器、日常生活などに関する相談に応じた。
2005年11月26日～28日	運営委員	第5回アジア太平洋人工内耳学会 香港 第5回アジア太平洋人工内耳学会の運営委員として学会の運営に携わった。
2005年	査読委員	Ear and Hearing The 5th Congress of Asia Pacific Symposium on Cochlear Implant and Related SciencesのProceeding集の発刊にあたりJournal「Ear and Hearing」の査読委員を務めた。
2006年6月14～17日	運営委員	第9回国際人工内耳学会 ウィーン 第9回国際人工内耳学会の運営委員として学会の運営に携わった。
2007年10月30日～11月2日	運営委員	第6回アジア太平洋人工内耳学会 シドニー 第6回アジア太平洋人工内耳学会の運営委員として学会の運営に携わった。
2007年10月26日～27日	座長	第52回日本音言語医学会総会・学術総会 所沢 第52回日本音言語医学会総会・学術総会において聴覚演題群の座長をつとめた。
2006年～現在	委員	BAHA臨床治験 厚生労働省未承認の埋め込み型骨導補聴器(BAHA:Bone-Anchored Hearing Aid)の臨床治験を2006年から大阪大学医学部附属病院で開始。治験委員として主に装着効果の評価に携わった。
1997年～現在	幹事	日本人内耳研究会 日本耳科学会に所属する日本人内耳研究会の創設から幹事を務め、耳鼻科医と言語聴覚士を対象に年1回行われ研修会の企画及び運営を行った。

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 太田龍朗	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
・メンタルヘルスの講義		2003年4月1日～2007年9月30日	愛知淑徳大学教養教育センター(2003年4月1日～2004年9月30日)に所属中は全学共通教養教育選択科目として「メンタルヘルス」を担当し、全学部生を対象に精神の疾患を中心とした心の健康について前・後期それぞれ12～13回・2クラスの講義を担当した。医療福祉学部へ移籍後(2004年10月～2007年9月迄)は、同様の講義を1クラス対象に担当した。		
・精神医学概論の講義		2004年10月1日～2008年3月31日	医療福祉学部所属中(2004年10月1日～現在)は、医療福祉学部の学生(1～2年次)を対象に学部基礎科目のうち、精神医学概論として、精神医学の歴史、疾病の分類、各疾患の概説などを中心に2004年後期から2007年後期に13回ずつ各1クラスを対象に講義を行った。講義に際しては、毎回レジメを作製し、理解を助けるように努め、またvisualな資料に慣れた最近の学生の傾向に配慮して、VHSや自ら出演したTV録画等も利用して、関心をたかめよりわかりやすい講義とするよう工夫した。また、なるべく対話形式を導入し、教壇からの一方的な講義にならないよう努めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
・睡眠障害概論「精神医学症候群Ⅱ」 日本臨床社		2003年8月28日	精神医学の領域にみる症候群のひとつとして睡眠障害を解説したものの		
・睡眠薬「専門医をめざす人の精神医学」第2版 山内俊雄ら編 医学書院		2004年8月1日	精神科医をめざす医師・医学生にむけた教科書の中で睡眠薬の分類や用い方を解説		
・睡眠障害「NEW精神医学」改訂第2版 上島国利、丹羽真一編 南江堂		2008年4月20日	医学生を対象とした精神医学の教科書で専攻する睡眠学の部分を分担解説		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
医療福祉学部指定科目の精神保健福祉援助技術演習・指導		精神保健福祉士資格に必要な現場における技術修得について、兼務している精神科病院を実習場所として提供し、指導にもあたっている。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
精神医学症候群Ⅱ－摂食・睡眠・性・人格障害など－Ⅴ睡眠障害・睡眠障害概論	共著	2003年8月	日本臨床社別冊日本臨床領域別症候群シリーズ39	太田龍朗	41頁～47頁
どうしてワタシは眠れない？快適睡眠88の即効レシピ	監修	2006年1月	技術評論社		1頁～207頁
睡眠障害ガイドブック 治療とケア	単著	2006年10月	弘文堂		1頁～201頁
論文					
Cross-regional survey of seasonal affective disorders in adults and high-school students in Japan	共著	2003年6月	Journal of Affective Disorders 77	Makoto Imai, Yuhei Kayukawa, Tatsuro Ohta, et al	127頁～133頁
Psychiatric features of seriously life-threatening suicide attempters: A Clinical study from a general hospital in Japan	共著	2003年4月	Journal of Psycho somatic Research 55(4)	Satomi Murase, Shisei Ochiai, Tatsuro Ohta et al.	379頁～383頁

三次元人格評価尺度(TPQ)を用いた季節性感情障害(SAD)の人格特性の解析	共著	2003年5月	精神医学 45巻5号	前野信久、楠和憲、太田龍朗、他	475頁～482頁
Association of sleep-disordered breathing with hypertension in Japanese industrial workers	共著	2003年10月	Sleep and Biological Rhythms 2003;1	Lan Li, Yuhei Kayukawa, Tatsuro Ohta et al.	221頁～227頁
Fluvoxamine, a selective serotonin reuptake inhibitor, suppresses tetrahydrobiopterin in the mouse hippocampus	共著	2004年6月	Neuropharmacology 46	H.Miura, H.Qiao, T.Ohta et al.	340頁～348頁
日常臨床における睡眠とその障害	単著	2004年3月	岡崎医報 第274号	太田龍朗	10頁～11頁
Clinical characteristics of serious Japanese adolescent suicide-attempters admitted to an intensive care ward	共著	2004年4月	Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry	Satomi Murase, Shuji Honjo, Tatsuro Ohta et al.	25頁～34頁
精神科領域における睡眠障害の診断と治療	単著	2004年10月	北陸神経精神医学雑誌18(1)	太田龍朗	1頁～6頁
Personality of seasonal affective disorder analyzed by Tri-dimension Personality Questionnaire	共著	2005年6月	Journal of Affective Disorders 85	Nobuhisa Maeno, Kazunori Kusunoki, Tatsuro Ohta et al.	267頁～273頁
小児の睡眠とその障害	単著	2006年5月	愛知県小児科医学会報83	太田龍朗	63頁～67頁
A link between stress and depression: Shifts in the balance between the kynurenine and serotonin pathways of tryptophan metabolism and etiology and pathophysiology of depression	共著	2008年5月	Stress 11	Hideki Miura, Norio Ozaki, Tatsuro Ohta et al.	198頁～209頁

その他

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	日本心身医学会・監事・評議員 日本生物学的精神医学会、日本時間生物学会、日本産業精神保健学会の各評議員 世界生物学的精神医学会、国際睡眠学会、世界生物リズム学会各会員
2003年6月	第28回日本睡眠学会定期学術集会会長
2003年6月	第18回日本老年精神医学会副会長
2004年7月	第26回日本アルコール関連問題学会会長
2003年4月～現在	東海睡眠呼吸障害研究会代表世話人
2003年4月～現在	中部老年期痴呆研究会代表世話人
2003年4月～現在	愛知県地方精神保健福祉審議会会長
2003年4月～現在	愛知県精神保健福祉協会会長
2003年4月～現在	名古屋市精神保健福祉審議会委員
2003年4月～現在	厚生労働省精神・神経疾患研究委託費運営委員会中間・事後評価部会委員
2005年12月～現在	独立行政法人国立病院機構東尾張病院倫理会議委員
2006年4月～現在	精神・神経科学振興財団 こころの健康科学研究推進事業専門委員
2006年7月～現在	学校法人 名古屋自由学院理事
2003年4月～現在	「Neuropsychobiology」Advisory Board 「The World Journal of Biologocal Psychiatry」Editorial Board 「Psychiatry and Clinical Neuroscience」 Editorial Board 「精神医学」編集同人

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 大野竜三	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
アニメーション・スライドにより難解な講義を判り易く、より理解されるようにした		2005年4月	Power Pointによって作成したアニメーション・スライドを用い、同時に配布した資料により、聴視覚の両面より、1年生には難解な内科学の講義を判り易くし、より理解されるように努めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
内科学講義資料		2006年3月1日	2005年度に配布した講義資料が白黒であったので、読みにくいとの評価があったため、カラー印刷68ページの冊子を作成した。2006年度より使用しているが好評である。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
亜硫酸製剤(トリセノックス)の開発経緯と急性前骨髄球性白血病治療における位置づけ	単著	2004年	日本新薬		
抗癌剤の選び方と使い方(改訂第3版)成人急性白血病	共著	2004年10月	南江堂	編集:小川一誠	
新しい診断と治療のABC慢性骨髄増殖性疾患 慢性骨髄性白血病の治療ガイドライン	共著	2004年11月	最新医学社	編集:大屋敷一馬	207頁～215頁
リビング・ウィルのすすめー家族や友に見守られて安らかな最後を迎えるためにー	単著	2005年3月	医薬情報資料研究所		
Possible dominant-negative mutation of the SHP gene in acute myeloid leukemia	共著	2003年	Leukemia 17	J-M Luo, H Yoshida, S Komura, N Ohnishi, L Pan, K Shigeno, I Hanamura, K Miura, S Iida, R Ueda, T Naoe, Y Akao, R Ohno and K Ohnishi	1頁～8頁
Cytogenetic heterogeneity of acute myeloid leukemia (AML) with trilineage dysplasia: Japan Adult Leukemia Study Group-AML92 study	共著	2003年	Brit J Hematol 120	Yasushi Miyazaki, Kazutaka Kuriyama, Shuichi Miyawaki, Shigeki Ohtake, Hisashi Sakamaki, Tatsuki Matsuo, Nobuhiko Emi, Tohru Kobayashi, Takefumi Matsushima, Katsuji Sinagawa, Ryuzo Ohno and Masao Tomonaga	56頁～62頁
Prognostic significance of CD7+CD56+ phenotype and chromosome5abnormalities for acute myeloid leukemia MO	共著	2003年	Int J Hematol 77	Masao Tomonaga, Yasufumi Masaki, Shuya Kusumoto, Jin Takeuchi, Shin Matsuda, Hisamaru Hirai, Seiichi Yorimitsu, Nobuyuki Hamajima, Masao Seto, Masanori Shimoyama, Ryuzo Ohno, Yasuo Morishima, Shigeo Namamura	482頁～489頁

Effect of a tyrosine kinase inhibitor STI571 in a patient with hepatic metastase from a duodenal gastrointestinal stromal tumor	共著	2003年	J Gastroenterol 38	Akira Sawaki, Kazuo Khashi, Kenji Yamao, Ken-ichi Inada, Yasuhiro Shimizu, Akira Matsuura, Tuneya Nakamura, Takashi Suzuki, Kazuo Hara, Kenji Okubo, and Ryuzo Ohno	690頁～694頁
Genome-wide analysis of gene-expression profiles in chronic myeloid leukemia cells using a cDNA microarray	共著	2003年	Int J Oncol 23	Yasuyuki Kaneta, Yoshitoyo Kagami, Taysuhiko Tsunoda, Ryuzo Ohno, Yusuke Nakamura, and Toyomasa Katagiri	681頁～391頁
Prediction of response to imatinib by cDNA microarray analysis	共著	2003年	Seminars Hematol 40 (2)	Ryuzo Ohno and Yusuke Nakamura	42頁～49頁
The percentage of myeloperoxidase-positive blast cells is a strong independent prognostic factor in acute myeloid leukemia, even in the patients with normal karyotype	共著	2003年	Leukemia 17	T Matsuo, K Kuriyama, Y Miyazaki, S Yoshida, M Tomonaga, N Emi, T Kobayashi, S Miyawaki, T Matsushima, K Shinagawa, S Honda and R Ohno	1538頁～1543頁
Revised recommendations of the international working group for diagnosis, standardization of response criteria, treatment outcomes, and reporting standards for therapeutic trials in acute myeloid leukemia”	共著	2003年	J Clin Oncol 21	BD Cheson, JM Bennett, KJ Kopecy, T Buchner, CL Willman, EH Estey, CA Schiffer, H Doehner, MS Tallman, TA Lister, F LoCocco, R Wil lemze, A Biondi, W Hiddemann, RA Larson, B Lowenberg, MA Sanz, DR Head, R Ohno, and CD Bloomfield	4642頁～4649頁
Dual mutations in the AML1 and FLT3 genes are associated with leukemogenesis in acute myeloblastic leukemia of the MO subtype	共著	2003年	Leukemia 17	N Matsuno, M Osato, N Yamashita, M Yana gida, T Nanri, T Fukushima, T Motoji, S Kusumoto, M Towatari, R Suzuki, T Naoe, K Nishii, K Shigesada, R Ohno, H Mitsuya, Y Ito and N Asou	2492頁～2499頁
Treatment of acute promyelocytic leukemia: strategy toward further increase of cure rate	共著	2003年	Leukemia 17(8)	Ohno R, Asou N, Ohnishi K	1454頁～1463頁
P-glycoprotein (P-gp) and multidrug resistance-associated protein1 (MRP1) are induced by arsenic trioxide (As2O3), but are not the main mechanism of As2O3-resistance in acute promyelocytic leukemia cells.	共著	2003年	Leukemia 17(3)	Takeshita A, Shinjo K, Naito K, Matsui H, Shigeno K, Nakamura S, Horii T, Maekawa M, Kitamura K, Naoe T, Ohnishi K, Ohno R	648頁～650頁
急性骨髄性白血病	単著	2003年	Modern Physician 23		187頁～190頁
セカンド・オピニオン	単著	2003年	自治体学研究 86		54頁～57頁
臨床医のための新薬の知識 2003 メシラ酸イマチニブ	単著	2003年	臨床と薬物治療 22		342頁～344頁
白血病・悪性リンパ腫	単著	2003年	化学療法の領域 19(S-1)		203頁～208頁
慢性骨髄性白血病における分子標的治療	単著	2003年	日本内科学会雑誌 92		884頁～889頁
これからの急性白血病の治療	単著	2003年	日本つばさ協会 42		3頁～15頁
イマチニブ・メシラート(グリベック)への期待と可能性	単著	2003年	医薬ジャーナル 39		1979頁～1981頁
緑陰随想 セカンド・オピニオン 外来	単著	2003年	全国自治体病院協議会雑誌 42		1198頁
鉄欠乏性貧血の診断と治療 - 常識と非常識 -	単著	2003年	クリニカ 30		315頁～317頁
がん患者のインフォームド・コンセント	単著	2003年	総合臨床 52		2304頁～2306頁

がんのオーダーメイド治療の可能性と問題点	単著	2003年	日本医師会雑誌 130		1035頁～1040頁
メシル酸イマチニブ	単著	2003年	現代医療 35		2919頁～2924頁
血液疾患研究の進歩～歴史的検証～急性前骨髄球性白血病	単著	2003年	血液フロンティア 13		1347頁～1355頁
化学療法で白血病の予後はどこまで改善したか	単著	2003年	Cancer Frontier 5		86頁～89頁
The recent JALSG study for newly diagnosed patients with acute promyelocytic leukemia (APL)	共著	2004年	Annal Hematol 83	R. Ohno, N. Asou	77頁～78頁
Impairment of heart rate variability control during arsenic trioxide treatment for acute promyelocytic leukemia	共著	2004年	Leukemia 18	A Takeshita, A Uehara, K Shinjo, K Naito, N Sahara, K Yamazaki, H Katoh, T Kamikawa, K Ohnishi, H Hayashi, R Ohno	647頁～648頁
Biologic and clinical significance of the FLT3 transcript level in acute myeloid leukemia	共著	2004年	Blood 103	Kazutaka Ozeki, Hitoshi Kiyoi, Yuka Hirose, Masanori Iwai, Manabu Ninomiya, Yoshihisa Kodera, Shuichi Miyawaki, Kazutaka Kuriyama, Chihiro Shimazaki, Hideki Akiyama, Miki Nishimura, Toshiko Motoji, Katsuji Shinagawa, Akihiro Takeshita, Ryuzo Ohno, Nobuhiko Emi, and Tomoki Naoe	1901頁～1908頁
A pilot study of imatinib mesylate (STI571) on gastrointestinal stromal tumors in Japanese patients	共著	2004年	J Gastroenterol 39	Akira Sawaki, Kenji Yamao, Tsuneya Nakamura, Takashi Suzuki, Kenji Okubo, Kazuo Hara, Hiroki Kawai, Yoshitaka Yamamura, Seiji Ito, Yoshinari Mochiduki, and Ryuzo Ohno	329頁～333頁
Multicenter prospective study of interferon $\alpha$ versus allogeneic stem cell transplantation for patients with new diagnoses of chronic myelogenous leukemia	共著	2004年	Int J Hematol 79	Kazunori Ohnishi, Akio Ino, Yuji Kishimoto, Noriko Usui, Chihiro Shimazaki, Shigeki Ohtake, Hirokuni Taguchi, Fumiharu Yagasaki, Masao Tomonaga, Tomomitsu Hotta, Ryuzo Ohno	345頁～353頁
Deletion 6p23 and add(11)(p15) leading to NUP98 translocation in a case of therapy-related atypical chronic myelocytic leukemia transforming to acute myelocytic leukemia	共著	2004年	Cancer Genet Cytogenet 152	Akihiro Takeshita, Kensuke Naito, Kaori Shinjo, Naohi Sahara, Hirotaka Matsui, Kazunori Ohnishi, Hiroki Beppu, Kaori Ohtsubo, Toshinobu Horii, Masato Maekawa, Toshiya Inaba, Ryuzo Ohno	56頁～60頁
Current antimicrobial usage for the management of infections in leukemic patients in Japan: results of a survey	共著	2004年	Clin Infect Di 39(Suppl1)	Yoshida M, Ohno R	11頁～1頁
Phenylarsine oxide (PAO) more intensely induces apoptosis in acute promyelocytic leukemia and As203-resistant APL cell lines than As203 by activating the mitochondrial pathway	共著	2004年	Leuk Lymphoma 45	Sahara N, Takeshita A, Kobayashi M, Shigeno K, Nakamura S, Shinjo K, Naito K, Maekawa M, Horii T, Ohnishi K, Kitamura K, Naoe T, Hayashi H, Ohno R	987頁～995頁
Disease-related potential of mutations in transcriptional cofactors CREB-binding protein and p300 in leukemias	共著	2004年	Cancer Lett 213	Shigeno K, Yoshida H, Pan L, Min Luo J, Fujisawa S, Naito K, Nakamura S, Shinjo K, Takeshita A, Ohno R, Ohnishi K	11頁～20頁

Combination of intensive chemotherapy and imatinib can rapidly induce high-quality complete remission for a majority of patients with newly diagnosed BCR-ABL positive acute lymphoblastic leukemia	共著	2004年	Blood 104 (12)	Towatari M, Yanada M, Usui N, Takeuchi J, Sugiura I, Takeuchi M, Yagasaki F, Kawai Y, Miyawaki S, Ohtake S, Jinnai I, Matsuo K, Naoe T, Ohno R	3507頁～3512頁
Efficacy and safety of imatinib mesylate for patients in the first chronic phase of chronic myeloid leukemia: results of a Japanese phase II clinical study	共著	2004年	Int J Hematol 80 (3)	Morishima Y, Ogura M, Nishimura M, Yazaki F, Bessho M, Mizoguchi H, Chiba S, Hirai H, Tauchi T, Urabe A, Takahashi M, Ohnishi K, Yokozawa T, Emi N, Hirano M, Shimazaki C, Nakao S, Kawai Y, Fujimoto M, Taguchi H, Jinnai I, Ohno R	261頁～266頁
Pharmacokinetics of pegylated recombinant human megakaryocyte growth and development factor in healthy volunteers and patients with hematological disorders	共著	2004年年	Eur J Haematol 73 (4)	Tanaka H, Takama H, Arai Y, Azuma J, Ohno R, Ikeda Y, Mizoguchi H	269頁～279頁
イマチニブ・メシレートの基礎と臨床 一序 がんの分子標的療法	単著	2004年	血液フロンティア 14 (S1)		9頁～11頁
Imatinibの個別化療法	単著	2004年	現代医療 36		142頁～147頁
銷夏随筆－セカンド・オピニオン 外来 その後	単著	2004年	日本病院会雑誌 51		74頁
血液がんの分子標的療法	単著	2004年	学術月報 57 (11)		53頁～58頁
医科におけるセカンドオピニオンの現状 ～医科病院へのアンケートより～愛知県がんセンター	単著	2004年	東京都歯科医師会雑誌 52 (11)		738頁～739頁
Arsenic trioxide therapy in relapsed or refractory Japanese patients with acute promyelocytic leukemia: updated outcomes of the phase II study and postremission therapies	共著	2005年	Int J Hematol 82 (3)	Shigeno K, Naito K, Sahara N, Kobayashi M, Nakamura S, Fujisawa S, Shinjo K, Takeshita A, Ohno R, Ohnishi K	224頁～229頁
Delayed recovery of normal hematopoiesis in arsenic trioxide treatment of acute promyelocytic leukemia: a comparison to all-trans retinoic acid treatment	共著	2005年	Intern Med 44 (8)	Shinjo K, Takeshita A, Sahara N, Kobayashi M, Nakamura S, Shigeno K, Naito K, Maekawa M, Ohnishi K, Ohno R	818頁～824頁
Efficacy of gemtuzumab ozogamicin on ATRA- and arsenic-resistant acute promyelocytic leukemia (APL) cells	共著	2005年	Leukemia 19 (8)	Takeshita A, Shinjo K, Naito K, Matsui H, Sahara N, Shigeno K, Horii T, Shirai N, Maekawa M, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R	1306頁～11頁
Expression and methylation status of the FHIT gene in acute myeloid leukemia and myelodysplastic syndrome	共著	2005年	Leukemia 19 (8)	Iwai M, Kiyoi H, Ozeki K, Kinoshita T, Emi N, Ohno R, Naoe T	1367頁～75頁
Molecular target-based treatment of human cancer: summary of the 10th international conference on differentiation therapy	共著	2005年	Cancer Res 65 (4)	Zelent A, Petrie K, Chen Z, Lotan R, Lubbert M, Tallman MS, Ohno R, Degos L, Waxman S	1117頁～1123頁
Two patients with all-trans retinoic acid-resistant acute promyelocytic leukemia treated successfully with gemtuzumab ozogamicin as a single agent	共著	2005年	Int J Hematol 82 (5)	Takeshita A, Shinjo K, Naito K, Matsui H, Sahara N, Shigeno K, Suzumura T, Horii T, Shirai N, Maekawa M, Yada Y, Teshima H, Takeuchi J, Ohnishi K, Ohno R	445頁～448頁

A randomized, postremission comparison of four courses of standard-dose consolidation therapy without maintenance therapy versus three courses of standard-dose consolidation with maintenance therapy in adults with acute myeloid leukemia: the Japan Adult Leukemia Study Group AML97 Study”	共著	2005年	Cancer 104 (12)	Miyawaki S, Sakamaki H, Ohtake S, Emi N, Yagasaki F, Mitani K, Matsuda S, Kishimoto Y, Miyazaki Y, Asou N, Matsushima T, Takahashi M, Ogawa Y, Honda S, Ohno	2726頁～2734頁
造血器腫瘍の分子標的療法	単著	2005年	Biotherapy 19 (1)		71頁～77頁
ゲムツズマブ・オゾガミンと亜硫酸製剤	単著	2005年	医薬ジャーナル 41 (Sup)		415頁～420頁
トレチノイン	単著	2005年	医学のあゆみ 215 (5)		409頁～412頁
アイルランドに開設された世界最初のホスピス –聖母マリア・ホスピス–	単著	2004年	緩和医療学 7 (1)		59頁～64頁
日本の医療制度化では米国並の医療は不可能 – M.D.Anderson Cancer Centerと愛知県がんセンターの比較 –	単著	2005年	全国自治体病院協議会雑誌 44 (2)		62頁～65頁
High complete remission rate and promising outcome by combination of imatinib and chemotherapy for newly diagnosed BCR-ABL-positive acute lymphoblastic leukemia: a phase II study by the Japan Adult Leukemia Study Group.	共著	2006年	J Clin Oncol 24(3)	Yanada M, Takeuchi J, Sugiura I, Akiyama H, Usui N, Yagasaki F, Kobayashi T, Ueda Y, Takeuchi M, Miyawaki S, Maruta A, Emi N, Miyazaki Y, Ohtake S, Jinnai I, Matsuo K, Naoe T, Ohno R	460頁～466頁
Imatinib in combination with chemotherapy for newly diagnosed BCR/ABL-positive acute lymphoblastic leukemia in adults.	共著	2006年	Annals of Hematology 85(Supple 1)	R. Ohno, M. Yanada and T. Naoe	84頁～86頁
Treatment of chronic myeloid leukemia with imatinib mesylate.	共著	2006年	Int J Clin Oncol 11(3)	Ohno R.	176頁～183頁
WT1 gene expression lowered by IL-12 In vitro in peripheral blood mononuclear cells from patients with leukemia or myelodysplastic syndromes.	共著	2006年	Zhongguo Shi Yan Xue Ye Xue Za Zhi 14(3)	PanL, ZhangXJ, Niu ZY, Suo XH, Zhang JY, Yang L, Liu XJ, Qiao SK, Dong ZR, Ohno R.	501頁～507頁
Clinicopathological and prognostic characteristics of CD33-positive multiple myeloma.	共著	2006年	Eur J Haematol 77(1)	Sahara N, Ohnishi K, Ono T, Sugimoto Y, Kobayashi M, Takeshita K, Shigeno K, Nakamura S, Naito K, Tamashima S, Nara K, Tobita T, Takeshita A, Ohno R.	14頁～18頁
Two cases of acute promyelocytic leukemia complicated by torsade de pointes during arsenic trioxide therapy.	共著	2006年	Int J Hematol 83(4)	Naito K, Kobayashi M, Sahara N, Shigeno K, Nakamura S, Shinjo K, Tabita T, Takeshita A, Ohno R, Ohnishi K.	318頁～323頁
Twenty-seven cases of drug-induced interstitial lung disease associated with imatinib mesylate.	共著	2006年	Leukemia 20(6)	Ohnishi K, Sakai F, Kudoh S, Ohno R.	1162頁～1164頁
Clinical significance of P-glycoprotein in acute leukemia and a strategy to overcome drug resistance.	共著	2006年	In Jeffries LP (ed) Frontiers in Cancer Research, Nova Science Publishers, New York, pp123-151, 2006.	Motoji T, Motomura S, Wang Y-H, Tsuji K, Takanashi M, Shiozaku H, Miyawaki S, Asou N, Takeshita A, Saburi Y, Ohno R, Mizoguchi H.	123頁～151頁
忘れえぬ患者さんたち	単著	2006年	Focus on Oncology No.4		24頁～25頁
新しい診断と治療のABC 36 急性白血病	共著	2006年	最新医学社	編集 大野竜三	256頁～265頁
日本のプライマリ・ケア 白血病 大野竜三	単著	2006年	総合臨床 2006増刊 55		1096頁～1098頁



発熱性好中球減少症(FN)の診断と治療ストラテジー (座談会)	共著	2006年	Medicament News 1867号	正岡徹、金丸昭久、大野竜三、田村和夫、吉田 稔、浦部昌夫、大屋敷一馬、Jean Klastersky	20頁～23頁
リビング・ウィルという選択ー終末期医療とどう向き合うか	単著	2006年	SIGHT SUMMER		120頁～125頁
造血器腫瘍とAra-C大量療法	共著	2006年	医薬ジャーナル社	編集 大野竜三	1頁～187頁
造血器腫瘍におけるAra-C大量療法の位置づけ	単著	2006年	医薬ジャーナル社	編集 大野竜三	10頁～13頁
「造血器腫瘍とAra-C大量療法」禁煙社会の実現に向けて	単著	2006年			34頁～39頁
終末期医療とリビング・ウィル	単著	2006年	学術の動向 11(5) エスエルグループ・ニュース No.113		6頁～8頁
話題のくすり ゲムツズマブ・オンコザマイシン	単著	2006年	日本病院薬剤師会雑誌42巻5号		683頁～685頁
最先端のがん治療	単著	2006年	The Journal of Toxicological Sciences(0388-1350)31巻 Suppl.		107頁
【造血器腫瘍の分子標的療法の進歩 がん治療のパラダイム】急性前骨髄球性白血病	共著	2006年	血液フロンティア(1344-6940)16巻9号	竹下明裕、大野竜三	1335頁～1345頁
未治療急性前骨髄球性白血病に対する維持強化療法の無作為比較試験 JALSG APL97研究	共著	2006年	臨床血液(0485-1439)47巻9号	麻生範雄、岸本裕司、清井仁、岡田昌也、河合泰一、都築基弘、松田光弘、品川克至、小林透、大竹茂樹、西村美樹、高橋正知、矢ヶ崎史治、竹下明裕、木村之彦、岩永正子、直江知樹、大野竜三	1005頁
FAB-M2症例のWHO分類に基づく細分類と解析 JALSG-AML97解析	共著	2006年	臨床血液(0485-1439)47巻9号	波多智子、栗山一孝、宮崎泰司、本田純久、西田一弘、谷脇雅史、坂巻壽、宮脇修一、直江知樹、大野竜三、朝長万左男	1028頁
FLT3-ITDを組み込んだ成人AMLの新たな層別化法の検討 JALSG study	共著	2006年	臨床血液(0485-1439)47巻9号	宮崎泰司、清井仁、栗山一孝、本田純久、西田一弘、谷脇雅史、坂巻壽、宮脇修一、大竹茂樹、直江知樹、大野竜三、朝長万左男	1030頁
亜砒酸(ATO)の急性前骨髄性白血病治療上における抗白血病効果と抗菌作用に関する検討	共著	2006年	臨床血液(0485-1439)47巻9号	竹下明裕、重野一幸、杉本雄也、小野孝明、中村悟己、新庄香、佐原直日、金子誠、前川真人、大西一功、大野竜三	1101頁
JALSG AML97 studyにおけるt(8;21)AMLの治療成績	共著	2006年	臨床血液(0485-1439)47巻9号	初見菜穂子、宮脇修一、坂巻壽、大竹茂樹、矢ヶ崎史治、三谷絹子、松田信、岸本祐司、宮崎泰司、麻生範雄、小川吉明、本多純久、谷脇雅史、大野竜三	1115頁
フィラデルフィア染色体陽性急性リンパ白血病に対するSTI-571を含む化学療法に対する反応性診断	共著	2006年	日本癌学会総会記事(1347-9032)65回	前佛均、三好規之、片桐豊雅、柳田正光、菱田朝陽、直江知樹、竹内仁、角田達彦、大野竜三、中村祐輔	53頁
慢性骨髄性白血病に対するImatinibの治療効果予測における遺伝子発現profilingの有用性	共著	2006年	日本癌学会総会記事(1347-9032)65回	鏡味良豊、片桐豊雅、森島泰雄、大西一功、鶴尾隆、中村祐輔、大野竜三	363頁
組換え型ヒトロンボモジュリン(ART-123)のDIC患者を対象とした第3相臨床試験	共著	2006年	日本血栓止血学会誌(0915-7441)17巻5号	丸山征郎、齋藤英彦、島崎修次、山本保博、相川直樹、大野竜三、平山亮夫、松田保、朝倉英策、中島光好、青木延雄	576頁
終末期医療とリビング・ウィル 安らかな最後を迎えるために	単著	2006年	メディカル・コミュニケーション・ネットワーク、名古屋	大野竜三	1頁-97頁

Severe hemorrhagic complications during remission induction therapy for acute promyelocytic leukemia: incidence, risk factors, and influence on outcome.	共著	2007年	Eur J Haematol 78(3)	Yanada M, Matsushita T, Asou N, Kishimoto Y, Tsuzuki M, Maeda Y, Horikawa K, Okada M, Ohtake S, Yagasaki F, Matsumoto T, Kimura Y, Shinagawa K, Iwanaga M, Miyazaki Y, Naoe T.	213頁～219頁
Efficacy and safety of recombinant human soluble thrombomodulin (ART-123) in disseminated intravascular coagulation: results of a phase III, randomized, double-blind clinical trial.	共著	2007年	J Thromb Haemost 5(1)	Saito H, Maruyama I, Shimazaki S, Yamamoto Y, Aikawa N, Ohno R, Hirayama A, Matsuda T, Asakura H, Nakashima M, Aoki N.	31頁～41頁
Clinical features and outcome of T-lineage acute lymphoblastic leukemia in adults: A low initial white blood cell count, as well as a high count predict decreased survival rates.	共著	2007年	Leuk Res 31(7)	Yanada M, Jinnai I, Takeuchi J, Ueda T, Miyawaki S, Tsuzuki M, Hatta Y, Usui N, Wada H, Morii T, Matsuda M, Kiyoi H, Okada M, Honda S, Miyazaki Y, Ohno R, Naoe T.	907頁～14頁
Pharmacokinetics of arsenic species in Japanese patients with relapsed or refractory acute promyelocytic leukemia treated with arsenic trioxide.	共著	2007年	Cancer Chemother Pharmacol 59(4)	Fujisawa S, Ohno R, Shigeno K, Sahara N, Nakamura S, Naito K, Kobayashi M, Shinjo K, Takeshita A, Suzuki Y, Hashimoto H, Kinoshita K, Shimoya M, Kaise T, Ohnishi K.	485頁～493頁
A randomized study with or without intensified maintenance chemotherapy in patients with acute promyelocytic leukemia who have become negative for PML-RARalpha transcript after consolidation therapy: the Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG) APL97 study.	共著	2007年	Blood. 110(1)	Asou N, Kishimoto Y, Kiyoi H, Okada M, Kawai Y, Tsuzuki M, Horikawa K, Matsuda M, Shinagawa K, Kobayashi T, Ohtake S, Nishimura M, Takahashi M, Yagasaki F, Takeshita A, Kimura Y, Iwanaga M, Naoe T, Ohno R; Japan Adult Leukemia Study Group.	59頁～66頁
Prediction of risk of disease recurrence by genome-wide cDNA microarray analysis in patients with Philadelphia chromosome-positive acute lymphoblastic leukemia treated with imatinib-combined chemotherapy.	共著	2007年	Int J Oncol 31(2)	Zembutsu H, Yanada M, Hishida A, Katagiri T, Tsuruo T, Sugiura I, Takeuchi J, Usui N, Naoe T, Nakamura Y, Ohno R.	313頁～322頁
Phase I trial of FLAGM with high doses of cytosine arabinoside for relapsed, refractory acute myeloid leukemia: study of the Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG).	共著	2007年	Int J Hematol 86(4)	Miyawaki S, Kawai Y, Takeshita A, Komatsu N, Usui N, Arai Y, Ishida F, Morii T, Kano Y, Ogura M, Doki N, Ohno R.	343頁～347頁
Expression and mutation analysis of genes that encode the Myc antagonists Mad1, Mxi1 and Rox in acute leukaemia.	共著	2007年	Leuk Lymphoma 48(6)	Guo XL, Pan L, Zhang XJ, Suo XH, Niu ZY, Zhang JY, Wang F, Dong ZR, Da W, Ohno R.	1200頁～1207頁
【造血器腫瘍の長期生存とその問題点】造血器腫瘍の長期生存 過去・現在・未来	単著	2007年	血液フロンティア(1344-6940)17巻2号		161頁～164頁
早期発見・治療と予防をがんを減らしたい	単著	2007年	クラブ東海 471		1頁～3頁
新生日本学術会議と私の活動	単著	2007年	日本学術会議中部地区会議ニュースNo.122		

癌に対する抗体療法 浸透、内在化、及びエンドサイトーシスにより輸送されたcalicheamicinの細胞毒性作用と薬物耐性 (Antibody Therapy of Cancer Cytotoxic effect and drug resistance of calicheamicin transported by permeation, internalization and endocytosis)(英語)	共著	2007年	日本癌学会総会記事 (1347-9032)66回	竹下明裕, 新庄香, 前川真人, 大西一功, 大野竜三	77頁
禁煙治療元年:現状と問題点 日本学術会議における脱タバコ社会の実現を目指す取り組み	単著	2007年	循環器専門医(0918-9599) 15巻2号		353~357頁
ダサチニブの慢性骨髄性白血病及びPhiladelphia染色体陽性急性リンパ性白血病に対する臨床第I/II相試験	共著	2007年	臨床血液(0485-1439) 48巻9号	坂巻壽, 谷脇雅史, 石澤賢一, 藤澤信, 森島泰雄, 飛内賢正, 岡田昌也, 安藤潔, 薄井紀子, 宮脇修一, 宇都宮與, 魚嶋伸彦, 永井正, 直江知樹, 泉二登志子, 陣内逸郎, 谷本光音, 宮崎泰司, 大西一功, 飯田真介, 岡本真一郎, 芹生卓, 大野竜三	944頁
ハイリスクMDSおよびMDSから移行の急性白血病に対する寛解導入療法の無作為比較試験 JALSG MDS200の解析	共著	2007年	臨床血液(0485-1439) 48巻9号	森田泰慶, 金丸昭久, 宮崎泰司, 矢ヶ崎史治, 谷本光音, 栗山一孝, 小林透, 井本しおん, 大西一功, 直江知樹, 大野竜三	948頁
亜硫酸の催不整脈作用とアンブレル系抗真菌剤併用に関する検討	共著	2007年	臨床血液(0485-1439) 48巻9号	竹下明裕, 新庄香, 重野一幸, 中村悟己, 山崎慶介, 林秀晴, 大西一功, 吉山友二, 大野竜三	974頁
【腫瘍内科診療データファイル】化学療法・放射線療法 抗がん薬の作用機序	単著	2007年	内科(0022-1961) 100巻6号		1062頁~1071頁
Diagnosis of acute myeloid leukemia according to the WHO classification in the Japan Adult Leukemia Study Group AML-97 protocol.	共著	2008年	Int J Hematol 87(2)	Wakui M, Kuriyama K, Miyazaki Y, Hata T, Taniwaki M, Ohtake S, Sakamaki H, Miyawaki S, Naoe T, Ohno R, Tomonaga M.	144頁~151頁
Karyotype at diagnosis is the major prognostic factor predicting relapse-free survival for patients with Philadelphia chromosome-positive acute lymphoblastic leukemia treated with imatinib-combined chemotherapy.	共著	2008年	Haematologica 93(2) Epub 2008 Jan 26.	Yanada M, Takeuchi J, Sugiura I, Akiyama H, Usui N, Yagasaki F, Nishii K, Ueda Y, Takeuchi M, Miyawaki S, Maruta A, Narimatsu H, Miyazaki Y, Ohtake S, Jinnai I, Matsuo K, Naoe T, Ohno R; Japan Adult Leukemia Study Group.	287頁~290頁
その他					
白血病・悪性リンパ腫治療プロトコール集(改訂版)	共著	2003年6月	医薬ジャーナル社	編集:大野竜三	
研修医・看護師・薬剤師・MRのための血液がんの標準的治療法の実践	共著	2004年5月	医薬情報資料研究所	編集:大野竜三	
みんなに役立つ白血病の基礎と臨床	共著	2004年12月	医薬ジャーナル社	編集:大野竜三、宮脇修一	
よくわかる白血病のすべて	共著	2005年11月	永井書店	編集:大野竜三	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
学会活動					
2005年9月	第47回日本臨床血液学会総会・会長				
2005年10月	第43回日本癌治療学会総会・会長				
2005年10月~ (受賞)	第20期日本学術会議会員				

2001年11月	2001年度東海テレビ文化賞
2004年5月	2004年度 中日文化賞
2006年3月	2006年度 日本薬学会創薬科学賞(共同受賞)
2004年11月	2004年度M.D. Anderson Cancer Center The Distinguished Alumnus Award

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 大庭紀雄	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
『授業評価』の結果をふまえて、講義の進め方を工夫した。		2004年4月～	通常の講義を進める場合には、白板に板書しながら説明することが学生の理解度を増すことが体験的に判明した。一方、いわゆるOA 機器は期待したほどには理解を促進しないことが判明した。こうした観点から授業を進めてきた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
学生が当面の目標とする視能訓練士として必要な『視能学』の学習効率を向上させるために、教科書『視能学』を分担執筆した。		2004年4月～	「光覚、喀順応」、「眼遺伝学」を担当した。		
神経眼科学や眼薬理学のビデオ教材を視能学の観点から作成し、学生から好評を得た。		2004年4月～	眼球運動異常の基礎と臨床の解説		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
視能矯正学や視能訓練学を含めた視能学領域の新しい教育資料を得るために、最近の10年間に国内外の論文発表を網羅的に調査してこの方面の流れを求めた。集めた資料を文献書誌学的に検討して、小児眼科学会や日本眼科学会で発表した。		2004年4月～	主としてMedline収録論文情報について、眼科学、神経眼科学、小児眼科学、視能学の各分野における研究動向を調査した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
当該の学生教育の参考にすべく、『視能学用語事典』や『眼科学用語事典』の作成に着手した。近い将来、出版の予定である。		2004年4月～	視能矯正学、眼科学、視覚生理学、眼光学、眼鏡学の広領域を網羅する。		
視能学に関する基本的用語、英和対照用語集、視能学関連英語の語源に関する冊子を作成して学生に配布した。		2007年10月1日			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
眼科学の歴史、現代眼科学を築いた人々	共著	2003年3月	文光堂	編者:大庭紀雄、分担執筆	1頁～300頁
眼科診療ガイド	共著	2004年3月	文光堂	編集:眼科診療プラクティス編集委員会	317頁～319頁
視能学(光覚)	共著	2005年3月	文光堂	編集:丸尾敏夫	84頁～87頁
視能学(眼遺伝)	共著	2005年3月	文光堂	編集:丸尾敏夫	504頁～508頁
眼科専門医セルフアセスメント第2版	共著	2006年3月	文光堂	編集:眼科専門医セルフアセスメント検討会	1頁～1235頁
論文					
Human T-cell lymphotropic virus type1 - associated retinal vasculitis in children.	共著	2003年2月	Retina. 2003 Apr; 23(2)	Nakao K, Ohba N.	197頁～201頁
Anatomic and visual outcomes after indocyanine green-assisted peeling of the retinal internal limiting membrane in idiopathic macular hole surgery.	共著	2004年4月	Am J Ophthalmol. 2004 Apr;137(4)	Ando F, Sasano K, Ohba N, Hirose H, Yasui O.	609頁～614頁
神経眼科学用語に関するノート	単著	2004年4月	神経眼科 21(2)		173頁～175頁
Indocyanine green-assisted ILM peeling in macular hole surgery revisited.	共著	2004年5月	Am J Ophthalmol. 2004 Nov;138(5)	Ando F, Sasano K, Suzuki F, Ohba N.	886頁～887頁
視力測定の数値と表記:小数か分数かlogMARか	単著	2004年9月	日本眼科学会雑誌 109(9)		303頁～307頁
Optic nerve atrophy after vitrectomy with indocyanine green-assisted internal limiting membrane peeling in diffuse diabetic macular edema.	共著	2004年12月	Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol. 2004 Dec;242(12)	Ando F, Yasui O, Hirose H, Ohba N.	995頁～999頁

Analysis of HLA class I and class II gene polymorphisms in Japanese patients with human T-cell lymphotropic virus type 1-associated uveitis.	共著	2005年3月	Ocul Immunol Inflamm. 2005 Apr-Jun;13(2-3)	Kaminagayoshi T, Nakao K, Yashiki S, Sonoda S, Ohba N, Sakamoto T.	199頁～204頁
眼科学研究の計量書誌学的検討	単著	2005年3月	日本眼科学会雑誌 109(3)		115頁～124頁
神経眼科学論文の計量書誌学的検討	単著	2005年9月	日本眼科学会雑誌 109(9)		475頁～483頁
Notes on ophthalmologic terminology. 2. Orthoptists and ORT (orthoptics)	単著	2006年4月	日本眼科学会雑誌 110(4)		319頁～323頁
Notes on ophthalmological terms: 3. c-spelling and k-spelling—disc/disk and phaco-/phako	単著	2006年5月	日本眼科学会雑誌 110(5)		432頁～436頁
Notes on ophthalmological terminology. 8. Choroid-, choroid-, central retinitis and central serous chorioretinopathy	共著	2006年10月	日本眼科学会雑誌 110(10)	Ohba N, Ohba A	816頁～819頁
Nyctalopia and hemeralopia: the current usage trend in the literature	共著	2006年12月	Br J Ophthalmol 90 (12)	Ohba N, Ohba A	1548頁～1549頁
Change in terminology of macular degeneration and	単著	2006年11月	日本眼科学会雑誌 110(11)		931頁～935頁
Anatomical and visual outcomes after episcleral macular buckling compared with those after pars plana vitrectomy for retinal detachment caused by macular hole in highly myopic eye	共著	2007年1月	Retina 27 (1)	Ando F, Ohba N, Touura K, Hirose H	37頁～44頁
Medical record/electronic medical record	共著	2007年2月	日本眼科学会雑誌 111(2)	伊佐敷 靖、大庭 紀雄	108頁～113頁
Number of bibliographies cited from the Japanese Journal of Ophthalmology	単著	2007年3月	日本眼科学会雑誌 111(3)		296頁～309頁
Lensectomy/lentectomy and vitritis/vitreitis	単著	2007年4月	日本眼科学会雑誌 111(4)		345頁～349頁
Notes on ophthalmological terms. 14. Article citation: 2) Bibliography of Takayasu disease and the frequency of citation of the original article	共著	2007年5月	日本眼科学会雑誌 111(5)	大庭 紀雄、中尾 久美子	419頁～426頁
Ophthalmological notes. 15. Nyctalopia/hemeralopia	単著	2007年6月	日本眼科学会雑誌 111(6)		474頁～478頁
The 100 most frequently cited articles in ophthalmology journals	共著	2007年6月	Arch Ophthalmol 125 (7)	Ohba N, Nakao K, Isashiki Y, Ohba A	952頁～960頁
Phylogenetic evaluation of the CYP1B1 gene in patients with primary congenital glaucoma	共著	2007年7月	Acta Ophthalmol Scand 96 (7)	Isashiki Y, Ohba N	888頁～896頁
The journal impact factor in ophthalmological publications	単著	2007年11月	日本眼科学会雑誌 111(11)		849頁～856頁
The 100 most frequently cited articles in ophthalmology journals: another perspective - reply.	単著	2008年6月	Arch Ophthalmol 126 (6)		873頁～875頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～2003年6月	日本眼科学会評議員
2003年4月～2005年10月	日本臨床電気生理学会理事
2003年4月～2004年3月	日本神経眼科学会監事
2003年4月～2008年3月	日本小児眼科学会監事
1003年4月～2005年3月	Japanese Journal of Ophthalmology, Executive editor
2003年4月	日本眼科学会名誉会員

2003年4月	日本眼科学会特別貢献賞受賞
2004年9月	日本眼光学学会名誉会員
2006年12月	日本神経眼科学会賞受賞
2007年4月	日本眼科学会評議員会賞受賞

所属 医療福祉学部	職名 助教	氏名 小口 将典	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
コミュニケーションシートの活用		2007年4月～	講義終了10分前に、学生一人ひとりに関することや、将来の進路など幅広いテーマを設けて記述をしてもらい、学生の関心分野や将来の進路に合わせた講義内容を展開できるように取り組んでいる。また、繰り返し記入することで、短時間に要点を記述する力を得ることができるよう指導し、記述内容から、学生一人ひとりについて理解するきっかけをつかむようにしている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
美濃加茂高等学校 生涯学習(福祉)講演		2007年12月1日	高校1・2年生470名に対して今日の福祉の現状と、人が人を支える意味について講演をおこなった。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
3-4歳の食事をめぐる母親の悩み -子育て支援への1つの視点として-	単著	2008年3月	人間福祉学会誌		84頁～85頁
3-4歳の食事をめぐる母親の悩み -子育て支援への1つの手がかりとして-	単著	2007年1月	中部学院大学大学院人間福祉学研究科修士学位論文		1頁～55頁
その他					
3-4歳の食事をめぐる母親の悩み -子育て支援への1つの手がかりとして-	単著	2007年9月22～23日	日本社会福祉学会 第55回全国大会		175頁
個別支援計画書の作成と評価における生活理解について	単著	2006年6月	ぎふあいご 平成18年度報誌		56頁～59頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年～2007年		美濃加茂市青少年健全育成委員			



所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 加藤正子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
構音障害の音のイメージを伝える		2005年10月	ビデオ、オーディオテープを用いて障害音の特徴を理解させる。		
音声表記と誤り音の理解の徹底		2005年10月	理解レベルが水準に達するまで、同一課題を繰り返し提出し、学習内容について個人的にフィードバックする。		
専門講師を授業の中でゲストスピーカーとして招聘		2005年12月	吃音治療の言語聴覚士としては、国内有数のキャリアを持つ小澤恵美氏に講義を依頼し、言語臨床の深さを理解させる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
口蓋裂の模型を作成		2004年10月1日	口蓋裂未手術の患者を学生にイメージさせるため、彫刻家に依頼し顔面模型を作成する。		
口蓋裂言語検査		2007年10月1日	口蓋裂の言語を評価するために、臨床用の鼻咽腔閉鎖機能検査と構音検査を作成した。日本コミュニケーション障害学会編としてインテルナ出版から出版する。		
実習の手引きを作成する		2005年2月1日	言語聴覚士養成の臨床科目(学外臨床実習)のための手引き(40頁)を作成する。		
実習準備ノートを作成		2006年10月1日	学外実習に必要な知識・検査・症例報告例が記載されている冊子を作る。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
第25回日本口蓋裂学会シンポジウム		2005年5月1日	「日本における口蓋裂言語の現状」のタイトルで発言する。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
言語聴覚学臨床セミナーの開催		2006年2月1日	「高機能自閉症/アスペルガー症候群の子どものコミュニケーション支援」講師飯塚直美氏が講演する		
		2007年2月1日	「神経心理学・高次脳機能障害研究の新しい展開」講師：河村満氏が講演する		
学外臨床実習担当責任者としての活動		2004年4月～	学生41-50人が6週間x2箇所必要な受け入れ実習施設を開拓する。近隣の臨床家を講師として、言語聴覚士の業務を理解させる。実習指導者会議を開催する。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
構音と音韻の障害	共著	2001年3月	協同医書	船山美奈子監訳	37頁
口蓋裂の言語臨床第2版	共著	2005年3月	医学書院	岡崎恵子・加藤正子	40頁
標準形成外科学	共著	2008年3月	医学書院	秦 維郎編	4頁
論文					
開鼻声の訓練	単著	2001年12月	JOHNS、17巻、8号		6頁
超音波前額断規格撮影法による側音化構音の観察総説	単著	2002年1月	音声言語医学、43巻		10頁
言語臨床は教えられるか	単著	2001年12月	日本聴能言語士協会会報25巻4号		10頁
音韻発達とその障害	単著	2003年8月	聴能言語学研究、20巻		2頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在		日本コミュニケーション障害学会評議員・理事			
2003年4月～2005年8月		日本コミュニケーション障害学会編集委員			
2003年1月～現在		構音臨床研究会構音検査作成委員			
2004年4月～現在		同学会 口蓋裂言語委員会委員長			
2005年1月～現在		日本口蓋裂学会理事			

2005年1月～現在

日本口蓋裂学会編集委員

2005年8月～現在

日本音声言語医学会評議員

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 川嶋英嗣	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
(1)実体験をともなう実習の活用		2004年4月1日から現在に至る	受講者150人の講義で簡単な材料を使った実験を実体験させることで、講義だけでは理解できない内容の理解を促進する試みを行った。		
(2)レポート添削による講義内容理解の即せ印		2005年4月1日から現在に至る	学生が執筆した実験レポートを教員が添削してフィードバックすることで、知識の構造化を促進させ、分析能力や論理展開力を習得させる。		
(3)実験装置作成の体験		2005年4月1日から現在に至る	実験実習では既製の装置を使わずに、受講者自らが装置を作成することで実験の目的と内容の理解を深める。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1)分析シートの作成		2004年4月1日から現在に至る	等照度曲線の作成では膨大な数の数字を扱うが、これをコンピューター等を使わずに手書きで数値を記入し、グラフを作成するシートを作成し、活用した。		
(2)視覚障害をシュミレートした画像の活用		2005年4月1日から現在に至る	眼に障害のある人の見え方をシュミレートした画像を見せることで、記述だけではわからない面を直感的に理解させるのに役立っている。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
(1)愛知淑徳大学医療福祉学部学生生活委員		2004年4月～2005年3月	学生生活全般にわたる環境整備に努めた		
(2)愛知淑徳大学医療福祉学部教務委員		2005年4月～現在に至る	医療福祉学部の教務カリキュラムに関する整備に努めた		
(3)愛知淑徳大学情報メディアセンター情報システム支援部副部長		2005年5月～現在に至る	星が丘校舎マルチメディアセンターの管理運営に努めた		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
眼科プラクティス14 ロービジョン	単著	2007年3月	文光堂	編者:樋田哲夫	90頁～93頁
論文					
視覚機能の低下した成人歩行者の抱える問題と支援	共著	2003年5月	国際交通安全学会誌28巻1号	◎川嶋英嗣・小林章・小田浩一	14頁～24頁
Does limited window size affect text comprehension?	共著	2005年10月	International Congress Series, Vol.1282	◎川嶋英嗣・小田浩一・小林阿紗子・鈴木理子	622頁～626頁
実験用白濁フィルタ装用時における遮光レンズの効果	共著	2006年6月	日本眼科紀要第57巻	◎川嶋英嗣・川瀬芳克・高橋伸子・高橋啓介	472頁～476頁
遮光レンズ装用者の色相弁別能	共著	2007年5月	日本眼科紀要第58巻	◎川嶋英嗣・渡辺あゆみ・伊藤夢美・川瀬芳克・高橋啓介	279頁～284頁
学会発表					
二つの表示方式の読書におけるウィンドウサイズの効果	共著	2003年1月	日本視覚学会2003年冬季大会	◎川嶋英嗣・上崎まゆ・田中恵津子・小田浩一	57頁
電子ディスプレイ上の読書に適した表示方式とウィンドウ幅	共著	2003年6月	第4回日本ロービジョン学会学術総会	◎川嶋英嗣・上崎まゆ・小田浩一・田中恵美子	122頁
電子画面の読書に適した表示方式—スクロール方向とウィンドウ幅の影響—	共著	2003年6月	第12回視覚障害リハビリテーション研究発表大会論文集	◎川嶋英嗣・上崎まゆ・小田浩一・田中恵美子	133頁～136頁
アパチャーを水平垂直に能動的に動かして読むときに必要なサイズ	共著	2003年7月	日本視覚学会2003年夏季大会	◎川嶋英嗣・小田浩一	232頁
読書におけるスクロール方向とウィンドウ幅の効果	共著	2003年9月	日本心理学会第67回大会発表論文集	◎川嶋英嗣・小田浩一	502頁
文章理解度における読書速度の影響	共著	2004年1月	日本視覚学会2004年冬季大会	◎川嶋英嗣・小林阿紗子・小田浩一	68頁
読書が遅いと文章理解が困難になるのか?	共著	2004年6月	第13回視覚障害リハビリテーション研究発表大会	◎川嶋英嗣・小林阿紗子・鈴木理子・小田浩一	33頁

視野制限下での遅い読書は文章理解に影響するの？	共著	2004年7月	日本視覚学会2004年夏季大会	◎川嶋英嗣・鈴木理子・小田浩一	207頁
非常に遅い読書速度における文章理解	共著	2004年9月	日本心理学会第68回大会	◎川嶋英嗣・小田浩一	464頁
Does Limited window size affect text comprehension?	共著	2005年4月	VISION 2005 International Conference on Low Vision	◎川嶋英嗣・小林阿紗子・鈴木理子・小田浩一	61頁
実験用白濁フィルタ装用時の遮光レンズの効果	共著	2005年9月	第6回日本ロービジョン学会学術総会	◎川嶋英嗣・川瀬芳克・高橋伸子・高橋啓介	134頁
遮光レンズ装用時における色相弁別	共著	2006年9月	第7回日本ロービジョン学会学術総会	◎川嶋英嗣・渡辺あゆみ・伊藤夢美・川瀬芳克・高橋啓介	126頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

社会的活動 2003年～現在	特定非営利活動法人 Tokyo Lighthouseにおいて視覚障害者に対するリハビリテーションサービスを提供する活動組織を支える運営を行っている
-------------------	---

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 川瀬芳克	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
(1)教材を利用した体験的な学習の導入	2003年4月から現在に至る	光学や、人の視覚特性の理解に関する学生の理解をすすめ、興味を高めるために自作教材による体験的な講義を行っている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
(1)講義テキスト	2003年4月から現在に至る	ロービジョン学における弱視レンズの光学、視覚生理学および生理光学における屈折、眼光学あるいは小教視力値の統計処理等、すべての講義において講義内容のテキストを作成している。	
(2)教材	2003年4月から講義にあたり随時作成している		
体験用自作模型		個人用教材 屈折異常シミュレーション眼鏡、簡易眼球模型、卓上型拡大鏡、単眼鏡の模型、拡大鏡の倍率体験用具、弱視疑似体験のためのシミュレーション眼鏡、簡易分光器の模型、偏光板キット、統計学におけるサンプリング用教材、眼球運動における座標軸と眼筋の作用方向の模型 展示用教材 波(横波と縦波)の模型、偏光の説明模型、視野計における視標提示方法と、量的視野の模型	
映像		動画乱視における前焦線から最小錯乱円、後焦線に至る結像状態の経過を動画で示したもの	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
平成17年度医療福祉学部主催授業改善・情報交流会「眼屈折の種類と、その体験的理解」(授業を楽しむ教材の作成)	2005年11月29日	授業を楽しむ教材の作成、をテーマとして教員を対象とした公開模擬授業を担当した。その中で、眼屈折(正視・遠視・近視)を確認するための眼球模型と、遠視および近視の見え方を体験するための屈折異常シミュレーションメガネを実際に作成し、それらを用いて眼屈折を解説した。講義内容に対する受講生の関心を高めるとともに理解を深めるための方法として優れていることと、授業時間内に受講生全員が模型製作と体験が可能であることを示した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
学内における委員会活動			
情報システム支援部運営委員会(大学委員会)	2004年4月～2008年3月		
情報システム支援委員会(学部委員会)	2004年4月～2006年3月		
大学附属クリニック開設準備委員会(大学委員会)	2004年4月～2005年3月		
情報メディアサービス部運営委員会(学部委員会)	2005年4月～2008年3月		
教授会運営委員会	2006年4月～現在		
教員資格審査委員会	2006年4月～現在		
入学試験実施委員会	2006年4月～現在		
自己点検・評価委員会	2006年4月～現在		
視覚科学専攻主任	2006年4月～現在		
実務家教員についての特記事項			
(1)視能訓練士課程の学生実習指導	2003年7月8日～8月30日	あいち小児保健医療総合センター眼科、視能訓練科にて平成医療専門学院学生の実習指導を行った。	
	2004年3月2日～3月12日	あいち小児保健医療総合センター眼科、視能訓練科にて東海医療工学専門学校学生の実習指導を行った。	
(2)視能訓練士課程の学生への講義	2003年～現在	大阪医療センター附属視能訓練学院にて視覚障害学、電気生理学および統計学(視力の基本と統計処理)について講義するとともに実習を行った	
	2003年～現在	新潟医療技術専門学校にて光学、眼屈折について講義した	
	2003年～現在	平成医療専門学院にて弱視レンズの光学について講義した	
	2004年～現在	東海医療科学専門学校にて弱視レンズの光学について講義した	

	2003年～現在	福岡国際医療福祉学院にて視角と視力および弱視レンズの光学について講義した
	2003年	大阪医専にて弱視レンズの光学について講義した
	2006年	川崎医療福祉大学にて統計学の基本について講義した
(3) 養護教諭課程の実習学生への講義および実習指導		
視力・屈折・両眼視機能とその異常およびロービジョンについて	2004年2月24日, 26日, 3月10日, 13日, 16日	あいち小児保健医療総合センター眼科、視能訓練科にて愛知教育大学養護教諭課程の学生を対象に講義と実習指導を行った。
(4) 養護教諭課程の実習学生への講義		
視力・屈折・両眼視機能とその異常およびロービジョンについて	2005年2月25日, 2005年8月3日, 10日	あいち小児保健医療総合センター眼科、視能訓練科にて愛知教育大学養護教諭課程の学生を対象に講義を行った。
視力・屈折・両眼視機能とその異常およびロービジョンについて	2005年8月26日	あいち小児保健医療総合センター眼科、視能訓練科にて愛知みずほ大学養護教諭課程の学生を対象に講義を行った。
(5) 非常勤講師・兼任講師		
独立行政法人大阪医療センター附属視能訓練学院非常勤講師を兼任	2003年10月～現在に至る	現在、視覚障害学、統計学、電気生理学の講義および実習を担当
あいち小児保健医療総合センター病院非常勤職員を兼任	2004年5月～現在に至る	月に2回、視能訓練士業務に従事

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
視能学	共著	2005年3月	文光堂	編集:丸尾敏夫、久保田伸枝、深井小久子 共著者:小林義治、中山幸、山田徹人、石川均、庄司信行、後藤晋、奥英弘、所敬、可児一孝、北原健二、大庭紀雄、新井田孝裕、加藤桂一郎、平井宏明、前田直之、大鹿哲郎、魚里博、三村治、不二門尚、久保田伸枝、深井小久子、坂上達志、田邊宗子、丸尾敏夫、田淵昭雄、向野和雄、平井淑江、白井千恵、林孝雄、内田冴子、藤山由紀子、松橋正和、稲田英一、川瀬芳克、野川由紀、沖坂重邦、佐々木爽、水木信久	「II. ロービジョン」の節を分担執筆した。 475頁～487頁
視能訓練士—スペシャリストへの道(3)	共著	2005年12月	メディカル葵出版	編集:山本節 共著者:鶴飼一彦、内川義和、内海隆、金谷まり子、黒田紀子、調広子、菅澤淳、関谷善文、瀧畑能子、仁科幸子、野村耕治、濱村美恵子、林孝雄、平井淑江、福山千代美、母坪雅子、溝部恵子、矢ヶ崎悌司、山縣祥隆、山下牧子、横山連、若山暁美	
ロービジョンケアの実際—視覚障害者のQOL向上のために(第2版)	共著	2006年5月	医学書院	編集:高橋広 共著者:高橋広、山田信也、川瀬芳克、中野泰志、小杉眞司、太田裕子、工藤正一、工藤良子、	検査、光学と光学的補助具および学童のロービジョンケアを主に分担した。

小児眼科の検査と視能訓練	共著	2006年8月	メディカ出版	編集：佐藤美保 共著者：佐藤美保、鶴飼喜世子、安間光子、稲垣理佐子、金子智美、菅原純一、天野みゆき、島田佳世、川上理知子、正木勢津子、市原美重子、内海隆、児玉綾子、吉原いづみ、長谷部聡、野原尚代、仁科幸子、櫻井寛子、梅田千賀子、中村悦子	小児のロービジョンケアを分担執筆した。
視能学（増補版）	共著	2006年10月	文光堂	編集：丸尾敏夫、久保田伸枝、深井小久子 共著者：小林義治、中山幸、山田徹人、石川均、庄司信行、後藤晋、奥英弘、所敬、可児一孝、北原健二、大庭紀雄、新井田孝裕、加藤桂一郎、平井宏明、前田直之、大鹿哲郎、魚里博、三村治、不二門尚、久保田伸枝、深井小久子、坂上達志、田邊宗子、丸尾敏夫、田淵昭雄、向野和雄、平井淑江、白井千恵、林孝雄、内田冴子、藤山由紀子、松橋正和、稲田英一、川瀬芳克、野川由紀、沖坂重邦、佐々木爽、水木信久	「Ⅱ．ロービジョン」の節を分担執筆した。
視能訓練士—スペシャリストへの道（4）	共著	2006年11月	メディカル葵出版	編集：山本節 共著者：有若由加里、磯辺真理子、稲垣尚恵、鶴飼一彦、内川義和、内海隆、金谷まり子、木村亜紀子、菅澤淳、杉山能子、関谷善文、田邊宗子、中前美佳、仁科幸子、野村耕治、濱村美恵子、林孝雄、平井淑江、母坪雅子、溝部恵子、横山連	
ロービジョンケアガイド（眼科プラクティス14）	共著	2007年3月	文光堂	編集：樋田哲夫 共著者：樋田哲夫、高橋広、佐渡一成、小田浩一、田中恵津子、阿曾沼早苗、藤田京子、小林章、末成智子、白木邦彦、山田信也、尾形真樹、福井良太、小平奈利、張替涼子、松崎純子、氏間和仁、新井千賀子、小林幸一郎、村上琢磨、川嶋英嗣、山縣祥隆、清水美和子、鈴嶋よしみ、仲泊聡、仁科幸子、中野泰志、清水里美、築島謙次、西脇友紀、井上朱實、中村仁美、湯澤美都子、守本典子、北林裕、石井京子、篠島永一、吉野由美子、工藤良子、加藤俊和、神尾裕治、藤芳衛、永井春彦、原利明、古屋真一郎、石川充英、良久万里子	視機能のうち視力と屈折、および小児への補助具導入について分担執筆した。

小児の眼疾患診療まるごとマスター（眼科インストラクションコース12）	共著	2007年6月	メジカルビュー社	編集：佐藤美保、黒坂大次郎 共著者：八子恵子、久保田敏信、西村香澄、嘉島信忠、栗橋克昭、海老原伸行、北川和子、平野耕治、羽藤晋、山田昌和、長谷部聡、磯部真理子、矢ヶ崎悌司、菅澤淳、初川嘉一、仁科幸子、三村治、高木峰夫、三木淳司、若倉雅登、安藤靖恭、齋藤代志明、杉山和久、相良健、野村耕治、高良由紀子、鈴木茂伸、平岡美依奈、小出健郎、佐藤達彦、日下俊次、中村誠、内海隆、堀田善裕	小児のロービジョンを分担執筆した。
------------------------------------	----	---------	----------	---	-------------------

論文

細胞検査士の健康管理 第一報	共著	2003年7月	日本臨床細胞学会雑誌 第42巻	共著者：◎猪狩咲子、團野誠、大村峯夫、一迫玲、川瀬芳克、是松元子、布引治、上野喜三郎	
ERG検査とVEP検査をより正確に行うための留意点	単著	2003年（年刊）	日本視能訓練士協会誌 第32巻		79頁～86頁
遠用視覚補助具選定のコツ	単著	2004年3月	日本弱視斜視学会報 第40巻		14頁～21頁
視能訓練士の参加による健診業務の発展	共著	2004年6月	臨床眼科 第58巻 第6号	共著者：湖崎克、山下牧子、川瀬芳克、脇坂美代子、濱井保名、八子恵子、福山千代美、恒川幹子（全員が単著の形式で著述）	1061頁～1063頁
網膜疾患を有する小児に対するLE-2000の有用性	共著	2004年7月	眼科臨床医報 第98巻	共著者：◎櫻井寛子、上野真治、近藤峰生、川瀬芳克、天野みゆき、山田英機、都築欣一	
単眼鏡の操作に関する研究 その1ー焦点調節に要する鏡筒の回転角度の量ー	単著	2005年3月	医療福祉研究 第1号		33頁～35頁
眼科と盲学校の連携の経験	単著	2005年9月	日本眼科紀要 第56巻 第9号		740頁～744頁
ロービジョン児への対応	単著	2005年11月	あたらしい眼科 第22巻 第11号		1535頁～1539頁
実験用白濁フィルタ装用時の遮光眼鏡の効果	共著	2006年8月	日本ロービジョン学会誌 第6巻	共著者：◎川嶋英嗣、川瀬芳克、高橋伸子、高橋啓介	194頁～198頁
3歳児健診での視力検査ースクリーニングの方法と基準作成ー	単著	2007年3月	基礎心理学研究 第25巻 第2号		262頁～266頁

看護誌への発表

小児のロービジョン外来(前編)	単著	2006年3月	眼科ケア 第8巻 第3号		273頁～277頁
小児のロービジョン外来(後編)	単著	2006年4月	眼科ケア 第8巻 第4号		74頁～79頁

学会発表

三歳児健診視覚検査における視力検査効率化の試み(視能訓練士の参加による効果の評価)	共同発表	2003年6月	第407回東海眼科学会	◎天野喜仁、梶原喜久子、御宿真理子、山口直子、川瀬芳克、都築欣一	三歳児健診の視覚検査に視能訓練士が参加することで視力検査の可能率が著しく向上し、健診の効率化に効果があったことを示した。
網膜疾患が疑われた小児に対するLE-2000の使用経験	共同発表	2003年6月	第59回日本弱視斜視学会・第28回日本小児眼科学会合同学会	◎柿原寛子、近藤峰生、川瀬芳克、天野みゆき、山田英機、都築欣一	ERG測定器LE-2000の実用性を症例で示した
遠用視覚補助具の選定のコツ	単独発表	2003年6月	第19回日本弱視斜視学会講習会		ロービジョンケアのコツというテーマにおいて主に単眼鏡の基本と選定の実際について発表した



視能訓練士の業務の拡大と視覚検査への参加意義	単独発表	2003年11月	第57回日本臨床眼科学会 ORTプログラム		「健診業務と視能訓練士の関わり」をテーマとしたシンポジウムにおいて、視能訓練士の業務が視覚健診とロービジョンサービスの面で増加していることを示すとともに、視覚健診に参加する効果について発表した
ロービジョンサービスにおける眼光学—QOL向上のための視能矯正—	単独発表	2004年9月	第40回日本眼光学学会		「眼光学と視能矯正—QOLの向上を目指して—」をテーマとしたシンポジウムにおいて、ロービジョンサービスを進める上で眼光学の知識が不可欠であることを症例に基づいて示した
Welch Allyn社製シュアサイト オートレフラクタの使用経験	共同発表	2004年10月	第45回日本視能矯正学会	◎市原美重子、天野みゆき、山口直子、橋村星美、春日井めぐみ、浅野典子、櫻井寛子、都築欣一、川瀬芳克	新しく出された手持ち式自動屈折計の特性を従来の機器と比較して示した
視覚障害をもつ子どもへのロービジョンケア	共同発表	2004年11月	第58回日本臨床眼科学会	高橋広、唐木剛、仁科幸子、川瀬芳克、山田信也	医師を対象としたインストラクションコースにて、小児のロービジョンサービスのうち光学的補助具の選択と指導について解説した
眼科と盲学校の連携の経験	単独発表	2004年11月	第70回日本中部眼科学会		「小児のロービジョンケア—盲学校との連携—」をテーマとしたシンポジウムにおいて、眼科と盲学校の連携の経験と留意点を事例に基づき視能訓練士の立場から報告した
実験用白濁フィルタ装着時の遮光眼鏡の効果	共同発表	2005年9月	第6回日本ロービジョン学会学術総会・第14回視覚障害リハビリテーション研究大会合同会議	◎川嶋英嗣、川瀬芳克、高橋伸子、高橋啓介	
実験用白濁フィルタの試作と分光透過率の分析	共同発表	2005年9月	第6回日本ロービジョン学会学術総会・第14回視覚障害リハビリテーション研究大会合同会議	◎川瀬芳克、川嶋英嗣、高橋伸子、高橋啓介	実験用白濁フィルターの光学的特性とこれを用いた際の見え方を示した
視野障害への対応とその困難性	単独発表	2005年10月	第59回日本臨床眼科学会 ORTプログラム・シンポジウム		視野障害の種類とその見え方の特徴およびその補償について述べた
Teller Acuity Cards I と Teller Acuity Cards II の比較検討	共同発表	2005年11月	第46回日本視能矯正学会	◎春日井めぐみ、浅野典子、堀普美子、櫻井寛子、川瀬芳克	両者間のコントラストの違いと測定視力の差を示した
三歳児健診での視力検査：スクリーニングの方法と基準作成	単独発表	2006年4月	日本基礎心理学会2006年度第1回フォーラム		視覚検査の基準作成過程とその根拠、視覚検査の成績について解説した
3歳児健診の要精検児の経過	共同発表	2006年6月	第62回日本弱視斜視学会・第31回日本小児眼科学会総会	◎堀普美子、天野みゆき、市原三重子、橋村星美、浅野典子、櫻井寛子、都築欣一、川瀬芳克	

小児におけるアイケア手持眼圧計の使用経験	共同発表	2006年9月	第413回東海眼科学会	◎浅野典子、堀普美子、市原三重子、春日井めぐみ、櫻井寛子、都築欣一、川瀬芳克	
高輝度の人工太陽灯を用いた視機能評価装置	共同発表	2006年9月	第7回日本ロービジョン学会学術総会・第15回視覚障害リハビリテーション研究大会合同会議	◎川瀬芳克、川嶋英嗣、高橋伸子、高橋啓介	
遮光レンズ装用時における色相弁別	共同発表	2006年9月	第7回日本ロービジョン学会学術総会・第15回視覚障害リハビリテーション研究大会合同会議	◎川嶋英嗣、渡辺あゆみ、伊藤夢美、川瀬芳克、高橋啓介	
パソコンの白黒反転表示による作業効率向上の実証的検討	共同発表	2007年9月	第8回日本ロービジョン学会学術総会・第16回視覚障害リハビリテーション研究大会合同会議	◎森由美子、御手洗慶一、中田友美、岩橋佳子、川瀬芳克	
研究会発表					
3歳児健診の視覚検査における視能訓練士参加の報告	共同発表	2004年1月	第27回愛知県公衆衛生研究会	清水秀美、浅井恵、柴川ゆかり、手嶋久美子、鈴木和恵、竹内清美、伊藤求、川瀬芳克、	3歳児健診の視覚検査に視能訓練士が参加することで視力検査の可能性が著しく向上し、健診の効率化に効果があったことを発表した。
講演					
遠用補助具の光学 1	単独発表	2003年4月	OLB勉強会		視能訓練士を対象に遠用補助具の講演を行った
視力・屈折と光学的補助具の関係	単独発表	2003年7月	静岡盲学校校内研修会		盲学校教諭を対象に視力や屈折の基本と各種拡大鏡など光学的補助具について講演した
ロービジョンケアにおける視能訓練士の役割	単独発表	2003年7月	平成15年度視能訓練士実習施設指導者等養成講習会		ロービジョンサービスにおける視能訓練士の役割と光学的補助具の指導について解説した
「障害の理解と心理・医療」(視覚障害)視力・屈折と光学的補助具の関係	単独発表	2003年7月	愛知県教育センター2003年度盲・聾・養護学校教職5年経験者研修		盲学校教諭に対して視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
視力・屈折・光学的補助具	単独発表	2003年8月	教育・福祉従事者のためのロービジョン研修会		視力・屈折の理論的解説と光学的補助具の指導について講演した。
「弱視」の理解について	単独発表	2003年8月	愛知県教育センター平成2003年度盲・聾・養護学校10年経験者研修		盲学校教諭に対して弱視疑似体験を行うとともに、視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
遠用補助具の光学 2	単独発表	2003年9月	OLB勉強会		単眼鏡の視界について講演を行った
弱視とその理解	単独発表	2003年10月	あいち小児保健医療総合センター保育リーダー研修		地区の保育士を対象に弱視疑似体験を行うとともに視覚障害としての弱視について講演を行った
視覚の不思議発見!	単独発表	2003年10月	第6回日進東中学校健康教室		中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した

視覚の不思議発見！	単独発表	2003年11月	2003年度春木中学校「福祉・健康教室」	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
logMAR視力・屈折・光学的補助具	単独発表	2003年11月	医療従事者のためのロービジョン研修会	対数視力等の理論的解説と光学的補助具の指導について講演した
視覚健診の方法と効果	単独発表	2003年12月, 2004年2月	あいち小児保健医療総合センター所内研修会	市町村保健師を対象に視機能の発達、視力、屈折等の基本、視覚健診の方法と効果の解説と視力検査法の実習を同内容で4回行った
眼科・視能訓練科の業務紹介	単独発表	2003年12月	あいち小児保健医療総合センター2004年度地域保健医療連携支援研修会	医事業務従事者を対象に、眼科および視能訓練科の業務を解説し、視能訓練士の役割を紹介した
遠用補助具の光学3	単独発表	2004年2月	OLB勉強会	単眼鏡の操作と回折レンズを用いた補助具について講演を行った
乳幼児期のロービジョンケア	単独発表	2004年3月	国立特殊教育総合研究所2003年度短期研修	乳幼児期の視覚発達と視覚障害児へのケアについて講演した
三歳児健診における視覚検査について	単独発表	平成16年3月	豊田市保健所保健師研修会	視機能の発達・視力・屈折等の基本と弱視・斜視について解説し、視覚検査の方法と効果を示した
三歳児健診における視覚検査について	単独発表	2004年3月	大府市保健センター保健師研修会	視機能の発達・視力・屈折等の基本と弱視・斜視について解説し、視覚検査の方法と効果を示した
拡大読書器の指導法	単独発表	2004年5月	OLB勉強会	拡大読書器の指導法を紹介するとともに実習を行った
光学的補助具の光学	単独発表	2004年5月	ロービジョンフォーラム in 鹿児島、専門家向け講習会	医師、視能訓練士、リハ職員、盲学校教諭等を対象に光学的補助具の基礎事項の講演と簡単な体験を行った
ロービジョンケアにおける視能訓練士の役割	単独発表	2004年7月	2004年度視能訓練士実習施設指導者等養成講習会	ロービジョンサービスにおける視能訓練士の役割と光学的補助具の指導について解説した
「障害の理解と心理・医療」(視覚障害)視力・屈折と光学的補助具の関係	単独発表	2004年7月	愛知県教育センター2004年度盲・聾・養護学校教職5年経験者研修	盲学校教諭に対して視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
屈折の基本と光学的補助具	単独発表	2004年8月	柳川ロービジョン研修会	医師・視能訓練士・盲学校教諭などを対象に屈折と光学的補助具について体験的に解説した

各種弱視レンズの基礎—主に屈折異常との関連において	単独発表	2004年8月	岡崎盲学校校内研修会	盲学校教諭を対象に屈折の基本と各種拡大鏡など光学的補助具について講演した
「弱視」の理解について	単独発表	2004年8月	愛知県教育センター2004年度盲・豊・養護学校10年経験者研修	盲学校教諭に対して弱視疑似体験を行うとともに、視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
視機能評価と視覚補助具の選定	単独発表	2004年8月	栃木県教育委員会2004年度視覚障害教育研修	盲学校教諭に対して、視力・屈折・視野の基本および補助具の基礎的な知識について解説した
屈折の基本と光学的補助具	単独発表	2004年9月	柳川ロービジョン研修会	医師・視能訓練士・視覚障害指導員などを対象に屈折と光学的補助具について体験的に解説した
非光学的補助具の指導法	単独発表	2004年9月	OLB勉強会	非光学的補助具を紹介するとともに実習を行った
乳幼児期のロービジョンケア	単独発表	2004年10月	2004年度国立特殊教育総合研究所第二期短期研修	、乳幼児期の視覚発達と視覚障害児へのケアについて、盲学校教諭等を対象に講演した
視覚の不思議発見！	単独発表	2004年11月	第7回日進東中学校健康教室	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
視覚の不思議発見！	単独発表	2004年11月	2004年度春木中学校「福祉・健康教室」	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
3歳児健診での視力検査について	単独発表	2005年3月	豊田市母子保健事業研修会	保健師を対象に講演し、視機能の発達・視力・屈折等の基本と弱視・斜視について解説し、視覚検査の方法と効果を示し、視力検査の実際について説明した
視覚で楽しもう！	単独発表	2005年3月	OLB勉強会	錯視の実際や逆さメガネなどを体験的に解説した
近用拡大鏡の光学1 拡大鏡の理論と体験	単独発表	2005年5月	OLB勉強会	近用拡大鏡の光学について体験を取り入れ解説した
保有視覚活用の援助 眼科でのロービジョンサービス	単独発表	2005年5月	日本網膜色素変性症協会全国大会2005 in名古屋	視覚障害者が保有視覚を活用する方法の紹介と眼科にて行っている援助について解説した
乳児と幼児期のロービジョンケア	単独発表	2005年6月	2005年度国立特殊教育総合研究所第一期短期研修	、乳幼児期の視覚発達と視覚障害児へのケアについて、盲学校教諭等を対象に講演した

ロービジョンケアにおける視能訓練士の役割	単独発表表	2005年7月	2005年度視能訓練士実習施設指導者等養成講習会	ロービジョンサービスにおける視能訓練士の役割と光学的補助具の指導について解説した
屈折の基本と光学的補助具	単独発表表	2005年7月	柳川ロービジョン研修会	医師・視能訓練士・視覚障害指導員などを対象に屈折と光学的補助具について体験的に解説した
「障害の理解と心理・医療」(視覚障害)視力・屈折と光学的補助具の関係	単独発表表	2005年7月	愛知県教育センター2005年度盲・聾・養護学校教職5年経験者研修	盲学校教諭に対して視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
視力・両眼視機能の発達とその障害および対応について	単独発表表	2005年8月	「エール」鳥取県自閉症・発達障害支援センターの講演会「見ることは理解すること(子どもの視覚機能の発達について)」	療育関係者、保健師、保育士などを対象に視覚発達について講演した
自立活動「弱視」の理解について	単独発表表	2005年8月	愛知県教育センター2005年度盲・聾・養護学校10年経験者研修	特殊教育に従事する教諭に対して弱視疑似体験を行うとともに、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
弱視疑似体験と視機能検査	単独発表表	2005年9月	柳川ロービジョン研修会中級コース	弱視疑似体験を実施するとともに必要な視機能検査や補助具について述べた
子どもとめがね	単独発表表	2005年9月	あいち小児保健医療総合センター2005年度ボランティア研修会	視覚発達と眼鏡の働きについて解説した
手持ち式拡大鏡の光学 2	単独発表表	2005年10月	OLB勉強会	手持ち式拡大鏡の光学の基礎と倍率および屈折異常との関係について述べた
視覚の不思議発見!	単独発表表	2005年11月	2005年度春木中学校「福祉・健康教室」	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
視角からみた小数視力・対数視力・logMAR値	単独発表表	2005年11月	第7回みやぎORTの会	視能訓練士の研修会において、小数視力、対数視力、logMAR値について理論とその目的を解説した
見え方の不思議体験	単独発表表	2005年11月	第7回みやぎORTの会	錯視などを紹介した
近用拡大レンズ・縮小レンズの光学	単独発表表	2006年2月	OLB勉強会	金曜拡大レンズの倍率、眼鏡との併用、縮小レンズの使い方について解説した
弱視レンズの光学 1	単独発表表	2006年5月	ひょうごロービジョン研究会	幾何光学の基本、光路図の描き方から金曜弱視レンズの光学的基礎まで解説した
乳児と幼児期のロービジョンケア	単独発表表	2006年5月	2006年度国立特殊教育総合研究所第一期短期研修	、乳幼児期の視覚発達と視覚障害児へのケアについて、盲学校教諭等を対象に講演した
近用拡大鏡の光学 補遺	単独発表表	2006年6月	OLB勉強会	近用拡大鏡の倍率の詳細について解説した

ロービジョンケアにおける視能訓練士の役割	単独発表	2006年7月	2006年度視能訓練士実習施設指導者等養成講習会	ロービジョンサービスにおける視能訓練士の役割と光学的補助具の指導について解説した
屈折の基本と光学的補助具	単独発表	2006年7月	柳川ロービジョン研修会 in 京都	医師・視能訓練士・視覚障害指導員などを対象に屈折と光学的補助具について体験的に解説した
「障害の理解と心理・医療」(視覚障害) 視力・屈折と光学的補助具の関係	単独発表	2006年7月	愛知県教育センター2006年度盲・聾・養護学校教職5年経験者研修	盲学校教諭に対して視力、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
自立活動「弱視」の理解について	単独発表	2006年8月	愛知県教育センター2006年度盲・聾・養護学校10年経験者研修	特殊教育に従事する教諭に対して弱視疑似体験を行うとともに、屈折および補助具の基礎的な知識について解説した
屈折の基本と光学的補助具	単独発表	2006年9月	柳川ロービジョン研修会 in 京都 2	医師・視能訓練士・視覚障害指導員などを対象に屈折と光学的補助具について体験的に解説した
3歳児健診における視覚検査の意義と方法	単独発表	2006年10月	2006年度一宮保健所管内保健師等現任教職研修会	3歳児健診視覚検査の目的、方法と効果について解説した
単眼鏡の光学と操作の基礎	単独発表	2006年10月	OLB勉強会	単眼鏡の光学的な特性と操作・指導の方法について解説した
視覚の不思議発見!	単独発表	2006年11月	2006年度春木中学校「福祉・健康教室」	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
近用拡大レンズ・縮小レンズの光学	単独発表	2006年11月	ひょうごロービジョン研究会	金曜拡大レンズの倍率、眼鏡との併用、縮小レンズの使い方について解説した
弱視レンズの光学的基本と屈折異常との関係を中心に	単独発表	2006年11月	三重県視能訓練士研究会	弱視レンズの光学的な基本と屈折異常の関係を解説するとともに教材を用いて体験を行った
乳幼児の視力検査 3歳児健診を中心として	単独発表	2006年11月	静岡地区保健師研修会	3歳児健診視覚検査の目的、方法と効果について解説した
弱視レンズの光学的基本と屈折異常	単独発表	2006年11月	名古屋盲学校校内研修会	弱視レンズの光学的な基本と屈折異常の関係を解説するとともに教材を用いて体験を行った
可能性を大切にしたい光学的補助具の指導の報告	単独発表	2007年2月	柳川ロービジョン研修会 京都フォローアップ講習会	視覚障害者の要望に応じた光学的補助具指導について症例を挙げて解説した
単眼鏡の指導の実際	単独発表	2007年2月	OLB勉強会	単眼鏡の操作指導をする際の留意点について述べた

視覚障害者用光学機器実践講座	単独発表	2007年3月	神奈川ロービジョンネットワーク研修会	光学的補助具の基本について講演した
遮光レンズの光学的特性と視機能	単独発表	2007年5月	2007九州ロービジョンフォーラムin宮崎専門家向け講習会	遮光レンズによる短波長遮断を分光器の模型により示すとともに色誤認などについて述べた
遮光レンズの光学的特性と視機能	単独発表	2007年5月	OLB勉強会	遮光レンズによる短波長遮断を分光器の模型により示すとともに色誤認などについて述べた
乳幼児のロービジョンケア	単独発表	2007年6月	2007年度第一期特別支援教育専門研修	、乳幼児期の視覚発達と視覚障害児へのケアについて、盲学校教諭等を対象に講演した
子どもの屈折、視力とメガネ	単独発表	2007年6月	日進市立日進東小学校第一回保健委員会講演会	眼屈折の基本を解説するとともに視覚の発達と眼鏡の関係についても述べた
ロービジョンケアにおける視能訓練士の役割	単独発表	2007年7月	2007年度視能訓練士実習施設指導者等養成講習会	ロービジョンサービスにおける視能訓練士の役割と光学的補助具の指導について解説した
光学的補助具と屈折異常の関係	単独発表	2007年8月	神奈川ロービジョンネットワーク研修会	手持ち式、卓上式拡大鏡および単眼鏡の光学的基本と未矯正の屈折異常との関係について講演した
単眼鏡の基本	単独発表	2007年8月	ひょうごロービジョン研究会	視能訓練士を対象に単眼鏡の光学について講演した
キラー社製弱視眼鏡の実際と操作および非光学的補助具について	単独発表	2007年10月	OLB勉強会	
視覚の不思議発見！	単独発表	2007年11月	2007年度春木中学校「福祉・健康教室」	中学生を対象に錯視などを用いて視覚の不思議さ、面白さを体験的に紹介した
長期に経過観察したロービジョン児の事例報告	単独発表	2007年11月	ロービジョンケアを学ぶ会・京都	弱視児の将来を考える親と教師のための講演会において事例報告を行い必要とされるサービスについて述べた
単眼鏡の操作、ピントの確認	単独発表	2007年11月	ひょうごロービジョン研究会	視能訓練士を対象に単眼鏡の操作、特にピント合わせの方法について講演した
拡大読書器の指導法	単独発表	2008年2月	OLB勉強会	拡大読書器の操作方法について解説し、実習を行った
視機能評価と連携に関する事例報告	単独発表	2008年3月	静岡視覚障害者福祉推進協議会研修会	盲学校教師、医師、視能訓練士などを対象に医療機関と他機関との連携事例と視機能評価の実際について解説した

### III 学会等および社会における主な活動

1994年5月～2006年4月	日本視能訓練士協会白書委員会委員
2000年4月～現在に至る	日本ロービジョン学会理事

2001年4月～現在に至る

日本ロービジョン学会用語委員会委員

2003年4月～現在に至る

日本視能訓練士協会生涯教育委員会委員



所属 医療福祉学部	職名 助教	氏名 木村淳也	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①リアクションペーパーの活用		2004年8月～2008年2月	①講義終了時にリアクションペーパーを用い、コメントを次回講義に反映した。自分以外の学生の考えを伝えることで相互理解のためのディスカッションを行った。		
②提出課題へのフィードバック		2004年8月～2008年2月	②レポート等提出された課題に対し、コメント等を記入した上で返却を行う。あるいは、学生に直接コメントを伝えるなどフィードバックを行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
社会福祉士国家試験 受験対策資料		2005年～2007年	受験対策講座 資料の作成		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
茨城県社会福祉士会 国家試験受験対策講座		2005年～2007年	受験対策講座講師		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
①高齢者に対する「不適切介護」を扱う文献に関する検討と考察	単著	2007年2月	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科紀要第5号		61頁～70頁
②不適切介護に関する研究—自験事例における「無自覚な熱意」から—	単著	2008年3月	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科修士論文		110頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2006年2月～現在	NPO法人 認知症ケア研究所所属 「地域密着型サービス」調査員				
2008年6月～	日本介護福祉学会 会員 日本社会福祉学会 会員				
2008年5月～	人間福祉学会 会員				

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 神波幸子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
(1) 講義をより分かりやすくするために、講義ごとに毎回レジュメを配布している。また講義に即したビデオ、映画、新聞記事、小説、絵本、童話などを用い活用している。	2003年4月～現在に至る	社会福祉援助技術総論・各論、社会福祉援助技術演習では、面接の技法・聴くということ・自己開示・自己覚知、回想法等の授業をよりわかりやすくするために関連ビデオを使用したり、映画、絵本を用いてジェノグラム、エコマップを作成し、SWの視点から考えることや、グループディスカッションを取り入れ、自己表現できるようにしている。高齢者福祉論では制度や福祉サービスの内容、専門職者の役割や業務などをビデオを活用することで理解を深めてもらえるようにしている。			
(2) 社会福祉援助技術演習では年間6冊の本を読むことを課し、レポートを作成する。授業で各自が一番印象に残った本を報告するようにしている。	2003年4月～現在に至る	社会福祉を学ぶ学生として読んでみたい本を100冊程度を示し、この中から年間6冊(前期基礎編3冊・後期専門編3冊)を読み、感想文を提出する。これにより、読書への興味、社会福祉問題、人間関係、対人援助に関心を示すようになる。また集中講義で同じ本を読んだものでディスカッションを行い、福祉的視点を身につけるようにしている。			
(3) 高齢者福祉論では、学生がどのようなイメージで老いや、高齢者、高齢者福祉施設を捉えているかまたどのように興味や関心をもっているかを、年度当初にアンケートをとり、学生の関心、興味の多い問題を授業計画に取り入れている。	2004年4月～現在に至る	年度当初のアンケート調査により、学生のより関心のあるテーマについて、現場の事例を多く取り入れながら授業を進め、また、現場の職員の方にも授業に協力してもらって、高齢者福祉の諸問題を理解してもらおうようにしている。			
(4) 社会福祉援助技術現場実習では、実習終了後実習中に一番困った場面や実習終了後一番印象に残った事例を絵に表現し、各自が発表し、それをグループでディスカッションしている。	2005年4月～現在に至る	実習事後指導の一環として行っており、実習のふりかえりと自己覚知に役立て、実習のまとめにもなっている。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
新しいソーシャルワーク入門	共著	2001年5月(初版)、学陽書房、河野貴代美・杉本貴代栄編者、6頁～40頁、177頁～187頁			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
(1) ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの芽生えー社会福祉実習教育を通しての一考察ー	2005年7月	第22回日本社会福祉実践理論学会発表			
(2) 実習教育における学生のエンパワーメント	2005年5月	第46回日本キリスト教社会福祉学会発表			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
(1) 社会福祉士・精神保健福祉士国家試験対策にe-Learningを導入するとともに学内模擬試験、受験講座開始 (2) 社会福祉援助技術現場実習の授業において、実習事前準備から24日間の本実習、実習終了後の過程において大学・現場・実習内容・実習指導者・自分自身に関する気持ちの変化を学生がチャートに記入し、本学の学生の福祉職へのアイデンティティへの変化のプロセスを探求	(1) 2006年12月～現在に至る (2) 2005年4月～現在に至る	(1) 社会福祉士・精神保健福祉士国家試験の合格率が低いためe-Learningを導入し、学生の意識を高め、学力の向上を図る。e-Learningの学習効果を週1回の学内模試で発揮できるようにし、また授業にも反映できるようにし、e-Learning学習状況、学内模試参加状況を管理する。e-Learningのシステム化を図る。(2) 社会福祉援助技術現場実習の授業において、実習事前準備から24日間の本実習、実習終了後の過程において大学・現場・実習内容・実習指導者・自分自身に関する気持ちの変化をチャートに記入し学生個人のふりかえりと本学の学生の福祉職へのアイデンティティへの変化のプロセスを追い、実習教育の在り方を探求している			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
マレーシアにおける障害者ー市民権とソーシャルワーク	共訳	2004年12月	日本文学館	デニソン・ジャヤアオーニア 著神波康夫・神波幸子共訳	383頁
マレーシアにおけるセクシャルハラスメント	共訳	2005年8月	東南アジア社会問題研究会(自費出版)	セシリア ウン、ザナリア モメド ノア、マリア チン ピンチアブドラ著神波康夫・神波幸子共訳	159頁
論文					

ケアマネジメントプロセスにおけるモニタリングについて—津山市及びその周辺地域のケアマネージャーの意識調査を通してのモニタリングチャート作成の試み—	単著	2003年2月	キリスト教社会福祉学研究第35号	神波幸子著	125頁～131頁
ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの芽生え—社会福祉実習教育を通しての一考察—	共著	2005年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第1号	神波幸子・谷口純世・金田千賀子著	66頁～77頁
マレーシアにおける高齢者福祉	単著	2006年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第2号	神波幸子著	11頁～22頁
認知症高齢者のケアハウスにおける生活支援の現状と課題	共著	2007年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第3号	神波幸子・金田千賀子著	36頁～51頁
認知症高齢者のケアハウスにおけるくらしとその支援に関する基礎的研究—アンケート調査報告書	共著	2007年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部	神波幸子・金田千賀子著	1頁～43頁
認知症高齢者の生活支援に際してのもどかしさ—ケアハウスにおける認知症高齢者に関するアンケート調査を通して—	単著	2008年1月	キリスト教社会福祉学研究第40号	神波幸子著	56頁～65頁
カトリック社会福祉施設・機関の使命・役割について	共著	2008年3月	愛知淑徳大学医療福祉学部 医療福祉研究第4号	神波幸子・春見静子・伊藤春樹・谷口純世	25頁～44頁
<b>研究活動</b>					
(1)愛知淑徳大学研究助成:共同研究による「痴呆性高齢者のケアハウスにおけるくらしとその支援に関する基礎的研究」 (2)愛知淑徳大学研究助成:共同研究による「カトリック社会福祉施設実践に関する研究:その意義と役割・課題」 (3)愛知淑徳大学研究助成:特別教育研究 地域貢献を取り入れた有効な教育方法の研究—介護保険分析を通して—	共同研究	(1)2005年4月～2006年3月まで キリスト教社会福祉学会 (2)2006年4月～2008年3月まで キリスト教社会福祉学会 (3)2007年4月～		(1)神波幸子、金田千賀子 (2)神波幸子、谷口純世、(研究協力者春見静子、伊藤春樹) (3)春見静子、伊藤春樹、神波幸子	
<b>その他</b>					
認知症高齢者のケアハウスにおける生活支援の現状	単	2007年6月第48回	日本キリスト教社会福祉学会	神波幸子	
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	日本社会福祉学会会員				
2003年4月～現在	日本キリスト教福祉学会会員				
2003年4月～現在	日本ソーシャルワーカー協会会員				
2003年4月～現在	地域福祉学会会員				
2003年4月～現在	日本社会福祉士会会員				
2003年4月～現在	愛知県社会福祉士会会員				
2003年4月～2006年8月	財団法人知的障害者福祉協会社会福祉士養成所講師				
2005年4月～現在	日本社会福祉実践理論学会会員				
2007年4月～現在	聖母の家評議員				

所属 医療福祉学部	職名 助教	氏名 酒井 美和	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
1)グループワークの導入		2006年4月～2006年8月	金沢福祉専門学校介護福祉学科の専門科目「社会福祉援助技術」(1年生 35人クラス)では、社会福祉援助技術の価値・知識・技術を習得することを目的としている。効果的に学ぶために、グループワークを積極的に導入し、学生の興味・関心を促した。事例を取り上げ、グループワークとして考えてもらうことで、多様な意見が出るようになった。意見が出にくいグループには教員がグループワーカーとして介入し、グループの円滑な活動を支援した。それにより、社会福祉援助技術の一つであるグループワークを実践的に学ぶことが可能となった。		
2)ロールプレイの実施		2006年4月～2006年8月	金沢福祉専門学校介護福祉学科の専門科目「社会福祉援助技術」(1年生 35人クラス)において、ロールプレイを取り入れた。ロールプレイでは、その役割を学生が演じることで、新たな気付きや視点を獲得できる。ロールプレイ終了後に、役割を演じた学生や観察者に意見や感想を求めた結果、その場面の対応法などについて多様な意見が出され、ロールプレイの効果的学習法が示された。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
講義用補助教材(レジメ)		2006年4月～2006年8月	金沢福祉専門学校介護福祉学科の専任講師として担当の「社会福祉援助技術」(介護福祉学科、1年次、前期、必修2単位)において使用している。学生の中には介護技術には興味を持ちながらも、社会福祉系科目には興味を持ちにくい者もいる。そのような学生の学習意欲を高め、分かりやすい授業を行なうために、講義毎に授業のレジメを作成し、配布した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
なし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
なし					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
なし					
論文					
「実践的ボランティア教育プログラムと参加型学習」試案ー大学生の主体性を引き出す教育実践を通してー	共著	2006年7月	福井県立大学、福井県立大学論集(Vol.28)	小林明子・酒井美和	87頁～108頁
ソーシャルワークとフェミニストの視点	単著	2008年3月	愛知淑徳大学、医療福祉研究(Vol.4)		45頁～54頁
その他					
社会福祉とジェンダーの視点	単著	2008年3月	愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学研究所ニュースレター		6頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
なし					

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 佐々木政人	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①2年生社会福祉援助技術演習 I & II		①2006年4月～	①本科目は対人援助技法の基本科目である。対人コミュニケーション技能に課題を抱えている学生のニーズに合致した教育技法の開発に苦慮する。授業内容は、ソーシャルワーク技法を基本としつつも、『福祉絵本』作り等、ワークショップ形式の授業展開に努力する。クラス参加者は、極めてユニークな大型『福祉絵本』を完成させた。		
②福祉貢献研究 I & II		②2007年4月～	②卒業研究・卒業論文のテーマ選定は多くの学生の課題である。リサーチメソッドの基本を踏まえ、学生が抱えている関心を集約するためのBS法(ブレインストーミング法)を導入する。さらにはクラスの集団力動に配慮した授業運営を心掛ける。なお、各クラスメンバーの研究論文及び卒業論文は、CDRIにまとめ発刊・配布した。		
③文献講読		③2007年4月～	③3年生後期の科目で、次年度の卒業研究への効果的なリンクが要請される。2007年度は、『国民生活白書』を活用し、福祉を支える基本データの収集および整理方法を学ぶとともに、そのデータを利用し、家族、地域、職場における生活課題をパワーポイント化する。グループワーク手法に基づいたクラス発表(発表班、司会班、質問班)、およびその発表をビデオに収録・活用し、プレゼンテーション能力の向上に努力した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
特に、本年度は作成していない。次年度以降『学生と協働する』福祉教材制作を企画したい。		①2006年4月～	前述①及び③で制作したプロダクト(福祉絵本等:ソーシャルプロダクト)を次年度以降の学生のため、整理、完成させたい。現在直面している課題はこうしたプロジェクトを効果的に企画・運営するための資金不足である。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
①宮城県子ども総合センター共催FGC研修会		2007年10月23日	2006年度及び2007年度厚生労働科学研究「子ども家庭福祉分野における家族支援のあり方に関する総合研究:日本子ども家庭総合研究所ファミリーグループカンファレンス(FGC)法のマニュアル開発のための調査・研究及び教育普及ワークショップ(高橋重宏班)		
②和歌山県子ども・障害者相談センター共催FGC研修会		2007年11月7日	2006年度及び2007年度厚生労働科学研究「子ども家庭福祉分野における家族支援のあり方に関する総合研究:日本子ども家庭総合研究所ファミリーグループカンファレンス(FGC)法のマニュアル開発のための調査・研究及び教育普及ワークショップ(高橋重宏班)		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
					特になし
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
児童福祉論「現代社会と児童家庭を取り巻く環境の変化」	共著	2006年3月30日	全国社会福祉協議会	網野武博・才村純他	46頁～56頁
児童福祉論「少子化」	共著	2006年3月30日	全国社会福祉協議会	網野武博・才村純他	62頁～68頁
論文					
開発的福祉実践を支える教育訓練法の試み	共著	2005年9月1日	琉球大学法文学部紀要第16号	水野良也	73頁～109頁
ファミリーグループカンファレンスの挑戦	共著	2005年12月30日	有斐閣	林浩康	205頁～237頁
福祉専門教育を支える新パラダイム	共著	2007年3月1日	愛知淑徳大学、医療福祉研究第3号	水野良也	52頁～69頁

介護分析にみる性差	共著	2007年3月1日	愛知淑徳大学、医療福祉研究第3号	伊藤春樹	データ分析等
Families and their children in Japan	単著	2008年3月1日	愛知淑徳大学、医療福祉研究第4号		55頁～64頁
その他					
援助者と家族との協働	共同発表	2005年9月	第11回日本子どもの虐待防止学会	林浩康	
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
1978年4月～現在	日本社会福祉学会員				
1992年4月～現在	日本地域福祉学会員				
1992年4月～現在	京都国際社会福祉協力会理事				

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 杉浦信彦	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
担当授業科目評価アンケートの実施		2002年4月1日～2008年3月31日	担当する全ての授業科目について、自然科学教育の根幹を成す実践学習を取り入れ、その効果を確認するため全ての科目(オムニバス講座を除く)について受講生による独自の様式による授業評価を実施し、授業改善に活用し、現在に至っている。H19年度における全科目の評定平均値は4.2であった。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
新たな教材の開発とその活用		2003年4月1日～2008年3月31日	サプリメントメーカー研究室よりサンプル提供を受け健康科学担当科目受講生を対象に、毎年サプリメントを配布し、Ca代謝マーカー等の測定を行い受講生個人の健康指導と併せて、測定結果を健康教育の教材として活用している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
担当授業外における本学の教育広報活動への貢献		2003年4月1日～2008年3月31日	1. 学部(2000年～2007年)および全学入試実施委員長(2002年～2004年)として全学の入学試験を統括すると共に毎年中部地区の教員を対象に入試広報活動を実施し、現在に至っている。このことは本学および本学部入学者の量的確保および質の向上に有意であると考えられる。 2. 本学エクステンションセンターを統括し(2000年～2005年)大学の地域社会への開放活動に従事。 3. 科学技術振興機構主催のサイエンスパートナーシッププロジェクト(SPP)に参加。中等教育機関に在学する生徒(名古屋経済大学高蔵高等学校)の科学技術への知的探究心育成のため、本学にて生徒・教員を対象とする2日間(2007年8月9日～8月10日)にわたる教育活動を実施した。授業テーマは「私たちの身体と科学」であった。 4. 名古屋市千種区生涯学習センターとの共催教育活動の実施。当該教育センターと本学部との共催講座プロジェクトに参画した。共通テーマ「今の時代を健やかに生きる」のうち第4講座、テーマ「健康を考えるー現代人に不足するCaを中心にー」を担当した(2007年11月7日～12月13日)		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
健康教育からみた骨密度測定	単著	2004年11月	食生活研究25巻1号		27頁～31頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月1日	日本学校保健学会会員				
2004年4月1日	日本公衆衛生学会会員				
2004年4月1日	日本食品微生物学会会員				
2003年4月1日	日本生化学会会員				
2003年4月1日	日本栄養改善学会会員				
2003年4月1日～現在に至る	医療法人青山病院よりの委嘱を受け、臨床検査部における院内感染防止および研究検査技術開発指導に従事				

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 鈴木朋子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
スモールテストの活用。	2006年～2007年	「dysarthria」の講義の中で毎回、スモールテストを実施し、学習へのモチベーションを上げ、知識の定着を図った。	
リアクションペーパーの活用。	2006年～現在	学生の関心事や、理解度、疑問点などを知り、分かりやすくあるいは、より詳細に説明するために活用している。	
「失語症」の授業で学ぶ目的や、言語聴覚士の役割をより明確に学生に理解させる。	2006年12月, 2008年1月	2年生に対し、過去に治療を担当した失語症者をゲストスピーカーとして授業に招き、その失語症リハビリを通して、人生を再構築するに至った経過、および言語聴覚士の役割を伝えた。	
「失語症」評価のための実践的な技術の習得を目指す。	2007年5月～7月	3年生に、主な失語症検査施行方法の習熟を目指して、ロールプレイによって、一人ひとりの評価をし、技術習得のための指導をした。	
「失語症」の授業で症例を提示し、臨床所見をまとめ、訓練計画立案方法を学習させる。	2007年4～7月	これまで学習した知識、理論を集大成させるために、症例を通して、臨床所見のまとめ、訓練計画の立案などの学習をさせた。また、提出されたレポートを個別に添削し、さらに、書きなおしをさせ、レベルアップを図った。	
「高次脳機能障害」における、グループワーク実施。	2007年11月	症例について、少人数でディスカッションをすることで、より多面的に症状を捉え、考察することで、理解を深めるよう工夫した。	
「高次脳機能障害」に関する検査技術を高め、現到達点と努力目標を明確にする評価表の作成。	2007年10月～2008年2月	「高次脳機能障害」を評価するための諸検査の実施方法を自主的に練習し、到達度を学生自身が把握できるように自己評価表を作成し活用した。	
「高次脳機能障害」の更なる専門領域の理解を深める。	2007年12月	認知症を専門とする病院のSTをゲストスピーカーとして招き、評価、アプローチ、サポートのこの地域での先端の取り組みを報告してもらい、学生に言語聴覚士の持つ新たな職域を提示した。	
フィールドワーク的な内容の導入。	2007年～	「言語聴覚学研究」において、フィールドワーク的な内容を導入し、言語障害をお持ちの方に対する調査を実施し、その結果を当事者団体でフィードバックさせた。	
言語聴覚士関連職種のスタッフ招聘。	2006年～	「リハビリテーション医学」において、言語聴覚士の関連職種である、理学療法士、作業療法士を招き、言語聴覚士との連携について学び、運動麻痺の方へのサポート方法についても実践的な指導を受ける機会を提供した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
学外実習の成果について、アンケート調査を実施し、ガイダンス資料を作成した。	2007年9月, 2008年3月	3年生の学外実習後終了後、その実践で学んだこと、感想などを質問紙にて調査し、まとめて、実習ガイダンスの資料として下級生に報告した。	
学内実習の実践	2006年4月～	失語症者の方に協力を依頼し、学内臨床実習を毎週行い、学生の臨床実践における資質向上に努めた。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
「愛知県失語症会話パートナー養成講座」講師	2003年～	毎年、愛知県言語聴覚士会と愛知県失語症友の会が共催している失語症会話パートナー養成講座における「失語症の方との接し方」についての講師を担当。	
第2回 愛知県言語聴覚士会学術集会 ランチョンセミナー講師	2006年6月	「失語症者に対する地域ケア」の一端として開始された会話パートナー養成の経過と実際、今後の課題と可能性について講演した。	
愛知県失語症会話パートナーブラッシュアップセミナー講師	2007年3月	愛知県における「失語症会話パートナー」養成、及びその活動の経過と現状、今後の課題を報告し、ディスカッションのベースを作る。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
学外実習施設の確保	2006年～	毎年、3, 40箇所の新規実習地開拓を行い、学外実習が実施できるよう貢献した。	
学外実習準備	2006年～	3年生臨床実習の準備のため、失語症友の会でのボランティア参加や発達障害児の家庭教師などを推進した。	



施設見学の準備	2006年～	3年生での臨床実習の準備と学内での勉学のモチベーションを高めるため、2年生に病院などの1日見学の機会を準備し、レポートでのフィードバックを促した。
体験学習の準備	2007年～	学ぶ目標や、自分の適性について考える機会となるように、1年生対象に幼稚園、学童保育、老人保健施設などでの小児や高齢者とのかわりの体験の機会を準備した。
学内における委員会活動		
情報メディアサービス委員	2007～2008年度	
情報システム支援委員	2007年度	
学外実習委員長	2008年度	

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
言語聴覚士をめざす人のために	共著	2003年11月	ネオ・メディク	夏目長門、高見観編著	88頁～92頁(言語聴覚士と関連の深い職種) 262頁～263頁(めざせ!失語症からの青春)
失語症会話パートナー養成講座テキスト	共著	2005年9月	名古屋市総合リハビリテーション事業団	石黒安佐、加藤由記、西川恵子、服部千賀子、服部未沙、藤川利夫、藤田菊江、古川真理子、諸岡雅美、山田和子、吉田敬	2頁、19頁
<b>論文</b>					
言語聴覚療法の実際とその可能性について	単著	2004年7月	現代医学第52巻第1号		57頁～66頁
ことばのバリアフリーを目指してー愛知県失語症会話パートナー活動ことはじめー	単著	2006年1月	ことばの海		11頁～15頁
慢性期失語症者とその配偶者に対する会話指導	共著	2006年3月	高次脳機能研究(26巻1号)	杉田朋子、上野真也子、三宅慶呼、吉田敬	103頁～104頁
慢性期嚥下障害患者に対するアプローチの検討ー誤嚥性肺炎患者についてー	共著	2006年	音声言語医学(Vol.47.No.1)	三宅慶呼、杉田朋子、上野真也子、橋詰玉枝子、杉浦元重、木村伸也	84頁
その他					

## III 学会等および社会における主な活動

年月日	学会および活動の名称等
2004年1月～2005年6月	愛知県言語聴覚士会設立準備委員として活動した。
2003年4月～2004年7月	第22回全国失語症者のつどい愛知大会実行委員会事務局担当。500名余りのボランティアを動員することができた。
2005年3月～現在	愛知県失語症地域支援を考える会事務局担当。
2005年6月～現在	愛知県言語聴覚士会理事 コミュニケーション障害支援局長を担当。
2004年～現在	第1期～第6期 愛知県失語症会話パートナー養成講座主催。
2007年3月～7月	愛知県失語症会話パートナーの会「あなたの声」の設立にかかわった。

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 諏訪真美	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①「精神科リハビリテーションⅠ・Ⅱ」において、グループワークを活用		2006年5月～	統合失調症の家族支援について、実際の家族教室をグループに分かれて企画することで、生徒自身の考える力をつける。さらに、統合失調症の各段階における能力障害について考え、それに応じた支援の実践をグループ活動として企画・発表する。		
②授業アンケートの結果をふまえて、「精神保健学Ⅱ」において、現代の精神保健福祉の新しい課題について考える。		2006年10月～	社会的ひきこもり、児童虐待、薬物依存症、高機能自閉症の思春期問題など現代の新しい精神保健の問題について基本的な知識を講義した後、ビデオ学習を行い、さらに新聞報道などの課題を読み、それに対して総合的な考察をレポートとして提出させる。		
③「フィールドスタディー入門」において、体験学習および事前・事後学習の充実。		2007年10月～	1年生の体験学習であるためこれまで学習・知識面での準備不足が課題であった。貴重な社会的な場を提供していただくため、その体験を各自が深めることができるように、基本的な障害についての知識・リハビリテーションについての知識を講義・ビデオ学習も加え、その後各自で課題学習させた後、体験実習させていただき、さらにそこで興味を持った課題について調査・発表させた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①副教材のプリント「精神科リハビリテーションⅠ・Ⅱ」②副教材プリント「精神保健学Ⅰ・Ⅱ」		2006年～	①教育内容の工夫で行った、グループワークに備えて、家族について理解を深めるため家族の手記をまとめ、本人の症状や生活能力の障害を理解するため、事例の詳細を紹介して基礎資料とした。さらにグループワークの基礎をしっかりと把握するための資料も作成した。②新しい精神保健の課題について、パワーポイントで示すとともに、各自のプリントでは重要事項を自ら筆記する形ものを配布した。またビデオ学習のための教材の編集を行った。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
①薬物専門講師要請講座「薬物乱用が心身に及ぼす影響」		2003年9月1日	県下の地域において薬物乱用防止の講習会を企画実施する「薬物専門講師」の養成のための講習。		
②「ひきこもり」問題と援助について		2003年11月1日	愛知県精神保健福祉センター主催で、愛知県保健所精神保健福祉相談員に対して、講演会を実施。		
④産業保健師研究会「ひきこもりの病理と家族関係		2004年1月21日	愛知県を中心とした企業の産業保健師対象の研究会において、講演会の講師。		
⑤アスペルガー症候群の思春期青年期の課題		2004年12月1日	NPO法人アスペ・エルデの会の研修会において、会員の親や教育関係者などを対象に講演		
⑥大学職員への教育:アパシー・ひきこもり・ニートの概念と学生相談における意義		2005年7月1日	名古屋大学学生相談室主催の教職員向けのシンポジウムにおいてシンポジストとして講演		
⑦精神保健福祉担当職員への研修:社会的ひきこもりの理解と初期相談における留意点		2007年2月1日	愛知県立春日井保健所主催の市町村や社会福祉協議会の担当者向け講習会において講演		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
・愛知淑徳大学学生相談室担当		2004年4月～	学生のメンタルヘルスの相談を行う		
・愛知淑徳大学学生相談室 室長		2007年4月～	学生相談室の運営および、室員へのコンサルテーション		
・愛知淑徳大学医療福祉研究科 教務委員		2006年4月～	カリキュラムや講義内容の決定、修論指導の科内スケジュールの運営		
・NPO法人アスペルデの会 ディレクター		2001年9月～	親や関係者への講義、ボランティアのサポート		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
なし					
論文					
Family features in primary social withdrawal among young adults	共著	2003年12月	Psychiatry and Clinical Neurosciences 57(6)	◎諏訪真美、鈴木國文、原幸一、高橋俊彦、他	589頁～594頁
「ひきこもり」と自称して受診した女性症例	共著	2004年3月	精神科治療学19(3)	◎諏訪真美、小河原尚泰、西岡和郎、鈴木國文	395頁～402頁

発達障害を視野に入れた「ひきこもり」のグループワーク	共著	2004年3月	精神保健福祉愛知2002	◎杉本一正、諏訪真美	7頁～16頁
Treatment with intravenous hyper-alimentation for severely anorectic patients and its outcome	共著	2004年8月	Psychiatry and Clinical Neurosciences 58(4)	◎外ノ池隆史、諏訪真美、高橋俊彦	229頁～235頁
青年期の社会的ひきこもり	単著	2005年3月	医療福祉研究1		78頁～84頁
今日の日本社会と「ひきこもり」現象	単著	2006年3月	医療福祉研究2		23頁～29頁
社会から、大学から「ひきこもり」学生に対する援助の可能性	共著	2006年3月	名古屋大学学生相談総合センター紀要5	◎津田均、古橋忠晃、諏訪真美、他	3頁～14頁
「ひきこもり」概念の社会報道と精神医学	共著	2006年3月	思春期青年期精神医学16-1	◎諏訪真美、鈴木國文、	61頁～74頁
Hikikomori among Young Adult in Japan	共著	2007年3月	医療福祉研究3	◎諏訪真美、原幸一	94頁～101頁
「うつ病家族のつどい」を開催して	共著	2008年3月	精神保健福祉愛知2007	◎中西恵美、諏訪真美、他	1頁～3頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

学会発表	
2003年6月	International Society for Adolescent Psychiatry (Differential diagnoses between 'primary' social withdrawals and high functioning autism /Asperger disorders)
2005年5月	日露精神分析懇話会 (Contemporary Japanese society and Hikikomori Phenomenon)
2005年7月	日本史春季青年期精神医学会(青年期のアスペルガー症候群と抑うつ)
2006年3月	Association of European Psychiatry (Withdrawing life style among young adult in Japan)
2006年10月	全国大学保健研究集会(「ひきこもり」学生中核群の心性と「ひきこもり」の異種性)
学会活動	
1999年1月～現在	日本集団精神療法学会
2002年4月～現在	日本精神神経学会
2002年7月～現在	日本精神病理・精神療法学会
2003年10月～現在	精神医学史学会
社会における活動	
2001年9月～現在	NPO法人アスペルゲルデの会 ディレクター
2006年4月～現在	名古屋市精神医療審査会 委員
2007年4月～2008年3月末	愛知県引きこもり対策検討会議 委員
2008年6月～現在	NPO法人むいぶかみさと 理事

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 高橋啓介	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
添削を中心としたフィードバック型教育の実施	2003年4月	学習内容の確実な定着を図り、学習に対する動機づけを高めるためには、個々の学生に対する学習達成度のフィードバックをきめ細かく実施することが重要と考えられる。そこで、担当するすべての科目において、提出レポート、小テスト、単位認定テストのすべてについて、内容、体裁の全般にわたって添削を行い、返却することを実施している。さらにテストについては、採点后に模範解答例の配布を実施している。	
成績評価方法の開示	2003年4月	学生の学習意欲を高め、着実な技能・知識の習得のためには、学生の学習達成度の評価方法について、学生に可能な限り開示することが望ましい。そこで、「授業概要」において「講義スケジュール」「テキスト」「参考書籍」の情報に加え、「成績評価法」について、レポートや試験の配点、得点と成績との対応などについて、開示している。	
インターネット、電子メールの教育場面での活用	2004年4月	今日の情報技術の社会的環境にあつては、研究の展開や種々の学術情報をインターネットを活用して入手する技能を高めることは不可欠であると考えられる。「医療貢献基礎習」では、将来の卒業研究を展開するための基礎技能として、インターネットの活用による資料収集の方法や、それらの分類、分析、保存の方法、他の学術資料との対応づけなどについて、テーマ研究を通して実践的に学習させるプログラムを導入している。さらに、学生への個別の学習指導には、電子メールを最大限活用し、レポートの提出などにも電子メールを利用させることで、学術研究の基礎技能としての情報技術活用法を実践的に指導している。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
環境文化専攻卒業論文抄録集「環境文化研究」の編集・発行	2004年3月	文化創造学部環境文化専攻では全卒業生の卒業論文の抄録集「環境文化研究」を発行している。その編集・発行の責任者をつとめている。(2007年3月まで)	
実験計測演習	2004年9月	心理実験を行う際に、さまざまな測定器の操作方法に習熟していることは必須事項である。本科目では「音の測定」「色の測定」「輝度の測定」「照度の測定」を行っており、そのうち「色の測定」を担当し、測定器操作マニュアル、色測定の基礎に関する教材を作成した。	
心理実験法演習 I	2005年4月	精神物理学的測定法に習熟していることは、人間の言語、聴覚、視覚の各モダリティに関する研究を行う上で極めて重要である。そこで、本科目では様々な精神物理学的測定法や心理実験の技法について学習する。その内、学習実験、信号検出理論による聴覚閾の測定、を担当し、それぞれの実験マニュアルと基本的な測定法、実験法に関する解説教材を作成した。	
視覚心理総論	2005年9月	ゲシュタルト心理学からギブソンのし空間論までについて、具体的なトピックスを通して、視知覚の基本的な特性とそのメカニズムについて解説した。パワーポイントによるスライドを300ページとそれに基づくハンドアウトを教材として作成した。	
心理実験法演習 II	2005年9月	精神物理学的測定法に習熟していることは、人間の言語、聴覚、視覚の各モダリティに関する研究を行う上で極めて重要である。そこで、本科目では様々な精神物理学的測定法や心理実験の技法について学習する。その内、調整法による色視野の測定と恒常法による色弁別閾の測定を担当し、各課題の実施マニュアルを作成した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			

医療福祉学部医療貢献学科主任	2004年4月	医療福祉学部の開設に伴って、医療福祉学部医療貢献学科主任を勤め、学科の教育、運営、研究の全般にわたって、指導的役割を果たしている。(現在に至る)
医療福祉学部医療貢献学科視覚科学専攻主任	2004年4月	医療福祉学部の開設に伴って、医療福祉学部医療貢献学科視覚科学専攻主任を勤め、専攻の教育、運営、研究の全般にわたって、指導的役割を果たした。(2006年11月まで)
医療貢献学会会長として学生の独自の教育、研究活動を支援	2004年4月	医療福祉学部には各学科の全学生と全専任スタッフを構成員とする学術的組織である「学会」が設置されている。これらは、エンカウンターキャンプの運営補助、学外実習のためのオリエンテーションの実施、学外実習報告書の発行、学術講演会の企画・実施・運営、大学際への参加などの活動を通して、学生生活全般について、その質的な向上を図ろうとするものである。その組織の長として、これらの活動を支援・リードしている。(現在に至る)
大学院医療福祉学研究科設置準備委員	2004年4月	大学院医療福祉研究科の設置に向けて、教育課程及び運営組織の構想および設置準備を推進した。(2006年3月まで)
愛知淑徳大学クリニック設置準備委員	2004年4月	愛知淑徳大学クリニックの設置に向けて、診療科や運営組織の構想および設置準備を推進した。(2006年2月まで)
医療福祉学部医療貢献学科必修科目「心理実験法演習Ⅰ」「心理実験法演習Ⅱ」(平成17年～)のコーディネーター	2005年4月	医療福祉学部医療貢献学科必修科目「心理実験法演習Ⅰ」「心理実験法演習Ⅱ」(平成17年～)のコーディネーターとして、教育内容、方法について教員間で指導的に活動し、学生への教育効果の向上に貢献している。(現在に至る)
大学院医療福祉学研究科コミュニケーション障害学専攻主任	2006年4月	大学院医療福祉研究科の開設に伴ってコミュニケーション障害学専攻主任を勤め、専攻の教育、運営、研究の全般にわたって、指導的役割を果たしている。とりわけ、修士論文の審査方法や審査基準の確立に尽力した。(現在に至る)
大学院医療福祉研究科博士後期過程設置準備委員	2006年4月	大学院医療福祉研究科の修士課程の博士前期課程への課程変更および博士後期課程の設置認可申請において、中心的な役割を果たした。(2007年12月まで)
愛知淑徳大学将来構想第三委員会委員長	2007年4月	医療福祉学部の将来構想を全学的な将来構想と関連付けながら立案する本学学長の諮問委員会の委員長として、その任に当たり、医療福祉学部の将来構想に関する答申を行った。(2007年12月まで)

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
色彩用語辞典	共著	2003年4月	東京大学出版会	日本色彩学会(編)	分担執筆項目「フェリー・ポーターの法則」「ブンゼン・ロスコの法則」「リッコの法則」
論文					
日本人青年層に対する性感染症予防介入プログラムの開発に向けた基礎的研究1-ダイアリー法の導入-	共著	2005年4月	医療福祉研究No.1	高橋啓介・西和久	36頁～47頁
寺山修司と斉藤斎藤との間	単著	2005年10月	短歌研究2005年10月号		73頁～75頁
照明の色温度と照度とが室内環境評価に及ぼす効果	単著	2006年3月	医療福祉研究No.2		30頁～36頁
実験用白濁フィルタ装用時における遮光レンズの効果	共著	2006年6月	日本眼科紀要 Vol.57 No.6	川嶋英嗣・川瀬芳克・高橋伸子・高橋啓介	472頁～476頁
現実感喪失の危機-〈離人症的短歌〉	単著	2006年10月	短歌研究2006年 10月号		54頁～61頁
読み解き続けよ	単著	2007年2月	まひる野2007年 2月号		41頁～43頁
遮光レンズ装用者の色相弁別能	共著	2007年3月	日本眼科紀要 Vol.58 No.3	川嶋英嗣・渡辺あゆみ・伊藤夢見・川瀬芳克・高橋啓介	279頁～284頁

徹底的リアリズムについて	単著	2007年7月	短歌往来2007年 7月号	22頁～28頁
飲んで、食って、ヤッて眠る	単著	2008年2月	まひる野2008年 2月号	39頁～41頁
白内障擬似体験フィルタ装着時のグレアとコントラスト感度	単著	2008年2月	医療福祉研究No.4	65頁～73頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2004年	日本心理学会編集委員会審査協力者に日本心理学会の英文学会誌「Japanese Psychological Resarch」の査読者として編集に加わった。
2003年～現在	愛知県教育委員会の依頼により、愛知県教諭10年者研修において、「コミュニケーション入門」の講師を勤め、年1回、中等教育に携わる者が習得しておくべき、コミュニケーション技能やコミュニケーションに関わる学術的な知識について、教授している。

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 高橋俊彦	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
1) 大学院生に対する教育					
(1) 精神健康医学(セミナーと実験研究) 論文の作成に関する指導はもちろん丁寧にしたが、出来上がった論文を学生が外国語雑誌に投稿して「訂正受理」の返事が返った場合等、レフリーの注の意図が学生によく分かるようにと説明を工夫した。		2003年4月～2004年3月	大学院生のセミナーは論文作成に関する指導が中心で、実験研究では実際のケースについての方・考え方を教えていた。また博士論文の指導に当たり、この3年間で5名を主査として博士の学位を取得させた。		
2) 大学生に対する教育			授業内容はなるべく理解し易いようにと工夫しているが、授業アンケートにおける授業に対する疑問や批判について丁寧に授業に関するこちらの目標を丁寧に説明するようにしている。		
(1) 健康スポーツ科学		2003年4月～2004年3月	大学生に対しては専門家に限らず一般市民として、知っておいた方が望ましい精神医学の考え方や知識を講義形式で伝えていた。		
(2) 医療福祉論		2004年4月～2008年3月	社会福祉の中でとくに医療に関する福祉についてその歴史、意義、現行の諸制度について講義をしている。		
(3) 福祉貢献論		2004年4月～2008年3月	福祉に貢献する人材となるための基礎的な素養を身につけ、福祉を学ぶ意欲や将来スペシャリストとして活躍するための意識形成を図る目的で講義をする。他にそれぞれの専門分野に詳しい専門家2名の教員の応援を得て、行っている。		
(4) 精神医学概論		2004年10月～2008年3月	福祉の分野で貢献しようとする者は、基礎的な素養として他人の苦しみを理解する能力、あるいは他人のおかれている状況を把握するための理解法を身につけておく必要がある。そのために初歩的な精神医学の知識を伝えている。		
(5) 精神医学Ⅰ		2005年4月～	精神医学におけるものの考え方および各精神障害についての理解を深めるための講義を行う		
(6) 精神医学Ⅱ		2005年10月～2008年3月	精神医学におけるものの考え方および各精神障害についての理解を深めるための講義を行う		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「改訂大学生のための精神医学」高橋俊彦、近藤三男編 高橋俊彦、近藤三男、粥川裕平、赤堀薫子著		2004年1月1日	「大学生のための精神医学」を基礎として、これに加筆、訂正、削除などを加え、さらに新しい項目を起こし、薬物等も新しい知見を書き加えるだとして、精神医学の進歩に遅れないように訂正した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
(1) 改訂大学生のための精神医学	共著	2004年1月	岩崎学術出版社	編著者: 高橋俊彦、近藤三男 著者: 高橋俊彦、近藤三男、 粥川裕平、赤堀薫子	1頁～11頁、22頁～ 47頁、66頁～78頁、 85頁～88頁、96頁～ 99頁、104頁～127頁
(2) 病的嫉妬の臨床研究	単著	2006年6月	岩崎学術出版社		1頁～186頁
論文					
(3) Cenesthopathy in adolescence	共著	2003年2月	Psychiatry and Clinical Neurosciences 56	©Hisashi Watanabe, Toshihiko Takahashi, Takashi Tonoike, Mami Suwa, Kaoruko Akahori	23頁～30頁

(4)クレペリンによる早発性痴呆概念の成立とプロイラーによる統合失調症概念	共著	2003年3月	総合保健体育科学26	◎高橋俊彦、中西俊夫	1頁～9頁
(5)Family features in primary social withdrawal among young adults	共著	2003年12月	Psychiatry and Neurosciences 57	◎Mami Suwa, Kunifumi Suzuki, Koichi Hara, Hisashi Watanabe, Toshihiko Takahashi	586頁～594頁
(6)Role of imaginary companion in promoting the psychotherapeutic process	共著	2004年4月	Psychiatry and Neurosciences 58	◎Takako Sawa, Hiroyuki Ohae, Tsuyoshi Abiru, Toyoaki Ogawa, Toshihiko Takahashi	145頁～151頁
(7)Efficacy of milnacipran for depressive symptoms in schizophrenia spectrum disorders	共著	2004年6月	Psychiatry and Neurosciences 58	◎Sinsuke Nakanishi, Hiroshi Kunugi, Toshihiko Takahashi	226頁～227頁
(8)Treatment with intravenous hyperalimentation for severely anorectic patients and its outcome	共著	2004年6月	Psychiatry and Neurosciences 58	◎Takashi Tonoike, Toshihiko Takahashi, Hisasi Watanabe, Hiroyuki Kimura, Mami Suwa, Kaoruko Akahori, Yoshiko Itakura	229頁～235頁
(9)妄想型統合失調症の治療	単著	2005年10月	精神科治療学		94頁～95頁
(10)Effect of switching from conventional antipsychotics to risperidon in Japanese Patients with chronic schizophrenia	共著	2006年12月	Psychiatry and Clinical Neurosciences 60	Shinsuke Nakanishi, Hiroshi Kunugi, Robin Murray, Seiji Nojima, Toyoaki Ogawa, Toshihiko Takahashi	751頁～757頁
(11)近代精神医学の黎明期と精神病者の処遇	単著	2008年3月	医療福祉研究第4号		74頁～80頁
<b>報告書</b>					
(1)メンタルケアの相談に関わる教職員のあり方―事例を中心に具体的な接し方や対処法を中心に― 第3分科会(メンタルヘルスの担当者中心の分科会)まとめ	共著	2003年3月	平成14年度東海・北陸地区メンタルヘルス協議会報告書	◎斎藤清二、高橋俊彦	23頁～27頁
(2)解離症状への自己対処行動	共著	2003年9月	Campus Health40(3)	◎赤堀薫子、石黒洋、大澤功、小川豊昭、押田芳治、近藤孝晴、佐藤祐造、高橋俊彦	83頁
(3)学生とうつ(講演記録)	単著	2004年	2004年度全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書		62頁～76頁
(4)「うつ病とメンタルヘルス」(講演記録)	単著	2005年7月	岡崎医報282		38頁～42頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 高橋伸子	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
(1) デモンストレーションや、実体験を活用した体験的な授業		2004年4月～現在	授業で解説する視覚現象について、実際見たり、刺激を作るなどの体験を活用した授業を行っている。たとえば、マッハ現象を実際に体験するために、簡単な材料を用いて刺激を自作させ、観察させたり(視覚生理学演習)、両眼立体視や視差について体験的に理解するため、ステレオグラムを自作させ、実験用の刺激として用いている(心理実験法演習Ⅱ)。講義課目においても、講義内容に則したデモンストレーションを活用し、運動視など本を読んだだけではわかりにくい現象については動画をを用いた授業を行っている(視覚認知総論)。		
(2) 学生のOHCを利用した発表練習の指導		2004年4月～現在	医療貢献基礎演習では、各自で検索した文献について発表会で報告する形式をとっている。この発表会にOHCを導入し、所定の時間内にOHCを利用して発表する演習を行っている。		
(3) パワーポイントを用いた教材の表示		2004年4月～現在	授業では、プリントや教材とともに、パワーポイントによる視覚表示を行い、図表を活用した授業を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1) 実験計測演習用教材		2004年4月	「実験計測演習」で用いた教材。「輝度と輝度計」「色彩と反射率」「輝度と視力」をそれぞれテーマとする輝度の測定演習用のマニュアル。		
(2) 心理実験法演習Ⅰ用教材		2005年4月	「心理実験法演習Ⅰ」で用いた教材。実験テーマ「ミューラー・リヤアの錯視」「触二点閾の測定」「マグニチュード推定法」を担当。		
(3) 心理実験法演習Ⅱ用教材		2005年4月	「心理実験法演習Ⅱ」で用いた教材。実験テーマ「実体鏡視」「味覚の測定」を担当。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
(2) 医療福祉学部教務委員長		2004年4月～2005年3月	医療福祉学部教務委員長として、新たに開設された学部の教育課程の管理・運営の責任者としての役割を果たした。		
(3) 医療福祉研究科開設準備委員(教務担当)		2005年4月～2006年3月	2006年4月開設の医療福祉研究科開設準備委員として教務を担当し、新研究科のカリキュラムの作成、授業担当者や授業時間割の決定について中心的な役割を果たした。		
(4) 医療福祉研究科教務委員長		2006年4月～現在	医療福祉研究科教務委員長として、新たに開設された研究科の教育課程の管理・運営の責任者としての役割を果たした。		
(5) 情報教育センター運営委員		2005年4月～2008年3月	情報教育センター運営委員として情報教育センター運営委員会に出席し、全学のコンピュータ活用科目のカリキュラムおよび時間割の決定などを行った。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
現代心理学入門ー進化と文化のクロスロードー	共著	2008年(印刷中)	川島書店	西本武彦・大藪泰・福澤一吉・越川房子編著	
論文					
Effect of spatial configuration of motion signals on motion integration across space.	単著	2004年9月	Swiss Journal of Psychology, 63		173頁～182頁
運動統合における空間配置、偏心度および刺激サイズの効果	単著	2005年3月	愛知淑徳大学医療福祉研究, 1		48頁～56頁
その他					

Horizontal and vertical reading in Japanese.	共著	2005年8月	Thirteenth European Conference on Eye Movements ECEM13 Abstracts	©N.Takahashi, M.Menozzi & E.Bergande	52頁
実験用白濁フィルタ装着時の遮光眼鏡の効果	共著	2005年9月	第6回日本ロービジョン学会 学術総会・第14回視覚障害リハビリテーション研究発表大会合同会議抄録集	©川嶋英嗣、川瀬芳克、高橋伸子、高橋啓介	134頁
実験用白濁フィルタの試作と分光透過率の分析	共著	2005年9月	第6回日本ロービジョン学会 学術総会・第14回視覚障害リハビリテーション研究発表大会合同会議抄録集	©川嶋英嗣、川瀬芳克、高橋伸子、高橋啓介	135頁
視野制限下における速さの知覚 -視野狭窄シミュレーションゴーグル装着時の見えの速さ-	単著	2006年11月	日本心理学会第70回大会 発表論文集		506頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	ARVO (The Association for Research in Vision and Ophthalmology)
2003年4月～現在	日本心理学会
2003年4月～現在	日本基礎心理学会
2003年4月～現在	日本認知科学会
2003年4月～現在	日本視覚学会
2003年4月～現在	日本交通心理学会
2003年4月～現在	日本人間工学会

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 瀧 誠	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
(1)事例を利用した理解学習	2003年4月から現在に至る	同朋大学社会福祉学部社会福祉学科及び日本福祉大学保健福祉学部保健福祉学科、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科における精神保健福祉関連科目において学習課題に適切な事例を作成し、事例をもとに、理論、知識の学習に活用している。 例、入院援助が必要なケースの事例集を作り、適切な支援機関や手段、入院する際の適切な入院形態などの法施行を学ぶ事例。 地域生活支援対象ケース数例を基に、アセスメント演習を行うと共に、適切な社会資源とその手順までの理解を求める。 施設設立の事例を提供し、施設設立のプロセス、特に地域住民との関わりについての学習を行っている。	
(2)導入教育の工夫	2003年4月から現在に至る	同朋大学社会福祉学部社会福祉学科および愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科において、2年次の精神保健福祉関連科目の学習を円滑にするため、2年次に精神障害者小規模作業所における体験実習、精神病院での見学実習を設定している。また精神障害を持つ当事者及び家族をゲストスピーカーとして招き、リアルに問題を感じさせる工夫を行っている。	
(3)当事者、対象者へのレクチャーの機会の設定	2003年4月から	2年次に行う精神保健福祉援助演習Ⅰにおいて、後期に精神障害者家族のための家族教室の資料作り又は精神保健福祉ボランティア講座の資料作りのどちらかを選択し、グループで企画、作成を行う。後期試験終了後に地元中村区の家族会の会員や地元で活動するボランティアにレクチャーの場を提供してもらい、理解することと伝えることの現実を体験する学習を行っている。	
(4)a. 同朋大学社会福祉学部社会福祉学科「精神保健福祉論Ⅰ・Ⅱ」専任講師 助教授、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科 准教授 (精神保健福祉論Ⅰのみ)	2003年4月から	「精神保健福祉論Ⅰ及びⅡ」。精神保健福祉論Ⅰは4単位(2時間×30回)の通年科目であり、「精神保健福祉論Ⅱ」は2単位(2時間×15回)の半期科目である。講義内容は「精神保健福祉論Ⅰ」では、実務経験を生かし、精神障害者の疾病と障害の関係、特に地域生活の上での障害がもたらす生活のしづらさを初期においては理解させることに努めた。その上で精神障害者の医療・福祉の歴史に見る社会的背景と障害者福祉の展開との関係を整理した。精神保健福祉法及び関連法関連施策の基礎的理解をすすめると共に、実践上の原則と現実について様々な事例を活用して講義を行った。「精神保健福祉論Ⅱ」では、精神保健福祉活動におけるソーシャルワーカーの役割を様々な機関における対象例から理解を促した。その上でソーシャルワーカーの倫理及び人権、権利擁護について講義を行った。	
b. 同朋大学社会福祉学部社会福祉学科「精神保健福祉援助演習Ⅰ・Ⅱ」専任講師、助教授、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科 准教授	2003年4月から2006年3月まで(精神保健福祉援助演習Ⅰについては2005年3月まで)、2008年4月から	「精神保健福祉援助演習Ⅰ及びⅡ」は社会福祉学部において精神保健福祉士課程に所属する2年生～4年生対象の課程指定科目で、「精神保健福祉援助演習Ⅰ」及び「精神保健福祉援助演習Ⅱ」は共に、4単位(2時間×30回)の通年科目である。講義及び演習の主眼は精神保健福祉士として実践活動を行う上でのトレーニングと位置づけている。「精神保健福祉援助演習Ⅰ」では、面接及び記録の基本を面接演習などの体験学習を通して習得する。特に精神保健福祉実践現場における問題を提供し学習させている。後半は今まで学んだ知識をボランティア講座のテキスト作りや家族教室のテキスト作りをグループで行い、対象ゲストを招いてレクチャーを体験させ、一般の人々や職務対象者への伝達の困難さなどを体験することにより、単に社会的偏見で片づけない姿勢を身につけさせる。	

		「精神保健福祉援助演習Ⅱ」においては、受診前援助、退院援助、地域生活支援、等の事例を通して、ロールプレイなども織り込みながら、事例の読み取り、アセスメントの視点、プランニングの実際などの体験学習を行う。また社会福祉援助技術が分断され使用されているのではなく、総合的に実践の場で必要であることも感じさせることをねらっている。
c. 同朋大学社会福祉学部社会福祉学科「精神保健福祉実習Ⅱ・Ⅲ」専任講師、助教授愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科 准教授	2003年4月から2006年3月まで、2006年4月から	精神保健福祉援助実習Ⅰ及びⅡは精神保健福祉士の課程指定科目である。「精神保健福祉援助実習Ⅰ」では「精神科医療機関」での現場実習を行う。この実習では精神障害者の病について病棟での体験実習で触れると共に、回復した外来通院者と接することにより、精神障害者を一面的に見るのではなく生活者としての視点の必要性を感じさせると共に、医療の大切さも理解させる。 「精神保健福祉実習Ⅱ」では前年の精神医療機関での実習の経験を踏まえ、実習希望の精神保健福祉機関を選択させ、現場実習を行う。保健機関、社会復帰施設、精神科医療機関と動機を持った実習を行うことにより、対象者と接するだけでなく、精神保健福祉が抱える背景も感じ取れるよう心がけている。  事前学習では、実習機関が必要とする実務上の学習を中心に行う。事後学習は実習で残された課題を個々が整理した上で、グループ学習により共有化し課題を深めていく。事前事後共に適切なゲストスピーカーを招き、現実的学習を心がけている。
d. 同朋大学社会福祉学部社会福祉学科、「精神保健福祉援助技術各論」専任講師、助教授、日本福祉大学社会福祉学部保健福祉学科兼任講師、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科 准教授	2003年4月から2006年3月まで	同朋大学社会福祉学部社会福祉学科及び日本福祉大学保健福祉学部保健福祉学科、愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科の学生を対象に、「精神保健福祉援助技術各論」の講義の兼任講師を務める。「精神保健福祉援助技術各論」は社会福祉学部保健福祉学科及び社会福祉学科の学生に対する学科専攻科目で、4単位(2時間×30回)の通年科目である。講義内容は、精神保健福祉領域における社会福祉援助実践に必要な社会福祉援助技術・方法について理解を深めるとともに、精神障害者の疾病や障害、障害者を取り巻く家族やその関係者・地域を対象とした場合の特徴を理解した上での実際の援助技術・方法の習得を目指している。具体的には個別援助技術、集団援助技術、地域援助技術について理解するとともに、精神障害者やその家族、精神障害者を取り巻く地域を対象とした援助技術・方法について事例検討などをおして理解をすすめている。また精神障害者の地域生活支援の方法としてのケアマネジメントについて理解し、身につけるとともに、チームアプローチやネットワークなどの方法について理解を深めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1)精神保健福祉士養成講座 精神保健福祉論 第11章精神保健福祉関連施設 第3節「雇用・就労」(再掲)	2003年2月	障害者雇用施策について概観した上で、職業リハビリテーションシステム及び職業生活支援機関の機能について整理している。また各種労働保健を精神障害者支援の視点から整理している。「雇用・就労」を分担執筆した。(247頁～259頁)中央法規出版
(2)精神保健福祉士養成講座『精神保健援助演習』(再掲)	2004年2月	精神障害者生活訓練施設における社会的入院患者に対する援助事例。社会的入院と呼ばれるケースに対する生活訓練施設における援助過程における留意点についてまとめた。(218頁～222頁)中央法規出版
(3)改訂精神保健福祉士養成講座⑥『精神保健福祉援助技術各論』(再掲)	2007年1月	「就労支援における個別援助技術」執筆 就労課題に対する療養期からリハビリテーション期、就労導入期の対象者、家族、職場等環境の課題を抽出し、精神保健福祉士が行う個別援助の視点、方法について執筆(94頁～97頁)

(4) 改訂精神保健福祉士養成講座④『精神保健福祉論』(再掲)	2007年1月	第12章「精神保健福祉関連施策」第1節「関連法規」を分担執筆 第1節では障害者基本法、社会福祉法、民法(成年後見制度)、生活保護法、地域保健法、警察官職務執行個人情報保護法、医療観察法、自殺対策基本法、児童虐待防止法など機能、基本原則に加え、精神保健福祉士の業務上の留意点について執筆。(290頁～305頁) 第2節では、医療保険制度について概説した上で、自立支援医療などの公費負担との関係、傷病手当金利用上の留意点など精神保健福祉士の業務における留意点、医療保険制度改革による改訂スケジュールと変更点について執筆(306頁～321頁)
(6) 検討事例の作成	2000年4月から現在に至る	同朋大学社会福祉学部社会福祉学科及び日本福祉大学保健福祉学部保健福祉学科、における精神保健福祉関連科目において学習課題に適切な事例を作成している。 「精神保健福祉論Ⅰ」 疾病と生活障害を理解するための事例 精神保健福祉法を理解するための事例 戦後の精神医療の歴史を理解するための事例など 「精神保健福祉論Ⅱ」 精神保健福祉士の倫理に抵触する事例 精神障害者の人権侵害に関連する事例 精神障害者の権利擁護を理解するための事例 精神障害者の生活保障のための社会資源を理解するための事例 「精神保健福祉援助演習Ⅱ及び精神保健福祉援助技術各論」 精神障害者の受診前援助事例 精神障害者長期入院事例 精神障害者地域生活支援事例 セルヘルプグループの実際を知る事例 社会復帰施設の作り関連したコミュニティーワーク事例 その他 「精神保健福祉援助演習Ⅰ」 面接演習導入のための事例
(7) レジюме及び補助教材の作成	2000年4月から現在に至る	授業の進行状況を共有し、要点の理解を促進するためレジюмеを作成している。授業内容理解のための資料等の補助教材を準備している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
(1) 地域福祉権利擁護事業専門員実践力強化研修会「精神障害者に対する支援活動」講師及び事例検討	2003年6月、7月、8月	全国社会福祉協議会会場、大阪会場、福岡会場
	2004年7月	京都会場
	2006年7月	全国社会福祉協議会会場
	2007年7月	全国社会福祉協議会会場
(2) 地域福祉権利擁護事業中央カンファレンス助言者	2004年8、9月、2005年11月、2006年11月、2007年2月	全国社会福祉協議会 「統合失調症圏の単身世帯への支援」「アルコール依存症の夫と知的障害を持つ妻への支援」「依存の強いアルコール依存症者」「枠組みが作れない人格障害と診断された利用者への支援」などについて事例検討。
		2004年8、9月は山崎美貴子氏と2005年11月は奥川幸子氏とともに助言。 2006年11月、2007年2月は山崎美貴子氏、奥川幸子氏とともに助言。
(3) 地域福祉権利擁護事業生活支援員中央研修	2004年9月、2005年9月、2006年9月	全国社会福祉協議会 2004年度「生活支援員の訪問援助活動を有効にするために訪問活動の留意点と対人援助の基礎知識」 2005、2006年度「精神障害者の生活特徴と生活支援の課題」と題して講演

(4)地域福祉権利擁護事業専門員実践力強化研修会「生活支援員との効果的連携の課題と方法」講師及び実践報告のコーディネーター	2005年7、9月	全国社会福祉協議会主催 東京会場、広島会場 「生活支援員との効果的連携の課題と方法」をテーマに講義およびシンポジウムのコーディネーターを行う。講義では、事例に見られる連携の困難さを抽出したうえで、マネジメントを行う上での合意形成の留意点および、専門員が行う支援員に対するスーパービジョン、カンファレンスの方法の工夫点について講義した。
(5)地域福祉権利擁護事業生活支援員研修	2003年から現在に至る	2003年12月 三重県社会福祉協議会、群馬県社会福祉協議会、2004年1月、2月 埼玉県社会福祉協議会、2005年1月群馬県社会福祉協議会、3月富山県社会福祉協議会、大分県社会福祉協議会にて「事例にみる精神障害者の生活支援と地域福祉権利擁護事業」をテーマに講義、演習 名古屋市社会福祉協議会において2006年8月、2007年8月「生活支援における対人援助技術」について講義、演習
(6)名古屋市主催「精神障害者ケアマネジメントフォローアップ研修」	2004年2月、2005年2月、2006年2月	「ケアマネジメントの動向と精神障害者に対するケアマネジメント」と題して講義
(7)北九州市精神保健福祉職員研修	2004年12月	北九州市精神保健福祉センター「就労支援のためのケアマネジメント」と題して講義
(8)愛知県精神保健福祉相談員研修	2001年2月	「ケアマネジメントの動向と精神障害者に対するケアマネジメント」と題して講義
(9)愛知県精神障害者社会復帰施設長研修	2004年1月	「精神障害者の権利擁護」と題して講義
(10)精神障害者居宅支援事業ホームヘルパー養成研修	2003年4月から現在に至る	埼玉県、長野県、さいたま市、愛知県豊田市、新城市、岡崎市、名古屋市などの主催による精神障害者居宅支援事業の開始にともない養成研修担当。2002年度、2003年度は埼玉県より委託を受ける。2004年度より2006年度は埼玉県社会福祉協議会主催研修にて講師。
(11)埼玉県主催、精神障害者介護等支援事業、事業所コーディネーター研修	2004年度より2006年度まで	事例検討及びアルコール依存症、人格障害者のホームヘルプについて講義、関係機関との連携に関するグループワークのコーディネーター
(12)名古屋市精神保健福祉センター主催 精神障害者ホームヘルプフォローアップ研修	2005年7月、8月	「精神障害者地域生活支援における情報収集の留意点 必要な情報収集と医療機関との情報交換のコツ」について講義。テーマ「精神障害者が関わる関係機関との連携」のシンポジウムにてコーディネーター
(13)厚生労働省国庫補助事業 精神保健福祉推進事業福祉職員基礎研修	2003年度	三重県社会福祉協議会、埼玉県社会福祉協議会
(14)厚生労働省国庫補助事業精神保健推進事業	2004、2005年度	岡山県東粟倉村社会福祉協議会にて2004年度「精神障害者への理解と地域の関わり」と題して講演。鬱病、アルコール依存症についての基礎的理解と対応を内容とした。2005年度は「中高年の危機」と題して講演。中高年者の生活における変化とその対応について講演。
(15)全国厚生事業団体連絡協議会精神障害者社会生活支援サービス研修会講師	2004年1月	全国社会福祉協議会「精神障害者支援の援助技術の基本」をテーマに講義。統合失調症者及びうつ病者に対する生活のしづらさの理解と支援方法について講義。
(16)埼玉県社会福祉協議会精神保健福祉専門研修	2004年3月	「精神障害者に対する生活支援」をメインテーマに「精神障害者の障害の基礎理解」と題して講義。「生活支援の実際」をテーマにシンポジウム。コーディネーターをつとめる。
	2005年3月	「精神障害者に対する生活支援」をメインテーマに「精神障害者の障害の基礎理解」と題して講義、演習。「地域生活支援における連携」をテーマに実践報告のコーディネーター、講義をつとめる。
(17)全国ホームヘルプ協議会指導者研修	2006年12月	静岡県浜松市において「精神障害者の生活支援とホームヘルプ」と題して統合失調症者の生活上の行動特性とその配慮及び障害者自立支援法上のホームヘルプサービスに対するコーディネーター上の留意点について講演

(18)全国社会福祉協議会、全国養護施設協議会、全国乳児施設協議会、全国母子生活支援施設協議会共催 ファミリーソーシャルワーク研修会	2008年1月	全国社会福祉協議会にて児童養護施設等に配置されているファミリーソーシャルワーカーを対象に「関わりの難しい保護者への支援」をテーマに講義および事例検討を行う。人格障害と思われる対象者及び関わりが困難な対象者と関わっていく場合の精神医療、保健、福祉初期化の効果的活用方法について等を講義。人格障害、解離性障害、PTSDを持つ利用者の3事例について事例検討。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
1 『精神障害者の地域生活支援と地域福祉権利擁護事業』	共	2003年3月	全国社会福祉協議会地域福祉部	共著者：石渡和実、瀧誠	29頁～58頁
2 精神保健福祉士養成講座『精神保健援助演習』	共	2004年2月	中央法規出版	編集者：田中秀樹、住友雄二、谷中輝男 共著者：佐藤光正、長崎和則、助川征雄、中村和彦、瀧誠 他22名	
3 精神保健福祉士養成講座『精神保健福祉援助演習』教師用	共	2004年2月	中央法規出版	編集者：田中秀樹、住友雄二、谷中輝男 共著者：佐藤光正、長崎和則、助川征雄、中村和彦、瀧誠 他22名	49頁～50頁
4 改訂精神保健福祉士養成講座⑥『精神保健福祉援助技術各論』	共	2007年1月発行	中央法規出版	編集者：谷中輝雄、田中秀樹、住友雄二 共著者：谷中輝雄、田中秀樹、住友雄二、岩田泰夫、八木原律子、三品桂子、瀧誠 他7名	第1章第6節2「就労支援における個別援助技術」執筆 94頁～97頁
5 改訂精神保健福祉士養成講座④『精神保健福祉論』	共	2007年1月発行	中央法規出版	編集者：岡村正幸、新保祐元、高橋一 共著者：岡村正幸、新保祐元、高橋一、寺谷隆子、谷中輝雄、岩崎晋也、松岡克尚、八木原律子、助川征雄、瀧誠 他5名	第12章「精神保健福祉関連施策」第1節「関連法規」を分担執筆 290頁～305頁、306頁～321頁
<b>学術論文</b>					
1 ケアマネジメント導入の課題精神科リハビリテーションに求められるもの	単	2005年3月	公設精神リハビリテーション施設連絡協議会報告集[18]		16頁～32頁
2 精神障害者の障害者自立支援法における総合的な自立支援システムにおける利用実態政令指定都市調査より	単	2008年3月	2007年度厚生労働科学研究補助金精神保健福祉医療改革ビジョンの成果に関する研究2007年度総括・分担研究報告書		156頁～165頁
<b>学会発表</b>					
1 ケアマネジメント導入の課題精神科リハビリテーションに求められるもの	単独(特別講演)	2004年9月	第17回公設精神科リハビリテーション施設研究協議会		精神障害者を巡る福祉医療の政策動向を踏まえつつ、ケアマネジメントの諸施策における導入にあたって当事者に求められる力、リスクを抽出した。また精神障害者を取り巻く様々なマネジメント構造を認識する中で、リハビリテーション過程に求められる課題、従事するものの課題について訴えた。

2 基調報告とパネルディスカッション「障害者自立支援法」を考える 医療と福祉の連携を見据えて	単	2006年7月	第3回日本精神保健福祉学会		「障害者自立支援法」を考える 医療と福祉の連携を見据えてにおいて、筆者がコーディネーターおよびまとめ求めを行った。精神保健福祉の現場では、医療、福祉が制度上分断され、実践の場においても連携ではなく、互いの状況に対する認識の低下が問題視された、状況下における精神保健福祉士の役割について課題を抽出した。 基調報告 まいんど八王子 池末美穂子氏 パネラー あいせい紀年病院院長 森隆夫氏 生活訓練施設守牧増子恵子氏 名古屋市精神保健福祉センター 所長 竹内浩氏 共和病院 水谷いずみ氏 コーディネーター及びまとめ 瀧誠 (327頁～329頁)
辞書					
1 精神保健福祉辞典	共	2004年7月	中央法規出版	編者:松永宏子、荒田寛	精神保健福祉援助技術「ベラック.A.S」「M.ボーエン」「ベラック.A.T」「傾聴」「治療共同体」「系統的脱感作法」執筆
その他					
1 精神障害者ホームヘルプⅡホームヘルプ研修から	単	2003年6月	『さいたま精神保健福祉だより』2003年6月号		精神障害者ホームヘルプサービスの研修の場における検討事例、問題定義、ヘルパーが持つ疑問について紹介し、あつせんする市町村の課題、精神保健福祉従事者の課題、ホームヘルパーの課題について考察した。(2頁～3頁)
2 精神保健福祉基礎調査	共	2004年4月	名古屋市健康福祉局障害保健福祉部		新障害者計画に向けてのニーズ調査である。名古屋市内在住の1年以内に退院見込みの入院者及び外来者、精神障害者家族を対象とした調査。回収数1501件
3 障害者自立支援法にみる精神障害者に関わる援助者の課題	単	2005年12月	「精神保健福祉だより」2007年 愛知県精神保健福祉協会		精神障害者の「回復」の様々な側面を概観したうえで、障害者自立支援法を利用するプロセスと「回復」過程にみられる課題について考察した。(1頁～3頁)



4 基調報告とパネルディスカッション「障害者自立支援法」を考える 医療と福祉の連携を見据えて	単	2006年9月	精神保健福祉Vol 37, No. 3		日本精神保健福祉学会において、筆者が司会および求めを行ったパネルディスカッションについて概要および課題について執筆した。特に医療、福祉が制度上分断される中で精神保健福祉士の役割について課題を抽出した。
			日本精神保健福祉協会		基調報告 まいんど八王子 池末美穂子氏 パネラー あいせい紀年病院院長 森隆夫氏 生活訓練施設守牧増子恵子氏 名古屋市精神保健福祉センター 所長 竹内浩氏 共和病院 水谷いずみ氏 司会 まとめ 瀧誠 (327頁～329頁)
5 精神障害者の障害者自立支援法における総合的な自立支援システムにおける利用実態	共	2007年3月	2006年度厚生労働科学研究補助金 心の健康科学研究 精神保健福祉医療改革ビジョンの成果に関する研究 2006年度総括・分担研究報告書		障害者自立支援法施行後の入院治療から地域生活支援に至る過程に焦点を当て①利用者および提供者の自立支援法利用に対する意識②政令指定都市における障害者福祉計画の運用及び市町村相談支援事業、退院促進事業等の実態調査研究を行い報告。 (145頁～191頁)
6 精神障害者の理解とホームヘルパー	単	2007年11月	「ヘルパーネットワーク」No.58 全国社会福祉協議会 全国ホームヘルパー協議会		精神障害者に対するホームヘルプ上、ヘルパーが感じる役割に対する疑義を整理した上で、精神障害者が持つ生活特性とそのことに対する支援の意味、支援上の配慮点について執筆した。(6頁～10頁)
7 精神障害者の障害者自立支援法における総合的な自立支援システムにおける利用実態	共	2008年3月	2007年度厚生労働科学研究補助金 心の健康科学研究 精神保健福祉医療改革ビジョンの成果に関する研究		障害者自立支援法施行後の入院治療から地域生活支援に至る過程に焦点を当て①政令指定都市における退院支援システムの現状②自立支援法利用に対する意識③いわゆる630調査における調査項目の妥当性について調査研究を行った。 (181頁～202頁)
再掲			2007年度総括・分担研究報告書		

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

現在所属している学会  
2003年6月～現在

日本精神保健福祉学会、日本精神障害者リハビリテーション学会  
名古屋市障害者施策推進協議会委員

2003年6月～2004年3月	名古屋市障害者福祉新長期計画策定専門部会委員
2006年4月～2007年3月	名古屋市障害者福祉計画策定専門部会委員 名古屋市障害者区分認定審査会協議会委員
2006年4月～現在	名古屋市障害者区分認定審査会審査委員 名古屋地方裁判所精神保健参与員
2006年7月～現在	厚生労働科学研究「精神保健医療福祉の改革ビジョンの成果に関する研究」主任研究者竹島正、分担研究「精神障害者自立支援法における総合的な自立支援システムの利用の実態に関する研究」分担研究者野中猛に参加。政令指定都市における障害者自立支援法の運用を担当
2007年7月～現在	日本精神保健福祉士養成校協会ブロック研修幹事 愛知県高次機能障害普及検討委員会委員
2008年4月～現在	名古屋市障害者福祉計画第2次計画策定専門部会委員

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 多田萬里子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
教育内容の充実		2003年4月～現在	生命科学分野の研究の進展に関わる多くの情報に対応できる科学的知識を正しく理解できるよう、教材プリントは毎年更新し、新しい情報を提供した。		
教育方法の工夫、講義内容の理解度と学習意欲の向上		2003年4月～現在	理解度を高めるため、基本を繰り返し説明した。授業ごとに、小テストを行い、添削、返却と解説を行った。適宜、学生からの質問と希望を聞き、講義内容を変更した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
生命科学		2003年4月1日	人体の成り立ち、遺伝子の働き、ヒトの発生、成長、生殖、老化など50ページ		
人体環境		2003年4月1日	恒常性の維持、刺激の受容、生体防御など50ページ		
メディカル・サイエンス		2003年4月1日	生活習慣病、先端医療技術、感染症、環境と健康など30ページ		
基礎生命科学		2003年4月1日	人体構造・機能と疾患の成り立ちなど50ページ		
遺伝学		2004年10月1日	メンデル遺伝から分子遺伝学まで 集団遺伝学、疾患の原因遺伝子など50ページ		
生物		2004年10月1日	細胞、個体の発生、進化、生態系など50ページ		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文化創造学部環境文化専攻主任		2003年4月～2006年3月	本専攻の教育活動全般を監督し、教育効果向上のため専攻に関わる諸問題を教員全体で共有できる環境づくりに努めた。		
人権擁護委員会委員		2004年4月～2006年3月	各学部選出委員として人権擁護のための手引きの作成と人権問題の対応などを担当した。		
医療福祉学部開設準備委員会委員長		2002年4月～2004年3月	医療福祉学部開設に向けての教育・運営などを構想する委員会の責任を果たした。		
医療福祉学部開設準備学部長		2003年12月～2004年3月	学部開設のための準備教授会を運営した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
化学発癌の分子機構とがんの化学予防—DNA付加体と酸化的DNA損傷の役割	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—第7号		51頁～60頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在		日本造血細胞移植学会倫理委員会副委員長			
2003年4月～現在		日本癌学会会員			
2003年4月～現在		日本環境変異学会会員			

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 棚橋昌子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
視聴覚教材の編集および作成		2003年～現在	学生の理解を深めるために、視聴覚教材を作成した。時代を先取りした問題を扱う同種のビデオ等を約20分に編集し、学生に提示して問題意識を深める。		
演習科目では実験・測定を取り入れる		2003年～現在	体脂肪測定や血圧測定や騒音測定等の簡単な測定を取り入れ、授業に興味をもたせる。		
演習問題の作成		2003年～現在	統計の授業ではテキスト以外に身近な題材で演習問題を作成し、授業に興味を持たせる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Eco Navigator No.1～No.4		2003年4月～2005年3月	環境文化専攻の授業科目「資料収集法」のレジュメ集		
環境文化研究 第1号～第4号		2003年4月～2007年3月	環境文化専攻の卒業論文のレジュメ集		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
文化創造学部環境文化専攻主任		2006年4月～2008年3月	文化創造学部環境文化専攻に関する総括		
医療福祉学部学生生活委員長(全学学生生活委員)		2004年4月～2006年3月	学生生活一般に関する諸問題に対処		
全学履修制度検討委員会委員		2005年4月～2006年3月	複専攻、複数学位に関する規約等の整備		
将来計画委員会 第9委員会委員		2008年4月～現在	福祉貢献学部設立(2010年)に関する諸問題に対処		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
子どもをとりまく環境—名古屋の事例—	単著	2005年1月	(株)エイ・ワークス		
論文					
若者の味覚に関する最近の傾向—甘味を中心として—	単著	2003年11月	家庭科教育 77巻11号		65頁～69頁
精神的疲労の生理機能に関する測定方法の検討	単著	2004年3月	愛知淑徳大学文化創造学部論集 第4号		55頁～65頁
その他					
健康管理からみた子育て支援	単著	2003年12月	児童学研究 NO.30		6頁～7頁
育児は男女共同の作業	単著	2005年2月	児童学研究 NO.31		12頁～14頁
日本と中国の少子化の行方	単著	2007年10月	児童学研究 NO.32		40頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1975年～現在	日本公衆衛生学会				
1975年～現在	日本小児保健学会				
1986年～現在	日本家政学会				
2000年～現在	日本栄養改善学会				
2003年6月～2005年5月	日本家政学会児童学部会 部会長				
2003年10月～2009年10月	静岡県公害審査会委員				

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 田邊宗子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
手順のプリント作成		2004年9月～現在	検査の手順書を作りプリントで解説		
症例のスライドで呈示		2004年9月～現在	多くの症例を体験するためにスライドにて症例呈示		
学生同士の実習		2005年4月～現在	講義を聴くだけでなく、簡単な検査はその場で実践させている。		
ビデオを取り入れる		2005年4月～現在	プリントだけでなくビデオで検査の手順や方法を見せることによってより理解を深めさせる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
検査に使用する遮蔽版や固視目標等		2005年5月1日	検査を授業の中で出来るように簡単なものを作成、学生に配布		
視野実験用の遠方用検査用紙		2005年10月1日	神経眼科演習で学生の理解を深めるためにワークショップを行い、そのための実験用紙を作成。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
修士論文「視能訓練士の実習教育カリキュラムとガイドラインの思案」		2006年3月修了	眼科写真におけるガイドラインとカリキュラム案を国家試験のガイドラインに沿って作成。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
眼科検査のskill up－眼底写真撮影－	単著	2003年8月	日本視能訓練士協会誌第32巻		55頁～66頁
加齢黄斑変性	共著	2003年1月	日本眼科紀要第54巻	湯沢美都子、川村昭之、春山美穂、石原菜奈子、松本容子、森隆三郎、新井恵子、田邊宗子	495頁～505頁
眼底造影における立体造影の意義	共著	2003年1月	日本眼科紀要第54巻	松井瑞夫、田邊宗子、湯沢美都子	491頁～494頁
カラー眼底撮影の基礎	単著	2004年1月	日本眼科写真協会誌20巻		24頁～29頁
6. SLO	共著	2005年4月出版	眼科検査ハンドブック第4版(医学書院)	田邊宗子、湯沢美都子(編集:小口芳久、澤充、大月洋、湯沢美都子)	292頁～295頁
眼底・細隙灯顕微鏡	単著	2005年3月出版	視能学(文光堂)	編集:丸尾敏夫、久保田伸枝、深井小久子	230頁～238頁
修士論文「視能訓練士の実習教育カリキュラムのガイドラインの試案」	単著	2006年3月	九州保健福祉大学保健科学研究科(通信制)	田邊宗子	
視能訓練士スペシャリストへの道4	分担執筆	2006年11月	メディカル葵	編集:山本節、鶴飼一彦、関谷善文、初川喜一	207頁～215頁
視能訓練士スペシャリストへの道5	分担執筆	2007年10月	メディカル葵	編集:山本節、鶴飼一彦、関谷善文、初川喜一	212頁～219頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～2005年12月		武田薬品工業株式会社のボグリボース長期投与師範臨床試験に参加			
2004年1月～2005年3月		アルコン株式会社のAnecortave Acetateの治験のアドバイザー			
2004年4月2日～2005年3月		ファイザー株式会社のEYE-001の治験のアドバイザー登録 治験にも参加			
2003年7月～2004年6月		第57回臨床眼科学会時開催の日本眼科写真協会第21回眼科写真展委員			
2004年7月～2005年6月		第58回臨床眼科学会時開催の日本眼科写真協会第22回眼科写真展委員			
2005年7月～2006年6月		日本眼科写真協会の理事			
2006年7月～現在		日本眼科写真協会 副会長			

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 谷口明広	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①福祉貢献論における自作講義レジュメの作成・配布	2004年5月～2008年3月	老人福祉、児童福祉、障害者福祉、地域福祉等の概要を自作のレジュメや資料を用いて解説し、社会福祉に関心が持てるトピックスも多く含ませている			
②フィールドスタディ入門における現場との連携強化	2004年4月～2008年3月	障害者福祉現場において、最も興味を引きやすいスポーツやリハビリテーションの実践機関を紹介し、講義後も関係が持てるように連携を強化した			
③社会福祉援助技術演習における自己覚知ワークの実践	2005年4月～現在	自己覚知や他者理解を深めるための自作ワークを多用している			
④障害者福祉論Ⅰ・Ⅱにおけるパワーポイントの使用	2005年4月～現在	新法である「障害者自立支援法」に関してパワーポイントを用いて解説した			
2 作成した教科書、教材、参考書					
①障害者ケアマネジメント実施マニュアル〔身体障害者編〕	2000年9月	障害者ケアマネジメントにおけるケア計画演習を実施した			
②社会福祉基礎シリーズ『障害者福祉とソーシャルワーク』	2001年8月	障害者福祉の中でも「脳性マヒ者」へのソーシャルワークを示した			
③社会福祉士養成テキストブック7『障害者福祉論』	2002年3月	障害者福祉の制度を障害種別によって解説を加えた			
④社会福祉の思想・理論と今日的課題	2004年10月	障害をもつ人たちの自立生活と支援費制度に関して解説した			
⑤障害をもつ人たちの自立生活とケアマネジメント	2005年10月	障害をもつ人たちの自立生活概念と実践的ケアマネジメントを論じた			
⑥対人援助職をめざす人の「ケアマネジメント Learning 10」	2007年4月	障害をもつ人々へのケアマネジメント担当者の実務について論じた			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
①立命館大学社会福祉実習事前学習会 講演会	2005年6月～2007年6月	立命館大学の福祉実習に行く学生に対して、現場における心得を話した			
②大阪教育大学附属養護学校 個別支援教育講演会	2005年8月23日	「障害者自立支援法」の施行にあたり重要となる個別支援教育を解説			
③京都市立御所南小学校 小学6年生人権学習講演会	2003年4月～現在	小学6年生に対して、障害をもつ人々への理解を深めるように話した			
④ノードルダム女学院中等部 ボランティア教育講演会	2003年4月～現在	中学2年生へのボランティア教育を担当教員と協議し、実践した			
⑤障害児をもつ親の会 エンパワメントを支援していく教育に関する講演会	2003年4月～現在	障害児に対してパワレスにさせないための教育・子育てを解説した			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
①NHK教育ラジオ「ともに生きる」での障害者福祉教育	2003年4月～2007年3月	教育ラジオの番組を通して、ノーマライゼーション思想の普及を目指している			
②障害者ケアマネジメントを担当する相談支援従事者研修の講師	2003年4月～現在	障害者に対する相談支援専門員を目指す人々への実務研修			
③サービス管理責任者認定研修の講師	2006年12月～現在	障害者関連施設におけるサービス管理責任者への実務研修			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
①『障害者福祉とソーシャルワーク』	共著	2001年8月	有斐閣	大島 巖、奥野英子、中野敏子、谷口明広	11頁
②実践福祉文化シリーズ『障害者と福祉文化』	共著	2001年9月	明石書店	一番ヶ瀬康子、河東田 博、谷口明広	18頁
③社会福祉士養成テキスト7『障害者福祉論』	共著	2002年3月	ミネルヴァ書房	小澤 温、北野誠一、谷口明広	20頁
④福祉キーワードシリーズ「ソーシャルワーク」	共著	2002年6月	中央法規出版	黒木保博、山辺朗子、倉石哲也、谷口明広	6頁

⑤福祉キーワードシリーズ「ケアマネジメント」	共著	2002年11月	中央法規出版	白澤政和、渡辺裕美、福富昌城、谷口明広	6頁
⑥人間福祉の思想と実践	共著	2003年6月	ミネルヴァ書房	住谷馨、田中博一、山辺朗子、谷口明広	17頁
⑦福祉キーワードシリーズ「介護」	共著	2003年7月	中央法規出版	田中信子、中島健一、石川治江、谷口明広	4頁
⑧社会福祉の思想・理論と今日的課題	共著	2004年10月	筒井書房	秋山智久、井岡勉、岡本民夫、黒木保博、谷口明広、同志社大学社会福祉学会	12頁
⑨支援費風雲録	共著	2004年11月	明石書店	花田春兆、谷口明広	20頁
⑩高齢者・障害者に対する接客サービス従事者研修テキスト	共著	2005年5月	中央法規出版	社団法人シルバーサービス振興会、谷口明広	33頁
⑪セックス・カウンセリング入門改訂第2版	共著	2005年5月	金原出版株式会社	野末源一、阿部輝夫、大川玲子、針間克己、谷口明広	4頁
⑫障害をもつ人たちの自立生活とケアマネジメント	単著	2005年10月	ミネルヴァ書房	谷口明広	220頁
⑬在宅ケア事典	共著	2007年12月	中央法規出版	小澤 温、所 道彦、上田 敏、谷口明広	2頁

論文

①「障害をもつ人たちが専門家に望む性生活支援—当事者はどのような支援を求めているのか」	単著	2004年9月	三輪書店作業療法ジャーナルVol. 38 No. 10		4頁
②「障害者・児の自立支援と教育におけるインクルーシブの実践—生涯的・包括的な地域生活支援を実現するソーシャルワークを求めて—	単著	2005年1月	相川書房 ソーシャルワーク研究Vol. 30 No. 4		7頁
③障害当事者活動と社会リハビリテーションとの関連性—自立生活概念の影響とリハビリテーション批判を中心に—	単著	2005年12月	日本障害者リハビリテーション協会 リハビリテーション研究No. 125		4頁
④障害当事者活動と社会リハビリテーションとの関連性—自立生活概念の影響とリハビリテーション批判を中心に—	単著	2007年12月	日本障害者リハビリテーション協会 リハビリテーション研究 第35巻第3号		4頁

その他

--	--	--	--	--	--

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年10月	日本リハビリテーション連携科学学会設立発起委員
2000年6月～2001年9月	厚生労働省社会参加室 介助犬に関する検討委員会委員
2000年4月～現在	京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」運営委員長
1998年4月～現在	厚生労働省障害者ケアマネジメント従事者養成研修プログラム委員
1998年4月～現在	社会福祉法人「すてっぷ」理事
2005年11月	厚生労働省「障害者自立支援法」における障害程度区分に関する検討委員

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 谷口純世	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
リアクションペーパーの配布	2001年4月1日～2004年3月31日	短期大学の小学校・幼稚園教諭、保育士養成での講義だったため、まず、福祉の初歩的な事柄を理解してもらうことから開始し、その後、子どもの福祉について、学生の身近な部分や、教諭・保育士として子どもやかかわるとき連携のとおり方などについての学習へと進めていった。その際、講義中の質疑に加え、リアクションペーパーによる質疑や福祉に対する考えの変化などを記入してもらい、返答するよう心がけた。また、リアクションペーパーに個人的悩みなども入っていたことから、個別対応もおこなった。			
リアクションペーパーの活用、資料の作成・配布、学問と実践の両面からの学習	2004年4月1日～現在	資料があると学生の理解度が上がるため、学生の理解度に応じた資料を作成し、配布している。資料は学生がメモを取りやすいように配慮し改善を加えていっている。学生の疑問については、リアクションペーパー(学期末評価に影響しないもの)に記入してもらい、翌週の講義開始時に答えるようにしている。さらに、リアクションによる疑問について、補足資料が必要であれば作成し、配布・解説をおこなっている。この質疑応答の形は、授業アンケートでも良い評価があったので、継続している。また、社会福祉援助では学問のみではなく、実践の状況を伝えることも、学生の理解度を向上させるだけでなく、学生の実習・就職においても有効なため、実践の状況もあわせて伝えるようにしている。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
	2001年4月1日～現在	国家試験受験までに法律・制度など、さまざまな点が変わることが予想されるため、講義にて配布する資料を使用している。なお、参考文献については、必要に応じて講義内で紹介している。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
実習委員	2001年4月1日～2004年3月31日	幼稚園・保育所・保育所以外の児童福祉施設のうち、保育所以外の児童福祉施設に関する責任者として学生の教育にあたった。2004年4月からは実習委員長として小学校・幼稚園・保育所・保育所以外の児童福祉施設の4種の実習にかかわった。			
教務委員	2001年4月1日～2004年3月31日	教務委員として、教務関係業務や、学生の教務や日常生活などに関する相談に応じるなどした。			
論集編集委員	2004年4月1日～2006年3月31日	紀要の編集委員として、第1号～第2号の発行にかかわった。			
教務委員	2005年4月1日～現在	教務委員として、教務関係業務や、学生の教務に関する相談に応じるなどした。			
2～3回生クラス担任(4組)	2005年4月1日～現在	2～3回生の4組担任として、学生の必要に応じて相談を受けた。			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
児童養護実践の新たな地平	共著	2003年2月	川島書店	編者:鈴木力、山田勝美	15頁～28頁、189頁～200頁、208頁～209頁、218頁～219頁、225頁
子ども家族援助論	共著	2003年4月	川島書店	編者:鈴木力、山田勝美	50頁～60頁
よくわかる地域福祉	共著	2003年9月	ミネルヴァ書房	編者:山縣文治、松端克文	150頁～159頁
よくわかる養護原理	共著	2005年4月	ミネルヴァ書房	編者:山縣文治、林浩康	96頁～117頁



里親養育を知るための基礎知識	共著	2005年8月	明石書房	編者:庄司順一	24頁～25頁、98頁～99頁、116頁～119頁
児童福祉論	共著	2006年4月	ミネルヴァ書房	編者:大島侑	93頁～102頁
子どもと家庭の支援と社会福祉	共著	2008年	ミネルヴァ書房	編者:北川清一編	67頁～82頁、125頁～136頁
養護原理論	共著	2008年	ミネルヴァ書房	編者:遠藤和佳子・谷口純世	校正中:第4章
これからの養護原理とその内容	共著	2008年	川島書店	編者:鈴木力	校正中:第1部第3章、第2部第3章)
論文					
入所型児童福祉施設を活用した地域支援の展開のために	単著	2003年8月	季刊児童養護第34巻1号		16頁～21頁
ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティの芽生えに関する研究	共著	2005年3月	愛知淑徳大学紀要『医療福祉研究』第1号	共著者:神波幸子、谷口純世、金田千賀子	66頁～77頁
社会的養護の現状と課題	単著	2007年10月	チャイルドヘルス10巻10号		4頁～8頁
児童養護施設における日常生活支援	単著	2008年2月	愛知淑徳大学紀要『医療福祉研究』第4号		81頁～97頁
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～現在	児童福祉施設処遇指標研究会				
2004年4月～現在	社会福祉法人 婦人同情会 子供の家 学習会・研修会				
2004年10月～現在	日本社会福祉士会国際委員会国際協力員				
2007年6月	近畿児童養護施設連絡協議会第39回研究協議会 第2分科会コーディネータ				

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 永田忠夫	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
(1) 新入生フィールドワークの実施	2003年4月～2004年3月まで(文化創造学部)	愛知淑徳大学では、新入生教育としてエンカウンターキャンプを実施している。環境文化専攻においても、開設の平成12年度から1泊2日のフィールドワークを実施している。リトルワールドでは、「気候と住い」「生きるための工夫」「気候と食べ物」など環境文化に関するテーマを課し、レポートを作成させ、それを添削することにより、専門教育の導入および科学的報告書の作成能力を育成した。	
(2) 科学的論文形式による報告・プレゼンテーションの基礎能力の育成	2003年4月～現在(文化創造学部・医療福祉学部)	心理学に関する専門的研究へと導入するため、この演習において、テーマ研究のデータ収集方法として、新聞掲載内容のスクラップ、インターネット利用による情報収集法、図書館利用での図書検索法などさまざまな科学的データ・文献の収集法および情報の整理法を学習させ、それに基づくプレゼンテーション法、報告書の作成を教育し、さまざまなメディアを利用した研究およびその発表能力を育てた。	
(3) 資料収集法(面接法)におけるパソコン利用と報告書の公開	2003年4月～2005年3月(文化創造学部)、2005年4月～(医療福祉学部)	面接調査を実施するにあたり、新美教授(愛知淑徳大学コミュニケーション学部)と共同で作成した「心理尺度データベース(学内LAM上で公開)」をはじめ、インターネット上で公開されたデータベースや論文を利用し、調査項目を作成したりする過程を円滑に進めることができるように工夫している。さらに、データ整理に関しては、マルチメディアセンターのパソコンを利用し、統計ソフトSPSSを利用して統計処理を行い、科学的なデータ処理を学習させている。また、面接調査によって研究された報告書のレジュメは、他の資料収集法(調査法・実験法・官能検査法)のもと合同で環境文化学会の出版物として公開し、学内外にその成果を発表した。医療福祉学部においてもこの教育方法は継続されている。	
(4) 環境アセスメントⅢ(心理環境)演習における心理検査の実施と心の健康の自己診断	2003年4月～2006年3月まで(文化創造学部)	学生に心理検査(ストレス対処法調査、性格テスト等)を実施し、学生自身がアセスメントする際に必要なデータの標準化や信頼性・妥当性を含めた結果の統計的処理ができるような技能を習得させている。また、受講生を母数としたデータを統計処理して、授業内でその結果をフィードバックすることによって、個人・受講生全体の結果がアセスメント基準との比較における位置づけを明確にさせ、心の健康状態を把握させると共にその解釈・評価ができるような技能を修得させている。	
(5) 家族関係の客観的査定に基づく自己の家族観育成	2003年10月～現在(文化創造学部・医療福祉学部)	家族関係についての講義においては、学生自身が構成員となっている家族環境あるいはそこで交わされるコミュニケーション状況を自己診断できるような心理検査を作成し、家族を客観的に査定できるような工夫をし、それに基づく健全な家族観の育成を目指した。平成16年度に実施された「授業に関するアンケート」での学生の意見を参考にし、できる限り具体的な例を示して講義し、学生自信が自分の人生に役立つと感じることができるような内容になるよう工夫を重ねた。平成17年度の「授業に関するアンケート」では、すべての項目に改善の効果があると評価を受けた。	
(6) 論理的展開による科学的卒業論文作成の指導と報告書の公開	2003年4月～現在(文化創造学部・医療福祉学部)	文献検索・文献研究に基づいてテーマを絞り、問題・目的の設定とその実証のための方法、調査法を用いた資料収集とその結果の整理し、考察をするという流れを逐次検討させた。そのためにインターネット・図書文献の利用、さまざまなデータベースの活用法、論文作成手続き・文章表現のチェック、方法論の概説と具体的方法、結果の統計的処理法等の資料・教材を配布、講義し個人指導をも十分取り入れ教育した。その成果は、「環境文化研究」に発表されている。	

(7) 障害を持つ学生の「心理学」講義についての工夫	2005年4月～現在(医療福祉学部)	「心理学」講義において、視覚障害を持つ学生に対する対策として、一般学生に対して行うパワーポイントの提示内容・紙面の資料を点字に変換する期間を考慮して事前に配布したり、教授内容の具体例を挙げる際には、聴覚刺激によって理解できるようにしたり、見て理解できる内容を聞いて理解できるような例示をするなどの工夫をした。定期試験も口頭試験で行った。なお、今後の学習をより円滑にするために、音声認識を利用したパソコンでの学習ができるよう指導している。
(8) コミュニケーション技能の向上を図るための教育	2005年4月～現在(医療福祉学部)	対人関係を回避したり、人とかかわる方法に苦慮している学生が増えてきたことにともない、対人コミュニケーション論の講義とともに対人関係を維持発展させるためのコミュニケーション・スキルを訓練する時間を設けている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) 「心理尺度データベース」の作成と学内LANでの公開	2007年1月	資料収集法(面接法)、心理アセスメント演習、福祉貢献研究などに利用できる「心理尺度データベース」を共同研究で作成し、そのマニュアルも作成した(永田忠夫、新美明夫 2007年、「教育用「心理尺度データベース」の改訂(2006年度版) 愛知淑徳大学論集文化創造学部・文化創造研究科第7号)。また、学内LANで常に利用できるようにした。なお、平成19年1月現在、学内LAN上で公開している心理尺度の教育用データベースには1413尺度を掲載しており、順次蓄積中である。
(2) 家族内における人間関係を査定する尺度の作成	2005年10月	家族構成員間のコミュニケーション状況や感情交流の仕方、あるいは家族成員各自のコミュニケーション能力を査定する尺度を作成し実施している。また、家族構成員のコミュニケーション能力についての査定する尺度も作成した。
(3) 対人コミュニケーションのもちかたの特徴を測定する尺度の作成	2005年10月	交流分析のエゴグラムを対人関係用のエゴグラムに改良し、学生個々人が自分の対人関係における特徴を把握でき、改善できるようなデータとなる尺度を作成した。それに基づきコミュニケーションスキルの訓練を行った。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
(1) 学生の人間形成を援助する教育の実践	2003年4月～現在	学生相談室のカウンセラーとして、学生の悩み相談をとおして学生の人間形成を援助する教育活動を実行すると共に、授業においても学生の人間性の発達教育を視野においた教育活動を実践し、学生の総合的な人間教育に努力している。また全学の人権擁護相談委員も兼務した。
(2) 医療福祉学部開設準備委員	2003年4月～2004年3月	星が丘キャンパスの組織再編に伴う医療福祉学部開設の準備委員として、新学部の構想および具体的な設置に関する作業・折衝にかかわり、文部科学省への申請・認可までいたる業務を担当した。
(3) 医療福祉学部福祉貢献学科主任	2004年4月～2006年3月	新たに発足した医療福祉学部福祉貢献学科の主任として、学科の組織作りと組織メンバーである教職員・学生の人間関係の融和に積極的に取り組み、新学科の組織としての基礎作りと円滑な運営に努力した。
(4) 医療福祉研究科開設準備委員	2004年4月～2006年3月	平成16年度に新設された医療福祉学部を基礎とした医療福祉研究科の開設にむけてその設置申請にかかわり、新設研究科の設置の意義、その教育内容・カリキュラム、研究指導体制等の検討業務にかかわった。また、申請のための書類作りをはじめとする申請・認可にいたるまでの業務を担当した。
(5) 医療福祉研究科、研究科長	2006年4月～現在	医療福祉研究科の長として、新たに発足した研究科の運営を担い、組織の基礎作りに取り組んでいる。

(6) 学生支援等にかかわる各種委員会での活動	2004年4月～2007年3月	総合企画委員会内に設置された「学生支援体制検討委員会」に委員として加わり(平成16・17年度)、全学における学生支援のあり方やその組織と役割についての検討に参与した。同じく、17年度には、「学生生活サポート委員会」の委員として星が丘キャンパスにおいて学生生活に大きな支障をきたしている学生のサポートに携わった。また、同様な「健康管理検討委員会」(17年度)で、全学の健康管理のシステムのあり方の検討に参加した。
(7) 大学院課程変更委員会委員	2006年6月～2008年3月	平成18年度に新設された医療福祉研究科修士課程を基礎とした医療福祉研究科博士課程の開設にむけてその設置申請にかかわり、課程変更における設置の意義、その教育内容・カリキュラム、研究指導体制等の検討業務にかかわった。また、申請のための書類作りをはじめとする申請・認可にいたるまでの業務を担当した。

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
1. 大学時代の友人関係の維持と役割行動期待	共著	2004年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇第4号	◎新美明夫、松尾貴司、永田忠夫	105頁～115頁
2. 携帯電話利用における結婚効果について	共著	2005年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇第5号	◎新美明夫、松尾貴司、永田忠夫	61頁～76頁
3. 初期成人期の母娘関係に関する研究－母娘システムとしての分析－	共著	2005年3月	医療福祉研究第1号	◎永田忠夫、新美明夫、松尾貴司	94頁～113頁
4. 初期成人期の母娘関係に関する研究(Ⅱ)－母娘システムの共分散構造分析－	共著	2006年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部篇第5号	◎新美明夫、永田忠夫、松尾貴司	71頁～82頁
5. 教育用「心理尺度データベース」の改訂(2006年度版)	共著	2007年3月	愛知淑徳大学論集文化創造学部・文化創造研究科篇第7号	◎永田忠夫、新美明夫、	95頁～110頁
6. 初期成人期にある娘とその母親との関係－母娘システムとしての分析－	共著	2007年6月	家族心理学研究第21巻第1号	◎永田忠夫、新美明夫、松尾貴司	31頁～44頁

## III 学会等および社会における主な活動

--	--

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 西 和久	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
・大学等で担当した講義・演習			
(1)資料分析法入門(愛知淑徳大学文化創造学部環境文化専攻)	2003年4月～2006年9月	推測統計学に基づく実験・調査データの解析技法を講義した。授業アンケートの結果から、複雑な内容を大変明快に理解でき楽しく演習ができたとの意見が得られた。加えて、収集した資料を適切に集計・分析し、そこに含まれる複雑な情報を解析する技術の習得、正しく解釈・推論する能力の獲得に寄与したことが示された。	
(2)資料分析法特論(愛知淑徳大学文化創造学部環境文化専攻)	2003年4月～2007年3月	表計算及び統計解析ソフト等を利用して、大量のデータの縮約的表現の方法を講義した。講義の結果、受講生が多様な統計的検定の分析手法を習得し、卒論研究遂行の際重要となる多変量解析技術の向上に大いに貢献した。	
(3)行動科学基礎実験演習(東海学園大学人文学部)	2003年4月～2003年9月	心理学を含む行動科学の実験研究法について実践的に学ぶ内容の演習であり、学習心理学の実験室実験を担当した。授業アンケートの結果から、実験の実施、データの解析、科学論文の形式に則ったレポートの作成の基本的技術が習得できたとの意見が得られた。	
(4)行動科学応用実験演習(東海学園大学人文学部)	2003年10月～2004年3月	応用心理学の実験研究法について実践的に学ぶ内容の演習であり、社会心理学における社会的認知の実験研究を担当した。授業アンケートの結果から、本演習を通じて実験結果を適切に吟味・解釈する能力を涵養するとともに、実験社会心理学に対する学問的興味・関心を高めたことが示唆された。	
(5)心理学入門(愛知県立大学全学共通教養科目)	2003年4月～2004年9月	心理学の基本的立場、及びその方法論を、主に社会心理学の代表的な研究例を紹介しながら講義するとともに、心理学の歴史的展開についても解説を加えた。講義の結果、社会心理学に対する理論的興味のみならず、社会心理学的パースペクティブで現実社会を見ることの重要性が深まったものと推察している。	
(6)心理学入門～日常生活の疑問から学ぶ～(愛知淑徳大学エクステンションセンター)	2003年4月～2003年9月	社会人を対象とした公開講座(全12回)を担当し、心理学の理論・方法論について講義するとともに、日常生活を心理学的視点から解釈することの意義についても解説を加えた。授業アンケートの結果から、アカデミックな心理学をやさしく、楽しく学ぶことができ、有意義な講座であったとの肯定的評価を得た。	
(7)心理学入門～ミクロからマクロへのつながりを求めて～(愛知淑徳大学エクステンションセンター)	2003年10月～2004年3月	社会人を対象とした公開講座(全12回)を担当し、応用社会心理学の立場から人間及び社会の現代的問題について解説を加えた。授業アンケートの結果から、他者と協調しながらも、自分らしく独自に生きるにはどうしたらよいのかという人間の問題について多面的な理解が深まったとの意見が多く寄せられた。	
(8)環境アメニティーⅢ;住居環境(愛知淑徳大学文化創造学部環境文化専攻)	2003年4月～現在	生活環境の基本的要素の一つである「住」を環境心理学の立場から捉え、人間の快適で健康的な生活を保障する住居機能について講義を行った。学校環境、生活環境のアメニティーについて分析・評価を行ったり、アメニティーの改変を試みたりする実践的内容が大変興味深かったとの意見が受講生から多数得られた。	
(9)福祉貢献基礎演習(愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科)	2004年4月～現在	大学での授業に主体的に関わる姿勢を確立することを目的に、ゼミ形式で、文献検索法および文献読解、レポート作成の基本、意見の表明と集約技術の基本等を扱った。授業アンケートの結果から、大学における学問の意義、効果的な学習方法のスキルを楽しく学ぶことができ、有用だったとの肯定的評価が得られた。	

(10) 医療福祉統計演習Ⅰ (愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科/医療貢献学科)	2004年10月～現在	医療保健福祉分野の統計の見方および分析の基本を習得することを目的とし、統計学の基礎的知識、及び統計解析ソフトを用いての統計処理の技法について講義を行った。講義の結果、独自に収集した資料を適切に集計・分析する一連のスキル、分析結果の解釈・吟味能力の体得に大いに貢献した。
(11) マイノリティと現代社会 (愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科)	2005年10月～現在	「マイノリティに対する偏見と差別」及び「マイノリティによる積極的な社会参画」といった現代的問題について社会心理学的立場に基づく講義を行った。講義の結果、エイズ患者、HIV感染者等の社会的弱者に対する偏見・差別の特質や偏見・差別の解消方略について理解が深まったとの反響を得た。
(12) 対人社会心理学	2006年4月～現在	他者や集団との社会的相互作用のなかで生じる様々な行動を社会心理学的に解釈することを学ぶとともに、社会心理学の知見および視点が日常生活や医療福祉の現場にどのように応用可能かについて講義を行った。授業アンケートの結果から、人間の社会的行動を科学的に理解することの有意義性が理解でき、示唆に富む内容であったとの肯定的評価を得た。
(13) 地域環境論	2006年10月～現在	コミュニティ心理学の立場から「住民参加型社会の現状」を理解し、課題を明らかにするとともに、福祉を進める視点からも地域環境を再吟味することを主目的とした。授業アンケートの結果から、アクション・リサーチの具体的事例を通じてよりよい地域環境を創造するためにはどのような視点が重要であるかについて理解が深まったとの評価を得た。
(14) 文献講読演習	2006年10月～現在	独自のテーマに関する関連分野の参考図書や参考文献の検索方法を学び、基本文献を講読し、福祉貢献研究および卒業論文へと展開する準備を行った。演習の結果、医療福祉研究を行う上での文献の収集、精読、整理の一連のスキルを習熟するのみならず、批判的に論文を吟味し、内容を精査する能力が涵養されたものと思われる。
(15) 福祉貢献研究Ⅰ	2007年4月～現在	応用社会心理学専門のゼミ生の卒業研究を指導する演習であり、系統的かつ綿密な文献レビューに基づいた研究計画の立案ができることを念頭に置いた。その結果、各ゼミ生が独自性の高いテーマで能動的に研究を遂行できたように思われる。
(16) 福祉貢献研究Ⅱ	2007年4月～現在	応用社会心理学研究のゼミ生の卒業研究レポート、卒業論文の完成を目指し、演習及び個別研究指導を行った。実証研究に関しては調査の立案、実施、統計解析の全過程にわたって専門的な指導を行った。その結果、各ゼミ生が高度な研究から興味深い知見を生み出すのみならず、その知見を用いて社会に対して独自のオピニオンを提起することができた点において、本演習は学生にとって極めて有益であったものと考えられる。
2 作成した教科書、教材、参考書		
(1) 「資料分析法入門/特論」テキスト (愛知淑徳大学文化創造学部環境文化専攻)	2003年4月1日	平成13年度開始の当該科目の実施に際して、「入門」12章、「特論」12章からなる教材を作成した。内容は、入門は「データの型と統計処理の手順」「基礎統計量と区間推定」「2つの母平均の差の検定」等、特論では「分散分析」「重回帰分析」「因子分析」等であった。
(2) 「行動科学基礎実験演習/応用実験演習」テキスト (東海学園大学人文学部)	2003年4月、2003年10月	平成13～15年度の当該科目の実施に際して、「基礎実験演習篇」「応用実験演習篇」のテキスト(冊子)を作成した。当該教員は「鏡像描写における学習の進行過程と両側性転移効果」「偏見はなぜ生じるのか?～誤った関連付けに基づく偏見形成のメカニズムについての実験社会心理学的検討～」を分担執筆した。
(3) 「心理学入門」テキスト (愛知県立大学全学共通教養科目)	2003年4月1日	平成14年度開始の当該科目の実施にあたり、12章からなる教材を作成した。内容は、「心理学とは何か」「人を好きになる～対人魅力～」「自分を知る～自己と自己過程～」「社会を知る～対人認知と社会的認知～」「人を助ける～援助行動～」等であった。

(4)「医療福祉統計演習Ⅰ」演習資料(愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科/医療貢献学科)	2004年10月1日	平成16年度開始の当該科目の実施に際して、学生が興味・関心をもつ具体的なトピックについての仮想的なSPSSベースの統計データを全15回作成し、学生にそれを分析・解釈させることで、学生の統計情報に対する解析・吟味能力の向上に重要な貢献を果たした。
(5)「マイノリティと現代社会」「対人社会心理学」「地域環境論」教材(スライド資料) (愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科)	2005年10月、2006年4月、 2006年10月	教育効果を高める上で、AV教材の有効活用は、重要な意味を持つ。それゆえ、平成17年度開始の同講義では全12回マイクロソフト・パワーポイントで作成したスライド教材を液晶プロジェクターを用いて効果的に提示した。その結果、講義・演習内容についての学生の理解度を大いに促進させた。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
(1)愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所IGWS Newsletter, 第19号1頁～2頁 『セクシュアリティの多様性について考える』執筆	2005年3月1日	平成16年12月2日、12月16日に実施された同研究所主催学術講演会「セクシュアリティの多様性について考える」の概要を報告した。本稿では、セクシュアリティに関する問題が山積している現状を指摘した上で、今後大学において適切なセクシュアリティの教育啓発の場を積極的に設けていくことの重要性を論じた。
(2)愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 IGWS Newsletter, 第25号1頁～2頁 『キャリア・デザインとジェンダー』執筆	2008年3月1日	平成19年9月10日に本学星ヶ丘キャンパスにて実施された、ジェンダー・女性学研究所第18回定例セミナー『キャリア・デザインとジェンダー』の内容を報告した。 本稿では講演内容に基づき、就職活動及びビジネス・シーンにおけるジェンダー・バイアスとその問題を指摘した上で、固定的で画一的なジェンダー・ステレオタイプにとらわれずに「人それぞれの自分らしい独自のキャリア・デザインを実現することが重要である」との意見を提起した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
(1)愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所運営委員	2004年4月～現在	各学部選出の教員で構成される同研究所運営委員を務め、機関誌(ニュース・レター)の執筆、研究所主催の年次研究・教育事業の業務遂行に携わった。
(2)愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所第13回定例セミナー(2004年度学術講演会)の実施	2004年12月1日	同研究所主催事業第13回定例セミナーとして学術講演会「セクシュアリティの多様性について考える」を企画し、司会・進行を務めた。京都大学の日高氏による「ゲイ・バイセクシュアル男性が置かれた社会的現状とメンタルヘルス」についての研究報告が行われ、学生のセクシュアリティに対する適切な理解の促進に大いに貢献した(平成16年12月2日、12月16日)。また同学術講演会の内容を年次報告書にまとめ、全国の大学、ジェンダー関連研究機関に配布した(平成17年3月31日)。
(3)視覚障害を持つ学生のための個別的就学支援	2005年4月～現在	平成17年4月に本学医療福祉学部福祉貢献学科に視覚障害をもつ学生が入学して以来、視覚障害者のトータルな就学支援を継続的に行っている。まず毎週1回の個別面接を実施することで当該学生との相互コミュニケーションを密にし、学生生活全般に対する“サポート・ニーズ”を的確に把握し、迅速かつきめ細かな対応を行い、当該学生の教育環境の整備を行った。 その結果、視覚障害に対応した学内のハード・ソフトの教育環境の整備に大きく貢献した。 また環境整備のみならず、カウンセリングを通じて学業や学生生活に関する心理/社会的サポートも行った。その結果、当該学生が順調に単位を取得し、良好な成績を修めるのみならず、楽しく充実感のある学生生活を保障する上で大きな一助となった。

(4) 視覚障害を持つ学生のための情報処理教育支援	2005年10月～現在	<p>障害者の大学入学に際しては物理的バリアフリーが基本前提となるが、最終的に高等教育を受けるあたり必要になることは『情報のバリアフリー』（情報保障）であることはいうまでもない。しかしながら聴覚障害者はノート・テーカーの活用により情報保障を行うことが比較的容易であるが、視覚障害者の場合、大学教育において情報保障を行うことは困難を極める。</p> <p>従って視覚障害をもつ大学生にとって、“パソコン”という高度な情報処理ツールの技術の獲得は、情報保障を進める上で効果的であり、大学の高度な講義内容の詳細な理解に大いに有用であるといえる。</p> <p>それゆえ平成17年4月 本学医療福祉学部福祉貢献学科に入学した視覚障害者学生1名を対象に、週1回の個別補講演習形式で、視覚障害者専用のパソコンの基本的操作方法、マイクロソフト・ワード、電子メール、インターネット等の反復練習を行いながら、丁寧な指導を重ね、当該学生がパソコンの基本的スキルを完全に体得することに成功した。</p> <p>その結果授業担当者が視覚障害者学生に対して電子メールと添付ファイルを用いて、講義内容を伝達することにより、当該学生の学習効果を飛躍的に増大させることに寄与した。</p> <p>今後は上述の教育的効果のみならず、電子メールを介したオンライン・コミュニケーションを行うことにより、当該学生の他者や社会との相互作用の拡大、対人関係の深化といった副次的効果も得られるものと期待している。</p>
---------------------------	-------------	---

(5) 愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所第18回定例セミナー(星ヶ丘キャンパス)の実施	2007年9月1日	<p>同研究所主催事業第18回定例セミナーとして学術講演会『キャリア・デザインとジェンダー』を企画し、司会・進行を務めた。講師として金城学院大学人間科学部・宗方比佐子教授を招聘し、キャリアにおけるジェンダー的視問題、キャリア・デザイン、キャリア・ディベロプメント、キャリア・プラクティスのトピックスに関して、最新のキャリア心理学の研究知見を紹介しつつも、大変丁寧で分かりやすいご講演をして頂き、出席者の大半を占めた本学学生から極めて好評を得た。近時に認められる雇用形態の構造的変化やセクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントの増加等、女性を取り巻くビジネス・シーンには様々な現代的問題が山積している。加えて文系女子学生の就職活動は困難を極めている状況にあるが、宗方氏の講演は、未来に対する“確たる自己イメージ”を持ち、“ポジティブに”キャリア・デザイン、キャリア・ディベロプメントを行っていけば、自ずと自分らしい独自のキャリア・プラクティスが可能であることを強調しており、就職活動を控え、不安を抱える多くの学生に対して勇気と希望、そして明るい展望を与える有意義な内容であったものと思われる。また講演会開催日は授業実施期間外(夏期休業中)であったにも関わらず、企画者が本学において広報・宣伝活動を積極的に行った結果、多くの聴講者を参集することに成功し、本学学生にキャリア問題を考える貴重な教育機会を提供することに大きく貢献した。</p>
---	-----------	--

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
1. 人間環境学ワークショップ	共著	2004年1月	POPS (Psychology of Patient Safety), Vol. 3	◎西和久、安田恭子	2頁
2. 悲しい気分と音楽聴取行動－KJ法を用いた質的分析－	共著	2004年11月	音楽情報科学(情報処理学会研究報告), No. 2004－MUS－057	◎安田恭子、西和久、清水遵	59頁～64頁



3. 日本人青年層に対する性感 感染症予防介入プログラムの構築 －ダイアリー法の導入－	共著	2005年3月	医療福祉研究, 第1号	◎高橋啓介、西和久	36頁～47頁
4. An Approach to Regional Rehabilitation Classes Aimed at Self-Initiated Participation by The Frail Elderly -Exploratory Study on Determinants for Participation in Rehabilitation Classes-	共著	2005年3月	Journal of Medical Welfare, No.1・	◎Kazuhisa Nishi., Chizuru Tochimoto	125頁～130頁
学会発表					
1. エイズ問題の解決に向けた 学際的アプローチ(4)－臨床心 理学的視座に基づくHIV予防啓 発・予防介入とHIV陽性者への 心理・社会的支援－	共著	2003年9月	日本心理学会第67回大会 (於 東京大学)	◎西和久、日高庸晴、安尾 利彦、浦尾充子、木村堅一、 坂本真士	s34頁
2. 悲しい気分と音楽聴取行動 －KJ法を用いた質的分析－	共著	2004年11月	日本音楽知覚認知学会平 成16年度秋季研究発表会 (於 会津大学)	◎安田恭子、西和久、清水 遵	59頁～64頁
研究報告書					
1. セクシュアリティの多様性に ついて考える	共著	2005年3月	愛知淑徳大学ジェンダー・ 女性学研究所2004年度学 術講演会報告書(第13回定 例セミナー)	◎西和久、日高庸晴	1頁～72頁
その他					
1. タミフルと異常行動;注意喚 起の責務果たさず	単著	2007年3月	産経新聞全国版, 平成19年3月22日朝刊第一 面掲載		1頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

#### 【学術研究活動】

1997年7月～現在

日本心理学会会員

1997年7月～現在

日本グループ・ダイナミクス学会会員

1997年4月～現在

日本社会心理学会会員

1999年4月～現在

日本エイズ学会会員

2000年10月～現在

日本シミュレーション&ゲーミング学会会員

2007年6月～現在

医療の質・安全学会会員

2007年8月～現在

日本コミュニティ心理学会会員

#### 【大学開放・地域貢献活動】

2003年4月～2004年3月

愛知淑徳大学エクステンションセンター公開講座「心理学入門」講師担当

2004年10月

名古屋市緑区生涯学習センター平成16年度後期「人権同和問題講座Ⅰ」講師担当  
(演題;人の心を考える－エイズ患者に対する偏見・差別－)(10月29日)

2005年2月

名古屋市北区生涯学習センター平成16年度後期「人権同和問題講座Ⅰ」講師担当  
(演題;どうして人は差別、偏見の心を持つのだろうか?－エイズ患者に対する差別、偏見の事例  
を通じて－)(2月10日)

2005年4月

平成17年度名古屋市新任職員人権問題研修会講師担当(演題;差別と人権－偏見・差別に対す  
る心理学的アプローチ－)(4月28日)

2005年10月

名古屋市千種区生涯学習センター平成17年度後期「人権同和問題講座Ⅰ:温もりのあるまちを目  
指して」講師担当(演題;心の中に潜む「差別」と「偏見」のメカニズム－社会心理学の視点から考  
える－)(10月28日)

2005年11月

名古屋市千種区生涯学習センター平成17年度後期「人権同和問題講座Ⅱ:温もりのあるまちを目  
指して」講師担当(演題;対人コミュニケーション学から考える文化的偏見と差別－真の異文化理  
解を目指して－)(11月4日)

2006年11月

名古屋市千種区生涯学習センター平成18年度後期「人権同和問題講座Ⅰ:温もりのあるまちを目  
指して」講師担当(演題;社会心理学から考える人のココロのメカニズム(1)－偏見・差別はなぜ生  
じるのか?－)(11月24日)

2006年12月

名古屋市千種区生涯学習センター平成18年度後期「人権同和問題講座Ⅱ:温もりのあるまちを目  
指して」講師担当(演題;社会心理学から考える人のココロのメカニズム(2)－現代的偏見の特徴と  
その問題点－)(12月8日)

2006年12月

名古屋市千種区生涯学習センター平成18年度後期「人権同和問題講座Ⅲ:温もりのあるまちを目  
指して」講師担当(演題;社会心理学から考える人のココロのメカニズム(3)－「偏見」「差別」の解消  
を目指して－)(12月15日)

2007年1月

平成18年度名古屋市人権研修指導者研究会講師担当(演題;偏見/差別はなぜ生じるのか?－  
社会心理学からのアプローチ－)

2007年8月	名古屋市教育センター学校運営研修会Ⅱ「人権と教育」講師担当(演題;人権問題に対する心理学的アプローチ-偏見と差別の社会心理学-)
2007年10月	名古屋市昭和区生涯学習センター平成19年度後期「人権同和問題講座Ⅰ:心のバリアを取り除こう」講師担当(演題;社会心理学で読み解く偏見/差別のメカニズム-なぜ?どうして?から始めよう!-) (10月12日)
2007年10月	名古屋市昭和区生涯学習センター平成19年度後期「人権同和問題講座Ⅱ:心のバリアを取り除こう」講師担当(演題;現代的な心の問題-精神疾患の現状と人権的問題-) (10月19日)
2008年2月	平成19年度名古屋市人権研修指導者研究会講師担当(演題;現代的偏見と偏見解消に向けた社会心理学的アプローチ) (2月4日)

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 丹羽英人	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
医療貢献学科主任		2008年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
アブミ骨手術	単著	2003年11月	イラスト手術手技のコツー耳鼻咽喉科頭頸部外科(東京医学社)	監修:村上泰	80頁～82頁
耳硬化症	単著	2004年7月	耳鼻咽喉科講習会テキスト	日本耳鼻咽喉科学会編	1026頁
耳硬化症	単著	2005年1月	今日の治療指針2005(医学書院)	編者:山口徹、北原光夫	
論文					
小児先天性耳小骨奇形の検討	共著	2004年4月	Otology Jp 14巻3号	◎加藤健、丹羽英人	219頁～223頁
耳硬化症	単著	2005年4月	耳鼻咽喉科頭頸部外科77巻5号		125頁～140頁
アブミ骨手術の長期成績	共著	2006年1月	Otology Jp 16巻1号	◎加藤健、丹羽英人	26頁～30頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2005年～2008年	日本耳鼻咽喉科学会参与				
2003年～2008年	日本耳鼻咽喉科学会学術委員				
2005年～2008年	日本耳鼻咽喉科学会愛知県地方部会監事				
2003年～2008年	日本耳鼻咽喉科学会愛知県地方部会社療委員				
2003年～2008年	日本聴覚医学会評議員				
2003年～2008年	愛知県社会保険診療報酬支払基金審査委員				
2003年～2008年	日本耳鼻咽喉科学会専門医				
2003年～2008年	日本気管食道科学会認定医				

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 初谷良彦	大学院における研究指導 担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①担当している科目の内、法律関係科目の「日本国憲法」と「法学」が学生からはその堅くしきのゆえにもっとも敬遠されがちである。いずれも受講生が多いので学生の私語を少なくし、理解を深めるために授業の都度、話し言葉で書いたA4版5, 6枚の詳細なレジメを用意するとともに、平成16年度前期及び後期の「授業アンケート」結果報告を参考にして補助教材を充実させるように努めた。		2004年6月、2005年6月	①主としてレジメ、補助教材に添って授業を進めるだけではなく、授業終了後、学生に質問を書かせ次回の授業の際文書で回答するようにした。平成17年度の「法学」「日本国憲法」の授業からこういう方法をとったが、非常な労力と時間を要するので、一概には良いとはいえないが、受講生の反応は比較的良い。		
②平成17年度、平成18年度、平成19年度の「ノーマライゼーション論」、「医療貢献関係法規」については、まとまった教科書や参考書はないので、「授業アンケート」結果報告を参考にして、「ノーマライゼーション論」については教材を作成、「医療貢献関係法規」については、レジメを充実させるとともに新聞記事、社説等も相当配布した。		2005年4月～2008年3月	②本来、新聞記事ぐらいは図書館で学生自身でコピーをとるべきではあるが、新聞を読んでいる学生は殆んどいないのでそのような方法をとったものの、もともと受け身のなをさらに受け身にしてしまうというマイナス面もある。とはいえ、生きた事例を知ることにより授業に対する関心が深まったことだけは見える。さらに質問を全員にさせることは徹底した。授業に対する意欲をもたせるためにも必要だとは思っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「ノーマライゼーション論」については、毎回内外の研究者の論文・文献(外国の文献等については翻訳されたもの)及び私自身で解説したものをA4 7, 8枚～10数枚配布、自習に便宜ならしめるようにした。必要に応じて補足配布もした。総頁数80枚～100枚前後にはなっている。		2006年10月、2007年10月	ノーマライゼーション理論は福祉の基本的な理念であるが、その解釈についてはさまざまな意見がある。デンマークのバンクーミッケルセンの理論だけではなく、ニイレヤヴォルフフェンスベルガー等の論稿もレジメにまとめて受講生の理解を深めるように心がけている。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
①師勝の教育百周年記念フェスタ(主催 師勝町、師勝町教育委員会)		2006年2月19日 於 師勝小学校	①明治5年、明治政府が太政官布告によって近代学校制度を定める「学制」を頒布して以来の日本の教育の生成・発展・展開を話し、教育の課題、あるべき姿について講演した。		
②講演「人生、生涯学習」(主催 西春日井郡師勝町社会福祉協議会)		2006年2月19日	②人生それぞれの時期にはそれぞれに学ぶべきことがある。人生における学習の意義を青年・壮年・老年について述べた。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
①西春日井郡師勝町教育委員(平成15年10月より同教育委員長)		2003年4月～2006年3月	①西春日井郡師勝町教育委員及び教育委員長として定期的に所管各小中学校のPTAの教育懇談会に出席、意見交換をしたり、各校長との定例会議において教育上の諸問題について議論を重ねた。		
②愛知県教育委員会愛日地方教育事務協議会委員		2003年10月～2006年3月	②愛日地方教育事務協議会委員として愛知県教育委員会と連絡調整の任にあたった。		
③愛知県市町村教育委員会連合会理事		2004年8月～2005年8月	③愛知県市町村教育委員会連合会理事として教育政策方針の方向づけに参画した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書・研究報告書					
知的障害者の自己決定権と「障害者の人権」意識に関する研究(課題番号1553027)	共著	2005年3月	平成15年度～平成16年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書	共著者:◎初谷良彦, 古屋 健	1頁～67頁
新法学レッスン	共編著	2007年4月30日	成文堂	共編著者:鴨野幸雄・中島史雄・初谷良彦。著者12名	総頁数360頁。該当頁数3頁～20頁, 44頁～55頁, 108頁～120頁, 293頁～322頁。総計79頁
論文					

憲法第13条(個人の尊重・幸福追求権)からみた「障害者自立支援法」の違憲性	単著	2008年2月15日	知的障害福祉研究「さぼーと」2月号(第55巻第2号 通巻613号)(A4版)	発行人:財団法人日本知的障害者福祉協会 出版:中央法規出版	34頁～37頁
人権の視点から障害者自立支援法の「人間観」を問う	単著	2008年5月15日	知的障害福祉研究「さぼーと」5月号(第55巻第5号 通巻616号)(A4版)	発行人:財団法人日本知的障害者福祉協会 出版:中央法規出版	46頁～47頁
障害者自立支援法第4条第4項「必要性を明らかにするための文言」に疑義あり	単著	2008年6月15日	知的障害福祉研究「さぼーと」6月号(第55巻第6号 通巻617号)(A4版)	発行人:財団法人日本知的障害者福祉協会 出版:中央法規出版	46頁～47頁
女性参政権のはなし	単著	2008年7月1日	名古屋家事調停会報第53号(A4版)	名古屋家事調停協会連合会	49頁～50頁
その他(学術講演、シンポジウム等)					
自己決定・自己選択と障害者自立支援法	単独講演	2007年11月10日	全国知的障害者施設家族連合会研修(於 丸の内アレックス)		
欧米の社会保障について	単独講演	2008年1月17日	安城南ライオンズクラブ(於 安城市商工会館)		
人間の尊厳の視点から傷害程度区分を検証する	単独講演	2008年2月6日	兵庫県知的障害者施設家族会連合会研修(於 兵庫県民会館)		
シンポジウム「障害者自立支援法の抜本的な見直し」	シンポジウム	2008年5月27日 15:00～17:00	平成20年度 全国知的障害関係施設長会議(於 東京国際フォーラム) シンポジスト:衛藤晟一(自民党厚生労働部会長) 浦原基道(厚生労働省障害保健福祉部障害福祉課長) 初谷良彦(愛知淑徳大学教授) 松原三郎(財団法人日本精神科病院協会理事) 田中幹夫(田中幹夫法律事務所長・弁護士) 主催:財団法人日本知的障害者福祉協会 後援:厚生労働省, 文部科学省, 全国社会福祉協議会, 社団法人日本精神科病院協会他		
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年4月～現在	日本公法学会会員				
2000年5月～現在	ロンドン大学Society for Advanced Legal Studies会員(Friends)(1998年4月～1999年4月までFellow)				
1995年4月～現在	家事調停委員				
1999年10月～2006年3月	西春日井郡師勝町教育委員会教育委員				
2003年4月～現在	日本情報ディレクトリ学会評議員				
2003年10月～2006年3月	西春日井郡師勝町教育委員会教育委員長				
2003年10月～2006年3月	愛知県教育委員会「愛日地方教育事務協議会」委員				
2004年8月～2005年8月	愛知県市町村教育委員会連合会理事				

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 春見静子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)			
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
社会福祉援助技術演習・現場実習		2007年4月～現在	ロールプレイングの実施やDVDなどの教材を使って参加型の授業を試みている			
福祉貢献研究		2007年4月～現在	論文の書き方、資料収集、文献検索などの指導を大学図書館やマルチメディアセンターと協力して行った			
2 作成した教科書、教材、参考書						
新版 障害者福祉論		2004年10月	編著牧野田恵美子、春見静子 共著小山聡子 赤塚光子 北沢清司 石渡和美 久田則夫、2章3-5, 3章2, 5章2 障害者福祉の基本理念、障害児サービスの体系と内容、通所支援			
社会福祉原論		2005年10月1日	12章5 世界の社会福祉 ドイツ			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
ヨーロッパの中のドイツードイツの福祉問題ー		2007年11月1日	東洋大学エクステンション講座			
今の時代をすこやかに生きる		2007年12月1日	名古屋千種生涯学習センター講座			
ソーシャルワーカーの倫理綱領と福祉実践		2008年2月1日	福井県社会福祉士会			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
論文						
ドイツカリタス連合体の研究1	単	2003年1月	カトリック社会福祉研究3号(長崎純心大学)	安岡文子、春見静子	103頁～120頁	
ドイツカリタス連合体の研究2ーカリタス学による基礎ー	単	2004年2月	カトリック社会福祉研究4号(長崎純心大学)		71頁～90頁	
ドイツカリタス連合体の研究3ー世俗化した社会の中でカリタスができること	単	2005年3月	カトリック福祉研究5号(長崎純心大学)		43頁～63頁	
ワイマール期から現代に至るドイツ・カリタス福祉の歴史に関する研究ーカリタス連合体のその活動を中心にー	単	2005年3月	東北アジアにおけりカトリック社会福祉の歴史的研究(長崎純心大学)		102頁～116頁	
ドイツカリタス連合体の研究4ー移民・移住者福祉への挑戦ー	単	2006年3月	カトリック社会福祉研究6号		47頁～72頁	
高齢者の在宅ターミナルと訪問看護サービスの現状	共	2006年2月			55頁～73頁	
ヨーロッパ大学圏の形成とドイツのソーシャルワーカー養成の転換	単	2007年3月	愛知淑徳大学医療福祉研究 第3号		80頁～93頁	
介護保険下のドイツの高齢者介護サービスの現況とサービスの質の保証(1)、(2)、(3)	単	2003年5, 6, 7月	経営協Vol232, 233, 234全国社会福祉協議会		20頁～21頁、20頁～21頁、20頁～21頁	
ドイツ・オーストリーにおける障害者の福祉施策	単	2007年4月	リハビリテーション492号鉄道身体障害者福祉協会		30頁～33頁	
ドイツの障害者雇用の現状と課題	単	2007年7月	世界の労働第57巻		12頁～18頁	
カトリック社会福祉施設・機関の使命・役割について	共	2008年3月	愛知淑徳大学医療福祉研究第4号		神波幸子、春見静子、伊藤春樹、谷口純世	25頁～44頁
ドイツ・カリタス連合体の研究5ーカリタスにおけるボランティアの役割ー	単	2008年3月	カトリック社会福祉研究6号(長崎純心大学)		25頁～44頁	
その他(調査研究)						

障害児のケアマネジメント手法による地域生活支援推進のための調査研究	共	2004年3月	生活福祉研究機構	宇佐川浩(委員長)春見静子、加藤正仁、佐藤満男、船越知行、船沢浩一、嘉ノ海令子、滝沢久美子	第1章 障害児支援のケアマネジメントの必要性和能性11頁～20頁
EU諸国における障害者差別禁止法制と障害者雇用政策の動向	共	2007年	独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構	朝日雅也、大曾根寛、指田忠司、澤辺みさ子、春見静子、引馬知子、平川政利	第4章各種保護雇用の取り組み61頁～69頁
医療的ケアを必要とする重度障害者と家族の支援	共	2007年度厚生労働科学研究	生活福祉研究機構	春見静子(主任研究員)飯野順子、岩崎隆彦、加藤正仁、日浦美智江、宇佐川浩山田美智子、船戸正久	医療的ケアに関する意識啓発と主会社支援の方向
大学と地方自治体との協働による高齢者福祉計画立案一介護保険分析を通して一	共	2007年度特定課題研究	愛知淑徳大学	春見静子、伊藤春樹、神波幸子、	

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	日本社会福祉学会員
2003年4月～現在	日本特殊教育学会員
2003年4月～現在	日本社会福祉実践理論学会員
2003年4月～現在	日本医療ソーシャルワーカー協会会員
2003年4月～現在	日本キリスト教社会福祉学会員
2003年4月～現在	日本ソーシャルワーカー協会会員
2003年4月～現在	社会福祉法人からしだね理事
2003年4月～現在	北区社会福祉事業団理事
2003年4月～現在	日本科学協会評議員
2004年4月～2007年3月	日本社会福祉士会倫理委員会委員

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 平井淑江	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
分かりやすく学生を集中させる授業を目指す		2004年～現在	スライド(コンピューター:Power Pointによる)やビデオによる講義、学生に発表させたり、演習をさせて集中度を高めている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
1. 基礎演習テキスト:医療福祉を学ぶ人のために(教材)		2004年4月	編集者:伊藤勝也、平井淑江、西村辨作、永田祐(プリンテック)大学での学習の仕方・また医療福祉を学ぶ学生のための手引き書を作成(198頁)校正して毎年使用している。		
2. 視能訓練士国家試験問題集(教材)		2004年4月～現在	本専攻は視能訓練士の国家試験受験資格取得が卒業要件となっているので学生の独習を促すために第1回(1971)から第34回(2004)迄の国家試験の全問題を1冊にまとめて一年次に配布している。毎年更新して現在第38回(実施2008年2月28日)分まで収録している。		
3. 視能学(教科書)		2005年3月	編集者:丸尾敏夫、久保田伸枝、深井小久子(文光堂)視能訓練士の教科書、本人は斜視の検査について担当した。(301頁～331頁)		
4. 眼科臨床に必要な解剖生理(教科書)		2005年11月1日	編集者:大鹿哲郎(文光堂)眼科臨床に必要な両眼視の知識について執筆した。(368頁～375頁)		
5. 視能訓練士 スペシャリストへの道(参考書)		2006年10月	編集者:山本 節 視能訓練士の国家試験問題の回答と解説の第4集、本人は視能検査学の試験問題(107頁～116頁)について解答・解説した。(219頁)		
6. 視能訓練士 スペシャリストへの道(参考書)		2007年10月1日	編集者:山本 節 視能訓練士の国家試験問題の回答と解説の第5集、本人は基礎視能矯正学(131頁-132頁)視能検査学(179頁-180頁)、視能訓練学(222頁-224頁)の試験問題について解答・解説した。(231頁)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
教育講演「視野障害と立体視の異常」		2006年3月4日	第11回静岡県小児眼科研究会で教育講演を依頼され評価された。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
1. 学内における委員会活動					
1) 大学委員会					
進路支援委員		2004年4月～2008年3月			
2) 学部委員会					
教授会運営委員		2004年4月～2008年3月			
研究科 医療貢献学科学科主任		2008年4月1日～現在			
学外実習委員		2004年4月～現在			
2. 実務家教員としての特記事項					
必修科目である学外実習のための施設開拓		2003年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
不等像視とサイズレンズについて教えてください	共著	2003年9月	あたらしい眼科第20巻臨時増刊号	◎平井淑江、大八木 済	194頁～196頁
視野と立体視を考える	単著	2004年4月	あたらしい眼科第21巻9号		1151頁～1160頁
論文					
Aniseikonia measured by Hess Chart and NewAniseikonia Tests	共著	2003年4月	Progress in Strabismology Transaction of the 9th Strabismological Association	◎Hirai T, Sato M, Ukai K, C-H Piao, Terasaki H, Miyake Y	197頁～200頁



Strabological findings after macular translocation surgery with 360 degrees retinotomy	共著	2003年5月	Invest Ophthalmol VisSci 4(5)	©Sato M, Terasaki H, Ogino N, Okamoto Y, Amano E, Ukai K, Hirai T	1939頁～1944頁
Stereopsis in idiopathic macular hole with special reference to the size of hole and its effect on stereoacuity	共著	2003年11月	Binocular Vision & Strabismus, Q. 18(4)	©Hirai T, Ito Y, Terasaki H, Ito M, Sato M and Miyake Y.	242頁～248頁
The remnants of crossed fixation observed in teenaged children with esotropia	共著	2004年4月	Binocul Vis Strabismus Q. 19(2)	©Hirai T, Amano E, Ito T, Tsuzuki K, Sato M, Miyake Y	234頁～245頁
Can stereo tests be an indicator of decreased visual acuity?	共著	2004年11月	Transaction of 10th International Orthoptic Congress	©Hirai T, Takahashi K, Kawase Y, Tanabe M, Ohba N	1頁～4頁
Dynamic aniseikonia measurement: prismatic effect appears on the Hess chart	共著	2004年12月	Binocul Vis Strabismus Q. 19(4)	©Hirai T, Sato M, Piao CH, Miyake S, Terasaki H, Ohyagi W, Miyake Y	88頁～94頁
Development of Stereoscopic Acuity: Longitudinal Study using a Computer-based Random-dot Stereo Test	共著	2005年1月	Jpt J Ophthalmol 49(1)	©Takai K, Sato M, Tan R, Hirai T.	1頁～5頁
Bagolini striated glasses test and lesions of the optic chiasm	共著	2005年4月	Binocular Vision & Strabismus, Q. 20(2)	©Hirai T, Kondo M, Takai Y, Ota Y, Sato M, Miyake Y.	82頁～87頁
Acquired unilateral night blindness with negative ERG: nine-year follow-up	共著	2005年6月	Retina Jun; 25(4)	©Kondo M, Nakamura M, Tanikawa A, Kachi S, Hirai T, Miyake Y.	519頁～521頁
Interexaminer differences in the traction test of the superior oblique tendon.	共著	2005年6月	Jpt J Ophthalmol 49(1)	©Sato M, Amano E, Okamoto Y, Ota Y, Hirai T	216頁～219頁
Similar etiologies of functional visual loss observed in children and adults	共著	2005年12月	Binocul Vis Strabismus Q. 20(4)	©Hirai T, Sato M, Kachi S, Takai Y, Tsuzuki K, Yoshida M, Miyake Y.	218頁～223頁
Physiological function of S-cone system is not enhanced in rd7 mice	共著	2005年12月	Exp Eye Res. 2005Dec; 81(6)	©Ueno S, Kondo M, Miyata K, Hirai T, Miyata T, Usukura J, Nishizawa Y,	751頁～758頁
Novel mutations in the OPA1 gene and associated clinical features in Japanese patients with optic atrophy	共著	2006年3月	Ophthalmology 113(3)	©Nakamura M, Lin J, Ueno S, Asaoka R, Hirai T, Hotta Y, Miyake Y, Terasaki H.	483頁～488頁
視野障害と立体視の異常: 視交叉疾患と黄斑円孔について	共著	2006年12月	神経眼科	©平井淑江、鶴飼喜世子、水谷隆司、伊藤逸毅、寺崎浩子	444頁～452頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2005年1月～現在	日本視能訓練士協会協会誌査読委員(現在に至る)
2005年2月～現在	日本視能訓練士協会生涯教育実行委員(現在に至る)
2007年4月～現在	国際視能訓練士協会教育担当委員(日本代表)

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 船崎 康広	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
2年生の学内実習における課題探索支援実習	2007年10月～	障害を持つお子さん宅に伺い、生活の中での子どもとかかわり、子どもの自立にむけた発達課題を見つけ出すことを行っている。それは訓練以外の子どもの姿を学ぶとともに、親がどのような状況に立たされているかについて理解させることを目的としている。	
コミュニケーション分析による子どもとかかわる技術のトレーニング	2007年10月～	INREAL法によるプレイ場面のビデオ分析によって、子どもとかかわるコミュニケーション能力の向上をめざすものである。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
自閉症へのスピーチセラピー-特性に配慮した課題の設定(東京都文京区後楽園会館(社)発達協会主催)	2003年7月29日	自閉症児への1つの指導法として、特性に配慮した課題の設定の仕方について講演した。	
自閉症へのスピーチセラピー-言語特性とその指導(東京都文京区後楽園会館(社)発達協会主催)	2004年7月24日	自閉症児への1つの指導法として、特性に配慮した課題の設定の仕方について講演した。	
「自閉症児の意味のとり方」(春日井市愛知県心身障害者コロニー「自閉症の教育を考える親の会」主催)	2005年2月21日	自閉症児がどのようにことばや大人の働きかけの意味をとっているかについて講演した。	
「ことばを育てる、子どもを育てる」(津島市文化会館 NPO 法人Peek・a・Boo主催、愛知県弥富寮共催)	2005年5月11日	ことばの遅れの問題に、どのように捉え、対処していけば良いかについて講演した。	
命題類推法について(岐阜県可児市こんべいとう主催)	2005年5月20日	命題類推法について講演した。	
ことばの問題について(稲沢市)	2005年5月28日	ことばの問題について、その捉え方と対処の仕方について講演した。	
命題類推法について(犬山市コスモス園)	2005年6月17日	命題類推法について講演した。	
「自閉性障害のお子さんの意味の取り方」(岐阜県可児市広見公民館「こんべいとう」主催)	2005年6月10日	自閉症児がどのようにことばや大人の働きかけの意味をとっているかについて講演した。	
「自閉性障害のお子さんの意味の取り方」(岐阜県大垣市ソフピアジャパン「自閉症と地域をつなぐ会」主催)	2005年7月13日	自閉症児がどのようにことばや大人の働きかけの意味をとっているかについて講演した。	
命題類推法について(犬山市コスモス園)	2005年7月15日	命題類推法について講演した。	
「発達障害(自閉性障害を中心に)」(岐阜県神戸町立南平野小学校)	2005年7月27日	発達障害全般についてその分類と特徴、対処の仕方について講演した。	
「自閉性障害について」(小牧市立米野小学校)	2005年8月1日	自閉症児がどのようにことばや大人の働きかけの意味をとっているかについて講演した。	
自閉症へのコミュニケーション指導-各種のアプローチ法を学ぶ「意味の理解をうながす指導の実際-類推的推論とは」(東京都文京区後楽園会館(社)発達協会主催)	2005年8月2日	自閉症児への1つの指導法として、命題類推法という指導技術について講演した。	
発達障害相談会(岐阜県可児市自閉症と地域をつなぐ会主催)	2005年8月21日	発達障害に対する説明した。	
Anapの技法(基礎編 直接意図を伝える)を極める(第2回 塾「分」主催講演会春日井市 春日井グリーンパレス)	2005年9月11日	自閉症児への1つの指導法として、命題類推法という指導技術について講演した。	
「自閉症-その障害の理解と対応について」(春日井市福祉センター、春日井市支援費部会主催 ヘルパーが対象)	2005年9月21日	自閉症の障害がどのようなものかについて講演した。	
「間違っただけの自閉症の子育て、Anapの技法(基礎編 直接意図を伝える)を極める」(大垣市情報工房5階セミナー室「自閉症と地域をつなぐ親の会」主催)	2005年10月26日	自閉症児に対する大人の働きかけについて、子どもにはどのような意味として捉えられているかを実例をもとに講演した。	
「スケジュールを理解させるための手順-Anapの技法-」(春日井市福祉の里レインボープラザ塾「分」親の会ボトム主催)	2005年11月13日	自閉症児にスケジュールを導入するに際してのその意味とコツについて講演した。	
「自閉症の子どもの行動をどうとらえるか」(岐阜県加茂郡可児郡ことばの教室指導員指導方法研究会 坂祝町つくろい教室)	2005年12月6日	自閉症児の扱い方について講演した。	
「Anapについて」(「自閉症と地域をつなぐ親の会」勉強会 瑞浪市立瑞浪小学校)	2005年12月13日	命題類推法について、その理論と実際の技術について講演した。	
「自閉症児のコミュニケーション」(特別支援相談講座 愛知県総合教育センター)	2005年12月26日	命題類推法について、その理論と実際の技術について講演した。	
「障害・疾病の理解(心理学的理解)」(日本福祉大学 ホームヘルパー2級養成研修講座)	2006年2月20日	精神科領域の障害と疾病について、心理学的な理解のし方を講演した。	

「スケジュールを理解させるための手順－Anapの技法－」(大垣市情報工房5階セミナー室「自閉症と地域をつなぐ親の会」主催)	2006年2月22日	自閉症児にスケジュールを導入するに際してのその意味とコツについて講演した。			
「自閉症という障害を理解する」(保育士研修会 大蔵保育園 岐阜県安八郡輪之内町)	2006年7月15日	自閉症の障害がどのようなものかについて講演した。			
「自閉症児のコミュニケーション」(特別支援相談講座 愛知県総合教育センター)	2006年7月26日	自閉症の障害がどのようなものかについて講演した。			
「想定外の魔術 自閉症の不可能を可能にする方法」(春日井市グリーンパレス 塾「分」親の会ポム主催)	2006年7月30日	命題類推法について、その理論と実際の技術について講演した。			
「的確に大人の思いを自閉症児に伝えるやり方－命題類推法について」(岐阜県神戸町ふれあいセンター「わたげ」主催)	2006年10月12日	命題類推法について、その理論と実際の技術について講演した。			
「自閉症児の課題の見つけ方－命題類推法の可能性について」(春日井市グリーンパレス 塾「分」親の会ポム主催)	2006年12月3日	自閉症児に対して、何をしたら良いか、それを見つける方法について講演した。			
「自閉症児の課題の見つけ方」(岐阜県神戸町ふれあいセンター「わたげ」主催)	2007年2月8日	自閉症児に対して、何をしたら良いか、それを見つける方法について講演した。			
「交通ルールの理解について」(塾分ポム親の会主催)	2007年3月7日	自閉症にどのようにして信号のルールを教えるかについて講演した。			
「自閉症について」(一宮市開明児童館)	2007年4月24日	児童館職員に、自閉症の理解、その障害を持つ子どもの扱い方について講演した。			
「障害・疾病の理解(心理学的理解)」(日本福祉大学 ホームヘルパー2級養成研修講座)	2007年8月27日	精神科領域の障害と疾病について、心理学的な理解のし方を講演した。			
「自閉症児の扱い方について」(岐阜県坂祝小学校)	2008年1月23日	自閉症児の教育についての講義をした。			
「障害・疾病の理解(心理学的理解)」(日本福祉大学 ホームヘルパー2級養成研修講座)	2008年2月15日	精神科領域の障害と疾病について、心理学的な理解の仕方を講演した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
視覚障害児、聴覚障害児、言語 障害児の医療、療育、教育	共著	2005年4月10日	金芳堂	今野正良、土橋圭子	197頁～209頁
論文					
自閉症児にことばの意味を教えること	単著	2003年8月1日	コミュニケーション障害学 (VOL20 No.2)		114頁～119頁
特集「ことばのない子とコミュニケーション」	単著	2004年4月25日	「発達教育5月号」(第23巻 第7号通巻279号)(社)発達 協会		3頁～6頁
自閉症児に物事の意味を伝える コミュニケーション技術－Anap (類推的推論による命題と意図 の伝達方法)について	単著	2006年4月1日	「あゆみ」心身障害児のた めの家庭療育指導誌(第41 号)愛知県肢体不自由児協 会		41頁～49頁
その他					
自閉症のスピーチセラピー－特 性に配慮した課題設定	単著	2003年7月29日	自閉症へのコミュニケーショ ン指導(社)発達協会		10頁
自閉症のスピーチセラピー－言 語特性とその指導	単著	2004年7月24日	自閉症へのコミュニケーショ ン指導(社)発達協会		10頁
意味の理解をうながす指導の実 際－類推的推論とは	単著	2005年8月2日	自閉症へのコミュニケーショ ン指導(社)発達協会		10頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 三宅養三	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
教育方法の実践例					
大学院学生教育		2007年4月～現在	平成19年9月より平成20年1月まで、大学院学生の修士論文作成のための研究指導を週1回、各90分のゼミ方式で施工した		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Electrodiagnosis of Retinal Diseases		2005年10月1日	網膜疾患の電気生理につき解説した網膜電図の基礎と臨床を英文monographで書き示した教科書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
		2007年12月16日	視能訓練士講演会において網膜電図の講演を行った		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
臨床を通じた教育		2007年9月5日	愛知淑徳大学クリニックにおいて、日常診療をつうじた学生教育を行った		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
1. Congenital stationary night blindness	単	2006年5月	MIT Press		828頁～839頁
2. Standard for pattern electroretinography	単	2006年5月	MIT Press		297頁～300頁
3. Electrodiagnosis of retinal diseases	単	2005年10月	Springer		1頁～239頁
論文					
1. Delayed regeneration of foveal cone photopigments in Vogt-Koyanagi-Harada disease at the convalescent stage	共	2004年4月	IOVS 45	Okamoto Y, Miyake	318頁～322頁
2. Changes in focal macular ERGs after macular translocation with 360°	共	2005年1月	IOVS 46	Terasaki H, Miyake Y	567頁～573頁
3. Changes in foveal thickness and macular function after transpupillary thermotherapy for age-related macular degeneration	共	2005年1月	Ophthalmic Res 37	Ishikawa K, Miyake Y他5名	34頁～42頁
4. Relationship between astigmatism and aging in middle-aged and elderly Japanese	共	2005年2月	Jpn J Ophthalmol 49	Asano K, Miyake Y他5名	127頁～133頁
5. Macular hole development in fellow eyes of patients with unilateral macular hole	共	2005年3月	Am J Ophthalmol 140	Niwa H, Miyake Y他2名	370頁～375頁
6. Effect of plasmin on fibronectin and laminin and during plasmin-assisted vitrectomy	共	2005年3月	Arch Ophthalmol 123	Uemura M, Miyake Y他3名	209頁～213頁
7. Functional analysis of the effect of forced activation of STAT3 on M1 mouse leukemia cells	共	2005年3月	Int J Mol Med 15	Yoshida T, Miyake Y他4名	269頁～275頁
8. Acquired unilateral night blindness; Functional recovery during 10-year follow-up	共	2005年3月	Retina 25	Kondo M, Miyake Y	244頁～247頁
9. Charles bonnet syndrome associated with a first attack of multiple sclerosis	共	2005年6月	Jpn J Ophthalmol 49	Komeima K, Miyake Y他1名	533頁～534頁

10. Abnormalities caused by carbohydrate alterations in IB 6-N-acetylglucosaminyltransferase-deficient mice	共	2005年7月	Mol Cell Biol 25	Chen GY, Miyake Y他6名	7827頁～7838頁
11. Physiological function of S-cone system is not enhanced in rd7 mice	共	2005年8月	Exp Eye Res 81	Ueno S, Miyake Y他6名	751頁～758頁
12. Paravascular inner retinal cleavage in a highly myopic eye	共	2005年10月	Arch Ophthalmol 123	Komeima K, Miyake Y他2名	1449頁～1450頁
13. Cone and rod dysfunction in fundus albipunctatus with RDH5 mutation; an electrophysiological study	共	2005年10月	IOVS 46	Niwa K, Miyake Y他2名	1480頁～1485頁
14. Novel mutation in RLBPI gene in a Japanese patient with retinitis with retinitis punctata albescens	共	2005年10月	Am J Ophthalmol 139	Nakamura M, Miyake Y	1133頁～1135頁
15. Negative electroretinograms in pericentral pigmentary retinal degeneration	共	2006年2月	Clin Exp Ophthalmol 34	Hotta K, Miyake Y他4名	89頁～92頁
16. Electrophysiological recovery after an ophthalmic artery occlusion during neurosurgery	共	2006年2月	Retina 26	Yoshida T, Miyake Y他1名	112頁～113頁
17. Optic atrophy and negative electroretinogram in a patient associated with a novel OPA1 mutation	共	2006年3月	Graefe's Arch Clin Ophthalmol 74	Nakamura M, Miyake Y他3名	211頁～214頁
18. Contribution of retinal neurons to d-wave of photopic electroretinograms	共	2006年5月	Vision Res 46	Ueno S, Miyake Y 他6名	658頁～664頁
19. Novel mutations in OPA 1 gene and associated clinical features in Japanese patients with optic atrophy	共	2006年6月	Ophthalmology	Nakamura M, Miyake Y他3名	483頁～488頁
20. Selective amplitude reduction of PhNR after macular hole surgery: ganglion cells damages related to ICG assisted ILM peeling and gas tamponade	共	2006年6月	IOVS 47	Ueno S, Miyake Y他4名	3543頁～3549頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月1日～7日	第41回国際臨床視覚電気生理学会を名古屋で主宰し、会長となる
2003年4月1日～7日	第51回日本臨床視覚電気生理学会を名古屋で主催し、会長となる
2003年10月10日～14日	第57回日本臨床眼科学会を名古屋で主宰し、会長となる
2004年9月15日	第13回日本交通医学工学研究会を名古屋で主催して、会長となる
2005年3月31日	名古屋大学医学部眼科教授を定年退官し、名古屋大学名誉教授となる
2005年5月15日	独立行政法人国立病院機構東京医療センター・臨床研究センター所長
2005年7月1日	Japanese Journal of Ophthalmologyの編集委員長
2005年10月7日	第1回Pfizer Ophthalmic Award Japanを受賞
2005年12月3日	盛賞を受賞
2006年6月10日	De Ocampo Lecture賞を受賞
2007年1月29日	愛知医科大学理事
2007年4月1日	愛知淑徳大学医療福祉学部教授、愛知淑徳大学クリニック院長
2007年7月20日	関西医科大学眼科招待講演
2007年9月30日	愛知眼科フォーラムで特別講演
2007年11月9日	群馬眼科講習会特別講演
2007年12月1日	名北眼科学会特別講演
2007年12月16日	第4回東海視能訓練士研究会の特別講演
2007年12月21日	科学談話会で特別講演

2004年10月	生育医療研究委託運営委員(独立行政法人国立生育医療センター運営部政策医療企画部)
2007年6月6日	NEDO技術委員(経済産業省)
2007年10月	厚生労働科学研究(感覚器障害研究事業)評価委員

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 宮田 Susanne	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業に対する個別調査(「授業コメント」)		2002年10月～現在	講義形式の授業の改善を目指し、毎回、学生個人個人に、その時に授業に対する質問、不明なところ及びコメントを書いてもらい、次回フィードバックを行う。それにより学生の理解度が分かり、より分かりやすい、学生のニーズに合わせた授業ができた。		
「授業に関するアンケート」		2004年6月・11月、2005年6月・11月、2006年6月・11月、2007年6月・11月	全学的に行われるアンケート。無名なので、特に大規模の授業では学生がいろいろな意見や言いにくいことを遠慮なくす直に書いてくれるので、改善の資料になる。授業形態、学部、学年によって、問題も違ってくるので、毎回勉強になる。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
該当無し					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
該当無し					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
国際交流センター次長		2006年9月～現在	交際交流センターの運営に関する予算執行確認、または留学生(大学から外国へ留学する学生)の言語能力テスト実施と採点および面接試験の試験管を行う。そのほかに医療福祉学部生の留学に関する相談も行う。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Japanese - Miyata - Aki Corpus	単	2004年9月	Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-055-3		(電子データとして該当しない)
Japanese - Miyata - Ryo Corpus	単	2004年9月	Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-056-1		(電子データとして該当しない)
Japanese - Miyata - Tai Corpus	単	2004年9月	Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-057-X		(電子データとして該当しない)
Japanese _ Noji Corpus	共	2004年9月	Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-058-8	共著:◎野地潤家・中規夫・宮田 Susanne	(電子データとして該当しない)
今日から使える発話データベース-初心者のためのCHILDES入門	編著	2004年10月	ひつじ書房	監修:Brian MacWhinney 編者:◎宮田 Susanne 編集:村木恭子・森川尋美	110頁
論文					
Noun bias in early Japanese vocabulary and characteristics of maternal input.	共	2004年1月	In: Masahiko Minami, Harumi Kobayashi, Mineharu Nakayama & Hidetosi Sirai, Studies in Language Sciences (3), Kurosio Publishers. .	共著:◎Miyata, Susanne Oshima-Takane, Yuriko / Nisisawa, Hiro Yuki	87頁～101頁
The acquisition of noun-phrase structure in Japanese children	共	2004年3月	Bulletin of Aichi Shukutoku University, Faculty of Creativity and Culture 4. 133-153	共著:◎Miyata, Susanne / Nisisawa, Hiro Yuki	133頁～153頁

Constructing a New Language Measure for Japanese: Developmental Sentence Scoring for Japanese (DSSJ).	共	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.	共著:©Miyata, Susanne, Hirakawa, Makiko / MacWhinney, Brian / Oshima-Takane, Yuriko / Otomo, Kiyoshi / Shirai, Yasuhiro / Sirai, Hidetosi / Sugiura, Masatoshi	1頁～60頁
The Acquisition and Productivity of Noun-Phrase Structure in Japanese Children with Regard to DSSJ.	単	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.		141頁～148頁
The Acquisition of Noun-Phrase Structure in Japanese Children.	共	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.	共著:©Miyata, Susanne / Nisisawa (Kawashima), Hiro Yuki	149頁～166頁
The Acquisition and Productivity of Focus Particles in Japanese Children with Regard to DSSJ.	単	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.		175頁～182頁
The Acquisition and Productivity of Question Words in Japanese Children with Regard to DSSJ.	単	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.		197頁～210頁
The Acquisition of Verb Morphemes in Japanese: The Effects of Input Frequency.	共	2004年3月	Comparative Research for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(1)(2001-2003), No.13410034, Head Investigator: Kiyoshi Otomo, Department of Education, Tokyo Gakugeidai University.	共著:©Otomo, Kiyoshi / Terada, Hiroko / Miyata, Susanne / Shirai, Yasuhiro	227頁～238頁



自発話分析による新しい言語発達指標 (DSSJ) の検討 - 知的障害児と健常児の発話サンプルへの適用 -	共	2005年3月	「医療福祉研究」1号	共著:◎宮田 Susanne・大伴 潔・西澤弘行	8頁～23頁
発話サンプルから言語発達を評価できるか?	共	2005年10月	「月刊言語」2005年10月号	共著:◎宮田 Susanne・西澤 弘行・大伴 潔	66頁～74頁
Does past tense marking indicate the acquisition of the concept of temporal displacement in children's cognitive development?	共	2006年1月	First Language, Vol.26.1.	共著:◎Shirai, Yasuhiro / Miyata, Susanne	45頁～66頁
The Development of the CHILDES-Based Language Developmental Score for Japanese (DSSJ)	共	2006年6月	Masahiko Minami, Harumi Kobayashi, Mineharu Nakayama & Hidetosi Sirai, Studies in Language Sciences (5), Kurosio Publishers.	共著:◎Miyata, Susanne / Hirakawa, Makiko / Kanagy, Ruth / Kuriyama, Yoko / MacWhinney, Brian / Minami, Masahiko / Murakami, Kyoko / Nisisawa, Hiro Yuki / Oshima-Takane, Yuriko / Otomo, Kiyoshi / Shirahata, Tomohiko / Sirai, Hidetosi / Shirai, Junko / Shirai, Yasuhiro / Sugiura, Masatoshi & Terada, Hiroko	75頁～89頁
CHILDESを使った日本語教育研究	単	2006年7月	「日本語教育」130号「特集:コーパスと日本語教育一現状と課題一」		52頁～59頁
Acquisition of Japanese Aizuchi Behaviour: Observing the Emergence of Aizuchi in a Japanese Boy	共	2007年3月	Journal of Pragmatics 29	共著:◎Miyata, Susanne / Nisisawa, Hiro Yuki	1255頁～1274頁
Exploring the Developmental Sentence Score for Japanese (DSSJ): A comparison of DSSJ and MLU on the basis of typically developing and delayed children's spoken language samples	共	2007年8月	「コミュニケーション障害学」24巻2号	共著:◎Miyata, Susanne / Otomo, Kiyoshi / Nisisawa, Hiro Yuki	88頁～100頁
Input Frequency and Case Acquisition in Japanese	単	2008年3月	「医療福祉研究」4号		108頁～117頁
学会発表					
CHILDESによる言語発達指標 DSSJ 開発における諸問題	共	2003年7月	言語科学会第5回年次大会 (JLS2003)ハンドブック	共著:◎宮田 Susanne・平川 真規子・Ruth Kanagy・栗山 容子・Brian MacWhinney・南雅彦・村上京子・大嶋百合子・大伴 潔・白畑知彦・白井英俊・白井純子・白井恭弘・杉浦正利・寺田裕子	154頁～159頁
The acquisition of verb morphemes in Japanese: Effects of input frequencies and pragmatic factors	共	2003年3月	言語科学会第5回年次大会 (JLS2003)ハンドブック	共著:◎大伴 潔・寺田裕子・宮田 Susanne	188頁～189頁
CHILDESの日本語データとその活用	単	2004年12月	第15回第二言語習得研究会全国大会 パネルディスカッション「電子化コーパスを利用した言語習得研究」第15回第二言語習得研究会全国大会予稿集		16頁～21頁
知的障害児と健常児の自発話分析による新しい言語発達指標 (DSSJ) の検討	共	2005年5月	第31回日本コミュニケーション障害学会学術講演会	共著:◎宮田 Susanne・大伴 潔・西澤弘行	
Object and Non-object Words in Early Language Development	共	2005年7月	Xth International Congress For the Study of Child Language in Berlin,	共著:◎Girard,Sonia / Oshima-Takane, Yuriko / Szadokierski, Isadora / S. Miyata, Susanne / Nisisawa, Hiro Yuki	313頁(1頁)
幼児語 - 言語のなかの小さな言語	単	2006年3月	日本発達心理学会第17回大会発表論文集		253頁(1頁)

特別講演:発話データベース CHILDESの概要とその成果	単	2006年10月	JAECs英語コーパス学会第 28回大会(北海道大学)	
----------------------------------	---	----------	--------------------------------	--

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

学会活動	
2001年7月～2004年6月	言語科学会(JSLS)運営委員
2001年7月～2004年6月	言語科学会(JSLS)常任委員
2001年7月～2003年6月	言語科学会(JSLS)事務局長
2003年7月～2005年6月	言語科学会(JSLS)事務局補佐
2003年7月～2006年6月	言語科学会(JSLS)会計補佐
2003年10月～2004年7月	第6年次大会(JSLS2004)大会実行委員長
2004年7月～2007年6月	言語科学会(JSLS)運営委員
2004年7月～2007年6月	言語科学会(JSLS)常任委員
2004年7月～2007年6月	言語科学会(JSLS)大会委員長
2004年10月～2005年7月	第7年次大会(JSLS2005)大会実行委員
2005年10月～2006年7月	第8年次大会(JSLS2006)大会実行委員
査読活動	
Language Learning (Blackwell Publ.)	
Studies in Language Science (Japanese Society for Languages Sciences)	
Journal of Child Language (Cambridge U.P.)	
ワークショップ開催	
2003年8月2日～8月3日	JCHAT/CHILDESワークショップ(お茶の水女子大学)
2004年4月24日～4月25日	JCHAT/CHILDESワークショップ(JSLSチュートリアル)(愛知淑徳大学星が丘キャンパス)
2004年12月19日	JCHAT/CHILDESワークショップ(JSLSチュートリアル)(愛知淑徳大学星が丘キャンパス)
2005年1月30日	JCHAT/CHILDESワークショップ(JSLSチュートリアル)(愛知淑徳大学星が丘キャンパス)
2005年3月23日	JCHAT/CHILDESワークショップ(JSLSチュートリアル)(愛知淑徳大学星が丘キャンパス)
2006年10月7日	CHILDESワークショップ(JAECs英語コーパス学会第28回大会)(北海道大学)

所属 医療福祉学部	職名 准教授	氏名 吉田 敬	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
医療貢献基礎演習における教育方法の工夫		2004年4月～	愛知淑徳大学の授業科目「医療貢献基礎演習」の中で、言語聴覚障害学に関する専門的な研究に必要となる基礎的能力の向上を目指して教育を行った。特に学内・学外の図書やウェブ上での資料の収集、レポートのテーマの決定や作成、口頭でのプレゼンテーションに関して教育を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
医療福祉学部教務委員、教務委員長		2004年4月～2008年3月	平成16年4月から平成20年3月まで医療福祉学部の教務委員を務めていた。平成17年4月から平成20年3月まで、医療福祉学部の教務委員長として、医療福祉学部の教育課程の管理・運営を担当していた。		
医療福祉学部進路支援委員		2008年4月～	平成20年4月より医療福祉学部の進路支援委員を務めている。		
医療福祉学部情報システム支援部運営委員、委員長		2008年4月～	平成20年4月より医療福祉学部の情報システム支援部運営委員、及び同委員長を務めている。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
SALA失語症検査—Sophia Analysis of Language in Aphasia	共著	2004年5月	エスコアール	◎藤林真理子、長塚紀子、吉田敬、David Howard、Sue Franklin、Anne Whitworth	
失語症会話パートナー養成講座テキスト	共著	2005年9月	名古屋市総合リハビリテーション事業団	石黒安佐、加藤由記、杉田朋子、西川恵子、服部千賀子、服部美沙、藤川利夫、藤田菊江、古川真理子、諸岡雅美、山田和子、吉田敬	
論文					
失語症者における単音節・単語の理解と談話理解 —音韻処理能力および意味処理能力の観点から—	共著	2004年7月	第13回言語障害臨床学術研究会論文集	◎加藤恵、吉田敬、進藤美津子	49頁～58頁
A comparative study of language abilities in normal children and those with specific language impairment in the Japanese language (preliminary report)	共著	2004年8月	Proceeding, 26th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics	◎Keiko Hara, Kyoko Iitaka, Mami Mitachi, Takashi Yoshida, Hideki Sakihara, Chiyoko Owada	47頁
A comparative study of narrative discourse abilities in normal children and those with intellectual disabilities	共著	2004年8月	Proceeding, 26th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics	◎Mami Mitachi, Kyoko Iitaka, Keiko Hara, Takashi Yoshida, Hideki Sakihara, Chiyoko Owada, Kazue	50頁～51頁
Performance of aphasics tested by newly developed psycholinguistics assessments for aphasia in Japanese	共著	2004年8月	Proceeding, 26th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics	◎Noriko Nagatsuka, Takashi Yoshida, Mariko Fujibayashi, David Howard, Sue Franklin, Anne Whitworth	139頁
一失語症者における復唱時の音の誤りの分析:認知神経心理学的および音韻論的分析	共著	2004年12月	コミュニケーション障害学(第21巻3号)	◎吉田敬、杉山伸吾、荻野恵、進藤美津子	196頁
成人脳損傷者の談話・会話データの分析	共著	2005年8月	コミュニケーション障害学(第22巻2号)	◎吉田敬、長塚紀子、荻野恵	100頁～108頁

慢性期失語症者とその配偶者に対する会話指導	共著	2006年3月	高次脳機能研究(第26巻1号)	◎杉田朋子、上野真也子、三宅慶呼、吉田敬	103頁～104頁
Error analyses of sentence production in Japanese aphasia	共著	2007年8月	Proceeding, 27th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatics	◎Takashi Yoshida, Noroko Yamazawa, Megumi Ogino	134頁
Effects of script types in Japanese aphasia: Katakana behaves more like in Kanji in comprehension, but more like Hiragana in writing	共著	2007年8月	Proceeding, 27th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatics	◎Noriko Nagatsuka, Takashi Yoshida, David Howard	133頁

その他

--	--	--	--	--	--

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2004年4月～7月	第22回全国失語症者のつどい事務局委員
2005年2月～現在	愛知県失語症地域支援の会委員
2005年8月、2006年3月	愛知県会話パートナー養成講座講師
2005年8月～2006年8月	愛知県言語聴覚士会学術局委員
2008年2月	愛知県言語聴覚士会研修会講師

所属 医療福祉学部	職名 教授	氏名 渡邊一功	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
仮想体験教育		2004年4月～2008年1月	学生の理解を深めるため、実際の症例の画像をパソコンに取り込み、これをプロジェクターにより提示、実際に症例に遭遇したように学生に見せ、随所に問題を挿入し解答させるとともに解説し、学生アンケートでの評価は高かった。		
学生参加教育		2004年4月～2008年1月	学生の集中力と理解を深めるため、配布したプリントの重要語句を空欄にし講義中学生に埋めさせたが、学生アンケートの評価は高かった。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
看護のための最新医学講座、第31巻医学と分子生物学、「てんかん」を分担執筆		2003年4月	学生の教育の参考資料として使用した。		
看護のための最新医学講座、第1巻脳神経疾患、「てんかん」を分担執筆		2005年12月	学生の教育の参考資料として使用した。		
小児科学、「てんかん」を分担執筆		2008年3月	学生の教育の参考資料として使用した。		
講義用プリント		2004年4月～2008年1月	学生の教育の資料として配布した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
第50回名古屋臨床脳波検討会特別講演		2005年4月16日	第50回名古屋臨床脳波検討会において「ヒプサリズムアをめぐる」について講演した。		
第35回日本臨床神経生理学会教育講演		2005年12月1日	第35回日本臨床神経生理学会において「新生児脳波の最近の話題」について講演した。		
第1回東海小児神経学セミナー講演		2007年9月8日	第1回東海小児神経学セミナーにおいて「脳の発達とてんかん」について講演した。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Benign partial epilepsies.	単著	2004年	In Sheila Wallace and Kevin Farrell(eds)Epilepsy in Children, Arnold, London.		199頁～223頁
Symptomatic neonatal seizures	共著	2005年	In J. Roger, M. Bureau, Ch Dravet, P. Genton, CA Tassinari and P Wolf Epileptic syndromes in infancy, childhood and adolescence. John Libbey, London	©Mizrahi EM, Watanabe K.	17頁～38頁
Non-idiopathic localization-relat	共著	2005年	In J. Roger, M. Bureau, Ch Dravet, P. Genton, CA Tassinari and P Wolf Epileptic syndromes in infancy, childhood and adolescence. John Libbey	©Watanabe K, Okumura A, Aso K, , Duchowny M	181頁～200頁
Benign familial and nonfamilial se	共著	2008年	In J Engel and TA Pedley (eds) Epilepsy. A comprehensive Textbook	Vigevano F, Specchio N, Caraballo R, Watanabe K	2313頁～2321頁
Partial epilepsies in infancy	単著	2008年	In JM Pellock, BFD Bourgois, WE Dodson, (eds) Pediatric epilepsy. Diagnosis and therapy. Demos, New York		283頁～291頁
論文					

Hypoxic ischemic encephalopathy associated with neonatal seizures without other neurological abnormalities	共著	2003年4月	Brain Dev vol.25,no.3	©Sato Y, Okumura A, Kato T, Hayakawa F, Kuno K, Watanabe K.	215頁～219頁
Nutritional state and growth and functional maturation of the brain in extremely low birth weight infants	共著	2003年5月	Pediatrics vol.111,no.5	©Hayakawa M, Okumura A, Hayakawa F, Kato Y, Ohshiro M, Tauchi N, Watanabe K.	991頁～995頁
A case of subacute sclerosing panencephalitis preceded by epileptic seizures:evolutional EEG changes	共著	2003年6月	Brain Dev, vol.25,no.4	©Kubota T, Okumura A, Takenaka J, Ishiguro Y, Takahashi H, Ueda N, Negoro T, Watanabe K.	279頁～282頁
Abnormal sharp transients on electroencephalograms in preterm infants with periventricular leukomalacia	共著	2003年6月	J Pediatr, vol.143,no.1:26-30	©Okumura A, Hayakawa F, Kato T, Maruyama K, Kubota T, Suzuki M, Kidokoro H, Kuno K	26頁～30頁
Sharp waves in preterm infants with periventricular leukomalacia	共著	2003年9月	Pediatr Neurol, vol.29,no.3	©Sofue A, Okumura A, Hayakawa F, Watanabe K.	214頁～217頁
Amplitude spectral analysis of maturational changes of delta waves in preterm infants	共著	2003年9月	Brain Dev, vol.25,no.6	©Okumura A, Kubota T, Toyota N, Kidokoro H, Maruyama K, Kato T, Hayakawa F, Watanabe K.	406頁～410頁
Absence seizures in patients with localization-related epilepsy	共著	2003年9月	Brain Dev, vol.25,no.6	©Sofue A, Okumura A, Negoro T, Hayakawa F, Nakai Y, Toyota N, Watanabe K.	422頁～426頁
Temporal structure of the apparent motion perception: a magnetoencephalographic study	共著	2004年1月	Neurosci Res. Vol.48,no.1	©Kubota T, Kaneoke Y, Maruyama K, Watanabe K, Kakigi R	111頁～118頁
Mutations of Neuronal Voltage-gated Na <sup>+</sup> Channel alpha1 Subunit Gene SCN1A in Core Severe Myoclonic Epilepsy in Infancy (SMEI) and in Borderline SMEI (SMEB)	共著	2004年2月	Epilepsia vol.45,no.2	©Fukuma G, Oguni H, Shirasaka Y, Watanabe K, Miyajima T, Yasumoto S, Ohfu M, Inoue T, Watanachai A, Kira R, Matsuo M, Muranaka H, Sofue F, Zhang B, Kaneko S, Mitsudome A, Hirose S	140頁～148頁
Popliteal angle of low birth weight infants during the first year of life	共著	2004年4月	Pediatr Neurol, vol.30,no.4	©Kato T, Okumura A, Hayakawa F, Itomi K, Kuno K, Watanabe K.	244頁～246頁
Efficacy of antiepileptic drugs in patients with benign convulsions with mild gastroenteritis	共著	2004年4月	Brain Dev, vol.26,no.3	©Okumura A, Uemura N, Negoro T	164頁～167頁
A follow-up survey on seizures induced by animated cartoon TV program "Pocket Monster"	共著	2004年4月	Epilepsia, vol.45,no.4	©Ishiguro Y, Takada H, Watanabe K, Okumura A, Aso K, Ishikawa T	377頁～383頁
Unconsciousness and delirious behavior in children with febrile seizures	共著	2004年5月	Pediatr Neurol, vol.30,no.5	©Okumura A, Uemura N, Suzuki M, Itomi K, Watanabe K.	316頁～319頁
Treatment and outcome in patients with febrile convulsion associated with epileptiform discharges on electroencephalography	共著	2004年6月	Brain Dev, vol.26,no.4	©Okumura A, Ishiguro Y, Sofue A, Suzuki Y, Maruyama K, Kubota T, Negoro T, Watanabe K.	241頁～244頁
Electroencephalographic aspects of periventricular hemorrhagic infarction in preterm infants	共著	2004年6月	Neuropediatrics, vol.35,no.3	©Kato T, Okumura A, Hayakawa F, Kuno K, Watanabe K.	161頁～166頁
Five years after the "Pocket Monster" seizures	共著	2004年6月	N Engl J Med, vol.351,no.4	©Okumura A, Watanabe K, Ishikawa T.	403頁～404頁
Diffusion tensor imaging in frontal lobe epilepsy	共著	2004年9月	Pediatr Neurol, vol.31,no.3	©Okumura A, Fukatsu H, Kato K, Ikuta T, Watanabe K.	203頁～206頁
Non-epileptic pedaling-like movement induced by triclofos	共著	2004年10月	Brain Dev, vol.26,no.7	©Okumura A, Kato T, Hayakawa F, Watanabe K.	487頁～489頁

A pilot study on lidocaine tape therapy for convulsions with mild gastroenteritis	共著	2004年12月	Brain Dev, vol.26,no.8	©Okumura A, Tanabe T, Kato T, Hayakawa F, Watanabe K.	525頁～529頁
Popliteal angle in preterm infants with periventricular leukomalacia	共著	2005年2月	Pediatr Neurol, vol.32,no.2	©Kato T, Okumura A, Hayakawa F, Itomi K, Kuno K, Watanabe K.	84頁～86頁
The evolutionary change of flash visual evoked potentials in preterm infants with periventricular leukomalacia	共著	2005年3月	Clin Neurophysiol, vol.116,no.3	©Kato T, Okumura A, Hayakawa F, Kuno K, Watanabe K.	690頁～695頁
Delirious behavior in children with influenza: its clinical features and EEG findings.	共著	2005年6月	Brain Dev, vol.27,no.4	©Okumura A, Nakano T, Fukumoto Y, Higuchi K, Kamiya H, Watanabe K, Morishima T.	271頁～274頁
Epilepsies after Pocket Monster seizure	共著	2005年6月	Epilepsia, vol.46,no.6	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Ishikawa T, Ishiguro Y, Takenaka J, Takada H.	980頁～982頁
Evolution of seizures and electroencephalographical findings in 23 cases of deletion type Angelman syndrome	共著	2005年8月	Brain Dev, vol.27,no.5	©Uemura N, Matsumoto A, Nakamura M, Watanabe K, Negoro T, Kumagai T, Miura K, Ohki T, Mizuno S, Okumura A, Aso K, Hayakawa F, Kondo Y.	383頁～388頁
Congenital cytomegalovirus infection diagnosed by polymerase chain reaction with the use of preserved umbilical cord	共著	2005年6月	Pediatr Infect Dis J, vol.24,no.7	©Kakizawa H, Okumura A, Suzuki Y, Natsume J, Kimura H, Negoro T, Watanabe K.	653頁～654頁
Comparison of two low dose ACTH therapies for West syndrome: their efficacy and side effect	共著	2005年8月	Brain Dev, vol.27,no.5	©Kondo Y, Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Kato T, Kubota T, Kakizawa H.	326頁～330頁
Amplitude spectral analysis of theta/alpha/beta waves in preterm infants.	共著	2006年1月	Pediatr Neurol, vol.34,no.1	©Okumura A, Kubota T, Tsuji T, Kato T, Hayakawa F, Watanabe K.	30頁～34頁
Long-term Follow-up of patients with benign partial epilepsy in infancy.	共著	2006年1月	Epilepsia, vol.47,no.1	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Hayakawa F, Kato T, Maruyama K, Kubota T, Suzuki M, Kurahashi H, Azuma Y.	181頁～185頁
Antipyretics and delirious behavior during febrile illness.	共著	2006年2月	Pediatr Int, vol.48,no.1	©Okumura A, Fukumoto Y, Hayakawa F, Nakano T, Higuchi K, Kamiya H, Watanabe K, Morishima T.	40頁～43頁
Single photon emission computed tomography and serial MRI in preterm infants with kernicterus	共著	2006年6月	Brain Dev, vol.28,no.6	©Okumura A, Hayakawa F, Maruyama K, Kubota T, Kato K, Watanabe K.	348頁～352頁
The mildest form of acute necrotizing encephalopathy associated with influenza A.	共著	2006年8月	Neuropediatrics, vol.37,no.4	©Okumura A, Kidokoro H, Mizuguchi M, Kurahashi H, Hirabayashi Y, Morishima T, Watanabe K.	261頁～263頁
Benign partial epilepsy in infancy long-term outcome and marginal syndromes.	共著	2006年8月	Epilepsy Res. vol.70 Suppl 1	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T.	168頁～173頁
Sibling cases with epilepsy associated with pocket monster seizures.	共著	2006年9月	Clin Pediatr (Phila). vol.45,no.7	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Itomi S, Ikuta T.	665頁～668頁
Parry-Romberg syndrome with a clinically silent white matter lesion.	共著	2006年9月	AJNR Am J Neuroradiol. vol.27,no.8	©Okumura A, Ikuta T, Tsuji T, Kato T, Fukatsu H, Naganawa S, Kato K, Watanabe K.	1729頁～1731頁
Antiepileptic treatment against clustered seizures in benign partial epilepsy in infancy.	共著	2006年10月	Brain Dev, vol.28,no.9	©Okumura A, Kato T, Hayakawa F, Maruyama K, Kubota T, Natsume J, Negoro T, Watanabe K.	582頁～585頁

ACTH therapy for generalized seizures other than spasms. Seizure.	共著	2006年10月	Seizure. vol.15,no7	©Okumura A, Tsuji T, Kato T, Natsume J, Negoro T, Watanabe K.	469頁～475頁
Popliteal angle in infants with west syndrome.	共著	2006年10月	J Child Neurol. vol.21no.10	©Okumura A, Kato T, Sei Y, Suzuki T, Morishita Y, Watanabe K.	898頁～900頁
Abnormal brushes in preterm infants with periventricular leukomalacia.	共著	2006年10月	Neuropediatrics. vol.37,no.5	©Kidokoro H, Okumura A, Watanabe K.	265頁～268頁
The clinical characterizations of benign partial epilepsy in infancy.	共著	2006年12月	Neuropediatrics. vol.37,no.6	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Hayakawa F, Kato T, Natsume J.	359頁～363頁
Micturition induced seizures: ictal EEG and subtraction ictal SPECT findings.	共著	2007年1月	Epilepsy Res. vol.73,no.1	©Okumura A, Kondo Y, Tsuji T, Ikuta T, Negoro T, Kato K, Watanabe K.	119頁～121頁
Ictal EEG in benign partial epilepsy in infancy.	共著	2007年1月	Pediatr Neurol. vol.36,no.1	©Okumura A, Watanabe K, Negoro T, Hayakawa F, Kato T, Natsume J.	8頁～12頁
Brain malformation of the surviving twin of intrauterine co-twin demise.	共著	2007年1月	J Child Neurol. vo.22,no.1	©Okumura A, Hayakawa F, Kato T, Tsuji T, Negoro T, Watanabe K.	85頁～88頁
Phenytoin desensitization in a child with symptomatic localization-related epilepsy.	共著	2007年3月	Brain Dev, vol.48,no.1	©Itomi S, Okumura A, Ikuta T, Negoro T, Watanabe K.	121頁～123頁
Transient hypogammaglobulinemia after antiepileptic drug hypersensitivity.	共著	2007年5月	Pediatr Neurol. vol.36no.5	©Okumura A, Tsuge I, Kamachi Y, Negoro T, Watanabe K.	342頁～344頁
Current treatment of West syndrome in Japan.	共著	2007年5月	J Child Neurol. vol.22,no.5	©Tsuji T, Okumura A, Ozawa H, Ito M, Watanabe K.	560頁～564頁
Serum levels of cytokines and EEG findings in children with influenza associated with mild neurological complications.	共著	2007年8月	Brain Dev. vol.29,no.7	©Fukumoto Y, Okumura A, Hayakawa F, Suzuki M, Kato T, Watanabe K, Morishima T.	425頁～430頁
Focal Epilepsy Resulting from a de novo SCN1A Mutation.	共著	2007年10月	Neuropediatrics. vol.38,no.5	©Okumura A, Kurahashi H, Hirose S, Okawa N, Watanabe K.	253頁～256頁
Ictal electroencephalographic findings of neonatal seizures in preterm infants.	共著	2007年10月	Brain Dev. 2007 Oct 4; [Epub ahead of print]	©Okumura A, Hayakawa F, Kato T, Itomi K, Maruyama K, Kubota T, Suzuki M, Kidokoro H, Watanabe K.	Epub ahead of print
Phenytoin desensitization monitored by antigen specific T cell response using carboxyfluorescein succinimidyl ester dilution assay.	共著	2007年11月	Eur J Paediatr Neurol. vol.11no.6	©Okumura A, Tsuge I, Kubota T, Kurahashi H, Natsume J, Negoro T, Watanabe K.	385頁～388頁
Relationship between serum lactate level and periventricular leukomalacia.	共著	2007年11月	Brain Dev. 2007 Nov;29(10):656-9.	©Kidokoro H, Shimizu M, Kimoto H, Okumura A, Hayakawa M, Watanabe K, Ohno T.	656頁～659頁
Interpretation scheme for nonexpert pediatricians evaluating magnetic resonance images of children with cerebral palsy.	共著	2007年11月	Pediatr Neurol. vol.37no.5	© Hayakawa F, Okumura A, Kato T, Maruyama K, Kubota T, Suzuki M, Iwata S, Tsuji T, Watanabe K.	331頁～337頁
Diffusion tensor imaging in infants with basal ganglia-thalamic lesions.	共著	2007年11月	Eur J Paediatr Neurol. 2007 Nov 29; [Epub ahead of print]	©Okumura A, Hayakawa M, Tsuji T, Naganawa S, Watanabe K.	Epub ahead of print
A pilot study on cord blood levels of erythropoietin and its relationship to periventricular leukomalacia in preterm infants.	共著	2008年2月	J Child Neurol. vol.23no.2	©Okumura A, Kidokoro H, Kato T, Kubota T, Hayakawa F, Kuno K, Watanabe K.	231頁～234頁



Subacute encephalopathy: clinical features, laboratory data, neuroimaging, and outcomes.	共著	2008年2月	Pediatr Neurol. 2008 Feb;38(2):111-7.	©Okumura A, Kidokoro H, Itomi K, Maruyama K, Kubota T, Kondo Y, Itomi S, Uemura N, Natsume J, Watanabe K, Morishima T.	111頁～117頁
--	----	---------	---------------------------------------	--	-----------

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2003年4月～現在	日本小児学会会員
2003年6月～2005年5月	日本小児神経学会理事
2005年5月～現在	日本小児神経学会名誉会員
2003年6月～2005年5月	Brain and Development編集委員
2003年10月～2004年7月	日本てんかん学会理事
2004年7月～現在	日本てんかん学会名誉会員
2003年9月～2005年12月	Neuropediatrics アジア地区編集委員長
2006年1月～現在	BMC Neurology編集委員

# 大学院ビジネス研究科会計専門職専攻

浅野敬志	401	中村雅文	411
石川雅之	404	前川三喜男	412
石畔重次	405	三浦克人	413
浦山章二	406	森恒夫	415
糟谷修	407	吉村文雄	416
杉本典之	409		



所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 准教授	氏名 浅野敬志	大学院における研究指導 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
・経営分析Ⅰ・Ⅱ	2001年4月～	学生が興味を持てるように、身近な企業を複数取り上げ(スターバックスとドトールなど)、様々な分析手法を用いて、できるだけ客観的にそれらの企業を分析している。さらに、分析に留めるのではなく、企業の問題点の背後にある企業行動にも目を向け、それを改善する方策も同時に考えている。つまり、ビジネス界で行われている問題解決方法を常に意識しながら、学生と一緒に、企業の経営分析に取り組んでいる。	
・簿記Ⅰ・Ⅱ	2003年4月～2006年3月	簿記は社会人が身に付けたいと考える3大知識の1つである。簿記が社会で必要とされる現実を理解させた上で、検定試験を視野に入れながら講義を行う。具体的には、講義を一方的に行うだけでなく、学生に日商簿記検定3級の問題を解いてもらい、問題を通じて簿記に興味を持ってもらう。簿記Ⅰで日商簿記検定3級の全範囲を、簿記Ⅱで日商簿記検定2級(商業簿記)の7割を講義しているが、早くから簿記に興味を持ち検定試験にチャレンジしたいと考える学生には、課外授業の会計研究会で試験対策の講義を行い、全て講義を終える前に検定試験に挑戦できるよう指導している。	
・初級簿記演習・中級簿記演習	2007年4月～	両科目とも会計教育センターの開設科目である。会計教育センターでは、外部講師を招き、日商簿記検定1級から3級までの試験対策講座を開講しているが、3級または3級の再受験を目指す学生のために、通常科目とは別に演習科目を設けている。初級簿記演習は3級の再受験者用、中級簿記演習は2級の再受験者用の科目であり、両科目の担当をしている。この演習科目は、学生を日商簿記検定に合格させることを目的としている。そのため、検定試験の過去問題や専門学校の前予想問題などをできるだけ多く解いてもらい、要点を詳細に解説することで、日商簿記検定の合格をサポートしている。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
特になし。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
「ケースで見る経営分析」を通じた授業改善の方策	2006年7月26日	本学の第1回全学授業改善情報交流会で、パワーポイントを用いて教育方法・教育実践に関する発表を行った。ここでは、簡単な講義内容とともに、授業の目標、評価方法、出欠のとり方、レポートを課す際に心がけている点、授業で心がけている点(授業内容の工夫、授業進行の工夫)などについて説明した。具体的には、経営分析という実践科目としての特徴を活かして、実際の企業を分析したり、簿記(既にある専門知識)に関連する問題を穴埋め形式で用意したりして、授業内容を工夫していること、また教員から学生への一方的な情報提供ではなく、学生からの情報提供を織り交ぜながら授業を進行したりして、授業進行を工夫していることなどを発表した。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
・教務委員	2001年4月～2003年3月		
・情報メディアサービス委員長	2004年4月～2008年3月		
・情報システム運営委員長	2003年4月～2005年3月		
・コミュニティ・コラボレーション・センター運営委員	2004年4月～2008年3月		
・専門職大学院構想委員	2005年4月～2006年3月		
・成績評価法改善検討委員	2005年4月～2006年3月		
・会計教育センター運営委員	2006年4月～		
・会計教育センター長	2007年4月～		

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
会計ディスクロージャーの新機軸	共著	2002年	東洋経済情報出版	宇南山英夫・三浦敬	63頁～76頁
財務会計の世界－基礎から個別論点まで－	共著	2005年	税務経理協会	安永利啓・友杉芳正	53頁～63頁, 181頁～187頁, 195頁～201頁
全国経理教育協会・上級・商業簿記・会計学テキスト(改訂版)	共著	2008年	中央経済社	全国経理協会	未定
スタンダード財務会計論Ⅲ -問題演習編-	共著	2008年	中央経済社	未定	未定
論文					
株式交換取引における日本企業の利益管理行動	共著	2002年	『名城論叢』第3巻第3号	浅野敬志・石井康彦・田代樹彦・中山重徳	55頁～67頁
Earnings Management in M&A - Cases of the Japanese Firms-	共著	2002年	4th Annual Congress of Asian Academic Accounting Association	Takashi Asano, Yasuhiko Ishii, Tatsuhiko Tashiro, Shigeo Nakayama	1頁～16頁
セグメント財務報告基準とコーポレート・ガバナンス-3つの事業区分方法とセグメント情報の有用性の分析を通じて-	単著	2003年	『日本コーポレート・ガバナンス・フォーラム編年報』第6号		16頁～32頁
企業再編におけるわが国企業の会計手続き選択行動	共著	2004年	『国際会計研究学会2003年度年報』	浅野敬志・石井康彦・田代樹彦・中山重徳	71頁～83頁
多角化企業のディスクロージャー戦略(1)	単著	2004年	『企業会計』11月号		78頁～80頁
多角化企業のディスクロージャー戦略(2)	単著	2004年	『企業会計』12月号		78頁～80頁
セグメント財務報告基準の有効性－プロプライエタリー・コストとディスクロージャーの理論的・実証的検討－	単著	2005年	『産業経理』第65巻第1号		89頁～99頁
多国籍企業のディスクロージャーとバリュエーション	単著	2005年	『JICPAジャーナル』第17巻第10号		56頁～57頁
事業区分方法の選択とセグメント情報の有用性	共著	2005年	『会計』第168巻第5号	浅野敬志・石井康彦	68頁～82頁
Segment definition and information content of segment reporting -Evidence from Japan-	共著	2005年	28th Annual Congress of European Accounting Association	Takashi Asano, Yasuhiko Ishii	1頁～18頁
Proprietary costとセグメント情報の有用性	単著	2006年	『会計』第169巻第5号		59頁～74頁
経営者の業績予想における期待マネジメントと利益マネジメント	単著	2007年	『経営分析研究』第23号		33頁～42頁
経営者の業績予想と市場の評価	単著	2007年	日本会計研究学会スタディグループ『会計社会の変容と市場の論理』最終報告書		61頁～72頁
企業再編における利益管理行動と株価効果	共著	2007年	『証券経済学会年報』第42号	浅野敬志・石井康彦・田代樹彦・中山重徳	253頁～259頁
企業再編における利益管理行動と株式交換のアナウンスメント効果	共著	2007年	『名城論叢』第7巻第4号	浅野敬志・石井康彦・田代樹彦・中山重徳	101頁～128頁
企業再編におけるわが国の経営者の会計方針選択行動に関する実証的研究	共著	2007年	平成17年度・平成18年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書	浅野敬志・石井康彦・田代樹彦・中山重徳	1頁～108頁
Earnings management and the market performance of acquiring firms in stock for stock mergers -Evidence from Japan-	共著	2007年	30th Annual Congress of European Accounting Association	Takashi Asano, Yasuhiko Ishii, Tatsuhiko Tashiro, Shigeo Nakayama	1頁～32頁
財務諸表論理論基本問題集	共著	2002年	『税経セミナー』第47巻第1号	佐藤信彦他	56頁～67頁、 70頁～72頁
不動産鑑定士第2次試験-解答例と解説-	共著	2003年	『不動産鑑定』10月号	田代樹彦他	118頁～121頁

不動産鑑定士第2次試験-解答例と解説-	共著	2004年	『不動産鑑定』10月号	田代樹彦他	100頁～105頁
財務諸表論基本理論演習	共著	2004年	『税経セミナー』第49巻第16号	藤永弘他	214頁～217頁
不動産鑑定士第2次試験-解答例と解説-	共著	2005年	『不動産鑑定』10月号	田代樹彦他	108頁～112頁
不動産鑑定士第2次試験-解答例と解説-	共著	2006年	『不動産鑑定』10月号	田代樹彦他	98頁～101頁
不動産鑑定士第2次試験-解答例と解説-	共著	2007年	『不動産鑑定』10月号	田代樹彦他	103頁～106頁
税理士試験 簿記論・財務諸表論 解き方がわかる！ステップアップ式・計算問題集	共著	2008年	『会計人コース』5月臨時増刊号	小倉康三他	89頁～100頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1999年～現在	日本経営分析学会員
1999年～2003年	ディスクロージャー研究会議会員
2002年～現在	日本会計研究学会員
2003年～現在	国際会計研究学会員
2003年～2005年	日本コーポレート・ガバナンス・フォーラム会員
2005年～現在	日本簿記学会会員
2007年～現在	日本ファイナンス学会員

所属	ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名	教授	氏名	石川雅之	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
				講義の内容・進捗の度合いを適切なものとするために、適宜学生との対話の時間を設け、講義内容に対する学生の理解度を確かめるようにしている。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
財務会計		2006年4月1日		財務会計の通常のテキストでは、会計規程の説明については詳しいが、それがどのように取引の仕訳に反映されるのかについての例示が少ない。そこで会計規程の説明によって解説する仕訳問題を含むオリジナルプリントを作成した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
現代会計	共著	2004年3月	創成社	塩原一郎		
論文						
EUの国際会計基準戦略とその 波紋	単著	2006年3月	愛知淑徳大学論集ービジ ネス学部編ー第2号			
会計基準のコンバージェンスと 国内会計基準設定主体の役割	単著	2006年3月	産業経理協会産業経理第 67巻第1号			
ポイント債務とその会計処理	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集ビジネス 学部編ー第4号			
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						

所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 教授	氏名 石畔重次	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
教科書「民法への招待」を使用し、主要な論点を解説		2005年4月～現在	民法上の主要な論点について、社会生活上の紛争解決と関連付けながら講義をした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
クレメンティ・レポートに関する調査報告書	共著	2007年6月15日	日本弁護士連合会 国際活動に関する協議会 クレメンティ・レポート研究会		
論文					
その他					
弁護士に未来はあるか! 「法律サービス法の影響」	単著 単著	2009年9月 2007年12月1日	愛知県弁護士会会報 日本弁護士連合会 外国弁護士及び国際法律業務委員会ニュース		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1994年4月～1995年3月	名古屋弁護士会(現愛知県弁護士会)副会長				
1995年～現在	名古屋地方裁判所第一審強化方策名古屋地方協議会委員				
1997年～現在	日本弁護士連合会外国弁護士及び国際法律業務に関する委員会委員(2002年～副委員長)				
2001年～現在	日本弁護士連合会弁護士倫理委員会委員				
2002年～2007年9月、2008年4月～現在	愛知労働局紛争調整委員会委員				
2004年～現在	日本弁護士連合会国際活動に関する協議会委員				
2007年～現在	日本弁護士連合会外国法事務弁護士綱紀委員会委員				
2007年11月1日	名古屋大学法科大学院で講義(依頼者と弁護士の関係(1))				
2007年12月21日	愛知学院大学法科大学院で講義(弁護士の業務形態と弁護士倫理)				
2004年～現在	愛知法曹倫理研究会会員				
【その他の活動】					



所属	ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名	准教授	氏名	浦山 章二	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
ビジネス社会で行われている最新の会計を授業に取り入れる。				上場企業の最新の決算発表などの資料を授業に取り入れ、決算短信や有価証券報告書などの作成方法や意味を説明し、実践的で役に立つ会計知識を学生が理解できるようにする。		
ビジネス、経済、法律、税法などと会計の関係をわかりやすく説明する。				会計はビジネス、経済、法律、税法などの影響を常に受け、変わっていくものであるということを説明し、幅広い知識の習得によって会計が実践されていることを講義する。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
インターネットで入手した資料とOutlookで作成したレジメを教材として使用する。				大企業の決算発表などの資料をインターネットで入手し、Outlookで加工したレジメを作成して、会計の社会的意義と役割やテキストで学習する会計知識との関係をわかりやすく説明する。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
ビジネス社会で役に立つ会計教育の実施				会計の授業において、単に会計知識の説明にとどまらず、税法、法律、ビジネス、経済などの関係や、それらの変化が会計に与える影響について幅広く説明し、実践的で役に立つ知識が得られるよう工夫している。		
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
該当なし						
論文						
該当なし						
その他						
インターネットなどを利用し、最新の会計・ビジネス・法律・経済・税法などに関する実践的な研究を常に行っている。						
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						
該当なし						

所属	ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名	准教授	氏名	糟谷 修	大学院における研究指導担当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
①机上の学問から実感する講義へ		①2007年4月～		①ともすれば、机上の学問となりがちな講義をアルバイトにまつわる租税や、免税店の役割など学生が実感しやすい実例を多く用いて講義を進めるようにしている。		
②「平成19年度前期授業アンケート」を踏まえ、実際の税務調査事例の紹介を行う		②2007年10月～		②担当する租税法の講義について具体的な調査事例なども知りたい旨のアンケート結果があり、守秘義務に十分配慮しながら事例の紹介を少しずつ取り入れていった。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
なし						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
なし						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
なし						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
税務研究録(2001年4月～2003年3月)	共著	2003年4月1日	東海税理士会	内藤正史・安田新平・ 山川忠司・糟谷修 他30名	87頁～119頁	
中国調査研究報告書 2004年	共著	2004年12月1日	東海税理士会 調査研究部	林眞義・太田直樹・ 植中紀夫・糟谷修 他13名	9頁～18頁	
税務研究録(2003年4月～2005年3月)	共著	2005年3月1日	東海税理士会	山川忠司・小野勇・ 土屋智勝・糟谷修 他28名	3頁～49頁	
中国税制研修報告書 2006年	共著	2006年12月1日	東海税理士会	林眞義・植中紀夫・ 中西芳夫・糟谷修 他21名	25頁～26頁、 30頁～37頁	
2007年度 第35回日税連公開 研究討論会	共著	2007年9月1日	東海税理士会、 名古屋税理士会	鈴木尚之・内藤正史・ 黒柳龍哉・糟谷修 他94名	3頁～31頁	
論文						
相続時精算課税制度の問題点	単著	2008年3月10日	愛知淑徳大学論集ービ ジネス学部・ビジネス研究科 篇一第4号		81頁～98頁	
その他						
なし						
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						
学会活動等		東海税理士会 会員				
1997年8月～現在		名古屋土地税制経済研究会 会員				
1998年4月～現在		東海税理士会調査研究部 部員				
2001年6月～現在		米国ワシントン州公認会計士協会 会員				
2003年6月～現在						
公益活動等		愛知県幡豆郡一色町商工会 専門指導員				
1999年4月～2004年3月		愛知県幡豆郡幡豆町商工会 専門指導員				
2004年4月～現在		社会福祉法人幡豆福祉会 監事				
2000年1月～現在						
社会活動等						

2003年6月17日	白色記帳説明会講師 於 西尾税務署
2003年12月9日, 2004年12月7日	白色決算説明会講師 於 西尾税務署
2003年9月8日	理容業, 美容業合同税務研修会講師 於 西尾商工会議所
2003年10月20日	新規消費税納税義務者研修会講師 於 一色町商工会
2004年2月13日	ショッピングセンター内店舗事業者向け消費税研修会講師 於 西尾商工会議所
2004年9月10日	改正消費税法説明会講師 於 西尾税務署
2005年4月22日	東三河法人会御津支部研修会講師 於 同支部
2005年5月19日	東三河法人会青年部・女性部合同研修会講師 於 同法人会
2006年8月23日, 24日, 29日, 30日, 31日, 9月5日, 6日	簿記教室講師 於 幡豆町商工会
2006年12月5日, 2007年12月5日	租税教室講師 於 白浜小学校
2006年12月15日, 2007年12月12日	租税教室講師 於 荻原小学校

所属	ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名	教授	氏名	杉本典之	大学院における研究指導担 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
(1) 会計測定の実質的意味の探究		2002年度以降、毎年度		簿記や会計に関する在来の教科書等では、簿記一巡の手続きの説明として、仕訳と転記と決算という一連の手続きを実行することによって作成しうる基本的財務諸表は損益計算書と貸借対照表の二つに限られるかのように説明している。これに対して私の授業では、学生自身に「在来の教科書等に掲載されている例題や問題を使った場合であっても、現金取引の仕訳の際に勘定科目の使い方を少し工夫しさえすれば、キャッシュフロー計算書も、これを上記二つの基本的財務諸表と同時に並行的に誘導法によって作成しうるようになる」ということを体験させる。このような体験を通じて学生に、「同じ対象であっても会計測定は一樣ではなく、必要に応じて多様化しうる」ということを認識させ、さらに「会計測定は測定者としての会計担当者たちの認識・判断・表現のプロセス、つまり記号的表現のプロセス、に他ならない」ということを理解させている。		
(2) 予習と復習を実践させる試み		2005年度以降、毎年度		私が担当している授業科目の中で「学生による授業アンケート」の対象となっているのは、会計学特論Ⅰ及びⅡである。この2科目は、ビジネス学部の3年次ないし4年次の学生に配当されている選択科目としての授業科目である。つまり、この2科目の履修者は、1年次ないし2年次の段階で簿記や会計に関する基礎的な科目を履修して、日本商工会議所簿記検定試験2級に合格する程度の実力を身につけているはずである。このため、授業では会計情報の作成と解釈に関する宿題を出し、教室外でも予習と復習をさせ、思考力を鍛えさせるようにした。上記のアンケートでは「宿題を出さないでほしい」と文句を付ける学生が少なくなかった。しかし、最後まで頑張り通した者は、簿記や会計の重要性と会計学の奥深さを知ることができたとの感想を寄せてくれた。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
(1) 会計関連の記事等を活用した教材		必要に応じて随時		杉本典之の著作からコピーして教材を作成するほかに、企業会計を含むビジネスについての学修者ならば興味を持つであろうと思われる新聞記事、たとえば、会計ビッグバン(会計基準の激変と会計実務の混乱)、国際会計基準の国際的共通化、決算財務諸表の読み取り方と利用の仕方、等に関する経済新聞に連載された特集記事をコピーして教材を作成している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
ビジネスコミュニケーション学科主任及びビジネス学部設置準備学部長		2003年度				
ビジネス学部長		2004～2005年度				
大学院ビジネス研究科長		2005～2008年度				
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
論文						
会計測定理論再考－在来の簿記理論をかえりみる－	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集－ビジネス学部・ビジネス研究科 篇－第3号			

**Ⅲ 学会等および社会における主な活動**

1966年4月～現在	日本会計研究学会会員
1966年4月～現在	日本経営学会会員
1985年4月～現在	日本会計史学会会員
1992年4月～現在	日本簿記学会会員

所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 准教授	氏名 中村 雅文	大学院における研究指導 当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
簿記論Ⅰ、Ⅱ(ビジネス学部)及び簿記(ビジネス研究科)の教育に実務家としての工夫を施した。		2006年度及び2007年度	ビジネス学部では基本的な簿記の仕組みと内容を講義すると共に、実際に企業において使用されている実務処理(帳簿記入)の紹介と解説を随所に折込、教科書と実際の違いを説明することによって実践的な教育を心がけた。ビジネス研究科では会計の世界とのかわりを含めてやはり実践的な簿記の講義を心がけた。		
会計実務Ⅰ、Ⅱ(ビジネス学部)の講義においては実務家としての工夫を施した。		2007年度	公認会計士として永年実務に携わった経験から種々の実務上の事例を挙げながら講義を実施し、学生に経理・財務の世界への興味を持つように仕向けた。		
公会計Ⅰ(ビジネス研究科)の講義では公的部門の計数的把握の方法等につき実務家としての工夫を施した。		2006年度	公会計の実情を学生に知ってもらい、また公会計の勉強を理解しやすくするために、地方自治体の包括監査を実施した経験から、民間会計との違いを解説することに重きを置いた。		
公会計Ⅱ(ビジネス研究科)の講義では公的部門の計数的把握の方法等につき実務家としての工夫を施した。		2007年度	総務省が発表した「新地方公会計制度実務研究会報告書」(2007年10月)を紹介しながら、公会計制度の改革がどのようなスタンスで行われようとしているのか、また各地方自治体の今後の取り組み等に関して、実際に地方自治体職員から得た感触を交えながら実務的に講義した。		
基礎研究Ⅰ、Ⅱでは公認会計士、税理士等の業務内容を細かく紹介することで、将来進路の選択肢の一つとして興味を起こさせるように実務家としての工夫を施した。		2007年度	公認会計士業務と税理士業務との違いを解説し、それぞれの役割と社会での重要性を講義した。さらに実在企業の公表財務諸表をベースにその企業の実力度を測る訓練を実施した。また、幅広くさまざまな企業の業務内容等を知らせるために、上場企業のIR展にも学生を引率した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
特になし。					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
特になし。					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
特になし。					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
該当無し。					
論文					
該当無し。					
その他					
該当無し。					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1. 1997年度～1999年度		大蔵省(現金融庁)公認会計士試験 第三次試験委員			
2. 2002年度～2004年度		三重県包括外部監査人			
3. 2005年10月～現在		三重県紀南中核的交流施設整備事業支援補助金事業者選定委員会委員			
4. 2006年6月～現在		津市行財政改革推進委員会委員			
5. 2007年6月～現在		日本公認会計士協会東海会副会長			
6. 2006年6月～現在		株式会社スズケン 社外監査役			
7. 2007年6月～現在		株式会社マキタ 社外監査役			
8. 2007年6月～現在		財団法人 名古屋観光コンベンションビューロー 監事			

所属	ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名	准教授	氏名	前川三喜男	大学院における研究指導担 当資格の有無(有)
<b>I 教育活動</b>						
教育実践上の主な業績		年 月 日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
<b>II 研究活動</b>						
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数	
著書						
論文						
その他						
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>						
1 学会等での講演		2005年12月 日本会計研究学会中部部会にて講演 「会社法における内部統制と監査」 2005年12月 日本公認会計士協会東海実務補習所 講師 「職業倫理について」 2006年9月 名古屋大学にて講演 「日本の会計監査制度の現状と課題について」 2006年12月 日本監査役協会中部支部にて講演 「カネボウ事件以降の監査環境」				
2 日本公認会計士協会関係		2001年6月～2004年6月 日本公認会計士協会東海会副会長 2001年7月～2005年7月 日本公認会計士協会理事 2004年6月～2007年6月 日本公認会計士協会東海会会長 2004年7月～2007年7月 日本公認会計士協会副会長 2004年7月～2007年7月 日本公認会計士協会協会組織・ガバナンス検討プロジェクトチーム(正副会長戦略会議) 構成員 2004年7月～2007年7月 日本公認会計士協会実務補習協議会委員 2004年9月～2007年2月 日本公認会計士協会会社法改正対策特別委員会委員 2004年10月～2007年8月 日本公認会計士協会継続的専門研修制度推進センター委員 2005年4月～2007年7月 日本公認会計士協会公認会計士法改正正対策プロジェクトチーム構成員 2005年7月～2007年7月 日本公認会計士協会協会組織・ガバナンス検討プロジェクトチーム(正副会長戦略会議) 2007年3月～ 日本公認会計士協会推薦委員会副委員長 2007年7月～ 日本公認会計士協会相談役 2004年6月～ 日本公認会計士協会東海会顧問				
3 その他団体歴		2005年10月～ 国有財産東海地方審議会委員 2006年12月～ 国有財産の有効活用に関する地方有識者会議メンバー 2004年6月～2007年3月 財団法人2005年日本国際博覧会監事 2004年6月～ 愛知県行政評価制度委員会座長 2004年6月～2008年6月 笠松町代表監査委員 2002年4月～2002年9月 笠松町財政健全化計画策定委員会委員 2007年5月～ 財団法人 日弁連法務研究財団監事 2008年3月～ 愛知県公益認定等審議会審議委員 2008年8月～ 愛知県2008年度ロードマップ208アドバイザー				

所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 准教授	氏名 三浦克人	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
簿記Ⅰ・Ⅱ		2006年4月～2008年3月	おもに再履修者を対象とした授業であったため、簿記検定の試験範囲にこだわることなく、基礎的な事項を重点的に教授するようこころがけた。		
会計実務Ⅰ・Ⅱ		2006年4月～2007年3月	会計に関する最新のトピックス、身近なトピックスを取り入れながら教授した。学生が興味をもって授業に臨めるよう、新聞・雑誌の切り抜きや、会計に関する軽い読み物などを適宜使用した。		
工業簿記・原価計算		2006年4月～	簿記検定の試験範囲を意識しつつも、原価計算や工場経営の実務における具体的な問題点を挙げながら講義をすすめた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
該当事項なし					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
該当事項なし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
ビジネス学部教務委員		2006年4月～2008年3月	(2007年度はビジネス学部教務委員長)		
愛知淑徳大学論集—ビジネス学部・ビジネス研究科篇—編集委員		2006年4月～2008年3月			
会計教育センター コーディネータ		2006年4月～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
なし					
論文					
企業支配構造の韓日比較研究	単	2003年5月	国際会計研究, 韓国国際会計学会, 第8集		135頁～150頁
日本企業の価値創造経営 — 最近の動向と今後の課題	単	2003年10月	国際会計研究, 韓国国際会計学会, 第9集		1頁～12頁
韓国のEVA	単	2004年3月	商経論叢, 鹿児島県立短期大学, 第54号		85頁～102頁
BSCによる自治体改革方案	単	2004年10月	国際会計研究, 韓国国際会計学会, 第11集		1頁～10頁
サンク・コストのレレバンス	単	2005年3月	商経論叢, 鹿児島県立短期大学, 第55号		41頁～74頁
活動基準原価計算による行政改革の検討 — 日本の地方自治体の事例を中心として—	単	2005年10月	国際会計研究, 韓国国際会計学会, 第9集		13頁～29頁
総合原価計算の原価計算表	単	2005年12月	紀要, 鹿児島県立短期大学, 第56号		1頁～19頁
社内資本金制度への視角	単	2007年3月	商経論叢, 鹿児島県立短期大学, 第57号		91頁～106頁
EVA企業の情報開示	単	2008年3月	商経論叢, 鹿児島県立短期大学, 第58号		145頁～160頁
その他					
[資料] ビジネスパーソンにもとめられる原価計算の知識 — 中小企業診断士試験を参考として—	単	2006年3月	商経論叢, 鹿児島県立短期大学, 第56号		63頁～85頁
[翻訳] 韓国の『原価計算準則』	単	2004年12月	紀要, 鹿児島県立短期大学, 第55号		51頁～59頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



日本管理会計学会	1995年5月～現在
日本財務管理学会	1995年6月～現在
日本経営分析学会	2000年10月～現在
韓国国際会計学会	2003年4月～現在（2003年度は理事）

所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 准教授	氏名 森 恒夫	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
(1)出席率の上昇		2005年度	従来出席をとらなかったものを出席をとることとした		
(2)学生の授業の理解度を把握し、それに対応		2005年度	学生の理解度をはかるため、1回おき位のペースで小テストを行い、次の授業の参考とした		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 ビジネス研究科 会計専門職専攻	職名 教授	氏名 吉村文雄	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
管理会計研究会		2001年7月～2003年4月	発表		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
教務委員会					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
金沢トラックターミナルにおける 経営分析および利用促進に 関する調査報告書	共著	2001年11月	北陸経済調査会	監修者 吉村文雄	前書き、序章(1頁～ 11頁)、第3章(84頁 ～87頁)
基本原価計算用語辞典	共著	2004年3月	白桃書房	編者 山田庫平	連結原価、連産品、 連産品の計算売上、 原価基本予算、実行 予算、予算期間、予 算原価
組織の会計論	単著	2006年8月	森山書店		407頁
論文					
マネジメント・コントロールと管理 会計	単著	2001年3月	金沢大学経済学会『金沢大 学経済論集』第38号		1頁～29頁
管理会計とコントロールシステム —管理会計の発展—	単著	2002年3月	金沢大学経済学会『金沢大 学経済学部論集』第22巻第 2号		3頁～37頁
組織管理会計の生成— H.W.Quaintanceの管理会計論 の意義—	単著	2003年3月	金沢大学経済学会『金沢大 学経済学部論集』第23巻第 2号		71頁～87頁
Hayes管理会計論の特質	単著	2004年1月	金沢大学経済学会『金沢大 学経済学部論集』第25巻第 1号		3頁～16頁
Blissの管理会計論	単著	2004年3月	金沢大学経済学会『金沢大 学経済学部論集』第25巻第 2号		
管理会計論における組織の問 題	単著	2008年7月	『会計の諸相』(白桃書房) 所収		270頁～282頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

## 留学生別科

阿部 美枝子…………… 419      鈴木 菊代…………… 421

## コミュニティ・コラボレーションセンター

石黒 文子…………… 422      小島 祥美…………… 423

## キャリアセンター

小林 三太郎…………… 430

## 健康スポーツ教育センター

門間 博…………… 431      村本 名史…………… 432

## 外国語教育センター

ARNOLD, Brent C. ……	433	金 賢 珍……………	443
EASLEY, Keith…………	434	清水 バートリックス…………	445
WOODMAN, Jo-Anne M. ……	435	曹 志 偉……………	446
太田 晶 子……………	436	DYCUS, David C. ……	448
大森 信 徳……………	437	二 村 慎 一……………	449
小沢 茂……………	438	MC GOLDRICK, Gemma M. ……	450
河井 昭 乃……………	440	山 田 久美子……………	451
金 昭 鏞……………	441	WRINGER, Paul C. ……	453

## 教職・学芸員教育センター

後口 伊志樹……………	454	柴垣 勇 夫……………	457
小栗 正 彦……………	456	堀内 千恵子……………	459

## 教養教育センター

小野 佳 成…………… 461      堀尾 幸 平…………… 462

## 情報教育センター

小林 久 恵…………… 464

## 学生相談室

渡邊 素 子…………… 466



所属 留学生別科	職名 教授	氏名 阿部美枝子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①「日本語I」に毎時、カタカナテスト、及び3分間スピーチを導入		2004年9月～現在	カタカナはあらゆる分野に多用される時代であるにもかかわらず、日本語学習者は初級者に限らず上級者にいたるまですべてのレベルで正確に習得できない言語要素である。この現状を是正すべく初期の段階からカタカナ語を自然に習得させる目的で導入したものである。3分間スピーチについては学習範囲内の言語能力でも自己表現できるようにするために導入。		
②「日本語II」の読解教材として文学作品を導入		2004年1月～現在	既存の初級者用読解教材には学習者の精神年齢に合致しないレベル、内容のものが未だに少なくないため、成人にふさわしい内容の文学作品を初級文法の範囲で書き換えたものを使用し、学習者の精神的満足度を高めようとするものである。		
③「日本語IVb会話」にドラマ(無声)のせりふづけを導入		2004年1月～現在	場面別、機能別会話を学習した学習者に、より上級の会話運用能力を習得させるため、日常生活をドラマ化した具体的な状況設定(無声化したドラマ)を与え、的確な会話を創造、構築させるために考案した教授方法である。		
④「日本語演習VI」にアニメ・コミックを導入		2005年1月～現在	昨今、日本のアニメ・コミックは輸出される日本文化として広く世界に知られるところであり、多くの学習者の日本語学習の動機にもなっている。このようなアニメ・コミックに描かれる日本の社会、文化、言語表現を教材として取り上げるものである。		
⑤「日本語VIa人文系日本語」の後半期間にゼミ形式の指導法を導入		2006年1月～現在	別科最上級クラスの学習者一人一人のニーズに合わせた内容と質の教育を提供するためのものである。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①教材としてのドラマの選定とせりふの無音化		2004年1月～現在	上記「教育内容・方法工夫」③「日本語IVb会話」のための教材		
②文学作品の教材化		2004年1月～現在	上記「教育内容・方法工夫」②「日本語II」のための教材		
③NHK「クローズアップ現代」の教材化		2004年1月～現在	言語の聴く、話す、書くの3技能に(画像を)視る技能を加えた4技能を総合的に発達させる目的で設置された「日本語Vb視聴解」のための教材		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
なし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
短期日本語研修プログラム(韓国天安大学対象)		2004年7月5日～7月30日	プログラムディレクターとして授業内容、教材、授業進捗を含むすべてのコースデザインを担当し、チーフ講師として授業にも携わる		
短期日本語研修プログラム(白石大学・東亜大学対象)		2006年27日～7月20日	プログラムディレクターとして授業内容、教材、授業進捗を含むすべてのコースデザインを担当し、チーフ講師として授業にも携わる		
短期日本語研修プログラム(白石大学・東亜大学対象)		2007年6月25日～7月20日	プログラムディレクターとして授業内容、教材、授業進捗を含むすべてのコースデザインを担当し、チーフ講師として授業にも携わる		
第46回外国人による日本語弁論大会		2005年6月18日	約半年にわたり学生を指導し、最高賞である外務大臣賞受賞に導く		
留学生別科主任		1992年～現在	学生募集及び審査を始め、別科授業内容、教材の選定及び作成、カリキュラム作成、さらに別科留学生個別指導等、別科運営に関わるすべてに携わる		
国際交流委員会委員		1992年～現在			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					

**Ⅲ 学会等および社会における主な活動**

2001年4月～現在

日本語学会会員

2001年4月～現在

日本語教育学会会員

所属 留学生別科	職名 講師	氏名 鈴木菊代	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①日本語演習Ⅲ		①2003年9月～12月 2004年9月～12月	①日本語初中級クラスの演習授業で日本語ホームページ作成を取り入れたもの		
②日本語演習Ⅵ		②2005年1月～8月 2006年1月～8月 2008年1月～8月	②日本語上級クラスの演習授業に日本アニメ・漫画を取り入れたもの		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①漢字練習帳		①2007年9月～12月	①『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワーク)学習用漢字教材		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 コミュニティ・コラボレーションセンター	職名 助教	氏名 石黒文子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
施設ケアの質の向上に資する組織管理のあり方に関する研究	単著	2008年1月	修士学位論文(上智大学)		
その他					
「高齢者施設利用支援マネジメントシステム(千代田区版)の開発に関する研究事業」報告書	共著	2007年5月		冷水豊他6名	5頁～8頁 38頁～41頁 44頁～46頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 コミュニティ・コラボレーションセンター	職名 講師	氏名 小島祥美	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
内閣府地域再生計画認定を受けた社会貢献実践の展開	2007年度	<p>CCC開設科目「コミュニティサービスラーニング」(長久手キャンパス)において、履修生とエコマネーを活用した社会貢献について企画・運営案を作成し、愛知県やNPO団体等と協働して内閣府地域再生計画を提出。結果、07年7月4日内閣総理大臣より認定を受け(地域再生計画認定第8号)、全国初による学生企画・運営によるエコマネーを活用したエコライフ推進計画プログラムを展開することができた。</p> <p>これらの成果により、2008年度からは同事業が愛知県事業として位置付けられ、愛知県全域に展開されることになった。</p> <p>加えて、08年1月28日に開催された文部科学省・岐阜県主催「青少年ボランティア活動等促進連絡協議会東海・北陸ブロック」において、同授業実践は「大学生発・環境活動とまちづくりサービスラーニングの実践」として学生が活動報告を行った。</p> <p>なお同実践について、朝日新聞(07年10月31日県内版)、中日新聞(07年11月5日なごや東版)、日経エコロジー(08年2月号)等にて紹介された。</p>	
名古屋市長東区社会福祉協議会と協働した社会貢献実践の展開	2007年度	<p>CCC開設科目「コミュニティサービスラーニング」(星が丘キャンパス)において、同協議会と協働し、地域住民を対象にしたボランティア啓発活動「めいとうボランティア展in愛知淑徳大学CCC」を履修学生が企画・運営。愛知県初による学生企画・運営によるボランティア展開催実施に至った。同企画は、学生と地域(民間団体等を含む)の協働による企画・開催であったことが全国的に高い評価を受け、08年3月9日全国社会福祉協議会主催「大学生のボランティア活動推進セミナー」に招待され、同実践報告を行った(同実践報告は、全国社会福祉協議会発行「ボランティア情報」08年4月号に掲載)。</p> <p>とりわけ、協働した名古屋市長東区社会福祉協議会は、08年1月18日実施された「07年度地域福祉推進実践発表会」において同実践を報告し、会長賞(最優秀賞)を受賞された(同受賞については、名古屋市社会福祉協議会発行「ちいきふくしNEWS」08年2月号No.65に掲載)。</p> <p>なお同実践については、中日新聞(07年7月31日)全国ボランティア活動振興センター「ボランティア情報」(No.371)にて紹介された。</p>	
松阪市人権課と協働した社会貢献実践の展開	2007年度	<p>CCC開設科目「地域活動総合演習Ⅱ」において、松阪市人権課と協働し、同市発行「人権問題啓発冊子」を履修生が作成した。履修生は外国人集住地域をフィールドワーク等を行いながら、同冊子のテーマである多文化共生をわかりやすく解説した文章やレイアウト等を同市へ提案。08年1月に21,000部発行され、同冊子は「入門ボランティア」「コミュニティ・サービスラーニングⅠ」「地域活動総合演習Ⅱ」など全ての担当科目について、学生の状況を踏まえ考慮した副教材を作成し、毎回配布した。松阪市および松阪市教育委員会主催の研修会等にて活用されている。</p>	
2 作成した教科書、教材、参考書			
副教材作成	2007年度		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
●行政関係者対象の研修会			
講師「教育の場における『外国人の子ども』の現状」	2004年8月24日	兵庫県・(財)兵庫県国際交流協会主催「地域国際化を考える研修会2004」(兵庫県神戸市)	
事例報告「行政・民間団体・大学研究者による協働研究・外国人の子どもの教育環境に関する実態調査」	2004年10月23日	自治労自治研中央推進委員会主催「第30回地方自治研全国集会・分科会」(群馬県前橋市)	
パネリスト「外国人の教育について考える 子どもにとってよい教育をめざして」	2005年8月26日	兵庫県・(財)兵庫県国際交流協会主催「地域国際化を考える研修会2005」(兵庫県神戸市)	

講師「不就学実態調査研修会」	2005年9月2日	太田市教育委員会主催「太田市教育委員会研修会」(群馬県太田市)
講師「自治体の在住外国人施策」	2005年11月15日	(財)全国市町村振興協会全国市町村国際文化研修所主催「平成17年度第2回国際化対応コース」(滋賀県大津市)
講師「外国人の教育について考える 岐阜県可児市の取り組み -不就学ゼロをめざして」	2006年8月28日	兵庫県・(財)兵庫県国際交流協会主催「地域国際化を考える研修会2006」(兵庫県神戸市)
講師「不就学実態調査研修会」	2006年7月31日	豊田市教育委員会主催「豊田市教育委員会研修会」(愛知県豊田市)
講師「外国人児童生徒を取り巻く教育環境」	2006年10月18日	松阪市教育委員会人権まなび課主催「人権研修会」(三重県松阪市)
講師「外国人住民と法制度(5)外国人児童生徒の教育」	2006年11月30日	全国市町村国際文化研修所主催「平成18年度第3回多文化共生マネージャー養成コース研修」(滋賀県大津市)
講師「可児市における多文化共生の取り組み」	2006年12月27日	(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構主催「母語教育支援研究部会」(兵庫県神戸市)
講師「在住外国人の子どもの教育について -加茂地区の現状と課題」	2007年1月23日	岐阜県加茂地区小中校長会主催「教育講演会」(岐阜県美濃加茂市)
講師「不就学外国人児童生徒の支援の取り組みについて」	2007年2月20日	兵庫県教育委員会主催「不就学外国人児童生徒支援事業連絡会」(兵庫県神戸市)
講師「外国人児童生徒の人権に係る教育指針」	2007年6月1日	松阪市教育委員会人権まなび課主催「外国人児童生徒教育担当研修会」(三重県松阪市)
コーディネーター「外国人児童生徒への指導で大切にすべきこと」	2007年6月8日	岐阜県教育委員会主催「外国人児童生徒への指導力向上講座」(岐阜県岐阜市)
講師「外国人児童生徒の教育保障に向けた実践」	2007年8月3日	湖南省教育委員会主催「ブレ教室(仮称)開設に係る先進地講師による講演会」(滋賀県湖南市)
講師「外国人児童生徒を取り巻く教育環境」	2007年8月9日	岐阜県教育委員会主催「外国人児童生徒への指導力向上講座」(岐阜県岐阜市)
講師「外国人労働者の子どもの教育」	2007年10月6日	中国帰国生徒・外国籍生徒等指導者ネットワーク主催「交流会」(長野県松本市)
講師「不就学ゼロをめざしたまちづくりへの挑戦 -岐阜県可児市での取り組みから」	2008年2月15日	熊本県・(財)熊本市国際交流振興事業団主催「多文化共生講演会」(熊本県熊本市)
<b>●社会教育に関する研修会</b>		
講師「在住外国人の子どもの暮らしと図書館」	2003年11月19日	大阪府立中央図書館主催「2003年度大阪府図書館司書セミナー」(大阪府大阪市)
パネリスト「外国人の子どもの教育に関する実態調査・協働研究から連携実践へ -岐阜県可児市を事例に」	2005年10月9日	多文化共生センター主催「多文化共生社会の形成をめざす実践と研究・全国フォーラム10年の節目から多文化共生学を考える」(大阪府・国立民族学博物館)
パネリスト「多文化ソーシャルワーカーの役割とは? -岐阜県可児市の歩みから」	2006年2月24日	(財)豊田市国際交流協会・(財)愛知県国際交流協会・豊田市主催「第16回豊田セミナー・多文化ソーシャルワーカーの受け皿と支援の方法-今あるギャップを埋めるには?」(愛知県豊田市)
講師「不就学ゼロをめざして -協働研究から連携実践へ」	2006年3月4日	松阪市多文化共生ネットワーク・松坂市人権推進課主催「松阪市多文化共生ネットワーク連続講演会」(三重県松坂市)
講師「可児市の外国人の子どもの教育環境について」	2006年3月7日	三重県伊賀県民局主催「三重県伊賀県民局協働研究事業多文化共生社会づくり講座」(三重県伊賀市)
パネリスト「多文化共生の学校づくり地域づくり」	2006年6月10日	岐阜大学教育学部主催「岐阜県多文化共生シンポジウム」(岐阜県岐阜市)
講師「不就学ゼロをめざして -協働研究から連携実践へ」	2007年2月9日	松阪市多文化共生ネットワーク・人権推進課主催「人権研修会」(三重県松阪市)
講師「すべての外国人の子どもの教育保障をめざして」	2007年2月17日	呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会主催「外国人児童生徒教育連絡会」(広島県呉市)
講師「多文化共生社会実現のための施策と教育」	2007年6月2日	(特活)松阪地区同和教育推進協議会主催「2007年度総会記念講演」(三重県松阪市)
講師「国際化推進のための施策と教育」	2007年8月17日	(特活)人権NPOセンターゆめネットみえ主催「松阪市職員等人権啓発推進リーダー養成講座」(三重県松阪市)
講師「在住外国人の人権」	2007年9月12日	(特活)人権NPOセンターゆめネットみえ主催「鈴鹿市職員等人権啓発推進リーダー養成講座」(三重県鈴鹿市)
パネリスト「大学生発・環境活動とまちづくり -サービスマーケティングの実践」	2008年1月28日	文部科学省・岐阜県主催「青少年ボランティア活動等促進連絡協議会 東海・北陸ブロック」(岐阜県岐阜市)
講師「外国人児童の教育問題から考える多文化共生の今後」	2008年2月14日	第22回人権啓発研究集会実行委員会主催「世界人権宣言60周年記念 第22回人権啓発研究集会in愛知」第2分科会(愛知県名古屋)
講師「多文化共生社会実現をめざして -外国人児童生徒の現状と課題」	2008年2月19日	松阪市立久保中学校区人権同和教育推進協議会主催「総会・研修会」(三重県松阪市)

事例報告「大学・福祉施設・社協他関係者の協働によるボランティア展の開催」	2008年3月7日	(社)全国社会福祉協議会主催「大学生のボランティア活動推進を考える懇談会」(東京都千代田区)
●ボランティアスタッフ・地域住民対象のシンポジウム等		
パネリスト「外国人等子どもの教育保障」	2003年3月2日	日本語フォーラム関西地区準備会・兵庫日本語ボランティアネットワーク主催「日本語フォーラム2003in兵庫」(兵庫県神戸市)
講師「ボランティア活動とは」	2003年7月26日	可見市国際交流協会主催「日本語教育ボランティア養成講座」(岐阜県可見市)
講師「カナリーニョ教室事業研修会」	2003年7月30日	(財)浜松国際交流協会主催「外国人学習サポート協議会」(静岡県浜松市)
講師「ニューカマー集住地域可見市での取組みー子どもの環境と日本語指導」	2004年3月28日	東海日本語ネットワーク主催「日本語ボランティア研修2003」(愛知県名古屋)
講師「在住外国人の子どもたち:地域社会での取り組みと課題ー子どもの教育環境調査を終えて」	2004年3月26日	地域主体の国際協力・岐阜主催「地域主体の国際協力・岐阜3月例会」(岐阜県岐阜市)
講師「日系外国人の子どもの現状ー岐阜県可見市の実態調査から」	2004年12月16日	Human Rights Network主催「第55回Human Rights Network」(神奈川県川崎市)
講師「岐阜県可見市における実態調査とその後の施策」	2005年6月4日	インターナショナル滋賀主催「人権研修会・外国籍の子どもの教育環境」(滋賀県近江八幡市)
講師「可児子ども調査の成果と課題ー外国人の子どもの教育環境実態調査の2年間」	2005年6月10日	田中宏先生を囲む学習会主催「月例会」(愛知県名古屋)
事例報告「大学・学校現場・NPOとの連携」	2005年8月6日	浜松NPOネットワークセンター主催「外国人教育支援 全国交流会2005」(静岡県浜松市)
講師「在住外国人の子どもの教育は？」	2005年8月23日	可見市国際交流協会主催「多文化共生フォーラム・在住外国人の課題とこれからのまちづくり」(岐阜県可見市)
パネリスト「多文化共生の地域づくりにむけて」	2006年1月15日	(財)岐阜県国際交流センター主催「多文化共生シンポジウム」(岐阜県可見市)
パネリスト「協働で共生・共助の道を」	2006年2月12日	外国人との共生を考える会主催「地域の国際化セミナー in にしお III」(愛知県西尾市)
講師「ばら教室KANI一年のあゆみー調査結果から学習支援事業への取組み」	2006年4月14日	田中宏先生を囲む学習会主催「月例会」(愛知県名古屋)
パネリスト「多文化共生の学校づくり地域づくり」	2006年6月10日	岐阜県多文化共生シンポジウム実行委員会主催「多文化シンポジウム2006」(岐阜県岐阜市)
講師「在日外国人の生徒に関わって」	2006年7月26日	マイリティ教育権訴訟支援協議会主催「高槻マイリティ教育権訴訟連続講座第10回」(大阪府高槻市)
講師「外国人の子どもの不就業ゼロをめざしてー協働から連携へ」	2006年10月6日	NPO法人多民族共生人権教育センター「2006年度第2回多民族共生人権啓発セミナー」(大阪府大阪市)
講師「教育現場の通訳」	2006年10月7日	多言語コミュニティ通訳ネットワーク主催「第1回事例研究会」(大阪府大阪市)
講師「多文化の子どもの教育環境作り」	2006年10月21日	(財)長野県国際交流推進協会・(社)国際日本語普及協会主催「文化庁地域日本語教育支援事業人材育成」(長野県長野市)
パネリスト「公立学校での取り組みから」	2006年11月12日	多民族共生教育愛知フォーラム主催「多民族共生教育フォーラム2006愛知」(愛知県名古屋)
講師「多文化共生へのアプローチー外国人の子どもをとりまく状況」	2006年11月26日	(特活)篠山国際理解センター主催「地球市民入門講座」(兵庫県篠山市)
講師「子どもたちの教育環境を整える」	2007年1月28日	(財)長野県国際交流推進協会主催「日本語を母語としない子どもたち」(長野県上田市)
講師「可児子ども調査の残された課題」	2007年2月23日	田中宏先生を囲む学習会主催「月例会」(愛知県名古屋)
講師「外国人の子どもの教育の現状と課題」	2007年3月10日	小牧市国際交流協会主催「多文化共生事業講演会」(愛知県小牧市)
事例報告「可見市の不就業の子どもたち」	2007年5月12日	全国在日外国人教育研究協議会主催「第19回・全国在日外国人教育研究セミナー・愛知集会」(愛知県名古屋)
講師「外国人の子どもの教育環境に関する実態調査について」	2007年6月15日	越前市国際交流協会主催「講演会」(福井県越前市)
講師「外国籍児童の不就業ゼロをめざしてー可見市の実践から」	2007年6月17日	山梨外国人入国ネットワーク・オアシス主催「総会と講演会」(山梨県甲府市)
コーディネーター「多文化共生の社会づくり」	2007年9月8日	岐阜県教育委員会主催「可茂地区教育のつどい」(岐阜県可見市)
パネリスト「津市における多文化共生のあり方を考える」	2007年11月10日	三重短期大学主催「第36回地域問題研究交流集会公開シンポジウム」(三重県津市)
講師「地域社会での外国人の子どもの現状」	2007年12月22日	(財)愛知県国際交流協会主催「第2回 多文化共生理解講座」(愛知県名古屋)
講師「不就業ゼロをめざしたまちづくりへの挑戦ー岐阜県可見市での取り組みから」	2008年2月16日	熊本県・(財)熊本市国際交流振興事業団主催「第5回生活日本語ボランティア研修会」(熊本県熊本市)

講師「みんなすずかしみん ～外国人住民とのよりよい共生社会の実現に向けて」	2008年3月5日	鈴鹿市人権政策課一ノ宮団地隣保館・児童センター主催「人権・同和問題講演会」(三重県鈴鹿市)			
講師「外国人住民の子どもの教育」	2008年3月12日	(財)人権教育啓発推進センター主催「芝大門人権講座」(東京都港区)			
●大学公開講座等					
講師「外国人とすずめるまちづくり」	2003年2月20日	神戸大学主催「2002年度神戸大学ボランティア講座」(兵庫県神戸市)			
講師「行政・NGO・大学研究者による協働研究調査 外国人の子どもの教育環境」	2003年12月14日	岐阜大学総合情報メディアセンター生涯学習システム開発研究部門主催「シリーズ現代的課題と生涯学習在日外国人の生活と学習－国際化と生涯学習その2」(岐阜県岐阜市)			
講師「外国人の子どもの教育環境」	2004年12月17日	横浜市立大学図書館主催「情報探索論・公開授業」(神奈川県横浜市)			
パネリスト「在日外国人の教育問題とその改善に向けた取り組み」	2006年11月28日	中部大学人間安全保障研究センター主催「第2回多文化共生とジェンダー平等研究会」(愛知県名古屋)			
パネリスト「在日外国人の教育問題を総括する」	2007年1月10日	中部大学人間安全保障研究センター主催「第3回多文化共生とジェンダー平等研究会」(愛知県名古屋)			
●海外におけるシンポジウム					
事例報告「労働者師弟の教育問題(日本における外国人の子どもの教育環境)」	2005年9月10日	Instituto de Solidariedade Educacional e Cultural (文化教育連帯協会・日伯研究者協会)主催「Simpósio Internacional de Educação Comparada Brasil-Japão (日伯比較教育国際シンポジウム)」(ブラジル・サンパウロ)			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
CCC運営委員	2006年9月～				
環境に関する講演会実行委員	2008年1月～				
アクティブラーニング・スタジオ連絡協議会	2008年度～				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
日本の中の外国人学校	共著	2006年11月	明石書店	月刊「イオ」編集部編	214頁～219頁
外国人・民族的マイノリティ人権白書	共著	2007年9月	明石書店	外国人人権法連絡会編	146頁～157頁
論文					
多民族文化社会における外国籍小児に対する教育行政施策に関する研究	共著	2003年11月	大阪大学大学院ボランティア人間科学紀要(第4号)	小島祥美、根岸親、中村安秀、正田喜久	73頁～84頁
世代を超えた子どもへの母語学習の意義－日系南米コミュニティの活動とニーズから検討[査読論文]	単著	2004年3月	日本移民学会・移民研究年報(第10号)		121頁～132頁
外国人の子どもの教育－不就学の現状から提言へ	共著	2005年2月	財団法人名古屋国際センター設立20周年記念論文集「国際交流・国際協力・多文化共生活動の現状と課題」	ブイ・トルン・小島祥美(監修:武者小路公秀)	55頁～62頁
“A medida adotada pelo Município de Kani na Província de Gifu, para atingir o número zero de crianças fora das Escolas – partindo da “pesquisa conjunta” para a “prática da coligação” elaborado por pesquisadores de Organização independente”	共著	2005年9月	Simpósio Internacional de Educação Comparada Brasil-Japão.	KOJIMA, Yoshimi TANAKA, Nobuharu TAKAI, Nobuyuki 他5名	ポルトガル語と日本語の2言語により執筆
不就学ゼロをめざして－可見市・外国人の子どもの学習権保障の取組み	単著	2006年1月	自治研中央推進委員会事務局「月刊自治研」(2006年1月号)		56頁～63頁

ボランティア団体・行政・研究者による協働調査とその意義 - 岐阜県可児市における外国人の子どもの教育環境に関する実態調査の事例から [査読論文]	共著	2006年2月	国際ボランティア学会・ボランティア学研究(第6号)	小島祥美・中村安秀	119頁～135頁
外国人の子どもの就学状況に関する変動 - パイロット地域・岐阜県可児市における実態調査から [査読論文]	共著	2006年3月	日本移民学会・移民研究年報(12号)	小島祥美・中村安秀	167頁～177頁
日本語指導が必要な外国人児童生徒を取り巻く教育課題 - 岐阜県可児市を事例として [査読論文]	共著	2006年3月	名古屋多文化共生研究会・多文化共生研究年報(第3号)	小島祥美・中村安秀	49頁～67頁
外国人の子どもの教育環境と進路の関連 - パイロット地域・岐阜県可児市における就学実態調査から [査読論文]	共著	2006年3月	東京学芸大学国際教育センター・国際教育評論(第3号)	小島祥美・中村安秀	18頁～28頁
外国人の子どもの就学と不就学に関する研究[査読論文]	単著	2006年3月	大阪大学大学院 博士学位論文		全216頁
すべての外国人の子どもの教育権が保障される社会をめざして - 岐阜県可児市における行政・民間団体・研究による協働研究から連携実践のプロセス	単著	2007年11月	解放出版社「部落解放」(589号)		40頁～51頁
外国人の子どもの教育権 - 岐阜県可児市の事例から	単著	2008年3月	国際保健医療学会・国際保健医療(第23巻第1号)		3頁～8頁
その他					
●学会発表					
在日外国人の医療に関わる負担に関する調査		2003年3月1日		第21回日本国際保健医療学会西日本大会(大阪大学) 口頭発表:横山雅子・金宣吉・小島祥美/他2名	
外国人の子どもの教育環境実態調査 - 行政・NGO・研究者による協働研究調査・岐阜県可児市の試み		2004年2月1日		第19回日本国際保健医療学会東日本地方会(東京大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀・横尾明親	
外国人児童生徒に対する教育の現状とニーズ - 群馬県太田市における取り組みから		2004年2月1日		第19回日本国際保健医療学会東日本地方会(東京大学) 口頭発表:根岸親・小島祥美・中村安秀・李節子・重田政信	
外国人の子どもの教育環境 - 行政・NGO/ NPO・研究者による協働研究調査から		2004年5月1日		第25回異文化間教育学会(立命館大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀・横尾明親	
外国人の子どもと初等教育の保障 - 岐阜県可児市における行政・NPONGO・研究者による協働研究調査から		2004年9月1日		第56回日本教育社会学会(東北大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀・横尾明親	
外国人の子どもの教育環境と不就学 - 岐阜県可児市における行政・NGO/NPO・研究者による協働研究調査から		2004年10月1日		第10回日本特別ニーズ教育学会(愛知県立大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀・横尾明親	
“The change of the situation of enrollment of foreign children living in Japan. -A pilot study for the educational environment of foreign children in Kani- City, Japan”.		2004年10月1日		XII WORLD CONGRESS OF COMPARATIVE EDUCATION SOCIETIES. Conference in Havana, CUBA 口頭発表:KOJIMA, Yoshimi NAKAMURA, Yasuhide YOKOO Akichika	
行政・民間団体・研究者による協働研究の意義 - 岐阜県可児市における外国人の子どもの教育環境に関する実態調査の実践から		2005年2月1日		第5回国際ボランティア学会(大阪大学) ポスター発表:小島祥美・中村安秀・横尾明親・中村裕	
外国人の子どもの多様な就学状況と不就学の要因		2005年9月1日		第2回日本子ども学会(東京大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀	
外国人の子どもと「就学・不就学」		2005年11月1日		第18回日本保健福祉学会(東京大学) 口頭発表:小島祥美・中村安秀	
在日外国人の保健医療 - 多文化共生時代に求められるもの		2007年10月1日		第22回日本国際保健医療学会全国総会(大阪大学) ワークショップ:李節子・重田政信・小島祥美・Herrera Lourdes・レシャード カレド/他3名	
●一般雑誌等					
在住外国人の子どもの教育環境について - 多文化社会になりつつある可児市での調査活動から	単著	2003年8月	可児市国際交流協会広報誌「かけはし」(第8号)		2頁
外国人の子どもの教育環境は?	単著	2004年5月	可児市国際交流協会広報誌「かけはし」(第10号)		2頁

外国人の子どもの教育環境に関する実態調査(子ども調査)を1年行って	単著	2004年7月	東海日本語ネットワークニュース(第31号)		6頁
多様化・国際化する婚姻と子ども	単著	2005年5月	可児市国際交流協会広報誌「かけはし」(第13号)		2頁
書評「多文化サービス入門」 バリア(障がい)のないまちづくり 「情報館」	単著	2005年5月	図書館と日本在住外国人を むすぶ人・言葉・生活・情報 の通信「むすびめ2000」(第 51号)		18～19頁
「不就学ゼロ」をめざした岐阜県 可児市の取り組み	単著	2005年11月	図書館と日本在住外国人を むすぶ人・言葉・生活・情報 の通信「むすびめ2000」(第 53号)		8～10頁
特集デカセギ 可児市の取り組み	単著	2005年12月	Centro Brasileiro de Lingua Japonesa(ブラジル日本語 センター)「Cultura Japonesa」(ブラジル発行 No.4)		7頁
“El desarrollo comunitario donde los hijos de los extranjeros puedan estudiar de manera segura -apuntando a cero en inasistencia”	単著	2006年1月	Convenio KYODAI(スペイン 語雑誌)		60頁～61頁
「不就学」の外国籍の子どもたち	単著	2007年4月	在日韓国人問題研究所 「RAIK通信」(第101号)		5頁～11頁
すべての外国人の子どもの教育 権が保障される社会をめざして 一岐阜県可児市における協働 研究の挑戦と実践から学んだこ	単著	2007年12月	在日本朝鮮人権協会「人 権と生活」(2007年冬 Vol.25)		40頁～46頁

### ● 研究報告書

行政・民間団体・研究者による協 働研究・調査「外国人の子どもの 教育に関する実態調査」岐阜県 可児市の試み 中間報告書(前 期調査のまとめ)	共著	2003年7月	可児市、可児市国際交流 協会	小島祥美・中村安秀・横尾明 親	全52頁
共に育むふれあい交流都市を めざして 一岐阜県可児市の試 み	共著	2004年3月	可児市、可児市国際交流 協会	小島祥美・中村安秀・横尾明 親	全129頁
外国人児童生徒に対する教育 の現状とニーズ 一群馬県太田 市における取り組みから	共著	2004年3月	平成15年度厚生労働科学 研究(子ども家庭総合研究 事業)報告書	根岸親・小島祥美・中村安 秀・李節子・重田政信	588頁～613頁
外国人の子どもの教育環境に関 する実態調査 一岐阜県可児市 をパイロット地域とした行政・民 間団体・研究者による協働研究	共著	2004年3月	平成15年度厚生労働科学 研究(子ども家庭総合研究 事業)報告書	小島祥美・中村安秀・横尾明 親/他8名	614頁～700頁
外国人の子どもの教育環境に関 する実態調査 一行政・民間団 体・研究者による協働研究・調査 2003年度調査の補充・追加報告 書	共著	2004年3月	可児市国際交流協会	小島祥美・中村安秀・横尾明 親	全76頁
外国人生徒の文化理解と母語 保障	共著	2006年3月	2003-05年度科学研究費補 助金基盤研究(c)(1)研究成 果報告書「言語的マイノリ ティ生徒の母語教育に関す る日米比較研究」	小島祥美・林伍彦	53頁～60頁

### III 学会等および社会における主な活動

2001年5月～	独立行政法人国際協力事業団「国際緊急援助隊医療チームJMTDR」調整員
2006年度	松阪市教育委員会「松阪市外国人等児童生徒の人権に係わる教育指針策定委員会」アドバイザー
2006年度～	民間団体「外国人学校・民族学校の制度的保障を実現するネットワーク」運営委員
2007年3月1日～2008年3月12日	「第11回IAVEアジア太平洋地域ボランティア会議2007in愛知」実行委員
2007年6月8日～	岐阜県教育委員会委嘱「明日の岐阜県教育を考える県民委員会」委員
2007年6月22日～2008年3月14日	兵庫県教育委員会委嘱「兵庫県外国人児童生徒就学支援連絡会」委員
2007年10月1日～2008年3月31日	財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構委嘱「多文化共生の教育・アイデンティティ育成に関する研究」研究会委員

2007年度～	愛知県委嘱「エコマナー事業地域普及検討会」委員
2007年度～	広島県呉市教育委員会「呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会」アドバイザー
2007年度	岐阜県可児市委嘱「可児市多文化共生センター愛称募集選定委員会」委員
2008年2月22日～	特定非営利活動法人交流ネット理事
2008年度～	社会福祉法人名東区社会福祉協議会「第2次地域福祉活動計画作業部会」委員
2008年5月22日～	名古屋市委嘱「名古屋市人権啓発等活動拠点検討委員会」委員
その他	
2001～03年度	厚生労働科学研究子ども家庭総合研究事業「多民族文化社会における母子の健康に関する研究」(主任研究者:牛島廣治)研究協力者
2003～05年度	科学研究費補助金基盤研究「言語的マイノリティ生徒の母語教育に関する日米比較研究」(研究代表:太田晴雄)研究協力者
2005年度	厚生労働省国際医療協力研究委託事業「保健医療協力プロジェクトの持続可能性に関する学際的研究」(主任研究者:中村安秀)研究協力者
2006(平成18)年度研究助成	財団法人東海学術奨励会「在住外国人が置かれた教育環境に関する研究」
2007年度～現在	科学研究費補助金基盤研究「日本と南アメリカにおけるリージョナル協働と国際人口移動 -人間安全保障の展望」(研究代表者:佐藤誠)研究分担者
2007年度～現在	大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点・在日外国人を取り巻くコンフリクトを緩和するシステム構築」(代表:中村安秀)連携研究者



所属 キャリアセンター	職名 講師	氏名 小林 三太郎	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
ディスカッションを取り入れる			大人数講義においてディスカッションを実施し、考えを深めた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
2008年インターンシップガイダンス		2008年5月9日	インターンシップ送出事例・取り組みに見る成果と課題		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
「学生のワークモチベーションと キャリア教育」	共著	2008年9月	愛知淑徳大学コミュニティコ ラボレーション	小林 三太郎 上原衛	
「インターンシップにおける動機 づけ衛星要因」	共著	2008年9月	愛知淑徳大学コミュニティコ ラボレーション	上原 衛 小林 三太郎	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2006年10月～現在		日本病院管理学会			
2007年9月～現在		日本インターンシップ学会			
2008年4月		こども環境学会 実行委員			

所属 健康スポーツ教育センター	職名 講師	氏名 門間 博	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
・授業に関するアンケート (愛知淑徳大学授業評価アンケート)		2005年～	授業評価アンケート結果をもとに、より良い授業になるよう授業内容の改善に取り組んでいる。		
・学生とのコミュニケーション		2005年～	授業の中で学生とのコミュニケーションをできるだけ多く取って、学生の生の声を聞くことができるように取り組んでいる。		
・補助教材		2005年～	補助教材を作成し、活用することで興味・関心をより多く持ってもらえるように心がけている。		
・小レポートの実施		2005年～	レポートを課すことで、授業に関して意識を高めてもらえるように心がけている。		
・映像教材の活用		2005年～	映像教材を活用することによって、違った観点から物事に関心を持ってもらえるようにしている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
中京大学スキー実習		1993年～	中京大学体育学部のスキー実習で実技指導を担当(現在に至る)		
南山大学スキー実習		1998年～	南山大学のスキー実習で実技指導を担当(現在に至る)		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
(学会発表) ①Bench Press Maximal Power of College Players	共	2007年8月	88オリンピック記念2007国際スポーツ科学学術大会	村本名史, 門間博, 鶴原香 世子, 松田秀子	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1986年4月～現在		日本体育学会会員(現在に至る)			
1986年4月～現在		日本バイオメカニクス学会会員(現在に至る)			
1989年4月～現在		トレーニング科学研究会会員(現在に至る)			

所属 健康スポーツ教育センター	職名 助教	氏名 村本名史	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
小テストの実施		2007年4月～	授業の理解度を調べるため、小テストを実施した		
感想・質問用紙の提出		2007年4月～	授業後に感想や質問を書いて提出させ、次回の授業で質問に対する回答を行った		
試合後におけるミーティングの実施		2007年4月～	各チームにミーティングを行わせ、試合の反省・課題・改善点などを記録用紙に記入させた		
映像教材の使用		2007年4月～	学生の興味・関心を高めるために、映像教材(DVD)を使用した		
授業アンケートによる授業の改善		2007年4月～	授業アンケートの結果を受けて、授業内容を工夫した		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Power Pointを用いた健康に関する教材		2007年	健康、運動、栄養、休養、身体の構造・機能、病気、発育・発達、加齢・老化に関する教材を作成した		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
ベンチプレスにおける男子大学生の最大挙上パワー	共著	2006年11月	東海体育学会大会抄録集54号	水藤弘史、鶴原香代子、松田秀子、布目寛幸、池上康男	37頁
その他(口頭発表)					
Bench Press Maximal Power of College Rugby Players	共著	2007年8月	2007 International Sport Science Congress	Hiroshi Kadoma, Kayoko Tsuruhara, Hideko Matsuda	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1996年～現在	日本体育学会会員				
1997年～現在	日本運動生理学会会員				
1998年～現在	日本体力医学会会員				
1999年～現在	日本スキー学会会員				
2000年～現在	European College of Sport Science会員				
2004年～現在	名古屋市空手道連盟評議員				
2007年～現在	全国大学体育連合東海支部幹事				
2008年～現在	日本バイオメカニクス学会会員				

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 <b>ARNOLD, Brent C.</b>	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
All Class handouts and resources used in class activities.	2008年4月4日	Identifying sound and mouth shape differentials 1 and 2 (L,R,B,V,P,F,Th), Treasure Hunt, Communication activities (L,R,B,V,P,F,Th) 1 and2.			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Lecture - Marsden High School - ESL department	2008年	Sound recognition and speech with student from 'ESL' English as a Second Language backgrounds			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
Overseas Study Program - Canberra University	2008年	Course preparation, student interviews and course consultations for August and february Programs			
Rugby Gasshuku - Australia	2008年2月3日	Organised Trip to Australia for the rugby club, cultural experiences and developed programs with the rugby clubs and foreign language departments at University of Central Queensland, University of Sothern Queensland and Griffith University			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
Rugby Club		Co-ordinte and Coach the Aichi Shukutoku Rugby Club			

所属 外国語教育センター	職名 教授	氏名 EASLEY, Keith	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
			Questionnaires, other student feedback, education publications, and experience		
2 作成した教科書、教材、参考書					
			Lectures to Japanese High School teachers on teaching literature in English 1996-2001.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Dickens and Bakhtin: Authoring in "Bleak House"	共著	2004年	Dickens Studies Annual Volume 34		185頁～232頁
Self-Possession in "Great Expectations"	共著	2009年	Dickens Studies Annual Volume 39		48頁
論文					
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 WOODMAN, Jo-Anne M.	大学院における研究指導担 当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
A) PEDAGOGICAL PRINCIPLES	2004年4月1日	A) TEACHING METHODS APPROPRIATE FOR THE SUBJECT.	
B) BY COUPLING THE COURSE'S AIMS AND OBJECTIVES WITH THE STUDENTS' INTERESTS AND	2004年4月1日	B) EVERYTHING IS DESIGNED TO ENGAGE THE STUDENTS.	
C) EMPHASIS IS PLACED ON CONTEMPORARY LANGUAGE AND CULTURE.	2004年4月1日	C) "REAL" ENGLISH IS STRESSED e.g. slang, idioms and colloquial expressions.	
D) QUESTIONNAIRE RESULTS	2004年4月1日	D) RESULTS FROM BOTH UNIVERSITY AND TEACHER CONDUCTED SURVEYS ARE USED.	
2 作成した教科書、教材、参考書			
All handouts and resources used in class activities (except for newspaper articles etc)	2004年4月1日	1. PICTORIAL RESOURCES RELATED TO AUSTRALIAN CULTURE, HISTORY, FAMOUS PEOPLE ETC. 2. DISCUSSION/DEBATE MATERIALS COVERING A WIDE RANGE OF TOPICS AND ISSUES. 3. JAPANESE CULTURE CARDS/VIDEOS.	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
Lecture - CWA meeting _ Bowral N.S.W	2006年1月30日	Explained about Japanese Food and Food culture	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
A) FOREIGN LANGUAGE EDUCATION CENTER.		A) CURRICULUM DEVELOPMENT AND COURSE CO-ORDINATION	
B) OVERSEAS STUDY PROGRAM(AUSTRALIA).		B) CONSULTATION WITH STUDENTS.	
Internship programme (U.K)	2006年8月～2007年8月	Designed and coordinated the entire one-month programme	
<b>II 研究活動</b>			
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称
			編者・著者名 (共著の場合のみ記入)
			該当頁数
著書			
論文			
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>			

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 太田晶子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
「ASU TOEIC I」担当(TOEIC指導に特化した授業)		2003年4月～現在	学生のTOEICスコア向上におおいに貢献し、授業評価でも高い支持を得た。何度もリピートして履修する学生も多い。		
英語コミュニケーション2 (Listening I)		2005年4月～7月	English pop songsを利用したListening指導が、学生による授業評価で高い評価を得た。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
2005年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」		2005年4月～	独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築		
2005年度研究助成 特別教育研究		2005年4月～	全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充		
2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム「仕事で英語が使える日本人の育成」		2005年8月10日 採択	多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発～		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
評論					
Review of "Identity and Communication" By B.Saint-Jacques'	共著	2004年3月	Language & Literature 1 3号	愛知淑徳大学大学院英文学会	55頁～59頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
学会活動					
2001年4月～現在		中部地区英語教育学会 会員			
2007年10月～現在		日本英文学会中部支部 会員			
2001年4月～現在		外国語教育メディア学会(LET) 会員			
2005年4月～2006年3月		外国語教育メディア学会(LET) 会計監査			
2001年4月～現在		日本児童英語教育学会(JASTEC) 会員			
社会活動					
2005年9月～2007年8月		津田塾大学同窓会東海支部 書記			

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 大森信徳	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
ディア教材の使用ヒヤリング力の向上を目的とした課外講座(週に1回昼休みの時間を利用)教科書理解の補助教材としてドリルを作成映画鑑賞		2004年4月～現在			
2 作成した教科書、教材、参考書					
中国語会話34(翻訳)HSK中等高級(A)(翻訳)同時通訳入門(翻訳)		2004年4月～2006年			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
図説文明史7 宋 成熟する文明(翻訳とコラム執筆)	単著	2006年3月20日	創元社		
論文					
薛紹彭と米芾一評価の浮沈の 分岐点をめぐって	単著	2003年12月	『中国文学研究』第24期早 稲田大学中国文学会		227頁～239頁
蔡襄の書の周辺一欧陽脩との 交友をめぐって	単著	2006年3月15日	『愛知淑徳大学論集』第31 号愛知淑徳大学文学部・文 学研究科篇		17頁～31頁
趙明誠『金石録』の欧陽脩『集古 録』引用に見る撰述態度一書法 に関する記事を中心として一	単著	2006年12月1日	『中国文学研究』第32期早 稲田大学中国文学会		36頁～52頁
虎丘劍池題字考	共著	2007年3月1日	『中国古籍流通学の確立 一流通する古籍・流通す る文化』(アジア地域文 化叢書6)中国古籍文化研 究所 編		
訳注					
成都近郊の祠堂に見る「対聯」 三蘇祠の対聯	単著	2003年12月	『中国古籍文化研究』第1号 中国古籍文化研究所		91頁～96頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
課程博士(文学)学位取得		2007年2月6日 早稲田大学大学院文学研究科			



所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 小沢 茂	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
英語コミュニケーション4		2005年4月～	インターネット教材(ALC NetAcademy, ALC NetAcademy2)を用いたリーディングの指導		
Traditional Arts in Japan, Central Japan		2006年4月～	e-Learningシステム“Blackboard”を利用したレポート提出・評価、授業アンケートシステムの構築		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
2005年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」		2003年4月1日	独自データベース(DBを活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築(2004年度・05年度も同課題名で採択)		
2005年度研究助成 特別教育研究		2005年4月1日	全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充(2006年度まで継続)		
2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム「仕事で英語が使える日本人の育成」		2005年8月10日 採択	多文化共生を目指した発達型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発～		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
“The Symbolic Value of ‘The Tollund Man’”	単	2003年10月	IVY 36(名古屋大学英文学会)		45頁～61頁
“Bog Bodies as the Hieroglyph: Seamus Heaney’s ‘Bog Poems’”	単	2004年10月	IVY 37(名古屋大学英文学会)		1頁～25頁
Brian Friel: Molly Sweeney の寓意性	単	2005年12月	Review of World Theatre Arts 3		8頁～17頁
「暴力の桂冠詩人か物語へのレジスタンスか:ヒーニーとフリールの場合」	単	2006年1月	『愛知学院大学 語研紀要』第31巻		201頁～218頁
“From the Visible to the Invisible: The Bottleneck in Heaney’s Later Works”	単	2006年3月	IVY 38(名古屋大学英文学会)		45頁～67頁
“The Fifth Province in Brian Friel’s Wonderful Tennessee”	単	2006年12月	Review of World Theatre Arts 4		13頁～26頁
「歴史が物語になるとき: Brian FrielのFreedom of the Cityに見る“Histoire”」	単	2007年3月	『愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇』第7号		129頁～140頁
Neither Fossilized nor Assimilated: Narratives in Brian Friel’s Translations	単	2008年3月	『愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇』第8号		89頁～98頁
その他					
「トールンの男は自発的な殉教者なのか」(口頭発表)	単	2003年9月	日本イェイツ協会		
「Seamus Heaneyの‘Punishment’におけるscapegoatのイメージ」(口頭発表)	単	2003年10月	日本英文学会中部支部		
「シェイマス・ヒーニーの『クラップの最後のテープ』解釈」(研究ノート)	単	2003年12月	Review of World Theatre Arts 1		59頁～66頁

「Seamus Heaneyの ‘Punishment’における scapegoatのイメージ」(研究ノート)	単	2004年9月	『イエイツ研究』第35巻	23頁～33頁
「シェイマス・ヒーニー『トロイの癒し』」(翻訳)	単	2004年12月	Review of World Theatre Arts 2	61頁～148頁
「Seamus HeaneyのThe Cure at Troyにおける原作テーマの変奏について」(口頭発表)	単	2005年10月	日本英文学会中部支部	
“Translations in / of The Cure at Troy” (口頭発表)	単	2006年9月	IASIL Japan	

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2000年4月～現在	名古屋大学英文学会
2000年5月～現在	日本英文学会
2000年9月～現在	日本イエイツ協会
2000年10月～現在	日本英文学会中部地方支部
2002年11月～現在	アイルランド文化研究会
2003年1月～現在	世界演劇研究会
2005年7月～現在	大学英語教育学会
2006年9月～現在	IASIL Japan

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 河井昭乃	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
オンライン教材の活用	2004年4月～現在	教科書に基づいた独自オンライン教材を活用し、パソコンを利用することで自主的な学習に取り組むことを容易にするとともに、中国語初学者がつまづきがちな正しい発音の理解・習得を目指した。	
補助資料の作成	2004年4月～現在	教科書だけでは不足する部分について補助プリントを作成し、学生の理解の工場を目指した。パソコンで自由に学内サーバにアクセスできる語学教育棟の環境を活かし、補助資料の一部は学内サーバにのせることで、学生が各自の学習に応じて自由にアクセスし活用することが可能になるようにした。	
授業アンケートの結果を踏まえた授業改善	2004年12月～現在	オンライン教材の活用度合についての意見を受け、オンライン教材の課題提出を課すことで授業時のみにとどまらない自発的な学習の取り組みを目指した。また聴解力アップを希望する声が多かったことクラスでは、短文聴解小テストを毎回の授業で実施した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
『HSK初中等コースA』『HSK初中等コースB』『中国語会話3・4』『中国語読解3・4』	2005年3月1日	全学中国語委員会の一員として、同委員会編纂による上記4教科書の査読・校正に参加	
『HSK初等A』『HSK初等B』	2006年9月1日	全学中国語委員会の一員として、同委員会編纂による上記2教科書の査読・校正に参加	
『HSK中等上級A』『HSK中等上級B』	2007年2月1日	全学中国語委員会の一員として、同委員会編纂による上記2教科書の査読・校正に参加	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
全学中国語教育委員会における活動	2004年4月～現在	全学中国語教育委員会において、2004年度より開始した全学向け言語活用科目としての中国語教育の方針、次年度使用の本学オリジナル教科書の内容、学習相談やホームページの企画、能力別クラス編成のための統一試験の指針、等の議論・検討を重ねた。	
<b>II 研究活動</b>			
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称
			編者・著者名(共著の場合のみ記入)
			該当頁数
著書			
論文			
「道不拾遺」考	単著	2004年3月	『金城学院大学論集』通巻第203号人文科学編第37号
156頁～136頁			
その他			
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>			

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 金 昭鎧	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
・コミュニケーション活動の重視	2005年度 前・後期	・入門クラスでは毎回全員にできるだけ多くの発言の機会を与え、発音のチェックや会話能力の向上を目指している。	
・学習内容の暗記練習	2005年度 前・後期	・その日学習した内容を授業の最後に暗記させる。また、前時間の復習を兼ねて、毎時間小テストを実施し、授業内容の定着を図っている。	
・四技能中心の教育強化	2006年 前期	・話す、聞く、書く、読むという語学学習の基本的な四技能を徹底的に強化した。 ・基本事項を説明した後、基本動詞を反復練習、活用に慣れるようし、それを利用しながら、質問の答えを会話にまでつなげ、会話練習後は作文を作ってみる、という一連の手順で授業を進めた。	
・韓国の映画やドラマ等の映像を積極的に活用	2007年 前期	・動詞の過去形、連体形など、学習者が形に慣れにくい項目に関して、韓国のドラマや映画の場面を積極的に活用しながら、授業内容の定着を図った。 ・映像を見せた後ベアーになり、台詞の練習をさせ、発表させた。 ・ドラマの映像で学生の関心を高め、学習の動機誘発を促すこともねらいであった。	
・韓国の衣・食・住及び韓国の生活がわかる写真集を積極的に活用	2007年 後期	・教科書の内容に合わせて学生に韓国人の生活文化を知ってもらおうと写真を活用した。 ・教科書に食べ物の内容があれば、それに対応する写真を見せた後、韓国式の食事のマナー、簡単な韓国料理の作り方などを紹介することにより学生の関心を引き、学習の動機誘発を促すことも目標とした。その他、韓国の民族衣装や伝統家屋について、また誕生日の過ごし方など、生活文化も紹介した。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
・ハングル入門用のフラッシュカード	2005年度 前・後期	・ハングル文字習得のためのフラッシュカード	
・ハングル入門用の磁気カード	2005年度 前・後期	・ハングル文字の子音、母音を色分けした磁気カード	
・イラスト付きの基本動詞・形容詞・名詞表	2005年度 前・後期	・基本動詞・形容詞・名詞をイラストで分かりやすく説明したプリント	
・韓国語能力試験対策用の語彙・文法リスト	2005年度 前・後期	・レベルごとに語彙と文法事項をまとめ、学習の目安とするもの	
・韓国語入門及び初級用の必須の動詞、形容詞、名詞各100個ずつ用のフラッシュカード	2006年度 前・後期	用言、及び名詞の単語自体の定着と活用形の練習にも積極的に活用した。クラス全員での活用練習後、一人ずつ当てることにより、活用の定着と単語習得の両面での活用を目指した。	
・ハングル入門用の文法活用用の30種類のフラッシュカード(各種の助詞、現在終止形、過去終止形、未来終止形、連体形、希望の表現などを含む)	2006年度 前・後期	文法項目のフラッシュカード作成により、学習内容を立体的に提示した。学生が短時間で文法の活用を習得できるようにするためのものであり、活用形の定着が容易にできるので、会話練習にも学生が自信をもって発言できる利点がある。	
・品詞別に色分けした学習単語カード	2007年度 前・後期	学習する単語のカードを最初の学習導入期に提示し、クラス全体で読む。 それにより教室でのウォーミングアップを図った。復唱によりある程度単語が定着すると会話練習の時、文章の応用能力が高くなる。	
色分けした不規則用言用の単語カード	2007年度 前・後期	学習者の定着度、及び理解度が顕著に低下する不規則用言。 これらの項目に青、赤などのマークをつけ、視覚的に不規則がわかるように試みた。	
各種のイラスト付きの単語集	2007年度 前・後期	なじみのない語彙を効率よく増やすために、趣味、職業、家族関係、位置関係、身体、日付、曜日、場所、日常生活用品などのイラスト付きの単語集を作成、配布し学生が楽しく単語の暗記をできるようにした。	

拡張表現を図形化したプリント	2007年度 後期	教科書に提示してある文法項目は単文が終わる場合が多い。たとえば、「一かもしれません」などの表現。まずは、基本の「一かもしれません」を練習し、その後、「一かもしれない」を基本に、徐々に「一かもしれない+ので」、「一かもしれない+ですが」などの拡張表現を図形化しませ、学生が自ら複文を作れるようにし、より高度な表現を作れるようにした。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
名古屋高年大学 講演	日本で暮らしてみ、日韓文化比較(2008年2月6日、2月20日)				
天白生涯学習センター 講演 (各金曜日6回講座)	お隣の国・韓国のことばと文化を学ぼう(2007年8月3日～9月7日)				
名古屋高年大学 講演	日本で暮らしてみ、日韓文化比較(2007年2月7日、2月21日)				
NTTユーザー協会愛知支部 講演	韓国と韓国文化を知ろう(2006年9月20日)				
熱田生涯学習センター 講演	魅力的な東アジア～韓国・台湾と日本 韓国篇 全3回(2006年2月21日、28日、3月7日)				
名古屋高年大学 講演	日本で暮らしてみ、日韓文化比較(2006年2月1日、7日)				
NTTユーザー協会愛知支部 講演	韓国語と韓国文化を知ろう(2005年9月)				
名古屋市女性会館主催講座 講演	アジアに生きる女性たち・韓国(2004年11月27日)				
港生涯学習センター 講演	韓国語の挨拶、歌やゲームを子供たちに教える(2004年11月27日)				
熱田生涯学習センター 講演	韓国語の文字、衣食住、文化、遊びを子供たちに教える(2004年6月19日)				
熱田生涯学習センター 講演	韓国語入門(全7回、2004年2月6日～3月17日)				
名古屋市民大学 講演	日本語ボランティア養成講座・「外から見た日本と日本語」(2003年6月)				
4 その他教育活動上特記すべき事項					
愛知淑徳大学公開講座講師	2006年3月2, 9, 16, 23, 30日	「映画で学ぶ韓国語」全6回			
愛知淑徳大学公開講座講師	2006年4月13日～7月6日(各木曜日12回講座)	楽しい韓国語 初級			
愛知淑徳大学公開講座講師	2006年8月24日～9月28日(各木曜日6回講座)	旅行韓国語会話			
愛知淑徳大学公開講座講師	2006年10月3日～12月19日(各火曜日12回講座)	楽しい韓国語 初級1			
愛知淑徳大学公開講座講師	2007年3月9日～4月3日(各木曜日6回講座)	ドラマで学ぶ韓国語			
愛知淑徳大学公開講座講師	2007年4月5日～12月19日(各火曜日12回講座)	楽しい韓国語 初級2			
愛知淑徳大学公開講座講師	2007年8月9日～9月20日(各木曜日6回講座)	文化のキーワードで学ぶ韓国語 第1弾			
愛知淑徳大学公開講座講師	2007年10月5日～1月18日(各金曜日12回講座)	韓国語中級			
愛知淑徳大学公開講座講師	2008年2月14日～3月27日(各木曜日6回講座)	文化のキーワードで学ぶ韓国語 第2弾			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
日本語と韓国語、日本人と韓国人	単著	2005年3月	愛知大学豊橋語学教育研究室、『LLニュース』No.30		2頁～4頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 金 賢珍	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①主に1,2年生を対象に「韓国語・朝鮮語入門」における発音の練習をはじめ、書く、読む、聴く、話す能力の習得を中心に行う。授業は「授業アンケート」を踏まえて常に改善を目指して副教材を追加したり、進め具合を調整したりしている。		①2007年4月～	①は初めて韓国語に接する学生に文字とその文字の発音の仕方から始まる授業であるため、書き順と発音のことを丁寧にかつ具体的に教えながら授業を進めている。授業では、学生自身が書きながら、声を出して発音しながら、耳で聞くという反復練習を通じて行っている。文字と発音に慣れてきたら、次は韓国語文法の練習で決まり文句の挨拶言葉をはじめ、基本文法事項のことを具体的に説明する。その際には、基本語を中心に活用の反復練習とそれを使った文作り練習を通じて学習の効果を上げている。		
②「韓国語・朝鮮語入門」の終わった学生を対象にして、会話中心の「韓国語会話」の授業、「韓国語能力試験」の授業を行う。さらに、韓国語の文章を読む能力を育てるため「韓国語読解」の授業を行う。授業は「授業アンケート」と授業中の学生のコメントなどを踏まえて常に改善を目指して副教材を追加したり、進め具合を調整したりしている。		②2007年4月～	②は①の後、「会話」「試験対策」「読解」の授業を行う。「会話」の授業は、実際の場面を想定して学生と先生のペアまたは学生同士のペアでコミュニケーションの取り方の習得を強化する。「読解」の授業では、語彙と文法事項が総合的に理解できるように、短文から長文にかけて理解を深めていく。特に、「会話」の授業とともに韓国の歴史、文化、諸事情などを説明をし、学生たちの理解を高めるために努める。「試験対策」では、「韓国語能力試験」と「ハングル検定試験」を目指してテキストと既出問題を並行させ、実践練習に充実して進めている。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
①「韓国語・朝鮮語入門」における副教材プリント②「会話」「読解」「試験対策」に関わる副教材プリント		①2007年4月～ ②2007年4月～	「1」の教育内容・方法の工夫」の項で記した「韓国語・朝鮮語入門」の授業のため、基本名詞・用言の単語帳を作成し、単語練習と文法事項の活用練習にも積極的に活用する。「会話」の授業のためには、単語カード、文練習カード、質問カードなどを作成し授業中に活用する。時には、韓国の文化を紹介できる多様な小道具を活用する。「試験対策」の授業のために、既出問題から語彙集を作って辞書代わりに活用する。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
韓国語教育の教授法(名古屋大学韓国語勉強会)		①2005年7月	韓国語教育における目指すべき教授法にかんして、日本語教育の教授法と比較して講演した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『始めよう韓国語会話』	共著	2005年4月	三恵社	曹述燮・李正子・金賢珍	
『使おう韓国語会話』	共著	2006年9月	マナハウス社	曹述燮・金賢珍	
論文					
「日韓両言語の程度副詞と共に起する名詞について」	単著	2005年3月	名古屋大学国際言語文化研究科・国際多元文化(第5号)		171頁～185頁
「日本語と韓国語の強意表現の形態的特徴」－機能化された強意語を中心に－	単著	2008年3月	愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部・コミュニケーション研究篇(第8号)		41頁～54頁
「韓国語らしい表現vs日本語らしい表現」その1	単著	2007年4月	韓国語通信Vol.1		60頁～61頁
「韓国語らしい表現vs日本語らしい表現」その2	単著	2007年7月	韓国語通信Vol.2		62頁～63頁
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2003年～現在	韓国日語日文学会
2007年～現在	朝鮮語学会
2002年～現在	名古屋韓国語と韓国文化のつどい
2002年～現在	名古屋大学韓国語歴史勉強会

所属 外国語教育センター	職名 准教授	氏名 清水ベアト リックス	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
自己評価表及び授業日記帳を使うこと		2006年4月～	生徒と教師の意見交換のため		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「すぐ覚えられる！簡単フランス語のしくみ」		2007年4月1日	授業「初めてのフランス語」のため		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
講演:「フランスの初等教育を紹介する」		2006年1月16日	名古屋市立正色小学校にて		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
The works of Timothy Mo	単著	2003年8月	Warnborough University Doctoral Thesis		329頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 曹 志偉	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
教育内容に関する		2004年4月～2008年3月	全学向けの中国語に関する科目を担当している。その科目は会話、読解、HSK(漢語水平考試)、中国語作文、同時通訳入門などである。大学の中国語教育では、いかに学生に興味を持たせ、モチベーションを高めながら、授業を展開していくかは重要な課題だと思う。それを解決するために、以下の教育方法を工夫している。		
教育方法の工夫に関する		2004年4月～2008年3月	1、学習面での事細かなサポート 中国語を習得することは容易なことではなく、学習上で学生は多くの質問や悩みが出てくる。そのため、授業中もちろん、授業以外でも学生の質問などを解決できるように心掛けている。 2、コミュニケーションを重視する 学生参加型の授業を目指し、授業中で日中言語、社会、文化などの相違点を学生達と共に考え、中国語を通じて異文化交流を行う。 3、資格獲得のサポート(HSK) 学生に各自で目標を立ててもらい、試験対策とコツを分かり易く説明し、取れるように受験対策を練って講義、アドバイスを行う。 4、作文、応用能力の強化 書く、訳すことを絞って、受講者の応用能力の向上に力をいれる。例えば、作文の授業で、まず模範文を配って、説明すること、その後、テーマを決めて、書かせること。授業後、文体に沿って、更に作文を提出してもらおうこと。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
1、『中国語読解3・4』 2、『HSK中等高級』(B) 3、『中国語作文』		2004年4月～2008年3月	全学中国語教育委員会の一員として、全学向けの中国語教材の提案、査読、翻訳、作成に参加した。主な仕事として、教科書の作成に提案、修正、翻訳、校正などを行った。現在まで作成に関わった教科書は計3冊で、査読の教科書も数冊がある。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
全学中国語教育委員会の委員		2004年4月～2008年3月	全学中国語教育委員会において、中国教育の授業要領、試験の指針、科目の設定、学習相談などを議論、検討を行い、中国語教育の質の向上に努める。 1、学習相談員 2、中国語コンテスト審査員 3、HSK試験監督		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『日本における観光文化』	共著	2004年9月	中国寧夏人民出版社	◎曹 志偉・陳 晏	約180頁分
『中国語熟語760・中日双方向による攻略法』	共著	2005年10月	日本晃洋書房	◎陳 晏・曹 志偉	約70頁分
『作家陳舜臣の文学世界』	単著	2008年8月	中国天津人民出版社		
論文					
「海外旅行の動態と分析」	単著	2003年6月	『観光業界研究誌』(第5期)		28頁～31頁
「漢字と日本文化」	単著	2003年9月	『陽光求精』(教育専門誌9期)		22頁～23頁
「世界観光業での日本市場」	単著	2003年11月	『観光業界研究誌』(第11号)		22頁～27頁
「漢字「間」の文化的解釈」	単著	2004年2月	『漢語教学研究』(2002～2003年号)		70頁～77頁

「中国語熟語の分類方法」	単著	2006年3月	『愛知淑徳大学論集』(第6号)		1頁～10頁
「陳舜臣文学研究における思考」	単著	2006年12月	『中国天津師範大学学報』(第2号)		13頁～16頁
「陳舜臣文学誕生における時代背景」	単著	2007年3月	『愛知淑徳大学論集』(第7号)		1頁～12頁
「陳舜臣の文学世界—追求・探索・超越の軌道—」	単著	2007年5月	中国天津師範大学文学院(博士論文)		1頁～173頁
「日本で活躍する華人作家陳舜臣」	単著	2007年6月	『中国天津師範大学学報』(第4号)		86頁～89頁
「陳舜臣の長編小説『阿片戦争』における文学史観」	単著	2007年12月	『世界華人文学研究』(第4期)		142頁～151頁
「老舍文学作品の言葉鑑賞—動物性言葉を中心—」	共著	2007年12月	『漢語教学研究』(2006～2007年号)	◎曹 志偉・陳 晏	102頁～111頁
「中国語熟語の教授法について」	共著	2007年12月	『漢語教学研究』(2006～2007年号)	◎陳 晏・曹 志偉	25頁～34頁
「文学の根差しと文化の融合—陳舜臣の推理小説『枯草の根』について—」	単著	2008年3月	『愛知淑徳大学論集』(第8号)		1頁～11頁

### III 学会等および社会における主な活動

2004年4月	日本中国語学学会
2003年4月	在日華人漢語教師協会
2002年4月	中日比較文学学会

所属 外国語教育センター	職名 教授	氏名 DYCUS, David C.	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Approach		2003年4月1日	I use information-gap activities at all levels, especially with low level students. I also make use of Power-point in content-based courses to reinforce class content.		
2 作成した教科書、教材、参考書					
Materials		2003年4月1日	For conversation classes I often make survey forms and other information-gap materials to encourage student interaction.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
		2004年4月1日	I emphasize the importance of critical analysis and understanding of the logical organization of ideas in both reading and writing classes by emphasizing both local and global aspects of texts that relate to the overall coherence of a text and the arguments within it. In writing classes I specifically emphasize that it is important to understand that cultural expectations for text genres and for rhetorical style and organization mean that writing according to first language standards may not produce an appropriate text for a similar situation in a second/foreign language. The various specific techniques employed in classes are based on findings in the fields of Applied Linguistics and Contrastive Rhetoric.		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
Entrance Examination Committee		2004年4月1日			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
On the Confucian Roots of Japanese Rhetoric	単著	2003年6月	Literacy Across Cultures、Vol. 6		43頁～51頁
A Contrastive Rhetorical Analysis of Cross-paragraph Theme-supporting Cohesion in Japanese and American Editorials	単著	2007年3月	愛知淑徳大学論集 現代社会学部現代社会学科研究科篇第12号		87頁～ 98頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年4月1日～2006年4月1日		Joint-Editor of the journal Literacy Across Cultures			
2006年3月1日～		Standby proofreader for JALT publication The Language Teacher			

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 二村慎一	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
『読める英文法・聞ける英音法』 中郷慶、柳朋宏、中川直志、二村慎一、樗木勇作、 Beverley Curran著 英宝社		2008年1月1日	日本人英語学習者にとって特に苦手な分野を練習問題を交えながら解説した、読解力と聴解力をつけるための英語学習テキスト		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」		2005年4月1日	独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築		
平成17年度研究助成 特別教育研究		2005年4月1日	全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充		
平成17年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組み支援プログラム		2005年8月1日	多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Exploring the Universe of Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday	共著	2007年3月	名古屋大学文学研究科英語学研究室	天野政千代、田中智之他	239頁～253頁
論文					
On the Inheritance Phenomena in Nominalization	単著	2004年3月	『英文学研究』英文号第45巻		39頁～58頁
動詞由来－Ing複合語の形成と事象構造の照合	単著	2004年3月	JELS 21		150頁～158頁
Formation of -ing Nominal Compounds and Event Feature Checking	単著	2004年11月	English Linguistics 21.1		294頁～322頁
A Level Ordering Approach to Inheritance Phenomena in Nominalization	単著	2005年5月	課程博士論文(名古屋大学)		240頁
Argument Inheritance: A Level Ordering Approach	単著	2007年11月	IVY40		81頁～106頁
その他(口頭発表)					
動詞由来複合語の形成について:名詞類のアスペクト的特性に注目して	単独	2003年10月	第55回日本英文学会中部支部大会		
動詞由来－Ing複合語の形成と事象構造の照合	単独	2003年11月	第21回日本英語学会		
語形成規則における項の継承の問題について:接辞の束縛機能に注目して	単独	2003年12月	第128回愛知岐阜三重英語学談話会		
On the Subject / Object Asymmetry in Verbal Compounding	単独	2005年4月	第44回名古屋大学英文学会(招聘)		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1998年4月～	名古屋大学英文学会会員				
1998年5月～	日本英文学会会員				
1998年5月～	近代英語協会会員				
1998年10月～	日本英文学会中部支部会員				
1998年11月～	日本英語学会会員				
2005年4月～	Linguistics and Philology 編集委員会委員				

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 MC GOLDRICK, Gemma M.	大学院における研究指導担 当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
英語コミュニケーション4		2005年4月～	インターネット教材(ALC NetAcademy, ALC NetAcademy2)を用いたリーディングの指導		
Traditional Arts in Japan, Central Japan		2006年4月～	e-Learningシステム“Blackboard”を利用したレポート提出・評価、授業アンケートシステムの構築		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
2005年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」		2003年4月	独自データベース(DB)を活用した全学英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築(2004年度・05年度も同課題名で採択)		
2005年度研究助成 特別教育研究		2005年4月	全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充(2006年度まで継続)		
2005年度文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム「仕事で英語が使える日本人の育成」		2005年8月10日 採択	多文化共生を目指した発進型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発～		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2003年9月～現在		日英協会			

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 山田久美子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
CALLシステムを利用した英語教育		2004年10月～	学生の英語コミュニケーション能力の基礎力を養うためにe-learningソフトを利用した。		
英文学講義:イギリス演劇を読み、理解させるためにビデオを用いた。授業アンケートを実施し、学生の意見などを参考に、学生が理解し、意欲的に学習できるよう、進度に気をつけたり、課題を与えたりした。		2001年4月～2006年3月	G. B. Shawの <i>Pygmalion</i> とCaryl Churchillの <i>Top Girls</i> の作品研究(英文・内容の読解)。		
翻訳基礎Ⅱ(詩・演劇):翻訳と原文を朗読をしたり発表したりすることにより、意欲を高めた。		2005年4月～	英語の詩と演劇の翻訳。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
『異文化で学ぶTOEICテスト総合演習』(成美堂)		2004年1月20日	英文エッセイとその内容把握、英語の文法問題、リスニング問題。		
ビデオ教材『イン・アメリカ 三つの小さな願いごと』(英宝社)		2006年1月20日	映画『イン・アメリカ』を教材とし、文化的背景を理解し、内容を把握する問題とリスニング問題。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
『ケルト伝説の女性 デアドラ』		2005年8月20日	NHK文化センターの講座。『物語で辿るケルトの旅』というテーマの中で、アイルランドの伝説の女性デアドラの系譜について講義を行った。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
平成16年度/平成17年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」		2004年4月～2005年3月	独自データベース(DB)を活用した全額英語授業効果測定チュートリアルシステムの構築		
平成17年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定		2005年8月10日～2009年3月	多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発		
平成17年度研究助成特別教育研究		2004年4月1日～	全学を対象とするオーダーメイド英語教育の拡充		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『アングロ・アイリッシュ文学の普遍と特殊』	共著	2005年2月	大阪教育図書	田村章・風呂本武敏編	53頁～77頁
『寺山修司研究』創刊号	共著	2007年5月	文化書房博文社	国際寺山修司学会	115頁～125頁
論文					
『Brian Frielの <i>Phiradelphia, Here I Come!</i> 一自己との対話』	単著	2005年12月15日	<i>Review of World Theatre Arts</i> 『世界演劇評論』Vol.3		27頁～36頁
『ビグマリオン』における植民地主義	単著	2006年12月15日	<i>Review of World Theatre Arts</i> 『世界演劇評論』Vol.4		27頁～37頁
『 <i>Saint Joan</i> における異端の意義』	単著	2007年12月15日	<i>Review of World Theatre Arts</i> 『世界演劇評論』Vol.5		41頁～51頁
学会発表					
<i>Translations</i> における2つの文化	単独	2003年10月19日	日本英文学会中部支部第55回大会(於金城学院大学)シンポジウム「アングロアイリッシュ文学に見る普遍性と特殊性」講師(発表)		
<i>Eclipsed</i> における沈黙と抵抗	単独	2004年12月3日	日本アイルランド協会2004年度研究年次大会(於大阪学院大学)研究発表		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
1991年4月～現在	IASIL-JAPAN会員(1991年4月～1994年3月日本支部会計)				
1991年4月～現在	日本英語表現学会会員				
1992年4月～現在	日本アイルランド協会会員				
1993年4月～現在	日本イェイツ協会会員				
1994年4月～現在	日本英文学会中部支部会員				

1998年4月～現在	国際異文化学会会員(1998年4月～2008年3月国際渉外委員)
1998年5月～現在	日本英文学会会員
1998年12月～2007年3月	片平会会員
2001年2月～現在	世界演劇研究会会員(事務局担当)
2006年4月～現在	国際寺山修司学会(会計監査)

所属 外国語教育センター	職名 講師	氏名 WRINGER, Paul C.	大学院における研究指導担当資格の有無(有)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
Activities that help students expand their fluency, focusing on vocabulary building and stimulating listening, speaking, reading, and writing tasks that emphasize the language they need for real-world communication.	2003年4月～present day - Aichi Shukutoku university	*Generally speaking..classes are student centred/high impact student involvement/minimum lecture (basic knowledge)/reflective practice and reinforcement *Responding to background knowledge of learner/clear understanding of material/classroom management-appropriate physical design of room-pair/group organisation			
2 作成した教科書、教材、参考書					
All materials used are designed to enhance student language abilities in the four key areas of language study and are therefore selected after considering the background knowledge and ability levels of individual students.	2003年4月～present day - Aichi Shukutoku university	*aAppropriate lesson plans *adequate self-prepared handouts *Variety of audio/visual stimulation-Tv/OHP/iPod/supporting images and short film clips *Text adaptation and editing of published texts/newspaper and online articles			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
Language workshop presentation	2006年7月	Aichi Prefectural Education Centre			
Language workshop presentation	2007年7月	Workshop - English Pronunciation			
Language workshop presentation	2008年8月	Demonstration of practical classroom activities			
4 その他教育活動上特記すべき事項					
EIKEN Examiner (Pre-1/Grade 1)	2005年2月～present day	Examiner (Nagoya centre) Pre-1/Grade 1 STEP tests			
Bath English Study Agency	2007年8月～present day	BESA - British culture/homestay/language learning research involving the major language learning institutions in Bath,Somerset, UK			
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					



所属 教職・学芸員教育センター	職名 教授	氏名 後口伊志樹	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
教育方法の工夫	2005年6月27日	2005年6月7日に実施された学内授業アンケートの結果を踏まえ、次の3点につき工夫改善した。①レジュメを用意することで板書の適量化と時間の重点的な活用及び要点の明確化を心がける。②毎授業の最後に書かせるコメント・カードの内容を取り上げて次の授業の導入部に生かすことが好評なので、この方法の更なる可能性を追求する。③英語をふんだんに遣う事は時として学生たちの理解を妨げることが分かったので、講義内容に直結する範囲に止めるなどして理解度のチェックを疎かにしないようにする。	
教育方法の工夫	2005年12月5日	2005年11月15日に実施された学内授業アンケート結果を踏まえ、次の2点につき工夫改善する。①レジュメを含め資料を増やしたところ、口頭での説明に終始しがちになり、ノートが取れない、眠気がさしてくるなどのアピールが寄せられた。板書や話し方に緩急をつけたり、学生参加のメニューをある段階で設け質疑応答や学生の意見を引き出すなどの工夫をする。②参考文献を授業の最終回にまとめて紹介したところ、興味を覚えた箇所をその時その時に深め確かめることができないので授業時ごとに示してほしいとのアピールがあった。この点については直ちに改善する。	
教育方法の工夫	2006年6月23日	2006年6月6日に実施された学内授業アンケートの結果を踏まえ、次の2点について工夫改善する。①前回授業時のコメント・カードに記載された質問や意見を取り上げて発展的に授業内容を補填することは意義大であるにしても、時として時間がかかりすぎて進度の妨げになったり、他者の質問や意見に興味関心を示さない学生にとっては無意味に流れる時間となってしまうので、取り上げる質問や意見の一層の精選に努める。②教育誌や新聞報道から今日的な教育にかかる記事を採択して授業に絡め、学生の興味関心を一層高める。	
教育方法の工夫	2006年12月14日	2006年11月14日に実施された学内授業アンケートの結果を見ると、前回の授業アンケートを踏まえて工夫改善したことが反映されて学生の満足度もそれ相応に向上していることがうかがえる。そうした中で、特に課題となるのは、学生たちの集中力をどこまで維持させることができるかという点である。参加型のメニューをどう構造的に配列するかについて追求する。	
教育方法の工夫	2007年6月25日	2007年6月8日に実施された学内授業アンケートの結果によると、これまで行った各種工夫改善の成果はそれなりに達成されていると思われるが、学生参加型のメニューの構造化についてはまだまだ工夫の余地を多く残している。そこで、次の2点を中心に端緒を開きたい。①担当科目に直結する観点から、教育に関する今日的諸課題を扱った新聞記事や教育誌の一節を取り上げ、精読後複数の学生に感想や意見発表を求め、授業内容との関連性に配慮しながら、それに関する思考の深化を図る。②授業回数の中間点と最終回に、科目の目標にかかるグループ討論及びグループ代表者による全体発表の機会を設ける。	
教育方法の工夫	2007年12月3日	2007年11月13日に実施された学内授業アンケートの結果を見ると、参加型のメニューの機能化を図る取組は道半ばという感触であるので、この方向での模索を一貫して続けたい。授業の難易度についての満足度が必ずしも高くない(難しいとの印象)ことについての対策としてはコメント・カードをこれまで以上に活用して、難易度や進度にかかる記述はこれを積極的に取り上げて補足するよう心がける。	

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
		2005年4月1日～2008年3月31日	学内教職課程委員会委員として本学教職課程運営の一助を担う。		
		2006年4月1日～2008年3月31日	学内進路支援委員会委員として、特に、教職志望者を対象に進路実現のための一助を担う。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
・実践研究収録第十集	共著	2005年3月	愛知県立三好高等学校	理科河合希他	1頁(ただし全体を監修)
論文					
・生徒指導における試論としての四領域論と指導上の留意点	単著	2006年3月	愛知淑徳大学教職課程『学び舎』編集委員会		35頁～50頁
・学校教育におけるモダニズムとポスト・モダニズムの問題ーカリキュラム変遷史を中心に	単著	2007年3月	愛知淑徳大学教職課程『学び舎』編集委員会		34頁～48頁
その他					
・英語教員のコミュニケーション能力開発への提言(運営委員として参画するとともに英語による講話を担当)		2003年8月	西三河北・東地区中・高英語教員集中研修会		
・豊かな体験活動推進事業(長期宿泊体験)の実践(2年にわたる実践指定の1年目、校長としてマレーシア・シンガポールへの海外修学旅を計画・実施)		2004年度	文部科学省実践指定		
・中高生仕事触れ合い活動支援事業の実践(校長として適正な職業観・就労観をもつ人材の育成を推進)		2004年度	厚生労働省管轄能力開発機構愛知センター実践指定		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2002年4月～2004年3月	愛知県西加茂郡三好町教育基本計画策定委員会委員				
2000年4月～2004年3月	愛知県西三河北地区校長会副会長				
2005年8月	2005年度愛知県栄養教諭免許法認定講習講師(担当科目「教職入門」)				
2005年4月～	愛知学泉大学非常勤講師(担当科目「教職入門」)				
2006年6月～	愛知県青少年赤十字賛助奉仕団高校OBブロック委員長				

所属 教職・学芸員教育センター	職名 教授	氏名 小栗正彦	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業アンケートを受けての授業改善			学生の評価に対する疑問に対して、よりわかり易い教材を作成すると同時に、評価基準を明確にする。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
「講義ノート」作成		2006年3月31日	教職入門、教育課程、生徒指導の3教科共通の「講義ノート」の作成		
「絵を語る」作成		2007年2月27日	社会科教育法の講義のまとめ		
「講義ノート」作成		2007年3月31日	教職入門、教育課程、生徒指導の3教科共通の「講義ノート」の作成		
「日本史B」講義ノートⅠ」作成		2008年3月31日	教科教育法の授業に資する参考書(原始古代～安土桃山時代まで)の作成		
「日本史B」講義ノートⅡ」作成		2008年3月31日	教科教育法の授業に資する参考書(江戸時代～現代 まで)の作成		
「講義ノート」作成		2008年3月31日	教職入門、教育課程、生徒指導の3教科共通の「講義ノート」の作成		
「レファレンス 練習ノート(Ⅰ)」		2008年7月2日	司書教諭資格のための必修科目「学校経営と学校図書館」での授業成果を発表		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
カリキュラムの検討		2005年度9月より (「新学科検討委員会委	2006年度申請の文学部教育学科(仮称)設立のための委員会委員		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
「社会科教育法」における授業の基本について(その1)		2006年3月31日	「学び舎－教職課程研究」第1号	教職課程委員会編	27頁～34頁
「社会科教育法」における授業の基本について(その2)		2007年3月31日	「学び舎－教職課程研究」第2号	教職課程委員会・愛知淑徳大学文学部教育学科編	24頁～33頁
「地歴・社会科教育法」における授業の基本について(その3)		2008年3月31日	「学び舎－教職課程研究」第3号	教職課程委員会・愛知淑徳大学文学部教育学科編	12頁～23頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2007年7月11日		浜松市立高校での模擬授業			
2008年3月3日		愛知県立松蔭高校での学部学科説明会			

所属 教職・学芸員教育センター	職名 教授	氏名 柴垣 勇夫	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
①授業にパワーポイントを活用。配布資料を少なくするため細字を使用したところ不評で、改善した。		①2007年5月～	①教科書の補助と画像を見せるため、パワーポイントを作成し実施した。当初は配布資料を作成しなかったが、学生からの要望が強かったため配布。細文字で不評、改善を心掛けた。		
②「2007年度前期授業アンケート」結果報告を踏まえ、2年生授業の配布資料を見やすくするよう心掛けた。また3年生の資料論では極力全員が資料を扱えるよう班編成に工夫した。		②2007年10月～	②各授業すべてにパワーポイント作成。配布資料も作成し副教材とした。見にくい点や、板書の不満が多く、これを改善すべく努力した。文字の改良と分かりやすさを心掛けた。また3年生の各論Ⅱは、資料の取り扱いが主体であることから全員が資料を扱うことができるように班編成の人数と、扱う資料の内容を豊富にした。③4年生の実習と講義では、資料を実際に扱いながら展示の工夫を考える方法をグループごとに実施し、それぞれが意見交換のもとに最終的な展示案を作った。配布資料も作成した。		
③4年生の実習での講義はパワーポイントの他、資料を実際に用い自らが展示する工夫をさせた。		③2007年5月～			
2 作成した教科書、教材、参考書					
①使用中の教科書について法律改正、博物館数の変化、世界遺産新条約などから改訂版を作成する必要性が生じた。そこで新2年生(2008年度)からの教科書を「新訂 博物館概説」(長谷川鏑治著、柴垣勇夫補訂)として新たに作成した。		①2008年3月(使用は4月)	①これまで長谷川鏑治氏による教科書を全学年で使用してきたが、法律改正や博物館数などの経年変化、世界遺産新条約などがあり、新教科書作成の必要性が生じた。そのため章立てや構成を一部変えて、この作成を行った。原著は長谷川鏑治、補訂を柴垣が行った。		
②各授業ともパワーポイントの配布資料をプリントし、副教材として使用した		②2007年5月～	②画像を取り入れたPPを作成しその配布資料を受講生に配布した。その内容は教科書を補充するものとした。学生は教科書と並行して使用し、学習に役立てた。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
特になし					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
本学での活動ではないが、前任校で学芸員と語るシンポジウムを開催し、学生と学芸員をつなぐ教育活動を8年続けた。		2004年～2006年の毎年7月	地域の博物館学芸員と学生の交流を図った。		
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
『考古資料大観』3弥生・古墳時代土器Ⅲ(「装飾付須恵器と特殊須恵器」の項)	共著	2003年12月	小学館	亀田修一編	329～360頁
『鳳来寺山開山千三百年』(「鳳来寺・鏡岩下遺跡の出土遺物について」の項)	共著	2004年10月	鳳来寺	安藤孝一編	31～51頁
『中世瀬戸内の流通と交流』(「本書の成果と課題」の項)	共著	2005年12月	埴書房	柴垣勇夫・前川要	3～12頁
論文					
「須恵器生産における窯道具使用の一例」	単著	2004年5月	『八賀先生古希記念論文集』		405～412頁
「有度山北麓古墳群出土の須恵器について」	単著	2007年3月	『有度山麓における後期古墳群の研究Ⅰ』(六一書房)		82～89頁
「東海における山茶碗の流通」	単著	2008年3月	『中世山茶碗と瓦器碗・その流通と背景を探る』(科研費報告:中世土器・陶器編年研究会記録5)		74～87頁
その他					

『金谷町史』通史編 本編 (「中世・施釉陶器」)	共著	2004年3月	金谷町	原秀三郎・湯之上隆・柴垣勇夫・羽二生保・佐藤正知・塚本裕巳ほか	188～192頁 264～270頁
『金谷町史』通史編 別編 志戸呂窯業史	共著	2004年3月	金谷町	柴垣勇夫・羽二生保・佐藤正知・塚本裕巳ほか	23～73頁 127～160頁
『東海地方山茶碗研究の現在と課題』(「まとめ」)	共著	2004年11月	科研費報告:「中世土器・陶器編年研究会記録1」	岡本直久・中野晴久・小野木学・山内伸浩・安井俊則・柴垣勇夫ほか	90～94頁
『図説 金谷町史』(「施釉陶器」「上志戸呂古窯の成立と徳川家康」「志戸呂焼の近代化」の項)	共著	2005年1月	金谷町	原秀三郎・湯之上隆・柴垣勇夫・大塚英二・北原勤・日比野秀男ほか	23、36、76～77頁
『沼津市史』通史編 原始・古代・中世(「仏教文化に開花」「古代集落と官衙遺跡の展開」「経塚の造営」の項)	共著	2005年3月	沼津市	原秀三郎・仁藤敦史・柴垣勇夫・杉橋隆夫・田島公ほか	217～227頁 270～284頁 312～318頁
『藤枝市史』資料編1 考古(「助宗古窯」「南新屋瓦窯」「蓮花寺山窯跡」の項)	共著	2007年3月	藤枝市	磯部武男・篠原和大・柴垣勇夫・椿原靖弘ほか	548～564頁、 663～673頁、 748～751頁

### Ⅲ 学会等および社会における主な活動

2002年2月～現在	文化庁文化審議会文化財部会専門調査会委員
2002年1月～現在	静岡県文化財保護審議会委員
2003年7月～現在	静岡市文化財保護審議会委員
2004年4月～現在	愛知県文化財保護審議会委員
2006年2月～現在	名古屋市博物館運営協議会委員
2006年4月～現在	愛知県教育スポーツ振興財団埋蔵文化財事業運営協議会委員

所属 教職・学芸員教育センター	職名 教授	氏名 堀内千恵子	大学院における研究指導 担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
・時限ごとに講義内容のまとめと感想及び質問、あるいは要求などを書けるプリントを作成し配布した。	2004年度・2005年度前期	・その時限での講義内容が把握でき、しっかり学習できる点では大変良かったのですが、授業中ぼさぼさしておられず、まとめるのに時間がかかる学生には結果、実技の時間が少なくなり、大いに反省させられた。	
・時限ごとのまとめプリントをやめ、後期全体のなかで、この書道家だけはと焦点をしぼり、おいたち、業績、考え方、現代との比較ができるように配慮した。	2004年度・2005年度後期	・今年度は特に日本書道史を学習する中で、焦点を良寛と空海にしぼり、物質文明につかっている学生にとって今欠如していることは何かを考える機会を与えることができたと同時に実技の時間もばすことができたと思う。	
・書道経験のばらつきが多い中で、どの学生もそれなりに努力してみようという意欲がもてるように努力した。	2006年度・2007年度前期	・書道の心髄ともいうべき漢字のでき方、書体のいろいろ、実践につながる書法、名前の行草の書き方楷書を行草に変換するペン習字、中国の能書家の逸話などを中心に指導した。その結果、あまり書道経験のない学生も、尊重してもらえるので、やりがいがあるという批評を受けた。	
・書道の芸術性としての魅力を学生に感受させ、実際に学生自身にも創作する苦勞、及び新しい世界を監督させるよう配慮した。	2006年度・2007年度後期	・同一の漢字を楷書、隸書、行書、草書、行草書の描き方を学生に練習させ、表現力の魅力を知らせた。	
		・書道展見学によって書道の魅力を感受させた。	
		・実際に学生ひとりひとり、表現したい二字漢字の行草書や、こころに残る詩を調和体として表現させた	
		・何度も何度も試行錯誤しながら、作品を完成させる中で、学生は今までに経験したこともない不思議な世界を感じ、自分でも表現できるのだという自信と、今後も機会があれば展覧会に参加したり、自分なりの作品を書いてみたいという気持ちをもたせることができた。	
		・書道は楽しいとか、字を書く楽しさを知ったという学生があらわれたことは喜ばしいことであった。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
・書道の旅	2004年改訂	・1992年発行した「書道の旅」内容の一部変更と手本の題材を変えた。	
・まとめプリント 中国書道史日本書道史	2004～2007年度	・書道の意義と特質 書法――執筆法、用筆法、運筆法など漢字の起源、書体、楷書体の書風大別、漢時代から清時代の流れ、鑑賞方法・漢字伝来、奈良時代から現代まで	
・日本書道史の覚え書き	2004～2007年度	・人物を中心に8枚	
・良寛・ペン習字	2004～2007年度	・良寛という人物の研究・楷書を草書に変える練習	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
・千春会での作品鑑賞	2004～2007年度	・学生は実際の書道の作品にふれ、書の魅力、書の作品の流れ、にじみとかすれ、墨の変化、余白の大切さ、言葉の伝達の影響力など、解説したり質問を受けたりする中で、鑑賞力を身につけ、学生自身も作品を作ってみたいという気持ちを高める効果が見られた。	
4 その他教育活動上特記すべき事項			
・学生の書道展の出品	2004～2007年度	・学生の、自分自身の作品作成する過程で、希望者を募り、清華書道展に出品させた。出品をめぐって練習に練習を重ね、作品作成の苦悩と喜びを味わせた。出品者の中には入賞する学生も出た。	
<b>II 研究活動</b>			

著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
堀内千恵、書と人生	単	2007年5月	日本学術出版	堀内千恵	103頁
論文					
その他					
<b>Ⅲ 学会等および社会における主な活動</b>					
・千春会展の開催		・毎年6月ギャラリーにて、書道展を開催し、学生、一般市民を招待し、鑑賞していただくことにしている。そうした交わりの中で書道を通して、今どう生きていきたいか、今何が求められているか、心の有り様を示してきた。			
展覧会・演奏会・競技会等					
展覧会					
・日本の書展	愛知芸術センター	2005年・2007年	悠然 真摯 残心 惜花などを発表・ 2002年7月に清華会常任理事に昇格 2004年10月に出展推挙された。良寛の世界を表現。		
・春墨展	東京銀座ギャラリー	2001～2007年5月	題材は三体詩で、墨は濃墨、4.8尺とか、4.6尺の大作で表現。2006年1月 玄和書道会常任理事に昇格。		
・千春会展	ギャラリー礫	2001～2007年6月	弟子やクラブの学生を含む社中展。自分のその時の心境を自由に表現した。 タイル、のれんに書いたり、絵手紙など絵と字の調和をはかったりして、 楽しい書道に挑戦。		
・毎日書道展	東京都美術館及び	2001～2007年6月	2002年・2004年秀作賞受賞		
	愛知芸術センター	2001～2007年8月	2.6尺の大きさで行、草3行で三体詩を書いた。		
・中部総合美術展	愛知芸術センター	2001～2007年8月	中部地区の芸術家の祭典に出品依頼され、墨の美しさを出すように努力工夫した。		

所属 教養教育センター	職名 教授	氏名 小野佳成	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
動画を講義に利用		2007年4月～	ヒトの肺や気管などの呼吸器、消化管、肝臓や膵臓などの消化器、腎臓や膀胱などの泌尿器、心臓や血管などの循環器、脳神経、筋肉と骨などの運動器等の臓器の構造や機能については動画を使って学生に説明した。学生アンケートで大変よく理解できたとの回答が得られた。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
Recent Advances in Endourology 8	共著	2006	Springer	Ono Y, Baba S	1頁～212頁
論文					
Laparoscopic radical nephrectomy for renal cell carcinoma		2006	Recent Advances in Endourology 7	Ono Y, Hattori R et al	3頁～13頁
The endoscopic surgical skill qualification system in urological laparoscopy;a novel system in Japan		2006	J Urology	Matuda T, Ono Y et al	176頁、2168頁～ 2172頁
Laparoscopic nephroureterectomy for transitional cell carcinoma of renal pelvis and ureter: Naqgoya experience		2006	Urology	Hattori R, Ono Y et al	67頁、701頁～705頁
Laparoscopic partial nephrectomy in upper-pole apical renal tumor using gauze sling and flexible laparoscope		2006	J Endourology	Kim TS, Ono Y et al	879頁～882頁
その他					
特別講演”Laparoscopic Surgery”		2007年4月	上海	Ono Y	
会長講演”Present and Future of Endourology”		2007年11月	カンクーン	Ono Y	
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2007年11月～2008年12月		President, the Endourological Society			
2006年10月～2008年9月		日本エンドユロロジーESWL学会理事			



所属 教養教育センター	職名 教授	氏名 堀尾幸平	大学院における研究指導 担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
授業展開の中での質疑応答法		2004年1月10日	授業評価(授業アンケート)をふまえて、授業中の問答法等の効果的活用について。		
板書、資料、補足プリント等の活用		2005年7月10日	授業評価(授業アンケート)をふまえて、より効果的な板書・資料・補足プリント等の活用について。		
授業(文学1)の効果的展開活動		2001～2005	「授業アンケート」の結果等を踏まえて、効果的な授業展開の工夫等についての研究と実践。		
授業(日本の文学)の効果的展開		2006年	「授業アンケート」結果をふまえて学生に合った授業展開、教材研究、補足プリントの作成。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
改訂増補版『新日本児童文学論』		2005年4月1日	前著『新日本児童文学論』の改訂増補版。		
韓国『沈清伝』日本語版(共著)		2005年4月1日	韓国バンソリで口伝された孝子・沈清の伝記的童話。群長大学、金暎鎮と共著。日本学術出版発行。147頁。		
新教育概論		2006年4月1日	「教育と法規」「日本の教育」「西洋の教育」「教職とは何か」第7章構成の新しい教育概論。日本学術出版発行。130頁		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
エクステンションセンター公開講座「日本児童文学講座」年間4回、延べ18回。		2002年5月～2007年3月	エクステンションセンター企画主催の一般社会人対象の公開講座。児童文学理論、童話創作の実習指導、作品集『淑徳童話』編集刊行。		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
新日本児童文学論(改訂版)	単著	2005年4月1日	中部日本教育文化会		241頁
沈清伝(日本語版)	共著	2005年4月1日	日本学術出版	韓国群長大学:金暎鎮	147頁
論文					
チャイルドエコロジー学	単著	平成15年7月1日	『東海児童文化』第35号		51頁～52頁
日本童謡盛衰史	単著	平成18年11月25日	『児童文化』第38号		19頁～28頁
その他					
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2001年～現在	日本児童文学者協会 会員。『日本児童文学』への寄稿ほか。				
2001年～現在	日本児童文学学会 会員。学会創立25周年記念全国大会実行委員ほか。				
2001年～現在	東海児童文化協会 会員。『児童文化』寄稿、講演ほか。				
2002年～現在	愛知子ども文化団体協議会 運営委員ほか。				
2003年4月～2005年3月	愛知子ども読書活動推進協議会 会長職を務める。子どもの読書活動推進のため県、市町村、図書館、学校、民間団体等の連携、協働のあり方や方策等についての研究協議。				
2001年～2007年3月	エクステンションセンター社会人対象の公開講座 児童文学理論、創作童話、おひなさま童話等、延べ18回。				
平成13年5月10日	東海児童文化協会総会の講演。「現代児童文化と子ども」(90分) 鶴舞中央図書館。				
平成15年11月5日	西尾市文化会館 西尾市教育委員会。小中学校音楽発表会の台本。オペラ「西尾茶浪漫伝説」。小中学生700名出場。180分。				
平成17年8月20日	愛・地球博EXPOホール 西尾市教育委員会。EXPO公演用の台本。オペラ「西尾茶浪漫伝説」台本。小中学生200名出場。60分。				

2005年12月3日	テレビ愛知 西尾市教育委員会。テレビ愛知放映。オペラ「西尾茶浪漫伝説」。小中学生700名出場。
2006年4月～2007年3月	豊田市子ども読書活動推進協議会の会長職。
2006年4月～現在	西尾市女性文学研究会。「源氏物語」講義。毎月第2水曜。会員65名。
2006年4月～現在	東海市古典に親しむ会「源氏物語」講義。原文と影印本で。毎月第1、3水曜日。会員30名。
2006年4月～現在	半田市教育委員会。文学講座「松尾芭蕉の世界」。毎月第1火曜日。70名。
2006年6月30日	豊田市図書館協会講演「読書の感動と喜び」。豊田市中央図書館。180名。
2006年8月23日	岡崎市自主教養大学。教養講座「百人一首の魅力」。150名。
2006年10月10日	稲沢市教育研究会「学校図書館活動の展開」。60名。講演と指導助言。
2006年10月15日	西尾市文化協会講演「旅と文学と人生」。西尾市文化会館。200名。
2006年11月25日	東海文化協会講演「日本童謡盛衰史」。鶴舞中央図書館。50名。
2007年1月13日	全国子ども読書協議会。愛知大会「中学、高校生の読書」司会、指導助言。ウィル愛知。200名。
2007年2月17日	尾崎士郎作文賞(吉良町。吉良町教育委員会)、審査と講演(講評)。(愛知淑徳大学、都築久義・堀尾幸平)吉良町立図書館。120名。

所属 情報教育センター	職名 講師	氏名 小林久恵	大学院における研究指導担当資格の有無(無)
<b>I 教育活動</b>			
教育実践上の主な業績	年 月 日	概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			
①授業評価の収集、活用 ②学生からの質問窓口の明確化 ③授業目的、計画、成績評価基準の明示 ④習熟度アンケートの実施 ⑤理解度調査(感想、小テスト)の実施	①2004年4月～ ②2005年4月～ ③2005年4月～ ④2007年4月～ ⑤2007年4月～	①は授業に対する学生の評価を毎時間授業終了時に提出させ、次の授業でコメントや質問を公開し、情報共有や問題解決を図るための取り組みである。 ②は授業時間外における学生からの質問の問い合わせ方法や場所等の連絡先を授業時に伝えることで、授業や課題についての質問にいつでも対応できる体制を整えている。 ③と④は授業アンケート結果を受けての改善策であるが、③は第1回目と履修登録確定後の授業時にガイダンスを行い、授業の目的や授業計画、成績評価方法と配点等を説明して授業方針を明確化することで、意欲を持って授業に望めるように工夫したものであり、④はキーワード別習熟度アンケート(授業の感想を含む)を実施し、習熟度の低いキーワードの復習を実施している取り組みである。 ⑤は全学コンピュータ活用科目の「コンピュータ入門Ⅰ」「コンピュータ入門Ⅱ」の授業において、毎時間授業の最後に「感想(内省データの蓄積)」と「小テスト」で構成した理解度調査を実施し、学習効果を高めるための振り返り学習の機会を設定したものである。	
2 作成した教科書、教材、参考書			
①情報技術基礎Ⅰ :情報科学の基礎からInternet, Excelまで ②情報技術基礎Ⅱ :Windows, Word, Power Pointを中心に ③例題で学ぶC言語プログラミングのテクニック ④コンピュータ入門Ⅰ :Windows操作からWord, Power Pointまで ⑤コンピュータ入門Ⅱ :コンピュータの基礎知識からExcelと統計処理まで	①2005年3月 ②2005年3月 ③2005年5月 ④2007年4月 ⑤2007年4月	①はコンピュータ技術やネットワーク技術を利用する上で、利用者が持つべき必要最小限の専門知識について解説した実習用テキスト。 ②はWindowsXPの環境を前提に、基本的なパッケージソフトウェアの処理操作方法について利用者が持つべき必要最小限の専門知識について解説した実習用テキスト。 ③は文学部図書館情報学科3, 4年生の選択科目である「プログラム設計応用Ⅰ(C)」において、C言語の基本文法を一通り学習し、その集大成として成績処理システムを試作して、C言語の知識を体系的に習得できる実習用テキスト。 ④は全学コンピュータ活用科目である「コンピュータ入門Ⅰ」において、Windows操作からWord, Power PointまでWindows XPの環境操作を前提とした、基本的なパッケージソフトウェアの処理操作方法について、利用者が持つべき必要最小限の専門知識について解説した実習用テキスト。 ⑤は全学コンピュータ活用科目である「コンピュータ入門Ⅱ」において、コンピュータの基礎知識からExcelと統計処理まで利用者が持つべきコンピュータのしくみや役割に関する基本的かつ実践的な知識、並びにExcel表計算ソフトウェアを利用したデータ処理操作方法や統計的技法について解説した実習用テキスト。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			

<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータ活用科目ガイダンス(学生対象)、説明会(担当教員対象)の実施</li> <li>・全学コンピュータ活用科目のインストラクションガイドの作成</li> </ul>	2007年4月～	<p>年度初めに新入生や在學生を対象としたコンピュータ活用科目ガイダンスを実施し、全学コンピュータ活用科目のカリキュラム体系や履修モデルの提示、検定試験の受験料大学負担や成績ランクアップ制度等を案内して、コンピュータ教育の情報提供や問題解決に努めている。また、コンピュータ活用科目の担当教員向けに説明会を実施し、コンピュータ活用科目のカリキュラムや学生支援(サブリメンタリ・レッスン、コン活クリニック)等の実施体制についての意識統一を図っている。</p> <p>さらに、全学コンピュータ活用科目の授業内容、成績評価方法、成績評価基準等の統一化を図るために、指定テキストに基づいた綿密な授業計画や成績評価方法、基準を示した教員向けガイドを作成している。</p>
--	----------	---

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名(共著の場合のみ記入)	該当頁数
<b>著書</b>					
情報技術基礎 I :情報科学の基礎からInternet, Excelまで	共著	2005年3月1日	共立出版	西荒井学・三和義秀・小林久恵	1頁～148頁
情報技術基礎 II :Windows, Word, Power Pointを中心に	共著	2005年3月1日	共立出版	西荒井学・三和義秀・小林久恵	1頁～191頁
例題で学ぶC言語プログラミングのテクニック	共著	2005年5月1日	共立出版	三和義秀・小林久恵	1頁～191頁
コンピュータ入門 I :Windows操作からWord, Power Pointまで	共著	2007年4月10日	共立出版	西荒井学・三和義秀・小林久恵	1頁～214頁
コンピュータ入門 II :コンピュータの基礎知識からExcelと統計処理まで	共著	2007年4月10日	共立出版	西荒井学・三和義秀・小林久恵	1頁～187頁
<b>論文</b>					
高等学校における教科「情報」の修得内容に関する実態調査:2006年度図書館情報学科新入生を対象として	共著	2007年3月15日	愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇, No.32	小林久恵・西荒井学・三和義秀	11頁～24頁
<b>その他(研究発表)</b>					
教科「情報」の修得内容に関する実態調査:図書館情報学科新入生を対象として	共著	2006年9月6日	私立大学情報教育協会主催 平成18年度大学教育・情報戦略大会	小林久恵・西荒井学・三和義秀	182頁～183頁
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2000年4月～現在	三田図書館・情報学会				
2001年3月～現在	情報メディア学会				
2007年12月～現在	感性工学会				

所属 学生相談室	職名 助教	氏名 渡邊 素子	大学院における研究指導担当資格の有無(無)		
<b>I 教育活動</b>					
教育実践上の主な業績		年 月 日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または 発表年月	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
著書					
論文					
第1部本学学生相談室の現状と課題 第2章ニーズに対応した相談室活動 第2節スタッフミーティング	共著	2005年3月31日	椋山女学園大学学生相談室活動報告第3号	栗津幹子・佐藤枝里・豊田洋子・中西由里・西原美貴・宮田香織・森田真季・渡邊智香子・渡邊素子	13頁～15頁
第3部特集学生相談室における危機介入ガイドラインの実態に関する調査	共著	2007年3月31日	椋山女学園大学学生相談室活動報告第4号	栗津幹子・宮田香織・◎渡邊素子	21頁～28頁
その他					
大学組織内での学生相談の危機介入体制について―「学生相談における危機介入ガイドラインの実態調査」からの考察―	共同研究発表	2006年5月21日	日本学生相談学会第24回大会発表論文集	栗津幹子・佐藤枝里・豊田洋子・西原美貴・森田真季・渡邊智香子・◎渡邊素子	39頁
発達障害が背景にあると考えられた不登校傾向の生徒に関する教員コンサルテーションの一例	個人研究発表	2007年8月26日	第12回学校臨床心理士全国研修会		
<b>III 学会等および社会における主な活動</b>					
2007年4月1日～現在		愛知県臨床心理士会学校臨床心理士会高校ブロック運営委員			

# 愛知淑徳大学の現状と課題

## —専任教員の教育・研究業績—

### 2009

2010（平成22）年7月23日発行

編集発行 愛知淑徳大学 自己点検・評価委員会  
〒480-1197愛知県愛知郡長久手町長湫片平9  
電話 0561-62-4111(代)  
URL: <http://www.aasa.ac.jp/>

印刷 株式会社 荒川印刷  
〒460-0012 名古屋市中区千代田2-16-38  
電話 052-262-1006(代)